

滿洲事情案內所報告
(85)

滿洲國地方誌

滿洲事情案內所編

序　言

現代史上の雄篇たる滿洲國の建設とその絢爛たる發展は東西新秩序建設の一翼として、世界の刮目裡に確固たる基礎を固め、輝かしき王道滿洲帝國の洋々たる明日への行進譜を奏でゝゐる。

本書は躍進そのものゝ姿を如實に具現しつゝある滿洲國全縣全旗の正確なる新相貌を紹介し、正しき認識を把握せしむるを目的として刊行したものであつて、康德六年發行したる「滿洲國各縣事情」に、更に補修訂正を加へ、康德六年六月の地方制度大改變及其後康德七年五月に至るまでの改變により、編輯したるものにて、當所に於て苦心蒐集せる最近の縣勢概況或は縣政報告等を參照したもので、職員谷光世が不斷の努力に成るものである。本書の內容は縣の概史、地勢、物產、開拓事業、主要都邑所在諸機關に加ふるに關係文献の各項で、以て滿洲最近の實情紹介に遺憾なきを期してゐる。滿洲に居住し、或は滿洲に關心を持つ人々に不可缺の案內書として切に座右に備へられんことをお薦めする次第である。

康德七年十月二十八日

滿洲事情案內所研究室にて

奥　村　義　信

凡例

一、本書は滿洲國全縣の正確なる新相貌を紹介することを目的として編纂したるものである。

一、配列は滿洲國政府が採用してゐる新配列に依つた。

一、卷末揭載の人口表は治安部發表、康德六年六月末日現在のもので同じく附錄として滿洲國と唇齒の關係にある關東州の情勢竝に滿洲國全圖を添附した。

一、省、市、縣、旗等地方行政制度は、康德七年五月現在である。因に全國一八省、一七市、一五五縣一八七街、二、九八二村、暫行街村一二五となつてゐる。

滿洲國地方誌

目次

九、濱江省（一市、一六縣、一旗）……二四一

新京特別市

新京特別市

國都新京

昭和六年九月十八日、柳條湖の一角に端を發した滿洲事變を契機として、舊東北軍閥を關内に追ひ、世界史上に新しく浮び上つた滿洲國、其首都もふさはしく新京と名づけられ、大同元年四月より、もとの長春の地を選んで國都と奠められる事になつた。凡そ史上に於て、一國の政治大革新に直面するや必ず遷都の議が起つて居る。人心一新の上にも舊弊政打破に於ても必要な事であるが、滿洲國が、清朝以來の政治中心地、奉天、吉林をさけ、何等政治的濃厚な歴史を有せぬ長春の地を選ばれた事は、各方面の角度から肯かれる事である。實に新京は政治上白紙の上に築かれたる國都であり、一小都市に過ぎなかつた地が、近々六、七箇年間に堂々たる大都市として見事に建設せられ、世界史上稀に見る發展を示したものである。

新京は一國國策の根源であり、政治の中心である事勿論、一國經濟、金融、治安、文化、教育、社會事業等のあらゆる中心地、國都である。

立法、行政

畏くも滿洲國　皇帝陛下には滿洲國建國に際して新京に入京遊ばされ　皇帝に登極遊ばされて一國の政治をみそなはせ給ふ。皇室の關係機關として尚書府、宮内府、侍從武官處があり、一國の立法機關として國務院會議及び參議府がある。

行政の中樞機關は國務院である。國務院は治安部、民生部、司法部、興農部、經濟部、交通部及び開拓總局、外務局、興安局より成り、各部局は、夫々國務院總務廳々舍を始め宏壯なる獨立廳舍に陣據し

經濟、金融

て行政上の分擔機能を發揮してゐる。滿洲國內は一特別市、十八省に行政區劃を分ち、更に省內を全國十七市、百五十五縣、三十八旗に區劃せられて居るが、國務院は地方政治に對する中央集權の實權を握り、且つ其實績は堅實に伸張して居る。

更に滿洲國の政治に表裏一體の關係を有し、行政の側面工作とも見るべき滿洲帝國協和會は、協和會中央本部を新京に置き、首都に首都本部、各省に省本部を更に支、分會等を全國的に有して直接民間に接觸し、國民の建國精神涵養、福利民福を計つて居るが、新京の中央本部には、聯合協議會が催され、全國の地方工作に就て盛に論議せられる。

國內政治上に要する財政は勿論であるが、產業開發、企業等、政府關係事業と民間事業とを問はず、何れも新京が中心である。卽ち政府關係會社、民間會社の多くが、新京に本社を有し、事業の策源、財政經濟の要を握つて居る。其少數を數へてみても、重工業開發會社、電々會社、拓植公社、炭礦會社、鑛業開發會社、電業會社、糧穀會社、日滿商事、生活必需品會社等々（各會社名は諸機關の部に揭げたり）何れも、國策遂行、資源開發のため全國的に活動を續けて居る。

更にそれら金融の總元締、滿洲中央銀行總行、滿洲興業銀行本店、東拓支店、橫濱正金支店等が置かれて居り、更に庶民金融の大宗大興公司本店があり其他の銀行、金融機關が何れも新京にある。

人口激增に伴ふ商業の發達は事變前に比し格段の進步ではあるが、消費都市としての面が多い。而して新京は工業上未だ生產都市とはいひ難く、近代的大工業は勃興してゐない。又多くの期待を持たれてゐない樣であるが、全滿に涉る生產工業、商業取引等に要する財源が何れも新京に依存して居るものが多い事は新生國家の中樞、國都の一面目である。

沿革

新京特別市は滿洲建國後新しく誕生した市街である。建國前は長春といつてゐた。往古を訪ぬれば文獻もあり、最近遺物によつて種々考證を進められてゐる樣であるが、往古の事はおき、極概略をいへば此地はもと郭爾羅斯王旗の領有する蒙地であつたが、清の乾隆五十六年、山東の農民を招いて開墾せしめ、伊通河の邊りに部落が出來たのが始めである。清朝は滿洲を封禁の地として漢民族の入植を禁じたのであるが禁を破り、役人の目を盜んで漢人私墾者續々增加し、嘉慶年中には二千戶、二十六萬畝にも及ぶ耕地を持つてゐたといふ。止むを得ず、一定の地域を限つて居住耕作を許し、後、長春理事通判を設けてゐた。

同治年間に城壁を築いて城內を造つたのであるが、土民は多く寬城子と呼びならはしてゐた樣である。東清鐵道が出來て露西亞人が土民のいふ二道溝の地に新しく驛を建設し、近くの街の名をとつて寬城子驛と名づけたゝめ、城內の方は長春と呼ぶ者が多くなつた樣である。更に滿鐵附屬地は、土民の所謂頭道溝の地であつたが、後、附屬地、城內、商埠地とも總稱して長春と呼ばれる樣になつた。建國當時は長春と、寬城子驛がある寬城子との二つの地名が殘つて居た。大同元年十一月一日を期して長春は新京と改稱する事が愈々實施せられ、市の長春なる名稱は過去の頁に繰り込まれ、縣名及特別市の一區として現存するに至つて居る。

國都建設

新京が國都と定めらるゝや、直ちに國務院に國都建設局が設けられ、面目一新の國都建設に着手せられた。

第一期建設事業は施行區域の面積を二一・四平方粁とし、大同元年七月一日以降康德四年十二月三十一日の五箇年を以つて完成することゝし、住居地域、商業地域、工業地域、特殊地域、雜種地域と用途に

よる地域制を立て、街路公園等配置よろしく、上下水道の設備、電燈、瓦斯の設備等之に伴ひ着々と進捗を見たのである。急激なる人口增加に伴ひ、驚くべきスピードを以つて建設事業が進み、第一期建設期間に於て滿洲國關係廳舍一七棟、其他官公會社八八棟、特殊住宅三、〇〇一戸、一般建築物五、五五〇戸、貸室貸事務所一、〇六七室、其他吉林大路に、四二二戸、合計一〇五棟、八、九七二戸、一、〇六七室の建築物が、國都建設局の既定する土木建築の規程に從つて、何れも近代的に而も滿洲の傳統、習俗、趣味、風致を巧に取り入れて見事に建築せられて行つた。尙之に倂行して要する上水として從來の施設にては水量不足の爲、淨月潭貯水池の施工を完成し、將來の發展を豫想して永久的なものが建設せられたのであつた。國都の道路幅員の最も大なるものは大同大街の五四米、興安大路の四五米であつて、道路の方向により、街又は路と名づけ町名、地番を街路によつて名づけ、すべてを計畫的に建設せられて行つた。

かくて第一期五ケ年計畫は、康德四年を以て豫期の成績を收め、康德五年一月よりは第二期三ケ年事業に入つたが、康德四年九月十六日には國都の中心大同廣場に於て　皇帝陛下の御親臨を仰ぎ、國都建設第一期事業の完成を壽ぐ記念式典が盛大に擧行せられた。

康德四年十月一日より新京特別市政の區域は大いに擴張せられ、四四〇平方粁の廣大さを包含するに至つたが、次で四年十二月一日、治外法權撤廢に伴ひ滿鐵附屬地行政は新京特別市公署に移讓せられ、四四〇平方粁に涉る地域全部の行政が、新京特別市公署に於て施行される事になつた。

國都建設事業も第一期建設を終り第二期に入る事になり、康德五年一月一日臨時國都建設局となり、從來の國務總理大臣の管理より、新京特別市長の管理に移されたが、國都建設遂行は從前と同樣である

第二期計畫康德五、六、七の三ケ年は第一期事業區域內建設の充實に當るを以て原則とし、六百萬圓

餘を計上されて居り、第二期建設區域内の建設事業企畫に向つて着々と進行せられて居る。（企畫等省略）

新京特別市諸機關

（政治、司法、警察）	尚書府	宮内府	侍從武官處	參議府
	立法院秘書廳	國務院總務廳	治安部	民生部
	司法部	興農部	經濟部	交通部
	興安局	外務局	開拓總局	審計局
	恩賞局	地政總局	營繕需品局	新京特別市公署
	長春縣公署	最高法院	高等法院	地方法院
	最高檢察廳	高等檢察廳	地方檢察廳	首都警察廳
	警察署（六）直轄（四）派出所（六五）			
（財務）	新京稅捐局	新京稅關	專賣總署	
（金融）	滿洲中央銀行總行	滿洲興業銀行本店	中銀支行	興銀支店
	興農合作社中央會	商工金融合作社中央會	首都商工金融合作社	長春縣興農合作社
	大興公司本店	大興公司支店（一一）	東洋拓殖株式會社新京支店	
	横濱正金銀行支店			
（交通、通信）	新京驛	郵政總局	郵政局（三〇）	滿洲電信電話株式會社
	滿鐵新京支社	電報局（寬家屯にもあり）	電話局	新京放送局

（商　工）

新京交通株式會社　滿洲航空株式會社

商工公會　特産專管公社　滿洲生活必需品株式會社　滿洲糧穀株式會社

（學　校）

建國大學　新京畜産獸醫大學　新京醫科大學（直轄）

新京工業大學（直轄）　法政大學　師道高等學校女子部（直轄）

留學生豫備校（直轄）　大同學院　第一（工科）國民高等學校（特別市立）

第二（商科）國民高等學校（特別市立）　新京女子國民高等學校（特別市立）

新京商業學校　新京第一中學校　新京第二中學校　新京商業學校第二本科夜間商業

敷島高等女學校　錦ケ丘高等女學校　新京青年學校　三中井青年學校

工科學院　國民學校　日本人小學校（十一）　寶山青年學校

（訓練所）

中央農事訓練所　中央師道訓練所　中央警察學校

（病　院）

新京市立第一醫院　滿鐵新京醫院　新京陸軍病院　市立婦人醫院

市立千早醫院　市立施療院　中央保健所　各私立醫院

（文　化）

滿洲事情案內所　滿日文化協會　滿洲國體育聯盟　滿洲發明協會

防空協會　國防婦人會　滿洲國赤十字社　紅卍字會

國立中央博物館　地質調査所　寫眞處　大陸科學院

中央觀象台　特許發明局　滿洲鑛業協會　滿洲映畫協會

各映畫館、劇場

（外國機關）

日本帝國大使館
日本帝國總領事館
關東軍司令部
關東局
拓務省新京出張所
朝鮮總督府派遣員事務室
德國（獨逸）公使館
伊國（伊太利）大使館
駐滿羅馬敎皇廳代表部
中華民國臨時政府駐滿通商代表部
蒙古聯合自治政府駐滿代表事務處
中華民國中央政府通商代表部

新京に本社を有する特殊會社及準特殊會社

特殊會社

滿洲石油株式會社
滿洲計器株式會社
滿洲生命保險株式會社
滿洲林業株式會社
滿洲鹽業株式會社
滿洲鑛業開發株式會社
株式會社滿洲弘報協會
滿洲圖書株式會社
滿洲興業銀行
滿洲中央銀行
株式會社滿洲映畫協會
滿洲拓植公社
滿鮮拓植株式會社
滿洲合成燃料株式會社
滿洲鴨綠江水力發電株式會社
滿洲糧穀株式會社
滿洲油化工業株式會社
滿洲房產株式會社
滿洲重工業開發株式會社
滿洲炭礦株式會社
滿洲自動車製造株式會社
滿洲電氣化學工業株式會社
滿洲硫安工業株式會社
滿洲採金株式會社
滿洲土地開發株式會社
滿洲電信電話株式會社
吉林人造石油株式會社
滿洲特產專管公社
滿洲穀粉管理株式會社
滿洲生活必需品株式會社
日滿商事株式會社

準特殊會社

滿洲畜產株式會社
東亞鑛山株式會社
滿洲火災海上保險株式會社
東邊道開發株式會社
滿洲特殊製紙株式會社
滿洲共同セメント株式會社

（其他の銀行、會社）

協和鐵山株式會社
株式會社滿洲事情案內所
株式會社大興公司
滿洲パルプ工業株式會社
滿洲農機株式會社
益發合株式會社
日清燐寸株式會社
營口窯業株式會社（本店新京）
樺甸炭礦株式會社
鳳城鑛業株式會社
康德鐵山株式會社
新京自動車株式會社
協和建物株式會社
共榮實業株式會社
康德吉租株式會社
啓運工業株式會社
株式會社伊賀原組
株式會社滿洲新聞社

滿洲柞蠶株式會社
滿洲書籍配給株式會社
株式會社東亞三中井
日滿巴爾普製造株式會社
滿洲ベアリング製造株式會社
裕昌源株式會社
株式會社滿洲丁字屋
株式會社大滿採金公司
興安興業株式會社
東亞鑛業株式會社
新京國產自動車株式會社
滿洲興產株式會社
三和建物株式會社
株式會社海林採木公司
株式會社滿洲飛島組
株式會社滿洲國通信社
鮮滿興業會社（合資）

滿洲電業株式會社
滿洲石綿株式會社
新京市場會社
滿洲製袋工業株式會社
株式會社滿洲行政學會
長春窯業株式會社
裕東煤礦株式會社
北滿洲金鑛株式會社
天寶山鑛業株式會社
滿洲瓦斯株式會社
鴨北鐵道株式會社
新京興業房產株式會社
帝都建物株式會社
大同相互建築株式會社
株式會社阿川組
株式會社長春座
昭和工務所（合資）

滿洲曹達株式會社
康德毛織株式會社
康德製紙株式會社
滿洲日東製粉株式會社
滿洲煙草株式會社
營城子炭礦株式會社
岫巖鑛業株式會社
間島鑛業株式會社
新京交通株式會社
新京倉庫運輸株式會社
康德興業株式會社
新京不動產株式會社
服部工業株式會社
株式會社寶昌公司
株式會社帝都キネマ
高山組（合資）

同興和允記公司(合資)　天野商店(合名)
義合公司(合名)　横濱正金銀行支店
淺野物産株式會社支店　滿洲興業證券株式會社
復興公司(合資)　同和工務所(合資)
日産火災海上保險株式會社支店
株式會社大阪電氣商會大阪煖房商會支店
株式會社普編洋行支店　株式會社黒龍洋行支店
朝日海上火災保險株式會社支店
神戸海上火災保險株式會社支店
大正海上火災保險株式會社支店
扶桑海上火災保險株式會社支店
大倉水災海上保險株式會社支店
日本生命保險株式會社支店
日本海上保險株式會社支店
帝國火災保險株式會社支店
東洋火災保險株式會社支店
日本共立火災保險株式會社支店
日滿實業株式會社支店　株式會社文祥堂支店

長春農事會社(合名)　長谷川工務所(合名)
大邱産業金融株式會社支店
滿洲大華電氣株式會社　琿春砂金株式會社
義大製粉廠(合名)
東洋拓殖株式會社支店
增成動力株式會社支店　株式會社松本組支店
株式會社バーチャ支店
大阪海上火災保險株式會社支店
攝津海上火災保險株式會社支店
帝國海上火災保險株式會社支店
三菱海上火災保險株式會社支店
朝鮮火災海上保險株式會社支店
明治生命保險株式會社支店
共同火災保險株式會社支店
東京火災保險株式會社支店
日本火災保險株式會社支店
豐國火災保險株式會社支店
丸三興業株式會社支店　三菱商事株式會社支店

株式會社吉川商會支店　川井電氣株式會社支店　株式會社松田清商店支店
株式會社森六商店支店　帝國生命保險株式會社支店
藤本ビルブローカー證券株式會社支店　株式會社アサヒ商會支店
昭德興業株式會社支店　株式會社丁字屋商店支店　日本コレス株式會社支店
日本タイプライター株式會社支店

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
第一期五箇年計畫事業實績	同表題	國都建設局	康、五、四
新京經濟の基本的動向	同表題	滿鐵新京支社業務課	昭、一二、一一
大新京經濟概觀	同表題	新京商工會議所	昭、一二、九
新京に於ける畜産物集散狀況	新京商工月報（五九）	同前	昭、一二、一〇
國都新京特別市	滿洲國現勢	滿洲國通信社	康、六、七
新京商店街調査（四）	新京商工月報（六四）	新京商工會議所	昭、一三、三
最近に於ける新京と東京との生活費の比較	同前（六四）	同前	同前
新京特別市制	新京特別市公報（一四七）	新京特別市公署	康、四、一〇
新京行政區劃圖、新京町會區域圖	同表題	同前	康、四、一二
康德四年末現在新京戶口	新京特別市公報（一七一）	同前	康、五、三
新京特別市區條例	同前（一六八）	同前	康、五、二
新京特別市隣保委員職務要項	同前（一七六）	同前	康、五、四
屠宰場屠宰牛、羊、猪、馬、騾、驢數同月報表	同前（一七九）	同前	康、五、五
新京特別市區域圖（四年十月一日より）	政府公報（一〇五一）	滿洲國政府	康、四、九、三〇
新京特別市分科規程	同前（一一七八）	同前	康、五、三、一二
臨時國都建設局分科規程	同前（一一七八）	同前	同前

國都新京案內	同　表題	新京觀光協會	康、五、
新京案內	同　表題	同前	康、五、七
新京の職蹟をきく	觀光東亞（五の六）	同前	昭、一三、六
新京の自轉車需給高	泰東興信日報（四六三四）	泰東興信日報社	昭、一三、四、五
新京事情（平川、辻）	同　表題	滿洲事情案內所	昭、九、四
新京特別市の全貌	同　表題	特別市公署	康、二、
新京市政の沿革	同　表題	同前	康、三、
新京に於ける凍魚	資料編（一）	新京商工會議所	昭、一一、九
新京の土木建築請負額	同前（四五七一）	同前	昭、一三、一、一七
大新京躍進譜斷片（辻情一郎）	經濟（二の一）	經濟部	康、五、一
躍進國都特大寫眞帖	同　表題	滿洲帝國政府	康、五、一
新京郊外的園藝	農業進步（五の一一）	農業進步社	昭、一二、一一
土地建造物賣却及貸付規則	國都大新京	國都建設局	康、元、九
新京特別市に於て施行せる臨時家計調査概要	同　表題	統計處	康、二、六
長春沿革史	同　表題	滿蒙文化協會	大正一二、一〇
長春事情	同　表題	滿鐵地方事務所	昭、七、三

吉林省

吉林省

略史

吉林市

吉林は古來から滿洲民族の安住根據地であつた。彼等は勢力擴大すれば外部に發展し力衰へれば歸つて潛勢力を涵養してゐた。

當地方は漢晋時代には挹婁に、唐代には渤海國に屬し、吉林を中心とした一帶の地は、高句麗、渤海國の文化を誇る一居城であつた。元、明時代も種々の歴史を殘して居る。清代に至つて、順治十八年、土賊討伐と、露西亞人征伐の目的を以て、戰備の爲めに此地に造船所を設けたゝめ、吉林を船廠と稱するに至つたといふ事である。

康熙十年、寧古塔から、初めて副都統一人、船廠に移住して來た。これが吉林に地方行政官の駐在を見た嚆矢である。次で同十二年初めて煉瓦を用ひて本格的な城壁を築き、同十五年、寧古塔將軍が文武官を從へて吉林に入城駐在した。以後吉林を中心として、伯都訥、三姓、琿春等に副都統、協領等を設け、滿洲八旗を統治するに至つたのである。雍正四年から五年にかけて、漸次縣制を布き光緒に入つてから、吉林を吉林府として伊通、敦化等をも管轄せしめたのである。

光緒二十九年日露戰爭の勃發により、治安の紊亂は、清朝末期の事とて尠からず狼狽せしめ、政治上にも局面打開の必要に迫られ、省制の改革を見た。民國成立後も吉林は、吉林省政の中心であり、經濟、文化の中心として發達して來た處である。滿洲建國後省制の改革によつて從前の吉林省の一部は他

化學工業都市化する吉林

省に讓つてゐるが、吉林市は依然として吉林省の中心都市であり、距離近き國都新京をひかへ、益々發展の途上にある現況である。

事變前の吉林は、東滿、北滿に廣大なる背後地を擁し、農、林產物資の集散地として中心勢力を爲し商業の繁榮をみたものであつたが、事變後は國線各線が開通し、吉林はかへつて單なる通過地として、僅に木材の集散中心地として終るのではないかとの前途に暗陰を映ずる狀態であつたが、河によつて發達した吉林は、又、河によつて窮地から逃れる恩惠を受ける事になり今や前途に一大光明を見出しつゝある。

即ち第二松花江水力發電所の建設がそれである。第二松花江水電ダムは、滿洲產業開發國策によつて生れた大々的の水力發電計畫であるが、康德八年末には第一次工事完成の豫定であり、事業費一億圓、完成の曉には平均負荷三十六萬キロワツト、最高負荷六〇萬キロワツトといふ大計畫のものである。今工業立地としての吉林の條件を見るに、

(1) 氣候　大陸的ではあるが、四圍の山は吉林を比較的溫暖に導き、他都市に比し、四季は凌ぎ易く、山水の狀態から最健康地である。

(2) 地勢　山水よく整ひ、滿洲の京都といはれる風光明媚の地である。

(3) 工業用水　地下水よりも、第二松花江の水の方が、比較的硬度が低く適當であり、水量豐富。

(4) 工業用地　水電ダムの建設による新都市計畫により、全工業地帶を郊外に伸し、龍潭山北西一帶の尨大なる地域と哈達灣の一部合計四〇、五平方粁が豫定されて居る。

(5) 交通　鐵道は京圖線、奉吉線、拉濱線、松花江水運は、下流扶餘より、哈爾濱に通ず、更に新

京、磐石、舒蘭、樺甸、雙陽、大豐滿（ダム建設地）へ自動車交通の便がある。

（6）原動力　吉林に於ける電力料金は三厘乃至五厘位で可能である見込み。

（7）勞働力　配給よろしく、賃銀は奉天、新京より現在の處稍低廉である。

（8）資源　農、林産、鑛産資源が手近に容易に得られる。

以上の様な狀態で各種工業が興る爲めに好條件を備へて居る。殊に原動力を低廉に得られる點は他の何れの地よりも好條件である。

水力發電事業に伴ひ、各種工業の勃興は吉林將來の夢ならぬ事實として實現せられる事になつた。ここに吉林省公署、吉林市公署、商工公會等協力の下に、大吉林都邑計畫が樹立せられ、すでに一部工事に着手してゐる。此計畫が進捗中に國家的事業として、吉林人造石油株式會社及、滿洲電氣化學工業株式會社の設立決定を見、兩社に要する工場敷地及住宅地に尨大なる地域を要する事が判明し、吉林都邑計畫は大々的に擴大したのであつた。

大要をいへば北方は重工業地帶として龍潭山北方の丘陵地より九江を中心とする大平野を含み、南は小白山麓より松花江を挾んで東に江南一帶に伸び、西に黃旗屯方面を取入れた、面積約四〇〇平方粁の尨大なる地域で、小白山麓より哈達灣一帶を全部入れた地域を都邑計畫區域として諸般の計畫を樹立し現在一部事業に着手せられて居る。現在松花江に橋樑が架せられつゝあるが、之によつて現吉林市と對岸を結ぶ大道とし、川の對岸は新に建設せらるゝ工場の社宅街となる豫定であり、哈達灣方面は工場地帶となる事になつてゐる。北山に登つて瞰下すれば、將來、綠樹立ち込むる中に整然たる住宅、科學の粹を誇る幾多の大工場が見渡す限りに立ち並び、吉林現在の河岸通りを除く外の古びた黑い瓦と相對し

て夢の様に、對岸に屋根の色とり〴〵の家屋が、立ち並ぶであらう事が十分に想像されるのである。

新興工業

計畫の大要は、三十ケ年後人口百二十萬、都邑計畫區域四〇二平方粁、市街計畫區域、一三五平方粁で市街計畫中には、街路及廣場、公園、運動場、公用並に公共用地、民用地、商業地域、住居地域、工業地域が、それ〴〵適當に割りあてられて居る。此中工業地域の二分の一弱は吉林人造石油及び滿洲電氣化學の工場を以つて占むる處であり、現在一部工場建設に着々と邁進して居る。康德八年末までには、第一期計畫を完成せしむる事になつて居る。

其他現在大同洋灰株式會社は盛に操業中にて、ダム建設のセメント製造をして居り、東洋精麻加工株式會社並に、滿洲特殊製紙株式會社の兩社は工場を建設中である。此外康德七年より着工すべく敷地の申込を受けたる會社工場は十數社に及んで居る。

これらの進捗に伴ふ都市計畫の遂行にもすでに第一期計畫に着手して居る。

この外吉林に將來勃興する事を豫想される工業としては人造樹脂工業、肥料工業及びパルプ工業、硬化油工業等であり、其他紡績、製粉等も考へられる。

觀光地
（北山）

吉林に行けば、北山に登らねば吉林を觀たとは謂はれない。德勝門外にあつて、公園として廟宇參詣のため最も多くの人に親しまれて居る。山上に關帝廟、坎離宮、藥王廟、玉皇閣などあり、毎年春の廟會には參詣者四方より集り來る。

（松花江）

北山に登つて瞰下すれば銀帶一條のＳ字狀をなして市街を貫流し、沿江市街の建物は指示すべく、遠く、江の上流を望んで、流れる筏も風情がある。

（龍潭山）

龍潭山驛より數町にして山麓に至り、登れば山頂に淸時代降雨を祈つたといふ龍鳳寺がある。

寺の西北に龍潭と呼ぶ底知れぬ池がある。秋は滿山の紅葉、落葉をふんで茸を採るもよく、狩獵地としても好適である。

（舟遊び）
水量漫々たる夏季の松花江は、川蒸汽にのつて、孤狀の江をやゝ上流まで上下するもよく、小舟を以て對岸に遊ぶもよし。又近年鵜飼の遊びも催されてゐる。

（スキー場）
市街の東南方東大山には好スロープを持つ江南スキー場、北山背後の丘陵を含むスキー場などがある。

吉林は、山よく水よく、春夏秋冬何れの時も觀光によく、觀光協會、鐵道總局では、折に從ひ觀光客の誘致に大童である。更に吉林上流の大豐滿水電ダム建設を視察せんとする客引きもきらず、明媚なる風光と、近代的曙光に映じつゝある吉林は世人の耳目をひいてゐる。

吉林市諸機關

（政治、經濟、通信等）

吉林市公署	吉林省公署	永吉縣公署	吉林高等法院
吉林地方法院	區法院	吉林高等檢察廳	吉林地方檢察廳
區檢察廳	監獄	警察廳	營林署
吉林稅務監督署	稅捐局	稅捐局分所（二）	專賣署
郵政局（五）	商工公會（省、市）	中銀分行	中銀支行
興銀支店	興農合作社省聯合會	永吉興農合作社	吉林商工金融合作社
大興公司支店（二）	電業支店	國際運輸支店	協和會
省立農事試驗場	電報局	電話局	

（學校）

師道高等學校（直轄）	吉林師道學校（省立）	吉林第一（農科）國民高等學校（省立）

吉……6
林（醫院）
省（銀行、會社）

吉林第二、第五（工科）國民高等學校（省立）　吉林第三、第四（商科）國民高等學校（省立）
吉林地方師道訓練所　吉林女子國民高等學校（省立）　齊々農林學校
吉林市立同文商業學校　滿人小學校　吉林高等女學校　日本人小學校（二）
青年學校　吉林國立醫院　吉林市立保健所　東洋醫院
吉林富民醫院　舒蘭炭礦株式會社（準特殊會社）　吉林鐵道株式會社
吉林運輸株式會社　吉林人造石油株式會社工場
滿洲電氣化學工業株式會社工場　東洋精麻加工株式會社　大同洋灰株式會社
吉林燐寸株式會社　吉林石油販賣株式會社　吉林批發市場株式會社　吉林木材興業株式會社
吉林木材伐採株式會社　吉林金華火柴株式會社　泰豐久火柴株式會社　吉林自動車株式會社
吉磐自動車株式會社　滿洲糧穀會社出張所　大滿洲木材工業株式會社（合資）
生活必需品會社支店　勞工協會支部及出張所　勞工協會永吉縣出張所
滿拓公社吉林地方事務所

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
吉林工業地帶化の研究（菊地主計）……………	滿洲電氣協會報（二）	滿洲電氣協會	康、五、五
風光明媚の吉林（寫眞と說明）……………	斯民（五の一三）	斯民社	康、五、六、一五
吉林の職業別勞働賃銀……………	吉林經濟統計年報（五年度）	吉林商工公會	康、六、
吉林の共榮木材會社創立及木材狀況…………	同前（六四）	同前	昭、一三、三、一九
水力發電に伴ひ、化學工業都市化する吉林……	同　表題	吉林商工公會	康、五、九
舊都吉林市……………………	滿洲國現勢（五年版）	滿洲國通信社	康、五、七
吉林日本人發展史……………………	同　表題	吉林日本商工會議所	昭、一一、一二

沿　史

吉林より各地に通ずる道路……………	經濟上より見たる滿蒙の道路	滿鐵臨時經濟調査委員會	昭、四、五
化學工業都市化する吉林…………………	同　表題	吉林商工公會	康、五、九
石炭液化並カーバイト工業………………	同　表題	同前	康、五、一二
躍進吉林の大工業と觀光事業に就て……	同　表題	同前	康、六、一二
躍進吉林の全貌………………………………	同　表題	同前	康、六、一
吉林商工名錄…………………………………	同　表	同　前前	康、六、六

長　春　縣

長春地方は長春(頭道溝)又は寛城子(二道溝)の名を以つて識られて居る。漢代より南北朝時代に至る迄扶餘の所領であつたが、後魏の太和十七年扶餘が高句麗に滅されてから之に歸屬し、隋代に至つて尙高句麗に屬し、粟末部靺鞨族が此處に居住して居たが、後高句麗、唐が滅亡して、粟末部を中心とした渤海國興り之に歸屬した。遼代には上京路に、金代には北京路に、元代には開元路に屬し、明代に入つて蒙古族の勢力範圍となり郭爾羅斯前旗に屬して居た。

乾隆五十年代に盛に漢人の移住が行はれ、嘉慶五年長春堡に理事通判を設け長春廳が置かれた。道光五年寛城に移建せられ、同治四年に至つて始めて戰壕を構へ、木板城垣を修築した。

光緒八年理事通判を撫民通判と改め、同時に農安分防照磨を增設した。十五年撫民通判を廢止し府に進められ、農安照磨を靠山屯に移駐せしめ十六年再び府は東北九十里の朱家城子に移駐した。

民國二年府を改めて縣となし、吉長道に隷屬し十八年道制廢止と共に、吉林省政府に直屬せられた。

大同二年四月二十六日敎令により、長春縣城は其周圍の地と共に新京特別市とせられ長春縣は其周圍を圍む地域となつたが、現在縣公署は特別市の中に置かれて居る。

地勢

山岳と稱するものはなく、丘陵又は平野地帯である。河川としては縣內の中央部を伊通河、東縣境を霧開河及び第四區に沼池があり、總じて肥沃な耕地である。

縣の物産

農産の大豆、高粱、粟、殊に大豆は良質である。伊通河流域及び其の附近に鮮農の水田があり、彼の滿洲事變前、支那兵の襲撃を受けた萬寶山も其の一つである。

交通

縣內平野であつて、新京特別市を中心としてゐる爲め、交通はよく發達し、新京特別市より吉林、九台方面にゆく國營自動車あり、又民營も新京交通株式會社の自動車路は、雙陽、伊通、雙城堡、伏龍泉萬寶山、小八家子方面に延び本縣內を何れも通過して便利である。

小八家子

新京の西北方四十粁餘に小八家子と稱する一邑がある。天主教(キリスト舊教)を捧ずる信者達が山東より來り更にフランスよりも敎父が來てすでに百餘年、宗教的に極めて平和な村を構成して居る。かつて匪襲を受けた事のない村である。田舍には珍らしい天主教會堂が聳立し、善男、善女の祈禱姿を見らるゝ。小學校、女學校の教育をも施して居る。

卡倫諸機關

郵政局　警察署　稅捐局分所　電報局

大興公司

新京に長春縣公署あり、其他縣としての諸機關は何れも新京特別市內にある。

大屯

新京の南方の滿鐵沿線の一邑である。驛よりやゝ離れて大屯の丘があり、中腹より石材を切り出して居る又樹立の中に娘々廟があつて、春の廟會には、新京より、又近くの田舍より集り來る者多く、全山人を以つて埋め大變な賑ひである。

大屯諸機關

警察署　稅捐局分所　商工公會　國際運輸支店

郵政局　電報局　電話局　大興公司

其他

警察署所在地	米沙子　小合隆　雙城堡
稅捐局分所所在地	米沙子　小雙城堡
郵政局所在地	萬寶山　米沙子　哈拉哈　朱家城子　鮑家溝　小雙城堡（大興公司もあり）　小合隆　卡倫　大屯　新立城
電報局所在地	卡倫

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
長春地方の沿革（長春縣公署）…………同	表題	縣公署	大同三、
長春縣土地價格調查表（同前）…………同	表題	同	康、元、八
長春縣に於ける標準農家耕地面積其の他調查表（同前）…同	表題	縣公署	康、元、三
長春縣鮮人戶口調查表（同前）…………同	表題	同	康、元、九
長春縣萬寶山及小合隆鮮民調查表（同前）……同	表題	同	康、元、九

雙陽縣

概史

本縣の地は遼、金の時代に於ては率江州の一部より明代には依爾們河衛及び蘇兒河衛の地に屬して居た。清代の初此地に旗兵を移し卡門を設立し、署は彼什哈に、門は章京に置き以て旗兵の統治に當らしめ重要訴訟のみ吉林に於て處して居た。而して清代吉林省に郡縣の設置せられる以前は西傍柳邊は郭

爾羅斯前旗に接して居た。
乾隆二年に至つて蘇斡延河（雙陽河の土名）の南方に蘇斡延站を設けた。これが今日の縣城の地である
宣統二年吉林の西南界、長春の東界、伊通の北界を割き、吉林巡按使、招常陳が奏請して站を廢して縣を設けたのである。
民國元年縣長は縣知事と稱され、大同元年建國後、縣公署と稱して縣組織も一變せられ、縣長を中心として系統的な組織とせられたのである。
新京特別市域の擴大により、雙陽縣の一部は新京特別市に割讓されてゐる。

地勢

雙陽縣は東方飮馬河を以て永吉縣と、北方柳條邊を以て長春縣と界してゐる。西方は山脈を以て自然的に伊通縣と境し、南方は分水嶺をなせる山脈を以て磐石縣と隣接してゐる。
四邊山を以て圍まれ、その主脈を望景山と稱す。望景山より支脈を出すもの數條、かくて縣内は廣漠たる平野はなく之等の小山脈の間に介在し又河川に沿つて數箇の盆地を有してゐるのみである。その大なるものが雙陽盆地である。
飮馬河は永吉縣境をなし、東北流して松花江に注ぐ。雙陽河、肚帶河等は飮馬河の支流である。
小河臺河は元來は新京附近に出でゝ伊通河に注ぐものであるが、現在は腰站に於て堰き止められ淨月潭の貯水池に貯へられ新京住民の飮料水となつて居る。

縣の物産

農産收穫數量は大豆を第一とし、高粱、穀子、其他豆類、粳子、（ウルチ）等之に次ぎ麥類は少ない。大豆、粟等の改良が行はれつゝある。
馬、牛、豚、騾等の畜産あり、これも亦改良、防疫等縣に於て爲されて居る。

石炭、石灰石、石綿、耐火粘土等の鑛產があるが、石灰石が、開採せられてゐるに過ぎない。

都邑雙陽街

雙陽河に沿ひ、吉林伊通街道上、吉林を距る二百滿里の地にある。雙陽縣の縣城であるが、由來政治的よりも商業的に發達した市街である。殊に從來農產市場として著名の地であり、商業比較的殷盛、每年出穀期間は牛馬車往來多く雜踏を極めて居る。新京特別市よりバスの便あり、二時間半位にして到達する事が出來る。

雙陽街諸機關

雙陽縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
興農合作社	中銀支行	大興公司支店	協和會
電話局	小學校		

其他

警察署所在地

土頂子	劉家店	新安堡	勸農山

稅捐局所在地

新安堡	劉家店	燒鍋	郭家店短期分卡
三家子短期分卡			

郵政局所在地

劉家店	西五家子	長嶺子	奢嶺口子
新安堡	放牛溝		

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
雙陽縣經濟事情	同表題	新京地方事務所	昭、九、八
雙陽縣事情	同表題	大同學院	康、二、四

雙陽縣鄉土誌	同	表題縣公署	康、二｜
雙陽縣政況概要(滿文)	民政部月刊	民政部	康、二、四
雙陽縣全圖	同	表題縣公署	康、三｜
雙陽縣建國後の道路行政概要	同	表題縣公署	康、四、一二
雙陽縣一般狀況	同	表題縣公署	康、四、一〇
雙陽縣の經濟事情	新京商工月報(六〇)	新京商工會議所	昭、一二、一一

伊通縣

概史

もと肅愼國の領土である。平漢時代には把婁に屬し、北魏時代には勿吉に、唐朝には渤海に、宋朝には契丹、女眞に屬してゐた。元代には咸平路と稱し明朝に入つて達喜穆魯伊屯河衛の地に屬してゐたが後扈倫族葉赫部地に屬し遼東都指揮司の下にあつた。

本縣の原名は依屯河と稱し、吉林、北京間の要路に當つて居たゝめ、乾隆年間滿洲兵二百名を駐屯せしめ、旗署たる佐欽衙門が設置されてゐた。けれども尙行政官廳を設くる事なく吉林府の管轄に屬せしめられて居た。雍正六年吉林より鑲黃、正黃の二旗に佐領二名を派し各旗戶を管理せしめ嘉慶十九年伊通河分防巡檢を設け、光緒八年之を分州に改め地方旗民を管理し、吉林府の管轄に屬した。

宣統元年伊通分州を伊通直隸州と改め、赫爾蘇より西を赫爾蘇分州とし、伊通直隸州の管轄下に置いた。民國二年縣制を施行し、伊通縣と稱し赫爾蘇州廢止せられ現在吉林省下にある。

地勢

本縣はピストル形をなして奉天省內に突入し、西南は縣城より約二五〇滿里も尖端を出して居る。

周圍十縣に圍まれ東方は雙陽、磐石、南方は東豐、西南は西豐、開原に、西北は懷德、梨樹、昌圖に北方は長春縣に接して居る。

縣の物産

縣内到る處に丘陵起伏し、長白山脈の支脈東北より西南に走り、著名なる山は大孤山、小孤山、莫里、青山、馬鞍山、東尖山、西尖山、碾子山、大黒山、半拉山等あり、河には伊通川東陽河上流、葉赫河等である。伊通河は縣城を貫ひて北に走り松花江に流れ、東遼河上流は、赫爾蘇を經て、梨樹縣に入り、葉赫河は、縣の西南方を流れて陽河に合流してゐる。

縣住民の約九割は農家であつて、地質良好、肥沃である。急勾配の高地及河沿砂地を除くの外は耕作が出來て居り、治安の確立と農民の安住と共に耕作地の面積も益々擴大さるゝものと思はる。主要產物としては、大豆、小豆、綠豆、高粱、稗、蕎麥、水稻、陸稻、小麥、玉蜀黍等である。

牧畜は一般農家の副業として行はる。牛、馬、騾、驢、豚、羊等である。

商業は數度に亘る匪賊の來襲を受けて不振の狀態にあつたが其後恢復しつゝある。

都邑伊通街

伊通は伊通河の左岸に位して居る。東南に薩龍山、庫勒嶺を控へ、北方には哈爾達嶺の山脈起伏し此兩山脈の間に橫たはる平野の中央に在る。

縣公署の所在地で政治の中心たるのみならず經濟上又樞要の地を占めて居る。即ち、伊通は新京、公主嶺方面に通ずる國道に沿ひ、大孤山及小孤山等の大小邑鎭を控へ、又東南伊通河の上流には營城子があり、磐石縣に通ずる地位を占めて居る。

大豆、玉蜀黍、陸稻、小麥、葉煙草、麻、豆油等が公主嶺を經て南方に移出せられ、雜貨として綿布綿糸、石油、燐寸、蠟燭、砂糖、木材等が概ね移出の經路により移入せらる。

新京との間にバスの便があり、新京との交通も容易になつて居る。

伊通街[illegible]

伊通縣公署　警察署　稅捐局　商工公會

石嶺

區法院　區檢査廳　郵政局　電報局
興農合作社　中銀支行　專賣局　大興公司
協和會　電話局　伊通農業學校（省立）　滿人小學校

四平街の東三四粁の地に位し、平梅線の主要驛である。周圍は盆地を爲し、驛を距る一粁の地點に火石嶺子があつて伊通、郭家店、四平街に通ずる道路の要衝にあたり、背後地特産物輸送馬車の中繼地として伊通縣の重要なる地位を占めてゐた。依て滿洲國當局は鐵道開通後石嶺の將來性を認め區畫整理の計畫を樹て、更に伊通縣城より通ずる縣道の建設諸施設の擴充向上を圖つて居る。最近著しく驛附近に新築家屋の增加を見てゐる。

泉頭諸機關
警察署　稅捐局分局　滿洲小野田セメント製造株式會社
日本人小學校
其他

警察署所在地
營城子　泉頭　靠山鎭　大南屯
大石嶺

稅捐局分所所在地
赫爾蘇　火石嶺（大興公司あり）　大南屯　二十家子

郵政局所在地
伊巴丹站　葉赫鎭　火石嶺子　赫爾蘇
大孤山　大南屯　靠山鎭　小孤山
營城子　四臺子　景家臺　二十家子
落虎山　房身溝　半拉山門　下二臺

蓮花街　楊木林子　英額卜站　下三臺

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
伊通縣調査報告(佐瀨六郎)	滿鐵調査月報(一七の一)	滿鐵	昭、一二、一
伊通縣概況(副島種)	民政部月刊	民政部	康、二、二
伊通縣經濟事情	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

德惠縣

概史

本縣の地はもと、郭爾羅斯前旗の游牧地であつて淸の嘉慶年間、漢族の移住し來るもの日に增加して來た。嘉慶五年現今の長春縣新立屯の地に廳治を設け、長春理事通判を置き本縣地方を管轄せしめて居つた。光緖八年、之を改め長春撫民通判となし、同十五年廳を改めて長春府と爲し、之を撫安、恒裕、沐德、懷惠の四鄉に分け、朱家城子に分防所を設けた。宣統二年長春縣側の日々繁盛に向つて來た事と府治が稍西の方に偏在して居る事に因つて沐德、懷惠の二鄉を長春府より劃分し、德惠縣と名附け、設治局を大房身に設けた。民國元年吉林都督の命を奉じ該設治局を改めて縣公署とし、設治員を縣知事と改稱した。民國十八年四月、縣公署を縣政府に、縣知事を縣長と改めた。

大同元年三月、縣政府を再び縣公署と改稱し、同年七月二十七日民政部指令を以つて九臺縣を設置せらるゝ事になり本縣内の第五區及第七區を九臺縣に屬せしめ、縣公署は窰門に遷して德惠といふ。

地勢

東は松花江を縣界として楡樹縣に接し、西は農安縣に界し、南は九臺縣に接してゐる。

地勢は全般的に見て、東部に低く、西部が高い。北部が低く、南部が高地であるために河は北流して

ゐる。縣内に高山無く、只岡陵起伏し、縣内中部を横斷してゐる長春嶺がある。

縣の物産

縣民は縣城内及各區所在地の一部を除く外總て農民であつて全縣土地極めて肥沃である。農産の主なるものは、大豆、高粱、粟、玉蜀黍等であつて、張家灣（窰門）及下九臺より縣外に移出されて居る。畜産は農家の副業で、牛、馬、豚、羊等の飼育である。松花江沿岸にてわづかに淡水魚の魚獲を爲すものあり。工業の見るべきものなく、商業は德惠及び張家灣に於て行はるゝのみである。

都邑德惠街（窰門）

一名張家灣と稱してゐる。京濱線に沿ひ、新京の北方七八粁、人口一萬に及び市街は舊鐵道附屬地及張家灣（俗に道外と稱す）の二地域より成つて居る。縣公署を此處に置き現今は德惠と稱す。

此地は京濱線中重要なる穀物集散地の一つで冬季には商人の來集する者多く、殷盛を極めて居る。從つて糧棧、雜貨、油坊等が多い。

窰門と改稱せられたるは都市の勃興と共に、煉瓦の需要増し、煉瓦窯が數多築かれた故であると。もと稍離れた太平莊に居た商人が漸次當驛に移住し來り、東支鐵道は當地を以て第二松花江以南各鐵道附屬地の中樞地點と定め、驛を中心として地方區を統轄する幾多の機關を設置したるため發達を見、縣下は勿論近縣一帶唯一の商業殷盛なる地となつたのである。商業の盛なるは俗に道外と稱する張家灣の方で驛の西部に隣接し、各種商舖を連ね人家が稠密してゐる。

德惠街諸機關

德惠縣公署	警察署	税捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	興農合作社
德惠（農科）國民高等學校（省立）		滿人小學校	

松花江驛

驛は松花江の右岸にあつて水陸交通の要路に當つてゐる。扶餘及附近より松花江の舟航によつて運び

來る穀物を鐵道に積替へ南滿方面に發送される。江に面した高台に家屋が作られ、簡單な埠頭が作られて居つて陸上げして居る。舊北鐵時代は南滿線に於ける露西亞人の避暑地として別莊風の家、避暑地用の家屋等が多く歐風に營まれ、江上ボート、倶樂部等の設備が出來てゐた。

老爺溝諸機關　郵政局　稅捐局分所

其　他

警察署所在地	岔路口	達家溝	大青咀	
稅捐局所在地	舊縣城分所	達家溝		
郵政局所在地	雙山子	郭家屯	大青咀子	城子街
	達家溝	岔路口	十二馬架子	松花江
	靠山屯	上河灣		

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
德惠縣概況（眞崎六郎）	民政部月刊	民政部	康、二、三
德惠縣全境與圖	同表	題縣公署	康、三、一

九　臺　縣

概史　本縣は大同元年永吉縣より一三、六〇〇方滿里、長春縣より二一、四〇〇方滿里、德惠縣より六、〇〇〇方滿里を割いて新に設けられた縣である。吉林省に屬する。

地勢　東南に土門嶺（標高六〇〇米）西に僅かな丘陵があるが大體平野を形成し、河川としては縣の東境に松

花江、西部に飲馬河及び霧開河があつて、之等の流域には肥沃なる耕地が開けてゐる。

縣の物產

農產は大豆、高粱、粟を主として其他豆類等。畜產は馬、豚、騾、牛等が飼育せられる。牛皮、狗皮豚毛等を出す。立木蓄積は濶葉樹が主である。下九台を中心とする火石嶺炭田に營城子炭坑があり、石炭の產出を見る。鐵。銀等も發見されて居る。

都邑九台街

九臺街は京圖沿線にあり國都新京に近く、市街は平野にあり、往時晒爾臺と稱せられ、東方上九臺に對して下九臺といふ。九臺縣公署の所在地であつて最近市況活潑、著名の特產物集散地として知られてゐる。穀物出廻狀況は建國以來著しくその範圍廣まり、當地を初め楡樹縣、德惠縣等よりも出廻り更に、京濱線、及新京驛出廻りの物迄當地に流入し、有名なる大豆集散地となつたのである。これは縣當局が穀物市場を設けて公定相場を發表し、斤量檢査を嚴重にし從來の弊風を一掃した爲めでありかつ背後地の治安確立して運搬が容易になつた爲めである。

二、三年前下九臺に、鑛泉發見せられ、アルカリ性を呈し、醫療に適する事を認められてより、九臺溫泉場が經營せられ、溫泉旅館等の設備整ひ、新京、吉林方面より、湯治、遊山するものが增加した。

九臺街諸機關

九臺縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
興農合作社	縣立醫院	中銀支行	專賣局
大興公司支店(二)	國際運輸支店	協和會	電話局
九臺溫泉股份有限公司	九臺農業學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校

營城子諸機關

郵政局、電報局	康德製紙工場	營城子炭礦

其他	
警察署所在地	其塔木　龍家堡　雙廟子　沐石河
税捐局分所所在地	火石嶺子
郵政局所在地	基塔木　上河灣(大興公司もあり)　龍家堡　卡倫 雙廟子　烏海　二道溝　飲馬河 大葦子溝　沐石河　土門嶺　玻泥河子 石家屯　大青咀子　城子街　西營城子 火石嶺子
電報局所在地	二道溝　營城子

資料

書名	書名	發行所	發行年月日
九臺縣城商業狀況	吉林省公署調査月報	省公署	康、元、五
九臺縣概況(九臺縣公署)	民政部月刊	民政部	康、二、一
九臺縣	京圖線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、二、四
九臺縣康德五年度縣政方針要綱	內務資料(二の五)	九臺縣公署	康、五、五
九臺溫泉概況	旅行情報(二八六)	ビユーロー	昭、一二、九、一一
九臺縣鄉土誌資料	同表題	縣公署	康、三
康德三年度九臺縣統計書	同表題	同前	康、三
縣一般狀況(康德三年)	同表題	同前	康、三
九臺縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
九臺縣	康德五年度市縣旗行政實績書	吉林省長官房	康、六

農安縣

槪史

本地はもと扶餘の國境に屬し、唐朝時代に、渤海國の大氏が此地を扶餘府と改め、遼の太祖渤海、扶餘を併合した當時黄色の龍、城上に現はれたに因んで之を黄龍府と稱した。金の太祖は此地を濟州と改稱し、次いで隆州と改め更に隆安府と改めた。後の農安は隆安の訛りである。

明代頭初に伊通河衞の地に屬し、依然隆安と稱してゐた。淸朝には內蒙古、郭爾羅斯前旗の地に屬し光緒八年分防照磨を設け十五年始めて縣治を設けられ、知縣を置き併せて佐貳等官、巡檢儒學各一名を添置し全縣十二社に分つて、其西一帶に分防主簿を設け、光緒三十三年社を改めて區となした。三十四年西北の三區を長嶺縣に編入したる後、宣統元年より民國十八年に至る間、屢々區の改正を見、大同二年從來の小區を改めて五大區とせられた。

地勢

農安縣は吉林省の東南部に位し、北部より西北にかけて扶餘縣、郭爾羅斯前旗に接し、東及東南は、德惠、長春縣に西南端は長嶺縣に接して居る。縣の地勢槪觀は、波狀性丘陵地であつて、西部地方に凹中高泡、鑁羅泡子等の湖沼ある外山嶽と稱すべきものはない。隨つて全地域農耕に適して居る。

伊通河は縣の南境に沿ひて東流し松花江に入り、松花江は伊通河を合して縣の東北部を、西北に向け走つて居る。

縣の物產

地勢に見る如く、主產業は農業であつて、土地肥沃、種々の農作物に適して居る。主要作物は大豆、及び高粱とし玉蜀黍、粟之に次ぎ、其他、小麻子、蕎麥、小麥等である。又縣內水田經營に適し、伊通河の水量を以つて經營に當る事が出來るとの見込みである。馬、騾、豚、驢等の畜產がある。林產、鑛產

共になし。水產は江に面した農民の副業としてわづかに漁獲するに過ぎず、何れも地場消費で移出する程はない。

開拓事業

　本縣内柴崗に鐵道自警村が一ケ所ある。

都邑農安街

　農安縣城、縣の略中央部に位し、高さ約三米の城壁(土壁)を方形に繞らし、四箇の城門を有して居る市街は十字街を爲し、東、西、南、北の四大街に分つて居る。十字街を中心とする大街は商況殷盛商舖軒を竝べ穀物出廻期には雜踏を極める。

　現在では道路完成し、自動車を通じ、又新京方面へは京白線の開通によりわづか二時間餘にして到達する事が出來る關係上商業繁榮し、商家四百六十以上を數へて居る。雜貨、糧棧、當舖を主とする者が多い。工業も織布業、釀造業、電氣業、燒鍋、油坊、製粉、皮革、窰業等が行はれてゐる。織布は當縣に於ける產業中、農業に次ぐ產業ではあるが、日本製の綿絲を原料として手織機を用ゐて地方民の常衣原料たる粗布を織出す域を脫してゐない。生產品の數量多く、一部は扶餘、乾安、郭爾羅斯前旗方面へ賣出して居る。

農安街諸機關

農安縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
興農合作社	中銀支行	專賣局	大興公司支店(二)
國際運輸支店	協和會	電話局	農安國民高等學校(農科)(省立)
滿人小學校	日本人小學校		

扶餘縣街諸機關

警察署	稅捐局分所	郵政局	電話局

其他	電報局	大興公司
警察署所在地	靠山屯	哈喱海　三盛玉
税捐局分所所在地	巴吉壘	架格蘇臺　五道崗
郵政局所在地	哈拉海城子	高家店　萬金塔　靠山屯
	三盛永	

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
農安事情	同表題	滿洲事情案内所	昭、九、三
農安縣城	京白線地方の經濟事情	新京商工會議所	昭、一一、三
農安事情	滿鐵調査月報(一四の四)	滿鐵	昭、九、四
農安視察報告	同表題	新京實業懇談會	昭、九、一
農安縣一般狀況	同表題	農安縣公署	康、三、九
農安縣經濟事情	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
農安都邑計畫區域決定	政府公報(一五四二)	滿洲國政府	康、六、六、七

長嶺縣

概史

本縣の地はもと長嶺子と稱し、唐代に於ける渤海國長嶺府の地である。宋代には金の博索府の邊地に屬し、明代には伊屯河衛の邊土に屬して居た。

清朝に至つて蒙古王科爾沁の弟郭爾羅斯が之を繼承するやうになつて、郭爾羅斯前旗、後旗の二旗とした。本縣の地の大部分は郭爾羅斯前旗の領有地である。

光緒三十三年當時の吉林巡撫は長春知府をして蒙古王郭爾羅斯前旗に對し、荒撫地三十餘萬晌の割譲を交渉せしめ程なく、吉林巡撫の管轄地域に編入せられた。而して光緒三十四年農安縣の西北三區が編入せられ耕地も漸次增加して來たので宣統元年縣制を施行し、十一鄉に分つた。民國八年鄉を區と改め、屢々、區の改變あり現在は八區になつて、吉林省下にある。

地勢

東境は農安、長春懷德の諸縣に接し、西北は開通縣、西南は雙遼縣に隣りし、北は郭爾羅斯前旗に境してゐる。

全縣地形坦々河流と稱すべきものもない。

縣の物産

産業は、農業を主とする。農産は高粱、粟及玉蜀黍等を主とす。大豆、小豆、蘇子等はあまり適しない畜産は、馬、牛、豚、羊等近年匪害に遭つて減少して居る。

都邑長嶺街

長嶺縣域で、縣の略中央に位し、街内は極めて平坦、城の周圍は沙崗を爲して居り河流と稱すべきものもない。

長嶺縣城は清末の期にありては蒙荒に屬し、蒙人の牧場であつたが、宣統元年縣を設置して長嶺と名づけた。大同二年自衛團を設け、康德五年一月、省公署の認可を經て長嶺街と爲す、而して商工公會も亦併せて街内に設置された。

長嶺街にはまだ鐵道もバスの便もなく、農安より伏龍泉まで總局のバスの開通を見てゐるが、その先は長嶺に通ずる道路により、地方交通機關を利用する外はない。又平齊線茂林驛より長嶺に入る街道を

利用する事も出來るがバスの便はない。
　産業は農業を主とし、高粱、粟、玉蜀黍等を産出するが、生産が極めて少ない。即ち街の周圍は沙崗多く交通不便で、發展性も望み難い。牛、馬、驢、騾、羊等を飼育してゐる。小工業が多少ある外商舗は三〇〇戸以上、雜貨販賣業者が多い。
　家屋は土造平屋が多く、煉瓦造平家が少數ある。水質は淡水、雜質なく頗る人畜の飲料水に適して居る。

長嶺街諸機關

縣公署	警察署	税捐局	郵政局
區法院	區檢察廳	專賣局	中銀支行
電報局	電話局	街公所	防疫監視所
大興公司	興農合作社	小學校	商工公會

其他

警察署所在地	流水沈子	太平山	利發盛	新安鎭
	鮑家燒鍋	北正鎭	泰合鎭	
税捐局分所所在地	新安鎭	順山堡		
郵政局所在地	新安鎭	鳳凰嶺	泰和鎭	

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
吉林省長嶺縣概況	民政部月刊	民政部	康、二、六
長嶺	省政彙覽(吉林省篇)	國務院情報處	康、二

乾安縣

概史

本地は内蒙古郭爾羅斯前旗の地である。而して民國十四年前までは郭爾羅斯王其臣下に草原を分與し漢民族の手に依り開拓小作せしめて居たが、十四年頃から匪賊の横行によつて小作人の逃亡する者甚しく耕地も荒廢するに至つた。偶々民國國民政府は漢民族の蒙地侵食を企てゝ居た際であつたから、郭爾羅斯王と契約を結び賣價を折半する事を條件とし、國民政府の手により、蒙地を漢人に賣却する事とせられ、民國十六年四月今の縣城の地に勘放蒙荒總局設置せられ地券の發賣に當つた。次いで民國十七年春此地に設置局設けられ、該地區の治安維持に當ると共に蒙地の開拓に當つた。滿洲國成立後大同二年十月一日改めて縣を置かれ、吉林省管下に置かれて居る。

地勢

全縣坦々たる平野で小丘さへ見えない。河川としても見るべきものなく、夏季の雨水は處々に池及沼澤を作り、地質は概ね砂土、アルカリ性であつて、農耕に適しない土地が多い。

縣の物産

全縣山脈河川なく、林、礦、漁、鹽の諸業殆どなし、僅に農産物の大豆、玉蜀黍、蕎麥、麻等を有するのみである。

都邑乾安街

乾安縣公署の所在地である。縣城ではあるが人口も少く、地方農民の特産も農民自ら開通方面へ搬出賣却し、商業は微々たるものである。商戸數も少く、農民の必需品を小賣する程度である。すべて開通から仕入れ農産も開通に搬出する。開通より乾安に來る國營バスは更に東方前郭旗に伸びて東西交通の唯一線である。

乾安街諸機關

縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
郵政局	興農合作社	電報局	電話局

其他

警察署所在地	陽字井	讓字井	情字井	蘭字井
稅捐局分所所在地	讓子井	大木蘇		
郵政局所在地	哈里	海坨子		

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
郭爾羅斯前旗開墾沿革(滿鐵調査課)	滿洲の農業	滿鐵調査課	昭、六、二
郭爾羅斯前旗行政調査報告書	民政部半月刊	民政部	康、元、三、一 康、元、三、一五
乾安縣保甲及戶口表	吉林省公署調査月刊	省公署	康、元、九
乾安縣風俗習慣調査	吉林省公署調査月刊	同	康、元、九
乾安縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
郭爾羅斯前旗所領乾安縣開放土地地革(初島秀雄)	同表題	蒙政部	康、二、二

扶餘縣

概史

本縣の地は古昔扶餘國に屬し、遼代には達魯噶部に屬し、金代には肇州と稱した地である。明の初には三岔河衞地に屬し、後蒙古人に依つて侵入せられた。

淸の初、撫寧の蒙古人が伯都訥站を設け、康熙三十三年には伯都訥副都統が置かれ、雍正五年には長

導縣の設置を見てゐたが、乾隆元年廢止せられ二年州とせられた。同十二年には再び縣と改め、吉林理事同知に屬せしめられ巡檢を置かれて居た。光緒八年撫民同治に改められ、孤榆樹に移された。三十三年府に進められ、新城府とせられるに及んで孤榆樹から再び伯都訥に移され西北路道に屬してゐた。民國二年三月縣治を布かれて新城縣とせられ、民國三年には扶餘縣と改名、濱江道に屬してゐたが、十八年道制廢止と共に吉林省政府に直隷した。

建國後現在は吉林省に屬して居る。

地勢

當縣は、東部は榆樹、東南は德惠、農安に隣し、西南、郭爾羅斯前旗、西北、郭爾羅斯後旗、大賚の各縣、更に雙城縣を東北に控へて居る。

全縣おほむね平坦、山岳に乏しく、東と北は豐沃よく農耕に適してゐるが、中央部竝に南は高地であつて、乾燥してゐる處は砂漠質、低くして濕地帶の部分は曹達質を含み土地は瘠せて農耕に不適である。丘陵性の處に、鷹山、珠爾山、大青山の名稱があるが、何れも三百米を出ず、河川は第二松花江を第一とし、東北雙城縣界に拉林河が北流してゐる。

縣の物産

縣下大部分平原で農業が主産業である事勿論である。種類は各種に及ぶが、穀子、大豆、高粱、小麥包米、豆類が主なるもので、蕎麥も相當の收穫がある。靑麻、線麻、煙草の産がある。農作物は一般に豐富であつて大豆の七%輸出を始め殆んど各種の農産は六%乃至二〇%の輸出を爲して居る。

家畜の頭數も多い。豚、牛、馬、騾、緬羊、山羊等、他縣に比し多數を所有して居る。

扶餘縣内第二松花江流域は沿岸も廣範圍に渉つて居つて清朝時代から漁業が行はれて居た。魚類頗る豐富で夏冬兩期に於ける漁獲數量は、百〇二萬五千斤に及び、漁撈法は從來のまゝではあるが漁業に從

乾安街諸機關

事するもの專業副業共に六百六十名以上を算して居る。魚類は鯉魚、草根魚、白魚、鯽魚、狗魚、敖花魚其他種類が多い。冬は凍魚として新京、奉天をはじめ南滿各市場、北支にまで搬出される。扶餘縣の西北、大賚縣に於ける漁獲高又多く、大賚驛の位置は、扶餘縣城に比して、鐵道の便よく扶餘は多少押され氣味ではあるが、漁業に就ては有望な地である。

都邑扶餘街

伯都訥の地は上古肅愼の地として其の歷史古く、現在は扶餘と稱し、扶餘縣城として縣の西端に位してゐるが、松花江の水運あり、京白線は縣城近くを通過し、又京濱線、同縣内の陶賴昭、三岔河方面及肇源、肇州方面、乾安方面にはバスの便あり交通は便利である。當地方有數の要樞に當つて居る。

市街は松花江に臨み、城内城外二大區劃に分たれ、市街中央に於て東西南北に交叉する十字形の大街をなし、特に東大街、南大街は大商舖を並べて商業殷盛である。

此地は農產物の集散地として知られ、大豆、小麥等は殊に多く、解氷期は水路により、結氷期は陸路搬出せらるゝを常としてゐる。商業方面に於ては當市は西南北の三方面悉く江を隔てゝ蒙古地帶に接し、對蒙貿易上極めて有利な地であつて水陸交通自在、商業上重要なる地步を占め、殊に近來國道、鐵道の開通等により將來發展性を持つものと見られて居る。

又當地は淡水魚の魚獲多く、淸朝時代には凍魚を北京に献納してゐたものである。近來は鐵道開通後は大賚の方が便利となり、集散を大賚に奪はれた形であるが、尚相當の漁獲高を示してゐる。工業としては磨坊、油坊、燒鍋、紙坊等であるが何れも規模小さく、商舖の兼業位である。

扶餘街諸機關

扶餘縣公署　街公所　警察署　稅捐局
商工公會　區法院　區檢察廳　司法公署

三岔河街

郵政局	電報局	興農合作社	中銀支行
專賣局	大興公司支店(二)	協和會	縣立醫院
電話局	扶餘(農科)國民高等學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校

三岔河は京濱線の中心に位し、東境は楡樹縣に通じ、南は德惠、北は雙城に通ずる交通便利な地點である。南は松花江に臨み、陶賴昭より江に沿ふて上流は吉林、下流は扶餘に至る。又自動車道路よく開通し總局のバスは二線に分れて扶餘に通じ、又、五家站、楡樹、五常へも通ずる。

かく交通の便を有して居る爲、特產物誘致に絶好の地位を占め、商工業者は凡そ百軒を有して居るが、最も資本の大なるものは糧業である。次に雜貨屋で數に於ては最も多い。特產の集散地として著れた處である爲めに俗に「積倉」などと呼ばれて居る。

輸出の主なるものは特產で元豆、紅粮、小米、小麥、水稻で其他の雜穀等一千萬圓近くの輸出をみてゐる。輸入は小麥粉、綿織物、食料品、燃料等で、四百萬圓程度のものである。

警察署	稅捐局(石城稅捐局)	商工公會	專賣局
郵政局	電報局	中銀支行	國際運輸支店
電話局	日本人小學校	大興公司	生活必需品會社配給所

陶頼昭

京濱線の略中央に位し、第二松花江及鐵道の交叉點であつて鐵橋を距て丶第二松花江驛に對して居る。東方及北方は小丘が起臥して居り、西方に向つて平野が開けて居る。陶頼昭驛はもと小城子と稱せられた一寒村であつて、陶頼昭の町は驛の西北四粁の地點にある。昔、吉林、扶餘間の中央驛站として發達したのであるが、鐵道開通と松花江の連絡により貨客は凡て小城子に來集するに至り、驛を小城子に建設して陶頼昭驛とした、然し、陸上交通の便は三岔河に及ばず貨物は多く三岔河に奪はれて商業は衰微を來して居る。

三岔河及陶頼昭近くには大正の頃より半島人の來り住むもの多く水田を經營して賣出して居る。

陶頼昭諸機關

警察署	税捐局分所（小城子分所）	郵政局	電報局
國際運輸	電話局		

長春嶺

人口一萬六千餘を有する地方小都市である。西北岱吉に出れば松花江に出で、扶餘縣城、雙城縣城へ各七、八十粁略中央に位し、水路を以て哈爾濱及郭爾羅斯後旗、肇源との間に交通をなしてゐる。農業、商業を以つて主としてゐるが、漁業に從事する者もあり、年産五、六萬斤以上を出してゐる。

長春嶺諸機關

警察署	税捐局	郵政局	大興公司

其他

警察署所在地	大窪	蘇家窩堡	小弓棚子	五家站
税捐局所在地	蔡家溝（珠爾山分所）	五家站		
郵政局所在地	五家站	楡樹溝	浩色站	增盛永
	蔡家溝	弓棚子	城市	萬發屯

電話局所在地

蘇家窩	大窪	苗盛堡	新站
石頭城子			
五家站			

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
扶餘事情	同　表題	滿洲事情案內所	昭、九、五
扶餘縣事情	同　表題	滿洲帝國地方事情刊行會	康、二、九
扶餘縣城	京白線地方の經濟事情	新京商工會議所	昭、一一、三
康德三年度統計年報	同　表題	扶餘縣公署	康、四、六
扶餘縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

永吉縣

歴史

本縣は唐の時代には渤海國の涑洲の地であつて遼、金の時代には寧江州の旁境であつた。明初には烏拉衛、土門河衛の地に屬し、明末には扈倫族の烏拉部に屬して居た。幾何もなく烏拉部の外に哈達、葉赫、輝發の四國此地方に併立し、更に領地の爭奪を事としてゐたが、清朝の爲め平定せられた。清の康熙十二年始めて、吉林城の築造があり寧古塔將軍が此處に移つて來た。雍正四年永吉州が設置せられ、奉天府尹に隷屬してゐたが、乾隆十二年州を廢して廳となし、理事同知を置き吉林將軍の管轄に屬せしめられた。光緒八年府に進められ吉林府となる。三十三年行省政府設置せらるゝと共に之に隷屬し民國二年府を廢して縣治施行せられ、光緒三十四年西路道が設置せられてより、宣統元年西南道と改稱し、

民國三年更に之を吉長道と改め、次いで民國十八年道制廢止に至るまで之に隷屬してゐたが、爾來吉林省政府に直屬してゐたのである。吉林省の諸行政機關は皆此の地に置かれ、督軍又こゝに駐した。現在吉林は滿洲國吉林省公署の所在地である。

地勢

東部は老爺嶺山脈及び海青嶺等蟠居して其の間森林地帶をなし、南は趙大、鷄山、山平嶺等の小山脈が起伏して高崗地帶を形成し、西部は稍丘陵があるが大體農鍬の入らざるなく西北方一帶は沃野である卽ち松花江が北流して其の流域に廣汎なる平野を形成して居る。

縣の物産

農産豊富且つ收穫量も多い。主要農産は大豆、粟、高粱、玉蜀黍、水稻、陸稻、稗などで、これらは何れも他に輸出して居る狀態である。

家畜亦多く、馬、豚を始め、騾、牛、驢等家禽の數も多い。

縣の東南方に、三箇所合計三五〇平方滿里ばかりの濶葉樹林がある。樹種は櫟、楢、白楊、柳、白樺山楡等で、坑木、枕木等として多少伐採して居る。

鑛産の主なるものは石炭、鐵、銀等で石炭は缸窰の炭坑で現在採鑛して居り、他に二箇所鑛區がある水産、縣の中央を北流する松花江は淡水魚豊富で、沿岸に漁場を有する屯十數箇所に及び、資本も一萬五千元以上に及び最も多く漁獲した年は十四萬餘斤に及んだこともある。然し漁撈法は舊式である。

開拓事業

本縣は開拓團はまだ入植してゐないが、集合開拓民として、雙山鎭、白山子、江密峰に松島親造氏の鄕里長野より招致したる開拓民が入植してゐる。此三箇所は、舒蘭縣の水曲柳と共に、通稱松島農村と呼ばれて居る。其他口前に鐵道自警村、取柴河、河灣子に義勇隊自警訓練所がある。

都邑樺皮廠

樺皮廠は吉林東南方京圖線沿線の一驛である。市街は驛の南方五滿里の地點にあり、特産物市場とし

て知られて居る。樺皮廠の名は、淸朝の初め此地に廠（工場）を設け、樺皮を以て弓箭、及馬鞍を造つた事に因ると謂はれて居る。此地附近は沼澤多く釣魚の好適地である。

樺皮廠諸機關

警　察　署　　稅捐局分局　　商工公會　　郵　政　局
大興公司　　電　報　局

烏拉村

永吉縣一區にあり、京圖線九站の北方四十滿里、松花江沿岸に位する古都であつて、夏期は松花江水運を利用し、冬期は吉蘭自動車（吉林舒蘭間）の運行に據り、主要市場と交易を爲す。
街にて商業を營む者百軒餘であるが雜貨、飲食店等が主である。油坊、製醬等の小規模工業も營んで居る。

烏拉村諸機關

警　察　署　　稅捐局分局　　郵　政　局　　大興公司支店

大豐滿

第二松花江水力發電事業

吉林の上流二十五粁、本縣大豐滿の地に第二松花江水力發電事業が着々と進行して居る。本事業計畫は滿洲產業五箇年計畫により、國家の直營事業として着手せられたる世界の驚異を集中して居る大事業である。大豐滿の兩岸山脈の最も接近したる地點に於て、大堰堤を築き、河水を堰き止め、其上流に日本の琵琶湖の八割程の面積を有する一大湖沼を作り、此水量を以つて發電せんとするものであつて、現在工事も半以上に進み康德四年より着手、康德八年末には第一期計畫完成の豫定である。堰堤の高さ九一米、長さ一、一〇〇米、貯水池面積は五四〇平方粁、總貯水容量一一〇億立方米、最大發電力七〇萬キ

ロワツトといふ大事業で、水力發電事業中、世界第二位のもので第一次の事業費十五億を要するのである。本事業竣工後は其下流地帶から、現在の吉林一帶にかけて、大工業の勃興を見るものであつて、すでに、滿洲電氣化學工業株式會社、吉林人造石油株式會社は着々と建設に從事して居り、現在ある大同セメント工場、更に東洋紡績を始め、各種の纖維工業、木材工業等々續々として工場の建築が營まれ、大吉林工業都市が建設さるゝのである。又堰堤築堤により、水量の調節が行はれ、下流地帶の治水、開拓事業に一大好影響を與へる事により、湖水が出來る事によつて一帶は國立公園となるべく、從來山間の僻地であつた永吉縣の此一帶は、急激に來る文化の風に吹かれて驚異的地帶を現出する事はこゝ近々の事であらう。

大豐滿諸機關	稅捐局分所	吉林共榮木材株式會社	日本人小學校	大豐滿水力發電所
岔路河諸機關	警察署	稅捐局	郵政局	大興公司支店
雙河鎭諸機關	警察署	稅捐局分所	郵政局	電報局
	日本人委託小學校			

其他

警察署所在地	小豐滿	額赫穆(天崗)	官馬山	旺起屯
	雙河鎭	岔路河		
稅捐局分所所在地	口前	缸窰鎭	額赫穆(天崗)	
國際運輸支店所在地	九站	哈達灣		
郵政局所在地	大荒地	乖司馬屯	殷家屯	兩家子

電報局所在地

大綏河	登蒐站	一拉溪	口前屯
官馬山	三家子	五里河子	紅旗屯
旺起屯	江密峰	尤家屯	缸窰
六道河子	大豐滿	雙河鎮	九站
孤店子	額赫穆	岔路河	西陽
九站	額赫穆	北山	黄旗屯
口前	西陽	取柴河	

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
縣政況	民政部半月刊	民政部	大同三、一、三〇
永吉縣事情（大同學院）	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
吉林管內都邑事情（森御蔭）	吉林省中部各縣事情	哈爾濱商品陳列館	昭、四、二
吉林縣下都邑事情（山田久太郎）	滿蒙都邑全誌下卷	日刊支那事情社	大正一五、一〇
永吉縣查定畜類及生產數目表	吉林省公署調査月報	省公署	康、元、五
永吉縣一般狀況	同　表題	縣公署	康、二、六
永吉縣の保甲行政組織とその運營狀態	滿鐵調査月報（一八ノ一）（一八ノ二）	滿鐵	昭、一三、一 一三、二
第二松花江水力發電事業	滿洲の技術	滿洲技術協會	康、七、五

舒蘭縣

概史

舒蘭は明代には阿林衛地であつて、清の康熙二十年巴彦鄂佛羅防禦旗員の管轄に歸した。但し、居畜採珠の事務は烏拉旗の管轄に屬して居つた。其の後漸次人口增加し、宣統元年、吉林府北境五常廳南境

及珠琦、霍倫、四合等三川の地を分割し縣治を布いたのである。

舒蘭の縣名の起源は朝陽川(一名槍坡子現在の縣城の所在地)城内にもと舒蘭といふ驛站があつたが、之が遂に縣名となつたものである。

而して初めて此地に設けられた統治機關は、中華民國となつて縣公署と改稱せられ、民國十八年改めて縣政府となし滿洲國成立後、大同二年再び縣公署と改稱し現在に及んで居る。

地勢

本縣の地勢は東部高く、山岳地帶を爲し、西部は低く平原地帶を爲して居る。東部の山脈中には、張廣、才秋、千霍倫等の高嶺があつて人跡未踏の密林地帶と見られてゐる。

西部には僅に亮甲、鳳凰等の丘陵があるに過ぎない。縣內には廣大なる地域に渉つてツンドラ地帶がある事を發見せられ、滿炭にて調査の結果廣大なる地域の舒蘭炭田が發見せられ、舒蘭炭礦株式會社が設立せられ吉林人造石油の原料となる事になつてゐる。此地帶は殆ど全縣に渉るともいはれ、元來滿洲にはツンドラ地帶はないといはれてゐた說を覆す事になつた。河川は東部に細鱗、拉林の兩河及珠琦、霍倫、四合、暴馬等の河川があり、西部には松花江、溪浪河等貫流して居る。

縣の物產

農耕の外見る可き產業を持たない本縣に、近年天災相次で起り、小匪多く、農民は疲弊のどん底に沈む狀態を續けた、縣公署に於ては此が救濟に一大努力を拂つてゐるが、更に、大洪水に見舞はれ數萬餘晌の浸水を受けた事とて被害甚しかつた。農產は大豆、高粱、粟、包米等を主とし多種に及び、更に、特殊農產としては黃菸、麻類、馬鈴薯等であるが不作の時は縣內の需要にも事缺ぎ、移出量は少い方である。移出先は哈爾濱を第一として居る。支那そうめん製造、アンペラ製造等の副業を多少持つて居る。漁業に從事するもの多少あるが、林產は未だ振はず商工業亦振はず全縣內に千圓以上の資本によるもの

二十四、五軒に過ぎない。

開拓事業

本縣拉濱線通過沿線の東西には最近日本開拓民の入植を多く見て居り南方より、小城、四家房、水曲柳、平安高知の方面にかけてその中心である。四家房は第七次開拓團が入植して居り、平安高知、水曲柳福島、四合屯高知、十勝は集合開拓民で、四家房と小城に鐵道自警村がある。

西部方面の年々の松花江の水災も、大豐滿ダム築造の曉は水量の調節行はれ、且つ、土地開拓によつて農產方面は非常な發展を見らるゝものと豫想されて居る。

舒蘭炭田

舒蘭を中心に廣大なる區域に涉つて良質の石炭を有する事が調査せられ、舒蘭炭礦株式會社の創立となり、同じ野口系の吉林人造石油株式會社の子會社として成立した。更に同子會社の舒蘭鐵道會社は舒蘭より吉林迄九一粁間の鐵道敷設に着手して居り、康德八年末水力發電と共に、石炭は吉林に運ばれて主として吉林人造石油に使用される事になつてゐる。かくの如く從來農產以外見るべきものもなかつた本縣は、有名なる礦產縣として地方の發展上活氣を呈すべく、着々實行に移されて居る。

都邑舒蘭街

舒蘭縣域は從前吉林縣に屬し朝陽川と呼ばれて居た處であつて、縣を置かれるに至つて舒蘭と呼ばれる事になつた。縣城の北方は丘陵よりなる平野であるが東方は僅か二滿里にして山岳に接して居る。

市街は東西南北の四門があるが、城壁の設置はない。市街は十字街を爲し、南街は商店軒を竝べ比較的賑かであつて本縣城の經濟上の中心である。

本縣城は上述の如く、舒蘭炭田開發と吉林との交通至便となるため、從來鐵道の開通すら見なかつた地であるが、こゝ二、三年の中には面目一新、一躍近代工業に一役を誇める事になるであらう。それに伴ふ人口の增加、商工業の繁榮又期して待つべきである。

舒蘭街諸機關

舒蘭縣公署　警察署　稅捐局　商工公會
區法院　區檢察廳　郵政局　電報局
興農合作社　專賣局　舒蘭兼理司法縣公署　電話局
滿拓公社舒蘭出張所　勞工協會出張所

小城子

當地は將來縣の中心地點となるべく期待されて居るが、現在は市況未だ振はず、小さい邑である。

小城子諸機關

警察署　稅捐局分所　國際運輸　郵政局

水曲柳崗諸機關

電報局
稅捐局分所　國際運輸支店　郵政局　電報局

其他

警察署所在地

白旗屯　新安　開原　平安

稅捐局分所所在地

四家房　平安站　白旗屯

郵政局所在地

四家房　新立鎭　缸窯（永吉縣）　溪浪河
白旗屯　法特哈門　馬鞍山　新街基

日本人小學校及委託小學校所在地

平安
大日向　水曲柳　四家房　平安屯
小城

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
縣下人口及雜穀生産高	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、九、二
縣下保甲及人口表	吉林省公署調査月刊	省公署	康、元、六
縣下鮮人概況(外務省)	在滿朝鮮人概況	外務省	昭、八、一
舒蘭縣一般事情(井上二郎)	同表題	新京事務局	康、三、一
舒蘭縣經濟事情	同表題	吉林鐵路局	康、四、三
舒蘭縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
舒蘭縣地圖	同表題	縣公署	康、三、八

蛟河縣

概史

此地は元代には開元路と海蘭路の分界に位し、明代には額朶里衛、禿屯河衛の兩衛の地に屬し、明末には愛親覺羅の本部に屬し、淸初には額穆赫索羅に左領が設けられ、臺站、旗丁を管轄し、後敦化、寧安、五常三縣に分屬し、宣統二年縣を設けられ、縣治を額穆索に置いた。大同元年六月匪賊に依つて縣城は包圍攻撃せられ被害甚しく爲めに、額穆縣公署を蛟河鎭に移したが康德元年十一月公許せられた、康德六年額穆縣を蛟河縣と改稱せられたのである。

地勢

東は寧安西は永吉南は敦化、樺甸、北は舒蘭、五常、葦河の諸縣に圍まれ、之等の縣境は吉林省内最高地域を占め北の五常、舒蘭兩縣界は琵琶頂子、威虎嶺、東西呼蘭の兩嶺、太平嶺、西の永吉縣界には老爺嶺、海青嶺、杉松嶺がある。中央には張應才嶺が北より南に走つて其の東を嶺東地區、西を嶺西地區と稱し夫々盆地を形成して居る。河川は牡丹江が嶺東地區の中央を流れ朱蘭河、威虎河の水を合して寧安縣に入り、嶺西地區の中央を拉法河が流れ嘎雅河を合せて樺甸縣に入り其の流域は平野を成して居

る。

縣の產物

農產の主なるものは大豆、穀子、包米、稻子等で、高粱、麥類は少ない。黃菸(煙草)、麻類の特用農產及蔬菜類を產す。畜產は牛、豚を主とす。本縣は森林面積廣く、材木出產は極めて豐富である。國有林、公有林、私有林の面積は全縣面積の三分の二を占む。樑松、黃花松、杉松等の針葉樹、楡及楊柳等の濶葉樹等樹種も多いが未だ開採せられない部分もある。

山貨として人蔘、鹿茸(鹿のふくろ角)(何れも藥用)木耳、狐狸皮、黃鼠皮、貂皮、其他の皮類等、五・六萬圓の收入を見せてゐる。

礦產は豐富であるが、現在では、石炭の採掘を行つてゐるに過ぎない。奶子山煤礦及唐家崴子が中心で事變後滿鐵の經營となり、運炭鐵道が敷設せられ蛟河に出して搬出する。金鑛も發見せられ調査中である。

開拓事業

滿拓公社に於ては本縣及隣接縣を日本農業開拓民の適地とし、兼ねて準備中の處、愈々康德五年第七次開拓民の入植を見るに至つた。第七次は縣の東部黑石屯に入植し、翌年第八次として青溝子に入植して居る。其他、拉法、額穆新潟に集合開拓民、蛟河に鐵道自警村、柳樹に青年義勇隊自警訓練所がある。

鮮農開拓民は數年前より具體化し、河川流域の水田耕作に從事し、旣に、三十七部落以上にのぼり、三千五・六百町步の水田を開墾してゐる。

都邑蛟河街

蛟河は嘎雅河、蛟河の兩流が拉法河に注ぐ處にある。鐵道敷設前に於ては經濟水路の要點として此等河川を利用して松花江に至り、吉林樺甸方面との交易が盛であつて、老爺嶺以東、張廣才嶺間に亘る一帶の盆地中心に位し、其全域を其背後地としてゐた。

吉敦線開通以來、水路に依る交通は漸次衰へ、移出入貨物の經路も一變し、又、滿洲事變後は匪賊の横行甚しく異常な沈衰を見せた。

大同元年六月額穆縣公署が此地に移され、蛟河縣と改稱せられ現在蛟河縣公署の所在地である。更に拉濱線が開通してより一般產業の勃興氣配を見せ之によつて至大の好影響を受ける樣になつた。此地は蛟河縣內の農產、石炭、木材の集散地で殊に木材は代表的のものとして水陸兩運によつて搬出される。

此地は民國以前は自由移民のみであつて人口稀薄な散在部落であつたが、民國初年より人口逐年增加し、鐵道開通以來急激に發展し、更に政治の中心となるに及び、康德五年七月街制度施行せられて街となり、縣名稱も街と同じく康德六年十月蛟河縣と改稱せられたのであつた。

街の發展に伴ひ、日滿人共に住宅不足の現狀である。水質は良好、水道設備は鐵道關係以外はない。

蛟河街諸機關

蛟河縣公署	街公所	警察署	稅捐局
營林署分署	商工公會	專賣局	區法院
區檢察廳	郵政局	電報局、電話局	興農合作社
中銀支行	大興公司	國際運輸	協和會
蛟河農業學校	日本人小學校	滿人小學校	勞工協會出張所

新站街

新站は拉濱線起工に伴ふ建設關係者の來住を一轉機として、急激に發展して來たと謂はれる。

城廂は驛の南方二粁に在り、街は南北に走向する中央街一條であつて、一般商舖は軒を列してゐる。康德元年驛を起點として、鐵道用地內に市街計畫が樹立され、總局關係の建築物を始め漸次新建築物が增加して居る。

拉濱線開通以前に於ては、人口五千に過ぎない小都邑であつたが、人口既に倍加して居る。

滿人商人の資本金一千圓以上なるもの雜貨商、糧棧等一〇軒餘、農産、林産の移出、麥粉、綿布、石油、セメント、其他雜貨の移入を業となす。

新站街諸機關	警察署	郵政局	電報局	電話局
	國際運輸	新站農業學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校

額穆索

額穆索は額穆縣の舊縣城である。事變以後匪害甚しく且つ交通上の不便もあり、蛟河に、縣公署を移してより寂しくなつたが、康德三年に至り、治安恢復、縣保安隊、日軍守備隊、滿軍營部等により治安維持せられ、三年、黃額森林專用鐵道建設完成後、發展上多大の影響を及ぼすに至つた。

額穆索諸機關	警察署	郵政局	電報局	電話局
拉法諸機關	税捐局	郵政局	電報局	國際運輸
	電話局	日本人委託小學校		
日本人委託小學校所在地	黑石屯			
黃松甸諸機關	國際運輸	郵政局	電報局	

其他

警察署所在地	八家子	退博站	官地	
税捐局所在地	八家子	額穆索	官地	
郵政局所在地	二道河	奶子山	杉松堡	老爺嶺
	黑石屯	退博站	官地	通溝鎮

小孤家　黄松甸

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
縣下都邑事情（山田久太郎）	滿蒙都邑全誌 上卷	日刊支那事情社	大正一五、一〇
額穆縣下風俗習慣調査	吉林省公署調査月報	省公署	康、元、八
額穆縣の朝鮮人概況（外務省）	在滿朝鮮人概況	外務省	昭、八
額穆縣一般狀況	同表題	縣公署	康、三、一二
蛟河商業經濟事情	同表題	吉林鐵路局	康、三、五
蛟河街事情	同表題	蛟河街公所	康、六、一〇

敦化縣

概史

本縣は渤海の建州の地であつて、元代には斡朶里萬戸府、明初には建州衛が設けられ、清朝の發祥の地であつて、始祖覺羅部貝勒は此處に住せられた。清初額穆赫索羅佐領の所轄となし、光緒八年初めて敦化縣が設けられ、縣治を鄂多哩城（或は敖東城又は阿克敦城）に定めた。宣統元年琿春副都統を廢し、東南路道設けられ、民國三年には東南路道を延吉道に改められ十八年道制が廢せられた時、吉林省政府に直隷した。現在吉林省。本縣は康德六年の改變當時東南の一部を割つて間島省安圖縣に讓つた。

地勢

本縣は哈爾巴嶺に依つて延吉縣に、西南は窩原嶺、新開嶺、牡丹嶺に依て樺甸縣に、北は慶嶺、威虎嶺に依つて寧安、蛟河兩縣に接し之等山脈に圍繞された敦化盆地は標準高度一、六三七呎より一、七三七呎の間にあつて所謂高原地帶を形成して居る。

山脈地方には樹木繁茂し、牡丹嶺に源を發する牡丹江は、敦化縣城の東南を流れ沙河歲子附近にて、

哈爾巴嶺山脈より西流する沙河川と合して鏡泊湖に注き、弔水樓瀑布を經て松花江へと北流する。尙地質から謂へば之等の流域は腐植土に富む肥沃なる平野を形成し、水田に好適の濕地も相當にあり、又一部は山林地帶であり、他の一部は丘陵地であつて玄武岩及び熔岩より成るもの多く、耕作不能の土地も亦多い。

縣の物産

主要農業としては、大豆、粟、玉蜀黍、麥類、米類等であつて、高粱は敦化縣に於ては氣候の關係上産額が極めて少ない。水田は牡丹江その他小河川の流域に於て、鮮人の手によつて二・三萬石の籾を産してゐる。

開拓事業

本縣內には日本內地人の開拓民も入植して居り、滿拓の開拓地、鮮拓の開拓地は凡そ一萬晌に達してゐるが、尙縣內に三百萬晌の未耕地を有して居り、逐年開墾の業が進められて農産の將來は大いに有望である。現在入植してゐるものは、敦化藝州に集合開拓民、大石頭に、靑年義勇隊乙種小訓練所がある。

縣內の林區には未だ斧を入れない森林地帶が多く、二千八百萬平方米の畜積を有すると謂はれ將來をかけられて居る。牡丹江流域森林區に屬し、牡丹江を利用して、現在も搬出して居る。

都邑敦化街

敦化は所謂高原地帶の盆地の內にあり、京圖線に沿ひ此地方著名の邑鎭である。敦化は淸朝の末期に唐代高麗の遺跡と稱せられた舊名鰲東城を改稱したものである。敦化縣城であり康德七年四月指定街と定められた。

京圖線の中心地點にあり、東は延吉、間島方面に、西は吉林、新京方面に通じ、又自動車道路も發達し夏季の泥濘時を除けば何れの方面にも通じ、航空の便もある。

鐵道開通以前商業圏が極めて狹小なる範圍であつたが、吉敦線開通後は商業界も異常な伸張を遂げ、

背後地、間島、寧安、安圖方面へ仲續貿易を爲し、吉敦線の最終驛であつた頃は敦化の商況は全盛であつた。しかし、京圖線、圖寧線の敷設は敦化の經濟背後地を縮少して僅に鏡泊湖方面以南を保有するのみである。然しながら、京圖線より北鮮線への全通後、特産輸出の出廻り運賃の低廉なる輸入品が北鮮三港より京圖線による經路をとるに至り、又敦化は從來の取引先であつた、新京、吉林方面にも、關係を持つに至つた。

現在市街は城内及城内と車站を結ぶ新市街より成り、新市街には公共諸機關設立せられ、日本人商店進出し舊市街、新市街一體となりつゝある。

敦化は吉林省内でも最も多く匪襲を受けた街であつて、建國後も三回に亘つて襲撃せられたが、現在では治安確保せられ平和に甦つて居る。商工業は治安の確保と共に活況を呈し、最近に至り益々拍車をかけ、滿人側商工業者五六〇餘戸、日人側二〇〇軒に達し、城門一帶の面積二十方滿里に及び概ね都市の形態を備ふるに至つた。滿人側總資本は、康德三年度に比して康德五年度は五十一萬五千圓に達し、二十五萬八千餘の增加を示し、二倍强となつてゐる。これに日人側の資本を加ふれば、總額百五十六萬四千圓餘に達し、將來の發展は實に觀るべきものがある。

自動車交通は北方官地を經て額穆素に至り、更に鏡泊湖方面にも豫定せられてゐるといはれる。南方は馬號まで開通してゐる。

敦化街諸機關

敦化縣公署	街公所	警察署	税捐局
營林署	商工公會	區法院	區檢察廳
郵政局	電報局	興農合作社	專賣局

中銀支行　大興公司(二)　協和會　國際運輸
電話局　日本人小學校　青年學校　滿鮮水產貿易株式會社
日滿巴爾普工場(滿洲林業經營)　敦化電業股份有限公司
日本海企業株式會社支店　日本海木材株式會社支店　滿拓公社敦化出張所　生活必需品會社駐在所
勞工協會出張所

黃泥河諸機關

警察署　稅捐局分所　國際運輸　郵政局
電報局

大石頭諸機關

警察署　稅捐局分所　國際運輸　郵政局
日本人小學校

其他

警察署所在地

沙河沿　馬號　三臺山　橫道河

郵政局所在地

威虎嶺　秋梨溝　馬號　沙河沿
黃泥河站

電報局所在地

哈爾巴嶺　威虎嶺　黃泥河

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
敦化事情(小林純吉)	同表題	—	昭、八、八
敦化華かなりし頃(アーナート)	滿蒙探檢四十年	講談社	昭、九、一〇
敦化縣古蹟(菊池貞二)	東三省古蹟遺聞	—	大正一四、八

縣下風俗習慣調査	吉林省公署調査月刊	省公署	康、元、八
敦化と奥地間の移出入貨物調	吉林商工月報	吉林商工會議所	昭、九、九
敦化縣に於ける滿人の農家經濟調査	滿鐵調査月報(三の一〇)	滿鐵	昭、八、一〇
敦化地方に於ける邦人の農業經營	同前(一三の八)	同	昭、八、八
敦化(商業經濟事情第三)	同表題	吉林鐵路局	康、三、五
敦化縣に於ける集團部落	民政部資料旬報(九)	民政部	康、二、七
敦化額穆地方に於ける水稻作(洋島貞之助)	農業の滿洲(一の六)	滿洲農事協會	昭、九、一
敦化縣森林	斯民(五の七)	斯民社	康、五、三、一五
敦化街事情	同表題	街公所	康、六、一〇

樺甸縣

本縣城所在地樺甸は一名官街といふ。光緒二年始めて此の地方を開放して荒地の拂下をなし、同年以後雜貨店、燒鍋等を開くものが次第に增加して市街を形成するに至つたが、同九年輝發河南の拂下によつて、一層急速な繁盛を加へた。此の地は當時吉林府に屬し、金匪の巢窟として韓邊外の勢力範圍であつたが、光緒三十三年吉林府の東南境を割いて縣治設置を奏請し、宣統元年許可せられて樺甸縣となり吉林府に屬した。民國二年吉長道の管轄となり、滿洲國建國後は吉林省に屬する。

本縣は吉林省の南部、松花江の上流に位する僻地であつて、東は敦化縣、西磐石縣に隣りし、南は松花江を隔てゝ濛江縣及安圖、撫松兩縣に、北は永吉、蛟河の兩縣に境してゐる。大部分森林丘陵地帶であつて又數多の小河川があり、東南部の境を走る松花江は山岳地帶より出て來る數多の小支流を合し、濛江縣境より本縣内に入り附近の細流を集めて來る輝發河と合して吉林に至る。丘陵性の山岳は概ね本縣の周圍を繞つて走り、平野は松花江の支流に沿つて處々に盆地を形成してゐる。樺甸縣城及樺甸林子

を中心とする平野は稍大きく、地味肥沃、農業亦盛である。

縣の物産

縣内は土地肥沃、農産物の産出豐富であつて古來穀倉の稱がある。種類亦極めて多く中にも大豆、高粱、穀子、包米、水稻等を主とし、黄菸(煙草)麻、馬鈴薯、蔬菜類の特用農産がある。

森林面積亦廣く、四二五、四〇〇陌に及び、針葉樹に紅松、白松、濶葉樹に楊木類、柳類、柞木等、伐採數量年平均十萬石に及んでゐる。又人蔘の産地として其産出も多く、他の藥草も出す。家畜は、牛、馬、豚を主とする。

縣内亦金鑛、石炭の産出がある。石炭は樺甸炭田で蘇密溝の炭坑がある。

開拓事業

縣城樺甸を含む輝發河流域及、樺甸林子附近の第二松花江流域は土地の開拓も行はれてゐるが、本縣全面積から見れば、僅の地域で未耕地として殘された土地が非常に廣い、滿拓公社は廣大なる土地を買ひ上げて、漸次日本開拓民を入植しつゝある現狀で、本縣農産の將來は大增産を豫想せられて居る。現在の入植は八道河子に第七次開拓團が一ケ所である。

水力發電

吉林の水力發電完成後、其上流たる本縣々城附近に第二次計畫として水力發電の計畫を傳へられて居る。此事業實現の曉は縣内各方面の産業發展が見らるゝ事であらう。

都邑樺甸街

樺甸縣城、從來匪賊の襲撃を受ける事なく、地方よりの山貨類其他の物産の出廻り多く、磐石等に比し、市街面積も廣く、街路よく整ひ、相當の繁榮を示してゐた。然るに事變以來背後地方面が匪害を受け農村が極度の疲弊を爲したため商勢一時不振の狀態であつた。

市街は松花江に接し、山河の風光良く在住者の言によれば、夏は恰も小吉林の感があると。城壁はないが、市街地の周圍に高壓線を繞らし、有事の際は高壓電流を通ずる設備を有してゐる。

近代的工業としては電燈業があるのみであるが、生産的なものは、燒鍋、油坊、精米所等がある。小規模で地場需要を充足するのみである。

市内大小商舗合せて一、〇〇〇以上を算し、雜貨商、穀類商、飯店及鹿茸、人蔘等漢藥材の取引商亦多く、樺甸に集散する農産物は年五〇萬石に及ぶといはれるが、これは、隣縣、輝南、濛江、撫松及安圖各縣よりの搬入も加はつてゐるためで、平穩であつた時代は六百滿里四方から日々五六百臺の大車が集つてゐたといふ事である。

現在朝陽鎭より國營バスの便あり、磐石、吉林より民營バスあり鐵道沿線ではないが、吉林の背後地として重要性を持つてゐる。

住宅は稍缺乏しては居るが、日鮮系奉職者等にとつて大困難といふ程ではない。水質良好、水道設備はない。

樺甸街諸機關

樺甸縣公署　　街公所　　警察署　　稅捐局
商工公會　　郵政局　　電報局　　興農合作社
中銀支行　　大興公司　　國際運輸　　營林署
電話局　　樺甸電業股份有限公司　　日本人小學校　　滿拓公社樺甸出張所
勞工協會出張所

其　他

警察署所在地

八道河子　　橫道河子　　集家子　　大蒲柴河
橫道子　　紅石砬子　　樺樹林子

税捐局所在地	樺樹林子　紅石鎭　横道河子　漂河口子
郵政局所在地	東集廠　横道河子　紅石磊子　加級溝　常山屯　二十家子　漂河口子　大浦柴河　大甸子　樺樹林子

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
樺甸地方經濟事情	滿鐵調査月報（一四の六）	滿鐵	昭、九、六
樺甸縣城經濟概要及樺甸縣城商況一端	吉林商工月報	吉林商工會議所	昭、九、四
縣下邦人戸口數	同前	同	昭、九、八
縣下保甲及戸口表	吉林省公署調査月報	省公署	康、元、六
縣下學田狀況	同前	同前	康、元、四
縣下都邑事情（山田久太郎）	滿蒙都邑全誌　下卷	日刊支那事情社	大正一五、一〇
樺甸縣の鮮人概況（外務省）	在滿朝鮮人概況	外務省	昭、八、一
吉林省樺甸縣一般狀況	同表題	縣公署	康、三、二
樺甸縣經濟事情	同表題	吉林鐵路局	康、三、一
樺甸縣の歷史	內務資料（一一）	內務局	康、四、七
樺甸街事情	同表題	街公所	康、…六、一〇

磐石縣

概史

此の地方は肅愼、靺鞨の頃より遼、金、元、明に至る代々女眞族によつて占據され、支那文化の化外の地として殘されてゐた。明代黑龍江蒙古地方より扈倫種族が來往し此處に輝發部（輝發國）を建てたが

清の太祖の滅すところとなつた。その舊都は本縣と通化省輝南縣界にある輝發古城である。清初本縣南境は奉天圍場（御獵場）に屬する封禁地であつたが、光緒の初年頃より流民の竄入して私墾するものが多かつたので、光緒八年土地の拂下を開始し磨磐山巡檢を置いて地方の保安に任ぜしめた。同十三年巡檢を裁撤し伊通州の分州を設けたが同二十八年分州を赫爾蘇に移した。同年伊通州より獨立して磐石縣となり吉林府に屬したが、民國二年府制革つて吉長道が設けられ、本縣は其の管轄下と變り、現在は吉林省の管轄である。

地勢

吉林省最南端に位し、東は樺甸、西は伊通、東豐兩縣、南は海龍、北は永吉、雙陽の兩縣に圍まれ、縣内には東西に黒風嶺、老爺嶺、馬寶山の山脈更に東南隅に叉那爾轟山脈がある。河川としては北に飲馬河、南に輝發河がある。

縣の物産

農産物は治安の回復と共に漸次作付面積も增加して居る。大豆、高粱、水稻、粟、玉蜀黍、陸稻何れも增産、大麥、蕎麥は大激增を成して居る。

磐石站東南に石灰礦山があつて品質良好、大同洋灰株式會社が採掘して吉林哈達灣の工場に送つて居る。此石灰山より更に西部の方に金山石灰岩と謂はれる箇所も調査されてゐる。

開拓事業

治安回復と共に半島農民の移住增加し、三千五百戸、二萬人に達してゐる。水田の經營に從事し、日本農業移民亦康德五年度第七次開拓民として二〇〇戸の移住を見た。此後本縣には多くの開拓民を入れる事になつてゐる。牛心頂子に第七次、興隆山に第八次開拓團が入植して居り、阜人村、常盤村、大黒山に集合開拓民の入植がある。又明城、葦山屯に鐵道自警村が置かれてゐる。

都邑磐石街

磐石縣公署の所在地であつて、輝發河の支流である當石河に沿ひ、南に磨磐山を負ふて居る。

奉吉線の朝陽鎮、吉林間に於ける最大の都邑である。市街は周圍四滿里の城壁に圍繞され、東西南方に各一門、南西に阜城門を有し、街は十字街を以て形成さる。南北街には商舖が多い。

磐石は舊名を磨磐山といひ、鐵道開通以前、公主嶺、長春方面に、搬出されてゐた物資の集散市場として發達した地である。現在縣內には縣城を中心として烟筒山、呼蘭鎮、黑石鎮、朝陽山、吉昌鎮等の背後地及樺甸縣城を有し、農產の取引、油坊、藥舖等の商工業がある、豆類、石灰石等が移出せられ、麥粉、石炭、鹽、綿布等が移入されて居る。

磐石街諸機關

磐石縣公署	街公所	警察署	稅捐局
商工公會	區法院	區檢察廳	郵政局
電報局	興農合作社	專賣局	中銀支行
大興公司	國際運輸	協和會	電話局
磐石農業學校（省立）	滿人小學校	日本人小學校	滿拓公社磐石出張所
生活必需品會社配給所	勞工協會出張所		

煙筒山街

煙筒山は飲馬河の上流に位し、磐石縣下有數の大鎮として鐵道開通以來目覺ましい發展をしてゐたが、事變後不斷に匪害に遭ひ市況一時沈滯するに至つた。然し、商工業は治安恢復と共に近年著しく發達し、縣內第二の商業地帶である。雜貨商八七戶、糧業一三戶、精米業四戶、其他合せて二五〇戶ある。工業は鍛冶業一四戶。驛の南方に煙筒山があり、その山形が煙突に似てゐるからかくいふと。市街は城壁を有してゐない。

飲馬河には魚類極めて多く、釣魚の好適地である。驛の西南方の仙人洞に鉛鑛がある。每月三十噸の鉛

鑛が大連に搬出されてゐる。又驛の東方大梨樹河子に石灰礦があり、毎月採掘量約十噸、吉林に搬出される。

煙筒山街諸機關	警察署	税捐局分所	郵政局	國際運輸
	電報局	街公所		

其他

警察署所在地	呼蘭鎭	黑石鎭	朝陽山	吉昌鎭
税捐局所在地	呼蘭鎭	黑石鎭		
郵政局所在地	黑石鎭	呼蘭鎭	吉昌鎭	
電報局所在地	明城	永寧	葦山屯	
委托小學校所在地	南磐石	北牛心頂	興隆川	

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
磐石縣事情（大同學院）	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
政況	各縣政況	民政部	大同二、九
縣下都邑事情（山田久太郎）	滿蒙都邑全誌（下卷）	日刊支那事情社	大正一五、一〇
磐石（鐵路總局）	奉吉線案内	鐵路總局	康、元、六
磐石經濟事情	拉賓線、五常、山河屯新站 奉吉線、磐石經濟事情	吉林鐵路局	康、三、二
磐石縣鄉土誌	同表題	縣公署	康、四、八
磐石縣集團部落建設に就て	經濟（一の三）	經濟部	康、四、一〇
煙筒山街事情	同表題	街公所	康、六、一〇

楡樹縣

縣史

本縣の地は虞代に於ける息愼、夏、周代に於ける肅愼の地であつて兩漢、晋の時代には扶餘に、北朝の時代には勿吉に、隋代並に唐初には伯咄靺鞨に屬し、後渤海國扶餘屬境となつた。遼代には東京寧江州及達魯噶部に屬し、金代には上京肇州屬境となり、元朝は開元路とし、明朝は三萬衞となし、次いで三岔河衞の地となり、後烏拉部に屬す。

清朝の初、當地は孤楡樹屯と稱せられ、嘉慶十五年伯都訥に理事同知を設け、巡檢二員を增設せられて各々伯都訥及び孤楡樹に分駐せしめられて居た。光緒八年には理事同知と改め孤楡樹屯に移され、もと設けられた伯都訥巡檢は伯都訥分防巡檢とせられた。光緒三十一年同知は府(新城)に進められ、再び伯都訥に移駐し孤楡樹に縣を設置した。宣統元年には直隸廳となり、民國二年改めて縣となし、同年三月西北路道に隸屬してゐたが、三年西北路道濱江道と改名せられるに及んで之に隸屬し、十八年道制の廢止と共に省政府に直隸した。

現在は滿洲國吉林省の管轄に屬する。孤楡樹なる名稱は、城南一粁の地點に大楡樹があつて遠くより望見する事が出來たことに起源するといふ。

地勢

東は五常、南は舒蘭、九臺、德惠、北境は拉林河によつて雙城縣に接してゐる。縣內に拉林河の支流數流があり。概略平坦であつて東南方縣境方面に稍山岳地帶を見るのみ。一般平野は沃野である。

縣の物產

縣內平坦沃地耕作よく行はれ平地の大部分は耕地である、農產の種類も多いが、粟、大豆、小麥、高粱を主とする。畜產も多く、馬、牛、豚、其他十萬餘頭、家禽も甚だ多い。

都邑楡樹街

松花江、拉林河沿岸に於て農民中に漁業を營むものあり、生産額年産八萬餘斤である。

縣城楡樹は縣の中央に位し、農産物の集散地である。清朝當初に於ては一寒村に過ぎなかつたが、康熙中葉頃から來住するもの漸次增加し、伯都訥廳を建設した。光緒二年十月市街は兵火を蒙り、被害甚しかつたが爲、翌年城壕を築いた。四門の木造を民國三年磚瓦にて築き增築修補して居る。

工業關係營業者は、油坊、木業、燒鍋等であるが、燒鍋は其主なるものである。商業を營む者、二百四十餘戶、雜貨商が最も多い。總資本三十萬を越え、地方都市としては商取引も多い。

中銀支行、大興公司、興農合作社、當舖等金融機關あり、圓滑に行はれてゐる。

本街は鐵道沿線ではないが、國營バスの發達著しく、北は拉林驛、南は秀水甸子より白旗屯方面に、又東は五常驛、山河屯方面に、西は三岔河、五棵樹、陶賴昭方面に四通八達して交通便利である。

楡樹街諸機關

楡樹縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	司法公署	郵政局
電報局	中銀支行	興農合作社	大興公司
協和會	電話局	楡樹(農科)國民高等學校(吉林省立)	
滿人小學校	街公所		

五棵樹諸機關

警察署	稅捐局分署	郵政局	電話局

其他

警察署所在地

向陽	泗河城	大嶺	弓棚子(大興公司もあり)
秀水甸子	新立屯		

税捐局分所所在地	弓棚子(分局)　大新立屯　大嶺鎮　黒林子林 四海城鎮　秀水甸子
郵政局所在地	弓棚子　大八號　閔家屯　大嶺 向陽泡　大新立屯　黒林子　秀水甸子 大坡　曲水柳崗　泗河城

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
縣下人口及雜穀生產高	滿鐵調查月報	滿鐵	昭、九、二
楡樹(新京地方事務所)	拉濱線經濟調查	新京方地事務所	昭、九、三
楡樹縣風俗習慣之調查	吉林省公署調查月報	省公署	大同三、一
楡樹縣商業習慣	吉林商工月報	吉林商工會議所	昭、九、三
楡樹縣經濟事情	同表題	吉林鐵路局	康、三、七
楡樹縣事情	同表題	大同學院	康、二、六
楡樹大觀	同表題	縣公署	康、二、四
楡樹縣境全圖	同表題	同前	康、三、—
楡樹縣城略圖	同表題	同前	康、二、—
楡樹縣鄉土誌資料	同表題	同前	康、四、二

懷德縣

概史

古代肅愼の地、降つて後漢の時代扶餘に屬し、隋代は契丹、唐代に黒水府に屬してゐた。後渤海の大氏盛其地を以て扶餘府となし遼は信州、金代に咸平路となり、上京に屬し、元代には開元路、明の頭初

には遼海衞となり後又、外衞を置き、元の允𥡴良哈を、都指揮掌衞事となしたが後自ら國を立てゝ科爾沁と號し、本縣は科爾沁部極東南處に在つて左翼中旗達爾罕王の地に屬して居た。

嘉慶七年流民入り來り荒地は漸次開け道光元年始めて裁可を得て荒地拂下を爲し、昌圖廳に屬せしめられた。同治五年分防經歷が八家子に設けられ、光緖三年には懷德は始めて分防經歷より改めて縣治を設けられた。民國に至り洮南道に屬し十八年奉天省政府に直隷し、滿洲國の成立により始め奉天省管下に屬してゐたが、康德元年十二月一日地方制度の改革と共に吉林省に屬せられ今日に至つて居る。

地勢

東南は伊通縣、北部長春縣及長嶺縣に、西南は梨樹縣に隣し、西部の一部は雙遼縣に接して居る。

縣内一大平原で吉林省の西部で、奉天省境をなし、柳條邊あり、北に大靑山があつて、其山脈の走る處は標高からいへばさほど高くもない、二〇〇米乃至二三〇米程度であるが、北方松花江水系と、南方遼河水系との分水嶺を爲す處である。滿洲を自然地理的に南滿、北滿と分けるのは此の邊である。

縣内の大部分は平原を爲し甚しい高山峻嶺といふものはない。北半部は丘陵起伏し、東南半部に又低い山があり、前記兩水系の各支流を分つて居る。

縣の物産

本縣平原多く、土質肥沃、高山、大川といふ程のものはなく、氣候は大陸性ではあるが、雨雪寒暖時を得調節よろしく全縣可耕地の殆どは耕されて居る。大豆、高粱、粟、玉蜀黍等が最も多く、此外稻、小麥、大麥等を産す。惜しい事には一般農家は改良を知らず、施肥、播種農具等も在來のまゝで行つてゐる。ために公主嶺農事試驗場では、毎年春耕の際は改良豆種子を頒布し、又品評會を開催したりして現今では改良大豆が大分擴充されて來た。

林業は縣内高山無く、平野が廣い爲、林といふ程のものはなくわづかに墳墓地旁の範圍である。採伐

は自由にし、わづかの楊柳は、舊式房屋の柱に使用される位のものである。

牧畜は農家の副業として行はれる。全縣内戸數の八〇%以上を有する農家では、各家畜を飼育し牛、馬、騾、羊、緬羊、山羊等、又豚の飼養は最も盛で公主嶺農事試驗場改良のものを用ゐて居る。其他野生の獸類等多少ある。

鑛業及水產の見るべきものはない。

開拓事業

本縣の西部、梨樹縣との境に近き地方は、半島人農民の入植を多く見、雙城堡から楊大杖子、七星河あたりに居り、水田經營が多い。

都邑公主嶺街

新京の南西六二粁、海拔二〇三米、公主嶺はもと公主陵又は公主靈と謂はれてゐた。驛の北西約五粁の丘上に公主陵なる一字があり凡二百餘年前、清朝の公主が蒙古達爾罕王家へ降嫁の途上、この地で薨ぜられた場所と傳へられて居る。又一說には南北滿洲の分水嶺なることから公主嶺と稱せらるゝに至つたものともいふ。

市街は舊滿鐵附屬地と、滿人街になつてゐるが、滿鐵公主嶺驛は、舊附屬地の中央にあり、鐵道北には農事試驗場、街公所等があり、鐵道南は商業地で、小さい河をへだてゝ直ちに滿人街に連つて居る。露西亞によつて建設せられた街で今も尙露西亞の建物が殘つて居る。商業區には特產商多く、又滿人街には昔の商家の形式が建物に殘つて居る。鐵道北と南は、長さ八十六間の跨線橋泰平橋を以つて交通せられて居る。公主嶺の驛は、珍らしい建方をしてあつて龍の飾物等がにぎやかに飾られて居る。

公主嶺は豐饒なる背後地懷德、長嶺、伊通等を控へ、特產物大豆、高粱、雜穀並輸移入雜貨類の中繼市場として知られて居る。近年特產界稍不振にあるが、尙、特產の集散市場として有名である。

油坊、醸造、煉瓦、燒鍋、精米、機械修理工場等規模は大きくないが行はれて居る。

（國立農事試驗場）

滿蒙產業開發の第一要義が農牧業の改良增殖を圖るにある處より滿鐵が大正二年に建設したもので農作物及畜產の改良を計る爲めに各種の施設が爲され、又一般觀覽者の爲めに、滿洲農業及牧畜に關する各種の標本が蒐集せられて居る。當時滿鐵の經營であつたが、治外法權撤廢後、滿鐵各種の施設を滿洲國に移管せられ、公主嶺農事試驗場も亦現今滿洲國に移されて居る。

公主嶺街諸機關

懷德縣公署	街公所	警察署	稅捐局
商工公會	區法院	區檢察廳	郵政局（二）
電報局	專賣局	中銀支行	興農合作社
興銀支店	國際運輸	大興公司（三）	國立公主嶺農事試驗場
電話局	懷德（農科）國民高等學校（省立）		懷德商業學校（省立）
滿人小學校	日本人小學校	青年學校	公主嶺農業學校
吉春交通株式會社	公主嶺建物株式會社	勞工協會出張所	

懷德街

公主嶺の北方九十滿里の地點にあり八家といふ。事變前までは縣公署の所在地として殷盛を極めてゐた。政治の中心であつた爲めに諸機關整備し、市街は高い城壁を繞らし，東西五滿里、南北一滿里城內市街は大厦軒を竝べ、道路幅廣く、常に人馬絡繹として居る。日本內地人も移住する者多くなり、公主嶺との間に特產取引上最も密接な關係にある。

懷德縣諸機關

警察署	稅捐局分局	郵政局	大興公司支店
協和會			

范家屯街諸機關	警察署	稅捐局分局	郵政局	電報局
	專賣局	國際運輸支店	大興公司支店(二)	電話局
	日本人小學校	興銀支店	青年學校	

其他

警察署所在地	大嶺	黑林	秦家屯	
	楊大城子(大興公司もあり)		毛家城子	
稅捐局分局所在地	楊大城子	黑林鎮	其他楊大城子に大興公司あり	
郵政局所在地	五家鎮	大嶺	大楡樹	秦屯鎮
	楊家大城子	毛家城子	黑林子	朝陽坡
	劉房子	陶家屯		
電報局所在地	劉房子	大屯		
電話局所在地	劉房子	大屯		

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
懷德縣一般狀況	同　表題	縣公署	康、二、六
公主嶺要覽(公主嶺地方事務所)	同　表題	滿日社公主嶺支社	昭、一〇、一〇
特産物市場と公主嶺の展望	同　表題	公主嶺取引所信託會社	昭、七、一〇
公主嶺並背後地事情	滿洲輸入組合聯合會々報(八四)	滿洲輸入組合聯合會	昭、一二、三
懷德縣圖	同　表題	縣公署	康、二、四

郭爾羅斯前旗

概史

本旗の地は曾て契丹の地であつて、遼は泰州昌德軍を置いた。金時代には金安縣となし、元は遼王の分地として居た。明代には科爾沁が此地に據り後、其弟烏巴什是爲に分與し、郭爾羅斯旗となして居た。清の初、天聰七年塞吉、古木及布木巴來降し、後、古木の弟桑阿爾寨は輔國公に封ぜられ前旗を世襲掌理し、布木巴は鎭國公に封ぜられ後旗を世襲掌理してゐた。民國以來、蒙旗は優待され、王公府の尊榮を賜つてゐた。清朝末期より域内は次第に漢人の爲めに開放の契約を屢々結ばせられて土地を開放し、開放地には府縣の設治を見るに至つた爲めに郭爾羅斯旗の面積次第に狹められ、現在の境域は、極めて縮少せられたものとなつてゐる。滿洲國建國にあたり、王は、率先して新政治に參じ、旗内の政治も亦大改革を爲し、吉林省管下に屬してゐる。

地勢

本旗は東北松花江を狹んで扶餘縣と界し、南は農安、西は乾安、長嶺、北は大賚の各縣と相接して居る。松花江に面して居る地方は、地味肥沃農耕に適し、西北部は處々に、砂石地、鹹地相連り耕作に適しない。

旗の物産

畜産、農産である。旗内の農耕を爲すものは主として漢人であるが、蒙古人中にも農耕を營むものが殖えて來て農民の十分の一位の割を占めて居る。作物の主なるものは高粱、粟、大豆、稗子、糜子、蕎麥等である。牧畜の方では歷年牧畜者の數を減じ畜産の數も減退して居るが、羊、牛、馬、驢、騾等他

都邑前郭旗

縣に比しては大量を有して居る。

郭爾羅斯前旗の王府所在地である。前郭旗は南王爺府或は單に王爺府と稱し、松花江の左岸に位して居る。王爺府及び村落は、松花江を隔る僅かに三滿里乃至五滿里の低地に、江に沿ひ高さ二百餘尺の丘麓に位してゐる。江畔の低地は南北約十四、五滿里、北半は若干の耕地を有してゐるが、他は殆ど牧地となり、蒙古人の地であり、牧畜に從事してゐる。前郭旗前面數町の地には數百年を經過してゐる楡樹が林立し、自然の公園を形成し、前方三滿里を隔てゝ北流する松花江の清流があり江畔の羊群帆影一眸の中にあり頗る景勝の地である。王の御希望により前郭旗と改稱した。

前郭旗諸機關

郭爾羅斯前旗公署	警察署	稅捐局分局	商工公會
興農合作社	郵政局	國際運輸	電報局
郭爾羅斯前旗農業學校(省立)		滿人小學校	日本人小學校
前郭旗電業株式會社	生活必需品會社配給所		

哈剌茂都諸機關

郵政局	稅捐局分局	電報局	電話局
警察署			

其他

警察署所在地

新廟　大老爺府　査干花

郵政局所在地

門土坑　新廟

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
郭爾羅斯前旗調査報告書	同表題	興安總署	康、一、三
郭爾羅斯前旗通志	蒙古地誌(下)	富山房	大正八、一二
郭爾羅斯前旗開墾沿革	滿洲の農業	滿鐵調査課	昭、六、二
郭爾羅斯前旗概況	滿鐵調査月報(一三の八)	滿鐵	昭、八、八
郭爾羅斯前旗行政調査報告書	民政部半月刊	民政部	康、元、三、一五
郭爾羅斯前旗概況	吉林省公署調査月報	吉林省公署	康、元、四
郭爾羅斯前旗の財政	同表題	蒙政部	康、二、二
郭爾羅斯前旗紀行(瀬下清明)	法曹雜誌(二の一一)	法曹會	康、二、一一
前郭旗地圖	同表題	旗公署	康、三、一
郭爾羅斯前旗附蒙古案內	同表題	大毎社	昭、一三、五

龍江省

略　史

龍　江　省

齊々哈爾市

齊々哈爾の建設は北方露人の進出に對する清朝の防衛策から生れ出でたといへやう。

清の聖祖康熙年間、露國は東方侵略の急激なる南下に黒龍江勢力を擴大してアルバジン城を築き此所を中心に清朝と爭奪の應酬を繰り返し、東進して黒龍江の下流及松花江方面に南下したのは一六五〇年頃であつた。露人の進出は單に前進するのみに止らず、占據した各地に城砦を築いて之を固守する手段に出でた。齊々哈爾西方にも城砦の遺跡が殘つて居る。

露人の前進に對抗する清朝は、黒龍江省内に自國の勢力を確固にする爲、險惡なる地點に城砦を建設し、東に璦琿、西に墨爾根を建設して、本領土と、黒龍江沿岸とを連絡する軍路及郵便街道を開通した。一六八九年のネルチンスク條約後一六九一年に伯都訥、齊々哈爾、布特哈が建設せられ、吉林との間に連絡をなし、此地方に大軍を集中して遂に清朝はアルバジンよりコサックの逐放に成功した。

附近の開墾は八旗水師營等の旗人の手によつて行はれたのであつたが捗々しからず、爲めに旗人の耕種した以外の農地を旗人に與へ、殘餘荒地は民人を招來して殖領せしめ、一六八〇年、漢人一派の捕虜を移居せしめ移民基礎を爲した爲め漢人の數が増加して來た。

かくて一六九九年當時の軍政本據地であつた墨爾根から黒龍江將軍府を移して黒龍江省城となし、後明治三十八年日支條約附屬協定によつて商埠地として開放され、日本人の入齊增加し商取引も行はれる

産業情勢

樣になつたが元來此地は政治、軍事上の中心地として發達し來つた所である。

滿洲建國後、龍江省の新設せらるゝにあたり、省政治の中心となり、康德三年四月一日勅令により市官制及び市制が公布せられて以來、市公署は市政を掌り、都市計畫も目下各方面の人士を網羅する委員會により計畫案作成中であつて二十年後人口十六萬を擁する大都市實現を目標としてゐる。

市附近の農產は豐富とは云ひ難い。大豆、小麥、粟、高粱、包米等產出するが大豆の外は地場消費である。次に商業は、元來、政治、軍事上の中心地で經濟は哈爾濱經濟圈內にあり、輸出入品も哈爾濱經由であつたが滿洲事變後、平齊線に依る南滿との取引が開かれるに及んで齊々哈爾經濟界も有利な地位に置かれるに至つてゐる。商業機關として各種同業者の組合を有してゐる事は他市と同樣である。齊々哈爾日本商工會議所は康德二年十二月開所せられたが康德五年商會と合體して商工公會を組織し、市商工業機關として擴大强化せられた。商取引せらるゝ日用品は主として日本製品であり、糧穀、生活必需品等は他市と同樣統制配給をうけてゐる。

工業は當市は近代的工業條件に缺くる處多く、一二を除いては依然として手工業時代である。油坊、燒酒、製粉、窯業、獸毛加工、製材、燐寸、製紙、織布、石鹼等の小規模小資本の工業がある。但し製粉業は康德四年十二月一日より日滿製粉會社が五十萬圓の資本を以つて、操業を開始し滿電の支店は新發電所を開設した。

以上の現狀であるが。當市は西部北滿の咽喉に位し嫩江流域の開發益々進捗せんとしてゐる現勢に據り、政治、經濟、交通各部に亘り、背後地の開發に伴ひ、當地を中心とする商工業が發達してゆく事であらう。

齊々哈爾市諸機關

龍江省公署	齊々哈爾市公署	龍江縣公署	警察廳
稅捐局	商工公會(省、市)	齊々哈爾高等法院	齊々哈爾地方法院
齊々哈爾檢察廳	地方檢察廳	區檢察廳	區法院
監獄	龍江稅務監督署	齊々哈爾地方觀象台	郵政局(三)
電報局	專賣署	電話局	齊々哈爾放送局
龍江興農合作社(省縣)	中銀分行	國際運輸	大興公司(六)
市立醫院	市立診療所	縣立醫院	興銀支店
協和會省本部	協和會市本部	省立農林試驗場	電業支店
齊々哈爾師道學校(省立)		齊々哈爾第一(農科)國民高等學校(省立)	
齊々哈爾第二(工科)國民高等學校(省立)		齊々哈爾第三(商科)國民高等學校(省立)	
齊々哈爾女子國民高等學校(省立)		滿人小學校	齊々哈爾高等女學校
日本人小學校(二)	青年學校		

(會社)

齊々哈爾石油販賣株式會社	北滿礦業株式會社	復興工業會社(合名)
三井物產株式會社支店	緑霞會社支店	滿拓公社齊々哈爾地方事務所
生活必需品會社支店及倉庫	勞工協會支部	勞工協會出張所

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
齊々哈爾日本居留民會三十年史(兼井鴻臣)	同表題	齊々哈爾居留民會	昭、一二、九
農耕上より觀たる齊々哈爾地方の氣象概觀	滿蒙(一八の一〇)	滿洲文化協會	昭、一二、一〇

躍進都齊々哈爾市	滿洲國現勢（五年版）	滿洲國通信社	康、五、七
齊々哈爾電氣通信施設	同　表　題	滿洲電々會社	昭、九、四
齊々哈爾地方野菜事情	糧　友	糧　友　會	昭、八、九
齊々哈爾の死刑場	新　天　地	新天地社	昭、九、八
齊々哈爾近郊の五千年前の遺跡	滿　蒙	滿洲文化協會	昭、五、七
齊々哈爾經濟事情	齊々哈爾商工月報（九〇）	齊々哈爾商工公會	康、五、九
齊々哈爾獸皮業者	諸外國の貿易關係業者其他	通　商　局	昭、一三、六
齊々哈爾（廣江寛一）	新天地（一八の二）	新天地社	昭、一三、二

龍江縣

概史

露國が傳統的政策たる東方侵略の急激なる南下は、黑龍江及松花江沿岸に迫り占據した各地に城砦を築いた。此露國の南下に邊防の急を痛感せる清朝は嫩江の右岸に火器廠を設けたが交通不便の爲め程近い現在の齊々哈爾に移した。康熙二十八年副都統を設けて黑龍江將軍に屬せしめ、同三十八年（或は三十二年）將軍を當時の軍政根據地であつた墨爾根より此處に移した。光緒三十年黑水廳を設け、同知を置くことを奏請して同三十一年裁可せられた。同年副都統廢止。同三十三年將軍を廢して巡撫を置き、同三十四年龍江府を奏請して宣統元年より實施されたが、民國二年龍江縣と改めた。滿洲國に於ては初め之を黑龍江省に屬せしめたが、更に康德元年十二月新設の龍江省の管轄とした。此の地は明治三十八年十二月二十二日、日清條約附屬協定によつて日本の爲めに開放せられたものである。齊々哈爾に龍江縣公署あり。

地勢

縣内殆ど平坦只第五區内に石山が一つあつて碾子山といつてゐる。縣の中央を嫩江を始め其支流阿倫

河、雅魯河、諾沁河、音河、烏魚爾河等が縦貫してゐる。

縣の物產

農產としては大豆、谷子(粟)小麥、高粱、玉蜀黍等。馬、牛、豚等の畜產がある。碾子山より多少の石材を出す。嫩江及其支流々域は淡水魚豐富に棲息し、鯉魚、鯽魚、黑魚、狗魚、鯰魚、鰲花魚其他の雜魚等毎年二十餘萬斤、哈爾濱方面に多少の移出を見る外、齊々哈爾市内及其附近にて消費せられて居る。

都邑昂々溪街

齊々哈爾を距る二五・四粁、陸路は北方齊々哈爾、嫩江方面、南方は洮南、扶餘へ、東方は哈爾濱、西方は海拉爾に通じ、夏季は嫩江による水路の便がある。又平齊、齊北兩線の開通と共に北滿に於ける交通上の一重要地點となり、齊々哈爾市の腰部を占めて居る。

昂々溪なる名稱は元蒙古語より生れたと謂はれ滿洲讀みでナンナンシー、露語にてチチカルといふ。

當地は約四十年前迄は西屯と稱する一寒村であつたが、露西亞が鐵道を敷設して沿線に附屬地を制定してから、昂々溪市街が設立せられ、其後平齊線の開通と共に、交叉驛として、市況頓に活氣を呈し、又軍事上重要なる地點として將來益々發展を期待せられて居る。北鐵時代の昂々溪附屬地は廣大な地域であり露人の勢力時代は鐵道の北側に根據を持つてゐたが、北鐵讓渡後は其勢力を失墜した。

昂々溪街諸機關

警察署	稅捐局分局	郵政局	電報局
電話局	大興公司	中銀支行	國際運輸
日本人小學校	街公所		

富拉爾基

昂々溪の西方一四粁、齊々哈爾の南西に位し、嫩江の右岸に在る。夏季の避暑地として有名な所で北鐵は當地に療養所を設置し、夏季水浴地としての設備を施し避暑客を誘致してゐた。現今は滿鐵の療養所となつてゐる。

驛は齊々哈爾の補助驛とも稱すべき驛で、勢力圏は確然しないが、夏季は嫩江を戎克により、冬季は馬車により、小麥、燕麥、大豆、玉蜀黍等の穀物が集散される。

又齊々哈爾、江橋間の嫩江漁業中心地となつて居る。

富拉爾基の範圍内の水産高は四十二萬斤を越え、金額として一萬一千餘圓、濱州線各驛齊々哈爾、海拉爾、哈爾濱にまで及んで居る。

嫩江に懸る大鐵橋は、日露の役に沖、横川兩氏が破壊を企圖して捕はれた有名な鐵橋である。

富拉爾基街諸機關	警察署	稅捐局分局	郵政局	國際運輸
	電報局	電話局		
土地爾哈（朱家坎）諸機關	警察署	郵政局	電報局	電話局
	國際運輸（李三站にもあり）大興公司			

其　他

警察署所在地	大民屯	達胡店	塔哈站	碾子山
郵政局所在地	杜爾們沁	後庫勒	碾子山	七棵樹
	濟沁河	大興		

資　料

題名	書名	發行所	發行年月日
龍江縣	黑龍江省（下）	滿鐵調查課	昭、二、一〇
龍江縣大道三家子調查報告	鄉村社會調查報告（記錄編）	國務院統計處	康、三、六
昂々溪驛事情	齊克四洮洮昂鐵道沿線經濟事情	正金銀行	昭、七、一二
龍江に於ける燒鍋業の現狀	滿鐵調查月報（一四の一〇）	滿鐵	昭、九、一〇

泰來縣

概史

此の地は札賚特王旗の領地で、古來牧畜が盛んである。清光緒二十九年黒龍江將軍奏して蒙地の西部を開放したのが始めで、後東部地方をも開放した。民國二年設治局を太來氣（泰來鎮）に設け、同六年五月泰來縣と改めて龍江道に屬せしめた。滿洲事變當時、縣城は被害を受け、全境鼎の沸くが如く縣長はじめ住民相續いで逃亡し城郭は一度空虚になつたが、同年（民國二十年）十月馬占山同部屬を率ひて境内に入り來る。日滿兩軍と抗戰二、三ケ月に及び、縣政一時停辦してゐた。滿洲國獨立後大同元年七月、初は黒龍江省に屬し後新行政區劃によつて新設の龍江省の管轄となつた。康德四年十二月縣政を刷新し、更に康德五年四月新縣制を施行し、現今縣政整ひ、新進の組織によつて邁進してゐる。

地勢

北は嫩江岸の江橋を境とし嫩江に依つて東境を劃し西は興安南省に接してゐる。縣城の西北四粁位に乾德門山があり、沙土多く石礫は少ない。更に十粁餘のところに老山頭、翁根山等があり低い丘であるが、住民は牧場として居る。又西南方に朝陽山があり樹木なく砂山である。縣の北部は大きい緩やかな起伏を有し、南は平坦地である。東境は嫩江の大江南流し、縣の中央は北西より南東に綽爾河が縱貫して居る。其流域には濕地をなす處が多い。

縣の物産

一般農産物は、大豆を大宗とし、粟、高粱が多い、包米、小麥等も出してゐる。江橋を中心とした嫩江には冬期殊に鯉、鯽、鯰、鰲花魚等が獲れ、南滿方面に移出される。又縣内には牛皮、馬皮、猪皮、

都邑泰來街

豚皮、兎皮、犬皮其他の皮類を産す。工業生産として、高粱酒、豆油、豆粕等を産す。

民國六年泰來縣と改められて縣城となり今日に及んで居る。事變により一時縣城は空虚となり、馬占山の變などがあつて、商工業一時疲弊し、農民の購買力は減退する有様であつたが、縣政回復と共に住民も歸來し、商工業も年々隆盛に赴いて居る。農民の復興も漸次成り、縣城内に粮業を營む者一五、粮米業二二、雜貨一九、小雜貨七七、其他飲食業、旅館、料理店其他、人口の割には多數の商店を有して居る。人口一萬七千以上の中約一割は商業に從事して居る。資本の大きいものは粮業で他は小資本が多い。工業も製皮革工業、鐵工業、製油、酒釀、木工業其他一通りの種類がある、資本の大なるものは酒釀で白酒の製造をしてゐる。それに伴ふ酒糟の生産もあり、豆油、豆餅等の製出も見る。淡水魚の交易も多く年七萬二千圓以上の販賣が爲されてゐる。

泰來街諸機關

泰來縣公署　警察署　郵政局　專賣局
興農合作社　商工公會　中銀支行　大興公司
國際運輸　協和會　稅捐局　電報局
電話局　縣立醫院　泰來農業學校（省立）

江橋諸機關

稅捐局分所　電報局

街基（長山堡）諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局
電話局
其他

警察署所在地

塔子城（大興公司もあり）大五家子　五廟子

税捐局分所所在地	塔子城
郵政局所在地	塔子城　五廟子　長山堡　哈拉爾格

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
泰來縣事情（大同學院）	滿洲國地方事情概説篇	大同學院	康、元、四
泰來縣事情（滿鐵調査課）	黒龍江省　上卷	滿鐵	大正一三、五
泰來縣全圖	同　表題	縣公署	康、三、五
泰來經濟概況	同　表題	泰來商工公會	康、五、—
泰來商工公會會員名簿（記）	同　表題	同右	康、六、七
泰來縣事情	同　表題	同右	康、六、—

概史

景星縣

此地は始め漁猟民族が、何處からともなく移住し來り始めて貧弱なる一小部落を形成したのに始まるといはれてゐる。清朝に至り、此地を景星鎭と稱し、龍江府に屬し、光緒三十二年、經歴廳の設置を見た。その後、吉林、奉天二省よりの移住者多く、民國三年經歴廳を廢して設治局とした。其間、移住民の増加著しく、之を防止する事能はず、土地開墾事業進捗し、民國十八年縣制を布き、景星縣と呼稱するやうになつた。天上の景星が此地に墜落したといふ傳説を傳へて居る。

建國の初、一時本縣の治安紊亂は極度に達し、全縣匪賊の跳梁に任せ殆ど收拾する事が出來ない狀態であつた。大同元年十二月縣長の就任を見多難の中に建國の基礎を作り、龍江省に編入せられて現今に至つて居る。

地勢

本縣は龍江省の西南地區に位し、東及北は嫩江の支流である鴉魯河を距てて龍江縣に接し、西及南は闊門山脈を經或は額爾根河を越えて夫々興安南省札賚特旗に隣接して居る。

斯の如く本縣は東北南の三方を河川に依つて圍繞せられ、西は興安嶺支脈によつて區劃せられて居る地味肥沃なる平原であつて、中央を西より東に流るゝ水量豐富なる罕達哈河を挾んで北方に大小二個の景星山、馬鞍山聳立し、南方には六九山、華山が起伏して居る。

縣の物産

本縣内の農産物中主なるものは、高粱、大豆、穀子であつて、其産額も最も多く、次で、包米、蕎麥其他の豆類等である。水稻は縣内適地多く、將來有望である。其他麻類、葉煙草の産も多い。殊に馬鈴薯は最も適し、品質優良なるものを産す。牛、馬、豚、羊、家禽の放牧をして居る。

山地は縣内に多いが樹木の繁茂を見ない。縣民は杏樹の根を堀つて薪炭の代用としてゐる。

鐵鑛石、石炭を有する樣であるが調査未了。

嫩江支流に屬する河川で縣を圍繞して居る形であるが、棲息魚類は比較的少ない樣である。鮒、鯉、鯰、狗魚、黑魚、鼈等である。當地の河水は極めて清澄で魚類に臭味なく極めて美味、漁業を專業にする者なく農業の副業であり、地場消費である。

都邑景星村

此地は地名を景星鎭と稱し、往時は札賚特旗所領の荒蕪地であつた。光緒三十二年土地の開放を行つたのであるが爾來發達遲々たるものがある。

市街は東西に通ずる一條より成り、商取引に就ても附近部落と取引が行はれる程度で市況は極めて貧弱である。

景星村諸機關

景星縣公署　警察署　稅捐局分局　區法院

區檢察廳　郵政局　興農合作社　縣立醫院

其他

警察署所在地　仙人洞

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
景星縣事情（地方事情大系B第二號）……同	表題	滿洲國地方事情刊行會	康、三、九
景星……	省政一覽（龍江省篇）	國務院情報處	康、二、一二
景星縣一般狀況……同	表題	縣公署	康、二、六
景星縣……	黑龍江省（下）	滿鐵調査課	昭、二、一〇
景星縣管內圖……同	表題	縣公署	康、二、九

甘南縣

概史

今より約二百十餘年の昔、漢人が始めて南方より十戸餘りの家族及び少數の家畜を從へて東甘井子附近に來り、飲料水を求めて地を掘つた處、清水溢れ出で非常に喜び、遂に此地に居を定めて甘井子と命名し、半牧半農の生活を營んでゐた。

民國十五年創立以來甘井子と呼ばれてゐた此地は、時の縣長の命名にて甘南と呼ばれる事になつたのである。

光緒元年の頃、齊々哈爾より興安省海拉爾に至る道路が此地を通じ、現在の甘南縣城の稍北方の地點に設けられた驛遞を二站と稱してゐた。光緒三十三年、驛務行局を甘井子より二站に移し、民國十五年、甘井子の名を甘南と改稱せられ黑龍江省に入り、布西署總署より移管せられた。民國十六年、吉林

永衛官銀號が甘井子一帶の土地を購入し、開墾を計つた。農務會、商務會等設置せられ指導機關となつてより、漸次此の地の開發の曙光を認めた。

滿洲國成立以來、三年間に捗つて大洪水に見舞はれ、一般縣民の經濟的困難は極度に達したが、大同二年十月、甘南縣公署開かれ、布西縣の一部を入れ現在の縣行政區域となり、龍江省に編入されてゐる。

地勢

甘南縣の區域卽ち小興安嶺の東南嫩江に向つて展かれた一帶の土地は嫩江支流の阿倫河及び音河の二小流に沿つてゐる。濕地帶以外の土地は一望の平野であつて、僅かに河川の畔に楊柳が繁茂してゐるのみで、視界千里の大平原に樹木を殆ど見ない。思ふに古より茫々たる草原地帶であつた事を偲ばせる。

縣の物產

農產の主なるものは大豆、穀子、包米、高粱等である。又小麥、大麥、糜子等もあり、何れも、縣內需要を充す外、縣外に輸移出して居る。

縣內畜產の種類甚だ多く家禽も亦多い。其他野生の黃羊子、狗子、狐、狼、鹿、兎等も居る。

林業其他見るべきものなし。

開拓事業

本縣には日本農業開拓團の第八次が二個所に入植してゐる。卽ち、阿倫河、朝陽山がそれである。

都邑甘南村

甘南縣城、縣下第一の都邑である。人口四千五百を越えて居る。市街略正方形をなし、東、西、南、北の城門あり東西、及南北に通ずる大路正しく十字路を爲し、計畫的に正しく建てられて居る。商取引は範圍は廣くないが商家百七十以上を數へ、縣下の田舍より日用品の購入に來て居る。油坊三、燒鍋二戶がある。

此地には天主教會があつて、附屬男女小學校がある。

甘南諸機關村	甘南縣公署	警察署	稅捐局	郵政局
	興農合作社	縣立醫院		

東陽鎮

縣城に次ぐ都邑であつて事變前までは縣城と對立する殷盛を極めてゐたが、大同元年以來の三年間の水害の爲め市街及背後地一帶の農民經濟が疲弊に陷りために衰微してゐる。然し附近の地味肥沃であるため背後地の回復は出來つゝある。

其他

警察署所在地	寶山鎮	東陽鎮	平陽鎮
郵政局所在地	成吉思汗	東陽鎮	平陽鎮

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
甘南縣事情	同 表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、一〇
甘南縣事情(下)	同 表題	同前	康、三、一〇
甘南縣政況概要(滿文)	同 表題	縣公署	康、二、九
甘南縣一般狀況	同 表題	同前	康、三、二

富裕縣

概史

本縣は民國十八年四月設治局が設立される迄は龍江縣に屬し、烏魚爾河南方を富裕鄉(又は附郭段)と稱し北方を寧年鄉と稱してゐた。

烏魚爾河によつて兩分された此の富裕、寧年の兩鄉は自ら其の開墾史を異にしてゐるが、特に富裕鄉

は牧入無き地方として政府が放任主義であつた爲めに治安良好ならず一特別地帯となつてゐた。

富裕鄉の方は前淸時代すでに百數十年前、漢軍旗人又一部にはダホール族が居住し開墾の先驅を爲してゐたが、民國初年政府の移民招墾によつて奉、吉兩省より漢人農業移民來住し五年以後急激に增加した。然し人口稀薄な新開墾地であつた爲め政府は警察、教育等の施設をなさず放任してゐた結果、匪賊の跋扈する處となり、住民は保衞團を作つて防衞してゐたがなか／＼及ばなかつた。民國十三年全鄉の人民治安大會を開催し地方自治行政の施行に達して行つた。

寧年鄉の方は、齊々哈爾―黑河街道の通ずる地方で前淸時代約二百數十年前、雲南より移住したる站人(公文の遞送人)又は吳三桂所屬の將士家族を移したる站人、或はダホール、ソロンの各種族が此地方に移住して來てゐる。彼等は農、牧、漁を業としてゐたが自給自足の狀態であつた。民國五年以後、奉吉兩省地方より農業移民來住し來り、土地の開墾が急に行はれるに至つた。建國後黑龍江省に屬し改革後龍江省に編入されたのである。

地勢

本縣は龍江省の中央部に位し、西は嫩江を以て龍江縣、甘南縣と相對し、南は林甸縣、東は北安省の依安縣、北は克山縣、訥河縣の各縣に接續してゐる。

縣內北部の訥河縣境に丘陵を見る外平坦で山がない。縣を兩分してゐる烏魚爾河は西流し、雅州屯附近より南流して林甸縣に入り九道溝となつて止つて居る。烏魚爾河は縣中腹部を三條となつて橫斷し、之が氾濫の爲め流域一帶は沿岸兩側十五滿里乃至二十滿里は大濕地帶の葦原で其面積實に縣面積の約五分の一を占めて居る。降雨多く烏魚爾河が氾濫すれば此の地帶は一面の湖沼と變じてしまふ狀態である。沿岸地帶は土地肥沃で民國十七年頃迄は約三十ケ村、一萬三千晌の耕地があつたが、氾濫が續いた

爲今は前述の如く草原となつて居る。尚此烏魚爾河は河幅が狹く、非常に曲折の多い河である。嫩江は縣の東北部を南流し甘南縣との境を爲して居る。

縣の物産

縣内一帯茫々たる平原のみ多く、耕地面積尠く從つて農産物の産額は少ない。荒地の開墾を奬勵し漸地の開拓に努力してゐる。大豆、小麥、粟、包米、蕎麥、高粱等が主要作物であるが産額は少ない。烏魚爾河及嫩江沿岸の寧年站屯、大來克、其他の屯にて農民の副業として漁業を營む者がある。商業は小商に過ぎず、小規模な燒鍋、油坊、粉坊(製粉)等の工業を營むものが三、四戸ある。

開拓

本縣内には、第八次日本開拓民が二ケ所に入植してゐる。亞州及び班代がそれで、中和と寧年に、青年義勇隊自警訓練所がある。

都邑富裕村

富裕縣城ではあるが齊北線は五家鎭寧年驛を通過し、而も寧年驛との間、三十二滿里に亘り大濕地帯を爲して居つて、其間一本の修築されたる道路を以つて貫いてゐるが、降雨あれば四、五日間運行不能となる狀態である。戸數僅に五百餘、人口二千八百餘の小都邑にすぎない。

富裕村諸機關

富裕縣公署　警察署　稅捐局分所　興農合作社

郵政局　縣立醫院

寧年

寧年驛のある處は俗に楊家屯と言はれ、清の康熙年間楊姓の兄弟が開墾して以來、次第に村邑を形成したのである。齊北線が通ずるやうになつて、嫩江方面への分岐點となり、近年急激に戸口増加し、料理屋、宿屋等を開業するものがある。此地は交通上の分岐點であるといふにすぎず經濟的にはあまり見るべきものがない。

寧年(興隆鎭)諸機關

稅捐局分所　郵政局　電報局

警察署所在地　福合　興揚鎭

其他

税捐局分所所在地　土爾池哈　碾子山　濟沁河(李三店分所)

委託日本人小學校所在地　班代

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
富裕縣一般情況	同表題	縣公署	康、三、八
富裕縣概況	民政部月刊	民政部	康、二、一
富裕縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、五
富裕縣全圖	同表題	縣公署	康、三、五
富裕縣公報(康德四年十二月)	同表題	同前	康、四、—
富裕縣修道經過及新築道路橋梁計畫	內務資料(二の五)	內務局	康、五、五

概史

林甸縣

當縣は凡三十年前までは一片の荒涼たる地方であつて綏化、海倫、拜泉等に及んでゐた。漢人祁なる者が現在の城東門外に大車店を設けたので此名に因んで大祁家店と稱してゐた。清の宣統年間、奉吉兩省より移り來つた開墾者によつて漸次戸口を增し、祁家店を改めて東集鎭となし安達縣に屬し、民國三年に至つて改めて林甸設置局と爲し、民國六年則ち林甸縣と改めた。滿洲事變後當地が僻荒の地であり交通不便なる爲めに、當時は流言蜚語播及し、城鄕には叛兵土匪相續ぎ、燒殺、掠奪行はれ、其擾ぎは大同元年に及んだ。其間匪勢益々熾んで、縣城の商店等は破産し、生業凋零してしまつた。加ふるに河

水氾濫して大水害を蒙り政務は停頓し非常な慘害に陥つたが、幸に日滿軍の協力により、匪徒次第に殲滅せられ漸く縣力定まり恢復に向つて、王道を謳歌し人民始めて生業に安ずるに至つて居る。

本縣は齊々哈爾の東南、龍江省の南境を爲し濱江省安達縣に接して居る。

地勢

本縣の全境は一つの釜底形を爲し、外邊高く中窪の狀況をなし全境山と名づく可きものはない。西境に少數の崗があるのみ。窪内に小河川あり、僅に西部に烏裕爾河があり、河水は九道溝に入つて河水の出路はない。從つて湖沼を爲して居る。康德元年人工に由つて二百二十餘滿里の順水濠を開成した。此開成河流の外河川らしいものがない。

縣の物産

農産の種類は高粱、粟を第一とし、小麥、大豆を特産とする。其他包米、稗、靑蔴等に産額を見せて居る。又馬、豚其他の畜業も行はれて居る。商工業は事變の餘波により大打撃を受けたが、縣城に大小合して七〇餘の商店を有し、燒鍋、油坊、木工其他の家内工業的のものも多少行はれて居る。

都邑林甸街

街名を大林甸と稱し、齊々哈爾の東南百六十滿里の地點にある。市街は東西南北各約五滿里に亘る廣大なる地域を有してゐるが街は東西南北に通ずる十字街より成つて居る。主要産物としては、小麥、高粱、粟、玉蜀黍、大豆、雜穀等であるが地方農産の額は少く、商業も小商舗があるに過ぎない。燒鍋、油坊、製粉等の小規模工業がある。

林甸街諸機關

林甸縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	興農合作社	中銀支行
協和會	郵政局	電報局	電話局
大興公司	縣立醫院	街公所	

警察署所在地　霍地房子　其他　畢家圍子　福發屯

稅捐局分所所在地　小蒿子

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
林甸縣一般狀況	同表題	縣公署	康、二、一二
林甸縣全圖	同表題	同前	康、三、一
林甸旅商實地報告書	露滿蒙時報（二〇八）	哈爾濱商品陳列館	昭、一二、二
林甸縣政一般狀況	同表題	林甸縣公署	康、三、一二

訥河縣

沿革

此の地はもと東布特哈旗に屬し、康熙三十年索倫總管達呼爾副都統衙總管を置いた。光緒二十年改めて副都統衙門を置き、同三十一年副都統を廢し、同三十二年此の民を丈放して巡防局を設けた。同三十四年訥河廳を奏請し、宣統二年に至つて訥河直隷廳を設け撫民同知を置いた。民國二年廳を廢して縣と改め、龍江道に屬したが、滿洲國建國後は黑龍江省の管轄となり、更に行政區劃が革つて、康德元年十二月一日よりは新設の龍江省に編入された。訥河は一名博爾多ともいふ。

地勢

西北境に興安嶺支脈蟠る外一帶に肥沃地帶を爲し、中央部を訥漠爾河西流し、西南境を呼裕爾河が南流してゐる。

縣の物産

嫩江流域の肥沃なる黑土地帶であつて、總面積に對し、不可耕地は僅に九・九%餘と見られてゐるに

開拓事業

都邑訥河街

訥河街商店街

かゝはらず、既耕地は四六%を有するに過ぎず、五四%餘の未耕地を有してゐる現狀で將來大いに開拓の餘地を有して居る。縣面積亦他縣に比し廣大であるが農産は大豆を主とし拜泉縣に次ぐ縣内第二の産出をみる。小麥、粟、包米、大麥等、特用作物としては、蘇子、麻等が主である。而して三二萬石の穀物を縣外移出してゐる。

鑛産に顏料鑛二箇所あり。硅酸礬土の一種であつて、之を哈爾濱に出して加工し、採色用塗料として市場に給せられて居る。其他粗惡なる褐炭を多少産出するが、謂ふに足らぬ程度のものである。

嫩江流域に鯉、鮒等の淡水魚を産し、本縣内にても年産二八萬斤以上三〇萬斤に上る取引をみせてゐる。

本縣は上述の如き農耕狀態で將來開拓の餘地大いにあり現在學田地方に、第七次、第八次の開拓民が入植して居る。

訥河縣城、舊名を博爾多といふ。市街は新舊二市より成り、新市街は十字街に區劃されて比較的整然としてゐるが舊市街は新市街を隔る東二滿里の地點にあつて唯一條の不規則な街道あるのみである。寧墨線開通以來滿商の外に日商も入り來り、個人としては雜貨屋、料理屋、旅館等を營む者康德六年中九戸に達し、中銀支行、興銀支店、興農合作社等あつて金融機關もあり、滿人商側も糧業、雜貨販賣、菓屋、飲食店、肉類販賣等々各種の商舗、大豆油並に食品製造、燒酒製造、鐵器製造等の工業もあり、滿人中小商工業者六〇〇餘を數へてゐる。取引先は新京、四平街、齊々哈爾等で嫩江、布西等の背後地を控えて居る。市内間にバスの便がある。

訥河縣公署　街公所　警察署　稅捐局

商工公會　區法院　區檢察廳　訥河兼理司法縣公署
郵政局　電報局　電話局　興農合作社
專賣局　中銀支行　興銀支店　大興公司
國際運輸　協和會　日本人小學校　縣立醫院
生活必需品會社配給所　訥河農業學校(省立)

拉哈街

清の康熙年間、露國の南侵に備ふる爲め設けられた昂々溪、璦琿間十一驛傳所の一つとして發達し、且つ嫩江の水運を利用して、訥河より齊々哈爾に到る船着場として繁榮した。一時鐵道の終點となり特産物の集散地として發達したが鐵道が訥河へ通ずるに及び其の勢力は落凋期に入つて居る。街の東南部は稍高く西北に低く中部は平坦である。公共バスの便がないが、道路は東は克山地方、南は齊北線富海驛に、北は大古城漢古河に出る事が出來る。

拉哈街諸機關

郵政局　警察署　稅捐局分局　商工公會
國際運輸　電報局　電話局　大興公司
中銀支行

其他

警察署所在地
訥南鎭　龍河鎭　通南鎭

稅捐局分局所在地
布西分局

郵政局所在地
通南鎭　嘟迷哈　龍河鎭　訥南鎭

委託日本人小學校所在地
北學田　上學田

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
訥河縣農況	農業の滿洲	滿洲農事協會	昭、九、一
訥河及訥河縣概況	賓北、齊北兩沿線の現況	哈爾濱商工會議所	昭、九、八
訥河榷運局銷區概況	鹽政（一の四）	榷運署	康、三、一〇
訥河縣事情	同表題	齊々哈爾日本商工會議所	昭、一一、八
訥河縣	黑龍江省（下）	滿鐵	昭、二、一〇
訥河縣政要覽	同表題	訥河縣公署	康、四、一二
訥河縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
拉哈街事情	同表題	街公所	康、六、一〇

大賚縣

歴史

本縣は蒙古哲里木盟、札賚特旗の一部を占めて居る。同旗は光緒二十八年、支那本部からの移住民の植民地と定められた。此未開地に於ける漢人の植民は意外に速かに行はれ植民開始後四年にして既に此地方に獨立行政機關を設置する必要に迫られ、光緒三十二年大賚廳を創設した。此新設せられた廳長の行政權は、植民に便利な土地が札賚特旗全般に散在して居たので同旗全體に及んだ。民國二年府、州、廳の小行政區分が縣に改革せられた時、大賚廳も亦大賚縣と改められた。近年に於て、嫩江江口より西布特哈に至る間の廣濶なる札賚特旗地の植民は盛に行はれ、同旗內植民激增の結果、南部の一部を大賚縣とし殘餘を泰來縣として創設するに至つた。現在龍江省管內に屬する。

地勢

本縣東部は濱江省郭爾羅斯後旗に、西南部は安廣、鎭東縣に、北部及東北部は泰來縣及、杜爾伯特旗に接してゐる。地勢は概ね平原地帶で、北部が稍丘岡地となつて居る。嫩江江岸より東方は著しく低下

し遂に平坦なる草原となる。

縣の森林は縣の北西部綽爾河に沿うてあるだけで、其他には全くない。又縣の邊境には魚族の豐富な月亮泡が在り又洮兒河は縣の西部邊境に於て同泡に注いで居る。

縣の物産

農業を主とするが主なる農産は高粱、玉蜀黍、及粟等であつて、黄色大豆、小麥及飼料大豆等が次いで居る。縣内の農産は豐富である爲めに縣内消費の剰餘穀物卽ち玉蜀黍、高粱、青豌豆、小麥及大麥、粟等は、水路によつて哈爾濱方面、洮南方面に又陸路によつて扶餘方面及隣接縣に移出して居る。畜産も副業として馬、騾、緬羊、豚其他各種を有して居る。

本縣は北滿淡水漁業の最も盛なる縣であつて魚類は嫩江及附近泡子に於て漁獲せられて居る。主なるものは、鯉、胖頭魚、狗魚、鯰、鮒、扁花魚、白魚、黑魚等である。

都邑大賚街

大賚街は縣の極南隅、嫩江西岸約四粁にある。周圍の地勢は全部平原を爲し、高山峻嶺はない。東境に嫩江があり、毎年大雨の時は江が氾濫し、沿江一帶沼澤と化し交通は遮斷され被害を受ける事が多い。

清光緒二十五年張人吉、蔡陽榮なる二人が、荒地開墾を一般民衆に開放し、二十七年已に部落を爲してゐた。後委員來つて設治し、街基を現在の縣城に置いた。これが大賚街の地である。宣統二年縣治を始められ縣城として今日に至つてゐる。建國後街制成り、康德五年一月街制を布かれたのである。

京白線が通過して以來本街の發展に好影響を與へ、又夏季には北滿江運局の汽船が哈爾濱から來航し水陸共に交通至便になつた。

産業は農業が主であるが、農業は從來の交通不便と、土地は瘠せ滿目荒野で沙地でなければ城地であるといふ狀態で農耕に適せず振はなかつたが、農業指導機關を設立し官民一致努力し興農事業に邁進し

てゐる。高粱、粟、玉蜀黍を始め、小豆、蕎麥、大麥、小麥、其他で、家畜は少ない方であるが鶏の飼育が多く行はれてゐる。

工業は振はず油坊六、燒鍋二、木工業十餘戸、其他は小さい。商業は商戸二百餘戸、糧棧が最も多く織物、雜貨商、魚屋等で水產豐富なため魚屋は大變盛である。

水產は國內有數の產出地であり、本街產業の主要なるものである。嫩江沿岸に盛に產出されるが、種類は、白魚、胖頭魚、鯉魚、鯽魚、狗魚、鮎魚、扁花魚、鰲花魚等であり、大漁業家多く冬季漁撈が最も盛である、新京、四平街、奉天等に凍魚が盛に輸送せられ、扶餘をしのぐ情勢である。輸移入の主なるものは木材、煙草、麥粉、綿布及加工品、石油、金物類及燐寸等である。新京方面より入り來るもの最も多く八割を占めて居る。

住宅は滿人舊式磚土平屋が多く、水質は曹達質を含んで居る。

大賚街諸機關

大賚縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
郵政局	興農合作社	大興公司	中銀支行
國際運輸	專賣局	電報局	電話局
縣立醫院	日本人小學校	街公所	大賚(水產科)國民高等學校(省立)

其　他

警察署所在地	二龍棱口	五棵樹
郵政局所在地	馬連根桑	二龍棱口

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
大賚縣	黒龍江省（上）	滿鐵調査課	昭、二、九
大賚縣城	京白線地方の經濟事情	新京商工會議所	昭、一一、三
大賚縣全圖	同	表題縣公署	康、三、一
大賚街事情	同	表題街公所	康、六、一〇
大賚商業事情	同	表題商工公會	康、七、三

醴泉縣

概史

醴泉はもと圖什業圖旗領に屬し、光緒三十三年、醴泉縣治を設け、民國三年二月突泉縣と改稱し、民國四年六月、新に六家子に瞻楡縣治が設けられた時と同時に縣治を廢し、改めて設治局を設けられた。滿洲建國となり突泉縣と稱してゐたが康德四年、更に醴泉縣と改稱される事になつた。

地勢

興安南省内に嘴角を突き出したる如き形をなし、東方の大部分を洮南縣に小區域瞻楡縣に接して居る。興安嶺の裾邊にあたる爲めに、大體の土地としては高度は東方の縣に比して高い。縣城の周圍は土質比較的肥沃で未開墾地が多い。那金河は縣の稍北部を東西に横貫して居る。

縣の物産

穀類は穀子、高粱、大豆等で、産額は極めて少く家畜も有してゐるが、其數は少い樣である。

都邑醴泉街

當地は洮南の西北二百滿里、圖什業圖王府の北四十滿里に位置し、設治以來屢々馬賊の侵撃を蒙り、殊に宣統二年の掠奪は甚しく住民何れも逃避したためと、蒙地に偏してゐる爲、發達極めて遲々たるものがある。

市街といはんより、部落といふを適當と見らる。本縣城には洮南より國營自動車の便があり、王爺廟

醴泉街諸機關

醴泉間にも開通してゐる。縣の北部は洮南縣の瓦房より本縣の學田地間に丙通長途汽車公司のバスが開通してゐる。

醴泉縣公署	警察署	稅捐局分局	興農合作社
郵政局	電報局	電話局	大興公司
醴泉農業學校(省立)	滿人小學校	縣立醫院	

其他

警察署所在地　六戸　杜爾基

郵政局所在地　六戸　學田地　杜爾基

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
突泉	省政彙覽(龍江省篇)	國務院情報處	康、二、一二
突泉縣(山田久太郎)	滿蒙都邑全誌	日刊支那事情社	大正一五、一〇

安廣縣

概史

何世紀前からか西北方より自然の交通路をなす洮兒河を傳ひ、水草を追ふて現本縣の北部地方に移つて來た蒙古民族の一團があつた。牛羊の放牧と野鳥野獸の捕獲に彼等の生活は豐になり、人口も多くなつた。清朝の中葉に支配者が現れて暫くは樂な生活が續いたが、漢民族の來住が起つてからは彼等に大強敵であつた。光緒三十年、漢民族への土地開放令が出てゝから彼等は退歩の第一歩に置かれた。光緒

三十一年安廣縣設治局が設置され、嘗て科爾沁右翼後旗領內であつた本縣は明瞭に漢民族の支配下に置かれた。

滿洲事變後大同元年十一月參事官、副參事官等の入縣を見たが二年に至るも五、六十より二三百の匪團常に縣下を往來し、水害には見舞はれ、他縣へ殊に治安よき鐵道沿線に移動する者が續出した。

大同二年三月、時の縣長は其筋の委屬により、縣下並に近縣の匪團を巧に懷柔し二千數百を率ひて熱河討伐に出かけたゝめ縣下の治安が維持されて來た。

本縣は奉天省管下にあつたが、康德元年十二月の改省によつて隣縣洮遼七縣と共に、龍江省管轄に變更せられ今日に至つて居る。

地勢

本縣東は大賚縣、北及西北は鎭東、白城、西及西南は洮南及開通縣、南は乾安縣に隣して居る。

全縣一望際涯ない大曠野、陸の海とは正に本縣の事であらう。四、五米の波浪にも似たる起伏はあるが、眼にはつかないなだらかさである。

西の方大興安嶺の水を集めた洮兒河が、西北部の白城、鎭東兩縣境を東流して嫩江に注ぐのみで、他に河川らしいものはない。從つて一度夏季大降雨あれば忽ち全縣下が水に浸されてしまふ。日照りが相當續いても濕地や尻無川が殘される事になる。

縣の物產

全縣民の九九%までが農民である。地質としては大體アルカリ性分が強く、西部及西南部に多い樣で、これは農業に適してゐないが、東部東北部は比較的良好である。主要農作物は、大豆、高粱、粟、玉蜀黍、小麥等で多少他にも移出して居る。從來は開通、洮南、白城子、大賚等に出されてゐたが、京白線が開通して龍泉鎭の方に集められるものゝ樣である。

牧畜は本縣元來の生業ではあるが事變以來匪賊の掠奪を受け家畜が非常に減少してゐる。

林産の見るべきものはない。鑛産はないが、ソーダと、土鹽が多額に産してゐる。

都邑平安鎭

大體縣内の中央部に位置してゐる。光緒三十一年の置縣當初の當地の人口は六、七十名の小屯であつたが爾來人口增加し、民國五年水害にあひ、縣城を安廣の地點に移した。略々正方形の城壁に圍まれてゐる。事變前は人口三千五、六百人に達してゐた。事變後の動亂時代には縣下農民は比較的安全な安廣に集る者が多く、現在は四千を優に超えてゐるが、農村都市發展に不可缺の經濟的背景及交通の便なく、發展性は鈍い。商業も活況を見ないが、京白線が縣の北部を東西に貫通した爲めに、その主要驛龍泉街(安廣)に支店を開いてゐるものが多い。

平安鎭諸機關

警　察　署　　郵　政　局　　電　報　局

龍泉街
(安　廣)

安廣の東北方約五十滿里、大賚縣境寄りに在る。置縣前より漢民族の居住してゐた最も古い部落であると共に、縣下第一の街である。

附近に比較的豐饒な農耕地を擁した事と、河川の要地大賚縣城に近かつた事が、從前此處を發展させた原因であるが京白線の開通により此地が沿線となつた爲將來、縣内物資集散の中心點となる可く、大いに發展の見込みがある。京白線の開通と共に安廣、大賚、洮南、白城子等の商店が支店を設け、商況活氣を呈し、人口も最も多く集中してゐる。

龍泉なる名は本鎭の東門外に周圍約五滿里の黑い水溜りがあつて盛夏の旱天にも干かず、水中一匹の魚類も棲息せず、人呼んで龍泉といひ此部落を龍泉鎭といつてゐる。街制が布かれて現在龍泉街。

龍泉街諸機關

安廣縣公署　　警　察　署　　稅捐局分局　　大　興　公　司

國際運輸　郵政局　電報局　興農合作社
縣立醫院　街公所　安廣農業學校(省立)

燒鍋鎭

安廣の北方約七十滿里、京白線の北方にある。龍泉街と殆ど同じ古さと經濟的條件に惠まれて出來た部落で、光緒三十一年此地の西方陸界及其附近に居住してゐる蒙古人を顧客として、一萬元の大資本を投じて燒鍋が造られ、今日迄持續せられて居る。之により此地を燒鍋鎭と稱したのである。をしい事に鐵道沿線でないから、龍泉街の繁榮に及ぶわけには行かないであらう。

其他

警察署所在地　舍力
郵政局所在地　燒鍋店　舍力

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
安廣縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、三
安廣縣城	京白線地方の經濟事情	新京商工會議所	昭、一一、三
安廣縣全圖	同表題	縣公署	康、三、五

鎭東縣

概史

もと科爾沁右翼後旗蘇鄂公の遊牧地で、光緒三十四年六月はじめて開放せられた。宣統元年縣制を布き、縣衙門を東叉干撓(鎭東)に新設して洮南府に屬せしめたが、民國二年二月府制は廢せられて北路道觀察使に隷した。同三年六月從來の北路道は洮昌道となり、觀察使は道尹と改められてその管轄とな

つた。滿洲國建國後は奉天省の管轄に屬したが、康德元年十二月よりは新設の龍江省に編入された。城は民國三年の建設に係り、方二滿里の土牆を周圍に繞らしてゐる。

地勢

東は洮兒河を以て安廣縣に境し、北は大賚、西は興安省、南は白城縣に接してゐる。境域內殆ど山無く、只西北稍高く、東南方に低く、南界の洮兒河は索倫より來り、蜿蜒として東南に流れ嫩江に入る。

縣の物産

農産が主である事は勿論である。大豆、高粱、穀子(粟)、包米、(玉蜀黍)、黍子等であり、多少の移出をすら見て居る。

開拓事業

本縣には集團開拓民はまだ入植してゐないが、北大崗に青年義勇隊甲種小訓練所が設けられて居る。

都邑鎮東村

鎮東は洮南より約七十一粁。此地が開放せられたのは、光緒三十四年であつて、以來縣治が布かれ、衙門も設置せられて居たのであるが、久しく移民も增加せず、極めて寂寥たる小邑に過ぎなかつた。其發達は主として鐵道開通後で、人口も漸次增加し、建國始め頃は附近人口三萬四千以上を數へられてゐた。

市街は方二滿里の土塀を繞らし、西門から東門に通ずる一條の大通りのみが稍市街の趣を呈してゐる。

裏通りには未だ空地を見られるが、將來農産物の集散地として相當の期待がかけられてゐる。現在では商工業共小資本のもの、燒鍋、油坊、雜貨、藥屋等を營んでゐるが、農村の不振は、此地商工業の不況を來してゐる。

鎮東諸機關

鎮東縣公署　警察署　稅捐局分局　郵政局
興農合作社　電報局　電話局　縣立醫院

東屏

鎭東縣の西北隅にあり、科爾沁右翼前旗と境を接してゐる。洮南を去る九七・五粁、舊名を公和勒といひ、鐵道開通前には匪賊の出沒甚しい部落であつた。附近の地層には曹達の含有多く、地味も從つて不良であるが、地理的關係上當地に移動する物資は相當の數量を示してゐる。

東屏諸機關

稅捐局分所　警察署　郵政局　電報局
電話局　國際運輸（慶餘にあり）

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
鎭東（鐵路總局）	四平街齊々哈爾哈爾濱間鐵路案內	鐵路總局	康、元、四
縣政	民政部旬刊	民政部	大同二、六、一〇
鎭東縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
鎭東縣誌	同表題	鎭東縣公署	康、—　—
鎭東縣一般狀況	同表題	同前	康、—　—

概史

開通縣

本縣は元蒙古の哲里木盟、札薩克圖王旗の一部に屬してゐたものである。遠い沿革はおいて、淸代光緒二十九年、盛京將軍は、當時露西亞が南下政策の爲め、盛に蒙古及北滿方面に侵入するので、此の對策として移民政策をとることにした。即ち札旗所屬の土地を開墾し、產業を開發する傍ら植民を行ひ、同時に之に依つて、邊防を有利にし、露西亞の南下に備へやうとしたのである。翌三十年、土地開發並に邊防に關する諸官制を完成し、直ちに實行に移した。

これによると該地方を一府、二縣に分ち、其所管を分擔して地方事務に當らしめる事となり、洮南府(今の洮南縣)靖安縣(今の白城縣)開通縣の三行政區に區劃したのである。

民國二年に縣境に關して管轄爭ひが起つた時に、興隆鎭以北を洮南縣に、又千他拉(アイカンタラ)及び愛其挑(アイチョウ)の全區を開通縣に編入して現在に至つて居る。

滿洲建國にあたり、治安の維持に腐心した事は他縣と同樣である。時の洮遼地區に於ては張海鵬將軍の賢明且つ適切なる考察と行動とによつて辛うじて大なる戰禍を蒙る事なく王道治下に入る事が出來た。康德元年十二月の省制改革により新設の龍江省の中に編入せられて現今に至つてゐる。

地勢

本縣東は吉林省の乾安縣、長嶺縣に接し、南は雙遼縣に、東北は安廣縣、北は洮南縣、西は瞻楡縣に隣りしてゐる洮遼地區に於ける一小縣である。

地勢は一望千里の砂質草原地帶で、木もなく、一流の河、一つの山嶽もない大曠野である。

縣の物產

地勢的關係から縣内の產業は農、牧に限られて居る。鑛、林、水產等皆無である。

農產は、大豆を第一とし、高粱、粟、包米、糜子等。又蒙邊地方の特產物である甘草は其產額多く、二十萬斤といはれる。北方乾安、瞻楡各縣の穀類及び、甘草は開通に集中せられて、開通の產物として各地に移出されて居る。

牧畜は、大部分は、牛、馬、豚、羊である。滿洲事變にて匪賊の掠奪に遭ひ、大部奪はれた。又農業の減收のため家畜を賣却し、或は自ら食して產額は事變前の十分の一以下に減少した。

都邑開通街

開通は昔時「七井子」と稱され、蒙古民族が遊牧するに當つて滯在、或は家畜の賣買、又は物々交換をする際の場所として井戸があつた。七井子とは第七番目の井戸のある所といふ意味で、砂質土壤草原地

帶では、井戸と樹木は遊牧民族の憧れの的であつた。現今の開通は當時小部落で此所に井戸があり、興安嶺以東第七番目にあたつてゐたので七井子と呼んでゐた。現在其所在が不明である。

市街は二十町四方の土城によつてとり圍まれた開通縣の縣城であり、平齊線開通以來は一躍、背後地の經濟の中心となり、物資は馬車によつて長途開通に運ばれ、此所より鐵路によつて南方に移出されるに至つてゐる。特產及び畜產の取引盛で、商工業の中心である。商業を營む日人はわづか一戸であるが、滿商は四〇三戸を有して居り、糧穀取引が多く、綿織、綿絲、人造絲、日用品等が奉天經由平齊線によつて入り來る。糧業は十萬圓以下五千圓位の資本で雜貨は二萬圓以下五千圓位の資本である。中銀支行、興農合作社等あり商業金融も圓滑に行はれて居る。

バスの便は乾安に通じ、更に乾安より前郭旗に至る。西方は瞻楡より太平川に通じてゐる、何れも國營バス。

開通街諸機關

開通縣公署　警察署　稅捐局　商工公會
興農合作社　中銀支行　大興公司(一二)　國際運輸
郵政局　電報局　電話局　縣立醫院
日本人小學校　街公所

邊昭諸機關

警察署　稅捐局分局　郵政局　電報局

其他

警察署所在地

鴻興

郵政局所在地

四井子　鴻興鎭　八面山昭　四海窩堡

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
開通縣事情	滿洲國地方事情（概說篇）	大同學院	康、元、四
開通	四平街、齊々哈爾哈爾濱間鐵路案內	鐵路總局	康、元、四
縣政	民政部半月刊日譯	民政部	康、元、四、一五
開通縣地方事情概略	同表題	縣公署	康、二、七
開通縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	大同三、一一
開通縣地圖	同表題	縣公署	康、三、一
開通商業事情	同表題	商工公會	康、七、二

瞻榆縣

概史

此地はもと蒙古圖什業圖旗の遊牧地であつて久しく荒蕪に委せられてゐたが、光緒三十二年開放し、宣統元年設置せられた醴泉縣の管下に入り、民國四年同縣の南半を割き、新たに瞻榆縣を新設し、六家子なる地に縣衙を置いた。現在滿洲國成立後、新制の龍江省に編入されてゐる。

地勢

開通縣の西南に位し、西は興安南省に接してゐる。縣内殆ど平坦地勢上、特記すべき事なし。

縣の物産

農産としては高粱、其他の穀物、甘草、瓜子、麻類、藥草等の特産がある。

都邑瞻榆街

民國四年瞻榆縣が新設せられた時、六家子なる地に縣衙を置いたが、同五年宗匪の亂により、縣衙を燒失したゝめ開化鎭に移す事にした。即ち現在の瞻榆である。市況振はず、燒鍋、雜貨、當舖、茶舖、旅店等が數戸あるに過ぎない。開通より國營バスの便あり更に東方平齊線の太平鎭まで通じてゐる。

瞻榆街商業概要

瞻榆縣公署　警察署　稅捐局分局　郵政局

電報局	電話局	興農合作社	縣立醫院	街公所

其他

警察署所在地　感化　王家店

郵政局所在地　六家子　同徳公司

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
瞻楡	省政彙覽（龍江省篇）	國務院情報處	康、二、一二
瞻楡縣（山田久太郎）	滿蒙都邑全誌	日刊支那事情社	大正一五、一〇

洮南縣

概史

此の地はもと札薩克圖、蘇鄂公、圖什業圖等の蒙古旗屬の遊牧地で、今より二十數年前に於ては茫漠たる荒撫の蒙古村落に過ぎなかつた。光緒初年頃より漸次開墾され同十七年關外旗人を招致して植民の開拓を圖り、同二十九年清朝政府と札薩克圖郡王（鎭國公）との協議の結果此の地の開放が行はれた。同三十一年洮南府が置かれ、更に荒務局を設けた。民國二年に洮南縣となり、滿洲國建國直後奉天省に屬したが康德元年十二月より新行政區劃によつて龍江省の管轄となつた。洮南は別名を雙流鎭といふ。

地勢

東は安廣、西は醴泉、北は洮兒河を以て白城縣に境し、南は開通縣に接してゐる。縣内東南部一帶は概して平坦であるが西北部一帶は興安嶺支脈連亙せる故に山岳は多少あるが何れも高峻ではなく森林地帶は皆無である。

縣の物産

高粱、大豆、玉蜀黍を主とし、青麻、煙草等の特用農作がある。馬、騾、羊、豚等の畜産あり、魚類豐富、河川流域の住民は副業として漁獲して居る。地場消費が多いが冬期凍魚として、開原、東豐、西豐等に賣出して居る。其他の産業あまり見るべきものがない。

都邑洮南街

往時此地は「サチガイモト」と呼ばれ、蒙語にて「サチガイ」とは鵲「モト」は木の謂であつて鵲の木を意味する。此地が未だ荒寥たる平原時代に一基の楡樹があり、昔は旅人の目指しとなり、夜は鵲の塒となつたものである。光緒初年頃より開墾せられ、三十一年洮南府を新設し、更に荒務局が設けられた。民國二年縣となつてより政治、商工業の中心となつた。市街は周圍五滿里の土壁を以つて繞らされ、東西南北の四門を有し、街は南北三條、東西二條の大街交叉し、共に樞要の部分である。

金融機關も、中銀支行を始め、大興公司、金融合作社、其他整備し附近各縣の金融中樞地である。獸皮、獸毛、製革、靴、鞍等の業行はれ、附近農産高粱、雜穀等が出廻る、商況も資本金五千圓以上のもの四十軒以上の商店あり、日滿各種機關があつて消費者がかなりあるために活潑であつて惠まれて居る。

洮南、醴泉間及、洮南、王爺廟間に國營バスがある。

洮南街諸機關

洮南縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
洮南地方法院	區法院	洮南地方檢察廳	區檢察廳
省立洮南農事試驗場	郵政局	電報局	電話局
中銀支行	興農合作社	大興公司(二)	國際運輸
協和會	專賣局	監獄	電業出張所

龍……36
江
省

其他	洮南(農科)國民高等學校(省立)　洮南女子國民高等學校(省立) 滿人小學校　日本人小學校　縣立醫院
警察署所在地	黑水　大通　瓦房(大興公司もあり)　永安
郵政局所在地	野馬兎　瓦房鎭　那金河　馬鞍村

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
洮南事情(大同學院)	滿洲地方事情概況篇	大同學院	康、元、四
洮南地方最近經濟事情(外務省)	海外經濟事情	外務省通商局	昭、九、三、五
洮南(哈爾濱商品陳列館)	露滿蒙時報	哈爾濱商品陳列館	昭、九、九
洮南に於ける地價及農具價及耕役用畜價格調査表	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、八、七
洮南「高麗城址」の遺物(小村俊夫)	滿蒙	滿洲文化協會	昭、六、六 昭、六、七
洮南附近の古城址と遼の泰明(村田治郎)	滿蒙	滿洲文化協會	昭、四、五
洮南縣全圖	同表題	縣公署	康、二、一〇
洮南縣施政之一般	內務資料月刊(二の二)	內務局	康、五、二
改訂洮南縣事情	同表題	大同學院	康、二、三

概史

白城縣

白城子は一名靖安と稱す。此の地方は科爾沁右翼前旗の札薩克多羅札薩克圖郡王の遊牧地であつて、光緒三十年六月縣治新設の奏准を得て靖縣と名づけ洮南府に屬せしめ、同三十三年白城子に縣城を修築した。民國二年二月府制廢止と共に北路道の管轄となつたが、江西省の同名の縣と重複を避けるため同

三年二月洮安縣と改められた。
滿洲國建國後は奉天省に屬してゐたが康德元年の省制改革によつて同年十二月一日より洮南縣と同じく龍江省の管轄に入つた。康德五年縣名を白城縣と改稱せられる事になつた。

地勢

東は鎭東、西北は興安省に接し、南は洮兒河を以て洮南縣に境する。一般に平坦であるが西北部は興安嶺支脈があつて多少の山岳を見る。

縣の物産

農業地としては割に豐沃な地方であるが、水害、匪害等で農民疲弊し、耕作資金が十分でない爲め、耕作地もそのまゝの狀態を續けねばならぬ處があつた。しかし此附近はアルカリ地帶の樣に思はれるが、處々豐沃な土地があり、西部地方では最もよく耕されて居る。

農產物としては、粟、大豆、高粱が最も多く、玉蜀黍は案外少ない。そして大豆、高粱、粟等は、縣外に大半を移出して居る。此縣は隔年に施肥をして耕作する爲め、他縣に比し、作付面積の割に、生產高が多いわけである。

家畜の數は豚が最も多いが、馬、驢、騾等で、牛羊の數は割に少い。

其他の產業は見るべきものが少い。

開拓事業

白城子に鐵道自警村が一ケ所ある。

都邑白城子街

此地は平齊線、京白線の交叉點に位し、交通の要衝を占めて居る。卽ち、東は大賚、新京方面に通じ、西は王爺廟より索倫、ハロンアルシャン方面の蒙古に入る門戶をなして居る。

商況に就てみるに資本金五千圓以上を有する商工業者數は燒鍋、油坊、糧棧、吳服商等である。

人口少く需要販路狹少であつて、其の營業組織も極めて小さく商業營業者の大部分は幼稚なる小商人

で、營業成績極めて不振を來して居る。且當市は隣接區域に洮南を有する關係上當市の商業市場の地位は洮南の存在に依り其の價値を半減され居る現況である。日系商一五戸、滿系一一七戸あり、飲食店、綿系布店、糧穀店が多い。

白城子街諸機關

白城縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	興農合作社
中銀支行	大興公司(二)	糧穀會社出張所	國際運輸
協和會	街公所	電報局	電話局
縣立醫院	白城(農科)國民高等學校(省立)	白城女子國民高等學校(省立)	滿人小學校
日本人小學校	青年學校	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所

其他

警察署所在地

葦子房	哈爾戶基	五棵樹	白廟子

稅捐局分所所在地

黃家窩堡

索格營子(白廟子分所)

郵政局所在地

三十戸　索格營子

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
洮安縣事情(大同學院)	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
白城子(鐵路總局)	四平街齊々哈爾哈爾濱間鐵路案內	鐵路總局	康、元、四
洮索鐵路沿線都邑案內(同前)	同前	同前	同

概史

洮安縣城……京白線地方の經濟事情　新京商工會議所　昭、一一、三
洮安（白城子）……省政彙覽（龍江省篇）　國務院情報處　康、二、一二
白城子商業事情……同　表題　商工公會　康、七、二

杜爾伯特旗

杜爾伯特旗は内蒙哲里木盟に屬する蒙地であつて、現在の境域は開放前の約二倍半以上はあつたものの様である。ところが清朝の蒙地對策、及び露人の勢力範圍を防止せんとする政策に基き、人煙稀なる本地方にも漢人の移民を招來した。光緒三十年頃より民國に至る間、開放開墾せられ縣の設置を見たるもの實に三縣、卽ち、安達、泰康、林甸がそれであつた。建國後康德七年まで泰康縣と復雜な境を爲してゐたが、康德七年五月より泰康縣を廢し、泰康縣の全面積を杜爾伯特旗に編入した。

滿洲建國後、龍江省中の一旗として、蒙地の政治を受けない旗として現存して居る。旗は從來一種の王國を爲し、完全に自治を行つてゐたものであるが、大同元年旗制を布く事となつた。卽ち「旗は法人とし、國の監督を承け、法令の範圍内に於て其の公共事務及法令により旗に屬する事務を處理す」と規定されて居る。然し乍ら、滿洲帝國となつても、法令關係とは別に、實際上は從前通り自治領として統治してゐる。卽ち國家に於て、土地稅を負擔する等の事もなく、對旗外的には旗主の領土としての色彩今尙濃厚である。

泰康の方は淸の光緒三十年蒙地を開放せられ宣統三年武興設治局を設け、民國元年以來屯墾局に度々の變化あつて民國十六年五月泰康設治局を設け、設治員は縣城に設治した。隣縣、安達、林甸地方に鐵道敷設せられて以來農民來集する者日に多くなつて來た。これが事變以前の概史である。事變後土匪此

機に乘じて。擾亂を企て。農商之がために不安を來したが、日滿兩軍及本縣警備隊自衛團協力したため一時治安維持せられたが、數月ならずして安達方面の匪賊數千襲來到る處掠奪せられ、農民の損失莫大に上つた。現今全縣常態に復し一切の政務の進行を爲す事が出來るに至つた。大同元年三月建國にあたり設治員景明、本縣に任ぜられ、親ら被害各處に赴いて宣撫工作を施し、自衞團、區村制の改革を爲した。大同二年縣公署とし、縣長、參事官任命せられた。康德元年十一月龍江省に編入。更に、康德三年一月北滿特別區制廢止せられて縣內に編入したが前述の如く、康德七年五月杜爾伯特旗に合併されたのである。

地勢

東は、安達、肇州兩縣、西部は嫩江流域、江を隔てゝ泰來と相望む。南は郭爾羅斯後旗、大賚、北は龍江、林甸に境す。本旗の地勢は中央部地方に於て僅に沙丘の起伏するのがある外、全域概して平坦の曠野を形成し、旗內處々に、低濕地がある。例年江水氾濫し、冬季の結氷中でなければ、交通する事の出來ない部分がある。西境の嫩江は泰來、大賚兩縣との境を爲して南流する。

旗內至る處大小の湖水、沼澤を有してゐる。淡水湖の主なるもの五箇あり、魚族が棲息してゐる。此外鹹泡と稱するものがあり、所謂天然曹達產出地である。而して主なる鹹泡の數が十六箇處ある。

旗の物產

一般農業に從事してゐる者が多いが、旗地に對して土地私有權を認められず、賣買抵當權設定等の處分權能を有してゐない、單なる使用、收益權を認められるのみである。地主は蒙古人で、蒙古人に其特權はあるが、土地に對する私有權は極めて薄弱で、旗王の所有と認むべきである。

粟、高粱、稗子、大豆等を出し、麻子、芝麻等も出してゐるが、產額は少ない。畜類も羊を筆頭とし牛、馬等を有するが頭數は少ない。羊毛、牛皮、羊皮を出す。

部品 泰康村

鹽が旗内の木倫泡、烏什吐泡、布口里泡、の三泡より産出するが生活上貴重なるもので、旗外に賣出す事を禁じてゐる。

漁業を爲すもの、蒙古人三、漢人十二、其他農民の副業に漁獲するのであるが、漁場三十一箇所を有し、多くの工人を使用してゐる。魚種は胖頭魚、鯽、鯉、白魚、草根魚、其他の雜魚等で、年産多き時は十七、八萬斤、少くて六、七萬斤を漁獲し、泰來、小蒿子驛（泰康）に搬出し、南は四平街、奉天方面、北は齊々哈爾、克山方面に出す。漁業は當地方民の重要なる産業である。

元泰康縣の方に於ては農産は大豆、其他の豆類、小麥、玉蜀黍、煙草、麻類、馬鈴薯其他の蔬菜類で、大豆、小麥の如きは縣外移出を行つてゐる。家畜は馬、牛、羊、豚等あるが農耕用に過ぎない。

嫩江が西部を貫流してゐる爲めに、同江の水産豐富、鯉魚、鯰、胖頭魚、鯽魚等を主として、スッポン等は、非常に多く棲息して居る。公署に於ては、漁民が年中捕獲して、漁場を荒す事を恐れて魚類の産卵期には捕獲を禁止してゐる。

此地は北鐵時代の小蒿子站で、濱州線の一驛を爲して居る。鐵道路線を挾んで、略長方形をなし街道廣く、商業殷盛交通便利である。民國十六年から十八年に至る間が、商業の最盛時で每日臨接各縣から特産の雲集著しく絶えざる狀態であつた。

當時は商家二百戶を有して市況繁盛してゐた。齊北鐵路完成後北方各縣の特産出廻に經路の變更を生じて以來商業凋落し、又、事變による匪賊等の爲め穫弊したが建國後幣制統一せられ、民心安穩となり商業漸次恢復して居る。

康德元年泰康の周圍に壕を繞り、四門を設け防衞を固くした。現在商戶八十餘戶人口も四千になつて

居る。

泰康村（小蒿子）諸機關

警察署　郵政局　區法院　區察察廳
國際運輸　電報局　電話局　興農合作社
旗立醫院

都邑巴彥查干

本旗王府である。王府は從前多耐站の東北約九十滿里の地點、納赫爾湖の南畔にあつたが、同地方の牧草發育良好ならず、多耐站の東北二十滿里にあたる多克爾坡に移牧し、再び多耐站の東方約六十滿里の地に移つたものが現在の王府であつて、周圍は一望際涯を見ない蕭條の曠野中に、約二町ばかり方形の煉瓦壁を以て圍まれ、內に數棟の瓦房がある。

巴彥查干諸機關

杜爾伯特旗公署　警察署　郵政局
其他

警察署所在地

他拉哈

郵政局所在地

多耐站　塔拉哈

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
泰康縣一般狀況	同表題	縣公署	康、三、六
杜爾伯特旗事情（森山正）	民政部月刊	民政部	康、二、四
杜爾伯特部	蒙古地誌（下）	富山房	大正八、一二
旗行政組織	省政彙覽（龍江省篇）	國務院情報處	康、二、一二

伊克明安旗

概史

本旗の元祖は、元の太祖の臣、札巴甘黒爾根であつて、額魯特種族である。清の討征があつた時に、北方にて嚮導の功を爲したるため、輔國公に封ぜられ、乾隆二十二年一族十二戸を從へ烏里雅蘇台管内より、當地の富裕爾河、通肯河に跨る水草豐美の地に移住し、俸銀二百兩の支給を受け、世襲輔國公を傳へてゐたが、光緒三十三年、南方漢族移住の爲めに土地開放を爲し、其開放地内に拜泉縣治を見るに至つた。現在は更に依安縣治をも見てゐる。滿洲建國に當り、杜爾伯特旗と同樣に旗制を布かれる事になつて、旗は法人とし、國の監督を承ける事に制定されてゐる。現在旗の面積は極めて狹く、北克線の南方烏裕爾河の流域に南は依安縣を境として長方形に殘つて居り、龍江省に編入されてゐる。

大泉諸機關

伊克明安旗公署　警察署　郵政局　興農合作社

旗立醫院

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
旗行政組織	省政彙覽（龍江省篇）	國務院情報處	康、二、一二

北安省

克山縣

概史

本縣は清末に開放せられた地である。民國三年に克山に克山設治局を設け、同四年その西方現在の地に移轉すると共に克山縣と改まつた。滿洲國となつてからは初め黑龍江省に屬し、其の後行政區劃が革つて（康德元年十二月）新設の龍江省に編入されてゐたが、更に康德六年六月新設の北安省に編入せられた。

地勢

縣の東境克東縣と境する地域は烏雨爾河の流があり、又縣北端の一部は訥爾河の流れに沿ふ。之等兩河共夏期は小舟の往來、山地方面よりの流筏があつて河川に乏しい北滿地方としては幾分利便な地位にあり、地味肥沃北滿の穀倉地帶である。

縣の物産

克山縣は北滿の肥沃なる地帶中に於ても最も肥沃なる土質黑土帶であつて農作物よく繁茂し收穫も多く、國立克山農事試驗場は北滿農業の中心機關である。大豆、穀子、包米、大麥、小麥等を始め煙草、線麻、青麻等の特用農産、又馬鈴薯、蔬菜類等の收穫が豐富である。

家畜又多く、馬、牛、騾、豚等を主とし、家禽の飼育も盛に行はれる。

林地は民國四年立縣せられて以來人口增加し、木材の需用多く數年ならずして伐採しつくして現在は林地の見るべきものなく、柳、楡等多少あるに過ぎない。

礦産は殆どない、泰安鎭の近くでかつて日本人が調査したが、炭質不良で停止した。

又縣城の南の烏魚爾河には魚類豐富で、鯽魚、鯉魚、黑魚、鮭頭魚、其他の漁獲があるが、地場消費で他縣に賣出す程はない。

開拓事業

泰安鎭に鐵道自警村がある。

都邑克山街

克山は三站とも云はれ、克山縣公署の所在地、一八九九年開放せられた開墾移住地で四十年近くの經過を見たるに過ぎず比較的近代に屬して居る。街路割合に整然としてゐるが塵埃多く春夏の頃殊に甚しい蒙古人の放牧地であつた處に漢人の移住を見たので蒙古人は河向ふに移つて行つてしまつてゐる。附近及背後地は地味肥沃。

農産に適し、殊に馬鈴薯の優良なるものを出す、馬鈴薯の澱粉より紛條を製する事も爲されて居る。縣内の農産物は農民自ら克山又は泰安に於て賣放ち、生地加工綿布、雜貨、食料品、其他の必需品を調達してゐるから、特産物相場の騰落は直接市況に甚大なる影響を與へる。

國立克山農事試驗場

滿洲建國當初より農業立國の精神に基き、國内に於ける農産物の改良增殖に必要なる試驗及調査研究を行つて來たのであるが、當試驗場は北滿黑土帶地方に於ける機械耕作及び、之が經濟試驗に重點を置くと共に、哈爾濱農事試驗場と密接なる連繫を保ちつゝ、主要作物の麥類、大豆の栽培試驗を主としてゐる。然し此二種のみに限らず、麻、粟、蔬菜、牧草等の研究及び、農業機械、土地改良、農業經營等凡ゆる方面の研究が行はれて居る。本場は康德元年四月現地に創立を見、康德二年に至り、全面積百餘陌を試驗用地として現在驛の近くに設けられて居る。

克山街諸機關

克山縣公署	街公所	警察署	稅捐局
地方法院	區法院	地方檢察廳	區檢察廳
監獄	國立克山農事試驗場	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	中銀支行	商工公會

興銀支店　大興公司(二)　國際運輸　協和會
專賣局　縣立醫院　克山(農科)國民高等學校(省立)
克山女子國民高等學校(省立)　滿人小學校　日本人小學校
克山電氣股份有限公司

泰安街

泰安街は克山縣城につぐ本縣第二の都邑で最近では活況を呈して居る。市街は克山と同樣略正方形を爲し、東西南北に門があり、南北大街と、東西大街が貫いて居る、齊北線の主要驛で、商戶も三〇〇近くあり本街への移入品は縣城と同じく食鹽、メリケン粉、綿糸布、麻袋、食料品等で、農產物の大豆、小豆、大麥、小麥、粟等の取引が行はれる。

依安及拜泉にバスの便がある。

泰安街諸機關

警察署　稅捐局分局　郵政局　商工公會
中銀支行　大興公司(二)　國際運輸　電報局
電話局　日本人小學校

其他

警察署所在地　北興鎭　西成鎭　通寛鎭　莽鼎宮
稅捐局分局所在地　北興鎭
郵政局所在地　西城鎭　北興鎭　莽鼎鎭　古城鎭
通寛鎭　富海站

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
克山縣事情（大同學院）	滿洲國地方事情（概說篇）	大同學院	康、元、四
克山縣農業事情（村越信夫）	農業の滿洲	滿洲農事協會	昭、九、六
克山及克山縣概況	賓北齊北兩沿線現況	哈爾濱日本商工會議所	昭、九、八
克山縣所屬水道調査表	黑龍江省公署公報	省公署	大同二、一
克山縣道路調査表	黑龍江省公署公報	同前	同
克山に於ける自動車營業者（交通評論社）	朝鮮及滿洲陸運總覽	交通評論社	昭、八、一
克山縣一般狀況	同　表題	縣公署	康、二、一二
克山縣全境圖	同　表題	縣公署	康、三、
克山地方農家經濟	同　表題	産業部	康、四、一
克山附近に於ける主要物資に就て	經理之友（二四）	軍需學校	康、五、三
北滿の小麥と拜泉、克山地方の農業	齊々哈爾經濟時報	齊々哈爾商工會議所	昭、一二、一

概史

明水縣

明水は原名を三百三といふ、齊々哈爾から三百三十里あるからといふ事である。縣城東南二十餘滿里の地點に泉があり、明水泉子といふ。民國十三年縣を設くるに當つて明水と名づけられたと。

明水縣はもと綏北通肯副都統所屬の地であつたが清の光緒三十二年、青拜同治設置せられ、本縣の全境は卽ち青拜兩縣の分轄する處で南部は靑岡に北は拜泉に屬してゐた。其後土地を開放し移民を招來した爲めに日增に盛になつて來た。民國十二年黑龍江省政府に申請して明水縣設治局を設け青拜兩縣の地を割きて縣の境域とした。民國十八年改めて新設の府と爲し、大同元年縣公署となす。康德元年省制改革により、龍江省の管轄となり、更に康德六年六月北安省に編入されてゐる。

地勢

全縣略長方形を爲し、北は拜泉、依安、南は青岡に、東は海倫に、西北部は林甸縣に接して居り、境内崇山峻嶺なく僅に、丘陵起伏し、東部に拗拉河がある。拜泉の東南隅に源を發し、本縣に流入、東流して通肯河に入る。地質の大部分は、黑色腐蝕土で、永年の雜草腐朽し、壤土に混合したものである。拗拉河及通肯河兩岸に僅かな沖積層の土壤があり西部には鹽分を含んだ地方がある。夏秋の頃、雨量過度の時は毎年、氾濫の處があり、大同元年の水害は甚しかつた。

縣の物産

農を以つて主業とする。大豆、穀子、包米、小麥、大麥、高粱等更に、蘇子、麻子、線麻等の麻類、馬鈴薯等が、生産せられ、産額も多い。

森林なく林業は今のところ見られない。

馬、牛、豚、騾等の畜産あり、農家の耕作用としてゐる。

礦物は縣内に極少で土人が染色の材料に用ひてゐるものが少々あるのみ。

都邑明水街

明水縣設治局が民國十二年に設置せられて以來、縣行政の中心となり、當時より繁盛に赴いてゐたが事變に際し、縣城は陥れられ被害甚しく、近年治安回復してより漸次民心安穩となり、諸機關が整つて來た。現在商舖百五十餘戸を數へ人口一萬に達せんとし縣城内繁榮に向つて居る。

安達及青岡方面よりバスの便があり、北方拜泉にも通じてゐる。何れも國營バス。

明水街諸機關

明水縣公署	警察署	税捐局	郵政局
興農合作社	縣立醫院	明水兼理司法縣公署	中銀支行
大興公司	電報局、電話局	明水農業學校	街公所

五排頭

縣城の東北二十滿里の地點にあり。民國十三年警察署が置かれてより發達し、現在人口一千五百位の

ものであるが周圍の土質肥沃、將來有望の地である。

其他

警察署所在地　龍王廟　小三里三

稅捐局分所所在地　通達鎭

郵政局所在地　永興鎭　興仁鎭　通達鎭　雙興鎭　三佐　五排頭　崇德鎭　興通鎭

資料

題名	書名	發行所	發行年月
明水縣地方行政概況（錢中業）……………	南嶺（雜誌）	大同學院	康、二、九
明水縣概況……………	同表題	明水縣公署	康、四、九

克東縣

概史

克東は原名を二克山と稱してゐたが、克山縣の東に位するところから克東と改められたのである。もとの黑龍江省地方は、淸朝八旗防守の區域で、康熙年間の中葉、露西亞人を平定して以來始めて各所に築城、兵を駐してゐた。その後、奉、吉二省より移民が入り來つたが克東の地も亦その一つである。

民國四年、分縣治行はれ、二克山に縣城を設け、命名して二克山設治局とし同年七月改めて克山縣と爲した。民國十六年更に設治局分掌の心要あつて、克東設治局としたが更に十八年縣制を布く事に成り克山縣より完全に離脫して正式に克東縣の行政區劃を確立した。

事變當時、當地にも波及し、人心不安を來し、地方の秩序、混亂狀態に陷り、滿洲國成立後も匪害に遇ひ、疲弊甚しかつたが、日滿軍により治安維持せられ、漸く民心安定した。

大同二年七月縣公署の組織成り、康德元年十二月龍江省下に編入せられたが、更に康德六年六月新設の北安省に編入されたのである。

地勢

本縣東は通北縣、南は拜泉縣、西は克山縣、北は德都縣に境し、東北は北安縣である。

縣境東北は、小興安嶺山脈の高地と相接し、全部高地の平原地を爲す。土質よく農耕に適してゐる。

高山なく縣城の近郊東北方に、約百八十米位の二つの山が對峙し所謂本縣二克山の名勝の地である。

境內に烏魚爾河、烏拉濱河、印津河の三河あり、烏拉濱河は縣城の北方十七滿里のところを東西に流れ、支流甚多く南北兩方面より流入してゐる。烏拉濱河、印津河何れも、同河の支流である。

縣の物産

農產の主なるものは大豆、大麥、粟、小麥等相當數量の收獲あり、何れも縣外移出を行つて居る。蘇子、糜子、煙草、土豆等の特用農作物があり、一般に農產豐富である。殊に康德二年、三年は縣下豐作であり地方經濟に大いに活氣を添へた。

家畜は馬、豚等有してゐるが頭數は多くない。林業方面に付てみるに從前は、本縣の東隣通北方面に森林の繁茂をみてゐたが開闢以來、建築用、薪炭用として伐採しつくしてしまつた。現在造林中である。附近の原野に藥草多く、年、八、九萬斤を出すが近年はあまり採取者がない。

都邑克東街

此地は二克山と稱し、現今の克東驛の南方にあり、齊北線より餘程遠ざかつて居る。克東縣城として滿洲事變以前は相當な繁榮を爲してゐたものであるが、事變當時反滿軍閥の亂に起因し、匪賊蜂起し、本縣は彼等横行の舞臺となり、紅槍會の本縣城襲撃等あつて大打撃を蒙つた。加ふるに齊北線の開通に

より、市場の移動あり、繁榮を鐵路沿線都市に奪はれて衰微を來したのである。だが此地一帶は豐穰な農産物に惠まれて居り將來之が開發と相俟つて商工業の發達も期待さるべく、從前の繁榮を挽回し得るかもしれない。

市街は八角形を爲して居り、東西大街、南北大街あつて入口に四門を有し、人口約一萬一千、大小の商舖、二百七十餘、各機關、法團等漸次整つて來てゐる。

克東驛より國營バスの便があり、更に拜泉にも通じて居る。

克東街諸機關

克東縣公署	警察署	稅捐局分局	興農合作社
郵政局	電報局	電話局	大興公司
縣立醫院	街公所		

警察署所在地

玉岡　四站　其他

資料

題名	書名	發行所	發行年月
克東縣政概要	同　表題	縣公署	康、四、一二
克東縣概況	金融合作社(九月號)	金融合作社	康、五、九

概史

拜泉縣

拜泉縣はもと伊克明安旗の地である。光緒三十一年三道溝に縣署を設け海倫府に屬せしめたが、同三十三年拜泉縣公署を大泡子(拜泉)に移した。滿洲國成立後は黑龍江省に屬し、更に康德元年十二月一日

より新行政區劃により龍江省に屬してゐたが、康德六年六月より新設の北安省に包含せられて居る。

地勢

拜泉縣の境界は北は克東縣、及克山縣、西は依安縣、南は明水縣、東は海倫縣及通北縣に接して居る。本縣の地勢は西部及北部に於ける狭小なる低地帶と、中央部に於ける凹地帶を除くの外は、悉く丘陵多き平原を形成して居る。凹地帶は狭長なる帶狀を成し、殆ど縣内を西より東に向つて貫通し、降雨の際は水を湛へて東に向つて流れる。北部國境に呼裕河、東部境界に通肯河があるのみで縣内に流水がない。又縣内に森林はなく、濕地帶には曹達湖がある。

縣の物産

農産物の種類は多い方である。大豆、小麥、粟、包米、高粱等が主で、各種の麥類、豆類、稗、蘇子麻類等が出る。農家の耕作及其他一般使用の爲、牛、馬、騾、驢等が飼育される。事變によつて兵匪の掠奪を受けた事が多かつた。林、礦、水産なし。

都邑拜泉街

此地は數年前迄、省内に於ける有數なる市場として、背後地に克山、克東、德都等の穀倉地帶を擁し殷盛を極めたが、鐵道の開通は穀倉の東部を海倫に西北部を泰安鎭、克山等の新市場に奪はれ、往年の殷盛を見られない。移入品の大半は、海倫、克山の兩市に求むる事になつた。

往年穀類出荷中心時代には大資本を投ずる商賣もあつたが、市場逐年衰凋に傾くと共に、漸次資本回收せられ、現在巨資を擁するものは少ない。

雜貨商、金物商、燒鍋等の商賣がある。

拜泉は鐵道沿線ではないが、東方海倫より、北方は克東、克山及泰安鎭より、南方は明水、西方は依安より入り來る國營バスの便開け濱北線及齊北線に連絡する事が出來、非常に便利になつた。

拜泉街諸機關

拜泉縣公署　警察署　稅捐局　商工公會

區法院　區檢察廳　郵政局　專賣局
興農合作社　中銀支行　大興公司(二)　協和會
電報局　電話局　縣立醫院　街公所
拜泉(農科)國民高等學校(省立)　滿人小學校　拜泉電業股份有限公司
日本人小學校　拜泉女子國民高等學校

三道鎭諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局
電話局　大興公司
其他

警察署所在地

中興鎭　長春鎭　乾豐鎭

郵政局所在地

富强鎭　中興鎭　長春鎭　時泉鎭
通河鎭　乾元鎭

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
拜泉縣概況	賓北齊北兩沿線の現況	哈爾濱日本商工會議所	昭、九、八
拜泉縣事情(滿鐵調査課)	黑龍江省(上卷)	滿鐵	大正一三、五
拜泉縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、二、一一
拜泉	省政彙覽(龍江省篇)	國務院情報處	康、二、一二
縣政現場記(拜泉縣)(一)	內務資料(二の六)	內務局	康、五、六
拜泉縣農業事情	金融合作社(三の一〇)	金融合作社	康、四、一〇

徳　都　縣

概史

徳都なる名は徳都勒屯に因つて居る。俗に蒙古大屯と稱してゐる。清朝時代は東布特哈正白旗部落に屬し、民國四年劃して克山縣と爲し、改めて徳都鎭とし、民國十八年、徳都設治局と爲し、大同二年四月一日徳都縣と改稱した。建國後、康徳元年十二月の省制改革により龍江省に屬して居たが、康徳六年六月の改制により北安省内に編入された。

地勢

徳都縣は齊々哈爾の東北部に位し、縣の中央部より稍南寄りに東西に流るゝ訥謨爾河があり、其支流が幾條も南より北より流入して何れも同河に注いで居る。全縣凡そ菱形をなし、地勢山脈河流多く、其間に崗陵起伏がある故に十二名山、五大連池の名勝を有して居る。土質黑壤頗る肥沃である。

東は北安縣、東南は克東縣、西南は克山縣、西は訥河縣に接し、北は嫩江縣に境してゐる。

縣の物産

農産の主なるものは大豆、穀子、小麥、大麥、包米等で蘇子、蔴子等の特用農作物をも出す。家畜は馬を第一とし、牛、豚等である。

林業地區は東北、及北の地で、十二ヶ所の林區を有してゐるが、何れも縣城からは遠く、各林區の面積は廣くない。其他の物産はあまり有してゐない。

都邑徳都村

徳都縣城である。北安街の西北方六五粁、北安街、徳都間に乘合自動車の運行開始され、從來は克山の背後地であつたが最近は交通の關係上、北安街との交易盛となり北安街を市場とするに至つて居る。

徳都諸機關

徳都縣公署　警察署　稅捐局分局　郵政局

電報局　興農合作社　縣立醫院

其他	
警察署所在地	張士傑屯　雙龍泉
税捐局分所所在地	孫船口

資料

題名	書名	發行所	發行年月
德都縣商勢……	訥謨爾河、呼裕爾河流域地方經濟事情	滿鐵	昭、一〇、六
德都縣全境與圖……	同表題	縣公署	康、三、一
德都縣一般狀況並に地圖……	同表題	同前	康、三、一

依安縣

概史

本縣は舊名を龍泉と稱し林甸縣に屬してゐた。百里一片荒涼たる原野である。

民國四年墾牧公司が開かれてより四方の人民漸次遷入し來り、民國八年林甸縣より一部を割き依安縣設治局が置かれたものである。滿洲建國後は龍江省に屬してゐたが、康德六年六月新設の北安省に編入されてゐる。

地勢

東は拜泉縣北は克山縣及依克明安旗に接し西は富裕縣、南は林甸縣及明水縣に隣りして居る。

本縣境內殆ど平坦、高山、大川はない。縣內僅に烏魚爾河及雙陽河の兩河がある。烏魚爾河は東拜泉縣より入り西富裕縣に出で、依、克兩縣の境を爲し雙陽河は東拜泉より入つて西林甸縣に出で、蜿蜒として境內を長蛇の如くに流れる。此二河の流域は屢々旱魃に逢ひ往々涸渇するを以つて水產の見るべきものはない。

縣の物產

本縣もとより農業が主であつて大豆、包米、小麥等を始め、高粱、小豆等、又麻は各種の麻があり中、線麻、蘇子等を主とする。大豆、小麥、大麥、蘇子等は、他にも移輸出して居る。馬、牛、豚、其他家禽類の飼養も行つて居る。依安縣城に於ける商業は何れも小商業であつて資本金五千圓を有する商家は只一軒に過ぎない。

都邑依安村

地名を龍泉鎭と稱す。齊々哈爾の東方約二百二十滿里、拜泉縣城より西方百三十滿里に位す。市街極めて貧弱であつて、產物としては、小麥、大豆等の農產物がある。現在では、商況不振であるが縣下、土地豊沃既耕地及未耕地多く、隣接諸縣との交通も開け發展すべき可能性を多分に有して居る。

依安村諸機關

依安縣公署　警察署　稅捐局　郵政局
興農合作社　大興公司　協和會　電報局
電話局

其他

警察署所在地	三興　劉國忠
郵政局所在地	雙陽鎭　寶泉鎭　三興鎭　龍安堡

資料

題名	書名	發行所	發行年月
依安縣一般狀況(滿文)	同表題	縣公署	康、三、
依安縣全境輿圖	同表題	同前	康、三、
依安縣實業進行計畫	內務資料月刊(二の一)	內務局	康、五、一

嫩江縣

概史

嫩江縣として縣治せられたのは民國二年であるが、嫩江縣の縣城墨爾根（現在の嫩江）は、清朝時代、支那人の北進運動上重要なる役割を演じ、省內舊市の一である。

即ち、露人の滿洲侵略に對せんが爲めに、各要所に、都市を建設したが、瑷琿に次で墨爾根が建設せられ、南方都市と黑龍江を繫ぐ重要路にした。而して軍隊を駐在せしめ一六九三年より九八年に至る間黑龍江將軍が駐在して居り後、副都統が置かれてゐた。民國二年、一般行政區劃改正と共に、嫩江府は第一級縣たる嫩江縣にされ、建國後は龍江省に屬し、康德六年六月省制改革により北安省に編入され、同時に北部を割きて瑷琿縣に讓つた。

地勢

小興安嶺と嫩江本流とに挾まれた地域で、小興安嶺西斜面に發源する嫩江各支流を以て占められる。概ね高原臺地狀である。東及び北は瑷琿、北安、南は德都、訥河の各縣に接し、西は嫩江本流を以て興安東省と境してゐる。

縣の物產

大豆、粟、玉蜀黍を主とし、小麥雜穀等である。面積大且つ、肥沃なる黑土帶であるが、既耕地は極めて少ない。牧草豐富、馬、豚、牛等が飼養され豚肉は他縣にも出す。面積の三〇%弱の林地を有し、モンゴリナラ（柞樹）シ、ラカンバ（白樺）、コヲノヲレ（黑樺）等の濶葉樹林が多い。多く齊々哈爾に出す。

外に木炭、木耳、黃氏（藥用植物）等の副產物あり又森林棲息の動物は、粟子、狐、猩、獾、灰鼠、鹿茸、川獺、猿、野猪、黑貂、馴鹿、狼、熊等で粟子皮等は五千枚にも及ぶ收獲を見、嫩江、布西が取引中心である。

開拓事業

縣内の未開拓地を、日本の潑剌たる青少年の力によつて開拓せしめんとして、滿拓公社にては伊拉哈に嫩江大訓練所、伊拉哈甲種小訓練所、青山屯甲種小訓練所、柏根里甲種小訓練所を設け、康德五年青少年を送り込んでゐる。やがて次々に送られる青少年により、黑土帶はやがて彼等の精神と力とによつて數年ならずして黃金の畑と化してゆく事であらう。

都邑嫩江街

墨爾根と稱されてゐた地で現在嫩江縣城である。淸朝時代は、對露政策上の重要地點であり、黑河迄二〇〇粁、重要路を通じてゐた。而して黑河への唯一の貨物供給地であつたが、現在では、北黑線開通により、輸送は多く鐵道に據る事になつた。新興滿洲國に於ける都市としては衰微の傾向にあつたが、鐵道開通して稍市況を回復してゐる。商業は雜貨が主であるが、ダヴール、オロツチョン族等の原始民族が狩獵によつて獲たるものを嫩江で取引し、齊々哈爾、哈爾濱、奉天方面に賣出してゐる。工業は小規模で、燒鍋、製油、製粉、釀造等が行はれる。

嫩江街諸機關

嫩江縣公署	警察署	稅捐局	興農合作社
郵政局	營林署	嫩江兼理司法縣公署	嫩江地方觀象所
中銀支行	大興公司	國際運輸	電業營業所
電報局	電話局	日本人小學校	滿人小學校
興安棲林產銷公司（合資）	縣立醫院	街公所	

四站（塔溪）

縣城に次ぐ邑落で黑河に通ずる小興安嶺の關門となつて居る。天險を擁し、萬福麟が建てた二萬人を收容し得る煉瓦建ての兵營がある。小商舖二、三家を見受くるのみ。

伊拉哈

寧黑線が嫩江縣に入つて第一の驛を伊拉哈驛といふ、驛は小さい驛であるが、伊拉哈に青年訓練所が

設けられるに及び、開拓方面で其名は日本內地方面にもよく知られるやうになつた。

其他

警察署所在地	伊拉哈	興安村	科洛	塔溪
郵政局所在地	乾豐鎭	興安總廠	科洛爾	塔爾溪
・	伊拉哈	嫩江訓練所	木納河	東官地
義勇隊青年學校所在地	興安總廠			
	嫩江	柏根		

資料

題名	書名	發行所	發行年月
嫩江縣概況	民政部月刊	民政部	康、元、一一
嫩江縣	黑龍江省(下)	滿鐵調查課	昭、二、一〇
嫩江縣	北黑線沿線背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
嫩江縣鹽店銷鹽狀況調查報告書	榷運月報(四の二)	榷運署	康、三、六
新興嫩江を覗く	同表題	北滿日報社	昭、一二、一〇

北安縣

概史

民國元年十月龍門、安吉、烏魚三鎭地方に龍門設治局を設けたが、同地が地質上及び交通上發展の條件を缺ぐため設治局を龍門鎭(龍鎭の東北方)より現在の龍鎭(此の地も亦當時龍門鎭と稱した)に移し、同六年五月龍門縣と改めたが、其の後廣東省に同名の縣がある爲め之を龍鎭縣とした。滿洲國成立後は黑龍江省に屬し、大同二年六月縣公署を龍鎭より北安鎭に移した。更に康德元年十二月新設の龍江省の

管轄となり、康徳五年十二月北安縣と改稱され、康徳六年六月新設の北安省に入り省の中心を爲してゐる。

地勢

縣の大部は小興安嶺より續く緩かな波狀形地勢を成し北部より中央部及東部にかけて小興安嶺山脈が走り又北部より東南部に向つて小興安嶺の支脈たる木庫山嶺が走り森林地帶を成してゐる。小興安嶺山脈に依りて水勢を東西に分水し一は西方嫩江に流入する納謨爾河及呼裕爾河となり他は黑龍江に流入する鎭清河及此の支流となる全縣一帶に高地を爲し南より北に向つて波狀を重ねる毎に漸次其の高度を增加する。然し此の波狀形は概して緩傾斜であつて、波底となる部分には濕地多く殊に其の間に河流のある土地は流域割合に廣く且雨期に於ける降水多量なる爲流域一帶に低濕地を形成するものが多い。

縣の物産

本縣は地味肥沃、農産よく生育する。大豆、粟、小麥、大麥、豆類等を主として居るが農産の種類は多い。馬、牛、豚、山羊等の畜産を有して居る。

山林は縣の東北境にあり、主として白樺の雜木であるが、樺、楊、黑松、杉松等で原始林がある。

龍鎭より百二十滿里、朝陽の東北に滿漢溝金山があるが採掘に着手されてゐない。

開拓事業

本縣内二井及龍鎭に、青年義勇隊自警訓練所があり、龍鎭に、鐵道自警村がある。

都邑北安街

北安縣公署の所在地で小高い丘陵に圍まれた一大盆地にある。濱北線の終點にあたり、北方北黑線に通ずる。一方西方齊北線によつて齊々哈爾に通じ鐵道分岐點の要衝を占めて居る。其周圍は豐饒なる平野に圍まれ、北方約二十粁の地點に鳳凰山嶺支脈が流れて居る。

古く、無人の山林地帶であつたが、約二〇〇年前に、齊々哈爾方面より追はれた、遊牧の漢人諸旗族が狩獵を業として穴居生活をなしたのが始めであると謂れて居る。民國三年、縣政を布き當時無名の部

落に城壁を築き道路を拓き、始めて北安鎭の邑名を冠し、一都邑を建設した。

滿洲事變により馬占山の反逆兵變の餘波を蒙り、荒廢其極に達したが半年を出でない中に治安維持せられ、次で、鐵道工事關係者來住して之が爲、急激な發展を見るに至つた。大同二年八月龍鎭縣公署を龍鎭より此所に遷し、北安鎭は北滿に於ける有數の新興都市となつた。康德六年省の中心となり、北安街と呼稱するに至り、省公署及び縣公署は現在北安街に置かれて居る。

北安街の背後地として當地の勢力圏內にあるものは北黑線沿線地方である。然し、本地方は事變後開拓された新耕地であつて、產出高も少ないが地味の肥沃なる、肥料を要する事なく（北滿の方は大體さうであるが）此後の農業生產高は、勞力さへ得れば大いに增額の見込みである。

移入は主として哈爾濱、海倫を經て雜貨、綿布、人絹等が、移入されてゐる。當地は從來行政、經濟上何等支配力を有せず僅に交通上舊縣城龍鎭を擁した外重要都市と稱すべき背後地を持たなかつたが、鐵道の開通は事情を一變して其の經濟的傘下に多くの都邑を招きつゝある。卽ち、孫河船口、龍鎭、德都縣城、克山、克東等がそれである。

北安街諸機關

北安省公署	北安縣公署	警察署	稅捐局
商工公會（省、縣）	北安區法院	北安區檢察廳	郵政局
電報局	專賣局	中銀支行	興農合作社聯合會
北安縣興農合作社	國際運輸	協和會	營林署
電話局	日本人小學校	青年學校	北安電業股份有限公司
糧穀會社出張所	滿拓公社北安地方事務所	縣立醫院	街公所

孫河船口

生活必需品會社支店及倉庫　勞工協會支部

北安街を距る四五粁、訥河の上流に位し木材の集散地であつて附近に水田適地在り將來を期待される。

龍鎭

舊縣城であつて北安を距る北六〇粁、附近に既耕地多く北安以北に於ける穀類の集散地として將來の發展を約束される。

龍鎭諸機關

郵政局　電報局　電話局　日本人小學校

其他

警察署所在地　龍門

郵政局所在地　辰清（電報局もあり）　孫家船口

鐵道自警村青年學校　龍鎭　二井

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
龍鎭縣概況	賓北齊北兩沿線の現況	哈爾濱日本商工會議所	昭、九、八
黑龍江省北部地方經濟事情（川野志朗）	露滿蒙時報	哈爾濱商品陳列館	昭、九、四
龍鎭縣事情	同　表題	齊々哈爾日本商工會議所	昭、一一、八
龍鎭縣	北黑線沿線後背地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一
龍鎭縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	昭、一〇、二
龍門縣	黑龍江省（下）	滿鐵調查課	昭、二、一〇
龍鎭縣事情	同　表題	大同學院	康、二、六
龍鎭縣輿圖	同　表題	縣公署	康、三、

概史　**地勢**　**縣の物産**　**開拓事業**　**都邑通北村**

通北縣

本縣は民國四年、海倫縣通北稽墾局を縣設治局に改め、同六年海倫府の北鄕、通肯河以北の地を設定して縣となし黑龍江省に屬したが、康德元年十二月行政區劃の改革に依りて龍江省に編入され、康德六年六月北安省に編入されてゐる。

縣城通北の東約一七粁の地點に小興安嶺の支脈たる木庫山嶺が走り密林地帶をなして居る。此山嶺によりて水勢を東西に分界し、西は嫩江に流入する訥謨爾河及び呼裕爾河となり、東は黑龍江に流入する鎭清河及び其支流となつて居る、周圍は八縣に接して居る。

主要物産は玉蜀黍、粟、大麥、大豆等で本地方の特殊産物としては狐、鼠、鼬、獐等の毛皮及び花蘑、茸、百合、黃花菜等の食料品並に熊膽、人蔘等の藥品がある。

主要資源として松樹、白樺等の産があるが採伐事業振はず。

日本開拓民は第六次が五福堂、老街基の二箇所に入植して居る、何れも小學校の設備あり、極めて順調に發展して居る。鐵道自警村は白家に、靑年義勇隊自警訓練所は李家に設けられてゐる。

此地はもと地名を頭甲入子と稱してゐた。民國六年置縣せられ當初縣公署は當地を去る東方約二滿里の長治社、四甲八井子に在つたが、後現在の地に移轉したのである。海倫の北一六〇滿里の地にあり、鐵驪と共に此方面では、最も海拔が高い地方である。商工業に就ては特記すべきものがないが、當地方は土地が肥沃で大豆、玉蜀黍、麥類、粟其他の農産物豐富であるが商業範圍頗る狹少で、商鋪も、雜貨商、藥舖、木匠、糧店、燒鍋、製粉等である。

通北村諸機關

通北縣公署　警察署　稅捐局分局
電報局　電話局　興農合作社　縣立醫院

其他

警察署所在地

撑住鎮　海星鎮

郵政局所在地

五福堂　白家　宋家店　楊家站
海星鎮

委托日本人小學校所在地

老街基　五福堂

鐵道自警村青年學校所在地

李家

資料

題名	書名	發行所	發行年月
通北縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一
通北	省政彙覽（龍江省篇）	國務院情報處	康、二、一二

綏化縣

概史

光緒十一年綏化廳を設けて理事通判を置き、呼蘭副都統に屬せしめた。同三十一年八月之を昇格して府治に革め餘慶縣を管轄した。民國二年三月官制の改革によつて府を廢して縣に改め、綏蘭道に屬せしめたが、滿洲國建國後は黑龍江省に屬し、康德元年十二月よりは濱江省の管轄となり、更に康德六年六月より新設の北安省に編入せられてゐる。

地勢

南縣境に泥河濠河があり、北縣境に克音河があつて縣內中央及北部を流るゝ呼蘭河、努敏河、津河等

と望奎縣境に於て合流する。何れも河幅廣からず、河底は概して泥土である。縣內唯一の河川交通なる呼蘭河は別名北大河と稱し其の源は遠く小興安嶺卽ち布倫山に發して各支流を合して松花江に入る。長さ約二千滿里、幅三十尺、水深八、九尺より一丈三尺であつて鐵驪縣より綏化迄は小船を、更に綏化より大小汽船の運航が可能である。

縣內一般平坦で東北方綏棱縣境克音河、努敏河間に綏棱閣山があり一名綏林閣山と稱し標高五百尺小興安嶺の支脈として鐵驪縣より漸次南行更に海倫縣に至る間蜿蜒數百滿里に及ぶ。綏化の一名は此の山より得た。又努敏河北岸平原地帶に四方臺山があり、附近二十五滿里に亘つて急峻でなく中原に東西兩平坦地がある。依つて之を東四方臺と謂ふ。前記の如く縣內は山地少く河川多く波狀平坦地である。土壤泥質で地味肥沃、一般農耕に適してゐる。殊に河川附近の水利の便ある地は水田の好適地である。

開墾事情

本縣は土地の開發早くより開け同治元年津河鎭を中心とした地方が民間に開放され、次で永安鎭を開放し、此地には屯田兵を置き、兵一名に對し、一百晌づゝ分ち與へた。綏化縣より現在の綏棱縣西部、海倫縣にかけて部落は劃然と排列し、順列旗名を有してゐる事は此事實を證明して居る。現今綏棱縣になつてゐる興農方面は年代は後であるが、一人に對し一井單位(三十六平方滿里)にして與へたといふ。現在同地方の屯名は殆ど井の字を帶してゐる。かくて順次漢民族によつて開拓せられたので、日本內地農業開拓民は現在は此縣には入植して居ない。只鐵道自警村が一箇所ある。

水利の便よき地方は半島人開拓民が早くから、入りこんでゐて二千餘名に及び、水田開墾等を主としてゐる。

都邑綏化街

哈爾濱の北方、濱北線沿線主要驛を有する綏化縣城であつて、北團林子又は單に北林子ともいふ。民

國二年縣治を布かれた頃から、開拓せられ勃興した市街である。濱北線の要驛で、望奎、慶城、鐵驪方面の物資集散地であり、これら地方の門戶である關係上、日々殷盛を極め隣接地を加へ街制を布かれて居る。康德二年南門を修理して參事官が特に養正門と改名した。諸機關一通り整ひ、その中央地區たる東西大街は街路も廣く繁華なる商業地區を爲し殷盛を極めて居る。集散物資は、大豆、高粱、粟、玉蜀黍、小麥、大麥等、合計六十萬石と稱せられ、地方的需要の外哈爾濱に移出される。濱北線開通以來、繁榮を增し更に康德五年綏化より、慶城、鐵驪に線路伸張し、未開拓地は、之等の地方に入植せられたる日本開拓民によつて開拓せられ、將來農產、林產等の集中は綏化を中心として南下すべく益々活發なる物資の動きを見せること必定である。

現在の工業は、燒鍋、油坊數個を有するが將來は製粉、製材等の工業が起るであらうと思はれる。

商業は早くより盛で北滿の一中心地であり、現在日本人商店四二、滿人商店九六五に及び、滿人商店には古くより營む者あり現在尙商店の外形に昔の悌を止めて居る。

當地は濱北線の主要驛たると共に、綏神線の起點であり、慶城、鐵驪方面への入口である。神樹まで延長してゐた線は更に湯原より佳木斯まで延長連絡したため以後、哈爾濱より當地方を經由して佳木斯に入る便利を得られる事になり、當街の重要性も益々加はつて來たのである。望奎及慶城に至る民營自動車がある。

綏化街諸機關

綏化縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
地方法院	區法院	地方檢察廳	區檢察廳
郵政局	電報局	電話局	興農合作社

專賣局　中銀支行　興銀支店　大興公司(三)
國際運輸　協和會　電業營業所　縣立醫院
綏化(農科)國民高等學校(省立)　綏化女子國民高等學校(省立)　滿人小學校
日本人小學校　生活必需品會社配給所　農林試驗場　街公所

四方臺

濱北線の一驛。望奎、海倫方面よりの出廻馬車で繁盛を極めてゐる。民國十六年頃民家數軒のみであつた寒村から僅々數年間に人口約四千以上の近代都市を形成しつゝあり、將來有望な商業都市である。

四方臺諸機關

警察署　郵政局　税捐局分局　電報局
電話局　大興公司

其他

警察署所在地

永安鎮

税捐局分所所在地

雙城鎮　十間房

郵政局所在地

津河鎮　永安鎮　雙河鎮　秦家站
張維屯　正黃旗

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
綏化縣事情(大同學院)	滿洲國地方事情(概說篇)	大同學院	康、元、四
綏化及綏化縣概況	濱北齊北兩沿線の現況	哈爾濱日本商工會議所	昭、九、八
縣下畜產頭數	朝鮮	朝鮮總督府	昭、九、六

綏化事情……四、齊、哈間鐵路案内　鐵路總局　康、元、四
綏化縣事情(滿鐵調査課)……黑龍江省(上卷)　滿鐵　大正一三、五
綏化縣古蹟調査表……黑龍江省公署公報　省公署　大同二、一〇
省政彙覽(濱江省篇)……同　表題　國務院情報處　康、三、五
綏化縣事情……同　表題　縣公署　康、三、一
綏化縣地圖……同　表題　縣公署　康、三、一
濱北線綏化視察報告……北滿經濟月報(三九)　哈爾濱商工會議所　昭、一二、一二
綏化縣經濟事情……金融合作社管内經濟事情　金融合作社聯合會　康、五、一二
綏化商業事情……同　表題　綏化商工公會　康、七、三
綏化商工名鑑……同　表題　同右　康、六、一

望奎縣

概史

本縣はもと海倫縣の一部であつたが、民國六年四月その南部を割いて望奎鎭に設治局を設け、同年二月鎭を望奎縣と改めて獨立し綏蘭道の管轄に屬した。滿洲國建國後は黑龍江省に屬したが、康德元年十二月よりは濱江省に編入され、康德六年六月新設の北安省に編入された。

地勢

本縣は東は克音河、南は呼蘭河を距て夫々綏化縣に接し西は通肯河を境として青崗縣に連り北は小興安嶺の支脈走り海倫との縣境を爲す。六、五八四方滿里(二九六、二八〇晌)の丘陵性に富める平野である。北境僅かに山地あるを除き全縣地味肥沃なる農耕地で、丘となく野となく低地となく既に悉く開墾し盡され、往時本縣農村が比較的裕福であつたことを想像せしめる。然し全縣に亘つて連なる小丘陵は其の間に低地を挾んで低地の排水を困難ならしめ、三方を廻り或は縣内を横斷する河川に防水裝置なく一度大雨、出水に遭ふ時は農耕地の大部分(丘陵を除き)は直に洪水の災厄に曝され、其の災害を被るこ

とは平坦な綏化方面に比し更に甚しきものあるを免れぬ。

縣の物産

農産は大豆、粟、小麥、高粱、玉蜀黍、特用作物として麻がある。馬、牛、豚、騾等の畜産を有して居る。

都邑望奎街

綏化縣の西方約三七哩に位し、一に望奎鎭五井子又は斐龍城等とも云ふ。清末までは殆んど名もない寒村であつたが、此地が開放せられて以來急速なる發展を遂げ、民國六年縣を置かれた。

附近より集散する農産物が豐富であるため、商業は盛んで農産物の取引が多く、大豆、小麥等は縣外移出を行ひ、相當量に達して居る。

縣城内の商業を營む者五〇〇戸、總計資本約八〇萬圓に達し、内日商三戸他は何れも滿商である。移入は哈爾濱經由のものが多く、綿絲布、化粧品等が入り來る。木材は鐵驪方面より、石炭は、鶴岡、阜新、西安のものが入り來り、專賣品等は、滿商を通じて配給される。縣内に各種同業組合凡十九組合あり協助、不可分の精神をもつて運營してゐる。

望奎は鐵道沿線ではないが、綏化から東亞運輸商會の民營自動車の便がある。

望奎街諸機關

望奎縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院、	區檢察廳	兼理司法縣公署	郵政局
興農合作社	電報局	電話局	中銀支行
專賣局	大興公司	縣立醫院	望奎(農科)國民高等學校(省立)
滿人小學校	街公所		

其他

警察署所在地	海豊□鎮	蓮花鎮		
税捐局分所所在地	通江埠	蓮花鎮		
郵政局所在地	通江埠	蓮花鎮	海豊鎮	敏字頭井

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
望奎縣概況(哈爾濱日本商工會議所)	賓北齊北兩沿線の現況	哈爾濱日本商工會議所	昭、九、八
省政彙覽(濱江省篇)	同表題	國務院情報處	康、三、五
望奎縣	滿洲行政(雜誌)	滿洲行政學會	康、三、二
望奎縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
望奎縣事情	同表題	縣公署	康、四、一
望奎商業事情	同表題	商工公會	康、七、三

慶城縣

概史

光緒十一年(明治十八年)當地に始めて分防經歷を置き綏化廳に屬せしめたが、同三十一年其東北境を割いて餘慶縣を新設し、民國四年(大正四年)慶城と改稱せられた。約七〇年前滿洲族が入縣した當時、本地方一帶は廣漠たる草原地で、僅に小農獵夫が居住するのみであつた。滿、漢人移住し來り移民管理の分防經歷なる官職が置かれたのであつた。建國後濱江省に編入され、康德六年六月更に新設の北安省に編入されてゐる。

地勢

濱江省の東北端に位し、南は巴彥縣、西は綏化、綏稜の兩縣に境し、北は通北縣、東は鐵驪縣に夫々接壤してゐる。縣内の北部は小興安嶺に連る森林地帶で、南部は黑山嶺山脈の末端に接し、東北部は極

ね丘陵地帯を成し縣の中央部を呼蘭河が西に流れて其一帯は廣漠たる農耕地を成してゐる。

縣の物産

大豆、粟、小麥、雜穀等が主であるが、事變前後の災害の爲め農村の疲弊甚しく耕作不能に陷つた部分多く、産額も少い。元來土地豐饒な地方であるから縣當局は回復に大努力を拂つて居る。鮮人の入植水田耕作するもの六〇〇名近く居る。

開拓事業

呼蘭河の流域は豐沃廣漠たる農耕地及農耕可能地であるが現農耕地は全縣面積の三〇％餘に過ぎず開拓すべき餘地が十分にある。日本農業開拓民は本縣內鐵驪縣寄りの方にあり、第七次は拉林口、第八次は依吉密及び閭炮の二ケ所に入植濟みとなつて居る。慶城には滿拓公社の出張所があり、附近各縣の開拓業務の中心となつて居る。

都邑慶城街

縣城に新式の機械製粉工場があり一晝夜の製粉一二〇袋に達する。

事變前後の兵匪及び度々の災害に農民の疲弊甚しく、從つて縣城の商舖も影響甚しく殆ど閉鎖の悲運に陷つたものもあつた。

慶城は從來呼蘭河の水運あるのみであつたが、先に自動車道路の開通、更に引續き、康德五年綏化より鐵驪に至る線路の通過地となり日本農業開拓民の入植と共に、農地開拓進捗すべく、物資の移入も容易となり益々發展の希望に惠まれてゐる。

慶城街諸機關

慶城縣公署	警察署	稅捐局	郵政局
興農合作社	中銀支行	大興公司	電報局
縣立醫院	滿拓公社出張所	日本人小學校	街公所

其他

警察署所在地	慶　南（大羅鎭）	慶　北（七道崗）
郵政局所在地	大羅鎭	慶城拉林　崔家燒鍋
委託日本人小學校所在地	拉　林	

資料

題名	書名	發行所	發行年月
慶城縣狀況報告	同　表　題	縣　公　署	康、三、六
慶　城　縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵　道　總　局	昭、一一、一二
慶　城　縣	黑　龍　江　省（下）	滿　鐵　調　査　課	昭、二、一〇
慶城縣の宗教	滿洲國各縣視察報告	大　同　學　院	大同二、一一
慶城縣及集團部落結成詳圖	同　表　題	縣　公　署	康、三、
慶城縣經濟事情	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

概史

鐵驪縣

本縣は元、索倫遊牧の地であつて明末に至り始めて滿族の移住を見、其の後清朝の同治元年呼蘭廳が設けられ鐵山包以西が始めて設治された。光緒十七年（明治二十四年）屯田兵に依つて開墾され、定住滿人五千に達したので副都統所屬協領衙門を鐵山包に設置し民事、刑事の訴訟を所管せしめた。現在の縣公署が卽ちこれである。然るに民國二年鐵山包以西は慶城縣に屬したため、翌年鐵驪設置局を設け移住を奬勵し、縣境を東南大青山脈、分水嶺、北伊吉密河、東安邦河と定めた。之により治績上り鐵驪縣として今日に至つて居る。建國後康德元年十二月濱江省管下に置かれ、更に康德六年六月新設の北安省に編入された。

地勢

本縣は綏化の東方一〇〇粁餘の地點にあり、慶城、東興、通河、湯原の諸縣に隣接する山岳地帶である。其東、南、北方の三方は山岳にて包圍され、東方は小興安嶺に連る山間の避阨地で、僅かに西方のみ開け慶城に通じて居る。河川は呼蘭、伊吉密、安拜等の諸河が小興安嶺の大青、海倫兩山脈に發し、夏期流水期は水量豐富で流筏が盛である。臺地は一般に東方に向ひ上り勾配となり、波狀形をなし諸所に丘陵が點在してゐるが、河川が多い關係上濕地が多い。氣候は比較的良好で夏涼しく冬季も山岳の影響で凌ぎ易い。

縣の物產

山岳地多く濶葉樹の木材多く、流筏として慶城、綏化に出し年々八萬石に及ぶ。森林は寶庫ともいふべく又虎、熊、鹿など棲息してゐる。又山中石炭、黑鉛、砂金等の鑛產埋藏の見込みであるが實地踏査困難である。

農產、大豆、粟、小麥、大麥、麻、葉煙草等を出すが縣內の消費に充つるのみ。

開拓事業

本縣內は水利灌漑の便あり、濕地多く將來水田開發の餘地多く、又畑地開拓も有望である。縣內には日本農業開拓民多く。第七次は安拜の一ケ所、第八次は橫泰、東安拜（靑葉）韓家、老永府の四ケ所、靑少年義勇隊訓練所は鐵驪大訓練所及北斗甲種小訓練所の二ケ所ある。又集合開拓民も桃山及岩手村の二ケ所に入植して居つて將來大いに有望である。縣內の東部に山地帶は多いが從來農地帶として開拓せられた分は極小面積で大いに開拓の餘地がある。林業又有望且つ、未開發の狀態で、林業開拓民も入植して居る。

都邑鐵驪街

農業不振のため縣城の商工業も見るべきものなく、小資本による若干の商舖が康德四年頃より開業せられ商品は全て慶城より供給され數種の營業を兼ねてゐる。糧棧業もない。縣城と雖一寒村に過ぎない感であつた。然し、康德五年本縣は日本農業開拓地とせられて、慶城縣より鐵道開通したる爲め、農地

の開拓と出荷とは相俟つて此町を發展の途に導くものと豫想される。驛は鐵山包驛といふ。

鐵驪街諸機關	鐵驪縣公署　警察署　稅捐局分局　郵政局 營林署分署　電報局　縣立醫院　日本人小學校 勞工協會出張所 其他
警察署所在地	平安（李昌保田升）　鎭南（鎭南保姜文章）
郵政局所在地	鐵驪訓練所內
義勇隊青年學校	鐵驪
委託日本人小學校所在地	安拜　鐵驪神武

資料

題名	書名	發行所	發行年月
鐵驪縣情報告	濱江省第一回縣參事官會議々事錄	濱江省公署	康、二、一二
鐵驪縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
鐵驪縣全圖	同表題	縣公署	康、三、五
鐵驪縣史概說	同表題	鐵驪縣公署	康、四、一〇

概史

綏稜縣

本縣は元來山東移民の開拓に依つて今日の端緒を開いた所である。清の同治初年本地方に約一〇戸の民家があり、名づけて紳立屯と呼んだ。光緒五、六年頃から漸次戸口が增加し、屯を改めて鎭とし、之

を上集廠と呼び、巴彥州の管下に屬せしめた。

而して民國元年綏化に縣治が布かれるに及び、上集廠は上集鎭と改められ始めて綏化警察署が置かれた。民國四年本地方の商民上書して設置局の設置が許可され、上集鎭なる名稱を廢して、克音河以東諸敏河以北の地を併せて綏稜設置局とし、同七年更に縣治を布き三等縣に列し綏稜と稱した。滿洲國成立後は黑龍江省に屬したが康德元年十二月、濱江省に入つた。康德四年綏稜の稜を棱と改め、康德六年六月の省制改革により北安省に編入された。

地勢

本縣は北及東に小興安嶺の一脈たる大小青山嶺を控へ通北及湯原に境し青山嶺より流出する努敏河は縣の中央を貫流し克音河は縣の北境を、尼爾吉河は南境を流れて縣疆を潤ほしてゐる。努敏河は水量豐であつて綏化縣に入り呼蘭河に注ぐ。青山嶺にて採伐せる木材は筏として此の水流に依り下流に搬出せられる。

縣の物産

縣內地質よく農業に適してゐるが、農業經營法極めて原始的で、農事改良に無關心である。又、地主が非常に少く、小作農が多い爲めに、農繁期に際して資力乏しく、休耕又は廢棄しておく有樣である。興農合作社はこれら農民のために春耕資金の貸付、農產の收買をして助長してゐる。農產は大豆、粟、玉蜀黍、大麥、小麥等を主としてゐる。

牧畜の見るべきものなく自家用家畜として、牛、馬、騾、豚等が飼はれて居る。

東部一帶の大青山嶺は大森林地帶をなし、毎年五〇萬石の木材產出が可能とされて居る。

鑛產の見るべきものがない。

開拓事業

前述の如く、本縣は土地肥沃であるにかゝはらず、農民困窮、怠惰である爲め、農業振はず、日本農

業開拓民を第三次より漸次入れる事になつた。第三次瑞穗村は順調なる發展をとげ、海倫方面よりバスの便も開けて居る。又第七次開拓民も十三戸と稱するところに一ケ所入植して居る。日本人の勝れたる農業技術と、努力とはよくこの黑土帶を開拓して行く事であらう。

都邑綏棱街

海倫の東南約二五哩の地にある綏棱縣城である。此地は光緒二十四年匪團の動亂に亞き露兵、馬賊の蹂躙に委せられ全市兵火に罹り、更に三十二年再度馬賊の掠奪に遇ひ其發達を著しく阻害したが近年漸く復興の氣運に向つて居る。

商工業の特に見るべきものはないが此地を中心とする産物は大豆、粟、大麥、小麥、玉蜀黍、高粱、葉煙草、木炭等である。製粉、油坊、燒鍋等があるが規模は小さい。

綏棱街諸機關

綏棱縣公署	警察署	稅捐局	郵政局
電報局	興農合作社	縣立民衆教育館	滿人小學校
縣立醫院	勞工協會出張所	街公所	

興農街（克音河）

濱北沿線で驛は克音河驛といふ興農街は驛の東方四滿里、海倫縣に境を接する地である。附近一帶の物資の集散地で、農産の收集地であり、商業よく發展し、人口及商業發展狀況等縣城綏棱をしのいで居る。城内は長方形をなし、四方に門を有する整然たる區劃の街である。此地はもと綏化縣下の都市であつたが、縣境の變更があつて綏棱縣の境が西南方に廣められた結果、綏棱縣内に入つて居る。

興農街諸機關

警察署	稅捐局分局	商工公會	郵政局
中銀支行	電報局	電話局	大興公司

其他

警察署所在地	雙泉鎭　興農　北大溝
郵政局所在地	瑞穗　黑馬劉
日本人小學校所在地	瑞穗

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
綏稜縣概況	賓北齊北兩沿線の現況	哈爾濱日本商工會議所	昭、九、八
綏稜縣下植民可能地と其前途（滿鐵調査課）	支那農民の北滿植民と其前途	滿鐵	昭、六、四
省政彙覽（濱江省篇）	同　表題	國務院情報處	康、三、五
綏稜縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
松花江下流地方並綏稜の移民保健衞生調査（石井克己）	滿鐵調査月報（一六の三）	滿鐵	昭、一一、三

海倫縣

史

光緒二十四年通肯、克音、巴拜、柞樹崗一帶地方の開墾を奏請し、翌二十五年四月通肯副都統を設けて駐防に任ぜしめた。同三十二年十二月副都統を廢して直隷廳撫民同知を新設したが、同三十四年五月之を昇格せしめて海倫府に改め拜泉、靑崗二縣を管轄せしめ、更に民國二年三月之を海倫縣と改めて綏蘭道に屬せしめた。滿洲國獨立後は黑龍江省の管轄となり、康德元年十二月一日より新行政區劃によつて濱江省に編入され、更に康德六年六月より新設の北安省に編入された。

地勢

北は通肯河に依て通北縣に境し、西は拜泉、明水の兩縣に接し東は綏稜、南は望奎、靑岡の二縣に連る。又東北部には小興安嶺支脈、哈拉巴山がある。

その大部分は丘岡の多い高原であつて乾燥地帯を成して居るが、之等の山林地帯を除けば概ね農耕地として耕作されて居る。西境を流れる通肯河は其の源を小興安嶺支脈に發し、北境を貫通して西に出で更に南して拜泉、青岡兩縣境を潤して居る。尚此通肯河は札克、海倫、七道溝等の諸支流を合し、之が爲、本地方一帶の土質は概して濕潤である。

縣の物産

本縣地方は北滿の穀物倉といはれる程で農産が主である。大豆、小麥、粟、高粱、玉蜀黍、其他豆類等で、蘇子、麻實等の特用農産がある、馬、豚、牛等の家畜、又家禽の類多し。

林産は濶葉樹を主とし、立木蓄積量二百萬立方米に及ぶと謂はれて居る。

開拓事業

本縣内には水田に適する地域も多く、現在水稻の栽培が行はれて居る。開拓地として好適の地とし、日本開拓民の入植も爲されて居る。開拓民は第六次二ケ所即ち、海倫群馬村と黑馬劉に、第七次一ケ所東黑馬劉に入植してゐる。又青少年の方も對店大訓練所、三井子甲種小訓練所の大小二箇所の訓練所が設けられてゐる。土地は克山縣より續く北滿黑土地帶であり、かつては國立農事試驗場設置の後補地となつた所で、農地としては非常に有望な土地である。

都邑海倫街

當地は舊名を通肯と云ひ、光緒三十年海倫府が開設された。當初は人口僅か八〇餘名に過ぎなかつたが、爾來移民の流入と共に漸次發達し、宣統三年以降殷盛を極め、民國二年府を廢して縣となつたために縣公署が置かれた。昭和三年(民國十七年)に呼海線(呼蘭―海倫間)が開通して以來急激に膨脹し、市街の規模綏化に比して稍々大きく、商業頗る殷盛を極めて居る。

市街は畑の中に建設された新興都市である爲、道路は極めて不良で、降雨の際は泥濘車軸を沒し、村落相互間の交通が杜絶する事すらある。

元來此地方は北滿の穀倉と稱せられる程であつて其一箇年間の農產物集散高は、九〇萬石と稱せられ呼海線(現北黑線)の開通後俄然增加し、縣內の農村は勿論、拜泉、明水、龍鎭等よりの特產集まり北滿に於ける一大特產市場としての地位を占めてゐた。又馬占山の占領當時一時的に活氣を占してゐたが、其沒落後に於ける小匪賊の橫行の爲、農村疲弊し、更に鐵路は北方、北安街まで伸びた爲めに、特產市場としての地位も北安街に奪はれるに至つた。

然し乍ら、其全勢なりし時代に、相當大資本の特產商が哈爾濱方面より進出し來り、三菱、三泰、國際、怡順等の特產商が活躍して居る爲め、尙特產市場として殷盛を見せて居る。

次に工業又盛で、油坊、機械製油、燒鍋、豆素麵等の製造盛で、他の地方に比して著しい發展を見せてゐるが、これは其原料たる農產物が豐富である爲め、加工製產品として輸出する方が採算上有利であるからである。

海倫街諸機關

海倫縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	營林署分署	中銀支行
大興公司(三)	國際運輸	縣立醫院	協和會
專賣局	海倫(農科)國民高等學校(省立)		街公所
海倫實業女學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校	生活必需品會社配給所

海北街諸機關

警察署	郵政局	稅捐局分所	電報局
電話局	大興公司		

其他

警察署所在地	倫河鎭	海南村	三聖宮	
稅捐局分所所在地	海州鎭	海興鎭		
郵政局所在地	海倫群馬村	唐國政屯	傅家大房子	祥雀鎭
	太平莊	倫河鎭	海興鎭	
委託日本人小學校所在地	四國村	海倫群馬		
義勇隊青年學校	三井			

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
海倫縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
海倫事情	露滿蒙時報	哈爾濱商品陳列館	昭、九、八
縣下畜產頭數	朝鮮	朝鮮總督府	昭、九、六
海倫概況	露滿蒙時報	哈爾濱商品陳列館	昭、九、一
海倫及海倫縣概況	濱北齊北兩沿線の現況	哈爾濱日本商工會議所	昭、九、八
海倫居住外人調	黑龍江省公署公報	省公署	大同二、一
海倫（鐵路總局）	四、齊、哈間鐵路案内	鐵路總局	康、元、四
海倫縣城商工事情	同表題	臨時產業調查局	康、二、一〇
海倫縣	黑龍江省（下）	滿鐵調查課	昭、一二、一〇
海倫縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
海倫地方における木材の集散狀況（園田重由）	北滿研究（三の二）	滿鐵哈爾濱事務所	昭、一〇、一二
海倫縣事情	金融合作社（四の六）	金融合作社	康、五、六
海倫經濟事情	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

黑河省

黒河省

瑷琿縣

概史

本縣の沿革を見るに、康熙二十三年始めて黒龍江將軍を設け、江の東北岸である舊瑷琿に駐在せしめたのであるが、後、黒爾根(嫩江)に移して、此所には副都統を留め咸豐年間に現在の瑷琿に移し、後民國三年に縣を置いた。光緒二十六年の拳匪の亂、露兵の兵火等に合ひ復興進まず、大黒河の勃興につれて元の瑷琿は衰へて行く樣になつた。馬占山の旗上げも效を奏せず、大同二年九月には、縣公署を瑷琿から大黒河に移して縣城となして居る。

地勢

西は嫩江縣、南は孫吳縣、北は呼瑪縣、東北は、江を距てゝ蘇領に對して居る。地勢は西部北安省の嫩江縣との境に穆爾山嶺南北に走り、土地は大體黒河沿岸に向つて傾斜して居る。北西は庫木爾山を以つて、呼瑪縣に境し、南部には小山脈多く、河川は北東に向つて何れも黒龍江に流入して居る。

縣の物産

農業は瑷琿及其附近一帶は、以前よく開墾された處であるが、其後、蘇支紛爭、匪賊、水災等の爲め耕作が中止せられ荒地となつた部分が多く、今後の開墾は容易である。土地平坦肥沃であつて農業の最適地である。農產物の主なるものは小麥、大麥、粟、燕麥の種類であるが、瑷琿から西方六里半位の處で鮮人が稻作を爲して居るものもある。農生產品は縣內消費に充てゝ居る。鑛業は縣內に採金會社關係の金廠七箇所あつて、各着手せられて居り將來性を期待せられて居る、又瑷琿の西方七粁位の處に、炭層があるともいはれて居るが正確なる調査がない。工業の中心は黒河であつて瑷琿は電燈公司油坊ゝ等

を僅かに見られる程度である。

本縣の交通は水陸共に大黑河が中心である。璦琿には黑河から北黑線が通じ（驛は街よりはなれて居る）。又、鐵路局のバスが運行してゐる。夏季は水運に乘客を奪はれるが、冬期は最も便利な機關である又黑河より璦琿を經て嫩江に至る道路開通し、物資の需給に最も便利である。又北方呼瑪縣の方には、冬季橇トラック等を通じて居る。

（黑河の記事省略す）

黑河諸機關

黑河省公署	璦琿縣公署	日本領事館分館	商工公會
郵政局	電報局	電話局	警察署（直轄（一）派出所（三）水上派出所（一））
稅捐局	專賣局	黑河地方法院	黑河地方檢察廳
區法院	區檢察廳	稅關分卡	中銀支行
大興公司	國際運輸	協和會省本部	營林署
糧穀會社出張所	興農合作社聯合會		興農合作社（璦琿縣）
黑河省立醫院	滿拓公社黑河出張所	電業營業所	放送局新設豫定
黑河（農科）國民高等學校（省立）	黑河實業女學校（省立）	滿人小學校	日本人小學校
國境警察隊	北滿江運局黑河埠頭事務所		生活必需品會社支店
興銀支店	勞工協會支部	勞工協會出張所	

都邑 璦琿

大黑河の南、元璦琿縣城であつたが、滿洲建國後、縣公署は黑河に移された。一八五八年露西亞との間に結ばれたあの璦琿條約を以て有名な所である。以前は盛な中心の街であつたが、現在は黑河に繁榮を奪はれて居る。農作物、木耳を產するが產額は僅かで黑河の方に送つて居る。大黑河から璦琿まで、

鐵路局の定期バスが通つて居るが、北黑線の璦琿驛は街から大分遠い處に設けられて居る。

璦琿諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局
國際運輸　電話局　日本人小學校

其他

警察署所在地

西四嘉子　張地營子　西崗子　大五家子
逢源五道溝

郵便局所在地

西崗子　額雨爾　三道卡　五大家子
四季屯　托力木　陟溝子　三站
神武屯に日本人小學校あり

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
璦琿縣	黑河省各縣概況	民政部	康、元、一〇
璦琿縣概況（縣公署）	民政部月刊	同前	康、二、一二
璦琿縣	北黑線沿線背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
璦琿概況	同表題	哈爾濱建設事務所	昭、九、五
璦琿縣事情	滿洲行政（二の四）	滿洲行政學會	康、二、四
大黑河概況	同表題	哈爾濱建設事務所	昭、九、一一
大黑河事情	同表題	哈爾濱商品陳列館	昭、六、一〇
黑河地方を中心とする黑龍沿岸事情	同表題	黑龍江省公署	大同二、九
黑河に於ける砂金鑛業概要（黑河省公署）	民政部調査月報	民政部	康、四、二
黑河地方に於ける農業經濟の檢討（小池和一）	滿業時報	哈爾濱商品陳列館	昭、一一、一
璦琿縣全圖	同表題	縣公署	康、三、一

璦琿縣……黒龍江滿洲事情案内所　昭、一一、四
璦琿、黒河……省政彙覽(黒河省篇)　國務院情報處　康、三、二
黒河(廣江寛一)……新天地(一八の三)　新天地社　昭、一三、三

漠河縣

歴史

本縣は初め漁獵に從事してゐた鄂倫春によつて砂金が發見せられ、爾來哥薩克兵及支那無賴の徒集り來り、忽ちにして繁盛なる一邑を造つたのであるが、光緒十二年璦琿副都統は兵力によつて露人を驅逐し、支那無賴の徒を馘首してより一時衰退したが、光緒十五年省民會社漠河採鑛會社が設立せられて後漸次發達し民國三年縣設治局が置かれ同年治縣せられ滿洲建國に至つたものである。康德六年六月興安北省の北端一部を編入され縣面積が稍增加してゐる。

地勢

東は漠河東境に位する安羅卡より南走する南羅爾赤山及呼里阿林山脈を距て、鷗浦、呼瑪の二縣に連り、南は莫古奇河を縣境として興安嶺に西は洛古河、元寶山を以つて北省と向背、北は黒龍江を國境として蘇領に對峙してゐる。縣城附近を除く全縣は山又山高峰峻嶮の連鎖である。この幾多の山脈峡谷を洗つて黒龍江に流入する河川も多く北流又東流してゐる。此縣は滿洲國最北の縣であつて北緯五〇度五〇分位より五三度三〇分位に位置してゐる。

縣の物産

耕地少く農産の見るべきものなく、のみならず食料品不足で他より移入を仰いでゐる。縣内より毛皮の產あり白兎皮、灰鼠皮、黄鼠皮等がある。縣内砂金の產出多し。

都邑漠河

漠河縣城として黒龍江に沿ふ最北の都邑である。全戸數の四割が露滿人共棲家庭であるといふ事は蘇

聯と密接なる國境街を現してゐる。今より約六十年前に開設せられ、金の産出豐に治安に異狀なく、黄金熱盛であつた頃は縣城の人口一萬人を有して璦琿、黒河に次ぐ都市であつたといふが現在では縣内全體の人口でもわづかに千二百人位との事で縣城でも僅々四五百を數へる程である。交通は夏季の來船を待つか冬のわづかの橇による外なく、夏季汽船の來航は縣城民の最も樂しみとするもので此便船によつて黒河方面から食料品、日用雜貨品等が運搬されるのである。

漠河諸機關

漠河縣公署　警察署　郵政局
其他

警察署所在地

額穆爾　旁烏河　開庫康

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
漠河縣	黒河省各縣概況	民政部	康、元、一〇
漠河縣	黒龍江省(下)	滿鐵調査課	昭、二、一〇
漠河縣	北黒沿線後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
漠河縣事情	滿洲行政(一の二)	滿洲行政學會	康、元、一二
漠河紀行	露滿蒙時報(一九三二)	哈爾濱商品陳列館	昭、一〇、一一
ぼくが紀行(木內德)	中行	滿洲中央銀行	康、二、一
漠河縣	黒龍江	滿洲事情案內所	昭、一一、三
漠河	省政彙覽(黒河省篇)	國務院情報處	康、三、二

概史

鷗浦縣

宣統元年卡倫制度を設立せられてからは呼瑪爾卡に屬し、民國十八年始めて鷗浦設治局が設けられた

滿洲事變後、馬占山僞政府に苦められたが建國後、鷗浦縣として現在黑河省に屬してゐる。

地勢

南は呼瑪縣に、西は漠河縣に境し、東北方は黑龍江を以つて蘇領に對する略々三角形をなした縣である。北緯五十二度以北に位して居る。地勢は西南及西北より、東北に向つて傾斜し、西羅爾奇山脈は西北境に横はつて居る。人口極めて少く全縣に渉り一、〇〇〇に充たない。

縣の物産

産業方面を見るに、オロチョン族は山林地帶林間に獸皮のテントを張つて轉々と歩き、狩獵にのみ從事して居る。其他の部落民は農業を主とし、筏夫を副業とし、四戸は縣城に於て雜貨店を營んで居る。小麥、メリケン粉、粟等を大黑河から移入して食品として居る。縣內の既耕面積わづかであつて、小麥燕麥、馬鈴薯等の產額は、食糧品として不足する位しか出來ない。毛皮、木材、砂金等が出るが產額は明でない。

都邑鷗浦

縣公署の所在地であつて、黑龍江河川島嶼上にある。島嶼の面積は六平方滿里、周圍は河幅四百米の水流に圍繞され、對岸は蘇領チリネンイ部落(人口七百人と推定さる)に接して居る。縣公署や、國境警備隊がある位で、背後の金廠も不振の狀態であるし、雜貨商が僅かに四戸あるばかりである。

山島鄉

縣城の下流五滿里を距てる所に在る。舊來縣城は屢々洪水に見舞はれたので漸次當地に避難する者が多い。尙ほ小學校及農會が設置せられて居る。

鷗浦諸機關

鷗浦縣公署　警察署　郵政局

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
鷗浦縣	黑河省各縣概況	民政部	康、元、一〇

鷗浦縣……………………………北黒線沿線背後地經濟事情　鐵道總局　昭、二、一一
鷗浦縣事情……………………滿洲行政(一の二)　滿洲行政學會　康、元、一二
鷗浦縣視察報告………………專賣月刊(九)　專賣公署　康、元、一二
鷗浦縣…………………………黒龍江　滿洲事情案内所　昭、一一、四
鷗浦……………………………省政彙覽(黒河省篇)　國務院情報處　康、三、二

呼瑪縣

概史

本縣は元設治局と稱し、民國元年金山鎭に設置せられ、同三年公署設置せられて、現在の呼瑪に縣城を移した、縣内の産金豐富な爲めに入口たる金山鎭等は人口一萬にも及んで居たとの事である。日本人も當時は五〇〇名も入りこんで居た程繁榮して居たが、民國七年頃より産金額減少し、十七年の水害、十八年の露支紛爭により、沿邊の都邑は燒却掠奪を受けて一時に疲弊し、滿洲國成立後も馬占山の返逆により威令行はれず、康德年間に入り漸く復興の途を辿るに至つて居る。

地勢

本縣は北西から南東に流るゝ黒龍江を以つて蘇聯と對し、北域は呼瑪河の上流の一部を以つて、鷗浦縣、西域は漠河縣及嫩江河を以つて興安東分省に接し、南方は倭若河、寛河を以つて夫々嫩江縣、璦琿縣と境して居る。地勢を見るに本縣は、其の大部分丘陵又は山岳地帶に屬し、呼瑪縣城下流南北三十滿里東西十二滿里の平坦地をはじめ、黒龍江沿岸に多少の平坦地を見る位であつて、其他は五〇〇米位の小山を最高として丘陵が處々にある。河川は呼瑪爾河を第一とし、源を漠河縣背後の大興安嶺に發し、呼瑪縣の中央部を婉曲し、呼瑪縣城の南に於て黒龍江に注いで居る。大體此呼瑪爾河の本流を以つて縣内を灌漑し、他の小河川も皆黒龍江に流入して居る。

縣の物産

産業方面に於て、農業は既耕地少くその上例年の水害のため、農産少く主なる小麥の産額すら縣内の消費に多額の不足を來し大部分は黒河から移入して居る。然し土質良く小麥、燕麥等は良質のものを産して居るので問題は將來に殘されて居る。主なる農産物は、小麥、燕麥、谷子(粟)、馬鈴薯等である。産額は四萬一千圓に上らずすべて縣内消費である。

呼瑪河流域は黒龍江沿邊中有數の砂金地帶である。物資の運搬困難な上、小匪賊の爲め、困難な點が多いが、採金會社の事業が進められて居る。裕利金廠、鳳昌金廠等がある。林業は金山鎭背後地及び西北漠河縣境には有望な密林があるが、未だ生産的に斧を入れて居ない狀態にある。狩獵は專ら棲林人(オロチョン)により行はれ、狼皮、狗皮、等が主である。工業は製粉工場として、縣公署二粁の地點に三大公司がある。小麥の耕作から製粉まで、同公司で行ひ生産品は縣内消費である。商業は殆ど振はない。哈爾濱から大黒河に來る物資を更に購入するので物價が非常に高い。

都邑呼瑪

此地は地名を古站と稱す。其由來は康熙年間當地方を占領せる露人が遠征した當時此地に兵を駐屯してゐた事による。呼瑪縣々城であるが人口は少く縣内の金鑛は上流地區にあるため採金業者は多く金山鎭の方に住んでゐる。

交通は夏は水路、冬は主に江氷面を交通すること他縣と同じでその爲め道路は發達せず、陸路に於て西に走る採金、採木の爲めの道路あるに過ぎない。交通機關も亦極めて不十分である。汽船は黒河、漠河間を一週一回航行し、黒河、呼瑪間は上航四十時間、下航十二時間を要する。

呼瑪諸機關

呼瑪縣公署　　警察署　　郵政局　　營林署分署

金山鎭

對岸は蘇聯ウシヤコフを望み背面には近く山を負ふ。十五年前には當地は人口一萬五千、戸數二千五

百戸にも上り金鑛地への要衝をなして物資の供給に一大繁榮を展らき、貨物運搬用の馬匹のみでも千頭以上を算した一方、對岸ウシヤコフとの貿易も盛に行はれた所である。其後情勢の變轉と共に衰亡著しき折柄、民國十八年の露支紛爭に際し燒拂はれて戸數も慘減した。乍併依然として縣下の自然的經濟中心をなす所から縣城に比べて尚ほ幾分の活氣を帶びてゐる。

金山鎭諸機關

警察署　郵政局　國際運輸

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
呼瑪縣	黒河省各縣概況	民政部	康、元、一〇
呼瑪縣	黒龍江省(下)	滿鐵調査課	昭、二、一〇
呼瑪縣	北黒線沿線背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
呼瑪縣事情	滿洲行政(二の三)	滿洲行政學會	康、二、三
呼瑪縣の金鑛業	民政部調査月報(一の二)	民政部	康、三、二
呼瑪縣	黒龍江	滿洲事情案内所	昭、一一、四
呼瑪	省政彙覽(黒河省篇)	國務院情報處	康、三、二
呼瑪爾地方地名	滿洲木材通信(一四六)	滿洲木材通信社	昭、一三、五、二六
金山鎭	同前　(一四六)	同前	同前

奇克縣

概史

清朝成立前に於ける本縣下の住民はダホール、オロツチョン族等であつた。主として狩獵を事としてゐるが中には農耕に從事してゐる者もある。一六五一年頃より露西亞人の南下に伴ひ清朝の邊境政策も進み、一八五八年璦琿條約が締結せられてからは滿漢人の移住自由となり、璦琿縣下を始め本縣までも

移住人增加し漸次開拓せらるゝに至つた。今より凡そ二百五十餘年前頃より吉林省或は璦琿縣方面より移住者入り來り、又對岸露領との交易の爲めに本縣城奇克特(チカト)をはじめ、車陸等に留る商人も入り來り更に菜園を營み農業に從事する者等出で、東西小丁子屯等の部落が出來た。しかし本縣に入るに極めて交通が不便であつたが海倫―龍鎭―奇克特に來る街道六九〇滿里の道路が民國五年開通してより穀物の搬出、貨物の移入が行はるゝに至つた。黒龍江岸に卡倫制度が實施せられた宣統元年頃は璦琿廳の管轄區域で現縣城奇克特に、初代卡官が置れたゐた。民國四年現在の縣公署の濫觴である縣佐公署が置れたが、璦琿縣の管轄下にあつた。民國十八年設治局更に同年縣政府と改稱し始めて獨立したる一縣となつた。滿洲建國後大同二年二月初代縣長の就任あり縣公署と改められ三年二月正副參事官の入縣を見た。

地勢

南部縣境を東西に縱走する吉里爾哈山嶺は自然の境棚となり又其派生的丘岡地隨所に突起し居る關係上山岳地帶多く全面積の約十分の一は山岳地帶である。然し山岳地帶といつても高原性のものであつて傾斜が極めて緩慢な所が多い爲め近年はかゝる地方は漸次耕作せられてゐる。河川は殆ど黒龍江に注ぐものであつて主なるものは遜河、霍爾津河等あり、その他幾多の小流があるがこれらは乾燥期は全然涸渇してゐるが黒龍江本流の增水或は雨季になると河となり氾濫するのが常である。又之等の流域を始め、山麓には濕地帶多く全々耕作に適せざるのみならず、車馬の交通不能なる箇所が多々ある。

縣の物産

縣內農產物の主なるものは小麥、大豆、穀子、包米、大麥、蕎麥等又馬鈴薯、各種豆類等大部分普通作物である。これらは一部黒河に移出せらるゝ大豆、小麥、包米を除いては殆ど縣內消費に充てられる然し麥粉類は不足であつて夏季富錦方面から一萬布度餘の移入を見る。

都邑奇克（奇克特）

住時オロチョン族が、狩獵、漁獲等を事として住んでゐた。此地に始めて漢人が移住し來つたのは光緒二十七年露國輪船に薪を供給する爲めであつた。宣統二十三年頃やうやく縣城の形をなし、專ら對露貿易を目的として建設せられた街で、民國三年頃から十三年頃が最も盛であつて我シベリヤ出征頃は相當に漢人商人が來住し、日本人も入り込んでゐたとの事である。對露交易が杜絶して以來衰微し、昔の俤がさびしく殘る樣になつた。附近の農民は對岸よりの移住者が比較的多く、耕地の開墾又は作業には馬力又は牛力による大陸式農具の耕地機、播種機、刈取機等を使用してゐる事は特記すべき事である。滿洲建國後、縣城として漸次改善の施設をみてゐる。

奇克諸機關

奇克縣公署　　警察署　　郵政局　　電報局

電話局　　興農合作社　　生活必需品會社配給所

霍爾莫津屯

璦琿より一一〇滿里の下流にある。東西二部落から成り本縣に最も早く滿漢族の移住し來つた所である。土地肥沃農耕盛に行はれ璦琿に次ぐ主要都市であつたが、露西亞軍隊のため家屋の燒却、家財の掠奪等に會ひ匪賊の襲撃を受け現在は全く疲弊してゐる。

乾岔子屯

土地肥沃、南方丘陵地帶は悉く漢人移住以來よく耕作されて居り、縣内最も農業の盛なる地方である警察、小學校等の施設がある。

郵政局あり

小丁字屯

東西二部落に分れ、對岸露領に主要鑛ポヤルコワを控えて居つて、對岸交易盛であつた時代に發達してゐたが今は衰へて居る。滿人の妻となつた露西亞婦人及混血兒が多い。

車陸鎭

奇克の下流六十滿里の地にある。小さい邑であるが、古くから知られてゐる黒龍江沿岸の埠頭である。

對岸交易と共に、オロチョンを唯一の顧客として發達した部落である。漢人の入り來つたのは古い歷史でなく漢人部落を形成したのは民國七、八年頃からである。オロチョン族の協領公署があつてこの地方一帶のオロチョン族を統制してゐる。

郵政局あり

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
奇克縣	黒河省各縣概況	民生部	康、元、一〇
奇克縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、二、一〇
奇克縣	北黒線沿線背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
奇克縣事情	滿洲行政(二の二)	滿洲行政學會	康、二、二
奇克縣	黒龍江	滿洲事情案內所	昭、一一、四
奇克	省政彙覽(黒河省篇)	國務院情報處	康、三、二

概史

遜河縣

清朝末期より民國初期の間、遜河流域及小興安嶺の支脈に連る山岳丘陵の森林地帶に僅少のオロチョン族、ダフリ族、滿洲旗人等居住し、狩獵を生業と爲してゐたが此等民族の統制指導と開墾を掌らしむる爲、オロチョン佐領に屬する公署を東新屯(現縣公署東方一滿里の地點)に設置したのが創めである。

民國五年八月稽墾局が開設せられ農耕移民の招致を計りたる結果、璦琿、龍鎭方面より南方移民の來住漸く繁く漸次遜河流域地帶に定住開墾に從事するに至つた。民國十七年十二月稽墾局を設治局と改稱杜

合英局長縣行政機構の骨子を定め計劃的の事業であつたが、滿洲事變の勃發となり大同二年馬占山の黒河僞政府樹立となり暴政の限りを盡したる結果、商家は閉店し農民は離散し縣政全く混沌たる狀態に陷つたのであるが、大同二年三月滿洲國に入り設治局は縣公署と改稱せられた。遜河を中心として農耕地も省内他縣に比し發達しつゝある縣である。

地勢

本縣は小興安嶺の支脈を以て東は奇克の一部及烏雲に接し、南は未放山林を距てゝ烏雲と隣りし札克達奇河及丘陵によつて北安、孫吳に境し北は吉里爾哈山嶺を以つて一部は璦琿及奇克に續き四面丘陵に圍まれて、盆地狀を呈してゐる處は濕地が多い。

縣名の起源をなしてゐる遜河は縣の中央を東に流れ幾多の支流と合して烏雲縣を經て黒龍江に注いでゐるが舟楫の便はない。

縣の物產

遜河流域並丘陵地帶一帶は土地が肥沃であつて農耕に適し牧畜及農業地として人口も集中して居る。

主なる生業は農業で小麥、包米、粟、大豆を主とし、木耳、毛皮等の特殊物產少々あり。

都邑遜河

大同二年三月現在の縣公署が設置せられたのであるが馬占山の僞政府時代の暴政の爲め、商家は店舗を閉ぢ農民は離散する等大打撃を蒙つた。奇克に九十滿里、龍鎭に三百二十滿里、璦琿に二百滿里の里程があつて、夏季の水運も直接黒龍江に面してゐない爲め其恩惠なく、交通極めて不便であつたが、龍鎭よりの國道建設成り、孫吳よりの自動車開通を見漸く外界との接近が成る樣になつた。城内に二十四五軒の店舗がある。

遜河諸機關

遜河縣公署　警察署　郵政局　電報局

電話局　興農合作社

警察署所在地　松樹溝

其他

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
遜河縣	黒河省各縣概況	民政部	康、元、一〇
遜河縣	北黒沿線背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
遜河縣事情	滿洲行政(二の二)	滿洲行政學會	康、二、一
遜河縣圖	同表題	縣公署	康、三、一
遜河縣	黒龍江	滿洲事情案内所	昭、一一、四
遜河	省政彙覽(黒河省篇)	國務院情報處	康、三、二

烏雲縣

概史

今より五十年程前まで即ち民國前二十年頃未だ黒龍江上航船の往來を見ない頃は小興安嶺森林中に居住し遊獵を事としてゐるオロチョン族が居住して居たに過ぎないが、江上の航船を見るに至つて山東人の哈爾濱方面より移住し來る者漸次增加し、對岸露人との商取引を以つて生業としてゐた。民國初期には住民次第に加はり、對岸との取引も多くなり、又定住して農業を營む者も增して來たので、民國五年初めて現在縣公署敷地に設治局を設け地方行政を開始した。民國十八年設治局を廢して縣を置き縣政を施行した。十八年の露支紛爭の折は縣長は縣民を率ひて嫩河縣に避難すべく縣城を出て西方に向ひたる時停戰となり直ちに引返して來たが其間に、縣内無賴の徒によつて縣城全部掠奪せられてしまつてゐた。滿洲事變によつて直接の影響はなかつたが、馬占山僞政府の支配下に置かれ匪賊暴民の橫行甚しく加ふ

るに天災は農作物皆無の狀態に陷り、住民の窮乏其極に達し食ふに食品もない有樣であつた。大同二年三月始めて縣長黑河より入城し來り窮民を救濟し、黑河方面より物資を移入し解氷と共に、哈爾濱方面からも物資を仰ぎ縣民漸く生活の安定に入る事が出來た。

地勢

北境は黑龍江を隔てゝ蘇領と對し南は小興安嶺支脈山林地帶を距てゝ通北、湯原縣に境し、東は佛山に西は遜河縣及び奇克縣の一部に接してゐる。縣內山地多く平野はわづかに江岸附近に過ぎず縣人口も三千餘に過ぎない狀態で耕地面積も少ない。縣內沼澤多く蚊、虻等の襲來甚しく爲に交通を妨げらるゝ事甚し。

縣の物產

農業は自給自足の目的で營まれるに過ぎない。小麥、粟、包米等、又木材、皮革、木耳等。

都邑烏雲

烏雲縣城である黑河より三一〇粁、同江より四〇〇粁、兩地のほゞ中間に位する。附近に本縣の特產木耳の產出多く年額四、〇〇〇布度三萬圓に達し、主として哈爾濱に移出せられる。近年黑龍江の水流に變化を來して當地は淺瀨となつた結果、上流約一里(日本里)の地が新に烏雲埠頭となり、單燈照と稱する港町を生じ縣城內商人も漸次該地に移轉する傾向となり商勢は遙かに縣城を凌いでゐる。

烏雲諸機關

烏雲縣公署　警察署　郵政局　電報局
興農合作社
其他

警察署所在地

上道幹

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
烏雲縣	黒河省各縣概況	民政部	康、元、一〇
烏雲縣	北黒線沿線背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
烏雲縣農業移民實施計畫	民政部月刊(二の七)	民政部	康、三、七
烏雲縣事情	滿洲行政(二の一)	滿洲行政學會	康、二、一
烏雲縣	黒龍江	滿洲事情案內所	昭、一一、四
烏雲	省政彙報(黒河省篇)	國務院情報處	康、三、二

佛山縣

概史

民國五年興東道を改めて縣に分ち黒河道に包含せしめた當時、本縣は東半部は蘿北縣に、西半部は烏雲縣に屬してゐたのであるが、民國八年朝陽鎭より太平溝にかけて一つの設治局區劃となり、民國十六年設置の際、縣城を觀音山に設けた。該處は一連の山峯在り、巖石屹立して秀麗を極め、俗に觀音山と稱せられる所から之に因んで縣名を佛山縣と命名し、後縣城を佛山鎭に定めた。其後大水害の厄にも拘らず更に再建を見たが、偶々民國十八年蘇支紛爭に際し、蘇聯側赤軍の越境攻略に縣公署を始め城は兵燹にかゝり、灰燼に歸して一般人民も亦逃散した。爾來農民の歸農するものも少なく部落も漸次衰微して現在では朝陽鎭を佛山と稱して縣城として居る。

地勢

本縣の位置は黒龍江に沿ひ、下流は嘉音河を以て蘿北縣と境し、上流は烏雲河を隔てゝ烏雲縣に對して居る。小興安嶺の東端は此縣より對岸蘇領に伸び、其間を黒龍江によつて斷絶されてゐる爲め、觀音山のあたりで岸壁は兩岸に峻立して居る。縣內も山地が大部を占めて居り、殆んど針葉樹と雜木によつて蔽はれて居る。

縣の物産

農業は縣内人口少く相當廣大なる可耕地があるが、既耕地少く農産の主なるものは大豆、小豆、粟、包米、小麥、蕎麥等でこれらは産額も少く、わづかに縣内住民の消費を充して自給自足するに過ぎない。縣内森林は非常に豐富であつて、赤松の密林帶をなしてゐるが、建築用材の見るべきものは少く、薪炭用として伐り出して居る。商業としては縣内移出すべきものを有せず少量の木耳を出す位であるが、農作物の不十分は、他よりの移入を仰がねばならない。綿絲布、雜貨等も主として富錦から移入されて居る。

都邑佛山（朝陽鎭）

現在縣公署の所在地で縣内人口の約半は此街に集中してゐるが、雜貨店五、飯店、肉店各二戸其他は農民である。當地方特産である木耳の集産地であつて黒龍江沿岸に出して居る。夏季の江上航行の外殆ど交通の道なく、冬期の生活用品は總て夏季に購入の必要がある程である。

佛山諸機關

佛山縣公署　警察署　郵政局　電報局
營林署分署

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
佛山縣	黒河省各縣概況	民政部	康、元、一〇
佛山縣	北黒線沿線背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一一
佛山縣	黒龍江	滿洲事情案内所	昭、一一、四
佛山	省政彙覽（黒河省篇）	國務院情報處	康、三、二

孫呉縣

概史

本縣は康德四年始めて設けられたる縣であつて、もと璦琿縣に屬してゐた土地である。土地の重要性

地勢

より、地方縣境の變更を見た際に、新に設けられたのであるから、古い以前の歴史は瑷琿縣と同じ。北は伸河を以て瑷琿縣に境し、東北は黒龍江岸である。東は遜河縣南は北安縣、西は小興安嶺を以つて、嫩江縣と背中合せをして居る

小興安嶺は縣の西部を南北に走り、支脈を以つて西部は殆ど山地帶をなし、東北黒龍江岸に向つて傾斜してゐるが、全縣大體に於て、山岳地もしくば丘陵地が多い。

縣の物産

もと瑷琿縣の一部に屬してゐた地方であるが、瑷琿縣は、黒河省中にて最もよく開墾せられてゐた地方であるから、該縣に屬した地方も割に、江岸地帶の方は耕されて居る。しかし何としても山岳地多く殊に露支紛爭時代より滿洲事變にかけての農民の離散疲弊は甚しい。小麥其他の麥類を生ずるが、開拓すべき幾多の山野を殘して居る。

開拓事業

青少年義勇隊孫呉訓練所がある。

都邑孫呉

滿洲建國當時まで殆ど知られぬ部落であつたが、北黒線開通と共に驛が設けられ、黒河に通ずる一主要驛となり最近急激に興つた街である。縣公署所在地である。

孫呉諸機關

孫呉縣公署　警察署　稅捐局分所　郵政局
電報局　電業營業所　電話局　日本人小學校
生活必需品會社配給所及倉庫　勞工協會出張所
其他

郵政局所在地

淸溪　孫呉訓練所內

三江省

三江省

佳木斯市

清の雍正十年（凡そ二百年前）三姓副都統が置かれて其管下にあつたが、下つて宣統元年始めて樺川設治員が佳木斯に來つて行政を掌つた。其後樺川縣公署は、悅來鎭に移つてゐたが、滿洲建國後大同元年五月、現在の佳木斯の地に樺川縣公署を移し後三江省の省城ともなつたのである。

佳木斯は元來特産物の集散地として發達したものであつて大商戶は殆ど糧棧業を營み、他の雜貨商はこれの附隨として發展したものである。大豆の出廻年五千車、小麥は松花江沿岸第一位で年一千車の出廻を見せて居る程である。明治四十年頃の佳木斯の戶數は百餘にすぎず、大正五、六年頃より鶴立崗炭礦、梧桐河金鑛の開鑛によつて急速の發展をなすに至つたものであるが、民國六年（大正六年）に白龍匪の襲撃を受け、同九年戰東、鎭中華等の匪襲に逢ひ、佳木斯は占據されて一時疲弊したのであるが、張作霖の松花江流域二十萬移民計畫により、佳木斯も亦順次移民の爲人口增加し來つたのである。滿洲建國當時は人口二萬に充たない有樣で、急激なる繁榮をみたのは、こゝ二、三年間の事である。佳木斯の繁榮を來した點に就てみるに、省及縣の政治中心になつた事、松花江上の良埠頭であること。特産出廻の中心地である事、軍事上の重要性を有してゐること、圖佳線の開設及びそれに伴ふ各線への連絡、鶴立崗炭礦、梧桐河金鑛を控へて居る事、更に日本開拓村が南方に開け、日本人間にも佳木斯開拓民の名に於て急に傳へられた事等々が擧げられるであらう。

佳木斯都市計畫

康德四年十二月一日、滿洲國內治外法權撤廢の日市制を布かれ、佳木斯市は新興の市として誕生した。

佳木斯の軍事、產業、交通等あらゆる情勢は、必然的な重要性を加へ、各機關陸續として設置されるに至り人口亦甚しい增加を示して來た。三江省公署は不取敢將來に備へる爲、樺川縣公署土木局內に佳木斯都邑計畫部を置いてこれが準備を進めたのであるが、中央部に於ては、康德元年十一月には、旣に佳木斯都計案が決定せられてゐた。康德四年九月、三江省公署內に佳木斯市制籌備處を置き諸般の準備を進め、十二月一日市制施行に至つたものである。

都市計畫は、三十ケ年後に人口十八萬を擁する計畫のもとに、佳木斯驛を中心として北方松花江對岸三角洲を含む約四粁、南方は約四・五粁、東方約四・五粁、西方約五粁に亘る面積約七十平方粁の區域とし此內外緣幅員約一粁の環狀地帶を郊外綠地として留保し、殘部の中央部を市街計畫區域としてゐる。而して商業地域住宅地域臨江地域、工業地域、綠地域其他等の用途地域を選定して比率を定めてある。

道路及廣場、水路、公共建築地帶、學校用地、其他施設豫定として公園、運動場、社寺廟、市場、競馬場、荷揚場、屠宰場等も計畫內に含まれて居る。

佳木斯諸機關

三江省公署	佳木斯市公署	樺川縣公署	警察廳
稅捐局	商工公會(省、市)	郵政局	電報局
電話局	專賣署	佳木斯地方法院	區法院
佳木斯地方檢察廳	區檢察廳	興農合作社聯合會	興農合作社(樺川縣)
中銀支行	興銀支店	大興公司(二)	營林署
省立佳木斯農事試驗場	國際運輸	協和會省本部	電業出張所

佳木斯放送局　　佳木斯市立傳染病院　　同市立保健所　　佳木斯埠頭
佳木斯醫科大學(直轄)　　佳木斯師道學校(省立)　　佳木斯(農科)國民高等學校(省立)
佳木斯女子國民高等學校(省立)　　滿人小學校　　日本人小學校
佳木斯地方師道訓練所
青年學校　　勞工協會支部　　長發屯畜産學校

會社

株式會社梅田商會支店　　滿洲採金株式會社出張所　　佳木斯煤油批發股份有限公司
德祥東火磨　　同瑞昌　　北滿パルプ會社パルプ工場
糧穀會社支店　　滿拓公社佳木斯地方事務所
生活必需品會社支店及倉庫

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
東北滿の雄都佳木斯市	滿洲國現勢(五年版)	滿洲國通信社	康、五、七
新興都市佳木斯	東洋貿易(一七の八)	大阪市役所	昭、一三、八
佳木斯市域決定に關する件	同表題	内務局	康、四、九
佳木斯都邑計畫説明書	同表題	樺川縣公署	康、四、八
佳木斯(奈加田文郎)	觀光東亞(五の六)	奉天ビューロー	昭、一三、六
木都佳木斯の將來	滿洲木材通信(一五〇)	滿洲木材通信社	昭、一三、六
佳木斯都邑建設の概要	同表題	樺川縣公署	康、四、一
佳木斯市(水島芳靜)	躍進三江省	東亞出版社	昭、一三、四
佳木斯の現在と將來	滿洲交通(三の二)	交通部	康、五、四
佳木斯の水	南陽(六八)	國際運輸社員會	昭、一二、一一
佳木斯を中心とする河下特産事情	同表題	滿洲中央銀行調査課	康、三、八
佳木斯	同表題	奉天ビューロー	昭、一三、七

方正縣

概史

方正縣地域は蒙古元朝の時代には呼爾王府といふ一省内に編入されてゐた。雍正十年新に組織せられた三姓副都督府に編入せられ、光緒三十二年まで其の管下にあつたが副都督府廢止せらるゝに當り、黑龍江省通河縣、吉林省方正縣を包括せる大通縣を組織し長官は通河縣の方に駐在してゐた。宣統元年清朝は松花江を以つて兩省の境と爲すに決定したる爲め、松花江左岸になる大通縣の一部は黑龍江省に入り、右岸になるものは吉林省に編入されて方正縣と命名された。本縣長官は方正泡湖の南に位する一小村に駐在し、此湖水名より方正縣なる名稱を生じてゐる。康德元年十二月一日より三江省に編入されたのである。

地勢

北部は松花江を以つて通河縣と境し、西部は賓縣、南部は延壽縣及寧安縣と接し、東部は松花江及牡丹江によつて依蘭縣と界してゐる。山脈は縣內西部を南北に縱走する老爺嶺があり各河川の分水嶺を爲してゐる。又龍爪溝嶺は延壽縣境を爲し何れも森林地帶である。平野と特筆すべきものはないが牡丹江の西岸松花江の南岸一帶は農業に適し、螞蜒河と松花江との合流地域は特に肥沃である。松花江、牡丹江の二大河あり、四道河、柳樹河、營門石溝は牡丹江に、羅拉密河、後黑里河、螞蜒河は松花江に注いでゐる。

縣の物産

農産物は大豆を第一とし、粟、小麥、高粱、玉蜀黍等其他雜穀、多少の水稻を出す。

主要農産は伊漢通に集められ、水運により哈爾濱方面に搬出される。

鑛、工業の見るべきものなく、商業も二、三の稍大資本家をみるのみで主として糧棧である。

開拓事業

本縣には縣城の東北松花江岸近くに、第八次開拓民が一ヶ所入植して居る。大羅勒密で、大羅勒密埠頭から六粁である。

都邑方正街

螞蜒河が松花江に注ぐ處に位し、宣統元年縣公署が置かれた頃は戶數僅に七十戶人口三百五十人と稱せられたが、現在は二千戶以上、人口一萬二千餘を數へ對岸通河縣城附近は土地豐饒である。松花江航行の定期船は伊漢通の埠頭に寄航し、伊漢通より縣城方正までの交通便である。

南方珠河驛より延壽を經て當地に來る民營バスの便がある。

縣內の國營バスは通河より來り、方正を經て開拓地大羅勒密に至る線がある。

方正街諸機關

方正縣公署	警察署	稅捐局	營林署
郵政局	商工公會	協和會	電報局
電話局	滿人小學校	興農合作社	勞工協會出張所

其他

警察署所在地	會發恒	大羅勒密		
稅捐分局所在地	南天門	會發恒	伊漢通	
郵政局所在地	南天門	會發恒	得墨利	大羅勒密

資料

題名	數名	發行所	發行年月日
方正縣	三江省各縣概況（後）	民政部	康、二、一
方正縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
方正縣內務行政實業教育概況報告	同表題	方正縣公署	康、二、八

依蘭縣

概史

雍正の頃に始めて土地の開拓が計られ、松花江沿岸の中心地として副都統が三姓に設置せられた。哈爾濱等が未だ一寒村に過ぎなかつた頃既に當三姓は地方都市であつた。而して光緒三十四年頃に至つて荒地開墾事業は益々進捗し、土地の發展と共に依蘭府を設け、其後、宣統元年始めて東北路兵備道が設けられ、副都統を改變して旗務提調とし、今の樺川、富錦等は凡て依蘭府の管轄下にあつた。其の後民國二年になつて依蘭府を改めて、依蘭縣となし兵備道は觀察使となり、更に三年道尹を設けた。康德元年十二月三江省下に編入されてゐる。康德六年六月の改制により樺川縣及び勃利縣との境に縣境の變更を見た。

地勢

松花江南岸に臨み、北は湯原、東に樺川、南は勃利、西は方正縣に界す。南方寧安より流入する牡丹江は北流し、依蘭縣城西方にて松花江に注ぎ、樺川縣より勃利に來つて更に本縣東部に流入する倭肯河も亦縣城の東部で松花江に注いでゐる。縣内の山嶺は完達山脈の支脈であつて蜿蜒として境界内に及んでゐる。西南部の最高處は約一千三百餘尺で地質の多くは沖積層に屬してゐる。

縣内地味肥沃、將來人爲の伸展と共に、理想的農業地域となるであらう。縣の西南は山林地帶であるが餘の大半は平坦なる沃地又は低滑なる崗を爲して居る。又水田に適する地區多く鮮人によつて開拓せられたる水田五千晌以上に及び將來とも有望である。

縣の物産

農産の主なるものは、大豆、穀子、高粱、包米、小麥、水稻、麻類其他農作物は何れも適して居る。縣城依蘭より水運によつて搬出せらるゝ農産物大豆、小豆は年約九萬瓲である。

開拓事業

林業は城南方の大小鍋山、青溝子に行はれ、楡、樺、楊、柞、松等である。產額は多くない。林業に關しては營林署の方にて統轄してゐる。

家畜は馬、牛、豚、騾、其他家禽等。

鑛業方面では、金鑛三、石炭一、中、黑背馬糞包の金鑛は、清朝時代より採鑛してゐる。金質佳良、牡丹江西岸の石炭は縣城より近いがまだ採掘の運びに至らない。

商工業は縣城中心、商家の大なるもの、十三、何れも資本金一萬乃至三萬二千位である。製粉業の大なるもの二、油坊其他小規模の工業をみる。

本縣内には日本農業開拓團第八次が二箇所に入植し、松花江寄りで依蘭港から六粁にして馬大屯、今一ヶ所の北靠山屯は二十粁である。

都邑依蘭街（三姓）

舊名を三姓ともいひ、二百餘年の古都市である。松花江下に於ける政治、經濟、文化の中心として古くより知られた地であつたが滿洲建國後、大同元年の水災、匪害と其後更に匪賊の襲撃をうけ、交通不便の爲め物資の集散少く、一般經濟が振はなくなつた。殊に最近圖佳線の開通は水路は、佳木斯方面へ陸路は勃利方面への物資集散を奪はれた形である。牡丹江と松花江の合流點にあつて、市街は城の内外より成り、商家は主として西門外に集中し、家屋の構造も壯大であるが、位置と他方面の交通發達に妨げられ不振の狀態に陷りつゝあり昔日の感がうすれて行つてゐる。

國營バスはよく發達し、哈同線は此地を過ぎて、佳木斯方面に伸び東方開拓地の湖南營、千振方面に至る線もある。又依蘭より勃利驛に出る事も出來る。

依蘭街（三姓）諸機關

依蘭縣公署　警察署　稅捐局　郵政局

商工公會	區法院	區檢察廳	專賣局
營林署分署	興農合作社	中銀支行	大興公司(二)
國際運輸	協和會	監獄	電報局
電話局	依蘭(農科)國民高等學校(省立)		滿人小學校
縣立醫院	日本人小學校	金谷農場(合資)	依蘭電業股份有限公司

其他				
	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所	街公所	
警察署所在地	宏克利	太平村	雙河村	興隆村
	道台橋	三道通		
税捐局分所所在地	太平鎭	雙河鎭	宏克力	
郵政局所在地	太平鎭	道臺橋	三道崗	二道河子
委託日本人小學校所在地	興隆鎭	洪克利	團山子	
	北靠山屯	南靠山屯		

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
依蘭縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、元、四
依蘭縣事情	同　表題	滿洲國地方事情編纂會	康、元、一一
三姓概況	同　表題	領事館警察三姓分署	昭、一一、六
依蘭地方の概況	滿鐵調査月報(一六の一)	滿鐵	昭、一一、一
依蘭縣に於ける糧石集散取引狀況	同　表題	依蘭出張所	康、元、六

三姓地圖……同　表題　軍政部　昭、七、一一
依蘭縣一般狀況(日譯)……同　表題　依蘭縣公署　康、三、一二
依　蘭……滿洲木材通信(一五二)　滿洲木材通信社　昭、一三、七
依蘭縣經濟事情……金融合作社管內經濟事情　金融合作社聯合會　康、五、一二

勃利縣

概史

當縣は依蘭、寧安街道の舊驛站である。俗稱丘站を中心とする倭肯河上流地帶で、民國三年治局が設置され、同六年に勃利縣と改稱された。現在は三江省管下にある。康德六年六月西部を林口縣に割き、依蘭縣、樺川縣境に變更を見てゐる。

地勢

縣の東北は、寶清縣に、北西は樺川縣に、西部は依蘭縣に境し、東南は縣境から百二十滿里哈達嶺を以つて密山に、西南はわづか新設の林口縣に境してゐる。東北に奔松子嶺、老嶺、東部に哈達嶺山脈、東南部に龍爪溝嶺、西南部に牛心頂子山脈、各々縣境を爲し縣の中央には東西に窯庫蘭嶺及大淸山が走つてゐる。河川としては倭肯河の支流網狀に分布し灌漑に便してゐる。主要なるもの大茄子河、對頭錯子河、杏溝子河、偏臉子河、連珠崗河、集心河、烏斯渾河は數多の支流を入れて牡丹江に注ぎ、各支流沿岸は耕地として利用されてゐる。平野は各河川を中心に中小平野が多い。

縣の物産

農產、總面積に對する可耕地三七・六%、不可耕地六二・四%、現在既耕地は未耕地の半位で大豆、小麥、粟、高粱を主とし、煙草、麻等を產す。

畜產、豚、馬、牛等。

砂金は小石頭、大石頭を中心に採掘、其他、銅、銀、石灰、花崗岩等。石炭は埋藏多量一億瓲と推測

せられ良質であり、鑛區も廣いが採掘はされてゐない。

開拓事業

本縣内には第八次までの集團開拓民は入植してゐないが、青年義勇隊の勃利大訓練所がある。

都邑勃利街

市街は東西大街、南北大街等六間道路を以て成り、商店は十字街に並んでゐる。鐵道敷設以前は依蘭との交通頻繁で、哈爾濱よりの物資の搬入及搬出は依蘭(三姓)と爲されてゐたが、圖佳線の開通により、鐵道を利用する事になり、此後の兩者間の交通は衰微の一途をたどるのみである。

當市の近くに大青山の森林があつて、建築材料に富み石炭は當市より、東南七粁の地點に産する。又附近一帶地味肥沃水質良好である。

民國十六、七年頃商業殷盛であつたが、匪賊のために漸次衰微し、康德元年に入り治安恢復と共に、商民俄かに激增し、鐵道開通前後より活況を呈してゐる。特産取引も集散市場としての地位を獲得してゐる。

商店大小合して六十餘戸を有し、工業も製粉、燒鍋、油坊等、舊式ながら有してゐる。

交通は圖佳線の主要驛である事は勿論であるが、國營自動車の便もあり、倭肯驛に至り、又依蘭より勃利に至る線がある。

勃利街諸機關

勃利縣公署	警察署	稅捐局	專賣局
商工公會	郵政局	電報局	電話局
區法院	區檢察廳	興農合作社	中銀支行
大興公司	營林署	電業營業所	協和會
日本人小學校	濟東源股份有限公司	滿拓公社出張所	縣立醫院

[illegible]站諸機關	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所	街公所
	稅捐局分所	國際運輸	

其他

警察署所在地	七台河	八家子	杏樹村
郵政局所在地	連珠崗	大四站	勃利訓練所内
義勇隊靑年學校	勃利訓練所		

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
勃利縣	三江省各縣概況	民政部	康、二、一
勃利縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
勃利縣經濟事情	吉林省松花江沿岸地方經濟事情	滿鐵調査課	大正一〇、六
勃利經濟調査	露滿蒙時報(一八六)	哈爾濱商品陳列館	昭、一〇、四
縣政概況彙編	同表題	勃利縣公署	康、四、二
勃利(水島芳靜)	躍進三江省	東亞出版社	昭、一三、四
勃利縣經濟事情	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

沿革

撫遠縣

唐朝及渤海國存立時代は現今の撫遠縣は伯利州と稱された。金朝にては臨江と稱され、清朝宣統二年當地方に綏遠州が設けられ其後縣と改稱、現在は撫遠縣と改められ康德元年十二月一日より三江省に編入された。

地勢

本縣は黑龍江及烏蘇里江の兩江に狹まれてゐる三角形の一縣であつて、滿洲國最東端の縣である。東部及北部は江を隔てゝ各々蘇領と界し、南部は太平山饒河鎭を區劃線として饒河縣に接し、西部は小白山、吉利河を結ぶ線を以つて同江縣に境す。河川としては畢拉音河、賓河等が烏蘇里河に流入し、農江は黑龍江に注いで一般に水利水系に富んでゐる。一般の地圖の上では廣漠たる原野の樣に想像されるが、事實は大いに之に反し、平野は少く峻險な山はないが、全縣中の三分の二は山地帶を爲して居る。山としては縣の東南部に二龍山、西南部に喀爾布蘭山、昂古喀山、西部に額圖山、北部に蘇拉立噶爾山、防守山等がある。兩江合流點の三角洲は滿蘇間に領有に就き問題の地である。

縣の物産

農業振はず既耕地わづかに一・五%にすぎず九八・五%の未耕地を見てゐる程である。大豆、小麥、雜穀等であるが産額極めて少ない。

漁場は海青鎭より烏蘇里合流點に至る間であつて每年九月初旬頃より下旬の期間中に、烏蘇里江に遡江し來る鮭を捕獲するのである。

都邑撫遠村

カザケウイツチ水道入口十粁の地點にある。滿洲國最東北部の都邑で背後は直ちに山を負ひ、前面は黑龍江に對し要害の地を占むる所である。過去に於ては對露貿易盛であつて哈爾濱、富錦、ハバロフスク航路に當つて盛であつたが對露貿易禁止となつて後は衰へて居る。交通は夏季の航運が主で、同江より航空便がある。

撫遠諸機關

撫遠縣公署　警察署　稅捐局分所　郵政局
電報局　電話局

東安村

當地はもと饒河縣城であつた處で、家屋は概ねロシヤ風で變つてゐる。附近薪材を出す、もと饒河縣

泰得利

内であつたが、康徳六年縣境の變更を見、饒河以北を撫遠縣に編入したため當地も撫遠縣に入つたのである。

撫遠縣城より上流二〇〇滿里の地點にある。先住民族たる魚皮達子等も少數住み、夏期は漁業、冬期は狩獵で生計を立ててゐる。附近には比較的耕地の多いのと漁獲が少くないので、當地は農業、漁業の小中心地をなす。

海青鎮、抓吉鎮

共に本縣に於ける鮭漁業の中心點で漁獲期には魚市場が立ち、哈爾濱方面への輸送の爲め、一時的の殷盛を極める所である。

其他

警察署所在地
海青　秦得利　東安村

郵政局所在地
抓吉　海青鎮　蒿通　國富鎮
東安村　秦得利

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
撫遠縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
撫遠縣	三江省各縣概況(前)	民政部	康、二、一
撫遠縣現狀報告(武安東彥)	專賣月刊(九)	專賣公署	康、元、一二
北滿沿烏蘇里地方	同表題	民政部	大同、二、一
撫遠縣風俗習慣之調査	吉林省公署調査月刊(二の一)	吉林省公署	大同、三、一
撫遠縣商業慣習	吉林商工月報(一一)	吉林商工會議所	昭、九、三

同江縣

概史

光緒皇帝統禦の初年にあつては、三姓副都統の命令に依り、當地方に居住してゐた異人種「ヘイチン」人等全部登錄され、同時に旗軍に編入せられて三個の佐領(三個中隊)に分たれた。異人種が軍務に服したのは此の頃からと稱されてゐる。光緒三十二年當地方に臨江廳が創設され、其後宣統元年臨江府と改稱又臨江縣と變じたが當時の奉天省內に同名の縣ある爲、民國三年同江縣と改稱、康德元年十二月、三江省に編入された。

地勢

東部は吉利河を隔てて撫遠縣に、北部は黑龍江を隔てて蘇聯領に、西部は松花江を境として綏濱縣に對し、南西部は富錦縣に南部は撓力河並其支流大七里星河に依り寶淸、饒河の兩縣と接してゐる。縣の北東部より南西部に走る阿爾倭集嶺は向陽山、西太平山、小白山、烏爾吉力山等を包含し縣上唯一の山脈である。當山脈は分水嶺をなし、北方へ街津、吉利の二河を、南東方へ小七里河を出してゐる

縣の物産

縣內面積に比し既耕地極めて少く、未耕地七〇・七%既耕地僅に一・七%に過ぎない狀態で、大豆、玉蜀黍、雜穀等を出すが、地場消費に過ぎない。縣內に二十餘の漁場があり冬季漁業が盛である。鯉、黃魚が多く哈爾濱に輸送してゐる。

都邑同江街

松花江口に位し別名を拉哈蘇々といふ。富錦より七六粁下流黑龍江との合流點より四粁の上流である同江縣の中心で農產物の集散地であるが、此地住民の五分の一は漁業に從事して居り又漁獲期になれば他より集り來る者、遠く撫遠縣の方に出稼に行く者等があつて、夏季は盛になる。陸上交通は冬季哈爾濱より自動車の開通を見てゐるが其他は極めて不便である。航空路は哈爾濱より便がある。

同江街諸機關

同江縣公署	警察署	稅捐局	郵政局
同江兼理司法縣公署	電報局	電話局	興農合作社
日本人小學校	街公所		

其他

警察署所在地　二龍山　三村

郵政局所在地　二龍山

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
同江縣	三江省各縣概況(後)	民政部	康、二、一
同江縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
同江縣事情	滿洲行政(二の五)	滿洲行政學會	康、二、五
同江縣觀察報告(武安圭彥)	專賣月刊(九)	專賣公署	康、元、一二
同江撫遠低地の利用に就て	ソ聯事情(五の三)	滿鐵經濟調查會	昭、九、三
同江縣の林業	吉林東北部林業	滿鐵調查課	大正、九、六

富錦縣

沿革史

富錦は元富克錦と稱し、光緒八年現在の縣城より西六滿里の嘎爾當に協領衙門を設置し、當時江の南岸地方に漁獵生活を爲してゐた赫哲人を集め兵制を敷いて地方防禦の任に衛らしめてゐた。ところが光緒二十六年七月突如露西亞艦艇十九隻軍隊を滿載して來り協領衙門の北岸に上陸した。之に對し防兵は戰意を失つて戰はず、露軍は之を察知して協領衙門の隣に駐屯して、和議條約を締結せしめ漸くにして

撤兵した。宣統元年富錦縣設けられ貧民救濟の一策として縣内に阿片を栽培せしめ其結果、移住者急激に增加し富錦は松花江下流地方第一の都會となつた。然し民國六年、八年、九年と相繼いで匪襲を受け燒殺掠奪の限りを盡されたるのみならず駐屯軍も匪賊と通じて良民保護の効を爲さず、縣内は匪賊の巢と化した。民國十年蘇支紛爭を起した時は十月末蘇聯江防艦隊當地に來航し、猛烈なる砲火を浴びせ此戰鬪に於て官商の損害數百萬元に達した。滿洲事變勃發當時は反吉林軍の占據する所となり、頭目張錫候以下八百餘名の蟠居地となつた。このやうに當縣の過去は兵火の歴史であつたが、大同元年五月日本軍入城以來治安囘復し市況亦漸次復活し、康德元年十二月新省制度實施と共に三江省に編入された。富錦は現に松花江下流に於ける經濟、交通、通信の中心地政治並に治安の重要點なるにより、水利工作に依る荒蕪地開拓の結果顯著なる發展を見るであらう。

地勢

東は同江縣、西は樺川縣、南は寶淸縣、北は松花江を隔て綏濱縣に對してゐる。縣城は縣の東北隅にあり、松花江に臨み、哈爾濱を下る事六一四粁、卽ち上流には樺川、佳木斯、三姓、通河を經て哈爾濱市場を控え、黑龍江岸各埠頭に對する商業上一大物資集散場なるのみならず、國防上より見るも亦重要なる地點である。山岳としては阿爾哈倭集嶺の餘波を受けたる丘陵地帶多く特筆すべきものはない。一般に大河の下流たる關係上排水惡く、濕地が多い。

縣の物産

國内總面積に對する可耕地は九〇% 以上を占めてゐるが既耕地は三〇% 以上に過ぎない。大豆、小麥、粟、高粱、等が最も多く、大豆、小麥等は他縣にも賣出してゐる。畜産としては牛、馬、豚等が多い。

都邑富錦街

富錦は松花江沿岸に於て哈爾濱に次ぐ富裕なる商業都市である。附近の通信、交通、商工業の中心地

點であつて輸出入貨物の散集多く活況を呈してゐる。物資甚だ豐かで城内には數十萬の資産を有する商舗十軒以上もあり資産二百萬と稱せらるゝ大地主も居る。資産家の多くは糧棧、雜貨商、呉服店又は製粉業を營んでゐる。從來此地の發展は阿片に依存してゐると云はれる程取引の盛な處であつたが、滿洲國は國策上此地附近一帶及び背後地たる饒河、虎林等、阿片栽培を禁止したる關係上、此種の取引は減退された。滿洲事變後、反軍の撤退に當り多くの物資の掠奪に會つたが、治安恢復と共に漸次舊態に復してゐる。

工業の主なるものは製粉業三、油坊八、釀造九等であるが中にも製粉は十數萬圓の資本を以つて營まれ、縣城の需要は勿論、黑龍江沿岸各地の需要を充して殆ど他地製品の侵入を許さない程である。德祥東、錦昌の二工場が最も大きい。

富錦を中心とし冬季自動車を運行し得る道路は富錦―樺川、富錦―同江、富錦―集賢鎭、富錦―綏濱間あり、哈爾濱―同江間の總局經營自動車は當地を通過し又營業所を置いて居る。現在同哈線の外、北方蘿北に西方集賢鎭を經て佳木斯にバスの便があり、航空は哈市、寶清、同江に便がある。夏季に於ける水運は最も活況を呈し、哈市富錦間の終點であり富黑線及虎林線の起點である爲、哈、黑、兩市に對する移出入荷物多く、哈市、佳木斯方面よりの雜貨、黑河方面よりの木材、又黑河方面へは沿岸各埠頭に小麥粉を主として移出する。

富錦諸機關

富錦縣公署	警察署	稅捐局分所(一)	商工公會
郵政局	電報局	電話局	專賣局
興農合作社	中銀支行	大興公司(一)	國際運輸

協和會　營林署分署　電業營業所　街公所
區法院　區檢察廳　兼理司法縣公署
富錦(農科)國民高等學校(省立)　富錦實業女學校(省立)　日本人小學校
滿拓公社富錦出張所　生活必需品會社配給所　勞工協會出張所　滿人小學校

共他

警察署所在地

太平川　永安村　二道崗村　新城村
集賢街　三道崗　頭林村

郵政局所在地

集賢街　興隆鎮　太平鎮　新城村

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
富錦縣	三江省各縣概況(前)	民政部	康、二、一
富錦縣	同寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
富錦縣に於ける罌粟栽培事情	民政部調査月報	民政部	康、三、一二
富錦縣立機械農場一班(富錦縣公署)	民政部調査月報(二の二)	民政部	康、四、二
富錦縣一般狀況	同表題	富錦縣公署	康、三、六
富錦(水島芳靜)	躍進三江省	東亞出版社	昭、一三、四

概史

樺川縣

樺川縣一帶は上古に於て肅愼族の屯したる處で所謂肅愼民族の地であつた。下つて漢、晉の時代には挹婁起り、元、魏以後は勿吉、即ち隋の靺鞨であつて七種あり、その一種である黑水部は今の三姓の

東北及富錦の左右の地であるといはれて居る。遼の時代には女眞五國部に屬し、金代は呼爾哈路に屬すと稱される。又明代には努兒干都司衛所に、淸代には赫哲喀喇に次いで三姓四甲に屬す。宣統二年一月孟頌平第一代の樺川縣知事となり、民國に至つて十三代の知事を經、滿洲帝國となり省政改革によつて三江省公署が佳木斯に置かれる事となつた。縣公署は康德元年に樺川より佳木斯に移轉されたのである。康德六年六月の改制により縣の南部に一部縣境の改變を見たため、開拓地の多くは本縣内に入つて居る。

地勢

本縣東は富錦に隣し、西は依蘭、南は寶淸、北は松花江を隔てゝ湯原に至つて居る。完達山脈、阿爾哈倭集嶺の兩山脈より派生してゐる山々が樺川縣山系である。其最高峯は阿爾哈山であつて縣内の鑛山は悉く此に發し、此の一帶は森林が多い。水系の主流は松花江であるが、哈爾哈山に源を發する倭肯正心子河があり樺川、寶淸兩縣境を爲し支流を合して松花江に入つて居る。

縣の物産

大豆、高粱、小麥等の農産があり森林面積二四萬陌を有し、小石頭子を始め數多の金鑛がある。又松花江岸は漁業を營む者百十餘、二十萬斤餘の淡水魚を出す。

開拓事情

樺川縣は日本集團開拓民入植の先驅を爲した縣であつて、昭和七年秋第一次開拓民が、今の彌榮村(當時永豐鎭)に入植し、次で第二次の千振鄕(當時依蘭縣七虎力)入植を終へ、第七次には七虎力、第八次は四箇所卽ち柞木台、公心集、小八浪(中川村)大八浪である。又向陽山に開拓農民幹部養成訓練所があり、大林子に青年義勇隊自警訓練所がある。彌榮、千振等は入植してすでに八、九年を經、村の經營等も整つて居る。始めは武裝開拓民として入植し、匪襲災害等と戰ひ通してよく今日の基礎を固め得たのであつた。全く日本農業開拓民の試金石となり、開拓第一線に立ち堅忍不拔の精神をもつてよく今日の

開拓事業に成功の曙光を與へたものであつた。開拓の父故東宮大佐の英斷、開拓の親と親まれる加藤完治先生の功績は、永久に日本開拓史上に特筆賞揚せられるところである。

都邑悦來街

宣統二年縣治を布かれるにあたり、始め佳木斯に縣公署を置いてゐたが同地が水害のため、民國二年悦來鎭に縣公署を移し、康德元年まで縣政の中心であつた。縣公署を佳木斯に移して以來繁榮も共に佳木斯に集る事になつた。殊に松花江岸を距る事約二十滿里の奥地にある關係もあり、商工業等も昔の俤がない。

悦來街諸機關

警察署　郵政局　電報局　國際運輸
稅捐局　電話局

千振街

日本農業開拓民第二次入植によつて大いに開けたところでこの頃では殷やかな街になつてゐる。

千振諸機關

郵政局　國際運輸　樺川縣立千振保健所　日本人小學校

其　他

警察署所在地

聚寶山　大賚崗　太平鎭　小石頭
彌榮村　千振

稅捐局分所所在地

大崗　湖南營

郵政局所在地

興安鎭　集賢鎭　新城鎭　駝腰子
小石頭河　大平川　永寶鎭　彌榮

日本人小學校所在地

營子崗　大賚崗　七虎力
彌榮　千振

委託日本人小學校所在地	七虎力
義勇隊青年學校	大林子
鐵道自警村青年學校	追分

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
樺川縣……………	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
樺川縣……………	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
樺川縣政務概況…………	同表題	縣公署	康、元、一二
佳木斯を中心とする河下特産事情…………	同表題	滿洲中央銀行調査課	康、三、八

通河縣

沿史

清の光緒末期は大通縣と稱され吉林省の依蘭府に隷屬してゐた。光緒三十三年吉林、黒龍の兩省が改定され松花江以北は大通縣、以南は方正とされてゐたが民國三年大通縣は通河と改名され、次で滿洲國となつて康德元年十二月一日より三江省に編入された。事變以後縣下水害、匪賊等に因り縣民は疲弊がひどかつたが、最近は着々恢復の色を見せてゐる。康德六年六月の地方行政大變革の時北方の鳳山縣全域を合併し、通河縣と稱するに至つて居る。

鳳山縣の部はもと通河縣に隷屬し、荒地墾局を設立し移民を獎勵し民國三年初めて省より移墾局を設置され以來人口增加し一時一千戸を有し、漸次發展の途上にあつたが、民國十四年匪賊の災害を蒙り人民は四散し、移墾局を撤廢し一時空地同樣になつた。民國十八年通河縣より分離して、鳳山設治局を設

け、大同二年鳳山縣と改稱され、康德元年十二月新省三江省に屬してゐた。康德六年六月の大變革の時通河縣鳳山縣は合併せられ現在通河縣下にある。

地勢

東北部は八里河の線に依り湯原縣と相接し、南部及北部は松花江を挾んで對岸、方正、依蘭の諸縣に面し西部は白揚河、濃々河中間の線により木蘭縣と境し西北は青山を以て鐵驪縣に境してゐる。縣北は青山嶺、白石山の各山脈を以つて北方呼蘭河水系と南方松花江本流に直入する小支流との分水嶺をなし、縣南は松花江に臨み僅に平原地帶を爲して居る。河川は北部より南流し、濃々河、岔林河、西北河大古洞河の諸川が松花江に注いで居る。

縣の物產

松花江に面する帶の如き平野と、岔林河流域は沃土比較的多く、且つ水利が便であるため、水田とするには適してゐる。農產は南部は大豆を第一とし、包米、粟、高粱、小麥、水稻等で、尙麻類煙草等の特產がある。北部は玉蜀黍を主とし、高粱、大豆等であるが產額は極めて少ない。

縣內山岳地帶多く鬱蒼たる森林がある。住民の大部は四季により、農業、狩獵、木材伐採に依り生活を營んで居るが、國有林であつて、林業を自ら營む者はない。林業は北部山地方が盛で、夏季河川に依つて流材運搬して居る。哈爾濱方面への移出が主である。雜木を薪炭用とし、建築用としては松を出す又此山地帶には野獸多く。毛皮の產あり人蔘等もある。

運搬、耕作用としての家畜は、牛、馬、騾、驢等、自家用に少し飼つてゐる。

漁業は農民の副業として相當盛である。松花江、烏拉渾河、西北河、濃々河等を漁場とし、年額一五萬斤乃至二十二萬斤の產出があり、漁業に從事する者五〇戶以上あり漁船二十四隻を有して居る。

鑛業のみるべきものなし。

開拓事業

本縣への日本開拓團入植は現在のところ、第八次で五ケ所である。卽ち大古洞、小古洞、上久堅持、張家屯、太平山の五ケ所で何れも近くの松花江岸の埠頭より入村する。

都邑通河街

岔林河が松花江に注ぐところにある。縣公署所在地であつて、松花江對岸に方正がある。材木、農産物の集散地で、製材業は最も活氣を呈し埠頭には木材の山を築き盛況を見せてゐる。油坊、石鹼工場等もあり、穀物、木材等の移出をなし、年額一萬八千瓲位の移出を見てゐる。道路は湯原、鳳山、木蘭方面、哈爾濱方面に通じ、自動車は夏季、哈同線の通路である。又岔林河に沿つて鳳山に至る道路には國營バスの運行あり、南方は方正を經て開拓地大羅密に至るバスの便がある。

通河街諸機關

通河縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
興農合作社	郵政局	電報局	電話局
大興公司	專賣局	中銀支行	協和會
營林署	滿拓公社通河出張所	日本人小學校	勞工協會出張所
街公所	通河農業學校(省立)		

都邑鳳山村

通河の東北部、濱江省との省境に近い。交通不便で住戸も稀に、産業も振はない。近年漸く人口が增し、商號二十餘戸を有するに至り、他の村屯に比して稍繁盛である。通河よりバスの便がある。

鳳山村諸機關

警察署	郵政局	電報局	營林署分署

其他

警察署所在地

三站村	祥順山	濃河鎭

稅捐局分所所在地	濃河鎮
郵政局所在地	濃々河

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
通河縣	三江省各縣概況(前)	民政部	康、二、一
通河縣事情	同表題	滿洲國地方事情大系刊行會	康、三、六
通河縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
通河縣圖	同表題	縣公署	康、三、一
三江省通河縣概況	同表題	同前	康、三、一二
通河	滿洲木材通信(一五二)	滿洲木材通信社	昭、一三、七
鳳山縣誌	同表題	縣公署	康、三、五
鳳山縣圖	同表題	縣公署	康、三、一
鳳山縣一般狀況	同表題	同前	康、三、一二

湯原縣

概史

光緒三十一年四月開墾局を設立し同年十一月湯原縣を設置、吉林省依蘭縣に屬せしめたが、同三十四年吉江兩省の境界劃定の結果黑龍江省に屬してゐた。縣名は湯旺河に因んだもので、建國後三江省に屬し、松花江の北岸大地域を占むる縣となつてゐた。康德六年六月地方行政變革に伴ひ東部梧桐河流域を中心とする各節河以東を割きて、新設の鶴立縣に讓り、本縣は湯旺河を流域とする地方に縮少せられた。

地勢

北部は小興安嶺を越えて烏雲、佛山、鶴立諸縣に、西部は佛倫山嶺を經て綏稜、鐵驪兩縣に、西南部

は青山嶺の山脈を以つて、通河に接し、東南部は松花江を以つて依蘭、樺川の兩縣に境して居る。縣北には小興安嶺横たはり縣西は佛倫山脈が圍繞して當縣の山岳地帶を爲し、縣内には烏木魯嶺、克爾奇山嶺横たはつて湯旺河八里河の、分水嶺を爲して居る。

縣の物産

土地は各區に依り多少の差異はあるが、黑土地帶であつて、開發年代比較的淺く肥沃地である。

農産は、大豆、其他の豆類、粟、包米、小麥、雜穀等で、水稻の栽培も、鮮農によつて行はれ、尚他縣より移住し來る狀態である。南部松花江に面した地帶は地味肥沃で將來開發有望である。

林業は現在のところ伐採事業はあまり進んでゐないが、縣內密林を形成して居るところがある。現在伐採に從事してゐる地方は、湯旺河上流の森林であつて濶葉樹が多い。小興安嶺の分水嶺に於ては、針濶兩種の混交林となり朝鮮松が出る。其他樹種が多い。蓄積量は原生林、混交林一町步當九〇〇石、朝鮮松は一、五〇〇石の採取が出來るとのことである。

家畜は、牛、馬、豚、騾等農事用にすぎない。

開拓事業

本縣の入植地は松花江寄り南部の平野で第八次が、三箇所に入植濟みとなつて居る。即ち、三道溜、管丹崗、舒樂鎭の三箇所で、何れも、竹廉鎭港、舒蘭鎭港から程遠からぬ處である。

都邑湯原街

湯原は古名を湯旺河と呼び旺河と松花江の合流地點、江岸より六滿里の地點にある。湯原城より松花江畔湯原河運江口間にバスの便がある。東西四滿里、南北二滿里、四方に城門がある。城壁を有してゐるが、大同二年紅槍會匪、大刀會匪の襲撃を受け、市街及公共建築は燒却せられたが、後修築が出來上つた。主なる商工業者は油房、燒鍋、雜貨商、糧棧等少數で、匪禍の爲商況不振の狀態であつたが目下漸次恢復中である。

隣縣鐵驪縣より東に伸びたる鐵路は湯原北方の南叉より南下し、湯旺河の流れに沿ひて當街に出で佳木斯に至る。康德七年開通したるを以て、冬季と雖此線利用により綏化に出で哈爾濱に出る來が出來る。

湯原諸機關

湯原縣公署	警察署	税捐局	商工公會
興農合作社	郵政局	電報局	中銀支行
協和會	營林署	電話局	勞工協會出張所

其他

警察署所在地　竹簾　太平川

税捐局分所所在地　竹簾鎭

郵政局所在地　竹簾　興山鎭

委託日本人小學校所在地　湯原茨城村　湯原東北村　湯原東海村

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
湯原縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
三江省湯原縣事情	同表題	湯原縣公署	康、四、一

鶴立縣

概史

本縣は康德六年六月の地方行政大變革が行はれたる際に、新に設けられたる縣であつて、從來の湯原縣の東部卽ち、各節河より北部は山脈を境として以東及蘿北縣の一部を割きて新設せられたのであつた

縣の中心を爲すのは鶴立街である。

地　勢

本縣は南北に長方形を爲して居る様な縣で東は都魯河を以つて蘿北縣と境し西は各節河及び之につゞく南北に走る山脈を以つて境として居る。縣の北部は稍山地帶をなし南に傾斜して、松花江岸附近が一帶の平野である。

縣の物産

湯原縣と同じく松花江斜面の平野は肥沃地である。農産は大豆、其他の豆類、粟、包米等であるが、此平野は未だ開拓の餘地を十分殘して居る。

鑛業の第一位は鶴岡の石炭であり、現在滿洲炭礦會社の經營である。更に梧桐河の金鑛、格節河金鑛、黑金河金廠等で、金の產出は古くより露人が盜掘し、民國四年頃から政府の直轄として行はれてゐた。建國後、滿洲採金會社の經營するところとなつてゐる。

開拓事業

本縣には開拓團が大分入植してゐる。松花江岸蓮江口より興山鎭に至る線路の東西に多い。卽ち、第六次が七箇所、熊本村、宮城村、福島村、茨城村、靜岡村、東北村、東海村がそれであり、第七次として四合屯に一ケ所入植して居る。何れも小學校の設備を有し、村名も日本の名を用ゐてゐる。

都邑鶴立街

鶴立街は、松花江岸蓮江口より興山鎭に至る鐵路の中間、烏龍河と、阿凌河の間に位し、氣候適宜に周圍の土地は肥沃で交通も鐵路によつて松花江岸に出る事が出來る。康德六年一月一日街制を實施し、同年六月の地方行政變革により、鶴立縣政の中心となつた。街内の面積は二八、一一五晌、戶口は日滿鮮合計二、一三二戶、人口約一一、〇〇〇を有してゐる。中商業一三二戶、農業二一一三戶である。

鶴立街諸機關

縣公署　警察署　郵政局　興農合作社
滿拓公社鶴立出張所

蓮江口

鶴立炭礦への鐵道基點であり一九二七年の建設に係る石炭積出の埠頭である。北方五二粁の地に炭礦があり石炭は多く哈爾濱に移出せられ、松花江航行汽船の燃料となり、又沿岸の需要を充してゐる。佳木斯との間には發動汽船及端舟の連絡あり、定期江上汽船の寄港である。

蓮江口諸機關

稅捐局分所　郵政局

鶴岡炭礦

民國三年土人曹鳳陽に依り發見され、其知人沈松年、孫丙午等が共同し、採掘許可願を當局に提出、民國六年許可を得、七年資本金拾五萬元を以つて、興華公司を組織したが內紛を起して官辦と爲す事を議し、民國八年官商合辦と決定。省政府より五拾萬元の出資を得て組織の强化整備擴大を計つたが營業振はず缺損の結果となり、又々民間會社として同十五年露天掘りに改めた結果、産額漸增、民國十八年改めて、資本金四百五十萬圓の官督官商合辦株式と爲してゐた。滿洲國成立するや國內炭業の統制成り、滿洲炭礦株式會社は同炭礦を合併し、現在滿炭の經營に成つて居る。

位置は哈市より五百餘粁なる蓮江口より更に五十二粁の地點で不便であるが、夏季松花江水運の便があり且つ炭質は稀に見る優良品である爲有望視されて居る。鑛區面積現在採掘中は六方里全面積は一五。五方里であるといはれ、露天掘によつて採掘して居る。

鶴岡炭礦諸機關

警察署　郵政局　日本人小學校

其他

委託日本人小學校所在地

東海村　茨城村　東北村　靜岡村

福島村　宮城村　熊本村　九州七鄉

資料

題名	書名	發行所	發行年月
鶴立街概況	同表題	鶴立街公所	康、六、一二

蘿北縣

概史

高句麗の版圖は綏濱縣より遠く當縣まで延びてゐたと思はれるが、大體百年前より漢民族の移住を見開拓の地歩を進めたもので、光緒三十二年には興東道が設置せられ鑛産を主要産物とした。其後人口漸増し、宣統元年に蘿北廳設置せられ、民國五年道を改めて縣と爲し、滿洲事變後馬占山の叛亂あり其部下は三千の兵を率ひて綏濱、蘿北、湯原に蟠居してゐたが、大同元年冬富錦北境警備隊に討伐された。大同二年三月に至り初めて縣長の赴任を見、同八月縣公署を興東より兆興鎭（現縣城蘿北）に移し、康德元年十二月三江省に編入された。此縣は地理的に哈爾濱其他の都市と相去る事遠く交通亦不便で文化に後れて居るし、農民の困憊も回復遲々たるものがある。康德六年六月新設鶴立縣のために西部の一部を割讓した。

地勢

南東は綏濱縣に北東は黑龍江を隔てて蘇聯に對し、北西は觀音河を以て佛山縣に、南西は小興安嶺及び梧桐河を以て鶴立縣に接してゐる。

山脈は殆ど西部にあつて烏蘭山系、小興安嶺がある。河川としては縣の西部を南北に都魯河が流れて松花江に注ぎ、又佛山縣境を嘉音河が流れて黑龍江に注いで居る。平野は全縣の六割と稱され廣汎な地域を有してゐるが、既耕地は極めて少く、大體縣の東北部及東南部が平野地帶である。

縣の物産

既耕地少く、大豆、玉蜀黍、小麥等の主なる農産があるが産額少である。林地多く蓄積量は三江省中

都邑蘿北村

第二位といはれるが未だ利用されてゐない。鑛産は頗る豐富砂金は太平溝を始め産金地多く石炭礦もある。

黒河より六一三粁、從來兆興鎭と呼ばれた地であるが、大同二年縣公署を移し蘿北と稱する事になつた。對岸蘇聯側にブラゴスロウエンスキー村がある。蘿北は黒龍江岸に於ける可成り大きい町である。農産畜産が若干あるが、他に出す事はない。富錦よりバスの便がある。

蘿北村諸機關

蘿北縣公署　警察署　税捐局　蘿北兼理司法縣公署
郵政局　電報局

興東

從來蘿北といはれてゐたが、現在の蘿北(兆興鎭)に繁榮を奪はれてさびしくなつたのである。高い岸壁の上に相當に堅固な民家が見受けられる。滿人、鮮人、露人、オロツチヨン族等居住し、大部分農業に從事し、大豆、高粱、玉蜀黍等を耕作してゐる。光緒三二年に對露國防上並邊境開發の爲め、興東兵倫道署が設置せられ引續いて縣公署があつたが、大同二年縣公署は現在の蘿北に移轉せられた。

延興鎭

名山鎭の上流二十粁、蘇領エカテリノニコリスクに對する、淸末政府の邊境政策により金鑛を慕つて集つて來た者多數に上つたが、其中土着して農を業とする者も生じ現在小邑となつてゐる。

太平溝諸機關

税捐局　郵政局
其他

警察署所在地

鳳翔村　富源

郵政局所在地

興東鎭　太平溝　鳳凰鎭

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
蘿北縣事情	同表題	縣公署	康、二、五
蘿北縣	三江省各縣概況(前)	民政部	康、二、一
蘿北縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
蘿北縣事情	同表題	大同學院	康、二、九
蘿北縣の住民	滿鐵調査月報(一四の二)	滿鐵資料課	昭、九、二
鶴興鎭、蘿北、太平溝、觀音山	露滿蒙時報(一一六)	哈爾濱商品陳列館	昭、八、八
蘿北縣視察報告(武安素彦)	專賣月刊(九)	專賣公署	康、元、一二

綏濱縣

概史

松花江左岸、松黑兩江の合流地帶たる此地に民國六年設治局を置いた。同十九年縣制を布き綏濱縣と命名し、康德元年十二月より三江省に編入された。

地勢

北は黑龍江を隔てゝ蘇聯領に對し、東部並南部は松花江を隔てゝ各同江、富錦の兩縣に、西部に、都魯河の線を以て蘿北縣に隣接してゐる。縣内一般に臺地、平原であつて山脈として見るべきものはない。河川は南流するもの多く都魯河、浦鴨河、敖拉密河、蓮花泡等はその主なるものである。濕地多く、耕地として利用されたる土地少く、將來濕地干拓により土地利用すべき部分が多い。

縣の物産

縣内は平地が多いが未耕地九一％以上に及び既耕地八・六％に過ぎず、人口稀薄で、大豆、粟、玉蜀黍等を産するが、産額僅少で地場消費にすぎない。土地利用、農業等將來の開發に俟つべきものが大いにある。其他の産業としては、漁業に從事するものが多少である。

本縣内にはまだ日本開拓民の入植を見てゐない。

都邑綏濱街

黒龍江と松花江との合流をなす三角地點、富錦の西北對岸に位する綏濱縣城である。古名を敎來密と呼ぶ。居住民は農、商、手工業及漁業を爲してゐる。富錦蘿北間を通ずるバスの通過地となつて、富錦に出るに便利となつた。

綏濱街諸機關

綏濱縣公署　警察署　税捐局分局　郵政局
電報局　興農合作社　綏濱兼理司法縣公署　電話局
滿人小學校
其他

警察署所在地

綏東　集賢村　福興村

郵政局所在地

綏東鎭

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
綏濱縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、三
綏濱縣	三江省各縣概況	民政部	康、二、一
綏濱縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
綏濱縣事情	滿洲行政(二の六)	滿洲行政學會	康、二、六
綏濱縣の住民(成田精雄)	滿鐵調査月報(一四の二)	滿鐵	昭、九、二
三江省綏濱縣誌	同表題	綏濱縣公署	康、元、一二
三江省綏濱縣事情	同表題	同前	康、元、一二

東安省

概史

密山縣

本縣は勃海國當時は一帶を「フウチョウ」と稱せられ其名稱は遼時代まで存續し、明朝に至り孫家河領域に編入された。又清朝時代滿洲に副統都府の存在してゐた時代は本縣の殆ど全部は寧古副統府の管下にあり、其北部のみは三姓副都統府に編入されてゐた。光緒二十五年には蜂密山招墾局と稱する支那移民招致事務局が設置され始めて無人の曠野に開拓の手が染められ、光緒三十二年高力營子村より近い蜂密山の北方に密山府を設置し行政事務が開始された。宣統元年には本縣の一部は新に編成された呢嗎鎭警務局即ち現今の虎林縣管轄下におかれ、民國二年始めて密山府を密山縣と改稱し、建國後濱江省管下に置かれ、康德四年七月新に設けられたる、牡丹江省に編入され更に康德六年六月新設の東安省の中心となつた。此地は露領沿海州と境を接してゐる爲、約五十年位前までは無人の曠野であつたが、奉天省遼陽縣よりの團體移民が濫觴をなし其後山東移民此地に來り、朝鮮人も亦移住し來り現在縣住民の約一割を占めて居る。民國十八年露支紛爭の際國境に於て兩軍々隊砲火を交へ露軍の精鋭なる裝備に抗し得ず、支那軍の撤退となり、依つて露國空軍密山城を襲擊、縣公署及び主要行政機關を爆破し、騎兵隊、自動車隊は當壁鎭の國境を突破し一夜にして密山城を占領し、永衞官銀號支行の金庫を破壞し貨幣を町民に分與して翌日未明國境を越えて歸國した。

露西亞革命後は境を接する本縣に於ても、其影響を受け共產主義運動擡頭し、中國共產黨及朝鮮共產黨の組織を見、中國共產黨は奉天の滿洲省委下に擴大强化をはかり、朝鮮共產黨は民族主義團體と合流し、平陽鎭に韓國獨立軍本部を置き運動を蓄積してゐた。滿洲建國後は反日滿軍二十萬が自衞軍と稱し

て蟠踞し。日本軍並清郷局員により自動車隊で追拂つたが、殘部は四散して附近の部落に蟠踞し、絶へず蠢動を繼續し、遂に日本軍撤退をねらつて大同二年二月日本軍最後の引揚げと同時に匪軍二百名縣城を襲撃し、城内を荒して引揚げた。之により地方農民は一物も餘さず掠奪され密山縣下は生色なく、金融狀態混亂し、非常な窮地に陷つたのであつた。現今は縣政漸次整ひ日本農業開拓民も次を追て入植し來り、回復の一途をたどりつゝある。

地勢

新設東安省の中心をなし東南は興凱湖、及陸續き國境を隔てて蘇聯ウスリ洲に、北は虎林、寶淸兩縣に、西は勃利、林口、穆棱、各縣に境して居る。地勢一般に高峻ではないが、靑溝嶺系南部より黃窩集山系に至る間及び勃利、寶淸縣境地帶は各々晝間尙暗き大森林地帶が十數里に及んで居る。又當縣は河川湖沼に富み、穆稜縣山岳地帶より出て縣內に入り、小穆稜河、鍋盔河、斐德里河楊木河、石道河を合して中央沃野を貫流し、虎林縣に入つて烏蘇里に流入する。穆稜河は縣內唯一の大河である。湖沼は大興凱湖、小興凱湖の二大湖滿々と水を湛へ大海原の如く魚獵又有望である。縣境の山岳地帶を越えて一歩縣內に入れば渺茫沃野開け、大小の河川穆稜河を中心に四通八達して灌漑の便頗る良好、開墾、治水の方策如何に依り縣內全部水田となり得る可能性がある。日本農業開拓地としては好適な土地と選ばれて居る。

縣の物産

縣內可耕地に對し既耕地四一•七%、未耕地五八•三%位であつて、不可耕地は邊境地の割に少ない。大豆、高粱、粟、玉蜀黍、小麥、其他豆類、雜穀等で收穫も相當に多い。又煙草、痲類等の特用作物もある。現在水稻の產は少いが將來濕地開拓が行はるれば、大いに望がある處である。森林面積も一、五七〇平方粁といはれ、立木畜積量も針葉樹、濶葉樹共に豐富である。鑛產資源亦豐富、石炭、金、銅、鐵

等埋藏してゐるが採掘中のものは僅少で石炭のみは採堀事業が進んでゐる。滿洲炭礦株式會社は、恒山と滴道、城子河に炭坑經營をしてゐたが、康德七年密山炭礦株式會社設立、同會社に其經營を讓した。現在滴道に根據を置き經營中である。

開拓事業

本縣は將來開拓すべき土地大いにあり、日本開拓團は虎林線に沿ひ、第四次二箇所、城子河及哈達河、第五次は四箇所、永安屯、朝陽屯、黑台、信濃村がそれである。更に北に進んで第六次が五ヶ所、南五道崗、北五道崗、六人班、西二道崗、東二道崗である。又山陽には集合開拓農民が入植して居る。密山には多くの開拓團が入植してゐる關係上、滿拓公社は密山に開拓事務所を設けて居る。

都邑東安街

東安街は虎林線の主要驛をなし、康德二年十二月虎林線が開通して以來、新密山と呼ばれて發達したところである。康德六年六月新設省東安省が設けられて以來、東安街(指定街)となり、東安省政の中心を此所に置いたのである。人口は密山街と同樣七千餘に過ぎないが、日本內地人が千餘名居住して居る。

東安の交通狀態は虎林線沿線である事は前述の通りであるが、自動車は梨樹鎭、平陽鎭方面より密山に通じ、更に密山、東安間の連絡もある。又康德七年よりは寶清縣城に開通を見て居る。航空は、虎頭寶清方面に、牡丹江より當地を通じて便がある。

東安街諸機關

東安省公署　郵政局　電報局　電話局
興農合作社聯合會　糧穀會社出張所　滿拓公社東安地方事務所　東安(農科)國民高等學校
生活必需品會社支店及倉庫　勞工協會支部

密山街

穆稜河中流河畔に位し興凱湖よりわづかに十七滿里、舊名を蜂密山と呼びもと一個の山部落であつたが、光緒二十九年招墾局を設け移民奬勵せる結果漸次發達し、遂に三十四年密山府を設けられたもので

ある。

此地は北滿經濟中心より隔絶してゐる爲め、蘇聯との經濟關係を密接ならしめ、地方必需品である鹽石油の如きは全く密輸によつてゐたものであるが、滿洲國に入つて後は嚴禁せられてゐる。縣下農產物の集散地であるが商取引は市內及び附近部落の需給範圍を脫しない。市街は殷盛といふ程ではないがロシヤ式家屋多く、滿人及び少數の半島人、ロシヤ人、日本人等が居住してゐる。

密山街諸機關

密山縣公署	警察署	稅捐局	專賣局
商工公會	郵政局	電報局	電話局
興農合作社	中銀支行	國際運輸	協和會
營林署分署	區法院	區檢察廳	密山兼理司法縣公署
日本人小學校	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所	

平陽

縣南半の略中央、梨樹鎭密山間の一要地であつて梨樹鎭より約五十五粁、密山より七十五粁の地點にある。其間バスの運行がある。當地は約三十年前までは戶數五十六戶に過ぎず、近年山東方面よりの移民により急激に發展した部落であつて、最近は舊城壁內は狹くなり、更に外圍に一土壁を廻らして居るが而も尙狹い程である。當地は豐饒なる土地と物資に惠まれ今後の發展はむしろ、縣城密山よりも有望であらうと見られて居る。密山と共に縣內に於ける農產物の二大集散地であり、鐵道開通後は活潑なる商況を示して居る。殊に第六次第七次の日本農業開拓地は此地の南北の地方を選ばれ、今後植民地との關係も密接となるべくます／＼活況を目されて居る。市內雜貨店を始め各種商家百二、三十軒あり工業も小規模乍ら、油坊、鐵工所、木工所等を有してゐる。

平陽諸機關

警察署　郵政局　稅捐局分所　電報局

國際運輸

滴道

石炭産出の中心地である。滴道と恒山(黄泥河子)の二ヶ所に密山炭礦株式會社の炭坑があり、當分滴道に本據を置いてある。後本社は鷄西に建設されるとの事である。

當壁鎭

興凱湖畔に臨み縣内有數の貿易港で、約三十年前山東移民の來住により開拓されたものである。尙在留鮮人の過半は露領から避難したものである。戸數六〇〇近く人口三千餘の都邑で滿人二鮮人一の割合位である。露領トリローグは白稜河を隔てゝ對峙してゐる。附近には農産物として米、大豆、包米、高粱等あり、殊に水田は鮮人の耕作にかゝつてゐる。鯉、鰲魚、等の水産あり、蘇聯との密貿易は嚴重に監視せられて居る。

密山との間にバスの便はなく當地まで行くのは一寸困難が多い。

半截河諸機關

警察署　稅捐局　郵政局　日本人小學校

其　他

警察署所在地

荒崗　哈達河　楊木崗　滴道
黑台(王家楂崗)　當壁鎭　二人班

郵政局所在地

王家屯　白泡子　當壁鎭　三稜通
二人班　鷄西　滴道　黑台
西鳳綿鎭　東鳳綿鎭　柳毛河　四排
下亮子　四人班　哈達河　永安屯

	連珠山	楊木崗	南五道溝	黄泥河子
	黒台信濃村	朝陽屯	西二道崗	哈達河移民團
	六人班			
國際運輸所在地	鷄西	黒台		
電報局所在地	雞西	滴道	莫和山	
日本人小學校所在地	半截河	滴道	黒台	黄泥河子
	信濃	朝陽屯	蘭崗	
委托日本人小學校所在地	永安屯	城子河	哈達河	完達
	六人班	二道溝	北五道崗	南五道崗

資料

題名	書名	發行所	發行年月
密山縣	濱江省各縣概況(前)	民政部	康、二、四
密山縣	滿洲國地方事情(二)	大同學院	康、元、四
密山縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
密山縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	大同三、二
密山縣下農業及農産物年産額(奥利夫)	旅順農會報	旅順農會	昭、一〇、三
密山縣の社會經濟的機構	民政部調査月報(一の三)	民政部	康、三、三

虎林縣

概史

明朝時代には本縣地域は呢嗎河と稱して穆稜河地方に編入せられ、次いで同朝末年に至つては烏蘇里

地方に編入せられ、同河の東岸には札布の領土があり、其西岸には穆稜府領土があつた。咸豐皇帝統禦十年後（一八六〇年）烏蘇里河は右岸露領に編入され、宣統元年（一九〇九年）、呢嗎鎭警察局が設置されたが名稱が不適當といふので虎林鎭と改められ、其後吉林省の諸縣改設と共に、虎林縣と改められ、康德元年十二月省制改革の時は濱江省に編入されたが、更に康德四年七月、牡丹江省の新設に伴ひ同省に編入されて居たが、康德六年六月新設の東安省に移された。住民の大半は山東省及び關東州内の者で、縣城内の商人の大半は露領イマンに居住してゐた者が入虎した者である。

地勢

密山縣の東北に位し、其大部分は烏蘇里河の左岸に面し、只其南部に於ては僅かに松阿察河に接し、西北部に於ては完達山脈を經て饒河縣と、西部及南部に於ては密山と境界を接して居る。東部は松河察河、及烏蘇里河を以て蘇聯沿海州に對し、河川は河布泌河、七虎林河、穆稜河、松河察河等各々西方より、東方に流れて烏蘇里河に流入し、山脈は西北部に完達山脈走つて大森林地帯を爲し、平野は少く各河川の流域地帯が僅かに、農耕地として開拓されて居る。しかし九六％以上の未耕地があり、本縣は日本農業開拓地として、漸次開拓に着手せられて居る。

縣の物産

大豆、玉蜀黍、粟を主とする、其他特用作物として、煙草、麻類を産する。

開拓事業

本縣の北部は大森林地帯をなして居るが、大半は平野地帯であり、濕地が多い。現在耕地は全縣面積の一割にも足らず、日本農業開拓地として好適の地である。現在入植せるものは、第六次の黑咀子、第七次の晴和であつて鐵道沿線に近い。

都邑虎林街（舊黑咀子）

此地はもと安樂街又は黑咀子と呼ばれた處である。虎林縣公署は今の虎頭の地に置かれてゐたが、あまり邊境であるため、康德年公署を黑咀子に移し、縣政の中心としたのである。密山は指定街である。

虎林諸機關

縣公署　警察署　商工公會　興農合作社
郵政局　日本人小學校　生活必需品會社配給所　電報局
電話局

都邑虎頭村

烏蘇里江西岸にあり、ソ聯のイマンに對する國境の街で、市街はロシヤの影響を受けて其大部分がロシヤ式建築である。江の中間には航路標識あり、哈爾濱より夏季は定期航路があつて汽船來航し、主として雜貨を移入して來る。

住民の大部分は農業に從事し、半島人が四分の一を占めて居る狀態で商業、工業の見るべきものがない。蘇聯との密貿易が盛であつたが時局はそれを許さず殆ど絕えてゐる。

虎頭村諸機關

警察署　稅捐局　郵政局　電報局
日本人小學校　電話局　專賣局　虎林兼理司法縣公署
國際運輸

其他

警察署所在地

倒木溝　亮子　安樂鎭　公司
獨木河　三人班

郵政局所在地

清和鎭　通北鎭　吉祥　流子鎭

委託日本人小學校所在地

晴和

資料

題名	書名	發行所	發行年月
虎林縣	濱江省各縣概况(前)	民政部	康、二、四

虎林縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
虎林縣一般狀況（滿文）	同表題	縣公署	康、三、一
虎林縣概況	ソ聯事情（五の三）	滿鐵經濟調査會	昭、九、三
虎林事情	業務資料（八）	滿洲電々會社	昭、九、八
北滿沿烏蘇里地方事情	同表題	民政部	大同二、
虎林縣資源	吉林省公署調査月刊	吉林省公署	康、元、九
虎寧商租地區視察報告	同表題	滿洲中央銀行調査課	康、二、四
虎林縣要圖	同表題	縣公署	康、三、

饒河縣

概史

明朝時代には現在の本縣地帶は穆爾罕の支配下にあつて呢嗎河地方に編入せられてゐた。其後窩集舖に入りネロル（ネロは滿洲族語にて鳥の多く棲息する場所を意味す）と稱され、一六一六年ネロル區は滿洲朝の保護下に入り一七三三年三姓副都統府の設置と共に、同府に編入された。當時同地方に住した人種はイランといふ異人種であつた。宣統二年饒河縣創設され、建國後康德元年十二月三江省に編入されてゐたが、康德六年六月新設の東安省に編入された。

地勢

北部及西部は饒力河を以て撫遠縣及同江縣に、西部は裡七里星河を以つて寶淸縣と境し、南部は完達山脈を經て虎林縣に、東部は烏蘇里河を隔てゝ蘇領沿海州に對してゐる。

縣內山岳多く平野は殆どない。唯だ烏蘇里河、饒力河及び其支流の沿岸地帶が農耕に適するのみである。河川としては烏蘇里、饒力の二大河あり饒力河は河口より一五〇粁の地點迄小汽船を逆航し、小舟を寶淸縣境に至るまで自由に通航し得る。

縣の物產

縣内可耕地少く、農產は大豆、粟、雜穀等を出すが產額は僅少である。立木畜積量は濶葉樹千四百六十一萬立方米にも及んでゐるが薪材使用位で利用の道は開けてゐない。解氷後、烏蘇里江上にて鮭其他の漁獲あり數萬斤と謂はれるが地場消費に過ぎない。

開拓事業

本縣は山地帶が多く、平野は少いのであるが、河川流域にまだ開拓の餘地がある。開拓事業は、大和村に集合開拓村があり、青少年義勇隊の乙種小訓練所がある。

都邑饒河街

滿洲側、烏蘇里江地方に於ける最大都邑であつて阿片及農產物集散の中心地であつたが、阿片は禁止となり農產の取引も地方消費に過ぎぬ。當地方特有の養蜂業の市場として年に一千布度の蜂蜜を集散してゐる。匪賊の跳梁により縣內疲弊し、商品の消化力は少ない方である。哈爾濱地方より雜貨の移入をしてゐる。饒河を中心とする交通は夏季哈爾濱、富錦よりの定期航路があり、冬季は富錦饒河間に民營自動車がある。道路も撫遠、富錦、寶淸方面、虎林方面への道路があるが、富錦間の道路の外自動車の運行困難である。

饒河は夏季は就航の便がある外、自動車の便なく、航空路が同江及虎頭との間に開けて居る。

饒河諸機關

饒河縣公署	警察署	稅捐局	郵政局
專賣局	協和會	電報局	電話局
興農合作社	生活必需品會社配給所		

其他

警察署所在地

西林子村　別拉坑村

郵政局所在地

小佳河

饒河北進寮青年學校　頭道河青年學校

題名	書名	發行所	發行年月
饒河縣事情	同　表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、二
饒河縣事情	ソ聯事情（五の三）	滿鐵經濟調査會	昭、九、三
饒河縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四

寶清縣

饒力河の上流地帶であつて、淸時代には臨江府の管轄下にあり、民國二年同江縣、密山縣の各一部を爲せる同地帶に獨立の設治局を置き、民國五年寶清縣と改稱した。滿洲國成立後三江省に編入されたのであつたが、康德六年六月新設の東安省に編入された。

北部は饒力河の支流大七里星河を以つて同江、富錦の兩縣に、東部は裡七里星河を以つて饒河縣と境し、南部は完達山嶺、奔松子嶺を經て密山縣、虎林縣に、西部は倭肯河上流の曲線を以つて勃利縣に接して居る。縣の南部には完達、奔松子兩山系があり、北部には阿爾金山突出して、兩地帶の中間を饒力河本流が東進して居る。又北部縣境には大七里星河があり、平野は縣の中央竝東部に開けて居る。

縣內可耕地に對する既耕地わづかに四・九%、未耕地九五・一%といふ狀態で、農業上將來開發の見込み十分ある縣である。現在にては、大豆、玉蜀黍、粟を主產とし、雜穀、小麥等を產するが特用作物として、煙草、麻類、瓜子等がある。

立木蓄積量は、三江省中第四位と見られて居る。鑛產も數種に及んで居るが、採掘の手が伸びて居な

い。

開拓事業

當縣にはまだ集團開拓民は入つてゐないが、青少年義勇隊の甲種小訓練所が頭道河と、龍頭山の二箇所に設置せられて居る。

都邑寶清街

寶清は南北に流るゝ河川分水嶺の高原地帶であつて、北東に流るゝものは烏蘇里河に南西に流るゝものは松花江水系を爲して居る。勃利と同じく山國地帶の一邑である。道路不良、諸河川の利便薄く交通の便に缺けて居る。當地は民國七年築かれた新市街であるが、市況振はず、商工業も交通不便なる爲め特產取引等も、油坊、燒鍋等の特產商によつて取扱はれて居るに過ぎない。

從來殆ど寶清に入るに苦しむが如き交通狀態であつたが、康德七年より佳木斯、寶清間にバスの開通を見、又南方東安よりもバス開通するて及び便利になつた。又東安より飛行機の便もある。

寶清街諸機關

寶清縣公署	警察署	稅捐局	興農合作社
協和會	郵政局	電報局	電話局
滿拓公社寶清出張所	日本人小學校	生活必需品會社配給所	
其他			

警察署所在地

大孤山　七星泡

郵政局所在地

七星泡

義勇隊青年學校

龍頭青年學校

資料

題名	書名	發行所	發行年月
寶清縣事情	同表題	滿洲國地方事情大系刊行會	康、三、四

寶清縣……三江省各縣概況　民政部　康、二、一
寶清縣……圖寧、寧佳、林密線及背後地事情　鐵路總局　康、二、四
寶清縣一般狀況……同表題　寶清縣公署　康、三、
寶清縣經濟事情……金融合作社管內經濟事情　金融合作社聯合會　康、五、一二

林口縣

概史

林口縣は、康德六年六月の地方政治大變革の時に新に設けられた縣であつて、もと勃利縣及穆棱縣の區域に入つて居たものである。卽ち、勃利縣の西南方と、穆棱縣の西北方を割き、林口縣として新設の東安省に編入されたものである。

地勢

全縣殆ど山地帶であり、僅に圖佳線の通ずる地帶が、烏斯渾河の流域で帶狀の平野を成し、虎林線の通ずるところが穆棱河の流域でわづかの平野を形成して居るに過ぎない。

縣の物產

平野少く農產の生產は少ないが、縣內森林多く、西に西大青山、北大青山の林場を控え、木材の伐採は將來有望である。

又鑛產としては石炭があり、有望な炭田ではあるが、未だ採掘の運びに至つて居ない。滿炭の經營に屬する處である。

開拓事業

本縣には第六次開拓團が龍爪に入植し、青年義勇隊自警訓練所が、楊木、青山、虎山の三箇所にある。又古城鎭には林業開拓民が入植して居る。滿拓公社では林口に出張所を設けこれらの開拓事業に當つて居る。

都邑林口街

當地は圖佳線、虎林線の分岐點であつて古城鎭の南方十粁の地點にある。林口は名もなき山間の僻地

で、康德元年春までは僅かに民家が一軒あつたのであるが、鐵道工事の開始と共に工事請負者の進出、守備隊、滿鐵工事區の駐在があつて地方民の集中を見俄かに一部落を形成したものである。康德元年二月から工事請負人入り來り、料理店、飲食店、旅館といふ樣なものが出來日本人、半島人も來り集つて居る。鐵道線路を中に挾んで北は商店、南は局宅街、電燈電話より水道の設備も整つて居る。林口は圖佳線中の主要驛であつて、滿鐵の都市計畫あり、市街に近く林口炭坑を有し、更に西大青山、北大青山の林場を控え、將來木材の集散地として有望視されてゐる。

林口炭坑は市街の北二粁の地點にあり、其炭田は遠く古城鎭に及び、炭質亦良好、始め滿洲炭礦會社が調査し採炭着手せんとした時、東方密山方面に有力なる炭田を發見、この方を先にしたため、林口の方はまだ採掘に至らないが、有望な炭田である。

林口は汽車の外は自動車の便がない。

林口街諸機關

林口縣公署	街公所	警察署	稅捐局分所
郵政局	電報局	電話局	興農合作社
中銀支行	電業營業所	日本人小學校	滿拓公社林口出張所
生活必需品會社配給所	林口畜産學校(省立)		

日本人小學校所在地

古城鎭　　龍爪鎭

牡丹江省

牡丹江省

牡丹江市

新進都市牡丹江

現住人口十二萬を有する。牡丹江が近々四、五年間に出現した事は正に驚異的な事實である。始め小數の山東移民が拉河附近に小部落を拓いてゐたが、一九〇三年東支鐵道が、本營業を開始するにあたり、驛を牡丹江と定め一小驛として誕生し僅に寧安方面の農産物並に木材を積出す程度であつたが　附近一帶の山は大森林地帶で、鐵道建設用材、機關車燃料の薪材が容易に得られて居た。露人、支那人等の移住し來るもの漸次增加はしてゐたが、歐洲大戰後減少し、滿洲事變前は僅に三千五百名（中日本人十一名）にすぎなかつた。建國後滿鐵測量隊の入牡並に大同二年、圖寧線鐵道工事開始せられて、牡丹江が終點驛と定められ、尙牡丹江を起點に佳木斯及密山方面への鐵道敷設計畫進められるに至り、俄然牡丹江は交通及經濟上の中心地點として宣傳せらるゝに至つた。

鐵道建設に伴ひ、諸機關亦當地に設けられ、將來を見越して移住し來るもの、商業を開始するもの日に月に增加し、康德三年末は四萬五千と發表された人口が七年二月には十二萬を突破して居る狀態である。

康德四年十二月一日を以つて市制を布かれ牡丹江市は新進の市として華々しく誕生したのである。

牡丹江の交通經濟上の位置

露西亞配下にあつて北滿鐵路の一小驛に過ぎなかつた牡丹江も北鐵接收に續ぐに圖佳線の完成となり今や濱綏圖佳兩線のクロースに立つて俄然、交通、經濟上の重大なる意義を有するに至つた。圖佳線の

出現は、種々な問題を北滿經濟界に投じたが、就中北鮮三港への最捷路として、交通經濟の要衝に位する牡丹江の新なる登壇は斯界焦點の的となつた。過去に於て綏芬河驛連絡、浦鹽經由輸出せられた北滿農産物は百萬瓲を越えてゐたが、其の內大部分は此三線地方及其の培養線ともなるべき濱綏線の搬出にかゝるものである。又松花江沿岸の農産物及木材は其の大半が寧佳線沿線に近い地方に産出する關係上、鐵道運賃を考慮に入れて之を考察するならば、船舶に依りて哈爾濱に輸送されるよりも圖佳線廻りが有利であり、且つ北鮮三港の一元的機構の整備と相俟て奧地特産物の輸送路は茲に一變し、牡丹江中繼北鮮經由が漸次有利に展開し得る新狀勢となり、今や牡丹江は無くてならない物資の集散地として、東北滿の産業中心と化し、其の將來性は增々重大性を帶び愈々期待さるゝに至つたのである。

此の牡丹江の交通上の重要性は哈爾濱の經濟界には不利を與へた結果になつたが、佳木斯の繁榮を助長し、東北滿各都邑への物資中繼となり、更に最も大きく天然資源の急激なる開發を促進し、日本資本の厖大なる進出となつた。牡丹江に投下されつゝある日本資本は巨額に達してゐる。又最も活氣を示してゐる土建界は目覺しく、それに投ぜられる資金は全滿の一割を占めてゐるといはれてゐる。又從來搬出困難又は不可能の爲め經濟的價値なく徒らに風雨に曝されてゐた之等沿線の資源は今や廣大なる市場性を附與されんとしてゐる。

牡丹江市諸機關

牡丹江省公署	牡丹江市公署	警察廳	稅捐局
商工公會(省、市)	牡丹江地方法院	牡丹江地方檢察廳	區法院
區檢察廳	郵政局(四)	電報局	電話局
牡丹江放送局	營林署	專賣署	興農合作社聯合會

牡丹江鐵路局　中銀支行　興銀支店　大興公司(三)
國際運輸　協和會省本部　電業支店　日本人小學校(二)
牡丹江師道學校(省立)　牡丹江工科國民學校(省立)
牡丹江高等女學校　青年學校　牡丹江木材工業株式會社工場(本社安東)
協和林業株式會社　東亞殖産株式會社　牡丹江太陽公司(合資)　牡丹江高岡號(合資)
檜桓商事會社(合名)　三井物産株式會社支店　滿拓公社牡丹江地方事務所
牡丹江市立保健所　生活必需品會社支店及倉庫　勞工協會支部

資料

題名	書名	發行所	發行年月
新進都牡丹江市	滿洲國現勢(各年版)	滿洲國通信社	康、五年、六年 八年
新興都市牡丹江	東洋貿易(一七の八)	大阪市役所	昭、一三、八
牡丹江市經濟資料	海外經濟事情(一三の一五)	通商局	昭、一三、八
牡丹江に於ける會社工場一覽表	東滿に於ける主要會社工場調査	牡丹江鐵路局	昭、一二、七
牡丹江木材工業見學記	青陽(六七)	國際運輸社員會	昭、一二、一〇
牡丹江の全貌(三年度版)	同　表題	牡丹江都市建設局	康、四、五
牡丹江に於ける工業條件	同　表題	牡丹江鐵道局	昭、一三、六
牡丹江の町と拔河(水野清一)	北滿風土雜記	座右寶刊行會	昭、一三、六
牡丹江の近情	實業部月報(四の一一)	實業部	康、三、一一
牡丹江(巖江寛一)	新天地(一八の三)	新天地社	昭、一三、三
牡丹江市勢一般資料	同　表題	內務局	康、四、九
牡丹江を中心とする地域の經濟事情	北滿經濟月報(二四)	哈爾賓商工會議所	昭、一一、九
牡丹江特輯	協和	滿鐵社員會	昭、一一、一二
牡丹江の近情	實業部月刊	實業部	康、三、二

寧安縣

概史

もと滿洲族勃興の地に近接してゐるため明の萬曆年間はやくも淸に服屬した。順治元年諸衛を裁徹、同十年寧古塔昂邦章京及び副都統を設けて鎭守せしめ、康熙元年昂邦章京を改めて鎭守寧古塔將軍となし、同十五年將軍を吉林に移駐し副都統を駐めて鎭守せしめた。此の時代に官莊並に旗地の制度が設定されたが、淸朝の北京遷都と共に此の地は僻遠化外冬季酷寒のため旗人と、幾何かの流謫の民を見るのみで一般民人の好んで移住するものは少かつた。雍正四年泰寧縣を設け奉天府尹廳に屬せしめたが、同七年廢縣、光緒八年合蘭直隸廳を設け撫民同知を置いた。光緒七年に三岔口附近、同十一年に穆稜河附近の招民開懇が行はれ、光緒三十二年寧古塔が開放された。宣統元年綏芬廳撫民同知を三岔口より寧古塔に移し始めて綏芬府となし、同二年三岔口に東寧廳を設けるに及び綏芬府を寧安府と改めた。寧安縣となつたのは民國二年である。滿洲國獨立後は初め吉林省に屬し、康德元年十二月よりは濱江省の管轄となり、更に康德四年七月新設の牡丹江省に編入せられた。

地勢

本縣は四面山を以て圍まれ其の中央地區を南北に牡丹江が貫流する。縣南方には鏡泊湖がある。鏡泊湖附近は眺望絕佳、國立公園の指定地で又鏡泊湖北端には吊水樓と呼ぶ一大瀑布がある。

縣の物産

農產豐富、大豆、粟、小麥、玉蜀黍、高粱、多少の水稻も出す。小麥は本縣のもの良質で產額も多い煙草、線麻等の特用農產がある。畜產は牛、馬、豚、家禽等であるが頭數は少い。

林業は二道河子、二道海浪河、畑筒溝、滿湖頭の四ヶ所が林區であり、森林面積六、五九六平方粁、立木蓄積量一億一千八百萬平方米以上と調査されて居る。

金、砂金、銀、石灰、石炭等の礦產がある。

漁區は牡丹江及鏡泊湖で、鏡泊湖の南岸、東大泡、西大泡、及東京城西方の蓮池泡が主なるものである。鏡泊湖の水產は治安の維持と交通が發達すれば將來搬出に有望である。

開拓事業

本縣の日本開拓事業は鏡泊學園に始まつて居る。

滿洲建國日淺く治安も維持されてゐない頃、鏡泊學園の開拓が始まり、多くの犧牲と辛慘が拂はれたのであつた。滿拓の集團は第八次に始まり、五ケ所に入植してゐる。卽ち、樺林、楡林、蘭崗、蘆屯、密古河である。又、義勇隊の方は山市甲種小訓練所、寧安乙種小訓練所があり、山市には自警訓練所及び、鐵道自警村もある。鐵道自警村は寧安及東京城にも置かれて居る。其他北方の仙洞には林業開拓團も入植して居る。本縣は面積も廣く、開拓地としては好適な地味を有して居る。

都邑　寧安街（寧古塔）

寧安縣城、此地は寧安平野の中心地であつて圖佳線に沿つて居る。清朝時代副都統置かれ、後將軍廳が設置されてゐた。大正七、八年頃朝鮮獨立運動を起した時に半島人十數戶移住し來つて水田經營に從事し、以後連續的に移住し來つて五千人を越えてゐる。日本人も亦事變以前より入り來つた者もあり圖佳線の建設以來急激に增加して來た。

當市は哈爾濱市場に遠く、原料豐富、背後地廣大なる關係上交通不便なる僻地にも拘らず比較的工業都市として發展して來た。製粉業、燒鍋、油坊、精米等で、製粉業は相當なる發達を遂げ、其規模に於ても比較的大にして他に見られない新式機械設備を有して居る。當縣は小麥產地として名高く、從つて製粉業の發達を遂げたものである。

商業に就て見れば、此地は東滿物資の集散地として夙に市況殷盛を極め、殊に圖佳線開通以來、交通

便利となり、移出入日に多くなつて居る。當地取扱貨物としては、雜貨、麻袋、食料品、果實、麥粉、魚類、油類、鐵製品等で主として圖佳線經由で、從來の濱綏線經由のものは量に於て著しく減少されて居る。

牡丹江及東京城に向けてバスの便がある。

寧安街諸機關

寧安縣公署　警察署　郵政局　電報局
電話局　商工公會　興農合作社　中銀支行
大興公司(四)　國際運輸　協和會　營林署分署
寧安師道學校(牡丹江省立)　寧安(農科)國民高等學校(省立)
寧安女子國民高等學校(省立)　滿人小學校　日本人小學校
新華麵粉股份有限公司　裕東機製麵粉股份有限公司　縣立醫院
生活必需品會社配給所

東京城

此地は寧古塔に亞ぐ此地方有數の邑鎭であつて文化的に見れば渤海王國の國都であつた。

現在の商勢は振はず、地方的小取引市場たるに過ぎない。此地に集散する物産は小豆、大豆、粟、玉蜀黍、葉煙草、木材、魚類等であつて、工業製品として豆油、豆粕、豆素麵、燒酒等がある。

市内各商店は、事變後匪賊の掠奪、放火等により灰燼に歸したるもの多く復興が後れて居り、資本は寧安の商人より信用取引で融通して居る有樣である。

寧安よりバスの便あり、又日曜は鏡泊湖方面にも通ずる。

東京城街諸機關

警察署　稅捐局分局　郵政局　電報局

國際運輸　　電話局　　日本人小學校

海林

寧安縣に屬し、牡丹江の支流海林河の南岸にある。當地は寧安及東京城に至る樞要の地であつて鐵路による外、自動車、馬車、又は水路の便もある。

當地は一に黒林又は、客賬房、賬房子等と稱せられ彼の勃海時代に寧古塔貝勒が、海林河に眞珠貝がある事を知り、監視人として六名の番人を派遣してゐたのが當地開拓の最初であると謂はれて居る。鐵道開通前は小數の樵夫、獵夫等が居たに過ぎなかつたが、鐵道建設と共に露國は給水所、機關庫、兵營社宅等比較的大きい設備をした。之が當時露國が寧安に東部軍團の一旅團を置き、吉林方面を扼する要衝たらしめると共に、當地より吉林に出で南部線の老少溝に出づる鐵道を建設し、烏蘇里方面より撫順に通ずる捷路を計畫し、以て西比利亞及南北滿洲の連絡の密接を計り、その包藏せる南北滿洲經倫の基礎を確立すべき大計畫があつたからであるといはれる。

此の地方の重要物産は穀物及木材であるが、殊に木材豐富で始め露人が木材伐採權を獲得し、製材工場を新設したが、後、日本人に渡した。此林區は延長四〇粁に及び、白松、赤松等を出し、林區の存在は此地の經濟生活に重大なる關係を有して居る。

附近に半島人の水田事業に從事してゐるものが多い。その生産にかゝる水稻の產出も多く、土地の需要を充すと共に多く哈爾濱方面にも移出して居る。

海林諸機關

警察署　　稅捐局分局　　郵政局　　電報局

電話局　　新安鎭に農業學校あり

横道河子

哈爾濱、綏芬河間の略中央に位し、牡丹江の支流なる横道河の上流山脈中に介在する擂鉢底の如き窪

地にある。

曾て山間森林間の一寒村であつたが、鐵道建設にあたり位置、及軍事關係より特に大市街計畫、大停車場を建設したため漸次人口増加するに至つた。

市街は大別して露人町、混合町、滿人町となつて居り、露人町は、宏莊なる建物多く、施設完備し、清潔で一見遊園地の樣であるが、滿人町は家屋も小さく整はない。混合町は、日、露、滿人雜居の地で商店多く商業の中心地である。而して主として滿人の經營である。

附近に農産なく材木の取引が主であり、又蜂蜜の産があるので知られて居る。

橫道河子諸機關

警察署　稅捐局分局　郵政局　電報局
電話局　日本人小學校　國際運輸

鏡泊湖水力發電

鏡泊湖の發電工事は東京城より鏡泊湖に到着した地點の阿堡保吊樓樓瀑布より四季通にかけて施されるものであつて、湖面と牡丹江との自然落差八五米を利用し、水路式發電所を建設して最大三萬六千キロワツトの發電を行はんとするものである。發電開始は康德八年九月であり、電力供給先は牡丹江省及間島省一般の需要に應ずるものであつて、正に東滿に於ける資源開發と産業勃興の氣運盛となれる折柄一層の拍車をかけるものと大なる期待を持たれて居る。

掖河諸機關

郵政局　電報局　電話局　國際運輸
日本人小學校
其他

警察署所在地

臥龍村　新安村　五河林　沙蘭

	鏡泊　頭道河子(羊臉溝)　大海林(黑頂子)　南二、三道河子(金家)
	二道家子
税捐局分局所在地	山市站
郵政局所在地	山市站　鏡泊湖　鹿道　新安鎮
	三靈屯　沙蘭鎮　乜河鎮　磨刀石
	海浪　青林　寧安訓練所内　温春
	馬蘭河　七間房　拔河　樺林
	仙洞　寶林
電報局所在地	鹿道　沙蘭鎮
電話局所在地	沙蘭鎮　愛河
日本人小學校所在地	鹿道　仙洞
國際運輸所在地	鹿道站

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
寧安縣事情(大同學院)	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
寧安縣事情(同前)	滿洲國地方事情(概說篇)	大同學院	康、元、四
地方行政について(民政部)	第一回全國縣參事官會議議事錄	民政部	康、元、六
最近の東京城	露滿堂時報	哈爾濱商品陳列館	昭、九、七
寧古塔邦人史(同前)	同表題	哈爾濱第一線編輯	昭、五、五
寧安縣一般狀況	同表題	縣公署	康、二、一二
寧安縣	寧、寧佳、林密線及背後地事情	滿鐵鐵路總局	康、二、四

寧古塔城(山根倬三)……	亞東指要	東洋協會	大正一四、一一
鏡泊湖と移民問題(島田一男)……	經濟滿日	滿洲日日新聞社	昭、九、四、一五
寧安縣農業事情……	滿鐵調査月報(一五の七)	滿鐵	昭、九、七
東京城の遺跡(アーナート)……	滿蒙探檢四十年	大日本雄辯會講談社	昭、九、一〇
寧安の農業(佳木斯農事試驗場)……	實業部月刊(五の二)	實業部	康、四、二
鏡泊學園……	吉林省概說	省公署	大同二、一一
鏡泊湖を中心に(平井・島田)……	滿洲電氣協會雜誌	滿洲電氣協會	昭、九、五
寧安縣全圖……	同表題	縣公署	康、三、七
東京城の歷史(水野清一)……	北滿風土雜記	座右寶刊行會	昭、一三、六
寧安縣經濟事情……	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

東寧縣

沿革

清末光緒初年頃から遼東招民開墾令が制定せられ、漢民族の移住激増し、滿洲中原に流入して來たが尙僻遠山岳地帶の本縣地方は漢人の侵蝕より免れて原始の姿を殘して居た。ところが北鮮の飢饉流民は安住の地を當地方に求め、又露國極東政策は、當地に侵入せんとした爲、光緒八年吉林將軍をして之に留意せしめ、同十八年には東寧(當時の三岔口)に招墾局を設けて始めて招民開墾を行つた。光緒三十年本縣機關を綏芬廳と改稱、宣統二年東寧廳を設置して三岔口に遷し、東寧と改稱した。民國二年道制を敷かれ延吉道に屬して東寧縣と稱するに至つた。滿洲事變により兵匪王德林が蟠居してゐたが、大同二年擊破せられ、康德元年十二月濱江省に屬し、更に康德四年七月牡丹江省設置せらるゝに及んで同省に編入せられたが、康德六年六月新設の綏陽縣に北方の一部を割讓した。

地勢

北部に黃窩集山、西部に穆稜窩集嶺、南部に土們嶺、老黑山、七十二個頂子、通背山、東部は大小山

脈相連り蘇聯國境を形成し、平原地帯は僅かに大小綏芬河流域地帯があるばかりである。俗に太平嶺を劃して以北を北東寧以南を南東寧といつて居る。東は蘇領烏蘇里に境し、大瑚布圖河は此の境界線の殆ど半を占めて流れて居る。

縣の物産

大豆、粟、小麥を主とし縣外移出も行つて居る。縣内可耕地に對する既耕は割によく行はれて六三・五%を占めてゐるが縣總面積の九五・一%は不可耕地といふ状態である。

家畜は豚、羊、牛、馬、家禽等。

移住民の來住によつて伐採或は燒拂ひのため道路の通じた附近には昔の森林の面影を見る事は出來ないが、奥地には針葉樹の深林多く、林産資源供給地となり得る。又南方には白樺、櫟等の濶葉樹の原生地帯がある。

砂金、石炭の埋藏豐富現在採掘されず。

鯉、鱒、鮭、雜魚等綏芬河で漁獲されるが住民の需要を充すに止る。

都邑東寧街

蘇聯國境に位し、四圍山岳を以つて繞らされ、綏芬河驛の南方約百十二滿里にある。市街の東部には烏蛇溝河、北部には綏芬河等各々北流して、當地北方一四滿里に於て合流し沿海洲に入つて居る。市街は整然と正方形に區劃された國境都市である。

露支紛爭前までは露領沿海州との密輸繁榮し、後阿片栽培が公許されてからは其取引旺盛であつて、商業の發展は著しく密輸も年約七、八百萬元行はれてゐたといはれてゐる。露支紛爭を劃して蘇聯の經濟政策の重壓により貿易全く閉止され、阿片の賣買も消滅した。事變後王德林に蹂躪せられ大打撃を蒙つたため沈衰してゐるが、現在商工業者で資力千圓以上を有するものが三十九戸ある。工業は油坊工場

十二、製粉五、燒鍋四、皮革四、製材四、其他釀造、鐵工、印刷等何れも滿人經營のものがある。

康德七年綏陽より分岐したる鐵道は東寧まで開通し、又、南方へは縣境を越えて琿春縣東興鎭にバスの便あり、邊境の地と雖最近交通の便が大いに開けて居る。

東寧街諸機關

東寧縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
營林署分署	郵政局	電報局	電話局
區法院	區檢察廳	中銀支行	興農合作社
協和會	日本人小學校	縣立醫院	生活必需品會社配給所
勞工協會出張所			

其他

警察署所在地

三岔口	烏蛇溝(石門子)	老黑山	通溝

郵政局所在地

細鱗河	西毛子屯	阜寧鎭	三岔口
北河沿			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
東寧縣	吉林省各縣略誌(一)	省公署	康、元、五
東寧縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
東寧縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
東寧縣事情	同表題	滿鐵哈爾濱事務所	昭、三、七
東寧事情	業務資料(九)	滿洲電々會社	昭、九、九
綏芬河事情	業務資料	滿洲電々會社	昭、九、九

ポグラニチナヤ經濟史(加藤清一)……露滿蒙時報(一八一)	哈爾濱商品陳列館	昭、九、一一
東寧國境事情(今元久)……滿蒙(一六の一二)	滿洲文化協會	昭、一〇、一二
綏芬河事情……滿蒙(一五の三)	同前	昭、九、三
綏芬河案內……同表題	綏芬河領事館警察署	昭、一〇、三
綏芬河地方と電氣事業……滿洲電氣協會々報(三五)	滿洲電氣協會	昭、一一、三
東寧縣密輸事情(龜山武夫)……稅關(一の五)	財政部	康、二、六
東寧縣事情……同表題	東寧縣公署	大同三、一
綏芬河市政概況……同表題	綏芬河市政公署	康、二、八
芬綏河的一般……同表題	同前	康、二、八
國境を往く(東寧縣地方)……協和(三五)	滿鐵社員會	昭、一三、四、一五

綏陽縣

概史

本縣は康德六年六月に、從來の穆棱縣及東寧縣の一部を割き新に設けられたる縣にて縣成立の歷史は新しい。

地勢

境域は東寧の北方第十七號界標附近より、萬鹿溝嶺に至り更に西方通溝嶺を中心にして綏芬河の谷を越え、沙河子附近より北行、穆棱窩集嶺に沿ひて濱綏線を橫切つて北方密山縣境に至る。東部區域である。地勢は殆ど山地帶で平野の見るべきものがない。

本縣東部は陸續きのわづかな山嶺を以つて蘇領ウスリー洲と境界して居ろために國防上重要性を帶びてゐる縣である。

縣の物産

農産の見る可きものはないやうであるが、本縣は産金地帶で砂金に有望であるが、未だ着手に至らないやうである。

開拓事業

開拓團は入植せず土城子に青年義勇隊自警訓練所がある。

都邑綏芬河街

當地方は阿片、人蔘を栽培する土着民が居住してゐたが、其中心地として綏芬河なる部落が出來、露國は勝手に侵入して來て露治時代を成し東淸鐵道建設により歐露より多數の建設測量隊が浦鹽を經て派遣せられ、更に山東苦力集中し來り、山東商人も來住した。其後支那側は容易に利權回收に成功し遂に一九二二年、支那側の東省特別區の行政が布かれ護路軍が駐劄した。滿洲事變後日滿人數多入りこんで居る。街の背後の山が國境線である爲めに、滿露の紛爭絶えず康德四年八月頃、蘇聯領事館は引上げたとの事である。

商業、縣內各地に至る交通路存在せず縣城への道路も險惡な爲めに、商工業市場限定せられて發展をみない。事變後の掠奪課稅に苦しみ商人の哈爾濱、山東に引上げる者多く衰勢を示してゐる。大同二年日本軍駐屯してより治安回復せられ、日本人も入りこんで來たが、商工業は振はない。製粉、油坊、釀造等何れも滿人經營の工場がある。

綏芬河街諸機關

日本領事館	警察署	稅捐局分局	專賣局
郵政局	電報局	電業營業所	電話局
日本人小學校	郵政局		

都邑綏陽街

もと小綏芬と呼ばれた地で、康德六年六月一日縣城と定められて以來綏陽と改め縣名も同樣にしたのである。

綏陽街諸機關

縣公署	電報局	電話局	警察署
郵政局			

日本人小學校（東綏芬にもあり）　　生活必需品會社配給所

郵政局所在地　細鱗河

穆稜縣

概史

光緒二十八年穆稜地知事を駐し、綏稜廳に屬せしめたが、宣統元年穆稜縣を設置し密山府に屬し、民國二年府制改革と共に依蘭道に屬した。滿洲國建國後は吉林省の管轄となり、更に康德元年十二月一日より、濱江省に屬することゝなつた。更に康德四年七月新設の牡丹江省に編入せられた。

康德六年六月新設の綏陽縣に東部の一部を割いた。

地勢

東北及び東部は清溝嶺、穆稜窩集嶺山脈を以て夫々綏陽、東寧縣に界し西部寧安縣境に黑山嶺山脈横たはり、其の他北林口縣境に龍瓜清嶺等圍繞し一般に山岳重疊して森林地帶を爲し平地に乏しい。河川としては穆稜河が縣内を北流する。その支流風氣、柳毛兩河は南西部より、馬橋河等は東南部より夫々流入して居る。

縣の物産

農產の主なるものは大豆、高粱、玉蜀黍、粟、小麥、水稻等で、牛、馬等の家畜は僅かである。縣内の林場は民有林と國有林とがある。同益公司は二個頂子一帶で、カールスキー林場は大石頭河上流一帶である。國有林は黃窩集、胡家店以東南據り一帶である。

礦產は石炭を以つて第一とする。即ち穆稜炭坑でこれは露支合辦事業として、民國十年から始められたものであるが、滿洲國となつて露滿合辦となつたわけである。炭質は撫順炭より稍々炭化の度進み膨脹粘結性强く、中生代侏羅紀の生成にかゝる三層の瀝青炭田である。此炭田は、穆稜煤礦公司の經營になり濱綏線の燃料として年產十五萬噸位を出してゐるが、大同二年頃から營業不振である。

砂金、銀が四五ヶ所あるが、產額減少で停止してゐる。

開拓事業

本縣は第八次までは未だ團として入植してゐるものがない。青年義勇隊の自警訓練所が、太嶺に置かれて居る。

都邑穆棱街（八面通）

穆棱縣城で八面通と稱する處であるが縣城となり穆棱と改稱した。縣城ではあるが其繁榮は北部の梨樹鎭及南部の穆棱站には及ばない。

穆棱街諸機關

穆棱縣公署	警察署	稅捐局	稅捐局分局
區法院	商工公會	郵政局	區檢察廳
電報局	電話局	營林署	興農合作社
國際運輸	協和會	縣立醫院	生活必需品會社配給所

穆棱站

濱綏線の國境綏芬河から約七〇粁、北東に於ける穆棱驛所在地であつて滿人は俗に九站と稱してゐる穆棱驛は一面坡、橫道河子等に對等する位の大驛である。其前後は山林に包まれ、穆棱河を控へ景色が佳い。

穆棱站諸機關

警察署	稅捐局分所	郵政局	電報局
電話局	日本人小學校	勞工協會出張所	

梨樹鎭街

穆棱鐵道の終點であつて、縣城穆棱より約二十七粁を距てゝゐる。當地は民國十三年頃迄は小部落に過ぎなかつたが、炭礦の採掘、穆棱鐵道の開通後、穆棱密山の一部及勃利縣の物資集散地となり近年急激なる發展を遂げ、牡丹江省內有數の活氣ある取引場となつてゐる。

穆棱鐵道は小城子より梨樹鎭に至る。石炭運搬を目的として敷設されたものであるが、同鐵道は石炭輸送の外、大豆の輸送が盛で、背後地の特產は梨樹鎭より小城子に出でゝ南下する。

大資本の商業者はないが、特產を取扱ふ。雜貨商多く又日用雜貨、藥屋、料理屋、旅館等があり、油

坊、石鹸工場等小規模乍ら有して居る。當地より虎林線の廟山に、又東方は密山方面に國營バスがある。

梨樹鎮街諸機關	警察署	郵政局	電話局	電報局
	專賣局	營林署分署	中銀支行	國際運輸
	電業營業所	日本人小學校		
下城子諸機關	警察署	税捐局分所	郵政局	電報局
	國際運輸	電話局		

其他

警察署所在地	奎山	馬橋河村	興源村	
税捐局分所所在地	興源鎮(下城子分所)			
郵政局所在地	馬橋河	興源鎮	代馬溝	奎山
日本人小學校所在地	黄泥河子			

資料

名(筆者)	書名	發行所	發行年月
穆棱縣事情(吉林省公署)……	吉林各縣略誌(第一篇)	省公署	康、元、五
縣內實狀について(民政部)……	第一回全國參事官會議議事錄	民政部	康、元、六
穆棱入(アーナート)……	滿蒙探險四十年	大日本雄辯會講談社	昭、九、一〇
穆棱縣……	寧圖、寧佳、林密線及背後地事情	鐵路總局	康、二、四
穆棱縣……	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	滿洲事情案內所	昭、一〇、二
穆棱站……	業務資料(九)	滿洲電々會社	明、九、九
穆棱炭一覽……	支那鑛業時報(八〇)	滿鑛地質調査所	昭、八、一二

濱江省

濱　江　省

哈爾濱市

哈爾濱は光緒二十四年卽ち一八九八年露西亞人の手によつて松花江畔の一寒村に初めて建設せられた近々四十年の歷史を有するのみである。

一八九六年露支密約によつて東淸鐵道敷設權を得て以來、哈爾濱は露西亞の滿洲經倫の策源地として又東淸鐵道敷設の基點として一八九八年都市計畫を樹て東洋のモスクワを企圖して市街建設に着手し、其資金はロシヤ革命當時までに二億六千萬留が投じられ、鐵道建設には五億留が費された。

哈爾濱は日露戰爭以來、双鷲旗、赤旗、五色旗、靑天白日旗、滿洲國旗と五回に涉る國旗の變化を見せてゐる程、露支間の爭奪が繰り返へされてゐる。又世界各國の總領事館、領事館が置かれ、居住民族は二十八箇國に及び、國際都市として、社會組織が複雜である。

哈爾濱の母體は舊哈爾濱特別市で、露西亞が始めて都市を建設した時、名稱に就ては種々提議もあつたらしいが土民が「ハオビン」と呼んでゐたためか、ハルビンといはれる樣になり、露西亞語の意では墳墓の地といふ意味でそのまゝ、ロシヤ語らしい響も好いし名づけたともいはれ、滿洲族語の、網干場といふ意味卽ち漁業の中心から來てゐるともいはれ、語源ははつきりしないが從來ハルビンといひハルビンと發音しまち〳〵であつた。哈爾濱といふ字は漢字の音讀をあてたものらしい。哈爾濱市公署では、康德五年十一月此讀方を統一し、以後ハルビンと稱する事に決定した。

扨て哈爾濱は滿洲建國後、大同二年七月、特別市制が布かれ、特別市の區域は前述の舊哈爾濱特別市を母體として、元東支鐵道の附屬地、傅家甸、松浦、濱江縣全部、阿城、呼蘭の一部を割いて特別市に編入し、總面積九二九・五平方粁といふ尨大な地域を定められてゐる。人口から見れば、奉天に次ぐ滿洲第二位を占め、複雜なる民族の集合都市である。康德四年七月一日行政機構の大改革により、特別市制は新京のみを殘して廢せられ、奉天等と同樣普通の市制が布かれ、哈爾濱市と呼ばれるに至つたが、哈爾濱市は特別市の財産、營造物等をそのまゝ繼承し、哈爾濱の繁榮上何等支障を來した所以ではない。北鐵接收により、赤系露人が大分本國に引揚げたが、未だ、白系露人が多數殘つて居り、更に、日本人がどし〳〵入りこんで居る。一時奉天をしのぐ人口數をみせたが、奉天に集中する人口は物すごく、現在では奉天に及ばない。

北滿交通經濟の中心哈爾濱

哈爾濱は、北滿に於ける陸運、水運、空運の實に中心都市である。從つて、北滿經濟の依存も哈爾濱にある。

一枚の滿洲國地圖を展げる事に於てそれは一目瞭然である。卽ち、鐵路は、京濱線、濱洲線、濱綏線拉濱線、北黑線五線の集中地點であり、自動車の交通亦八方に開かれ、遠くは松花江口の同江までも通じてゐる。松花江の水運はもとより、黑龍江、烏蘇里江の水運は何れも哈爾濱を中心として行はれ、航空路はほゞ鐵路に沿つて開けて居り、新京までわづか一時間にして飛來し來る。

通信機關、金融機關等、他都市と同樣整備して居る。北滿の寶庫を背後地八方に控えて北滿に散在する大小幾多の都市商工業資本は多く哈爾濱に本據を有するもの多く、經濟關係に於て恰も哈爾濱を根幹とする枝葉の如く、發達せる交通機關、通信、金融機關を通じて物資が集中せられ、分散されて居る。

近時平齊線の開通による西部方面及び圖佳線開通による東滿方面の交通、經濟、物資の集散上の一部を哈爾濱から奪つた形ではあるが、一方北鐵接收後に於ける、運賃統一と大連よりの直通列車の開通は、南滿方面との連絡に時間と經費を縮少し、從來の不便を一掃したる結果尚哈爾濱は北滿經濟、交通の王座たる面目と實質を益々發揮して居る。

哈爾濱の交易

哈爾濱の外國貿易額は年々金額に增加を來し、康德六年中にては輸出入總額四、九九八萬圓を越え、中輸入が四、九八二萬圓を占めて居る。相手國は日本內地を主とし、民國、獨逸等との取引あり蘇聯邦との間にわづか乍らも取引ある事は大連と共に特徴である。

陸路により哈市に入り來る貨物は年々二五、一六〇萬瓩を越え、一六萬瓩の貨物が發送せられ、更に松花江水運による貨物は年々六十萬瓩より七十萬瓩の到着あり、これらは主として農產物及木材の類であるが、水運によつて發送さるる貨物は、雜貨を主として七萬五、六千瓩である。哈爾濱は北滿物資の需要都市であると共に、一大消費都市である。卽ち入り來る穀物雜貨等は哈爾濱にて消費されることも多量であり、此所を中心に交易される量も多い。

國際都市哈爾濱

極東の中心都市として建設された哈爾濱は極東經營の中樞であつた關係上、帝政華かなりし時代、入り來つた人物も錚々たる者があつた。都市の擴大と共に外國貿易も盛になり、シベリヤ線によつて入り來る各國の民族、物資も增加したる關係から、世界各國が此所に、領事館を開設し、北鐵讓渡後の赤系露人引上後と雖、現在まだ、滿洲人、日本人、白系露人を主として二十八箇國の民族が居住して居る。而して日本、伊太利、獨逸、蘇聯、波蘭、英國、亞米利加合衆國、佛國、チエッコスロバキヤ、オランダデンマーク、ポルトガル、ベルギー、リスアニヤ、ラトヴイヤ、エストニヤ各國領事館があり、市街は

露西亞風に建築され、建築物に露西亞風景を見せて居る。又露西亞人の生活様式が多分に殘つて居て、社交場、娯樂場の設備、經營が、キタイスカヤから、松花江沿岸方面に多い。

滿洲人街は主として傅家甸方面であるが、此方面でも亦漢民族としての社交、娯樂設備あり、各種民族の集合都市である。

開拓事業

哈爾濱は北滿の中心で、青年義勇隊の哈爾濱特別訓練所、及び滿蒙開拓哈爾濱訓練所が置かれてゐる。

哈爾濱市諸機關

（政治、司法、警察機關）

濱江省公署	哈爾濱市公署	哈爾濱高等法院	哈爾濱地方法院
區法院	哈爾濱高等檢察廳	地方檢察廳	區檢察廳
警察署（六）			
監獄			

（財務機關）

哈爾濱稅捐局	濱江稅捐局	濱江稅務監督署	稅捐局分局（一）
稅捐局分所（一）	稅關	專賣署	

（金融機關）

中銀分行	中銀支行	興銀支店（二）	商工金融合作社
大興公司（一二）	橫濱正金銀行支店	興農合作社聯合會	

（商工）

商工公會（省市）	哈爾濱交易所

（交通、通信、機關）

哈爾濱鐵道局	北滿江運局	郵政管理局	郵政局（一四）
電報局	電話局	國際運輸	哈爾濱放送局
哈爾濱市交通會社	鐵道總局自動車營業所	哈爾濱驛	濱江驛

（在哈爾濱外國機關）

日本總領事館　意國領事館　德國領事館　波蘭國領事館
英國總領事館　美國（アメリカ）總領事館　法國（フランス）領事館
捷國（チエツコスロバキア）領事館　荷國（オランダ）領事館
丹國（デンマーク）領事館　葡國（ポルトガル）領事館　比國（ベルギー）副領事館
立陶宛國（リスアニア）領事館　蘇聯邦總領事館
拉特維亞國（ラトヴイア）領事館　愛沙尼亞國（エストニア）領事館

（其他）

營林署　國立哈爾濱農事試驗場　協和會省本部　協和會市本部
市立醫院　市立傳染病院　市立精神病院
診療所（傅家甸、埠頭區、新安埠）

（學校）

哈爾濱師道學校（濱江省立）地方師道訓練所（男女）　哈爾濱第一（工科）國民高等學校（省立）
哈爾濱第二（商科）國民高等學校（省立）　哈爾濱第三（商科）國民高等學校
哈爾濱第四（工科）國民高等學校　哈爾濱女子國民高等學校（省立）
哈爾濱實業女學校（省立）　哈爾濱市公立職業學校　哈爾濱醫科大學（直轄）　哈爾濱工業大學（直轄）
滿洲國北滿學院（白系露人事務局）　私立哈爾濱齒科醫學院（白系露人事務局）
滿人小學校　哈爾濱學院　哈爾濱中學校　哈爾濱高等女學校
日本人小學校（四）　青年學校　義勇隊哈爾濱訓練所特別青年學校

（銀行、會社）

大同酒精株式會社（準特殊會社）　株式會社哈爾濱實業銀行　株式會社哈爾濱取引所
株式會社太陽貿易公司　哈爾濱石油販賣株式會社　株式會社丸商　株式會社松浦洋行

秋林株式會社
哈爾濱中央卸賣市場株式會社
滿日亞麻紡織株式會社
哈爾濱木材株式會社
哈爾濱麥酒株式會社
日滿製粉株式會社
北滿製糖株式會社
哈爾濱印刷株式會社
哈爾濱セメント株式會社
松黑運輸株式會社
濱江木材倉庫株式會社
株式會社隆昇益(倉庫業)
北滿興業株式會社
哈爾濱土地建物株式會社
阜成房產株式會社
同興房產建築株式會社
東洋企業株式會社
株式會社哈爾濱日々新聞社
株式會社哈爾濱座
株式會社日獨映畫館亞細亞
北滿洲新聞社(合資)
ハルピンスコヱウレミヤ社(合資)
雙合盛公司(合名)
哈爾濱義昌泰製粉公司(合名)
哈爾濱鐵路局
滿鐵北滿經濟調查所
總局自動車事務所
哈爾濱航務局
北滿江運局
總局醫院
陸軍病院
哈爾濱放送局
株式會社滙豐銀行支店
株式會社普綸洋行支店
株式會社祥茂洋行支店
株式會社黑龍洋行支店
株式會社エスキン兄弟商會
株式會社バーチヤ支店
哈爾濱畜業會社(合名)
百利洋行(合名)
天興福第四製粉廠(合名)
橫濱正金銀行支店
糧穀會社支店
滿拓公社哈爾濱地方事務所
穀粉商工株式會社支店
日本海企業株式會社支店
日本タイプライター株式會社支店
日露實業株式會社支店
三井物產株式會社支店
三菱商事株式會社支店
株式會社梅田商會支店
東洋拓殖株式會社支店

生活必需品會社支店及倉庫

勞工協會支部

勞工協會出張所

資料

題名	書名	發行所	發行年月
哈爾濱（廣江寬一）……	新天地（一八の三）	新天地社	昭、一三、三
白系露人に哈爾濱建設當時の秘話をきく……	月刊滿洲（一一の六）	月刊滿洲社	昭、一三、六
本市交通事業の讓渡に關する件……	哈爾濱市公報（九六）	哈爾濱市公署	康、五、八
哈爾濱觀光ルート及遊覽バス……	旅行情報（三一六）	ビューロー	昭、一三、四
哈爾濱に於ける醬油需給狀況……	北滿經濟月報（三九）	哈爾濱商工會議所	昭、一二、一二
哈爾濱滿人煉瓦工業の現況……	同前（三九）	同前	昭、一二、一二
哈爾濱中心支那事變と北滿雜貨貿易展望（岡本一雄）……	東洋貿易（一六の一一）	大阪市役所	昭、一二、一一
哈爾濱建設史話（軍司義男）……	觀光東亞（五の六）	奉天ビューロー	昭、一三、六
滿洲事變後に於ける在哈滿人商工業の趨勢……	北滿經濟月報（三七）	哈爾濱商工會議所	昭、一二、一〇
哈爾濱特別市產業統計（一―四）……	同表題	哈爾濱特別市公署	康、三、六
哈爾濱特別市の概觀……	同表題	同前	康、三、八
哈爾濱特別市全圖……	同表題	同前	康、三、一二
哈爾濱市政沿革……	東省特別區に關する調查	同前	大同二、四
哈爾濱のホテルを語る（結城足助）……	電滿業時報（一九三）	哈爾濱商品陳列館	昭、一〇、一一
ハルピン……	同表題	哈爾濱興信所	昭、一〇、三
哈爾濱の概念……	同表題	哈爾濱日本商業會議所	昭、二、七
哈爾濱に於ける通貨日支露……	哈爾濱の概念	同前	同前
日露戰役當時の哈爾濱（細谷清）……	ソヴエート批判（二の二）	不明	昭、九、二
哈爾濱市制問題資料……	同表題	滿鐵哈爾濱事務所	大正一五、四
ロシヤ人の哈爾濱（イワノフ）……	北滿研究（二の五）	同前	昭、九、五
滿洲事變並北鐵接收後に於ける哈爾濱を中心とする各國商工業の動向……	同表題	滿洲經濟調查所	昭、一一、九
哈爾濱繁榮策私見（中西仁三）……	北滿經濟月報（二九）	哈爾濱日本商工會議所	昭、一二、二

概史

哈爾濱、事變前後各一年の經濟界……	同表題	同前	昭、八、八
哈爾濱に於けるソ聯學校の狀況(平井、川平)……	滿蒙(一六の七)	滿洲文化協會	昭、一〇、七
哈爾濱特別市に於ける社會事業……	民政部月刊	民政部	康、二、一
滿洲事變後に於ける在哈邦人の動態に就て……	滿鐵調査月報(一四の二)	滿鐵	昭、九、二
哈爾濱に於ける邦人經濟的發展の實情……	東洋貿易研究(一三の一)	大阪市役所	昭、九、一
哈爾濱草分け座談會……	新天地(一三の一〇)	新天地社	昭、八、一〇
ハルピンの歡樂郷(平山)……	自由評論(四の一〇)	自由評論社	昭、八、一〇
哈爾濱市勢年鑑(四年版)……	同表題	哈爾濱市公署	康、四、一二
哈爾濱四十年(千田萬三)……	觀光東亞(五の五)	奉天ビユーロー	昭、一三、五
哈爾濱建設四十周年(狄思三郎)……	新天地(一八の五)	新天地社	昭、一三、五
大哈爾濱建設の概觀……	滿洲土木建築業協會雜誌(三二の六)	滿洲土木建築業協會	昭、一三、六
哈爾濱經濟年鑑(五年上半期)……	同表題	哈爾濱商工公會	康、五、九
哈爾濱市況年鑑(六年下半期)……	同表題	同前	康、六、一一
北滿事情哈爾濱觀光案內……	同表題	哈爾濱興信所	康、七、四

阿城縣

當縣を貫く阿什河岸に今は殘骸のみを殘す白城の廢墟は、八百餘年前金朝五都の一として當時殷盛を誇つた會寧府の城市であつたと謂ふ。現在の阿什河城は淸の雍正七年に建設され、乾隆九年同地に副都統廳が設けられた。

其後漢人の移民が此の地方に流入するに及んで當縣は賓州廳の管轄に編入されたが、原住の滿洲人のみは依然として副都統の支配の下に置かれた。宣統元年の副都統廳の廢止と阿什縣の新設以來滿支人共に阿什縣知縣の支配するところとなつた。民國が滿洲の支配權を握つてより阿城縣は哈爾濱の吉林省西

北部道尹に隷屬し、滿洲國建國後は吉林省に屬し、更に現在は新行政區劃によつて（康德元年十二月一日實施）濱江省に入つた。康德五年五月より賓縣の第二區を入れ、縣の區域を變更して東に伸び延壽縣珠河縣と東境を接するに至つて居る。

地　勢

東北は賓縣、東部は延壽縣、珠河縣、西南は雙城縣、北は哈爾濱に接し、地勢は一般に平坦で多少の丘陵があり、只濱綏線沿線に些少の山脈を見る。平地は大體に於て地味豐沃、河川としては縣の中央を阿什河が流れ縣の東境に蜚克圖河があり、北は大松花江がある。

縣の物産

農産物としては大豆、麥、粟、高粱、包米、馬鈴薯、白菜等、尚松花江南岸は牧場に適し曾ては三十餘箇所の牧場があつたが現在はない。家畜として、馬、牛、豚を有して居る。

鑛産物、縣内の二層甸子附近に採石場及石灰製造所がある。

曾ては縣東北一帶鬱蒼たる森林地帶であつたが東支鐵道敷設後次第に伐採されて現在は耕地と化してしまつたが、尚燃料として多少切出されて居る。

北滿製糖會社の阿什河工場は甜菜より砂糖を製してゐる。（後述）

開拓事業

哈爾濱市を去る東北約二十四粁阿城縣第三區阿什河右岸に天理村の集合開拓地がある。

一、三八一町歩に渉る土地を東亞勸業より讓り受け、現在六十二戸、三百二十名に及んで居る。開拓村としては宗教的特殊な色彩を有し自由開拓民として健全なる發展過程をたどりつゝある。

本縣には集團開拓民はまだ見ず、集合開拓民として天理村の外に二箇所入植を見てゐる。新潟宮本と酪農八紘村がそれであるが、酪農八紘村はその名の如く、酪農を以つて主としてゐるもので、此目的を以つて入植したる嚆矢である。北海道札幌八紘學院理事長栗村氏の計畫になるもので、康德六年二月入

植した。全滿には今一ケ所鐵驪縣下に同目的のものがある。其外阿城に鐵道自警村がある。

都邑阿城街

一に阿勒楚喀とも稱し、哈爾濱より吉林省城に通ずる大街道に當り南北滿洲の連繫地として古から開けた所である。今は綏濱線の一驛として、石材、石灰等の輸出をなし、煙草、牛肉、鷄卵、鳥類、麻、木材等の附近產物が哈爾濱に向け移出される。

縣城は驛を距る事約四粁、阿什河に臨み城壁を圍らして居る。

縣城附近にある阿什河製糖會社は甜菜の製糖を以つて有名である。一九〇九年ポーランド人の發起にて創設され、その後、各國の資本流入を見たが、康德元年五月に至り、日本の資本が入つて北滿製糖會社の經營になり、工場にては阿城縣全般に亘つて甜菜栽培をなす農民と契約し、農民より甜菜を買付け之を原料として年產六八、一四〇擔の砂糖生產高を見せてゐる。

濱綏線の通過を見る外、阿城を中心に北方は哈爾濱、蜚克圖に、南方は拉林及雙城縣の周家に何れも國營バスの運行を見る。

阿城街諸機關

阿城縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
興農合作社	大興公司(三)	國際運輸	電話局
阿城(農科)國民高等學校(省立)	阿城女子國民高等學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校
阿什河電燈公司	勞工協會出張所	北滿製糖株式會社	街公所

二層甸子

阿城(阿什河)の東方に位する一部落である。薪炭、蜂蜜を產出し、北滿に珍らしい勝景の地として哈爾濱方面からの遊客が多い。附近に石灰岩の產地及炭坑がある。北滿特別區の解消により阿城縣に入つて

居る。

天理村諸機關			
電報局	電話局	委托日本人小學校	
其他			

警察署所在地			
料甸子	永增源	正旗	王泉
平山			

稅捐局分所所在地			
帽兒山東站	董克圖	恒隆西屯	曹家窩堡屯

郵政局所在地			
料甸子	聚源昶	永增源	二層甸子

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
阿城縣事情（大同學院）	滿洲國地方事情（第一篇）	同前	康、元、四
同　（日滿兩文）	吉林省各縣略誌（第一篇）	省公署	康、元、五
阿城縣の人口と雜穀生產高	滿鐵調查月報	滿鐵	昭、九、二
阿城縣經濟概況	露滿蒙時報	哈爾濱商品陳列館	昭、八、一二
阿城を通つて鐵鑛調査へ（アーナート）	滿蒙探檢四十年	大日本雄辯會講談社	昭、九、一〇
阿城全縣統計表	同表題	縣公署	康、三、七
濱江省自由移民（天理村移民）	同表題	省公署	康、五、三
濱江省阿城縣の保甲行政組織と其運營狀態（一）	滿鐵調查月報（一七の一二）	滿鐵	昭、一二、一一
阿城縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

概要

賓縣

唐の中葉以後渤海國となり、遼時代は女眞部、金代では上京會寧府の屬となり、元、明を經て清の初

蜚克圖站を設け松花江南岸に當て、吉林省東北邊防に備へたが、當時は數百里荒野にして人煙無し。咸豐十一年始めて開放せられ、光緒六年賓州廳とし、宣統元年賓州府とし、民國二年改めて賓縣となす。開放せられてより後土地よく開墾せられ、墾成熟地二十六萬餘晌、人口又激增し農產甚豐である。事變に際し、大刀匪等盛に暴威を振ひ、慘虐の限りをつくしたのであるが、大同二年に至つては日滿軍の討匪により、漸次平穩になつて行つたが、北滿大水害の爲め甚大の被害を受けた。康德三年五月に至り又縣城が襲はれたが幸にして擊退し、始めて治安恢復するに至つた。

本縣は康德元年十二月新制の濱江省に入り現今に至つて居るが、康德五年五月縣の區域改正により、從來の第二區を隣縣阿城縣に編入した。

地勢

當縣東は方正縣、延壽縣に西及南は阿城縣に北は松花江を距てて木蘭、巴彥縣に接して居る。

大青山は縣城を距てる事百四十滿里、延壽縣との境をなし、最高の山である。其他香爐の形をなすといふ香爐山、老母頂子山、高力帽子山等がある。

北部の境界は松花江を以つて限られ、北滿江運局の埠頭烏河、新甸がある。縣內北部の河川は小支流で何れも北流して松花江に流入し、南部の蜚克圖河も西流して阿城縣境を爲して北流松花江に入る。

縣の物產

農產を主として居る。大豆、高粱、粟、包米等を產し、小麥、小豆等も相當量出して居る。その他特用農產として、馬鈴薯、痲、煙草がある。又馬、騾、牛、豚の畜產があるが數は多くない。

松花江には淡水魚の漁獲あり新甸を中心とするが鯉魚、扁花魚、鯰魚、白魚、其他の地は、草根魚、鯽魚を出し、春夏を魚期とし一萬斤內外の移出をみてゐる。事業にするもの六九戶、兼業者百十二戶程である。

二道河子附近は石材の搬出あり、多少の石灰も出し哈爾濱に移出される。

商工業は度々の匪襲により農村疲弊し、購買力の減少のため一時振はなかつたが、治安維持と共に恢復し縣城には四〇〇餘戸の商舖がある。

開拓事業

本縣内には日本開拓民第八次開拓團が一箇所入植してゐる。大泉子がそれである。

都邑賓州街

哈爾濱の東方約六十餘粁の地點に位する縣城である。一名を葦子溝ともいふ。政治經濟の中心地であつて、市街も比較的整頓して居る。物資は穀類を大半とし、煙草、線麻、青麻、木材、石材等である。油坊、製粉、燒鍋等の工業行はれ、豆油、豆粕、小麥粉、豆素麵等生産額が多い。又柞蠶の飼育も行はれてゐる。

康德六年の調査によれば日商四戸、滿商四二二戸、資本合計九六〇、四四〇圓、一箇年業績七、二九三、四五六圓をあげ、匪襲による一時の疲弊も漸次恢復せられて居る。商業は一般物品販賣業が最も多く、藥品販賣が割に多い。鐵道及び國營バスはないが、哈賓自動車交通合資會社のバスが、賓縣より哈爾濱及び新甸に通じ、又、棚板店、高麗帽子間にも通じてゐる。

賓州官署機關

賓縣公署	警察署	税捐局	商工公會
興農合作社	大興公司	專賣局	中銀支行
協和會	郵政局	電報、電話局	街公所
賓縣（農科）國民高等學校（官立）	滿人小學校	賓縣光明電業股份有限公司	長野賓東公司

蜚克圖

縣城の二十餘哩西方にある。阿城より、哈爾濱に通ずる小市街である。平常は附近農村との小取引があるに過ぎないが冬期には特産出廻期に多少の雜品は取引される。

新甸

松花江に臨んでゐる一市街である。埠頭を有し下流木蘭へ十七哩、上流哈爾濱へ三十四哩に當つて居る。

沿岸屈指の市場として産業繁盛し、江運局の定期船が寄航する。此地方を中心として小麥の産出豐富である。

新甸諸機關

警察署　税捐局　郵政局　電報局
電話局
其他

警察署所在地

滿井　居仁　賓安　賓公
全孝　寧遠

税捐局分所所在地

高麗帽鎭　朝陽溝鎭

郵政局所在地

滿家店　榔板店　九千五　高力帽子
德源恒　長春嶺　二道河子　小嶺站
斐克圖　烏河　滿井鎭　張家糖房

資料

題名	書名	發行所	發行年月
賓縣概況	同表題	縣公署	康、二、一
賓、縣	濱江各縣概況(前)	民政部	康、二、四
賓縣行政之一班	內務資料月刊(一の三)	內務局	康、四、九
賓縣全圖	同表題	賓縣公署	康、三、—

賓縣概況……同　表　題　賓縣公署　康、三、二
賓州商業事情……同　表　題　賓州商工公會　康、七、三

雙城縣

概史

縣城は雙城街、尚當縣は嘉慶二十年八旗をして屯田せしめ、委協領を旗戶管理官として阿勒楚喀副統に屬せしめたが、咸豐初年之を廢して副都統衙總管を置き、光緒七年再び改めて協領統治とした。翌八年又之を廢して撫民通判を設けて旗民兩事務を管轄せしめ雙城廳と稱したが、宣統元年十一月昇格して雙城府となり、更に民國二年府治を改めて雙城縣となした。滿洲國建國後は初め吉林省の管轄であつたが、康德元年十二月一日より新設の濱江省に屬することゝなつた。康德五年五月縣區域改正により從來の第九區を割きて葦河縣に編入された。

地勢

東は賓、珠河、南は拉林河に依て五常、楡樹の各縣に接し、西は松花江に依て黑龍江省に境し、北は哈爾濱に接する地勢は一般に平坦であるが、東南方高く西北に低く、西北の松花江に接する地方は濕地が多い。拉林河の氾濫に水害を蒙る事が多い。

縣の物産

農産を主としてゐる事勿論である。高粱、大豆、粟、玉蜀黍、小麥、糜子、作付面積は大豆が一番多く約三割四分を占めて居る。

雙城縣內には一七五以上の大小工場があり、百二十六萬圓以上の生產をみてゐる。製粉、燒鍋、油坊醬工等で醬油、豆油、豆粕等は管內消費に充てられて居る。

商業は哈爾濱に接近してゐる關係上あまり振はないが縣內五四〇軒以上の商舖を有し、縣城雙城街が中心である。

開拓事業

縣内は耕地多く、鐵道自警村が五家及雙城街の二ケ所にある。

都邑雙城街

此地は哈爾濱の南方二四哩京濱線の重要驛である。雙城の名は此地から約二〇哩の地に東闗双、西闗双兩城があつたのに起因すると傳へられて居る。もと雙城堡と稱し、康德六年一月雙城街となつた。

此地はもと官設郵遞驛として阿什河、伯都訥(扶餘)と共に昔から北滿の都邑と謂はれ殊に清末滿洲への移民獎勵の結果として人口の增加を來し且つ、東支鐵道敷設以來物資の集散力は急激に增加した。此の集散物資の主なるものは、小麥、稗、玉蜀黍其他で出廻數量の多い事は北滿屈指である。又工業も盛で、製粉工場新舊合せて三十、燒鍋、燒酒製造はもとから有名で年額百五十萬石以上である。本街は商業の發達した地であり、又原料が豐富なため、將來工業の發達は期待せられる地である。

又文化方面でも早くから發達した地方で、教育、宗教等もよく發達してゐる。街内の寺院なども相當の歷史を有し、見るべき石碑等もある。

街の住宅は現在のところ困難といふには至らない。水質は柔質で澁味があり 沈澱物が多い。黃土色を呈して居る。

雙堡街諸機關

雙城縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	專賣局	中銀支行
大興公司支店(四)	國際運輸支店	電業營業所	協和會
雙城(農科)國民高等學校(濱江省立)		雙城女子國民高等學校(省立)	滿人小學校
日本人小學校	世恒昌公司(合名)	勞工協會出張所	街公所

拉林

五常を中心として連亙せる穀倉の一部であつて、乾隆九年始めて漢人農民の數戸が此の地に移住し來つて以來の街である。吉林より阿城に通ずる街間上の古い市街である。當地は五常に次ぐ特產物中繼市場で、拉濱線敷設以來一層發展途上に在る。即ち拉林附近の特產は從來北鐵南部線雙城堡附近より出廻つたものであるが、拉濱線敷設以來其の運輸系統一變して附近のものは大部分此の驛に出廻る。尚拉濱線開通前は糧棧と稱するものがなかつたが開通後雙城堡より六軒移轉するに至つた。此の地には回々教徒多く滿洲旗人の居住する者が居る。

拉林諸機關	警察署	稅捐局	郵政局	國際運輸
	大興公司	電報局		
帽兒山諸機關	郵政局	電報局	電話局	

其他

警察署所在地	郎家	杏山堡	廂藍四屯	廂黃四屯
郵政局所在地	韓家店	萬隆號	廂黃旗四屯	天德興
	五家子	郎家燒鍋	三姓屯	周家
	八家子	東官所	太平莊	萬家
	正白旗	正紅旗	牛家	興隆屯
	背陰河	密蜂站		
電報局所在地	周家	平房		

平房に日本人小學校あり

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
雙城縣狀況	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、九、八
政況(民政部)	各縣政況	民政部	大同二、九
縣下人口及雜穀生產高	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、九、二
治安概況	民政部半月刊	民政部	康、元、四、三〇
雙城縣	濱江省各縣概況	民政部	康、二、四
雙城縣一般事情	金融合作社(四の六)	金融合作社	康、五、六
雙城縣經濟事情	農事合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
雙城街事情	同表題	街公所	康、六、一〇

五常縣

概史

此地は古くは肅愼の一部に屬し、遼時代には阿延女眞部に屬し、明時代は代阿憐衞に屬してゐた。當時此の地方は曠漠たる荒地であつて人煙稀な處であつた。淸の同治八年旗官協領を設けて五常堡に駐在せしめ民政、軍政を掌つて居つた。次いで光緒八年廳を設けて縣を治め旗民を分治してゐた。宣統元年廳を廢止して府と改め民國二年五常縣となり同十八年五常堡協領が管掌してゐたところの戶籍人口及一切の文書取扱事務を五常縣公署に於て引繼いだ。滿洲建國となり、省制改革の結果、新設の濱江省に編入せられて居る。

五常なる名稱は縣城に五つの門あり、五常卽ち、仁義禮智信にならつた額が揭げられて居つて、此の門をくぐる人は必ず其度每に城門の標訓を仰ぐ事になつて居る。此事によつて五常といふ樣になつた。

滿洲事變と共に縣城は匪襲に遭ひ、縣公署は匪賊に占領せられ住民は遠く難を南方に避けてゐた。大同元年の冬日本軍の討匪工作となり、治安一時に恢復して四散した住民は歸城し或は移住し來るものも

あり、王道政治を踏み出す事となつた。

地勢

本縣は濱江省の西南部に位置し東部は葦河に南部は張廣才嶺に、西南部は舒蘭縣、西部は楡樹縣に接し、北部は雙城縣に連り東北は珠河縣に臨んで居る。

地形東南部に高く、西北は低く山脈は東南より西北に走り老爺嶺及張廣才嶺及次老芽山より發して居る。縣内は河川多く縣境東南より流入し雙城、阿城に於て松花江に流入して居る。

主なる河川は拉林河、莫勒恩河の兩河である。全縣の面積の三分の一は山河を以つて占められて居る。

縣の物產

拉濱線沿線に於て匪賊の跳梁最も甚しかつた地域であつて、農產生產量も減少の傾向であつた爲め、縣當局に於て其救濟策に腐心して居る。主なる農產は、大豆、高粱、粟で、畜產は副業位である。

林區は全部國有で營林署の監督を受けて居るが、主なる林區は沖河鎭林區、兩天溝森林である。兩天溝森林は人跡未踏、紅松、杉松、魚鱗松、柳楡等で拉林河の水利を利用して山河屯に出廻り吉林、新京に移出される。

鑛業は資源の埋藏量は相當あるが、調査未了である。

開拓事業

本縣は農地開拓の餘地多く、第七次開拓團四ヶ所、第八次二ヶ所の入植を見、集合開拓地が二ヶ所、何れも年次は新しいが、開拓の業大いにあがつて居る。第七次開拓地は、三個頂、朝陽川、小山子、太平川、第八次は東小山子、龍王廟で、耕綠園、杜家は集合開拓地である。

都邑五常街

縣城の東北一帶は山地であるが、縣城附近は土地が平坦で、耕作に適し、一見高燥であつて高原地帶の如き感を與ふるも良好なる農耕地に開墾されて居る。舊名を歡喜嶺と稱し、住民中には今尙舊名を呼

ぶものがある。

市街は東西、南北の十字路より成り、東西に通ずる街路は商店街を爲し商取引は相當殷盛を極めてゐる。

當地は拉濱線の工事着手と共に、日本人の來住するもの多く、昭和九年八月開通してより急激に發展を遂げるに至つた。地方治安の肅正も日と共に進み縣城の住民安居樂業し、各種機關の整備を見るに至つて拉濱線上の一大都市となつた。

商工業方面をみるに、五常は從來商工業の盛だつた地方であつて諸種の製造工業も相當の繁榮を見てゐたが、事變と共に匪襲を受けて全滅の狀態であつた。背後地農村の經濟は殆ど破産の狀態を示し、康德三年は洪水に見舞はれ一般購買力薄弱となつて、商工業も衰微してゐた。然し乍ら鐵道沿線の地理的條件が良好なる爲め縣城のみは、商工業の持續が行はれて來た。

縣城の商業を營むもの日商三八戸、滿商六五一、其他二五で、雜貨商、飲食店、煙草屋、旅館等が多く、工業は油坊、家具製造等主として日本製品の輸入品を取扱ふ者多く、哈爾濱方面よりは砂糖、メリケン粉等が移入されて居る。

五常驛、楡樹間及五常驛、沖河間に國營バスの便がある。

五常街諸機關

五常縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
郵政局	電報局	電話局	興農合作社
專賣局	營林署	中銀支行	國際運輸
大興公司	協和會	保健病院	五常(農科)國民高等學校(省立)

滿人小學校　日本人小學校　滿拓公社五常出張所　生活必需品會社配給所
勞工協會出張所　街公所

山河街

山河街は拉濱線沿線にあつて交通便利、特產及木材の集散地として知られて居る。五常に次ぐ都市であつて商況亦盛、附近は地味肥沃なる農產地であつて農業移民の好適地である。

市街は驛の北方三粁の地にあり、東、西、南、北各二滿里に涉り、商店街は東門より西門に並んで居る。特產及木材の集散の點に於て將來を期待されて居る。

山河街諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　國際運輸
大興公司　電報局　電話局

其他

警察署所在地　小山保

稅捐局分所所在地　太平山　向陽山

郵政局所在地　四河城　向陽山　沖河鎮　南彩橋
太平山　安家　杜家

委托日本人小學校　太平川　小山子（九州）　杜家

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
五常縣狀況	滿鐵調查月報	滿鐵	昭、九、八
縣內の現狀	民政部半月刊	民政部	康、元、四、三〇
縣下人口及農業生產高	滿鐵調查月報	滿鐵	昭、九、二

五常縣事情(日滿兩文)……吉林省各縣略誌(第一篇)	省公署	康、元、五
五常事情(滿鐵新京地方事務所)……拉濱線經濟調査	新京地方事務所	昭、九、三
五常縣一般事情……同 表題	縣公署	康、三、一
拉濱線、五常、山河屯新站 奉吉線、盤石、經濟事情……同 表題	吉林鐵路局	康、三、二
五常縣一般狀況……同 表題	縣公署	康、三、五
五常縣小山子を中心とする分散鮮農の集結に關する試案……同 表題	北滿經濟調査所	昭、一三、三
五常縣經濟事情……金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、三
五常商工事情……同 表題	商工公會	康、七、五

珠河縣

概史

民國十六年に烏珠河を中心として同賓縣より其一部を割きて縣治を布かれ、烏珠河に政治の中心を置かれた。卽ち現在の珠河である。珠河の名は烏珠河に基いて居る。民國時代は吉林省管下であつたが、康德元年十二月新設の濱江省に編入せられて現在に至つて居る。更に康德五年五月より、舊雙城縣の第九區の地域を編入せられて面積を西方に伸して居る。

地勢

東部は葦河縣に、東北は延壽縣、西北境は阿城縣に接し、雙城縣との縣境は僅に縮少せられ、西南境は五常縣に隣する。

縣全體は梯形をなし、嶮峻なる山嶽はないが、起伏に富み、一山僻の地である。縣の東南より西南に亘つて、大廻山、長嶺が連衡して居る。

拉林河の上流大泥河は源を長嶺に發し、西北に流れて五常縣に入つて居る。縣の分水嶺は略々縣の中央を東西に走り、葦河縣より流れ來る螞蜒河は縣の東北を貫流して延壽縣に入つて居る。中央分水嶺よ

り發する小流は南流して大泥河、螞蜒河に入つて居る。平地は螞蜒河流域に開け、又濱綏線其の流域を東西に走り、縣内で最も開けて居る地方である。

縣の物産

農業は他國人によつて開發せられたのである。縣を置かれた時すでに全縣の大半は開墾せられて居た山間の諸川流域を開墾するに過ぎないが、農産は豐富、大豆、包米、水稻、高粱、穀子等であつて、大豆は生産の十分の九を移出し水稻も亦十分の六を移出する程である。本縣は水田に適し、半島人開拓民が多く從事して居る。

家畜として騾、牛、豚等飼育して居る。

林業は以前山林に富み伐採せられたが現今ではすでに殆ど伐採しつくされて熟地と化し、縣境に僅に殘存して居るに過ぎない。礦産の見るべきものはない。

開拓事情

珠河縣は第七次以後の開拓地に屬し、第七次三箇所、第八次一箇所、其他集合開拓地が一箇所である青年義勇隊特別訓練所が一面坡に置かれて居る。

第七次は、三股流、六道河、大青川で、第八次は、帽兒山、新潟蒲原に集合開拓地がある。

都邑珠河街（烏吉密河）

遠望山嶺を控へ、螞蜒河は同地の一角を流れて居る。當地は日露戰役頃までは寂寥たる一部落に過ぎなかつたが光緒三十三年開驛せられ近年迄は一小驛に過ぎなかつたが、農業中心地である延壽との交通が便になつてから穀類の集散發送地として近年急激なる發展を見せて居る。穀物出廻期に於ては非常なる活況を呈し、奥地延壽方面よりの車馬が拂曉より驛へ殺到し日沒まで續いて居る。

附近木材の産地を控へて居る關係上家屋の構造は比較的に大きく且つ堅實である。商家は主として穀物商であり其他、日用雜貨、藥店、飲食店等である。工業としては煉瓦燒場及製麵工場がある。

協和自動車公司營業のバスが、延壽縣城との間に通じ便利である。

珠河街諸機關

珠河縣公署　警察署　稅捐局　商工公會
興農合作社　郵政局　電報局　電話局
日本人小學校　鴻興東公司（合名）　大興公司　街公所

一面坡街

珠河縣下濱綏線の一驛に當り、濱綏線屈指の重要驛である。市街は日滿露の雜居地であるから他に比し、比較的宏壯なる建築家屋を有し、四時を通じて殷盛である。

金時代此地に土着民の居住を見たといはれて居るが、露西亞が北鐵東部線（現濱綏線）を敷設した時には附近一帶は、千古斧を入れない巨木の大密林で猛獸の棲息する處であつた。露人が此所に建設事務所を設けて軍人、官吏、勞働者等を入れてより當地開發の基礎が作られたのである。此勞働者の中には二〇名の日本人卽ち大工、石工等が混つてゐて、日本人最初の開拓者と稱せられて居る。滿洲事變にては匪賊の猛威甚しく一時市街は閑として淋れてゐたが、日滿軍の治安維持により、地方住民安全となつた。

市街は東西に走り、長さ一里餘町と稱され、南北は概して狹い。中央部は日滿諸機關、並に商家が軒を連ね中心地である。露人は東方驛を中心に公園附近に住み、市街の西部及南部は、滿人、半島人の農家が多く建物は支那式家屋である。

大直街は土地稍高く、高衙集中し、建物も整備し清潔なる道路あり代表街である。中央街は此地に於ける商店街であつて、各種商店、料理屋、カフェー等があり、繁華街である。

螞蜒河の清流は同地を美化し、飲料水は良好、衞生設備概して良く、夏季は舟遊、水浴、釣魚等行はれ、當地方唯一の慰安境である。

此地に集散する物資は、大豆、小麥、稗、高粱、大麥、玉蜀黍、豆粕、油等の外、木材、薪材、蜂蜜牛乳、葡萄酒等の生産集散あり、種類極めて豐富である。從つて之等の取引に從事する大商店多く、又夫々の出廻期に他地より來集する物多く、小取引は頗る活氣を呈して有望視されて居る。

一面坡は北鐵時代は北滿特別區域にあつたが、北鐵接收と、特別區廢止に伴ひ、珠河縣下の行政に入つて居る。

今尙白系露人の住む者多く、約三〇〇名位居住して居る。

一面坡官衙諸機關	警察署	稅捐局	郵政局	電報局
	電話局	專賣局	營林署分署	中銀支行
	國際運輸	大興公司	協和會	日本人小學校
	一面坡(農科)國民高等學校	商工公會	特別青年學校	生活必需品會社配給所

其　他

警察署所在地	老街基	亮珠河	元寶鎭	烏吉密
郵政局所在地	帽兒山			
	烏吉密站	小九站	元寶鎭	河東農村
委托日本人小學校所在地	六道河	三股流	小亮珠	
	三股流			

題名	書名	發行所	發行年月
珠河縣	吉林省各縣略誌(一)	吉林省公署	康、元、五
珠河縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
一面坡	北鐵沿線概況	哈爾濱鐵路局	康、二、七

葦河縣

概史

葦河縣はもと同賓縣(延壽)の第八區である。民國十年吉林省公署に請して第八區をもつて葦沙河設治局となし、初めて設治員を任じ、葦沙河に於て設治業務を始めた。五年を經て庶政發展、改縣の必要を生じ民國十五年始めて、葦河縣と稱して縣制を布き、縣公署が置かれるに至つた。

滿洲建國後濱江省に編入せられ今日に至つてゐる。

地勢

本縣東隣は寧安、南は蛟河、西は珠河縣に接し、北は方正、延壽に、西南境は五常に隣りしてゐる。東南部に老爺嶺山脈走り高度一千尺以上を有し、牛槽子嶺は縣のほゞ中央を貫き、西南部には、大青山長岡山、青雲山がある。大體の地形は東南部に高く、西部は低くなつて居るが山形は相當複雜である。平原の地味は肥沃。河流螞蜒河は東南老爺嶺に發し、西流して縣城を經、珠河縣を經て延壽縣に入る。更に北流する亮子河あり、南部には西流する拉林河の上流支流がある。

縣の物産

農産の主なるもの大豆、包米(玉蜀黍)水稻、粟、高粱、小麥等で、大豆、小麥等は其多くを他に移出して居る。線麻、煙草、馬鈴薯等の特用産物がある。豚の數はかなりあるが他の畜産數は少ない。

縣內に、金、石炭、水晶、銅等の鑛産がある。

森林面積九千方滿里と稱され、樹種は赤松其他松類柞樹、樺等で産出は赤松が多い。

開拓事業　本縣には第七次開拓民が周家營に、集合開拓農民が四順堂福井に入植して居る。

都邑葦河街　葦河縣城である。市街は葦沙河と螞蜒河の合流地點にある。事變以前は商業もかなり發展し、金融界も活動を續け生活は簡易に、採伐、戲院、娼妓等の營業が發達してゐたが事變後兵匪のために人民流浪し商業困弊、畑地は荒れてゐた。然し、建國後日滿軍警の努力の結果、治安恢復し、流民歸來し漸く復活するに至つて居る。

附近森林多く、山を以て圍まれたる地方であるから木材の發送驛として有名である。驛の南方に林區がある。燒鍋、舊式油坊、煉瓦燒場、鍛冶業等がある。

葦河街諸機關

葦河縣公署	警察署	稅捐局分局	郵政局
國際運輸	電報、電話局	街公所	勞工協會出張所

石頭河子　當驛附近一帶は石塊の河流であるからこの名があるといふ。地勢山嶽に圍まれたる森林地帶であつてもと北鐵が經營してゐた林區がある。市街は驛附近と舊石頭河子滿人部落より成つてゐるが、發達に伴ひ、漸次接近して東西に伸び街上は不潔ながら各種の商店がある。滿人の外に白系露人も住んで居る。驛取扱の貨物の半は木材であつて住民の過半は木材業に從事して居る。

石頭河子諸機關

警察署	稅捐局分局	郵政局	營林署分署
電報局	電話局		

其他

警察署所在地　石頭河子　九江　亮河

郵政局所在地　周家營　石頭河子　亮珠河

委託日本人小學校所在地 四順堂福井

資料

題名	書名	發行所	發行年月
葦河縣	吉林省各縣略誌(一)	吉林省公署	康、元、五
葦河縣概況	民政部月刊	民政部	康、二、一
葦河縣政一般概況	同表題	縣公署	康、三、一二
葦河縣情報告	濱江省第一回參事官會議々事錄	濱江省公署	康、二、一二
葦河縣圖	同表題	縣公署	康、三、—

延壽縣

概史

本縣に初めて縣治を布かれたのは清の光緒二十八年であつて當時は長壽縣と稱せられたが、四川省に同名のものがある爲めに民國三年、之の一帶を往昔同賓と稱したるに因り、同賓と改めたが民國十八年更に現名に改められた。吉林省管下にあつたが康德元年十二月の省制改正により新設の濱江省に編入せられて居る。

地勢

本縣は濱江省の東南部に位し、南部は葦河に北部は賓縣に東部は方正に西部は珠河の諸縣に隣接して居る。

縣の西部山脈は南西より北東に走つて賓縣との境を爲し、大燒嶺、桃鬼山等あり、東境は小丘嶺走り牛峯山、金坑山等あり、青雲山嶺は南部に聳え、それより出でたる螞蜒河は幾多の支流を以つて平野を造り、南西より北東流して松花江に注いで居る。東亮子溝は、南東より北西流して螞蜒河に合流し方正縣を經て松花江に入る。縣城延壽を中心とする平野が此縣の生命であり農產豐富である。

縣の物產

本縣は土地肥沃、物產豐饒、農產物は生產物の大部分を占めて居る。大豆、包米、水稻、高粱、粟等を主とし南方珠河に賣出される。なほ、產業五箇年計畫に基き小麥、亞麻、馬鈴薯等の增產計畫中である。

家畜家禽の飼育亦盛で、馬、牛、等を主とする。

林產も豐で、果松、楡木、柞木、楊木、柳等森林面積三〇〇〇方粁に及び、地場消費を除く外は一面坡方面に移出される。

商業は稍盛ではあるが鐵道沿線でないために他縣に比し盛んでない。

開拓事業

本縣螞蜒河の流域は豐沃なる平野で縣內に日本開拓民の入植を見てゐる。第七次開拓團二箇所即ち元寶鎭、中和鎭で、南平陽川に青年義勇隊小訓練所が置かれて居る。

又林產豐富、松陰村林業開拓民も入植して居る。

郡邑延壽街

哈爾濱の東方約六十五哩餘の地點に位する縣城である。民國十八年延壽鎭と稱してゐたが、康德五年七月一日籌備街村制を置き、六年一月一日より街制を實施してゐる。市街は螞蜒河に臨んで居る爲め、螞蜒河といふ俗稱を有して居る。縣城の商業も相當盛ではあるが、鐵道沿線にある南方の一面坡、及珠河等に凌駕せらるゝ狀勢にあるが平野の中心をなし地方の一中心である。

街人口中農事に從業する者は約一割五分位であるが、地主が割に多い。家畜も有してゐる。商業は雜貨販賣が最も多く、飮食店之に次ぎ、一六三戶の商家がある、小工業者七十五、六戶、木匠、鐵器製造等である。

本街は鐵道の便はないが、南方珠河北方方正及新甸に通ずる國道があり、協和自動車公司は南方珠河縣城に五〇粁、北方方正縣域に六九粁の營業をし交通の便を有してゐる。

街の家屋は在來滿洲家屋が多く、洋式煉瓦建は四十餘戸、水質は大體良質のやうである。

延壽街諸機關	延壽縣公署	街公所	警察署	税捐局
	商工公會	郵政局	興農合作社	協和會
	電報局	電話局		

其他

警察署所在地	龍宮	平安堡	凌河(原屯)	中和
	嘉信鎭			
税捐局分所所在地	柳樹河	夾信鎭		
郵政局所在地	平安堡	興隆鎭	黑龍店	中和鎭
	夾信子	原家屯	信濃村	
委託日本人小學校所在地	中和鎭			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
延壽縣	吉林省各縣略誌(一)	吉林省公署	康、元、五
延壽縣情報告	濱江省第一回參事官會議々事錄	濱江省公署	康、二、一二
延壽縣商業慣習	吉林商工月報(一一)	吉林商工會議所	昭、九、三
延壽縣勢概況	同表題	延壽縣公署	康、五、二
延壽縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
延壽街事情	同表題	街公所	康、六、一〇

呼蘭縣

概史　本縣一帶は北滿に於ける最も肥沃なる地帶で、漢人移住民の多くが早くから此地に集結したのも之が爲である。當地は古來軍事上重要視され、康熙帝は大軍を此地に駐屯せしめて北方に備へた。尤も當時の呼蘭縣は呼蘭河近傍の土地であると云はれてゐる。一七三四年今の呼蘭城築城と同時に伯都訥及び齊々哈爾から五〇〇家族の旗人を移植せしめ、土地を與へ農業を奬勵したと傳へてゐる。即ち正鑲黄白紅藍八旗にて呼蘭旗營の始めである。建國後濱江省の管轄となる

地勢　本縣は東は巴彦縣に、西は蘭西縣に、北は綏化縣に、而して南は松花江を以つて吉林省と境を接してゐる。泥河は北部縣境を西南に流れ、縣の中央を西北より東南に貫流する呼蘭河に注ぎ、縣城東南方の地點に於て松花江に合流し、更に東北に流れて賓縣と境界をなして居る。又、東部巴彦縣界には漂河が南流し、之等諸河川の沿岸は夏期濕地と化すが地勢は一般に平坦で呼蘭城西北に團山の小丘があるのみで、森林と稱すべきものは殆どなく、僅かに各部落及縣境附近に植樹せるものがあるに過ぎない。

縣の物産　大豆、小麥、粟、高粱、玉蜀黍等、平原肥沃古くより開拓せられた土地で作付面積二十五萬晌に達してゐるが、低地地帶は水害を蒙る事が多い。

馬、牛、豚等多し。

都邑呼蘭　其歴史は古く金時代に始まり、當初より北滿の一重鎭として經濟文化の中心であつた。東清鐵道敷設以來其發展は見るべきものがあつたが、呼海鐵道の開通により頓に繁業は哈爾濱に奪はれ今日では物淋びた一縣城に過ぎないが、滿洲に殘された清朝時代からの支那式都市として關帝廟の建築色彩、百貨店

の模樣等に特異の形式を殘してゐる。

呼海線開通により市勢急激に衰微した。卽ち開通以前に此地に集中した農産が、鐵道開通によつて直接哈爾濱に輸送される結果である。

取引關係は哈爾濱に依存し、糧棧等も哈爾濱に本店を有して居り商況振はなくなつたが、尙、縣城内に日人商工業者八戸、滿人商家四一三戸、工業二九一戸、合計七一二戸を有し、濱北線の主要都市である。

バスの便は哈同線が冬期此地を通過し、又呼蘭より蘭西に至る國營バスの便もある。水運も亦便利、呼蘭河は水量汽船を通ずる事が出來、哈爾濱、呼蘭間四二粁、北滿江運局の汽船が通つて居る。

呼蘭街諸機關

呼蘭縣公署　街公所　警察署　稅捐局
商工公會　區法院　區檢察廳　監獄
郵政局　興農合作社　專賣局　大興公司(三)
電報局　電話局　電業營業所
呼蘭(農科)國民高等學校(省立)　呼蘭縣立呼蘭實業女學校　滿人小學校
日本人小學校　協和會

對青山諸機關

郵政局　電報局　電話局

其他

警察署所在地　大方臺　康金井(大興公司あり)　許堡　榮安鎭
稅捐局分局所在地　康金井車站　沈家店東站　白奎堡東站

郵政局所在地	欒安鎭	沈家站	大方臺	沈家窩堡
	王桂井	石人城	康金井	對青山
	白奎堡	興隆鎭	東沈家	薄荷臺
電報局所在地	康金井			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
呼蘭縣事情(上、下)	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、四
呼蘭縣	黑龍江省(上)	滿鐵調査課	昭、二、九
呼蘭縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
呼蘭海倫兩縣の司法制度	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
呼蘭縣農林試驗場	民政部月刊	同前	康、元、一一
呼蘭縣地圖	同表題	縣公署	大同二、一二
呼蘭(甲斐已八郎)	協和(二〇八)	滿鐵社員會	昭、一三、一
呼蘭縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
呼蘭街事情	同表題	呼蘭街公所	康、六、一〇
呼蘭縣商工概況報告書	同表題	商工公會	康、七、三

巴彥縣

概史

本縣は光緒三十二年(明治三十九年)迄は旗兵が管理してゐたが、翌年旗制廢止の結果呼蘭副都統管區が廢せられて府、州に改められ、同管區より呼蘭府と巴彥州が造られた。其際現在の巴彥縣、木蘭縣地方は巴彥州に編入せられ、民國二年府、州、廳の行政區劃の撤廢と共に巴彥州より巴彥及び木蘭の二縣が

創設され、建國後新設省濱江省に入り、今日に至つて居る。

地勢

本縣は濱江省の東部、松花江北岸に位する平坦高燥の地域であつて、西は大荒溝河及び漂河に依りて呼蘭縣と境し、北は泥河を以つて綏化縣と界し、北東は陸地境界線でもつて東興縣に接し、東は山丘境界を以つて木蘭縣と分界して居る。而して南は松花江を隔てゝ賓縣と相對して居る。地勢は一般に丘岡多く、縣內諸處に山容の特異な丘峰が散在して居る。卽ち西部には泥馬山及び小陵山、中央部には尖山子、雙芽山、青頂山、及び西色寶山、北東部には黑山、西方に滿天星山、東部には門面山、東色寶山等が聳立してゐるが、樹木は全部伐採し盡されてゐる。

縣の物産

縣內は沃野をなし、大豆、小麥、粟、高粱等で省內有數の收穫高を示してゐる。農產製品として豆油高粱酒を出す。

騾、豚、鷄、鷄卵等哈爾濱に移出を見る。

製粉、燒鍋、豆油、麻油、紙、煉瓦、瓦等小規模乍ら行はれてゐる。

縣南部の穀類で巴彥に集中せられたものは、夏季は埠頭濟打咀々に運搬せられて哈爾濱に搬出せられ冬季は大車により直接哈市へ向けられる。

都邑巴彥街

縣城には發電所、製粉工場各一、燒鍋、油坊等あり煉瓦工業も盛である。糧棧、雜貨店等何れも哈爾濱を背景に行はれてゐる。

陸上交通路は巴彥を中心によく發達し、北方興隆鎭方面にも通じてゐるが、バスの便は冬期、哈爾濱より同江に至る哈同線が、此地を通過するに過ぎない。

巴彥街諸機關

巴彥縣公署　警察署　稅捐局　商工公會

郵政局　電報局　電話局　興農合作社
專賣局　中銀支行　大興公司(二)　國際運輸
協和會　巴彥(農科)國民高等學校(省立)　巴彥實業女學校(省立)
滿人小學校　生活必需品會社配給所　街公所

興隆街

縣內穀類の移出は北部方面は興隆鎭に集中せられ鐵路により搬出せられる爲、商取引が盛である。光緒三十二年頃より商務會を有して居た。商業は物品販賣が多く、飲食店、菓子屋、穀物販賣、毛皮製革、旅館等が多い。

當街に集る農産は主として大豆で一千七百車以上、次で小麥で他は極わづかである。街の住民は農民が多く、誠實信義を重じ、勤儉勞苦によく耐え農業を喜び商工業はあまり喜ばない方である。

興隆街諸機關

警察署　郵政局　稅捐局分局　商工公會
大興公司　電報局　電話局　街公所

西集街

縣內穀類南部移出中、縣城以外にては西集街が又商取引の一中心であつて、縣城と共に哈爾濱を背景としてかなり盛に行はれる。現在街制が布かれて居る。

西集廠諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　大興公司

適打咀子

縣內の一埠頭で夏季は縣城への重要地點で哈爾濱より雜貨の購入、縣內よりの穀物の搬出に賑ふ。町其ものは小埠頭といふに過ぎない。

其　他

警察署所在地

龍泉　窪興　天增

税捐局分所所在地　龍泉河　石頭河子　藤家燒鍋　七馬架

郵政局所在地　龍泉河　龍王廟子　二道崗　趙家店
炮手會
窪興橋　大泉眼

資料

題名	書名	發行所	發行年月
巴彥縣產業事情	同表題	滿鐵齊々哈爾事務所	大同二、
巴彥縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
康德五年度經濟狀況統計報	同表題	興隆鎮商工公會	康、六、七
巴彥縣全圖	同表題	縣公署	康、三、四
巴彥縣地方行政之一班	內務資料(一の四)	內務局	康、四、一〇
巴彥縣地方事務概要	同表題	縣公署	康、三、一二
巴彥縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

木蘭縣

概史　本地方は光緒三十一年(明治三十八年)八月始めて置縣の制を見、呼蘭副都統管區に屬してゐたが、同三十三年右制度廢止に伴ひ同管區の行政區域は呼蘭府及び巴彥州に區劃せられた。而して四年後に木蘭縣は巴彥州より獨立した。施政當初は草木密生、人口稀薄の地であつて臨時縣公署は小石頭河子街に在つたが宣統二年(明治四十三年)始めて松花江北岸索倫張口に移した。之が現在の縣城木蘭である。

地勢　本縣は哈爾濱より松花江の下流約一七〇粁の北岸に位し、東は三江省通河縣に、西は大黃泥河を距て

て巴彥縣に、南は松花江を以て賓縣に對し、北は平原續きの東興縣に接してゐる。長方形をなし、丘陵性の地形で、東、西、北方の山地から發する十數本の河川は悉く南流して松花江に注いでゐる、嶺嶽は小興安嶺の一部に連り最高五〇〇呎、縣内に河川が多い關係から濕地帶に富み水田の可耕に適する地が相當にある。

縣の物産　粟、大豆が主で高粱、玉蜀黍、小麥、陸稻等、移出は極めて少ない。

開拓事業　本縣に於ける日本農業開拓民は、第八次に始まり第八次二箇所である。王家屯、老石房がそれで、何れも松花江寄りの處にあり、交通は便利である。

都邑木蘭街　縣内一般交通の不便は縣城の繁榮を來さず、民國七、八年頃は農業商況の見るべきものもあつたが、事變後逃兵の擾亂、打續く水害の爲め全民他地方に移住し、商戸も閉鎖するに至つた。最近漸次舊態に復しつゝあるが商舖現金賣買の農民相手の小賣商位で振はない。然し、北滿江運局の一埠頭であり、今後日本開拓民は此地より上陸、奥地に向ふ故に、開拓地の發展と共に又繁榮に向ふ希望がある。

哈爾濱同江間の長途國營バスは此地を通過し、北方東興縣城にもバスの便がある。

木蘭街諸機關

木蘭縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
郵政局	電報局	電話局	興農合作社
專賣局	中銀支行	大興公司	協和會
木蘭農業學校(省立)	滿人小學校	街公所	
其他			

警察署所在地

五站	大椅子	利東	大貴

石河鎮

稅捐局分所所在地　石河鎮　樺樹河

郵政局所在地　白楊木　木蘭達河　石頭河子　大貴鎮　柳樹河

資料

題名	書名	發行所	發行年月
木蘭縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
木蘭縣	滿洲國地方事情(一)	大同學院	康、元、四
木蘭縣地圖	同表題	縣公署	康、三、—
木蘭縣一般狀況	同表題	同前	康、三、—
木蘭縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

肇東縣

概史

本縣は肇州縣と同じく、郭爾羅斯後旗の牧地で蒙地に屬してゐたが、光緒二十九年開放せられて以來開墾住民漸次增加し、本地に土著する者多くなり、光緒三十四年肇東分防廳を昌字五井(現肇東)に設け肇州廳の管轄に屬してゐた。民國元年改めて設治局と爲し、後縣政を布かれたのである。建國の際匪襲を受け、秩序紊亂極に達したるも、大同二年秋、縣組織法公布され、康德元年實施、現在は濱江省に編入されて居る。康德四年縣城を滿溝に移した。

地勢

本縣北は安達縣に東は呼蘭縣、東北は蘭西縣、西南は肇州縣に連り、南は郭爾羅斯後旗に境してゐる。

全縣の地勢殆ど平坦、耕作に適して居るが、若し強いて比較すれば、西南に高く、西北に低い。夏秋の頃雨が續けば水害多く常に浸水の虞がある。山脈及河流のいふべきものはない。

縣の物産

農産の主なるものは、粟、玉蜀黍、高粱、大豆、燕麥、小麥等であるが農産の種類は多い。馬鈴薯の出來が非常によく産額も九七萬片を越えて居る。麻、蘇子等をも出す。

畜産は馬が最も多數を占め、緬羊、騾、豚等、何れも家畜として飼養してゐるに過ぎない。

開拓事業

本縣には未だ集團開拓民を見ず、肇東に集合開拓民が入植してゐる。

都邑滿溝街

濱洲沿線の驛で本縣第一の驛であるのみならず、背後地肇州縣、蘭西縣、青岡縣、郭爾羅斯後旗の交通中心地點にあたつて居る。官公吏、商人、旅行者等の往來多く、農産物の貨車絡繹として續く。

商工業亦盛に、商舖三百七十以上を數へ、工場として滿人經營の油坊、酒精、燒酒製造等がある。

又附近の原野には良質の牧草を生じ、牛、馬、羊等の牧畜が盛に行はれて居る。

康德四年縣城となり諸機關又、肇東より移轉せられ益々繁榮に向つてゐる。滿溝驛より南は肇州を經て扶餘に北は蘭西を經て青岡に至る國營バスの便がある。

滿溝街諸機關

肇東縣公署	警察署	郵政局	區檢察廳
區法院	肇東兼理司法公署	商工公會	興農合作社
稅捐局	電報局	電話局	大興公司
生活必需品會社配給所	街公所	肇東(農科)國民高等學校(省立)	

昌五街（肇東）

肇東である。市街は正四角形で、東西、南北に大街をなし、四門を有し各四隅には炮台がある。治安回復と共に農産出廻もよく、商賈殷盛に向つてゐるが、大商舖といふものはなく、小商舖二百四十以上

を數へて、城內頗る振興に向つて居る。

昌五街諸機關

警察署　商工公會　大興公司　電報局
電話局

宋站

濱洲線沿線の一驛、附近に滿人部落があり。奥地に散在する部落より日用雜貨品買出の爲來往する者多く、一路に商家軒を並べ、商舗五十を數へ營業狀況は前幾年に比して見劣りがあるのは、滿溝(縣城)及肇東等が盛だからである。

宋站諸機關

郵政局　稅捐局分所　電報局　電話局
警察署

其他

稅捐局分所所在地

對青山鎮　樂安鎮

郵政局所在地

姜家　李家圍子

資料

題名	書名	發行所	發行年月
肇東縣一般狀況	同表題	縣公署	康、三、一二
滿溝站	北鐵沿線概況	哈爾濱鐵路局	康、二、七
宋站	同	同	同
肇東縣農事合作社概況	同表題	縣公署	康、五、三
肇東縣	黑龍江省(上)	滿鐵調查課	昭、二、九
肇東縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

肇州縣

概史

肇州縣は、蒙旗哲里木盟、郭爾羅斯旗に屬する蒙地であつた。郭爾羅斯後旗は天命九年清に歸服し、順治五年、析薩克鎭國公に封ぜられてゐた。後其世襲は長子系統より次子系統に移つたが滿洲建國と共に此制度は廢せられた。先に清朝時代の對蒙政策により漢族に蒙地開放せらるゝや次第に漢族移民數を增して來た結果、前旗は肇東、肇州、二縣及び郭爾羅斯後旗に分割せられ、光緒三十一年肇州廳を設置し、民國二年肇州縣とす。滿洲建國後濱江省に編入されて居る。

地勢

縣の南部は、郭爾羅斯後旗に、東は肇東縣西北は泰康縣に接し、更に北部は安達縣に隣りして居る。

全縣地勢平坦、一面の平野で、高山峻嶺なく、又、天然の森林といふものもない。

縣の物產

縣の物產は農產のみであつて、大豆、小豆、其他の豆類、粟、玉蜀黍、高粱等を主とし、各種麻類の特用產がある。總面積の中四一%位の不可耕地を有してゐるが、五九%の既耕地中作付面積は其七八%以上を占め土地の利用は割によく出來てゐる。

畜產は馬を第一とし、牛、羊、騾、其他であるが農民は牧畜の智識乏しいため、縣內にては、康德四年に縣種畜場を設け、先づ馬の改良より着手、其他家禽に至るまで、指導する事になつてゐる。又家畜傳染病豫防注射等も行はれる事になつてゐる。これらは農民に對して一大福音である。

都邑 肇州街（舊老城基）

肇州縣公署所在地、縣公署はもと、現在の肇源の地にあつたが、同地は水害常に甚しく、家屋の建設等も不便なる事あり、滿洲建國後、大同二年、もとの老城基に縣公署を遷し、現在、街制を布き肇州街と稱してゐる。

滿溝驛の西南百四十五滿里、緩漫なる丘陵地帶にある。
市街は東西南北に通ずる十字街より成る。地方物産に大豆、小麥、高粱、玉蜀黍、麻類等あるも、商業市場は豐樂街の方が中心であつて、商業範圍は狹く、わづかに其四圍に限られて居る。工業も燒鍋、油坊、製粉等、小規模土式製法によつて行はれてゐるが、當地の需用に應ずるに過ぎない。
南方扶餘より此地を經て滿溝驛に至るバスと、大同街より安達驛に至るバスの便あり何れも國營バスである。

肇州街諸機關

肇州縣公署	警察署	稅捐局	區法院
區檢察廳	郵政局	興農合作社	協和會
兼理司法縣公署	電報局	街公所	

豐樂街

一名小城子とも稱し、縣城の東北二十五滿里、濱洲線、滿溝驛に通ずる路上にあつて、現在バスの通路である。市街は東西約三滿里、南北二滿里の土壁及外壕を以て繞らされ、中央に幅十間の十字大街がある。
東西南北の各門に通じ、南北大街が最も繁華で大小商家櫛比して居る。
主なる産物は大豆、高粱、粟、玉蜀黍、小麥、及大麻、葉煙草、胡麻等で、土地豐饒、農産の産出豐な爲めに商取引も頗る殷盛、其範圍も縣城よりはるかに上である。工業としては、燒鍋、油坊、製粉等あり、製粉、製油に相當大きくして蒸汽動力を備へて居るものが一つあるが他は在來の土法である。製品は何れも當地及附近農村に供給するに過ぎない。

豐樂街諸機關

警察署	郵政局	專賣局	中銀支行

	大興公司　税捐局分局
其他	
警察署所在地	大同街
税捐局分所所在地	大同街東站　永樂村東街
郵政局所在地	大同街　頭臺站　永樂鎮　徐家園子　昇平鎮

資料

題名	書名	發行所	發行年月
肇州縣政概況	同表題	縣公署	康、四、一
肇州縣村制實施經過に就て	同表題	同前	康、四、一二
肇州縣內勞働者調査表	同表題	同前	康、五、一
肇州縣開放土地沿革	同表題	同前	康、五、六
肇州縣土地表	同	同前	康、五、六
肇州縣全圖	同	同前	康、五、三
肇州縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
肇州縣	黑龍江省(上)	滿鐵調査課	昭、二、九

蘭西縣

概史

蘭西縣は呼蘭縣と堺を接し、光緒四年(一八七八年)呼蘭副都督統管區設置と共に其管下に屬してゐた。故に呼蘭縣の沿革は又本縣の沿革であつて、呼蘭河の流域は、北滿に於て最も肥沃なる地方で支那移住

民は早くから此地方に來住したのである。又扶餘地方の漢人、齊々哈爾方面よりの旗人が、呼蘭河流域に移植せられて來たり、刑期を終つた囚人が尙政府に負ふ義務の爲めに送られて來たのもあつた。蘭西縣の西部及北部地方(肇州縣界、安達縣界、青岡縣界)と接壤の地方は、從前呼蘭副都統と、三等三縣(當時は旗)との間に確然たる境界が設定してなかつた爲めに、各旗の歷史と同樣な歷史を持つてゐる處もあり。又中立的態度を持してゐた地もある。光緖三十一年分離して獨立縣になつたのであるが、民國時代は黑龍江省に屬し滿洲建國後、康德元年十二月の新省制定により、濱江省に編入されて居る。

地勢

北部は青岡縣、綏化縣に、東部より東南は呼蘭縣、西南は肇東縣、西北は安達縣に境し、縣內殆ど平野をみるのみ、中央を北部より南方に呼蘭河貫流し、其流域は地味極めて肥沃、古來より注目せられ早くより開墾が行はれた地方であつた。松花江の一支流呼蘭河は、遠く鐵驪縣の東方に源を發し、上流方面にて幾多の支流を集めて本縣に入り來つてゐる爲、本縣にてはすでに舟揖の便を見るに至り、增水時には戎克の航行を見る事が出來る。

縣の物產

農業發達し、可耕地に對する既耕地比率も六〇%以上に及び、早くより、植民せられた地である爲め耕地の成績はいゝ方である。大豆、高粱、粟、小麥等で、玉蜀黍、雜穀等の產出も多い。

家畜は馬、豚を最多とし、牛、緬羊等が次いで居る。殆ど耕作用、運搬用で家畜として飼養せらるゝ程度である。

林產、鑛產、水產等見るべきものなし。

商工業も盛といふに至らない、地方中心の商業、もしくは小規模工業に過ぎぬ。

都邑蘭西街

一に雙廟子とも稱へ、哈爾濱の西方約三〇哩に位する縣城である。光緖三十一年始めて呼蘭より獨立

して縣治を置かれたのであるが、現在縣内に鐵道の敷設を見ず又、呼蘭河の水運も極く短期間であり、少量の運搬に過ぎない爲め、交通の便に惠まれず、商業範圍狹く、特に繁盛を極めるといふ程に至らない。工業も土法の油坊、燒鍋等で產額は地方的需要を充すに過ぎない位である。

滿溝驛より蘭西を經て青岡に至るバスあり、又、呼蘭より蘭西に至る便もある。何れも國營バスである。

蘭西街諸機關

蘭西縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	蘭西兼理司法縣公署	郵政局
電報局	電話局	興農合作社	中銀支行
大興公司	街公所		

其他

警察署所在地 太平山　長岡

稅捐局分所所在地 楡樹鎭

郵政局所在地 小楡樹　楡林鎭　三合成　太平山

資料

題名	書名	發行所	發行年月
蘭西	省政彙覽(濱江省篇)	國務院情報處	康、三、五
蘭西縣	黑龍江省(上卷)	滿鐵調査課	昭、二、九
蘭西縣概況	民政部月刊	民政部	康、元、二
蘭西縣地圖	同表題	縣公署	康、三、
蘭西縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

東興縣

概史

本地方はもと鑲白旗(三佐)、鑲紅旗(三佐)に分れ、東興鎭六佐協領公署の下に滿洲旗族に依りて今日の行政端緒が開かれた。其後一時木蘭、巴彥兩縣の一部に隷屬したが、民國十六年(昭和二年)分離獨立し、始めて東興設治局が置かれ、歷代設治員を經て大同二年四月參事官の任命を見、同八月指導官が配屬され設治局より昇格して縣政を布くに至り、濱江省管下に置かれたのである。

地勢

本縣は濱江省の東北部に位し、縣內全地域に亘り、小興安嶺の流れを受け、土地は一般に丘陵を成して居る。北に朝陽山、滿天星山及び五頂山の各連峰が連つて北壁をなし、その山脈は延びて小興安嶺に續いて居る。東に石門子山、三道硐子、摩雲頂子、亂紫頂子。牛心硝子等の諸山聳立し、鳳山縣境に連つて居り、縣西南には駱駝砬子、蒙古山を控え南部は丘陵狀をなして木蘭縣に延びてゐる。縣內は以上の諸山に圍まれた盆地で、縣の中央を走り木蘭縣に流入する木蘭達河は其源を之等の山系に發してゐる。

縣の物産

匪賊のため土地を捨てゝ失踪せる地主多く目下不在地主土地回復のため移民を奬勵してゐる。大豆、玉蜀黍を出し、近年水田開發增加し米を產する。半島人の米收穫三千石に近く、滿人農民も大豆を捨てゝ水田經營するものが增加して來た。

森林面積豐富、多く針葉樹を見るが、密林の測定困難である。

都邑東興街

縣城に二・三の小資本小賣、家內工業程度の工業を見るに過ぎぬ。

東興縣全帶も極めて小面積の縣であり、水、陸交通の便思はしからず、東興は縣城ではあるが、地位偏在してゐる爲めに、產業上にも、何等見るべきものがない。

東興街諸機關

東興縣公署　警察署　税捐局分局　郵政局
電報局　電話局　勞工協會出張所　街公所

其他

郵政局所在地

新民鎭　趙家店

資料

題名	書名	發行所	發行年月
東興縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	康、元、二
東興縣	滿洲國地方事情(一)	大同學院	康、元、一二
東興縣	濱北線及背後地經濟事情	鐵道總局	昭、一一、一二
東興縣概況	同表題	東興縣公署	康、五、

安達縣

概史

清の初は、蒙旗杜爾伯特游獵の地、荒原蔓草絶えて人跡少なき地であつたが、光緒三十年始めて此地の開放を奏し、漢民族の移住を招來してより光緒三十二年、杜爾伯特旗地に、安達廳を設けて黑龍江省に屬せしめ、其管轄を受けて居た。民國二年改めて縣となし、黑龍江省龍江道に屬せしめた。滿洲建國後康德元年十二月新設の濱江省に編入されて居る。

地勢

本縣は濱江省の西北の地である。東は青岡縣、東南は蘭西縣、南は肇東肇州縣に、西は泰康縣、北は林甸縣と境し、形稍方形をなして居る。

地勢全縣平原曠野で雜草叢生し、高山峻嶺といふものはない。火石山、太平山、老虎崗等があるが所

謂丘岡といふものであつて、特記すべきものでもない。河川又大なるものなく細流に過ぎないが所々に泡を有して居る。青背泡は最も大きく、肇東縣境にあつて、南北長さ十滿里、東西の廣さ七、八滿里、水深八、九尺で、春夏の頃になれば、水量横溢する。漁類多く肇東縣と共有にし漁撈して居る。其他、軋葫蘆泡、中內泡等がある。

縣の物產

本縣は地勢上、平坦曠野ではあるが、縣內の土地は、瘠地多く、曹達質をおび、農產は面積に比し、收穫率が少ない。小麥、燕麥、豆類、稗、玉蜀黍、麻類、煙草等である。

家畜も全縣に於て相當數有して居る。緬羊、豚を主とし、馬、牛、騾等、而して本縣は畜產奬勵大いに努め、緬羊の改良、增殖のため縣立種羊場を設け又、種畜場を設立して、一般民間の牧畜指導に乘出して居る。

林業の見るべきものはないが、魚類は各泡に於てそれぞれ漁獲されて居る。

開拓事業

本縣內には青少年義勇隊の安達特別訓練所、隆爾圖甲種小訓練所があり、安達に鐵道自警村がある外集團開拓民は入植してゐない。

都邑正亞街

安達驛の北方十八粁に位する縣城である。北地は蒙古杜爾伯特旗下の游牧地であつたが、開放後發展し民國二年縣となつて、こゝを縣城として發達したものである。安達驛開設以來物資の多くは直接鐵道驛に集中され、僅に、地方的商業權を維持して居るに過ぎない。安達驛より正亞を經て拜泉に至る線と、青岡に至る國營バスの路線がある。

正亞街諸機關

安達縣公署　　街公所　　警察署　　稅捐局分局
興農合作社　　郵政局　　大興公司　　安達兼理司法縣公署

安達街

安達街諸機關

電報局	電話局	安達(農科)國民高等學校(省立)
滿人小學校		

濱州線の重要驛であり、農產物の大集散地である。主なる取扱農產は、大豆、小麥、高粱、大麥、白豆等で、これが出廻期に至れば、驛附近の廣い空地には、大豆、小麥の露天積の山を築き、商取引が行はれる。

市街は鐵道を境として東西に分れ、東部は主要街であり、以前は商業地區として目覺しい發達をしてゐたが、事變後匪賊のため多大の損害を蒙つた。大經街なる大道が、西南から、東北に貫いて居り、之に平行して南大街、北大街があつて現在營業してゐる商店は百餘軒ある。店頭裝飾の昇龍は北滿特有のものであつて珍らしく又美麗である。

本地は、呼蘭より齊々哈爾に出る街道に沿ふ主要都市であつて、北は克山、拜泉、安達、青岡、南は肇東肇州の最も肥沃なる地方への四通八達の要路で從來これらの地方物資がすべて集散されたものであつたが、平齊線、濱北線等の新線が出來て以來その方に奪ばれて、當驛は著しく、衰微に向つてゐる。加ふるに北鐵讓渡後のロシヤ人の引上等は更に寂寥を加へて居る。自動車は安達驛より北方は拜泉、青岡に至る線あり、南方は大同街を經て肇州に至る路線を有してゐる。

警察署	稅捐局	郵政局	電報局
電話局	專賣局	中銀支行	大興公司
國際運輸	協和會	電話局	日本人小學校
福興製粉股份有限公司	安達電燈股份有限公司		

其 他

郵政局所在地 喇嘛甸子 薩爾圖

電話局所在地 中和鎮 禎祥鎮

資料

題名	書名	發行所	發行年月
安達縣	黒龍江省(上)	滿鐵調査課	昭、二、九
安達縣誌	同 表題	縣公署	康、五、一
安達站	北鐵沿線概況	哈爾濱鐵路局	康、二、七
安達縣誌	同 表題	縣公署	康、三、一

青 岡 縣

概史 光緒三十一年縣治を創め、海倫府に屬せしめたが、民國元年直轄となり、更に同三年龍江道に屬した。滿洲國建國後は黒龍江省に屬し、康德元年十二月一日より新設の濱江省の管轄となつた。

地勢 一帶平野で北滿穀倉地帶の中心に位し東境を通肯河南流し其の流域は水田として利用の見込が多い。事變前迄は鮮農四〇〇名位水田經營に從事して居た。

縣の物產 農產物以外見るべきものなく麥類、大豆等を主とする。

都邑青岡街 哈爾濱の西北方約一二〇粁に位する青岡縣城であつて一名柞樹崗ともいふ。此地方は稍高地で柞樹が多かつたためこの一帶の通稱となり、光緒三十一年縣治を布くと共に市街の名としたものであらう。商

工業の特筆すべきものはないが商工業者四一五戸、雜貨店、穀物販賣業者、酒類製造、油類製造等が多い。此地に集中する産物は、大豆、小麥、粟、高粱、玉蜀黍、藍類、葉煙草、麻等の農産物で、豆油、豆粕燒酒、製粉、豆素麵等の工産品がある。滿溝驛より青岡を經て明水に至る線と、滿溝より青岡を經て七排八井に至る國營バスの便がある。又安達驛より安達を經て青岡に來る國營バスもある。

青岡街諸機關

青岡縣公署　警察署　税捐局　商工公會
青岡兼理司法縣公署　興農合作社　郵政局　中銀支行
大興公司　協和會　電報局　電話局
裕順公公司(合名)

其他

警察署所在地　中和鎭　興化鎭

税捐局分所所在地　積祥鎭　興化鎭　中和鎭

郵政局所在地　恒升堡　三屯　積祥鎭　中和鎭

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
青岡縣農況	農業の滿洲	滿洲農事協會	昭、九、一
青岡縣(滿鐵調査課)	黑龍江省(上卷)	滿鐵調査課	大正一三、五
青岡縣公設糧穀市場並保管倉庫事情	特産販引事情	滿洲特産中央會	康、四、九
青岡縣經濟事情	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

郭爾羅斯後旗

概史

郭爾羅斯後旗地は札賚特、杜爾伯特の二旗と共に俗に三豪の地と稱せられて居る。光緒二十四年黑龍江將軍恩澤該に旗と同時に荒地の開放を奏請した事に端を開き、光緒二十七年開放着手以後約四回の開放を見たのである。

本旗は二百餘年間、國幣の補助なく、民は又税を納めず、自費自治により嚴然たる封建制度であつたが、光緒二十七年開放し、肇東、肇州兩縣を設置した。此れより旗民も亦漸次農に從事し、土地の開拓に努むるに至り、旗政は舊制のまま札薩克の獨裁制で、一切の政權は王公の下に協理二人を設け旗務を輔佐して居る。

滿洲事變當時、境内全く匪區となり庶政停頓し、農村疲弊した。旗長は兵力を補充し、匪賊を退撃し治安を維持した。康德元年旗制改組諸政刷新の令を奉じ、諸政百般に亘り改革を實行し、康德二年七月兩肇より行政地域の接收を告げ、旗公署を老爺屯王府より、現在地肇源(舊縣城)に移し、旗の中央に位置し、民治大いに擧り現在に及んで居る。

本旗は哈爾濱より松花江を逆航する事八十滿里にして旗内東端に達す。東は呼蘭縣に、東北部は肇東肇州に接し、西部、西北部は杜爾伯特旗に隣接、南部は松花江を距てゝ雙城、扶餘、大賚縣及び郭爾羅斯前旗の二旗六縣に境してゐる。

地勢

地勢平原にして山岳なく、南半部は大江に臨み、地勢低窪中間僅に丘草があつて、旗東境より西肇州縣內大同街に至る間蜿蜒二百餘里起伏して居る。

旗内の三個の河は、皆南流して松花江に注ぎ、此外に旗内西方地區には幾多の水泡子を殘し、漁業盛に行はれる。

元來本旗は牧畜を以つて生業としてゐたのであるが、光緒二十七年開放せられて以來、放牧に適する高地は年々耕作せられ、匪賊の掠奪に會ひ、水害による流失、罹病等により、其數大いに減じて居る。馬牛、豚、緬羊等。

縣の物産

農業も大同元年より康徳元年の水害に疲弊してゐたが、康徳二年より豫想外の豐作に遭ひ、漸次恢復して來た。大豆其他の豆類、高粱、粟、玉蜀黍等、其他煙草、各種麻類等の特用農産がある。又淡水魚の産が多い。

都邑肇源街

本旗公署所在地である。清朝時代の肇州廳、民國時代の肇州縣城であつたが、滿洲建國大同元年の水災にあひ、縣公署を現在の肇州街(老街基)に移してより此地は舊縣城と呼ばれてゐた。康徳二年此地は旗有となり、八月、旗公署を本城に遷し肇源と改稱した。松花江に面し、北は南肇の地に接し、交通の要地を占め、北方濱洲線、滿溝驛までバスの便あり、夏は江上に船の便がある。

市街は旗公署移轉以來治安良好となり、土木建築事業大いに興り、街道稍整齊となり、市内商舖増加し目覺しい繁榮を見せてゐる。水陸運を利用し、僻地乍らも冬季は京白線を利用して新京との取引が行はれ、商舖約百戸を有して居る。油坊、磚瓦業等も數を増して來た。

大豆、穀類、煙草、麻等の農産多く、漁産も相當にあつて、他に移出して居る。

肇源街諸機關

郭爾羅斯後旗公署　警察署　稅捐局　區法院
區檢察廳　郵政局　電報局　旗立醫院

茂興

茂興は本旗の西方に位して居る。曾て清朝時代に、公文傳送の驛傳所であつた所で、本旗外鎭の一つである、人口は六千以上も有する邑鎭であるが、蒙古族はあまり住んでゐない。市面整齊して交易亦盛に大豆、煙草、魚類を出す。

四站

清朝時代驛傳所であつた所、本旗外鎭中、茂興と共に、最も繁盛な所である。

南は松花江に近く、東は老爺屯(舊王府)に近く、四站の東南滂洲に埠頭がある。哈爾濱からの水路貨物運搬は多く本埠頭を利用してゐる。陸路も北は肇東に東は對靑山に通じて便利である。

古城八里城子は本站の東南方約二百米の所にある。

其他

税捐局分所所在地	四站　茂興鎭
郵政局所在地	四臺站　古魯　二臺站　薄荷臺
	三臺站　茂興　新站　頭臺站
	樂安鎭

資料

題名	書名	發行所	發行年月
濱江省郭爾羅斯旗事情(上、下)	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、四、四
郭爾羅斯後旗已往及現在施政概要(同旗公署)	內務資料月刊(二の一)	內務局	康、五、一

間島省

間島省

延吉縣

概史

本縣はもと甯懐の地であつて漢初には蒼海郡と稱してゐた。各時代を經て、清朝に至つて封禁圍場地となり、光緒六年分防縣丞を置き敦化縣に屬せしめ、同七年招墾局を設けた。同二十八年延吉廳を設けに撫民同知を置き宣統元年府に改め、翌二年新に置かれた西南路道に屬せしめ、民國二年延吉縣と改めたが、翌三年西南路道が延吉道に改まると共に其の管下に屬した。滿洲國獨立後は初め吉林省に屬し、次いで康德元年十二月新設の間島省に編入された。康德五年五月汪清縣との境に縣境の變更あり、北部の突出してゐた部分を殆ど汪清縣に割讓した。

地勢

北は汪清縣に一部は僅かに圖們江を隔てゝ朝鮮に對し、西は哈爾巴嶺を境として敦化縣及び寧安縣の一部に、南は和龍縣及び安圖縣西北の一部は寧安縣に接して居る。山岳は北境に老爺嶺、西境に哈爾巴嶺、汪清縣境に吉清嶺、其の他縣内山岳丘陵多く夫等には夫々森林地帶がある。河川としては布爾哈通河及び其の支流が縣内中央部を横斷東流し北境を嘎呀河縱貫して何れも圖們江に注ぎ之等の流域には各平野を形成して居る。

縣の物產

農產は、水稻、大豆、粟、大麥を主とし、玉蜀黍、高粱等で煙草、大麻、蔬菜等も出す。牛、豚、家禽等の飼育亦盛である。

延吉縣の森林は布爾哈通河上流、朝陽川上流、嘎呀河右岸地方が主である。オノオレカンバ、白樺、

モオコカシワ、白楊等の濶葉樹から、樅、唐松、白檜、朝鮮松等の針葉樹が多い。共に自然林で、人口比較的調密な部分は、亂伐せられた傾向であるが、人里離れた處になれば、自然の密林をなして居る。

鑛產豐富、金、砂金、銀、銅、石炭等あり、滿洲採金會社の手によつて、砂金の採取が行はれ、民國時代より石炭の產出を見て居る。

開拓事業

間島省內は半島人を以て八割を占めてゐる省で、從來自由に北鮮の方から入り來つたのであるが、鮮滿拓植會社では新規入植の鮮農に對して統制的に入植せしむる事とし、集團、集合、分散の三形態としてゐるが本縣に集團として入植してゐるものは一四部落六四〇戶である。

日本內地開拓團は入植してゐない。

都邑延吉街

延吉はチタス平野の中央部にあり、間島省の省城であると共に延吉縣の縣城である。

此地はもと森林と荒野であつて、光緒十六年の朝鮮大凶作により、初めて半島人の移住となり、其後漸次開拓せられた都市である。當時は琿春廳に屬する一邑であつてわづかに稅捐局が置かれてあるに過ぎず、稅捐局の所在する小邑といふ意味で局子街と稱されてゐたのである。

光緒二十一年此地に延吉廳が置かれて延吉と改稱せられ支那側の政治的經濟的根據地となり、間島協約成つてより正式に、支那側の權力下に置かれ商埠地となつてより人口增加し、天寶山の銀、銅の產出に山東苦力の來住する者が多くなつて來た。

敦圖線開通し、更に新京よりの直通をみるに及んで益々發展して來たのである。市中の人口は、半島人よりも滿人の方が約二倍位である。行政上此街は指定街となつてゐる。

一般市況農產の出廻は狹められてゐるが、商舖立ち並び、油坊、釀造、製材、窯業等行はれ市況殷盛

である。

延吉街諸機關

間島省公署	延吉縣公署	警察廳 直轄(一) 派出所(五)	延吉地方法院
延吉地方檢察廳	區法院	區檢察廳	監獄
稅捐局	商工公會	專賣署	郵政局
電報局	電話局	農興合作社聯合會	興農合作社(縣)
中銀支行	大興公司(二)	國際運輸	協和會省本部
延吉放送局	延吉師道學校(省立)	延吉(農科)國民高等學校(省立)	地方師道訓練所
延吉女子國民高等學校(省立)	延吉工業學校	滿人小學校	日本人小學校、青年學校
街公所	間島印刷株式會社	東興印刷株式會社	延和金鑛股份有限公司
延吉電業株式會社	間島自動車股份有限公司	遊長組(合資)	北滿產業株式會社
糧穀會社支店	延吉國立醫院	生活必需品會社支店	勞工協會支部

龍井街

龍井は間島地方に於ける內鮮人勢力の中心地であつて、明治四十二年十月帝國領事館開設以來每年千人平均の人口增加率を以つて堅實なる發展を示して來た。

市街は丘陵を以て圍まれ盆地をなし、郊外西南方には海蘭河、六道河が流れて居る。此地は半島人の移住によつて開拓せられたもので、韓國統監府派出所が設けられてゐたが、一九〇九年十一月吉會鐵道敷設と交換條件の形で間島が完全に支那側に歸屬するに及んで、統監府派出所も撤退し、之に代つて總領事館が設けられ、支那側も亦商埠局を設立した。天圖線の敷設以來人口激增し、龍井發展の一大轉機を劃したものである。(領事館は昭和十四年廢止となる)

當地は日鮮人の商業的中心地で、龍井商人は間島各地に支店出張所を設けて活躍してゐる。大豆、其他の豆類、粟、小麥、木材等を輸出し、綿布類、人絹及混織、小麥粉、砂糖、石油等を輸入する。市內の商家も、雜貨商を始め貿易、油坊、被服、旅館、飲食店、土木建築業食糧品等繁榮してゐる。

龍井街諸機關

警察署（直轄(一) 派出所(五) 分駐所(三)）	稅捐局分局	商工公會	稅關分關
郵政局	電報局	電話局	專賣局
中銀支行	興銀支店	龍井國立醫院	街公所
營林署	國際運輸	光明（商科）國民高等學校（省立）	
光明女子國民高等學校（省立）		滿人小學校	日本人小學校

（會社）

株式會社間島銀行	龍井貿易株式會社	間島產業株式會社	間島林業株式會社
間島油粉股份有限公司	東滿澱粉化學工業股份有限公司		荷主運輸株式會社
吉順製材公司（合資）	富美洋行（合名）	山田洋行（合名）	信義洋行（合名）
東洋拓殖株式會社支店	間島病院	航空會社事務所	生活必需品會社配給所

圖們街

圖們は延吉縣志仁鄉の豆滿江岸嘎呀河の合流して居る西北盆地の一隅に位し、舊名灰幕洞と稱してゐた。建國以前（大同元年三月以前）は舊市街南區附近一帶には凡そ百餘戶の鮮滿農耕人の陋屋があつたに過ぎないが京圖線開通を契期として、躍進的發展を爲した街である。

大同元年六月憲兵分遣隊の設置以後、大同二年に入り移住者流入し、同七月鐵路總局が新市街計畫を發表してより、市街の體容を整へ、康德元年には電燈施設も出來たのである。土地貸下げ行はれて以來

各種機關設置せられ、更に躍進を續けた。建設事務所の移轉と、稅關の北鮮三港進出は一時景氣に頓座を示したが、其後內容充實せる國境貿易都市として、重要性を加へ、圖佳線開通により、三線の分岐點となつて、漸次重要經濟都市となりつゝある。延吉と同じく行政上指定街となつてゐる。

圖們貿易の移輸入の主なるものは、綿糸及同製品、金屬及同製品、飲食物、藥材、雜貨等、輸出は農產物が主で、何れも北鮮方面に出す。

圖們街諸機關

警察署 派出所(五) 分駐所(二)	稅捐局分局	稅關	營林署
商工公會	郵政局	電報局	專賣局
中銀支行	國際運輸	電話局	興銀支店
日本人小學校	青年學校	街公所	

(會社)

圖們市場株式會社	滿洲親和木材株式會社	株式會社圖們劇場	中島商店(合資)
東興號(合名)	東海實業社(合名)	親和企業株式會社	滿鐵醫院
航空會社事務所	生活必需品會社配給所及倉庫		

明月溝

哈爾巴嶺を境界とし、之れが嶺東の地にある明月溝は南北滿洲より間島への門戶にあたり、四方は山又山の高原地帶に圍まれて居る。市街を布爾哈通河が流れ、其流域に僅かの平野を見る。此地は光緒十八年光街と呼ばれ一寒村に過ぎなかつた處である。滿洲國となり、驛名を明月溝と稱し街も亦明月溝と通稱する樣になつた。

明月溝の發展は木材の集散によるもので、木材は本街の西、北、東北、各背後地より伐採搬出せられ本街は木材業者が最も多い。

當地方は森林地帯を控へ、共產匪の巢窟として最も適當な土地で其背後地は彼等の根據地として知られ、明月溝も屢々共匪の脅威を蒙つて居たところである。

明月溝諸機關

警察署直轄(一)分駐所(一五)　稅捐局分所　郵政局　電報局
國際運輸　電話局　日本人小學校

朝陽川

市街は南に山を控へ、三方は開けて平野をなし、布爾哈通河、朝陽川の合流地點は街の郊外にある。數年前迄は天圖輕便鐵道經過驛として僻村であつたが、京圖線敷設せられ、更に從來の天圖線が國有となり、京圖線南廻線として分岐するやうになつて此地は朝開線の分岐點となり、新市街として發展せんとして居る處で將來を豫期せられて居る。

朝陽川諸機關

稅捐局分所　郵政局　電報局　國際運輸
電話局　日本人小學校

頭道溝

頭道溝は龍井の西方約四里半(日本里)の地點にある。海蘭河に臨み附近一帶は平野を成し、農產物の集散地として有名である。

此地は三十年前迄は茫漠たる草原で、其後滿人の部落となり、續いて、半島人の移住を見るに至つた一九〇九年間島協約成り、此所に商埠局が設けられ從來の山河鎭を頭道溝と改稱した。

移入品は普通雜貨であつて圖們方面より入る。

頭道溝諸機關

警察署直轄(一)分駐所(八)派出所(一)　稅捐局分所　郵政局　電報局
電話局　日本人小學校　株式會社東亞百貨店

老頭溝

老頭溝は四方山に圍まれ唯其間布爾哈通河が郊外に流れて居る。本來此地は炭礦によつて開かれたも

ので民國七年老頭溝煤礦公司が設立計畫せられた。當時は民家二十戸位の處であつたが、康德元年には六千近くの人口を有するに至つた。現在は京圖線の一驛となつてゐる。

老頭溝の炭礦は埋藏量約二百萬噸と推定せられ、其採炭量は三百噸を越え、敦化、圖們、龍井等に賣捌いて居る。

老頭溝諸機關	稅捐局分所　郵政局　電報局　國際運輸 電話局　老頭溝煤礦公司　警察署（直轄（一）分駐所（五））

其他

警察署所在地	延吉八道溝　依蘭溝（直轄（一）分駐所（六））
郵政局所在地	銅佛寺　茶條溝　延吉八道溝　天寶山 平安村　樺尖子　春興街　五合公 橫道子　東古城子　八家子　二道溝 細鱗河　天寶山　東盛湧　葦子溝 依蘭溝　土城堡　亮兵臺
稅捐局分所所在地	延吉八道溝　銅佛寺
國際運輸所在地	春陽
電報局所在地	八道溝　三岔口　春陽
電話局所在地	銅佛寺　東盛湧　八道溝　三岔口 春陽

日本人小學校所在地

間島省……8

二道溝

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
延吉縣河川調査書	民政部半月刊	民政部	康、元、三、三一
龍井村及龍井村事情	間島事變大要（昭和八年度）	吉林事務所龍井派出所	昭、八、—
龍井村と龍井市（嘉村龍太郎）	滿蒙	滿洲文化協會	昭、九、一一
間島琿春、北鮮及海岸地方行脚記（山口忠）	同表題	不明	昭、七、二
間島に於ける朝鮮人問題に就いて（天野元之助）	同表題	中日文化協會	昭、六、五
北鮮間島史（永井勝三）	同表題	會寧印刷所	昭、二、七
延吉縣々政一般	同表題	縣公署	康、二、六
延吉縣	京圖線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、二、四
延吉縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地概況	鐵路總局	康、二、四
延吉縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	滿洲事情案內所	昭、一〇、二
延吉（局子街）狀況	同表題	滿洲電々會社	昭、九、五
龍井商業經濟事情	同表題	吉林鐵路局	康、三、五
圖們商業經濟事情	同表題	同前	康、三、四
延吉縣全圖	同表題	縣公署	康、三、—
延吉縣區域變更	政府公報（一二二〇）	滿洲國政府	康、五、五、五
間島省延吉縣勢一班（三年度）	同表題	延吉縣公署	康、四、五
延吉縣地圖	延吉縣勢一班の裏面に印刷	同前	康、四、五

汪淸縣

本縣は宣統元年（或は二年ともいふ）の奏請によつて新設せられたもので、始め延吉府下汪淸に置くこ

と、なつて居たが後變更して百草溝に置いた。民國に至つても同じく汪清縣といひ、延吉道の管轄に屬せしめた。滿洲國に至つて初め吉林省に屬せしめたが、康德元年十二月行政區劃革つて新設の間島省の管轄に屬せしめた。康德五年五月延吉縣北部の廣大なる地域を當縣に編入せられ區域が大いに擴大されてゐる。

地勢

本縣は東に琿春縣、東北に東寧縣、西南は延吉縣、西北は寧安縣、南は圖們江を隔てゝ朝鮮に接して居る。山岳としては北部寧安縣境に老松嶺、西南部延吉縣境に摩天嶺、牡丹嶺、東方の東寧、琿春兩縣境に十八個頂子及び其の南に青松嶺、縣の中央部に老爺嶺及び數箇の丘陵があつて之が分水嶺となり、其の水は北に流れて大綏芬河、南に流れて圖們江の支流たる嘎呀河となつて延吉縣に入る。是等の河川の流域には比較的廣範な平地を擁して居る。

縣の物産

農産物としては大豆、粟、麥類、粳、馬鈴薯、本縣は人口も滿人より半島人の方が多數を占め、農民も地主は滿人が多いが自作小作共に半島人が多數である。

汪清縣の林業は間島第一である。森林地帶は羅子溝、小城子、大荒溝地方で、種類は、紅松、沙松、白楊、落葉松等である。尚伐採した木材は從來嘎呀河を利用して流下圖們江へ入り雄基へと搬出されてゐたが、康德五年汪清より半嶺に至る森林鐵道完成してより其運輸系統に變更を見たのみならず、伐採事業に大進渉を來して居る。

鑛産又豐富、砂金、鐵、石炭等あり、殊に、羅子溝のオイルシエールは、現在滿洲に於ては撫順と共に知られて居る。

開拓事業

本縣には日本內地の林業開拓民が三岔口に入植し、半島開拓團は一九部落一、六九三戸入植して居る。

都邑汪清（百草溝）

汪清は延吉より北五十二粁、嘎呀河の流域、山に圍まれた盆地に古來より發達した市街で百草溝と稱して知られて居た。

汪清縣公署の所在地で縣行政の中心ではあるが市況はあまり振はず、昭和九年四月、日軍が此地を撤退してより共産匪頻々として附近を襲撃し人心恟々としてゐた。汪清の幹線である延吉間の交通は事變以來五十數回の襲撃を受けた程である。その新線圖佳線も當地を通過せず、市況は益々衰退の傾向である。康德五年森林地帶への鐵道完成し營業を開始してより從來の水運を利用する搬出が、汪清を中心として鐵道搬出となり、木材集散市場として發達すべきものと見られる。

金融方面では、百草溝勸業株式會社、百草溝金融部の兩者が貸付、預金を取扱つて居る。

汪清（百草溝）諸機關

汪清縣公署　警察署（直轄（一）分駐所（三））　稅捐局　興農合作社
郵政局　電報局　電話局　國際運輸
協和會　勞工協會出張所　日本人小學校
區法院　區檢查廳

汪清縣春融村に大興溝（大荒溝）諸機關

警察署（直轄（一）分駐所（三））　稅捐局分所　郵政局　電報局
電話局　專賣局　國際運輸
日本人小學校（天橋嶺にもあり）

羅子溝

羅子溝は四圍山岳を以て圍繞せられ涎々數里に亘り千古斧を入れざる大森林がある。又オイルセールの產出を見る事に於て有名である。地下に埋藏せるものに水晶、石油、石炭、砂金等がある。

大興溝よりバスの便があつて入るに便利である。

羅子溝諸機關	警察署直轄分駐所(一二)	郵政局	電報局	電話局
大肚川諸機關	警察署直轄分駐所(一五)	税捐局分所	郵政局	電報局
	電話局			
石峴(亞呼河)諸機關	警察署直轄分駐所(一一)	郵政局	日本人小學校	東洋パルプ株式會社

其他

警察署所在地	涼水泉子(新興)直轄分駐所(一一)	三岔口直轄分駐所(一三)		
税捐局分所所在地	三岔口	春陽(小城子)		
郵政局所在地	大坎子	新興	綏芬鎭	涼水泉子
	壁影礄子	雙河鎭	蛤蟆塘	小三岔口
國際運輸所在地	春陽			
	三岔口			

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
羅子溝概況	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、八、七
北鮮間島史(永井勝三)	同表題	會寧印刷所	昭、二、七
汪清縣勢概要	同表題	縣公署	康、三、五
汪清縣	京圖線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、二、四
汪清縣	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	同前	康、二、四
汪清縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	同前	昭、一〇、二
汪清縣大肚川方面調査書	同表題	朝鮮總督府間島派遣員	昭、九、一一

汪清縣地圖……………同　表題縣公署　康、三、一

和龍縣

概史

もと延吉廳に屬し和龍(大拉子)に分防經歷廳が置かれたが宣統元年延吉府に併治され新に縣治を設けた。當時管內は四堡四十社に分れてゐた。滿洲國に於ては初め本縣を吉林省に屬せしめたが、康德元年間島省を新設してその管轄の下に置いた。

地勢

東南は圖們江を隔てゝ朝鮮に對し、西は英額新嶺及び紅溪河を境として安圖縣に、北は延吉縣に接して居る。縣內は殆んど山岳及び丘陵地帶で殊に安圖縣境は英額新嶺高く聳へ森林地帶は同山脈及び紅溪河附近に多い。河川は朝鮮の咸北との境界に圖們江、安圖縣南境に紅溪河があり、海蘭河は延吉縣方面へ北流して居る。

縣の物產

農產物は大豆、粟、籾、麥類、高粱、玉蜀黍、馬鈴薯等である。本縣全帶の人口が殆ど半島人を以て占められ、滿人は五千餘に過ぎない狀態で地主、自作、小作共半島人を以つて大部分である。森林は縣の西南部卽ち安圖縣境の海蘭河上流及紅溪河上流であつて、この木材は一つは海蘭河によつて龍井へ一つは紅溪河によつて圖們江に運ばれるものである。鑛產物に富み、石炭、金及砂金、オイルシエール、アスファルト等がある。三道溝の石炭は滿炭會社の經營中である。日本開拓民は新秋田に林業開拓民が入

開拓事業

鮮農の分散開拓民は多く入植してゐるが集團的のものはない。

植してゐる。

都邑和龍(大拉子)

元來大拉子と呼ばれ和龍縣公署の所在地であつて龍井より五里(日本里)の地點にある。市街は五峯山

オランカイ等の高山に圍まれた盆地、曾て加藤清正が會寧よりオランカイ迄來り、大拉子盆地を瞰瞰したと傳へられて居る。

交通不便にして市況振はない。鐵道總局にては康徳五年龍井より自動車を開通せしめたるにより開發上多大の便を與へて居る。

和龍諸機關

和龍縣公署　警察 署直轄(一)・分駐所(四)　稅捐局　郵政局
電報局　興農合作社　日本人小學校　勞工協會出張所
電話局
和龍區法院(新智村)　和龍區檢察廳(新智村)

三道溝

三道溝は龍井より乘合自動車の便があり、頭道溝を經て三道溝に至る間は約十里(日本里)である。人口一萬以上にも及び急激なる人口增加を來して居るが、これは砂金採掘の爲めに入り込んだもので三道溝北西部丘陵一帶は砂金及石炭の地層であつて、現在此の內南北十五粁、東西一粁の鑛區に對して建國の功勞者たる、日鮮滿六名に採掘を委託して居る。

附近の農業は共產匪の脅威を受け、充分なる耕作出來ず、龍井方面へ出廻る數量は極めて少量である從つて市況としては見るべきものがない。

三道溝諸機關

警察 署直轄(一)・分駐所(九)　稅捐局分所　專賣局　郵政局
電報局　電話局

開山屯諸機關

警察 署直轄(一)・分駐所(三)　稅捐局分所　郵政局　電報局
電話局・　國際運輸　稅關分卡

八道河子諸機關
東滿洲人絹パルプ株式會社　日本人小學校
稅捐局分所　專賣局　郵政局　電話局

其他

警察署所在地
稽查處直轄(一)分駐所(三)　南坪直轄(一)分轄所(一三)(專賣局もあり)

稅捐局分所所在地
紅溪河街　鐘城船口(臨時)　稽查處　北興街
馬牌

郵政局所在地
南坪　紅溪河　沙金溝　稽查處
石建坪　八道河子　火狐狸溝　下三屯
小街　永寧村　永安村　東京德
高嶺歲子

稅關分卡所在地
石建坪　鐘城船口　稽查處　富岩坪
南坪　古城里

電話局所在地
八家子　石建坪　鐘城船口　土山子

日本人小學校所在地
二道溝

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
北鮮間島史(永井勝三)	同表題	會寧印刷所	昭、二、七
和龍縣全圖	同表題	縣公署	康、三、一
和龍縣	京圖線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、二、四

和龍縣事情…………………………同　表題　滿洲帝國地方事情大系刊行會　康、三、七
農村經濟について……………………第一回全國縣參事官會議事々錄　民政部　康、元、六

琿春縣

概史

遠く渤海國に始まる。渤海國の龍原府といふのは多分現在の琿春附近であらうと謂はれてゐる。元時代には開元路地方と稱せられ、終り頃、朝鮮の李朝の祖先である翼祖とかいふ人が此所に居を構えた。降つて、康熙五十二年(或は五十三年ともいふ)に協領衙門を置いて寧古塔副都統に屬せしめたが、光緒七年初めて副都統を置き琿春（昔時八大屯）と名づけた。宣統元年琿春廳衙門を新設して東南路兵備道の監督を受け一般の行政司法を掌らしめた。民國二年に琿春縣となり西南路道觀察使の監督下にあつたが、翌三年延吉道の管轄に移つた。滿洲建國後は初め吉林省に屬し、康德元年十二月一日より新設の間島省に編入された。

此の地の開墾は光緒三十四年務本公司が移民を招來したのに始まる。

地勢

本縣は間島省東南隅に位し其の西北方は老爺嶺を以て東寧、汪清二縣に、東南は連峯の線を以て蘇聯境界に、西南は圖們江を隔てゝ朝鮮に各接して居る。河川としては琿春河は縣內中央部を、密江は縣西部を各南流し、又圖們江は縣南境を流下して居る。琿春河二十六里の內下流四里半は平野を形成して居る。（日本里）

縣の物産

農產物は大豆を主とし、全產額の約六割を占める。其他粟、麥類、稷、馬鈴薯等で農業に從事してゐる者は半島人が大多數である。

都邑琿春街

縣内及東寧、汪淸縣境にかけて、美事な森林地帶を有し、縣內森林面積は內三分の二は密林であり、三分の一は疎林である。之を伐採區域別に云へば、琿春河上流產を東溝材、密江及嘎呀河地方產を西溝材と唱へ、共に紅松を主とし、朝鮮樅之に次ぐ。尙枕木材も一箇年百萬本から百五十萬本を出し、尙此まゝ採木を繼續しても二十年餘を要すると謂はれて居る。これらを搬出するに、鐵道の便なく、多くは琿春河その他によつて流下して居る。

琿春は其木材市場を爲して居る。

數多の砂金、石炭、石灰の鑛區あり。

琿春は紅旗河に臨み、琿春縣城である。此地はもと間島に於ける支那側政治機關の中樞を爲し、民國八年西門外を開いて商埠地と爲して後、商業發達し人煙稠密となつて來た。全體的に間島省內に於ては半島人の數はるかに多く全省の八割を占める程であるが、琿春のみは滿人の數はるかに多く、人口分布上特殊地帶である。

琿春城內は周圍を土壁を以て繞らし之に四門を設け此中に滿洲國官衙及滿人商店軒を並べ、西門外には各種の機關があり、日人、半島人は此城內に多く居住して居る。

日露戰役の平和締結後、日本は直ちに支那當局と所謂日淸條約を結んで(明治三十九年一月)其第一條に於て、長春、吉林、哈爾濱、寧古塔、三姓と共に琿春も開市場とされたのである。

もと此地は對露貿易が盛に行はれ、國境近き此地は市場として市況活潑であつたが、民國十一年露支國境封鎖以後對露貿易杜絕され、奧地向け物資なく、琿春市況は振はなくなつたが、朝鮮との貿易が次第に發展し、依然として滿洲東南の重要都市である。大正の末から、半島人盛に移住し來り人口激增し

て行つた。

現在訓戎より輕便鐵道の便があるが、東滿産業株式會社により此地方の鐵道敷設に着手せられて居るから、此後の發展が期待される。

琿春街諸機關

琿春縣公署　警察署直轄(一)分駐所(四)　税捐局　商工公會
興農合作社　區法院　區檢察廳　郵政局
電報局　電話局　專賣局　營林署
税關分關　中銀支行　大興公司　縣立醫院　國際運輸
協和會　琿春(農科)國民高等學校(省立)　滿人小學校
日本人小學校　東滿鐵道株式會社　琿春畜産株式會社　東滿産業株式會社
東滿鑛業株式會社　生活必需品會社配給所　勞工協會出張所

東興鎭

縣域の東北二百滿里を距て滿蘇國境に近い、東土門子とも稱す、人口三千位の小邑ではあるが、琿春の屏障を爲し、國防の要地である。此地を距る十四、五滿里の北土門子に採金現場がある。

東興諸機關

警察署直轄(一)分駐所(七)　郵政局　電報局　電話局
日本人小學校

[illegible]子諸機關

税捐局分所　税關分卡　電話局

其他

警察署所在地

馬滴達直轄(一)分駐所(四)　哈達門直轄(一)分駐所(二)　大陽村直轄(一)分駐所(二)　黑頂子直轄(一)分駐所(四)派出所(一)

税捐局分所所在地

九沙坪直轄(一)分駐所(七)　西沙坨子

税關分卡所在地	郵政局所在地	日本人小學校所在地
九沙坪	哈達門	二道泡子
下坎	馬滴達	密江
西沙坨子	沙坨子	鎭安嶺
密江	回龍峰	五道溝
		三道溝

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
琿春地方農況（李學文）……	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、八、一
琿春縣狀況……	同前	同前	昭、九、七
琿春渤海國日本道址（鋒旗良充）……	滿洲民族變遷史	滿洲文化協會	昭、七、一一
琿春界約（岩田孝三）……	國境政治地理	東學社	昭、一三、七
間島問題（峯旗良充）……	滿洲民族變遷史	滿洲文化協會	昭、七、一一
間島に於ける朝鮮人事情（並木孝三）……	勞務時報	滿鐵	昭、九、七
間島地方史的考察（百瀨弘）……	東亞	東亞經濟調査局	昭、九、八
間島（民政部）……	各縣政況	民政部	大同、二、九
間島ソヴエート區域全貌（北崎學）……	東洋	東洋協會	昭、九、二
間島地方木炭及その消費……	海外經濟事情	外務省通商局	昭、九、五、七
琿春縣一般狀況　第二輯……	同表題	縣公署	康、三、一二
琿春のしるべ……	同表題	琿春商工會議所	昭、一一、一五
省勢彙覽（間島省篇）……	同表題	國務院情報處	康、三、八
琿春縣……	京圖線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、二、四
琿春縣……	圖寧、寧佳、林密線及背後地事情	同前	康、二、四
琿春縣一般狀況……	同表題	琿春縣公署	康、四、七

安圖縣

本縣は其昔、明朝時代納段部に屬し、後清の版圖となつた。次で康熙十三年覺羅英木納を派遣し長白山より現在の三道白河一帶の地を踏査せしめ、清の中葉は松花江以南は長白縣に、以北は敦化縣に編入した。宣統元年娘々庫地方を中心として一縣を創設、安圖縣と命名し奉天省下に屬せしめたのである。然るに此地は交通の便開けず人口稀薄、官憲の威令は行はれず、馬賊、匪賊、兵匪、共匪、不逞鮮人等の蟠踞と化してゐた。

滿洲事變に伴ひ本縣内の匪賊は暴威をふるひ、王德林等によつて縣城の襲擊を受けたる事屢々である。日軍、滿軍の東邊道討伐行はれ、建國後二ケ年にして甫めて官憲の威令が行はるゝに至つたのであるが、滿洲建國に伴ふ本縣々制の確立には慘憺たる苦杯を嘗めて來たものである。

康德元年十二月省制改革により奉天省より離れて間島省下に入り、康德六年六月西部の一部を敦化縣に割讓した。今や治安肅清工作の進涉と共に王道の光に浴する事が出來るやうになり、埋れたる地下資源の調査等にも着手せらるるに至つた。

本縣は白頭山下にあり全縣殆ど山地帶である。東は老嶺山脈によつて和龍縣に、西は松花江上流の一支流たる露水河を界とし、南圖們江上流を隔てゝ朝鮮咸鏡北道に對し北は古洞河によつて吉林省樺甸縣に接して居る。

西南部及東部は白頭山の支脈進出し、撫松、長白、和龍の各縣及朝鮮咸鏡道にも伸びて居る。山地は千古斧を入れない大森林であつて南部に白頭山脈の主峯白頭山聳立し、東部は峻嶮を以て知らるゝ老嶺

の嶮をなし、森林地帶は全縣面積の三分の二を占めて居る。縣內北部及中央部には松花江の支流たる小河が幾條となく流れて其流域にはわづかな平野を形成して居る。

河川の主なるものは、松花江支流としては、古洞河、露水河、頭道白河、二道白河、三道白河、四道白河、五道白河、大沙河あり、圖們江に注ぐ紅旗河がある。

縣の物産

縣內の三分の二を森林によつて占められて居る狀態で農業は振はないが、各河川の流域沿岸には可耕地を有し、大豆、包米、穀子等を主として居る。

縣內の森林は紅松、杉松、落葉松、楡、樺等の密林であつて、優秀なる林相である。從來は治安不安定の爲め、伐採が行はれなかつたが、滿洲國政府ではこれが開發のため營林署分署を設け着手して居る。

商業は振はず、わづかに生活必需品を商取引するのみで、近年延吉方面、明月溝より自動車開通し、これらの雜貨は同經由で入圖してゐる。鑛産資源は非常に豐富と見られて居る。鑛産資源の中心は主として大甸子附近で將來は此地方は開發目ざましいものと豫想され、現在出願せられて居る礦區も多數に及んで居る由である。

開拓事業

日本開拓民は入つてゐないが、鮮農開拓團が三八部落、一萬四千餘人入植して居る。

都邑安圖村

安圖は舊名を娘々庫と稱し其昔は可成殷盛を極めた街であつたといふ事である。北は小高い丘陵が蜿々として續き、東南と西は平野が拓けて居る。町の北門外を流れる娘々河に沿ふて築城された東西三粁、南北二粁の城廓に圍まれた町である。町には堂々たる漢藥店が多いが、安圖平野は藥草栽培には最もよく適した土地で今では農家經濟の主なるものであるといふ事である。阿片栽培が禁止されてよりは藥草が非常に盛になつて、これらは營口、天津、北京方面に移輸出されて居る。藥草は當歸、紫胡、白芍藥

等を始め種類も十數種に及んで居る。工業の見るべきものはないが附近鑛產資源豐富なる爲め、調查隊追々入り來り、又自動車の開通をみてよりは物資も明月溝敎化方面より來り、旅館、料理店等も開店されて居る。

安圖諸機關　安圖縣公署　警察署（分駐所(十一)派出所(四)）　稅捐局　營林署分署
郵政局　專賣局　協和會　農事試作所
中銀支行　興農合作社　勞工協會出張所

其他

警察署所在地　大沙河（直轄(一)分駐所(十三)）　大甸子（直轄(一)分駐所(六)）　兩江口（直轄(一)分駐所(四)）　紅旗河（直轄(一)分駐所(一)）

郵政局所在地　兩江口　大甸子　大沙河

資料

題名	書名	發行所	發行年月
安圖事情	同表題	明月溝警察分所	昭、一一、一
安圖縣政況概要(滿文)(縣公署)	民政部月刊	民政部	康、二、四
秘境安圖縣の全貌(嘉村龍太郎)	滿蒙(一六の八)	滿洲文化協會	昭、一〇、八
安圖地方概況	権運月報	権運署	康、二、四
謎の安圖を語る	同表題	大阪朝日新聞社	昭、一一、三

通化省

通化省

通化縣

明代には興京府に屬して居たが、光緒三年金鑛發掘に關し爭騷を生じた爲めに時の提督左寶貴之を鎭め以て奉天都督を縣設置委員として翌年通化縣城を作らしめた。光緒三十九年長白、臨江、輯安、柳河の諸縣を設置し、土地の制定を爲した。當時通化縣はかなり廣凡なる地域であつたが、其後再度の區劃變更をなし、面積半減し更に一部を分割して金川縣に分つた。縣政布かるゝに及び、監獄附屬工廠を設置し、小學校、道路、義倉、其他の設備を整へ、地方警備を嚴にし産業の發達と共に日滿鮮人の往來繁くなり、民國六年遂に日本領事館の設立及び支那側交渉員の駐在を見るに至り學校、電燈公司其他の設備完備し、縣城は異樣の發達を遂げるに至つた。滿洲事變以來建國に至る約半歳は實に苦難の歷史であつた。事變勃發後、日本軍入城して通化縣城を占據し次で、縣長及山田參事官入り來り、縣下未だ騷然たる中によく縣政を整へ、其後相次ぐ縣政への獻身的努力により匪害も漸く薄らぎ、災害により縣城を捨てゝ四散したる住民も漸次歸城し、更に、梅輯線の完成を見たる後は頓に活氣が漲つて來た。康德四年七月通化省の設置を見てより同縣は又通化省九縣省政の中心となり、加ふるに東邊道鑛產資源の大々的調査の結果は莫大なる埋藏量を見出され、今や通化縣は一躍重工業の大中心とならんとしてゐる。

本縣は渾河上流佟佳江によつて全く二分せられてゐる觀がある。東南地方は臨江縣、輯安縣に接し、羅圈溝嶺を分水嶺として河川は北流し、佟佳江に注いでゐる。羅圈溝嶺の支脈東南に走り、又佟佳江の

北西部の地帶は佟佳江に通ずる支流卽ち富爾江は縣の西境を流れその間を山脈縱横に走つて居るが、東邊道の他の縣に比較すれば、一帶に傾斜面が緩かである爲めに農耕地として利用される部分が比較的に多い。山嶽として桓仁縣の崗山々脈、北部柳河縣境の妖群嶺、金川縣の夾皮溝嶺、東南部の老虎山、南老嶺、老嶺、大壺溝山、歡喜嶺等の連山聳立し尙縣內北部には、松頂子山、中央部には花皮頂子山等があり、各河川の支流水流豐富であつて、これらの沿岸沃野が多い。

縣の物產

各河川の流域平野は割に肥沃であり、又他縣に比して山の斜面が緩かである爲めに耕地は多く農產も豐富である。大豆を大宗とし、玉蜀黍、高粱、粟、稻等で、これらの穀類は通化を中心として取引せられ、爲めに早くより開けた地方であつた。

家畜は豚が數に於て最も多いが、馬、牛、驢等で頭數はあまり多くを有して居らない。

本縣內の森林は皆國有に屬するか、又は未開放の林區と爲つて居る。實業部康德三年末の調査では立木地一〇二、五〇〇陌、針葉立木蓄積量、一二六、七〇〇立方米、濶葉樹蓄積量八、八七三、三〇〇立方米となつて居る。樹種は、紅松杉松、魚鱗松、黃花松、白楊、白樺、黃樺、楸木、楡木、楊柳等である。

縣內鑛產極めて豐富で、金、銀、石炭、鐵を始め、多くの重要鑛物が埋藏して居る模樣である。從來匪賊の爲め調査が出來ず、康德三年以來、滿鐵、滿洲國、滿炭等の共力によつて通化縣より、臨江縣及隣接縣附近に調査隊入り込んで大々的調査が行はれた結果、東邊道重要鑛業の中心となつたわけである。

縣內現在開發中のものは鐵廠子の石炭で、東邊道開發會社の經營になり、通化縣城より東南約二十五粁の地點にあり、炭質は良好、工業用骸炭原料に適する長所がある。現在の處推定埋藏量約四千萬噸で

あるが、調査伸展に伴ひ、漸次增加の見込みである。
鐵鑛の方は七道溝採鑛所がある。本採鑛所は梅輯線果松驛の東南方約九粁(專用線がある)の地點にあり、主鑛石は赤鐵鑛、磁鐵鑛、豫想埋藏量約一千萬瓲であるが、尚增加の見込みである。品位は平均五十三%であるが、約五%の滿俺を含有する含滿俺赤鐵鑛、含滿俺磁鐵鑛である。然も平均三%最大一六%の石灰分を含有し、製鐵上有害なる燐、硫黃、チタン等極めて少ない。
二道江鐵鑛及二道江建設局、東邊道開發會社は二道江に建設局を設けて特殊鋼製造工場建設に着手し其完成を急いで居る。次で銑鐵工場建設に移る豫定である。二道江にはまだ採鑛所がない。滿洲國産業計畫の樹立、重工業事業計畫成立し、東邊道は其豐富なる鑛産を利用して、一躍重工業の地帶となり、東邊道開發會社が康德五年設立せられ通化省の鑛業開發にあたる事となつた。通化は其中心となつた爲めに各種の施設が、市街計畫と共に進涉して居る。
商工業の發展は、從來特産の取引の外見るべきものがなかつたが、今後急速に發展してゆくものと見られる。滿洲國内のみならず、朝鮮方面との取引も展開してゆく事は期待される事である。

都邑通化街

奉天の東方五二〇滿里、安東の東北六八五滿里の地點にあり、もと頭道溝と稱し邊外の一寒村に過ぎなかつたが、光緒三年縣治を布かるゝと共に一躍殷盛を來し、木材業の發展、金鑛の開掘、藥草、皮革及穀物の集散等增加するにつれ移民又增加し遂に地方に於ける中心市場を形成するに至つた。
市街は渾江の右岸にあつて、城内及城外より成り、北部及西部は丘陵を以つて圍繞せられ、東南は渾江に臨んで居る。城廓には東、西、南に三門があり城内には、官公署、學校、病院等がある。城外は西關、南關、東關等に分れ東關以東は商業地區として最も繁榮して居る。江岸は砂礫の河原で

あつて木材貯木場となつて居る。工業は現在の處家內工業の域で見るべきものは少ないが商業は從來からの關係で盛である。滿洲事變による匪害の爲めに、市民他方に四散してゐたが最近續々と歸還し、加ふるに、東邊道鑛產資源の大量埋藏發見せらるるや梅輯線の完成、朝鮮地方への交通要路を占むる等、從來文化に後れ邊境の地と見なされてゐた通化も最近驚く可き人口の集中を見、重工業の重要中心地として一躍各方面の期待をかけらるゝに至つてゐる。

通化には梅輯線の完成を見たる外、康德七年七月通化南方の鴨園驛より、東方八道江を經て、臨江より更に大栗子まで延びた鴨大線の全通を見る事が出來、東邊道資源搬出に一大便利となつた。

自動車は桓仁に國營バスの便あり、奉吉線の南雜木驛より、永陵、興京を經て通化に來る民營バスがあり、渾江には民船を浮べる事が出來る。

通化街諸機關

通化省公署	通化縣公署	警察署	稅捐局
商工公會	郵政局	電報局	電話局
專賣局	通化地方法院	通化地方檢察廳	區法院
區檢察廳	營林署	通化地方觀象所	興農合作社聯合會
興農合作社(縣)	縣立醫院	中銀支行	大興公司
國際運輸	協和會省及縣本部	街公所	電業營業所
通化師道學校(省立)	通化第一(農科)國民高等學校(省立)		通化地方師道訓練所
通化第二(工科)國民高等學校(省立)		通化女子國民高等學校(省立)	滿人小學校
日本人小學校	東邊道開發株式會社本社(一部)		糧穀會社出張所

生活必需品會社支店及小賣配給所　勞工協會支部

四道溝　縣城に次ぐ第二の部邑であつて人口二千餘を有し縣城の東六十滿里の地點にある。臨江縣に赴く咽喉であつて商舖五十餘あり尙地方物資の小集散地であり稅捐分局がある。

快大茂子　縣城の西四十滿里の地であつて奉天、桓仁に赴く要地、民國初年には人口稠密商務亦繁盛であつたが、民國九年より胡匪出沒し商戶の大半を燒き、其の後事變以來及滿軍胡匪により商業狀況は昔日の如くでないが、商家約五十餘を有し稅捐分局、警察署等がある。

其　他

警察署所在地	熱水河子　六道溝　快大茂子　大泉源
	三棵楡樹　小横道河子　新安堡
稅捐局分所所在地	紅石子分所
郵政局所在地	快大茂子　大泉眼　英額埠　三棵楡樹
	熱水河子　ー　四道江　新安堡　江甸子
	大川　正岔　二密　東昇堡
	六道溝
日本人小學校所在地	鐵廠子

3　書資料

圖名	書名	發行所	發行年月
通化縣調查報告書	同表題	通化縣公署	康、三、八
通化縣事情	同表題	縣公署	康、三、一〇

通化縣の概略……同　表　題	安東商工會議所	昭、九、—
通　化　縣……滿洲地方事情(一)	大同學院	康、元、四
通　化　縣……滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
通化縣地圖……同　表　題	縣公署	康、三、三
通化縣一般狀況……同　表　題	縣公署	康、四、—
康德五年度通化縣施政方針……同　表　題	同前	康、五、—
通　化(廣江寬二)……新天地(一八の三)	新天地社	昭、一三、三
通化縣復興事業視察記(朱家語)……南　嶺(四九)	大同學院	康、五、四
通化と梅輯線……吉林商工月報	吉林商工會議所	昭、一二、七
通化縣公報(四年九月)……同　表　題	縣公署	康、四、九
通化縣經濟事情……金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

臨江縣

本縣は舊名を貓耳山と稱し通化に隷してゐた。光緒二十八年臨江縣を設置し設治委員を設け縣署を貓耳山の東南側卽ち今の南圍子に設け興京廳に隷してゐた。光緒三十二年東三省總督徐世昌奏して長白府を設け八道溝を以て界と爲し溝以東を長白府、溝以西を以て臨江に歸した。民國十八年縣公署に改め、縣政治を行ひ事變前に至つて居た。事變に際し匪賊の横行、民心の不安は最も甚しく、鴨綠江沿岸は航行極めて困難、縣內又匪賊の巢窟であつて、滿洲國の威令行はれず、その後討伐隊により、治安維持會によつて漸く落ち付いたが、康德三、四年頃まで一部の蠢動を見てゐた。然し乍ら一方滿洲王道政治は遍く邊境に及び、縣政益々充實し來り、康德四年七月には新設通化省の設置を見て、臨江縣は其中に編入される事になつた。鑛產開發を以て、最近一躍其名を知られるに至つて居る。

地勢

本縣南部の沿邊は鴨綠江を隔てゝ朝鮮平安北道の厚昌、慈城郡に對し、北は濛江、撫松、通化に、東は長白、西は輯安に接す。

本縣内は殆ど山地であつて、鴨綠江の沿岸と、渾江の兩岸に極く僅な平地があるのみである。山脈連互起狀、老嶺中央を橫貫し、長白山脈の幾多の支脈が縱橫に走つて著名なるものゝみにても二十餘を數へる。其各脈を分水嶺として幾多の小流が急流以て鴨綠江に注ぎ大なるものゝみにても十五以上を數へる。斯の如く山と河とのみの縣ともいふべき地勢を爲して居る。

縣の物產

農產は大豆、玉蜀黍、粟等であるが產額は極めて少ない。高粱の產出もあまり多くない。

家畜は、馬、牛、豚其他一般農家用に使用するのみ。

林業、本縣城臨江より鴨綠江上流、長白、撫松の一滯及鴨綠江支流の渾河に沿ふ通化縣に至る地帶の一部は、鴨綠江森林地帶で所謂鴨綠江材の根源である。樹種は紅松、杉松、油松、鱗松等、次に、櫟、樺、椴等である。鴨綠江採木公司の手によつて伐採せられ、鴨綠江によつて筏として安東に流出する。毎年の伐採は總計百十萬石を越えてゐる。

鑛產

鑛產又豐富、金、銀、鉛、石炭、鐵等、從來匪賊の爲めに調査の手入れられず、康德三年末より四年に入り漸く、通化縣の方より調査が進められ、重工業要素としての、鐵、石炭の產額は莫大に上る事が發見せられたのである。康德五年九月、滿洲重工業株式會社の子會社として東邊道開發株式會社創設せられ、通化省内の鑛產開發にあたり、本縣内の資源開發が急激に行はれつゝある。

鐵

東邊道一帶に亘り、豐富に埋藏せる銑鐵資源は、今日の調査の程度では未だ其の全貌を紹介し得ないが、通化省内西部七道溝、三道溝(通化縣內)より東部大栗子溝(本縣內)附近に至る東西約五十粁、南北

約十五粁の間は略確實な鑛床地帶と推定され、東邊道東北一帶に殘された未踏の地域にも地質的條件より推して類似鑛床の賦存を期待し得るのである。

（大栗子溝採鋼所）

大栗子溝の鐵鑛は赤鐵鑛であつて、含鐵品位平均六三%を誇る世界的富鑛であり、其の埋藏量七千二百萬瓩と推定されて居る。現在東邊道開發株式會社の採鑛所が設けられ、採鑛に着手せられて居る。同會社の事務所及社宅等建築せられ益々盛になつてゐる。康德七年七月、通化方面よりの鐵道開通成り、すでに十一日第一の資源發送を行つた。

其他本縣內には、老嶺鐵鑛、八道江鐵鑛等有力なる鑛床があり、夫々調査を進められて居るが、現在までは採鑛所は設けられてゐない。

石炭

次に石炭は東邊道一帶に亘り非常に豐富で、埋藏量は現在迄の調査により確實に判明した範圍の鐵廠子、五道江、八道江、煙筒溝のみにても既に二億瓩を算してゐる。本縣內にては八道江、五道江、煙筒溝腰溝、三岔子、掘子窰等數多の炭坑があるが、現在採掘中のものは八道江と煙筒溝の二箇所で、各採炭所が設けられて居る。

（八道江採炭所）

本採炭所の管轄は渾江炭田の略中部より、西北部に亘る大通溝、小通溝、砟子窰、金坑等の地域及び石人溝炭田中の林子頭を含む廣大なる地域である。採炭所は鴨大線老灌驛の北方一粁餘りの地點にあり炭質は粘結性に富み、埋藏量は合計七千五、六百萬瓩に及ぶと見られてゐる。

（煙筒溝採炭所）

煙筒溝炭礦は臨江の東方約十三粁の地點にあつて、其の推定埋藏量は約三千萬瓩であるが、調査未了の區域の調査進展すれば著しい增加が豫想されてゐる。本炭礦は現在判明中最も優秀なる強粘結性炭を產し、製鐵用骸炭に適してゐる。

（五道江採炭所）

鐵廠子炭礦（通化縣內）の東北方、鴨大線の孫園、道溝兩驛附近にある。炭質は高度瀝青炭、一部に半無煙炭を產す、炭色漆黑樹脂光澤を有し、推定埋藏量約八千五百萬瓲なるが、尚調査未了の區域あり、今後調査の進展に伴ひ急激なる炭量の增加を豫想され、一億瓲は越えるものと見られてゐる。

都邑臨江街

臨江街詳細圖

當地は地名を帽兒山と稱し、もと荒蕪地であつたが、光緒二十八年通化縣の一部を割いて縣を新設し縣公署を置かれて後發達して來た。

市街は背山臨江の狹小なる地域に存在し、城壁を設けず、東西二條、南北二條の大條より成り、對岸及江を上下する槽子により取引盛に行はれ、商況活潑、山の中の小都邑としては珍らしくも對岸中江鎭と共に電燈の設備等も早くより爲され發達の途上にある。產物は、大豆、高粱、玉蜀黍、粟、燕麥等であるが、特用の麻、葉煙草の產が多い。商取引は安東との間に行はれ、上流の長白、又は奉天等ともなされてゐる。

近くに大栗子溝、七道溝の良質なる鐵山を控え、東邊道開發會社の事業伸展に伴ひ本街の發展も著しい。

從來は夏季鴨綠江の航運による外、交通の路も開けなかつた處であつたが、通化省新設以來通化との間にバスの開通を見、康德七年七月には通化方面より、本街を經て大栗子溝に至る鐵道の開通を見る事が出來た。又七年四月より北方、山地帶の撫松縣城との間にバスが運行するやうになり、新京から通化を經て、對岸の中江に航空の便もあつて、山間の僻地乍ら交通大いに便利になつた。

臨江縣公署　警察署　稅捐局　郵政局
電報局　電話局　稅關分關　營林署分署

八道江諸機關

興農合作社	中銀支行	大興公司	專賣局
協和會	電業營業所	臨江鑛山學校（省立）	日本人小學校
滿人小學校	縣立醫院	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所
警察署	郵政局	稅捐局分所	電報局
電話局	日本人小學校		

其他

警察署所在地

六道溝	葦沙河	林子頭	六道江
紅土崖	閘枝溝	八道江	

郵政局所在地

緯沙河	東錯草溝	樺皮甸子	六道溝
紅土崖	六道江	河口	三岔子
林子頭	八道溝	閘枝溝	四道溝

資料

題名	書名	發行所	發行年月
臨江縣一般狀況	同表題	縣公署	康、二、六
臨江縣全圖	同表題	縣公署	康、三、三
臨江	省政彙覽（安東省篇）	國務院情報處	康、三、九
臨江縣鴨綠江岸事情	同表題	縣公署	康、三、七
臨江縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

長白縣

概史

本縣は約八十年前までは鬱蒼たる大森林地帯であつて虎狼の巣窟たる感があつたが、咸豐四年（約八十年前）頃より鮮人の越境者を見る様になり、其の後明治二十三年北鮮地方の大凶作により、饑餓の極遂に鮮人大擧して渡江し來り各地に點居、山林に火を放つて火田を作る様になつた。之實に縣民安居の濫觴であつて其最初の移民住地とも稱せられ漸を追て全縣に民家を見るに至り江岸近くに人口集り遠ざかるに從ひ稀薄となつて居る。他縣に比し當縣に居住する人口の大半數が朝鮮人であるが殆ど貧困者であつて課税も行はれず、又當縣唯一の財源である木材は日滿合辦會社により經營せられ其れにより何等の收益も見ず、大森林の木材は、本縣に在りながら本縣のものでないといふ狀況にあつて財政は極めて困難である。

地勢

北長白山脈より南鴨綠江に面し傾斜的高地を爲し其の間龍華崗を中心とし、八道溝より長白山の南方二十四道溝までに數多の河溝が肋骨狀に竝流し鴨綠江に注いで居る。從つて山岳地帯多く全面積の九割迄之を以て占め、溝の沿線一帯は森林帯をなして居る。世界に名をなす長白山は縣域長白を離るゝ事東北二十八里の地點にあり、鴨綠江、圖們江、松花江三江の源をなす。長白山は海拔三千七百米あり岩石多く頂上は殆ど草木の生育を見ない。且つ四季雪を頂き長白の名を爲して居る。此山の絶頂に池があり天池と稱して居る。周圍約七十滿里、池の周圍に奇峰六個あり實に絶景である。長白山脈は滿洲國の歴史に緣固深い山脈であつて東北方より彎曲し西南に廣大なる崗を作つて居る之を龍華崗といふ。其他數多の支脈を出して居る。

縣の物産

縣面積の九割が山岳地帶といふ狀態で農產は僅である。大豆、粟、包米、大麥位のもので他に出す程はない。

本縣林野の主要樹種は、杉松、紅松、臭松、落葉松、楊樹、樺樹、樺樹、楡樹等が主である。本縣は鴨綠江沿岸の主要森林地帶で光緒三十四年、中日合辦鴨綠江採木公司成立し、引續き伐採事業が繼續せられて居る。(同公司は康德七年解散したが伐採事業は續けられてゐる)家畜は、牛、豚を主とし、農耕用である。鑛產豐富と見られ鑛物埋藏は、金、銀、鐵、硫黃鐵鑛、煤鑛等。然れども交通不便の爲これら地方は本格的調査を行つたわけでない。鴨綠江より多少の水產を見るが特筆すべき程ではない。

都邑長白府

當地は長白縣城であつて鴨綠江對岸に同江岸第二の都といはれる惠山鎭が朝鮮側にありその間には國際橋があつて往來頻繁である。本府は一九一五年頃匪團の襲擊を受けた事が兩三度あつたが、その後至極平穩に過して來た地であつた。昭和十二年(康德四年)十一月朝鮮側の吉州より惠山鎭に至る鐵道線開通してより惠山の繁榮に伴ひ當府も亦其恩惠に浴してゐる。鮮人住民多く、內鮮滿人通じて三萬數千の人口を有してゐる。

長白諸機關

長白縣公署　警察署　稅捐局　郵政局
專賣局　興農合作社　營林署分署　中銀支行
協和會　長白農業學校(省立)　滿人小學校　縣立醫院
勞工協會出張所

八道溝諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局

其他

警察署所在地	税捐分局所所在地	郵政局所在地
十四道溝	十三道溝	金華鎮
十三道溝		十四道溝
八道溝		十三道溝
十二道溝		十二道溝
		二道崗
		新房子
		二十道溝

資料

題名	書名	發行所	發行年月
長白縣	滿洲國地方事情(二)	大同學院	康、元、一二
長白縣事情	同 表題	滿洲國地方事情編纂會	康、元、一一
長白縣一般概況	同 表題	長白縣公署	康、三、一二
長白縣公報(第六號)	同 表題	同前	康、四、一一

撫松縣

概史

撫松縣はもと長白府に屬してゐたが、宣統元年其一部を割き新たに置縣し撫松縣となし、安東省下に編入せられた。土地僻境山地で永年匪賊の巣窟であり中央文化に後るゝことはろか、交通不便な處である。康徳四年七月新設の通化省をみるにあたり隣接縣と共に通化省に編入せられて居る。

地勢

通化省の東北端を占め、東は間島省の安圖縣、西南は臨江縣、南は長白縣、北は二道松花江を距てゝ吉林省の樺甸縣、西は頭道松花江を以て濛江縣に堺して居る。縣内南部高く、西北になるに從つて低下、山脈縱横し、江河環繞して居る。最大の山脈は、長白山より發する東西北の三崗があり、縣域に至つて稍平地を爲して居る。河川の主なるものは頭道松花江、二道松花江、及松香河があるが、何れも河川の上流方面であつて水量淺く、交通の利用は少ない。

縣の物產

縣內の九%は不可耕地で既耕地は僅に一・四%にすぎず、農作物は少ないが、大豆、豆類、粟、高粱玉蜀黍、水稻、陸稻、小麥等をつくつて居る。

撫松縣といへば、人蔘と直ちに響くやうに人蔘の產地として有名である。縣內全財源の三分の一は人蔘である。製品數量二五萬斤、生產高三七萬五千圓以上との事である。而してこれらの撫松人蔘は（近縣のものも總稱する）營口商人によつて買占められ、海路、南支那に運ばれるといふ事であるが、最近は興農合作社の指導によつて、販賣經營に改正を見てゐる。日支事變の影響は撫松人蔘にも及び販路に一時行き惱みを生じてゐた。興農合作社は此間に立つて大いに斡旋に努めてゐる。

本縣の林業は、將來伐採上最も有望であるが、官有林又は特殊の會社の所有に屬し、何等縣の財源とはならず、前述の人蔘の賣行き生產は直ちに縣の死活を左右する程である。

鑛產は隣縣等から見て有望であらうと推測され近年調查も進められてゐるが、撫松附近に石炭の埋藏を見られ、東邊道開發會社の經營に屬する。

都邑、撫松街

當地は臨江縣の北方二百二十滿里の山中にあり、別名を雙句子とも呼稱し、周圍に城壁なく市況亦特記すべきものはない。穀類、葉煙草、藥材、皮革類を主とし、商業範圍は附近村落に限られてゐるが、地方の開墾と共に移住民增加し、其集散物資は逐年增加し、多少移出する狀態である。取引は臨江、濛江、吉林等を主とし、穀類、麻、皮革、藥材、日用雜貨等である。奉吉線朝陽鎭驛より、輝南、濛江を經て撫松に入る國營バスの運行あり、最近、臨江よりもバスの開通を見、從來入縣するに困難であつた此地も近來鑛產發開必要上、交通も便利となつた。

撫松街諸機關

撫松縣公署　警察署　稅捐局　郵政局

專賣局	興農合作社	營林署	撫松農業學校(省立)
協和會	大興公司	縣立醫院	勞工協會出張所

其他

警察署所在地	松樹鎮	萬良鎮	抽水洞	北崗
	東崗			
郵政局所在地	松樹咀	萬良鎮	大營	

資料

題名	書名	發行所	發行年月
撫松縣	省政彙覽(安東省篇)	國務院情報處	康、三、九
撫松	同	前同	前同
滿洲の華用人蔘	同	表題篠田信二	昭、五、八

輝南縣

沿革史

本縣は殆ど、山と森林を以つて占めてゐる樣な縣でもと海龍縣に屬して居たが宣統元年海龍の南八社を割いて輝南縣となし、民國三年縣制の改正によつて縣公署を定められた。滿洲事變により匪賊の害多く、日滿軍の討伐と治安工作により漸く縣域を始め地方の治安が保たれるに至つたが縣内非常な慘狀と疲弊を呈したのであつた。康德元年の改正にては奉天省下にあつたが、康德四年七月新設の通化省に編入されて居る。

地勢

東北は濛江縣と磐石縣に接し、西に海龍縣、西南は柳河縣に接し、南は金川縣に隣してゐる。大體の

形は蓮の葉の樣で、域內は多く山と森林とで占めて居る。地形大體に南部及東南に高く、北に向つて傾斜してゐる。山脈と數ふるもの十五に及び東北より西南に或は東西に走るものが多い。河は殆ど南境に源を發し、幾多の小支流は北流して縣の北境をなす輝發江に注いで居る。

縣の物産

農產の主要なるものは、水稻、玉蜀黍、高粱、豆類等で、他に煙草、蔬菜等の栽培がある。而して、水稻、粳子、蘇子、煙草、痲、豆類等は、殆ど他に移出して居る。匪害の爲めに疲弊した縣內も最近漸く恢復し、農產も多くなつたが平野が少ない爲めに、全體の產額は多くない。水稻は鮮農によつて營まれてゐる。家畜として馬、騾、驢、牛等。

現在伐採してゐるものは、松、柞、楊、槐、楡、椴等である。鑛產の產出は輝南鑛山があり、松樹村に金、銀、銅の產出がある。康德五年三月より東邊道開發會社が經營稼行にあたり、康德六年度より鑿岩機により、輝南鑛山採鑛所を設け、本格的開發に着手してゐる。

又鞍子河附近には數箇所の露頭鐵鑛を見、埋藏量は不明であるが、鑛質は一般に良好と見られて居る。

都邑輝南街

輝南は朝陽鎭より四十四滿里、輝南縣公署の所在地人口一萬一千位の小都邑である。大同元年六月匪襲を受け、市街の大部分は燒盡され、爾來恢復が容易でないが、此地方中心の一小市街で經濟の中心である。朝陽鎭驛より撫松行きのバス運行がある。

輝南街諸機關

輝南縣公署　警察署　稅捐局　郵政局
電報局　興農合作社　中銀支行　國際運輸
協和會　大興公司　生活必需品會社配給所　勞工協會出張所

其他

警察署所在地	撫民屯	樓街	輝發	興隆堡
郵政局所在地	撫民屯	中央堡	興隆	杉松崗
	樓街			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
輝南縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
輝南	省政彙覽(奉天省篇)	國務院弘報處	康、四、二
輝南縣統計(三年度)	同表題	輝南縣公署	康、三、

金川縣

概史

光緒三十二年御獵區より開放せられ、同時に分防巡檢衙門が設けられてより次第に開發せられ、民國二年柳河縣の設立後一時同縣に所屬してゐたのであるが、同十四年柳河縣の東方五堡を割いて金川縣が設立せられたのである。建國後奉天省に屬してゐたが、康德四年七月新設の通化省に編入せられて居る。

東は臨江縣及濛江縣に、西南は通化縣に接し、北西は柳河縣、北東は輝南縣に境してゐる。

地勢

地形は南北に長く、東西に狹い不規則の長方形を爲し、龍崗山嶺中央に走つて南北二部に分れ、南部は哈泥河の流域を爲し、北部は三統河の流域を爲す。南部は山林多く、哈泥河流域平地面積は少く、人口も稀薄である。三統河流域には多少の農耕地あり、人煙稍密であるが、全體的に山地多く、高原であつて、山間にわづかの狹隘の平地あるのみである。

縣の物産

農産は大豆、高粱、玉蜀黍、粟、小麥、水稻、陸稻等で、大豆、高粱が主なるものである。

家畜は牛、豚が主なるもので、其他は數が少ない。

林産は杉松、果松、楸木、楡、柳、柞、椴木等現在個人によつて經營伐採せられて居る。

鑛産は金が多い樣である。調査されたる鑛種によれば金、硅石、銀でその中、金、石炭は採掘して居たが、匪賊に襲はれて停止の止むなきに至つた。縣內各種の藥草に富み、黄栢、木賊、木通、杏仁、山朵等其他各種あるも調査不充分である。

都邑樣子哨街

樣子哨は金川とも稱し、金川縣公署の所在地である。東、南、北の三方は山に圍まれ、西方は三統河に臨み南北に長橋を架して居る。大同元年から六ケ月間、刀匪の侵す處となり、後治安恢復後市況稍繁榮してゐる。人口一萬三千位の山の中の一小市邑であるが隣縣各城に通ずる道路を有し、交通便利で道路の補裝等もよく出來てゐる。朝陽鎭驛より國營バスの便がある。

樣子哨街諸機關

金川縣公署　稅捐局分局　郵政局　電報局

協和會　興農合作社　警察署　大興公司

縣立醫院　街公所

其他

警察署所在地

涼水河　大荒溝　小金川

郵政局所在地

涼水河子　大荒溝

資料

題名	書名	發行所	發行年月
奉天省金川縣概要	民政部月報	民政部	康、二、一
金川	省政彙覽(奉天省)	國務院弘報處	康、四、二
金川縣の縱横的解剖	大亞細亞(三ノ八)	大亞細亞協會	昭、一〇、八

柳河縣

概史

清の光緒三年に通化縣設治局設けられ、柳河は柳河分防丞を置いて統治されてゐた。光緒二十八年通化縣より獨立し新に柳河縣を設置した。民國元年縣政章則に依り之を縣政體に改編し、二年三等縣に定めて縣公署を置く。十三年南山鎭一區地方を清原縣に分讓した。十四年柳河縣城城壁を修築し、東、南兩方面の地方を金川縣に分讓し、海龍縣の伊統河流域を柳河縣内に編入した。滿洲事變後、軍警の約變及大刀匪の跳梁により、掠奪に會ひ人民塗炭の苦に喘いだが漸次平靜に歸して來た。然し、縣内山岳多く、密林あり、住民は山東其他の流民の集りである上、匪賊の巣窟となるには好適である爲暴威を振つたものである。此爲め、建國となつても尚八ケ月間は全く滿洲國の威令行はれず縣政上非常に困難を極めたものである。その後數次の討伐、治安工作により、治安恢復の曙光を見るに至つた。康德元年十二月の省制改革には奉天省下にあつたが、康德四年七月、通化省の新制布かれるにあたり現在通化省に編入されて居る。

地勢

本縣の東北は金川縣、西は清原、西南は興京、東北は海龍、東南は通化の諸縣に隣接して居る。縣内至る處山岳起伏し、通化、金川縣境には長白山脈の支脈たる龍崗山脈走り、此の支脈の一部は金川縣境より分れ、縣の中央を東北方に貫通し分水嶺をなして居る。西北方に流れるは伊統河、東北に蜿蜒とし

て流るゝものは三統河であつて、流域には各肥沃なる原野をなし、本縣の生命線である。此二大河川の水量は豐富で水利灌漑の便よく將來水田開發に最適である。

縣の物産

縣内山岳多く、平野は兩河の流域わづかに限られて居る。此地方は地味肥沃、耕作に適してゐるが連年の匪賊横行に疲弊しきつて居る。玉蜀黍、高粱、水稻、大豆等であるが、生產高は少ない、煙草、蘇子、麻類等の特用作物がある。

家畜は、牛、馬、驢、騾、豚等であるが、山羊の飼養は最も適當と認められる。何れも耕作運搬用である。

本縣は植林事業には最適と見られるが、匪賊の横行により伐採事業が困難であつた。

縣内金、石炭の產地あり、現在、多少の採掘をなし、縣下各地方の需要にあてゝゐるが鑛質稍良好、埋藏量は不明である。

柞蠶業は主要なる副業であるが、匪害と近年斯界の不況により出產額減少してゐる。

水產は業とする程のものではなく、伊統河、三統河に於ける淡水漁業で、鯰、鮒等がとれる。

都邑柳河街

柳河は山城鎭を距る七十滿里、縣公署の所在地であるが、稍僻遠、人口八千餘を有する小市街である。市街は伊通河に沿ふて細長く街の周圍に土壁を繞し、小城をなして居るが、事變後匪賊に荒され物資缺乏の爲め疲弊し切つてゐる。山城鎭より柳河に至るバスの便がある。又南方火石咀子、東方六道溝に至るバスの便がある。

柳河街諸機關

柳河縣公署　警察署　稅捐局　郵政局

電報局　電話局　興農合作社　中銀支行

大興公司　國際運輸　縣立醫院　協和會

柳河農業學校(省立)　滿人小學校

其他

警察署所在地

三源浦(大興公司もあり)　五道溝　孤山鎮　魚亮子

聖木河子　孤山子

税捐局分所所在地

三源浦　孤山子

郵政局所在地

孤山子　五道溝　三源浦　様木臺子

小通溝　紅石鎮　邊沿鎮　亭通山子

勝水河子　碗口溝子　魚亮子　向陽鎮

通溝

資料

書名	著者名	發行所	發行年月
柳河縣一般狀況	同表題	縣公署	康、四、六
柳河縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、二、一二
柳河	省政彙覽(奉天省)	國務院弘報處	康、四、二
柳河縣農業概説	同表題	柳河縣公署	康、四、
柳河(山田健二)	旅行滿洲(四の一二)	奉天ビューロー	昭、一二、一二

歴史

濛江縣

漢代より唐代までは高句麗に屬し、次いで渤海の所領となり、遼には東京道、金には上京路、元には開元路に屬し、明代より清初にかけては女眞族の勢力範圍であつた。この地は吉林省の南部長白山と偏

爾哈雅範山脈との間に介在する高原に過ぎなかつたが、光緒二十三年初めて墾務局を置いて開墾に着手し同二十四年初めて知州を設けた。民國二年濛江縣に改まり吉長道に屬した。滿洲國の行政區劃に於ては初め吉林省の管轄に屬したが、康德元年十二月より奉天省に屬することゝなり更に康德四年七月新設の通化省に編入された。

地勢

本縣は概ね松花江流域地區にして、東は頭道松花江を以て撫松縣に境し、南は松花江支流陽河を以て臨江縣に界し、北は樺甸、磐石、西は輝南、金川縣に接してゐる。縣內概して高地にして平地に乏しく恰も大いなる盆地の連亙せる感がある。縣城北方に五金頂子山の高峰を望む外甚しい秀嶺はない。但し諸山は縣下諸水の源を養ふと共に、全縣の約二〇%と推測さるゝ濕地を包んで居る。水流は石道河源流を除く外、悉く松花江の支流で縣內を東して流れるものを、北流水、南して湯河及渾河の源流を爲すものを南流水といふ。

之等河川は、其流域に豐富なる森林を養ひ、之より伐り出す材木は流下する河川別により、南流木、北流木と稱せられる。

縣の物產

農產物は他縣に比し耕地收穫共に極めて少く、包米、大豆、陸稻等を收穫の主なるものとし、高粱等は極少量である。然れども人口稀薄、縣內需要を充し、多少の剩餘を生じて居る。

煙草、線麻及び栽培人蔘等の特用產あり、又山人蔘の產出がある。

林地面積至つて廣く、縣公署の推定面積によれば、三六萬町步に達する。林地は湯河裡附近を始め八九ケ所に及び針葉樹、濶葉樹の樹種極めて多い。木材は冬の間(十月—二月)に伐木を行ひ、春になつて市場に搬出する。水路によつて搬出さるゝものゝ中、吉林に至る木材を北流木、臨江、安東に至る木材

を南流木と稱し、陸路朝陽鎭に至るを旱木又は陸木と稱して居る。

林業の副業として狩獵、山貨の蒐集及薪炭製造等有望である。狩獵は獐、狐、貂、狸、虎、熊、鹿、兎等を主とし、其皮革は本縣特産として珍重されて居る。又冬期雉獵がある。山貨は元蘑、木耳の外、各種藥材がある。

家畜として、牛、馬、豚等が飼養されて居る。

鑛產資源として金鑛、石炭、銀鉛、鉛、等見出されて居るがまだ採掘に至つてゐない。

頭道松花江及其支流に、多少の水產を見るが、農家の副業に過ぎぬ刺鯛(鰕類)蛤蟆の特産がある。蛤蟆は蛙の一種であつて、其產卵期に於ける體油は强精劑として珍重される。

都邑濛江街

濛江縣々城、縣の略中央に位し、民國二年縣治を布かれたのであるが、山間の僻地ではあり、且つ多年匪賊の巢窟地を近くに控えて居るためその横行頻繁にして經濟的發展をなす餘地がなかつた。商工業の見るべきものなく、一つの消費地に過ぎない。近來、鑛產の調查等に、入濛する者が多少見られて居る朝陽鎭驛より輝南、濛江を過ぎ撫松縣城に至る國營バスの運行がある。

濛江街諸機關

濛江縣公署	警察署	稅捐局	郵政局
營林署分署	協和會	勞工協會出張所	街公所
其他			

警察署所在地

頭道花園	楡樹川	龍泉鎭

郵政局所在地

龍泉鎭

資料

通化省……24

概史

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
政況……………………	民政部旬刊	民政部	大同二、一一、二〇
縣下學田狀況……………………	吉林省公署調査月報	省公署	康、元、四
濛江……………………	省政彙覽(奉天省篇)	國務院弘報處	康、四、二
濛江縣概況(本田祥三)……………………	民政部月刊	民政部	康、二、二
濛江縣事情……………………	同表題	大同學院	康、二、五
濛江縣誌略……………………	同表題	縣公署	康、元、六
濛江縣……………………	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
濛江縣治政要領(川田佐一郎)……………………	民政部月刊	民政部	康、二、一
濛江縣地圖……………………	同表題	縣公署	康、三、－
濛江縣一般狀況……………………	同表題	縣公署	康、四、四

輯安縣

本縣は元來肅愼族の領土であつたが、凡そ二千餘年前高句麗國始祖鄒矣王高朱蒙北扶餘より來つて現時の山城子に都を定めた。卽ち丸都山城である(現縣城の北方一里)後現時の縣城に首都を移轉し善政を施し强國となつた。後渤海國興り五京十五府六十二洲を建設するに至り、當地方は鴨綠府桓州に屬し、遼代には東京道、金代には東京路、元代には東寮路、明代には建州園に隷屬し、淸代に至つては數回の戰亂に依り、同地方に居住してゐた各種民族は全部他方面に流出し、現時の東邊道一帶は全部森林地化し今の輯安縣城附近は全く荒凉化してゐたが、光緒二十三年當時東邊道地方一帶を勢力範圍としてゐた馬賊大頭目王忠義が此地を占據し、同地方居留民を保護救濟し、一方鮮人の移住を招來して荒廢地開墾に奮鬪したるため人口次第に增加し、二十八年輯安縣を設置した。民國になり行政區劃の變更等があつ

たが、大體從來のまゝにて滿洲建國となつた。事變より建國當時、匪賊の横行甚しく、無警察狀態となり、人民の避難逃走等行はれた事は勿論で、王道政治の威令行はるゝ迄は苦難の時代を經て來たが朝鮮軍の入城により治安恢復せらるるに至つた。建國と同時に安東省下にあつたが、康德四年七月新制通化省設置せられ、現在通化省に編入されて居る。

地勢

本縣東南部一帶は鴨綠江の沿岸で江を距てゝ朝鮮平安北道の四郡に接し、江岸延長三百十五滿里に及んでゐる。西方は寬甸、西北は桓仁、北は通化、東は臨江の諸縣に隣して居る。

縣内殆ど山岳地を爲し、平地は極めて少ない。長白山の流脈は縣界及縣中央に屹立して四大嶺となり更に分裂してゐる。斯の如く、峰巒重疊して鴨綠江及渾江に窮して居るが、其分水嶺の南部地方即ち、國境鴨綠江沿岸一帶を嶺前、北方即ち桓仁、通化の兩縣に接した地方を嶺後といふ。

東南を流るゝ鴨綠江に面する事三百十五滿里、本縣の開發面である。更に其支流の主要なる渾江は通化、桓仁、寬甸と當縣との縣界を流れ、兩岸は嶮峻なる山岳併立し、平地は極めて少いが、夏季は高瀨船の航行を見水運の便多し、其他新開河の沿岸兩岸には水田多く山岳が少い。通溝河の兩岸は嶮峻なる山岳併立し平地がない。

縣の物産

本縣は地形上谷間に少し許りの平地を有するに過ぎず、農産物は少ない。大豆、玉蜀黍、水稻、高粱等を作つてゐるが、他に移出するものは大豆、水稻だけである。

家畜は農家の耕作運搬用で專業に從事する者なく、牛、馬、羊、豚、騾、驢等。

林業、山地多く林業盛な樣に思はれるが開拓以來移民地として森林の保護をなさず、任意に火田開墾せしめた爲め山地は禿山となり、森林はなく、入用の木材すら他縣に仰がねばならぬ狀態である。

水產、鴨綠江より若干の江魚を捕ふる外なし、柞蠶業は民國十年前後まで盛であつたが現在は自家用位でこれが振興策を計つてゐる。

鑛產、縣內の鑛產は調査せられたるもののみにても極めて豐富で、金、銀、石綿、鐵、石炭、重晶石硅石等、各種に亙つてゐるが、現在金は寶馬川に探鑛所を設けて探鑛中であり、鐵は七道溝に一千萬瓩の埋藏あり極めて良質である。

都邑輯安街

縣城輯安は、二千數百年前、高勾麗の首府であつた處で所謂丸都として聞えた所である。高勾麗華かなりし時代には西方の國より旅順、安東を經、鴨綠江六百滿里を逆つて此丸都に貢を奉り使者を遣したものである。縣城附近には高勾麗時代の古跡多く、考古學上の貴重なるものゝ發掘をも見てゐる。街には縣公署を始め各種諸機關も整備してゐる。通化より延長する梅輯線完成し、對岸滿浦鎭へ鐵橋を以て連絡する事になつたから縣內及隣縣の鑛產資源開發と、朝鮮間との交易容易となり著しき發展をなすものと思はれる。縣城より二十五滿里上流の羊魚頭は現在對岸滿浦鎭との間に小舟を以て連絡し、鴨綠江より縣城に入る咽喉をなし、稅關分卡を設けてゐる。縣城よりバスを以て三十分を要す。更に江岸に沿ひて國營バスの開通を見外岔溝まで行つてゐる。

輯安街諸機關

輯安縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
郵政局	電報局	電話局	稅關分卡
專賣局	中銀支行	興農合作社	協和會
大興公司	輯安農業學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校
縣立醫院	街公所		

外岔溝街

外岔溝は安東上流四百八十滿里、輯安縣城下流百二十滿里に位し、對岸は朝鮮の楚山に臨み、縣下第一の碼頭であつて、物資の集散市場として著名な處である。近時附近市場の發達につれ多少衰微の狀況にあるが、依然として呑吐港、貨物中繼港として榮え、又對岸楚山との國境貿易も行はれてゐる。當港位置が臨江との中間にあつて民船の假泊も盛であるから、有望視されてゐる。

外岔溝諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局
稅關分卡　專賣局　電話局

三道溝

三道溝は縣城上流百八十滿里、縣下第一の穀物集散地であつて通化紅土崖、大羅圈溝方面の産物は全部同地に集中し、鴨綠江航運により搬出せられる。

其　他

警察署所在地

楡樹林子　良民甸子　臺上　久財源子
青溝子　頭道崴子

稅捐局分所所在地

三道溝

郵政局所在地

黃柏甸子　楡樹林子　良民甸子　雙岔河
三道溝　林江口　橫路　覇王廟
荒岔溝　太平溝　東崗　羊魚頭
大水濤臺　荒崴子　臺上　花甸子
大東岔　頭道崴子　韮菜園子

電話局所在地

三道溝

資料

題名	書名	發行所	發行年月
輯安縣政況概要(滿文)	民政部月刊	民政部	康、二、四
輯安縣事情	同表題	輯安縣公署	康、四、一
東邊道の祕境輯安(中川惠三)	觀光東亞(四月)	奉天ビューロー	昭、一三、四

安東省

安東省

安東市

略史

安東はさほど古い歷史を持つてゐない、昔は此地方は邊外の地と稱して支那中央政府の威令が及ばなかつた。今の安東の地も小部落に過ぎなかつたが、清の同治年間に至つて山東地方に飢饉があり、爲めに移民は續々とつめかけ來つて附近を開拓したのである。六、七十年以前の事である。明治二十七、八年の日淸戰役を轉機として發展期に向つたが明治三十七、八年の日露戰役に當つては日本軍の兵站の要地となつた。更に安奉線の敷設成つて以來、日本內地人の入り來る者も漸次增加し、漢民族移住も度を加へ、之等の移住民を對照とする商取引並に鴨綠江材の集散地として遂ひに今日の安東市街を形成するに至つたのである。康德四年十二月治外法權撤廢に伴ひ、舊滿鐵附屬地は廢せられて新制による安東市の建設となつた。新制安東市は舊滿鐵附屬地、及滿洲街に、中興街、濱江村、三道鑛街の全部、及び、武營村、靑梅村、大橋村、安民村の一部を包含する廣大なる地域で、鴨綠江上流の東坎子より下流三道浪頭、二道浪頭の下手まで延長約二十粁、面積三千萬坪、鴨綠江に沿つた帶狀の市街を形成するものである。

安東の商業貿易

商業は日露戰役前までは殆ど、支那商人のみの互換取引であつたが、戰後安東が自由市場として開放せらるるに及んで、日本商人の活躍が盛となり、更に歐洲大戰によつて、日本品の進出が益々著しくなつて來た。而して滿洲建國後に於ける、日滿貿易の飛躍的發展により外國商人は殆ど安東より退却し、

工業都市安東

かつ支那よりの輸入も殆んど杜絶した。主要輸出品は、大概鴨綠江上流地方より安東に出廻る物資で、林産物、農産物又は農産物を原料とする加工品である。輸入の主なるものは、綿絲布を筆頭に、砂糖、麥粉、海産物、雜貨等で、近年は全輸入の九割が日本品である。

康德六年中の貿易額は、輸入一二、〇二二萬圓餘、輸出六、〇三四萬圓餘、總計一八、〇五七萬圓餘であつた。對內商業は鴨綠江沿岸各地産出の大豆、小豆、包米、高粱、木材、柞蠶等が何れも安東を集散地とし、これらの土産品に代つて安東より砂糖、麥粉、綿布、石油、日用雜貨等が沿岸各地に移出せられる。沿岸地方の物資出廻り狀況は直ちに安東の市況に消長を描く結果となるのである。

木材の街安東と呼ばれる程に、製材工業は安東の特徵である。鴨綠江採木公司は日露戰役後、日支合辦によつて設立せられ、更に日本人經營の安東製材工場が建設せられた。景氣の消長に伴ひ製材業も種種の變轉を見たが現在十九工場を有し、滿洲建國後は急激なる建設用材の需要のため各工場は全能力を擧げて製材に努めて居る。（鴨綠江採木公司は三十有餘年の功績を殘し期限により康德七年解散した）油坊、柞蠶、製紙は製材と共に安東の四大工業でありその他釀造、ゴム工業、精米、鐵工業、火藥製造、窯業等何れも活氣を呈して居る。

安東は平坦且つ廣大なる大工業地帶を有し、近代化學工業に缺くべからざる動力、用水の二條件に惠まれ、又勞働力も豐富である。動力に就ては日滿經濟提携の趣旨により、鴨綠江水力發電會社の設立を見、第一期計畫として朝鮮側水豐に約六十萬キロワットの發電工事が進捗中で、康德八年末までには全量の發電が可能となる豫定である。將來安東に發達すべき工業としてはこれらの動力と近くの資源とを利用する、苛性曹達工業、硬化油工業、パルプ工業、酒精、製紙等が最も適切に考へられるが、大東

觀光地安東

港工業地帶に延び鴨綠江口に添ひ、一大工業地帶を形成する事となるであらう。

市の東南を流るゝ鴨綠江は、流す筏の趣、大鐵橋の偉觀、上下航する民船等と共に、詩に吟はれ、繪に描かれる景觀である。鎮江山の春の櫻に秋の紅葉も愛でられ、一度山頂に至れば滿鮮の山河、鴨綠江の流れを一望の中に收める。又近くに九連城の戰跡あり、二三十分にして五龍背の溫泉に遊ぶ事も出來る。夏の舟、冬の江上スケート遊びによく、愛でるにおもしろき觀光の地安東ではある。

安東市諸機關

安東省公署	安東市公署	安東縣公署	警察廳 直轄(五) 派出所(三八)
水上警察署	稅捐局及分所(一)	商工公會(省、市)	稅關
安東地方法院	安東地方檢察廳	區法院	區檢察廳
監獄	興農合作社(縣)	興農合作社聯合會	專賣署
郵政局(六)	電報局	電話局	安東放送局
中銀支行	大興公司(六)	興銀支店(三)	國際運輸
協和會省本部	協和會市本部	營林署	
安東第一(農科)國民高等學校(省立)		安東第二(工科)國民高等學校(省立)	
安東第三(商科)國民高等學校(省立)		女子國民高等學校(省立)	安東鑛工技術院
滿人小學校	安東中學校	安東高等女學校	日本人小學校(二)
青年學校	安東外務局辦事處	旅券査證辦事處	安東航務局

(銀行會社)

大安汽船株式會社(準特殊會社)		東邊道實業銀行	株式會社安東實業銀行
株式會社協成銀行	株式會社安東取引所	安東取引代行株式會社	安東石油販賣株式會社

安東貿易株式會社	安東市場株式會社	鴨綠江製紙株式會社	株式會社六合成造紙廠
安東造紙株式會社	滿鮮坑木株式會社	鴨綠江製材合同株式會社	安東製氷株式會社
滿洲飲料株式會社	株式會社安東印刷所	糧穀會社安東支店	生活必需品會社支店
勞工協會支部	勞工協會安東縣出張所	勞工協會市出張所	
安東窯業株式會社	滿洲雲母株式會社	安東產業自動車株式會社	
滿洲鴨綠江航運株式會社	安東土地建物株式會社	大東產業株式會社	安東種苗株式會式
南滿土地改良株式會社	村木洋行(合資)	南滿洲製材公司(合資)	中日捕魚公司(合資)
前田組(合資)	小島組(合資)	清原組(合資)	井原商店(合名)
株式會式中山商店支店	吉田交通株式會社支店	株式會社伊佐奈商店	和興益(合名)

資料

題名	書名	發行所	發行年月
工業地安東	同 表題	安東商工公會	康、六、六
安東特產市場	特產取引事情	滿洲特產中央會	康、四、九
躍進安東	同 表題	安東市公署	康、六、一〇
洋々たる安東の將來(瀨之口藤太郎)	安東經濟時報(一九六)	安東商工會議所	昭、一二、三
大安東都邑計畫の概要	安東經濟月報(六二)	安東商工公會	康、七、五
安東港の建設に就て(堀內一雄)	安東經濟月報(一九)	安東商工公會	康、六、一〇
陸の「門戶安東」市	滿洲國現勢(六年版)	滿洲國通信社	康、六、八
安東誌	同 表題	安東商業會議所	大正九、三
安東に於ける會社及工場一覽表	同 表題	同 前	康、二、一
躍進途上の工業都市大安東の工業條件と本年度の動向展望	安東經濟月報(九)	安東商工公會	康、五、一二

安東及新義州の製紙工業(手島茂)……………稅關(三の三) 關稅協會 康、四、三
安東市街圖……………………同 表題 安東縣公署 康、三、二

安東縣

安東附近はもと茫漠たる原野で、二、三の農民居住するに過ぎない政府の治化久しく及ばなかつた所謂邊外の地であつたが、清の同治年間に至つて山東及び遼東沿岸方面より移住した漁農民により初めて一部落をなし、地名を沙河子又は沙河鎭と稱へてゐた。大沙河が鴨綠江に合流する故にかく名づけられてゐる。其後移民の增加と共に開拓の業勃興し、光緒二年には安東縣衙が置かれ、安東と稱する樣になつた安東の名は唐の安東都護府の地であつた事に起因する。

光緒二十年に日清戰役起り、日本は民政廳を置いたが、和議成つて之を撤廢した。それより迅速の發展を成し、地方物産の集散地となつた。次で光緒三十年(明治三十七年)日露役起るに至つて、我日本軍は兵站の要地となし、軍政を布き、軍用輕便鐵道を敷設した。

明治三十九年軍政を廢し、翌年支那側は此地に道署を移し、安東縣は東邊道の一縣となつてゐた。安東を中心に安奉線の敷設、朝鮮との連絡も鐵橋落成と共に容易になり、交通盛に又人口激增して事變に至つたわけである。安東省に屬し、安東は縣政及省政の中心である。

安東省の東南部は朝鮮國境にあり、鴨綠江を隔てゝ、義州郡に對し、東北は寬甸、東南部の一角は黃海に臨み、他は鳳城縣を以つて圍まれてゐる。

北部は山岳丘陵に富み、平蕪地は僅かに河川の流域にすぎない。風景を以つて聞える五龍山、元寶山

鎭江山等の山あり、東南國境の鴨綠江は安東發展上の重要なる存在であり、尙其支流靉河も流域地味肥沃、かつ木材の產出多く、航運盛んに行はれる。

縣の物產

縣內は山地は多いが、耕作よく行はれ、畑地、水田共有望であり、農產物も比較的豐饒である。大豆其他豆の類、高粱、玉蜀黍、水稻、陸稻等を主とする。其他煙草、麻類、棉花、柞蠶等の特產あり。

畜產は農家の副業として行はれるのが多い。牛、豚、馬、騾、驢何れも、相當數を有して居り、羊の飼養も行はれてゐる。

縣內の立木地二千六百陌、濶葉蓄積量二十二萬一千立方米、靉河により安東に伐り出され、又安奉線沿線のものは多く坑木として需要されて居る。鴨綠江を流下する筏は安東に於て陸上げを成し、製材せられるために、安東は木材の街として有名である。鑛產又豐富、金、金銀、滑石等調査せられてゐるが出願せられたるものは多數に上り、安東市の近くにも金鑛が見出されてゐる。

水產業、鴨綠江の水產物は鯉、鯰を最多とし、鰻、蝦、シラウヲ、鰡、スツポン、鱸、鮒、ハゼ等、之等の魚類は生のまゝ或は適當に加工されて鮮滿各地に搬出されてゐる。

開拓事業

本縣は特產煙草の生產に有望な處であるため、滿拓公社では、康德五年度より煙草開拓民の入植を始め蛤蟆塘、老古溝、五龍背、湯山城及び鳳城縣高力橋に入植せしめて居る。

都邑九連城

安東より上流十三粁、安東よりバスが通じてゐる。昔は蘭甸と稱し、此處に九城を連ねて高句麗と對戰したといふ舊跡がある。日清役の古戰場として、又日露役には黑木軍激戰地として名高い。東北高地に戰蹟記念碑があり、朝鮮新義州よりも望見される、附近は夏季に於ける鮎釣場として名がある。

大東溝街

安東より下流二七浬にあつて鴨綠江口に面する港である。然し、錨地より江岸までは泥地で滿潮時漸

く小型戎克を通じ得るに過ぎず、埠頭及撃船設備もないので大型汽船は全く碇泊せず、大安汽船會社の定期船又は其他の小型船舶も、趙氏溝附近に停船してゐる。一九〇三年日支條約によつて開港場とし海關を設けたが貿易不振の爲閉館した。大東溝は天然の貯水池を構成してゐるので、日露戰役以前には木材市場として繁榮し、又安東西南水路の要衝として重視せられたのであるが、其後安東港の發展に伴ひ過去の繁榮を全く失ひ現在に至つてゐる。

安東より當地を經て大孤山莊河方面に至る沿江バスの便があり、又大東溝、龍王廟間にもバスの便がある。

大東溝街諸機關

警　察　署　　稅捐局分所　　商工公會　　郵　政　局

稅關分卡　　電　話　局　　大東溝海邊警察分隊

大東港の新建設

大東港は康德六年六月より新に建設に取かゝられた滿洲唯一の海港たらんとするものである。即ち安東の下流、陸路三十粁の地點に現在趙氏溝といふ小部落があり、其下流に前述の大東溝がある。其邊り一帶に新大東港が建設せられるのである。

滿洲國は此處に港を建設して輸出良港たらしめんとし、臨江重要の工業地區を建設し、二十年後人口四十萬或はそれ以上の大都市を出現せんとしてゐる。東邊道地方の鐵、石炭、金を始め、種類、鑛量共に豐富なる鑛産資源及林産、農産、水産資源等を原料とし、鴨綠江水力電氣を原動力とし、各種大工業を興し、其生産品は直接海に面した當港より海外に向け搬出せんとするものである。

康德六年六月一日より既に大東港建設局が安東に設置せられ、安東省次長は建設局長を兼任し、滿鐵の大東港溝及び埠頭建設と合同して大東港建設總署とし、當港建設に着手せられて居る。すでに滿洲國

及日本より大會社の進出せんとするものがあり、土地買收申込みを爲してゐるもの六十數社に及んで居るといふ事である。大東港を中心に背後地接續街村の出現も見る可く、こゝ數年の內に、大東港の建設は着々と進涉し、滿洲國唯一の不凍海港が建設される事であらう。前述の安東港は流出土砂の關係にて河底が常に淺くなり、大船を入るゝ事が出來ず、現在非常に不便な荷上をしてゐるため、大東港の出現は安東港の缺陷を補ふに十分である。康德七年に入り、大東港は安東に合流する事に決定せられたから沿江一帶に涉る大工業都市が出現する事になる。尙現安東との間に高速度電車も架設される豫定になつてゐる。

三道浪頭

三道浪頭は安東より下流六浬にある。鐵橋附近の安東港內は淺瀨が點在して大形船の入港が困難であるために、安東入港の航洋船は何れも三道浪頭に投錨するので、事實上安東港の外港を形成してゐる。故に三道浪頭には、安東稅關分館、水上警察局分局が置かれてゐる。江岸は干潮時水深一四呎―一五呎を保ち、二千噸級汽船四隻を同時繫船し得る護岸であつて、船舶出入が多い。

安東より國營バスの便があり、又龍王廟にも通じてゐる。

三道浪頭諸機關

稅捐局分所　稅關分卡　電話局

龍王廟

黃海沿岸に流入する大洋河の河口より稍上流に位し、舟運陸道の便がある。大孤山と共に海岸線方面に於ける唯一の都會であつて、人口三千餘を有し、鳳城縣南部及び岫巖縣の物資は大約此の地を通過し船にて安東に出る經路を踏んで居る。事變後鄧鐵梅匪の根據地となり荒廢其の極に達したが、大同元年十二月日本軍此地に駐屯して以來、舊態を復し今は事變前を凌ぐ有樣である。航運の便あり、特產物、農產物の集散地である。

龍王廟諸機關　警察署　税捐局分所　郵政局　電報局

五龍背　電話局

溫泉として有名な處で滿洲三溫泉の一つである。驛の北約三丁の處にあつて湧出量豐富、無色アルカリ性で皮膚病、神經痛、リウマチスに特効がある。滿鐵經營の旅館が二、三ある。

安東よりバスの便があつて、遊覽に好適地。

五龍背諸機關　郵政局　電報局　電話局　其他

警察署所在地　湯山城　鐵甲房身

郵政局所在地　湯山城　馬市臺　蛤蟆塘　紅石砬子

委託日本人小學校　安定

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
安東縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
大東港工業地帶の設定と東邊道(福澤如介)	安東經濟月報	安東商工公會	康、七、四
大東港と寶庫東邊道	同　表題	滿洲事情案内所	康、七、四
安東縣農村實態調査報告(安東省公署)	產業部月刊(一の二)	產業部	康、四、一二

鳳城縣

概史　明の成化十七年鳳凰城を築く。清の崇德三年鳳凰城に兵を移駐せしめ、康熙二十六年滿漢蒙の三族を關內より移住せしめ、又光緒元年に鳳凰直隷撫民廳を置く。初めて州を分ち、廳を置き茲に自治形體を

備へ、民國二年二月鳳凰縣と稱し三年一月鳳城縣と改稱、同年六月東邊道に屬してゐたが、民國十八年遼寧省政府に屬した。民國二十年滿洲事變勃發してより建國に至る約半歳は苦難の歷史であつた。日本軍によつて事變後直ちに鳳城縣城を占據せられたけれども警察機關なく縣下騷擾雜然としてゐた。同年十一月自治指導員氷鉋氏入城し、決死的氣慨を以て縣政の收拾に努力し、次で相次ぐ指導員により建國の礎石に動きなき堅めを築かれたのである。建國以降縣內の情勢は自治指導員の献身的努力によつて、漸次秩序が囘復されたのであるが、混亂に混亂を重ねた後の事とて討匪に對する努力の爲め縣の財政極度の窮乏に達し、政治匪鄧鐵梅の暴虐は如何ともなし難い狀態であり遂に、友田參事官を始め六名の官吏は彼の爲めに憤死するに至つた。大同元年十二月、日本軍及滿洲國軍の大討伐により漸く鄧匪、群小匪等影を沒し王道の光に浴するに至り建國眞精神は漸次民間に及び、討匪に費したる財政は勸業の費に充てられるに至り、現在は全く王道の惠澤を享くるに至つて居る。

地勢

本縣は東及東北は寛甸縣に、西及南は岫巖縣に北は本溪縣、東南安東縣、西南は莊河縣、西北は海城遼陽兩縣に接してゐる。

縣の中央南北に安奉鐵路縱貫し、文化の風潮此より運ばれる。南黃海に臨み、加ふるに靉河、洋河、草河の清流全縣を潤し、西北の山岳重々として、巫山十二を忍ばしむ。殊に鳳凰山、帽盔山等、或は高く或は低く峻々峨々として遠く連る。山脈中、遠脈は東方長白縣より、近脈は北方分水嶺（本溪縣境にあり）より來り西北より東南に走る。其山容實に奇岩妙石を以つて成り、千岩萬石甚だ複雜を極め、即ち五十九山六十七嶺、四岡十二谷を數ふ。河流に靉河あり、唐時代には烏骨江と稱せられてゐたもので、寛甸縣西柏林川に發し、全長四百滿里、遂に流れて鴨綠江に注いでゐる。次に本溪縣分水嶺に源す

る草河がある。上流を二道河、中途下つて頭道河と稱し、其の行程三百九十滿里、藍旗嶺に至つて靉河に合す其他に大小の河川十九を算す。

縣の物産

本縣の重なる農産は高粱及包米であつて、大豆、粟、稗等が之に次で居る。特殊農産として煙草の栽培年十萬斤に及び又柞蠶も重要なる産物である。靉河沿岸、大洋河沿岸は豐穰なるため水稻の耕作が盛で半島人が之に從事してゐる。本縣内の氣候風土は殖林に最適で落葉松、河沿地方には白楊を最も佳としてゐるが調査未了である。鑛産は大理石、石炭、鐵、砂金、鉛鑛等各種の鑛産に富んでゐるが調査が出來てゐない。現在着手せられてゐるものは、青城子鑛業所で、青城子附近一帶に跨り優良なる銀、鉛鑛を生じ、安奉鑛業株式會社の經營するところである。

都邑鳳城街

此地は鳳城縣の中央に位し交通の中心地として古くより道尹があり、東邊道鎭守使署があり政治商業の中心として東邊道一帶に臨んで居る。日露戰爭後安東の急激なる發展を見るに及んで殷盛を奪はれたけれども安奉線の一中心として岫巖、寬甸を東西に繼ぐ中繼地點を爲して居る。古蹟名所も隨所に見られ水質良好、風光亦明媚遊覽の好適地である。滿洲事變後漸次治安恢復するに伴ひ日を追ふて舊に復し鳳城から大孤山、黄海沿岸に至る國道建設の完成を見益々發展の途をたどつて居る。

此地は康熙年間鳳城の地に城を修造し、田野を開き四民漸く集り來るやうになり、光緒初年始めて廳を以て治め州を轄つて規模を具へたのである。安奉線敷設せられて交通頓に開け、民國年間新に新制改まるに及び、卽ち民國元年鳳凰廳を改めて鳳凰縣知事をして統治せしめ、民國三年鳳城縣と稱する事となり當地方が次第に發展して來たのである。康德四年十二月一日、新街制施行と同時に、治外法權撤廢及滿鐵附屬地行政權移讓に伴ひ、現今の大和區を接收し、大鳳城街を形成するに至り、指定街となつた。

安奉線による交通が主であるが南方海岸方面へは孤山街に通ずるバスの便がある。

鳳城街諸機關

鳳城縣公署	街公所	警察署	稅捐局
商工公會	區法院	區檢察廳	郵政局
電報局	電話局	興農合作社	中銀支行
專賣局	大興公司(一)	國際運輸	協和會
國立鳳凰城煙草試驗所	鳳城師道學校(安東省立)	鳳城(農科)國民高等學校(省立)	
鳳城女子國民高等學校(省立)		滿人小學校	日本人小學校
青年學校	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所	電業出張所

鷄冠山諸機關

稅捐局分所	郵政局	電報局	電話局
青年學校	日本人小學校		

草河口諸機關

稅捐局分所	郵政局	電報局	電話局

其他

警察署所在地

石頭城	靉陽	通遠堡	紅旗街
松樹咀	石廟子	大營子	

稅捐局分所所在地

北井子	通遠堡	劉家河	邊門口

稅關分卡所在地

北井子	黃土坎

郵政局所在地

黃土坎	北井子	黃花甸子	青城子
劉家堡	大堡	石頭城	高麗門

通遠堡　秋木莊　四臺子　東湯
雙陽　湯作城　白旗　拉古溝
石柱子　沙里寨　尖山窰　四門子
紅旗街　大東溝　青苔峪　山咀子
三家子　黃旗街

電報局所在地

劉家河　高麗門　通遠堡　秋木莊

委託日本人小學校

湯山城

資料

題名	書名	發行所	發行年月
鳳城縣事情	同表題	縣公署	康、三、五
鳳城縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	大同三、二
鳳城縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
鳳城縣	滿洲國地方事情(一)	大同學院	康、元、四
鳳城縣區村地圖	同表題	縣公署	康、三、一
鳳城縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
鳳城街事情	同表題	街公所	康、六、一〇

概史

岫巖縣

岫巖縣の地は金、元の時代は蓋縣に隸屬してゐたが清の康熙三年蓋平縣に屬し、奉天府の管轄する處

となり後岫巖縣と改稱せられた。民國二年更に縣治せられ岫巖縣として、縣城を岫巖と定めたのであつた。民國時代は奉天省に屬してゐたが、康德元年十二月省制改革により、安東省に編入せられ現在に至つて居る。

地勢

本縣は三角地帶の中樞に位置し、治安の癌といはれた處である。交通の至難から外部との交渉が極めて少く、土民の水準極めて低く、舊來の傳統的習俗を固守した儘で今日に至つてゐる狀況であり、半官半匪の政治が行はれてゐた處であるから、大同元年八月、東北僞勇軍が日本軍の攻擊を開始した時、時の縣長も、警察官、自衞團、莊河の匪團三千以上を率ひて叛旗を飜した。直ちに日本軍の總攻擊を受けて山中に逃走したがその匪賊が殆ど縣民であり、縣長に對する縣民の信用は重く、匪賊の家族は縣内に殘つて居るといふ狀態で、治安工作及宣傳工作には、初代參事官及指導官は、縣民全體を匪賊と見て工作を進めねばならない狀態であつたから少なからぬ苦心が拂はれたのであつた。更に財政整理、縣民所有土地の整理等に至つては、從來の政治方法から、新國家形態に改變し、縣民に建國精神を了解させるまでの工作はとうてい他縣に見られない樣な苦心が拂はれたのであつた。

本縣は略直角三角形をなし、其最長邊にあたるところの東北邊は鳳山縣との境であり、南邊は莊河縣西邊は蓋平縣と海城縣に接して居る。西境は山岳地帶をなし、山岳重疊して分水嶺をなし、縣内全部も幾多複雜した山岳、丘陵地帶が多く、只東洋河の流域に狹い面積の平野があるにすぎない。

縣の物產

縣内の八割は山岳地帶を以つて占めてゐる。本縣としてはわづかの耕地に農產が行はれるにすぎない。米、大豆、高粱、玉蜀黍、穀類等產出するが、縣内需要を充すに足りない有樣である。家畜は牛豚が最も多く、驢、騾、山羊、馬等、耕作用、運搬用にするにすぎない。

郡邑岫巖街

林業は立木地帶として一三、五〇〇陌、濶葉樹蓄積量一、一四七、五〇〇立方米を有してゐる。本縣は柞蠶業が盛で、濶葉樹も其爲に利用されるものが多い。

鑛産資源は金、銀、鉛、鐵、石綿等の出願を見てゐるが、着手せられたものはない。

柞蠶業、耕地少き本縣の産業としては山地を利用する産業を選び、柞蠶業は從來最も主要なる産業であつた。その産額も、七〇萬圓乃至、百二十萬圓にも及んでゐたが不況のために斯業は大打撃を受けたのであつた。然し將來本縣産業のために柞蠶業を盛にする事は縣財政を救濟する道である。近來纖維不足を來し柞蠶に資源を求めんとする者多く、本業は最も有望である。

民國二年岫巖縣設置せられ縣城となつたものである、大洋河に臨み鳳凰城には東一八〇滿里、大石橋には西二〇〇滿里、本街は今より二百四、五十年前に築城したもので、其規模極めて狹小周圍僅に一滿里餘にすぎないが、三門を有してゐる。城内は主として官衙其の他の附屬機關等に占められ僅かの小商店があるにすぎない。而して市街は城外にあつて南北一滿里、東西半滿里餘である。商業區は南北の兩街で稍繁盛であるが、一般市況は微々たるものである。

商品は一般農産品、柞蠶、豆粕、燒酒、雜貨等である。

事變前は山國なる故に交通極めて不便であつたが、最近道路の修築成り、國營バスの便が大いに開けてゐる。即ち、西北方は海城、大石橋街に出で、南方は莊河大孤山に出てゐる。又民營バスは岫巖より東北方、安奉線、草河口驛に營業してゐる。大連、岫巖、安東間に航空路開け、從來の山の中に封ぜられたやうな岫巖とは大いに面目を新にしてゐるのである。

岫巖縣公署　警察署　稅捐局　商工公會

區法院　區検察廳　興農合作社　中銀支行
郵政局　電報、電話局　街公所　專賣局
電業營業所　勞工協會出張所　縣立蠶業試驗場（第一區城西眞武廟處にあり）
岫巖（農科）國民高等學校（省立）　岫巖女子國民高等學校（省立）　滿人小學校　日本人小學校

其他

警察署所在地

哨子河　龍王廟　石佛崖　王家堡子
石灰窰子

郵政局所在地

蘇子溝　關門山　徐家牌坊　紅旗溝
大偏嶺　小木古峪　大嶺　花紅峪
瓦房店　龍鳳峪　哨子河

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
岫巖縣全圖	同表題	縣公署	康、三、一
岫巖	省政彙覽（安東省篇）	國務院情報處	康、三、九

概史

荘河縣

荘河縣はもと岫岩州に屬して極南の濱海地區である。初めは紅崖子と稱してゐたが荘河の流下する處より、荘河と名づけた。清の光緒卅二年設治し、荘河廳といつた。又海防撫民も同時に設け、大孤山分

司も岫岩より離劃して併合し石城島分司をも併せ民國二年廳を改めて縣となし、三年東邊道に屬してゐた。民國十八年には全縣八十三村を以て一縣としてゐたが、大同二年八十一箇村に併せて莊河縣となした事變當時は濱海邊區の事とて何等の波動がなかつたが、大同元年三月に至り、二千餘の匪賊襲來し、當時の縣長王純古は死守して退かず激戰二晝夜に及んだが、衆寡敵せず殊に飲料續かず城は陷つてしまつた。直ちに日本軍飛行機來り、更に日軍入城して王縣長以下を救ひ出し、秩序恢復した。康德元年十二月本縣は安東省に屬し、以後縣政日に正しく進み本日に至つて居る。

地勢

本縣は背後に山をめぐらし、前面は海に臨み全縣の形牛角の如く、東は鳳城縣に、東北及北は岫巖縣西北は蓋平縣西は復縣に境し、西南は關東州に隣りしてゐる。

山脈は岫巖より來り、南北より南に走り二脈に分れてゐる。東は高嶺山脈、西は步雲山脈である。更に其支脈が、五、六脈に分れ、小支脈を出してゐる。

河流は大體山脈縱亘に從つて、大小の河流縱に流れ主なるものは、大洋河、小洋河、碧流河、大沙河等であり何れも南流して海に入る。

縣の物產

農產は、大豆、玉蜀黍、高粱、粟、稗、水稻等を主とし、小豆、糜子等をも出す。大豆、小豆、綠豆稻等は他に移出してゐる。又落花生の產出多く、柞蠶をも出し殆ど他に移出してゐる。

森林は縣有に屬するもの二箇所、針葉樹林あり、面積四千方滿里に及ぶが伐採はしてゐない。他に小面積の一區があるが樹齢尚淺い。又天然樹林多く赤松、赤楊、柳、楊、柞、、櫟等の種類で、以前柞蠶業が盛であつた時代に、人民が多く伐採して柞樹を植えかへた。現今殖林に努力してゐる。

家畜は牛に豚が多い。驢、騾、馬等、家畜家禽の外に、野棲の兎、狸、狐、雉、狼、猪等がゐる。

鑛業資源は未だ、發掘の運びには至つてゐないが金、鉛鑛、鐵等の埋藏がある。

水產業、海岸に面し魚類豐富である爲め、水產業はかなり盛である、大體四區に分れ花園口、莊河、青堆子、大孤山であり、此四箇所には、各漁業組合があつて、水產局の指揮の下に行はれて居る。春秋の二季が出產の主なる時で大刀魚、黃花魚、鮫魚、鰆子魚、牡蠣、海參、及蝦蟹等の類であり漁業に從事する者、一千二百六十戶以上を越え、尚農業兼業する者十五戶がある。漁獲類は前述の外多種に及んでゐるが、大獵あるものは、大刀魚、毛蝦の類であり、大刀魚は滿人間の需要多く、縣內の需要を充し、更に移出してゐるが移出額は不明である。魚類の外海鹽を產する事又多く、近く工業地帶の出現に備へて工業上重要物產である。

開拓事業

本縣干家屯に康德六年日本の煙草開拓民が入植してゐる。

都邑莊河街

莊河縣城であつて莊河の海に流入する處右岸に位してゐる。面積八方滿里、光緒三十二年に岫巖より割出して設治して以來、市內稍繁榮し、民國二年廳を改めて縣とし、十一年各機關を設置して以來、學校、社會事業等興り、戶數現在にては一千七百餘戶、人口九千八百を越えてゐる(康德六年六月末)民風極めて質樸、商舖大小四百戶以上を有し、雜貨業多く、藥屋、飯店、燒酒屋、旅館等が主である。工業も小規模に行はれてゐるが種類は多い。

莊河街は北海岸地方に於ける交通の中心地であつて、鐵道はないが國營バスは半島を橫切つて蓋平に又北方山地帶の岫巖方面に、又西には貔子河方面、東には安東まで通じてゐる。

莊河街諸機關

莊河縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局

孤山街

孤山街部落圖

電話局　　興農合作社　　中銀支行　　專賣局
協和會　　稅關分關　　莊河農科國民高等學校(省立)　街公所
莊河女子國民高等學校(省立)　　滿人小學校　　日本人小學校
生活必需品會社配給所　　勞工協會出張所

從來大孤山と呼ばれ安東の下流鴨綠江口に近く黃海に面してゐる。背後に標高三六四米の風光明媚なる大孤山を控へ、數百年の歷史を有する舊都商業地である。滿鐵の大連中心主義と、安東港の新興とは大孤山を衰微に導くに至つたが、三、四十年前までは、此地方の農產物を集散し、雜貨を供給し、南支那方面との貿易もあり、戎克貿易盛であつたが港の不備は現代的港灣に適せず、加ふるに支那との貿易は滿洲建國後は特に關稅問題もあつて殆ど杜絕の狀態にあるため、今日殆ど地方的中心地たるに過ぎない市內に崇正女學校と稱するデンマーク婦人の建てたる女學校あり、生徒も多數收容してゐる點、又、日語を學ぶ者著しい點等、街として一異彩を放つて居る。大洋河以西一帶は平坦なる大平野で水田耕作地として有望視され、現在半島人の移住する者多く、更に同種開拓民の計畫もある。

名刹聖水宮には諸佛と共に、定部仲磨の位牌を祀つて居る。

康德五年街制を布き現在孤山街と稱してゐる。

交通は莊河と同樣國營バスの便であるが、北は鳳城、西北は海城及大石橋に東は安東、西は莊河方面に長距離のバス運行が開けてゐる。鴨綠江上は、大安汽船會社の汽船が安東より大東溝を經て、此地まで旅客輸送を行つてゐる。

警察署　　稅捐局分所　　商工公會　　郵政局

青堆子街

電報局　專賣局　税關分卡　電話局
大興公司　大孤山(商科)國民高等學校(省立)　滿人小學校

青堆子は莊河と大孤山の中間に位し、又南河川に臨んで直ちに黄海に達する爲めに船舶往來し、もとは皆此地に集つたものである。故に市鎭を設ける必要を生じ乾隆時代に市鎭を設けられたのである。現在船舶數は減少してゐるが尚人口九千八百以上を有し(康德五年末)商舖二百二十を數へ、縣城、大孤山と共に本縣の三邑鎭である。

青堆子街諸機關

郵政局　電報局　警察署　税捐局分所
税關分卡　電話局　日本人小學校
其他

警察署所在地

平山　明陽　桂雲　塔嶺
青口　龍王廟(水上派出所)

税捐局分所所在地

曲家山

資料

題名	書名	發行所	發行年月
莊河縣一般狀況	同表題	縣公署	康、三、一
莊河、大孤山	省政彙覽(安東省篇)	國務院情報處	康、三、九
莊河縣概況(滿文)	民政部月刊	民政部	康、元、一二
政河縣地圖	同表題	縣公署	康、三、一
莊河縣產業經濟事情及打拉腰子築港に對する意見(山野井四郎)	滿洲交通(二の三)	交通部	康、四、一〇
莊河縣一般狀況(康德三年度)	同表題	縣公署	康、五、一

寛甸縣

高句麗渤海時代には地方に九城を構築してゐた。現今其の遺跡として殘つて居るのは、九連城、湯山城、安東城、桓都城、輯安城、寛甸城、團甸城、長甸城、蘇甸城である。

明の萬歴時代の六甸を駐六の地とし總督參將各一員を置き之を守らせた。清時代となり太祖の始め、撫順、清河、寛甸、靉陽の四關にて產出品の人參、藥草等を以て明と互市を開始し爾來始めて寛甸の名稱が世に知られる樣になつた。

同治十三年朝廷より開墾を許され住民增加、光緒二年に至り始めて縣治を布くに到つたのである。寛甸縣城は萬歴三十六年の建築に係り東門を安阜と稱し、西門を服遠と稱し、光緒二十七年縣知事大に縣治を改革し、諸政漸く緒につき治蹟見るべきものがあつたが、張家の暴政時代に至つて民治亂れてゐた。滿洲事變後、大同元年七月縣長の赴任を見て以來、日本軍の援助と協和會の努力及東邊道復興工作の進捗により、縣政漸く整ふに至つて居る。安東、寛甸間の自動車道路も完成し、更に東邊道鐵道の計畫もあり、治安回復と共に益々民政盛になりゝある現狀である。

縣內中央を彰璧山脈江岸方面に向つて走り之より支脈四方に岐れ縱橫に連り蒲江河、長甸河、靉河上流、渾河支流等の各沿岸に狹まれ耕作地方が散在してゐる程度で、殆ど平地らしいものなく、通路は山谷の溪流に沿つて開かれ大車は江岸の山丘相連る間を縫つて交通する有樣である。

縣內一般山居多く、農民は山腹を利用して耕作して居る。大豆、小豆、包米、高粱等、鮮農によつて水稻が多少耕作されてゐる。縣內立木地一五、七〇〇陌、立木畜積量濶葉樹一、三三四、五〇〇立方米と

都邑寛甸街

調査されてゐる。

縣内鑛産の埋藏多量と見られてゐるが、調査が充分でない樣である、金、金銀、銅、石綿、其他鐵、鉛、石灰石等が有望である。商業は長甸河口、小蒲石河により、水運を利用して取引が行はれる。

此地は寛甸縣の稍中央にある。寛甸平原の盆地に位置し東北に娘々頂山を背負ひ、鳳凰城を東約八十滿里、鴨綠江々岸を距る北一百滿里にある。縣治は明の萬歴三年に寛甸堡を設け方一里の城壁を築き戍兵を置き東邊防守の任に當らしめた。後清朝に至つて互市場となり人蔘、毛皮類の取引市場として一時隆盛を極めてゐたが、其後封禁の制破れ移民續々入城し、光緒三年縣治となり鳳凰城、直隷廳に屬し縣城は其後土匪の亂に遭ひ城を燒かれ、日清、日露の役には日本軍が駐屯して居た事もある。その後隣境土匪の災があり、市況昔の如く振はなくなつたとはいへ雜貨商一〇九戸を有し、木材製造業一〇、米穀製造業三、蹄鐵工業五、油房二、其他の工業がある。

縣内山多く交通が發達してゐないが、將來、通化、桓仁より此地を經て安東方面に出る縱貫鐵道の計畫がある。現在國營バスはないが、民營バスが桓仁方面、安東方面、更に賽馬集より草河口驛まで通じてゐる。又南方長甸河口へも出る事が出來る。

寛甸街諸機關

寛甸縣公署	警察署	稅捐局同分所（二）	商工公會
檢察廳	郵政局	電報局	電話局
專賣局	興農合作社	中銀支行	大興公司
寛甸（農科）國民高等學校（省立）		滿人小學校	日本人小學校
勞工協會出張所	協和會	柞蠶株式會社	街公所

長甸河口

安東の上流四八浬鴨綠江の右岸に位し、小山を負ふて長甸河に臨み、江を隔てゝ朝鮮側の清城鎭に相對する。五十餘年前までは僅に二、三の農家があるのみであつたが、安東の發展によつて從來鳳凰城を經由して奥地に入つてゐた物資が、鴨綠江の水運を利用して上航するに至り漸次發展し、現在では寛甸方面と安東との中繼市場として重きをなして居り、寛甸南部の重要なる埠頭となつてゐるが、夏季は增水時に、デルタ型の獨立孤島となる事がある。大安汽船會社の江上汽船は上流地方は安東より此地まで航行してゐたが水豐發電所のため此頃は更に上流拉古哨まで航行してゐる。

長甸河口諸機關

警察署	郵政局	電報局	專賣局
税關分卡	電話局		

小蒲石河

長甸河口と同じく、安東の發展に伴つて發展し、現今では鴨綠江岸有數の碼頭である。對岸は朝鮮側の昌城郡私倉里で、背後に小山を負ひ、附近一帶は山地帶であるが、太平哨、桓仁方面に道路が通じ人馬の往來が頻繁である。而して同方面との中繼市場として重要なる地位を占め商取引の如きは長甸河口に比して多額に達すると謂はれて居る。

小蒲石河諸機關

警察署	税捐局分所	郵政局	電報局
專賣局	税關分卡	電話局	

太平哨

光緒二年頃より附近農村の生產物及び需要品の集散地として發達した。渾江口を遡ること一二〇滿里の地に位し、東北に峻嶺を背負ふ、安東の發展に伴つて商取引盛になつてゐたが匪襲のため街の大半を燒失した。地方交通の要衝に當り物資の中繼市場として將來發展の見込みがある。

其　他

警察署所在地	雙山子	牛毛塢	太平哨	石柱子
	楊木川			
郵政局所在地	毛甸子	牛毛塢	太平哨	
	不大遠	白菜地	大荒溝	石柱子(電話局もあり)
	大青溝	碾子溝	雙山子	羅圈甸子
	葡萄架嶺	上蒿子溝	大川頭	下漏河
	泡子沿	夾皮溝	永甸河口	長甸城
	樺樹甸子	古街子	古樓子	楊木川
	縣羊砬子			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
寬甸縣の概要	同表題	安東商工會議所	大同二、一
寬甸縣	滿洲國地方事情(一)	大同學院	康、元、四
寬甸縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	大同三、五
寬甸縣經濟調查報告	東邊道、寬甸、輯安、桓仁、通化各縣經濟調查報告書	安東地方事務所	昭、八、九
寬甸縣一般狀況	同表題	寬甸縣公署	大同二、六
寬甸縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
寬甸街事情	同表題	街公所	康、六、一〇

桓仁縣

概史

洪武四年、舊制を革め遼都衛を置き、六年遼陽府縣を設置す。十年都衛を改めて遼東都指揮使司と爲

す。東寧衛に屬してゐた。もと興京に屬してゐたが、興京は清朝發祥の地である爲めに、光緒以前にあつては封禁甚だ嚴しく、光緒二年に至り、盛京將軍崇實によつて此邊境の地を開放すべく奏請し乃ち懷仁縣治を設けた。民國に至り懷仁の名稱は山西省のそれと同名なるを以て改めて桓仁縣と稱し、奉天省東邊道に屬してゐた。滿洲事變により滿洲建國せられて以後、康德元年十二月の省制改定により、安東省に歸し以て現在に至つて居る。

地勢

渾江流域にあつて東は掛牌嶺を以つて輯安縣に、西は當壽嶺によつて興京縣及び、新開嶺によつて本溪縣に、北は崗山嶺にて通化縣、南は丈嶺を以て、寛甸縣に界して居る。斯の如く縣境には山岳連亘し縣内は盆地となつて居る。管内を貫流する渾江は幾多の支流がある。卽ち、富所江、大雅河、六道河、裡溝河、横路河等の河川で渾江本流を除けば舟運の便は乏しいが、之等諸川の河畔には相當の平地があつて農耕地として有望である。

縣の物産

縣内山多く、全體から見れば耕地は全面積の二割位であるが、盆地をなし、河の流域は比較的肥沃な土地で大豆、其他豆類、高粱、粟、玉蜀黍、水稻、小麥、大麥等を產し、蕎麥等も作つて居る。又人蔘の產もある。

本縣の林業は代木以來すでに、數十年を經過してゐる爲森林地として著名であつた。各地は用材に適するものは悉く伐採して、現在では用材に適せざるものか又は伐採に困難な地方が殘存して居る。林野面積二七一、五一九・七陌、立木蓄積量一、八一〇、五〇〇平方米と調査されて居る。

鑛產は石炭、金、鉛、鐵、石綿、銀等で、開發される域に達してゐないが、金は最も有望であると見られる。

都邑桓仁街

商業は渾江によつて、安東との間に取引せられ、土產を出して、日用雜貨を購入してゐるが、東邊道鐵道完成の曉は、安東、寬甸通化との陸上短距離となり、商業上活氣を呈するものと期待される。

桓仁は六道溝と稱し、桓仁縣公署の所在地であつて、縣の稍中央に位し、安東の東北四百八十滿里、鴨綠江岸外岔溝の北百十滿里、奉天の東南四百四十滿里の地にある。渾江は縣城附近に於て著しく彎曲し、江流は北門及西門、南門外を緩流して居る。北門外渡場には小丘があり之より城內一帶小丘が連亘し、又市街は城內及城外にあつて、城內の外圍壁は破損の爲めそのまゝになつて城廓の跡のみになつて居る。

東門內には店舖はあるが、商業地としては城外の東關大街及南關大街、北關街等である。

四圍は盆地であつて城內には主要官公署があり壁外の日貫街は比較的建物整備し、本縣行政の中心たると共に經濟の中樞をなして居る。

桓仁附近は盆地となつてゐるが、他縣から入るには不便である。國營バスは通化より此地に通じてゐるが他に民營バスがよく發達してゐる。興京縣よりは永陵及び興京より、又寬甸へは二方面より通じてゐる。又奉天より桓仁、通化間に航空路が開けて居る。

桓仁街諸機關

桓仁縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
專賣局	興農合作社	中銀支行	協和會
郵政局	電報局	電話局	大興公司
勞工協會出張所	桓仁(農科)國民高等學校(省立)	街公所	滿人小學校

沙尖子

沙尖鎭とも稱し、渾江の上流右岸に位し、古くより特產の集散地として、鴨渾兩江沿岸に於ける有數の都邑である。街は上漏河口より山に沿ふて十町餘の一條の大街で、背後に山を負ふ要害の地であるた

め他の都邑に比し、匪害を蒙る事少く、各商賈の富裕なることは鴨渾沿岸に於て随一と稱せられてゐたが、滿洲事變後に至つて匪襲に遇ひ甚大な被害を受けた。然し各商賈は根強い財力を有するので、其後治安の回復と共に商勢を挽回してゐる。

沙尖子諸機關	警察署	税捐局分所	郵政局	水上警察隊
	滿人小學校	其他		
警察署所在地	横道川	普樂堡	八里甸子	二戸來
	拐磨子			
郵政局所在地	二戸來	鏵尖子	馬圈子	横道川
	二道陽岔	大雅河	八里甸子	四平街南
	木盂子	野猪溝	拐磨子	下溝子

資料

題名	書名	發行所	發行年月
桓仁縣概況	同表題	安東商工會議所	大同二、
桓仁縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	大同三、二
桓仁縣	滿洲地方事情(一)	大同學院	康、元、四
桓仁縣經濟調査報告書	東邊道、寛甸、輯安、桓仁、通化各縣經濟調査報告書	安東地方事務所	昭、八、九
桓仁縣志(上下)	同表題	桓仁縣公署	康、三、二

奉天省

奉天省

略史

古來滿洲發展のあらゆる中心を爲し來たつた奉天の歴史は又滿洲史の集約である。滿洲平野を舞臺として各種の民族或は有力者が活躍したのであるが、奉天は何等かの名稱の下に政治的中心を爲して居たのである。

奉天市

奉天北邊一帶の平野は遠く渤海時代の瀋州で當時既に小さな城市を形成してゐた。城東の福陵は其の舊蹟である。挹婁國高句麗と此地を占領し、唐の太宗は安東都護府を置いたと云はれる。降つて元の始め今より約七百年前に城廓を築いたのが創めで、次の明を經て清朝勃興するに及び、天命十一年奉天に都を遷し、天總五年城廓の修築を行ひ現在に至つてゐるが清朝は順治元年都を北京に移した爲其十八年間清朝の帝都であつた。北京遷都と共に國內重要人物擧げて首都燕京に移住し、奉天には僅かに將軍を此地に留めて留守せしめたに過ぎず爲めに奉天は一時あらゆる方面に停頓狀態になつたので、清朝は封禁の地として漢人の移住を禁じたのであるが、漢人は沃地滿洲をめがけ、封禁の令を冒して洪水の如く押し寄せ來つたのである。

一方北より露西亞、南方より英國來つて滿洲開拓を促進せしめたが露西亞は周知の如く、北清事變以來滿洲を併呑して東洋の平和を攪亂せんとする傾向を示した爲、日露の役となつた。明治三十八年三月、日露陸戰の終幕は奉天大會戰を以て切つて落されたのであるが、敵兵三十七萬に對し、僅か二十萬の寡

兵を以つて撃破し露西亞の野望を喰ひ止めたのである。

清朝の治世は三百年にして中華民國となり、張作霖は奉天督軍に任ぜられ次で奉天省長となり、張軍閥は滿洲に根强き地磐を築き勢威を振つてゐたが、郭松齡の叛亂には危く奉天を衝かれるところであつた。當時の關東軍が滿鐵線確保と奉天治安維持の爲適當なる有効手段を講じた爲め、叛軍は奉天入城の目的を達せず奉天は兵火より免れる事が出來た。然し張作霖は此恩を忘れ、張家二代に亘る暴政は遂に昭和六年の滿洲事變となり、次で輝かしき滿洲建國となるに至つた。滿洲事變は奉天郊外柳條湖に起り支那兵の暴擧に對し日本軍の正義の劍は鞘をはなれ、昭和六年九月十八日の夜事變發生、翌日すでに奉天市内各處に日章旗飜り、引續き全滿に展開された聖戰により東北軍閥は遂に敗走沒落、舊政權は崩壞の憂目にあひ、次で建國運動直ちに起り、今日の樂土滿洲が出現するに至つた。其後國都は新京に遷されたが奉天は依然として、昔日の繁榮に更に發展性を加へ、全滿第一の人口を有する大商工業都市として躍進を續けて居る。

大商工業都市奉天工業の趨勢

奉天が滿洲工業の中心として着目されるに至つたのは日露戰爭後日本の滿洲進出以來の事であつて、其以前にあつては、所謂手工業で工産物は總て家内工業の産物であつた。

大正三年歐洲大戰の開始は、滿洲工業界にも一轉機を與へ、各種工業の勃興を促進したが、其後世界恐慌の餘波を蒙り、經營困難を極め數年の間に破産閉業する者が續出する有様であつた。

爾來奉天に於ける工業は、封建的搾取の上に構成された舊軍閥支配の不當なる壓迫、治安の紊亂等により萎靡衰退を續けたが、滿洲事變勃發により滿洲國建設さるゝに及び、昔日の積弊は一掃され國內工業の振興を啓發し、工業地奉天としての面目を發揮するに至つた。

殊に鐵西工業地區の設定は一層工業發展に拍車をかける事になり、都市計畫の實施によつて大東區、瀋海區、鐵西區は各特色を以て發展する事となつたが、將來の工業都市奉天の躍進が期待される。

鐵西工業地區工業

鐵西工業地區は康德二年三月、滿洲國、滿鐵折半出資の下に設立された奉天工業土地股份有限公司（最初の資本金三百五十萬圓、同年五月、五百五十萬圓全額拂込に增資）の經營下に鐵西一帶廣袤三百五十萬坪を設定したもので、同社創立以來近々二箇年餘の間に道路舖裝工事を初め、鐵道引込線、上下水道の設備等工場設立に必要なる凡ゆる施設を行ひ、之を完備すると共に、內外諸企業の誘致に努力、その發展振りは滿洲產業開發史上大なる貢獻を爲した。初めの經營土地貸付主義は康德四年八月、企業家の進出に一層便ならしむるため、土地賣却暫行規則により、所有權讓渡の方法を以つて土地の開放を行ふ事とした。同じく八月滿鐵所有株は滿洲國に移し、同地區諸施設の充實、經營の圓滑を圖るべく、十一月之を奉天市公署に移管、鐵西土地管理處の統制管理下に置かれたが、康德五年三月、管理處を廢し市公署直接之が管理に當る事になつた。鐵西に於ては康德六年始め既に三百二十萬坪の拂下を終へ、四月には更に西方に百萬坪の拂下地を決定してゐる。工業地域工場は建國以來康德六年九月現在二百二十八に上り（新設中を含む）之を種類別に見れば、纖維工業（一四）、金屬工業（三二）、機械器具工業（四四）、窯業（三二）、化學工業（二三）、食料品工業（一〇）、釀造工業（九）、硝子工業（六）、電氣工業（五）、製材木製品工業（一二）、其他（一四）、倉庫（九）、新設中（一八）等である。

鐵西地區以外の地區工業

奉天に於ける日本側工場として大和區（舊附屬地）には尙大小工場百五十一あつて、何れも活氣ある經營を續けて居る。康德三年末現在に於て日本側各種工場を見るに、事變前すでに四十七の工場あり、事變後新設せられたるもの、百〇四工場に及んで居る。種類別に見れば金屬工業、機械器具工業、窯業、

紡織工業、化學工業、釀造業、食料品工業、煙草工業、雜工業等である。

工業機關

工業機關としては、奉天商工公會、滿洲工業會、奉天鐵西工業會、奉天商工會、等があり、工業關係同業組合二十九あり、夫々獨自の立場に於て發展を計つて居る。

今後の工業

現今奉天は工業中心都市として各種の工場が設立せられて居るが、これは工業地としての種々な好條件を備へて居る爲めである。交通の便なる事、原動力資源、原料資源を近くに控えて居る事、工業用水勞働力及賃銀等の好條件を備へ更に配給網の便なる事等は其主なるもので、將來尙棉花工業、製革工業紡織機械、自動車工業、食料品、織物、ゴム製品等の工業を興すは最も適當の地である。

奉天の商業趨勢

奉天は地理上、滿洲の中央大市場として事變前後年約百五十萬瓲の物資を呑吐してゐたが、事變を契機として現在年約二百五、六十萬瓲に達し逐年異常な伸展を來し、これに伴つて日本資本の流入投下も大增加を示して商權の擴大著しきものがある。滿洲國の躍進と各地の發展に伴ひ中繼貿易市場として非常な伸張振りを見せて居るのである。

日滿貿易の九割以上は日本商品であつて、舊政權時代に活動してゐた歐米資本も建國後は日本商品の進出により、昔日の面影がない。

發達の基因を見るに、(1)滿洲建國以來全國的に治安維持工作、經濟工作がよく行はれた事、(2)北鐵接收に依り廣大な沿線各背後地への日本商品の進出增加、(3)關稅改正により日排的稅率が取除かれ一方支那製品は外國としての稅率に替へられた事、(4)日本商品の世界市場制覇の當然の現れとして廉價進出して來た事等が主因として擧げ得らるゝであらう。

輸移出入品

奉天の商業が中繼貿易市場である關係上、取扱の輸移出入品は略同種のものが多い。移入品の主なる

ものは綿絲、綿布、雜貨、麥粉、砂糖、海産物、紙類、金物等で、移出の主なるものは、綿絲、綿布、雜貨、特産物、麥粉、卷煙草等である。而して大同元年の總額一億八百九十萬圓に比し、康德四年に於ては、五億九千九百六十八萬圓餘に上り、約六倍に達せんとして居る。內移出は一億八千九百萬圓餘、移入は四億一千萬圓餘である。

奉天に於ける商業機關としては、奉天商工公會、奉天輸入組合、奉天商店協會、奉天實業組合聯合會奉天商工會其他各種同業組合が日本人側に六十、滿人側に二十九あつて各々斯業の共榮の爲めに機能を發揮してゐる。

又、滿洲市場株式會社、交易所等あり、卸賣、小賣等の圓滑を計つて居る。其他、奉天市に於て獨特の市場として逐年殷盛を極めて居るものに、曉市がある。城內の朝市は永年の歴史を有し、小北門裡に毎日開く露店市場であつて同所で取扱ふ商品の九割までは日本商品である。店舖數三百餘軒曉市公會に加入し、毎朝七時より十一時までが營業時間であつてその間に於ける一日の賣上總額が六萬圓餘の巨額に達して居る。取扱品種類は、靴下、手袋、タオル類の日用品から、陶磁器、玩具等が主である。

奉天市諸機關

奉天省公署　奉天市公署　瀋陽縣公署　警察署(八)直轄(四)派出所(一四二)

消防署　奉天高等法院　奉天高等檢察廳　奉天地方法院

奉天地方檢察廳　區法院　區檢察廳　奉天第一監獄

奉天第二監獄

（財務）
奉天稅務監督署　稅捐局（三）　稅關　專賣署

（金融）
中銀分行　中銀支行（二）　興銀支店（三）　奉天商工合作社
興農合作社省聯合會　大興公司（一八）　橫濱正金銀行支店

（商工）
商工公會（省、市）　輸入組合　商店協會　實業組合聯合會
各種同業組合　市場會社　交易所　滿洲工業會
鐵西工業會　工業關係同業組合

（交通、通信、運輸）
鐵道總局　奉天驛　瀋陽驛　滿鐵建設事務所
滿洲航空株式會社　郵政管理局　郵政局（二一）　電報局
國際運輸（二）　電話局　奉天放送局　奉天市電車廠

（學校、醫院、社會、教育機關等）
奉天農業大學（直轄）　奉天臨時農業教師養成所（直轄）　奉天地方師道訓練所（男、女）
奉天工業大學（直轄）　奉天臨時商業教師養成所（直轄）　奉天師道學校（省立）
奉天第一（農科）國民高等學校（省立）　奉天第二（工科）國民高等學校（省立）
奉天第三—第七（商科）國民高等學校（省立）（合計五校）
奉天第八（工科）國民高等學校（省立）　奉天第一女子國民高等學校（省立）
奉天第二女子國民高等學校（省立）　奉天第三女子國民高等學校（省立）
奉天職工學校（省立）　奉天醫科專門學校（スコツトランド敎會立）
奉天藥劑師養成所（藥育機關設立期成財團立）　滿人小學校　奉天醫科大學
奉天第一中學校　奉天第二中學校　奉天朝日高等女學校　奉天浪速高等女學校

（其　他）

奉天工業學校
奉天商業學校（男、女）　青年學校
女子青年中校
造兵所青年學校
航空工廠青年學校
滿洲工廠青年學校
日本人小學校（一二）・
奉天市立傳染病院
奉天市立婦人醫院及分院
滿洲醫大附屬病院
奉天總站診療所
滿洲國立奉天圖書館
滿洲國立博物館
奉天同文商業學校
奉天造幣廠
協和會省本部
同縣本部（瀋陽縣）

在奉天外國機關

英國總領事館
德國（ドイツ）領事館
美國（アメリカ）總領事館
法國（フランス）領事館

奉天に本社を有する特殊會社及準特殊會社

特　殊　會　社

滿洲棉花株式會社
滿洲火藥販賣株式會社
株式會社奉天造兵所
同和自動車工業株式會社
滿洲飛行機製造株式會社

準　特　殊　會　社

滿洲葉煙草株式會社
滿洲石炭液化研究所
滿洲航空株式會社
滿洲工作機械株式會社

（其他の銀行及會社）

奉天商行銀行
奉天商業銀行股份有限公司
東省實業株式會社
奉天信託株式會社
大矢組株式會社
株式會社滿蒙毛織百貨店
奉天石油販賣株式會社
滿洲輸入株式會社
滿洲市場株式會社
滿蒙毛織株式會社
株式會社東亞絨氈工廠
恭泰大小紡織株式會社
奉天製麻株式會社
大同生藥工業株式會社
滿洲葦パルプ株式會社
滿洲護謨株式會社
國華護謨株式會社
東亞毛皮革株式會社
日滿鋼材工業株式會社
滿洲電線株式會社
滿洲橋梁株式會社
株式會社滿洲工廠
滿洲機器株式會社
同和自動車工業株式會社
滿洲通信機株式會社
滿洲金屬工業株式會社

株式會社滿洲日立製作所　滿洲車輛株式會社　奉天製氷株式會社　滿洲造酒株式會社
滿洲千福釀造株式會社　八王寺釀造株式會社　滿洲麥酒株式會社　亞細亞麥酒株式會社
株式會社奉天醬園　滿洲野田醬油株式會社　康德製粉株式會社　滿洲製粉株式會社
東洋製粉株式會社　滿洲製糖株式會社　滿洲特產工業株式會社　興亞印刷局
啓東煙草株式會社　老巴奪株式會社　滿洲東亞煙草株式會社
新進コンクリート工業株式會社　滿洲窯業株式會社
日滿フエルト工業株式會社　德永滿洲硝子股份有限公司
滿洲昌光硝子株式會社　奉天石灰セメント株式會社　裕和鑛業株式會社
康德鑛業株式會社　滿洲鑛業株式會社　中東產業株式會社　滿洲鉛鑛株式會社
安奉鑛業株式會社　奉天交通株式會社　奉天自動車株式會社　國際運輸株式會社
南滿倉庫株式會社　奉天倉庫株式會社　奉天倉庫株式會社　奉天土地建物株式會社
滿洲土地建物株式會社　瀋陽建物株式會社　瀋陽土地建物株式會社　大同土地株式會社
新興起業株式會社　國民大市場株式會社　滿洲開發株式會社　盛滿土地建物株式會社
共立土地建物株式會社　日新企業株式會社　豐國興業株式會社　株式會社春江ビル
中央土地建物株式會社　泰東土地建物株式會社　昭德建物株式會社　株式會社華山公司
奉天建物株式會社　協和地產株式會社　滿洲不動產管理株式會社　滿洲不動產株式會社
奉天大倉ビルディング株式會社　大同產業株式會社　中東產業株式會社
東亞土木企業株式會社　興亞電業株式會社　志岐土木株式會社　大安興業株式會社

株式會社神開組
滿洲三和電氣株式會社
國益精糧公司(合資)
極東物產公司(合資)
奉天酸素製造公司(合資)
滿洲工作所(合資)
宮川鑛業會社(合資)
大德鑛業公司(合資)
大丸店(合資)
昭和土地建物會社(合資)
長谷川組(合資)
四先土木建築公司(合資)
藤田洋行(合名)
森洋行(合名)
小杉洋行(合名)
中谷時計店(合名)
伊豫組(合名)
藤本ビルブローカー證券株式會社支店
山上證券商事株式會社支店
滿洲糧穀株式會社支店
株式會社アンドリウス商會支店
伊藤忠商事株式會社支店
株式會社滿豐銀行支店
株式會社祥茂洋行支店
株式會社エスキン兄弟商會支店
株式會社八木商店支店
海外通商株式會社支店
日華化學工業株式會社支店
江商株式會社支店
三立製菓株式會社支店
大阪商運株式會社支店
三機工業株式會社支店
大同商事株式會社支店
株式會社竹馬商店支店
株式會社武田長兵衞商店支店
朝鮮商工株式會社支店
東洋棉花株式會社支店
日本タイプライター株式會社支店
日本棉花株式會社支店
株式會社平戶商店支店
又一株式會社支店
株式會社丸永商店支店
三井物產株式會社支店
三菱商事株式會社支店
株式會社齋藤省三商店
株式會社朝鮮鑿岩機製作所支店
東亞煙草株式會社支店
株式會社日本パッキング製作所支店
日本ペイント株式會社支店
株式會社木嘉納商店支店
株式會社松田清商店支店
株式會社宮崎商店支店
株式會社安川電氣製作所支店
山邑酒造株式會社支店
澤山商事株式會社支店
福井合同運送株式會社支店

住友生命保險株式會社支店　　大正生命保險株式會社支店
日本教育生命保險株式會社支店　　滿拓公社奉天出張所
生活必需品會社支店及び配給所　　勞工協會支部及出張所　　勞工協會瀋陽縣出張所
三井生命保險株式會社支店　　安田生命保險株式會社支店
東洋拓植株式會社支店　　株式會社大林組支店　　日滿土木株式會社支店　　株式會社交通銀行支店
中國銀行支店
ネッスル、エンド、アングロ、スヰス、コンデンスドミルク、コンパニーリミツテツド支店
株式會社滿洲岡本洋紙店　　滿洲飛行機製造株式會社　　滿洲光學工業株式會社　　奉天石鹼株式會社
東洋タイヤ工業株式會社　　奉天油脂株式會社　　奉天副食品株式會社
滿洲淺野スレート株式會社　　株式會社今井商會

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
奉天市場に於ける滿人向陶磁器	奉天商工月報（三八八）	奉天商工會議所	昭、一三、一
奉天に於ける滿人側商工事情	同（三八五）	同	昭、一二、一〇
奉天に於ける保險業（一、二）	同（三八五―三八六）	同	同
奉天に於ける外國人の經濟勢力（一、二）	同（三八五―三八六）	同	同
支那事變と奉天經濟界の動向	同（三八四）	同	昭、一二、九
事變下に於ける奉天の物價趨勢	奉天商工公會月報（一の三）	奉天商工公會	康、五、九
奉天滿商之諸習慣調查（滿文）	同（一の一）	同	康、五、七
奉天商工公會所屬同業公會一覽（滿文）	同（一の一）	同	康、五、七
工業都、奉天市	滿洲國現勢	滿洲國通信社	康、五、七
奉天市行政區域圖	奉天市公報（六の九）	奉天市公署	康、四、九

概史

奉天都邑計畫說明	同（七の七）	同	康、五、三
奉天市稅條例改正條例	同（號外）	同	康、五、六
奉天鐵西工業地區に於ける商租問題の解決	土地局史	地籍整理局	康、四、一二
膨脹する奉天鐵西工業區	觀光東亞（五の八）	ビューロー	昭、一三、八
奉天	同表題	鐵道總局	昭、一三、五
奉天城內滿商の舊年間決濟狀況	通商局日報（四一）	通商局	昭、一三、二
奉天に於ける生鮮食料品需給事情	市場二十年史	市場會社	康、五、一
奉天（廣汎寬一）	新天地（一八の二）	新天地社	昭、一三、二
奉天の總人口全滿一、（七十二萬）	旅行情報（三一二）	ビューロー	昭、一三、三
奉天の對日滿貿易輸入貨物輸送及通關狀況	通商局日報（五〇）	通商局	昭、一三、三
奉天市	滿洲旬報（三三）	滿洲旬報社	康、五、四
奉天觀光案內	同表題	奉天交通株式會社	康、五、四
大奉天市事情總覽	同表題	奉天市公署	康、三、七
發展途上の奉天	同表題	奉天商工會議所	昭、九、一〇
奉天市	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
奉天經濟二十年誌	同表題	同	昭、二、四
奉天史話（園田一龜）	同表題	奉天圖書館	昭、九、六
奉天草分物語	新京（雜誌）	新京社	昭、八、七
奉天に於ける工業條件（大森進）	同表題	奉天地方事務所	昭、一〇、一一
企業地としての奉天	東洋貿易研究（一四の一〇）	大阪市役所	昭、一〇、一〇
奉天市圖	同表題	奉天市公署	康、三、！
鐵西事情案內	同表題	同	康、七、五

撫順市

康德四年十二月一日治外法權撤廢、滿鐵附屬地移讓と共に、撫順には市制を布かれ、從來の滿鐵附屬

地に、撫順街をはじめ十六區村屯を併合し、面積九一平方粁餘の大都市が建設される事になり、現在人口二十三萬一千餘(康徳六年六月末)に及び、撫順炭の繁榮と共に、益々隆盛に赴きつゝある現狀である

舊撫順城の歷史は遠く明代に初まつて居る。明の洪武二十一年此地に千戸所を設け、土城を築いて之を鎭陽城と稱した。淸起るに及び太祖は之に宣戰し、太祖自ら八旗の中の六旗を率ひて明軍四十七萬を薩爾滸山に擊破し淸朝の興る運命を築いたのである。薩爾滸山の激戰直後この鎭陽城も攻略せられてしまつた。乾隆二十九年、之を改築して石城とし、南北に二門を設け南門を嘉會、北門を廣潤と名づけた。宣統三年頃までは市況も殷盛を極めてゐたが、縣公署の移轉と、滿鐵新市街の建設とは本城内を逐年衰退に赴かしめ、城壁も所々崩壞して廢虛の如くになり人口も少くなつた。

千金寨と呼ばれる所は渾河の南、滿鐵が建設した新市街の西に在り、日本人は此一帶を舊市街と呼んで居る。撫順縣公署を始め、滿洲國の各種の官衙、機關は殆ど此地に置かれてゐるから舊縣城の繁榮を奪つて人口も三萬以上を有し撫順に於ける滿人街の中樞を爲して居る。

新市街は、卽ち舊滿鐵附屬地で舊市街(千金寨)と共に渾河に沿つて居る。舊市街とは楊柏堡河によつて境し、大官橋によつて兩者が結ばれ、又新市街と撫順城とは永安橋によつて交通されて居る。市街を大別すれば、東半は全部滿鐵の社宅街である永安臺の高臺で、つゞいて公園である。西半は商業區と事務所學校等の區域からなる平地である。商業區は驛前から中央大街、永安街、千金大街を放射し、全體が規則正しい碁盤形を成して居る。

撫順は日露戰爭の時奉天會戰の我が左翼軍の戰場で、鴨綠江軍及小原旅團が附近に蟠踞する露軍の大軍と戰ひ、明治三十八年三月十日奉天陷落の同日此地を占領した處で、永安橋畔に表忠碑が建てられて

居る。

新市街の西端にある觀樂園は、撫順炭礦工人の爲めに設けられた一大慰安場で、中央に老君廟を祭り劇場、無料觀劇舞臺等があり、衣類、雜貨、飲食店の露天が頗る多く、此種社會施設の一端である。

撫順炭礦

撫順炭礦は日本にとつて一つの國寶である。不足勝な内地石炭を補つて炭礦としての餘命も尙永く、我國燃料問題解決の鍵を握るべき運命にある。炭質の良好なる事、埋藏量及産出量の豐富なる事、全滿第一である事は勿論、その露天掘の偉大なること世界有數のものである。又炭層の上層を爲す頁岩より油母頁岩を製出する實驗に成功し、昭和四年より事業化して居る。又最近石炭液化に適實なる撫順炭は其事業化にも着手を見てゐる。

撫順炭坑の歴史は古く、六、七百年前高麗人によつて採掘されてゐたらしいが、降つて淸朝光緒年間に禁ぜられてゐた採掘が許され漢人によつて營まれてゐたが、光緒三十年（明治三十七年）露西亞人によつて無斷占領せられ、日露役後滿鐵會社創立と共に滿鐵に繼承經營せられて現在に至つてゐるものであつて、滿洲國成立後他の炭田に統制が行はれたにも拘らず撫順は滿鐵の經營を持續せられて居る。

撫順市諸機關

撫順市公署	撫順縣公署	警察廳 直轄（一）派出所（三一）	稅捐局（四）
商工公會	專賣局	撫順地方法院	撫順地方檢察廳
區法院	區檢察廳	監獄	郵政局（七）
興農合作社	電報局	電話局	中銀支行
興銀支店	國際運輸	大興公司（一）	協和會（一）
撫順（工科）國民高等學校（省立）（城內）		撫順女子國民高等學校（省立）（市）	

滿人小學校　撫順中學校　撫順工業學校　撫順高等女學校
日本人小學校(五)　青年學校

（會社）

株式會社南昌洋行　撫順市場株式會社　南滿火工品株式會社　撫順製紙株式會社
撫順製氷株式會社　撫順印刷株式會社　撫順窯業株式會社　南昌工業株式會社
滿洲松風工業株式會社　撫順セメント株式會社　株式會社吉豐公司　株式會社撫順倉庫
撫順建物株式會社　撫順起業株式會社　東亞產業株式會社
滿洲輕金屬製造株式會社(望花村小瓢屯にあり特殊會社)　撫順市立醫院
撫順市立傳染病院　同市立婦人病院　市立保健所　勞工協會出張所
勞工協會撫順縣出張所

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月日
撫順市面積人口	新設市の面積人口一覽表	內務局	康、四、一二
撫順遊覽バス	旅行情報(三一六)	ビューロー	昭、一三、四
新撫順の成るまで	炭の光(一六九)	撫順炭礦庶務課	昭、一二、一二
撫順大繪卷	同表題	撫順新報社	昭、一〇、一
撫順	南滿洲鐵道沿線旅行案內	滿鐵	昭、一〇、一
重工業都撫順市	滿洲國現勢	滿洲國通信社	康、五、七
大撫順の建設(渡邊三三)	炭の光(一八七)	撫順炭礦庶務課	昭、一三、九、一五
撫順炭礦(岩崎重三)	石炭	內田老鶴圃	昭、一二、七

營口市

略史

今より百餘年前は小漁村に過ぎない地であつた。而して遼河の貿易は上流の牛莊で行はれてゐたものであるが、年々遼河の搬出する土砂により河身に變化を來し、民船取引は田莊臺に移り更に營口に轉ずるに至つた。

營口は全く英國人の手になつたものといへやう。一八五八年天津條約によつて牛莊城が開港されたのであるが一八六一年英國領事が赴任してみると、當時の牛莊は河が淺くなつて貿易港としては不適當である事を見、現在の營口の地に領事館を置き牛莊と稱した。

發展過程

英國領事館が開かれてより、英商の渡來開店するもの加はり、英領事は、獨、佛、墺及丁抹の名譽領事をも兼ね、各國商人及支那商人の來營するもの多く、貿易港としての形態を備へ、南滿唯一の貿易港となるに至つた。一八九〇年頃から俄然貿易額も增加し、山東商人、廣東商人の入り來るもの多くなつて、遼河の水運盛に行はれ特產の取引多くなり油坊を起し、豆粕、豆油の製出が始まつた。又南支方面より入り來る綿絲布雜貨等は遼河下航貨物として奥地に運ばれたのであつた。當時は二〇、〇〇〇隻にあまる民船が遼河を航行したとの事である。加ふるに營口獨有の銀爐は金融機關として最も商業を圓滑ならしめたのである。

然るに一九〇五年日露戰爭の結果、大連港及滿鐵線が日本の經營に歸して以來、南滿線は經濟鐵道としての機能を發揮するに至り、一方安東は鮮滿の出入港となり、營口は二港の競爭を受くるに至つた。加ふるに、明治四十二年滿鐵の大連中心主義により海港特定運賃率を定めたる結果、奥地よりの距離は

遙かに近い營口も大連への運賃と變りなく、其後度々の運賃改正により營口は益々苦境に陷つたのであるが、更に不凍港大連の大築港と凍港營口とは自然の條件に於ても競爭の相手には遙かに劣る處である。遼河の航運は衰へゆき、外國との商取引も減少し、營口在住の外商も漸次大連又は奉天に中心を置くに至り、營口に於ける私設碼頭は次第に荒廢するに至つた。貿易額に於ては多少增額も見らるるが、これは一般の景氣によるものであつて、大連、安東の急激なる發展に比すべくもない。とはいへ、長年培はれた營口の經濟力は、このまゝ衰運をのみ辿るものとは見られない。

康德四年十二月一日、奉天省下七市の一つとして營口も亦市制を布かれ營口市の誕生を見たのである。

貿易港營口

營口の取引先は從來主として中國であつて殊に南支方面を主なる取引先としたのであるが、最近日本內地及朝鮮から輸入さるゝ額激增し、輸出先は主として中華である。

輸出の主なるものは大豆、豆粕、高粱、銑鐵、棉實、粟等であつて、康德六年總額、三千六百十五萬圓餘、輸入の主なるものは、綿絲布類、麥粉、砂糖、茶、棉花、藥品等で六年度總額六千百八十七萬圓餘であつて、輸入超過を示して居る。

營口港は遼河の結氷により貿易杜絕の期間を有せねばならぬ狀態にあるを遺憾とし、碎氷船を使用實施を敢行してみる事になつた。支那事變一段落の後は中華との貿易も亦漸次復舊するものと見られる。

商工業都市としての營口の將來性

營口商工業の現狀は、昔日の如き繁榮を見ることは出來ない。卽ち、大連中心主義による打擊、滿洲事變以來、支那向貿易の激減及特產の不況に加へて營口商業上の圓滑を計つてゐた過爐銀は幣制統一によつて廢止せられ、金融、商業上の大打擊を蒙つて居る。更に續く支那事變により、中國との交通杜絕

し商業及工業は振はなくなつてしまつた。
然し、熱河及蒙古地方の販路背後地を控へて居り、葫蘆島と共に、日本內地及、朝鮮との取引は增加してゆくものと見られる。又工業に於ては從來の油坊、煙草、燐寸、綿織、煉瓦工業等多數の工場を有し家內工業も亦小工業乍ら續けられて居る。將來營口に起るべき工業としては、石鹼製造、塗料工業、製紙、曹達工業、ゴム製品等のものが考へられる。それらの工業を起すに、營口は好條件を供へて居り全滿に於ける此種の工業から見て、營口は適當地とみとめられるからである。
現在葦を原料とする康德葦パルプ工場あり、王子製紙の進出、鹽を利用する曹達工業等も考へられて居る。營口は尙商工業都市として繁榮すべき素質を多分に存して居る。

營口市諸機關

營口市公署	警察廳　派出所(四九)	商工公會	稅捐局、同分所
稅　關	專賣署	郵政局(四)	電報局
電話局	興農合作社	中銀支行	興銀支店
大興公司(七)	國際運輸	營口地方法院	營口地方檢察廳
區法院	區檢察廳	監獄	協和會
海邊警察隊	電業支店	放送局	水產試驗所
營口第一(商科)國民高等學校(省立)		營口第二(水產)國民高等學校(省立)	
營口女子國民高等學校(省立)		滿人小學校	青年學校
日本人小學校	營口外務局辦事處	營口鹽務署	營口航務局
營口埠頭	荷國(オランダ)領事館	諾威國領事館	

（銀行及會社）

營口商業銀行　營口百貨店株式會社　營口石油販賣株式會社　營口紡績株式會社
永興股份有限公司　康德葦パルプ工場（三家子）　關東火柴製造株式會社
營口興業株式會社　滿洲タルク株式會社　營口水道交通株式會社
新京汽船股份有限公司（本社營口）　營口大通汽船株式會社　營口肇興汽船株式會社
營口日昌汽船株式會社　營口土地建物株式會社　大和土地建物株式會社　南滿洲農事株式會社
營口水產株式會社　營口畜產株式會社　福海精鹽株式會社　株式會社營口新報社
三和公司（合資）　柿崎組（合資）　福來號（合名）　興茂北棧（合名）
裕民葦業公司（合名）　橫濱正金銀行支店　三井物產株式會社支店　滿洲糧穀會社出張所
營口市立保健所　勞工協會出張所

資料

題名	書名	發行所	發行年月
遼河河口の營口市	滿洲國現勢	滿洲國通信社	康、五、七
農事合作社創設に伴ふ營口への影響	營口商工會議所報（一八三）	營口商工會議所	昭、一二、七
營口市面積人口	新設市の面積人口一覽表	內務局	康、四、一二
營口各種業者	諸外國の貿易關係業者其他	通商局	昭、一三、六
營口附屬地沿革史	滿鐵調查月報（一二の六）	滿鐵	昭、七、六
營口事情	同表題	營口實業會	大正九、九
營口に於ける大屋子	滿鐵調查月報（一六の三）	滿鐵	昭、一一、三
一八六二年―一九二一年に於ける牛莊海關報告	同前（一六の六）	同	昭、一一、六
營口亂石山安全農村建設概要（東亞勸業）	農業の滿洲（六の六）	滿洲農事協會	昭、九、六
營口市區域	政府公報（一一〇二）	滿洲國政府	康、四、一二
營口都市金融合作社管內經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

概　史

〔昭和製鋼所〕

鞍　山　市

鐵の都鞍山は最近急激なる發展に向ひつゝある。鐵に據つて興り、鐵需要の消長によつて其運命を共にして來た工鑛業都市鞍山は今や時代の波に乘り、國策事業の第一線に立つて居る。康德四年十二月一日より新市制施行せられ、人口十五萬六千餘（康德六年六月）市況、活況を呈して居る。

鞍山の沿革をたどつてみるに、始め日露戰爭によつて當地一帶の地に秘められた大鐵鑛床が發見せられ、歐洲大戰の鐵價暴騰の際は製鐵事業に伴ふ人口增加を豫想し、大市街計畫が建てられ人口十五萬を包擁すべき目的であつたが、大戰終熄と共に經濟界に大變動を來し、製鐵事業の縮少と共に大鞍山建設も半にして緊縮を見なければならなかつた。然るに昭和八年六月昭和製鋼所誕生し、事業擴張せらるゝと共に鞍山市の活況も亦伴つて、從來の空地はたちまちにして家屋連絡櫛比するに至つて居る。

滿鐵經營であつた鞍山製鋼所は昭和八年六月一日を以て其設備其他一切を昭和製鋼所に讓渡し、こゝに昭和製鋼所は獨立企業として經營せらるゝ事になつた。

現在鞍山を中心とし昭和製鋼所の事業下にあるものは、凡そ八哩半の半徑內に於て點在し、其の埋藏量約數億噸と算せられて居る。鐵礦山は櫻桃園、王家堡子、關門山、大孤山、西鞍山、東鞍山、小嶺子、鐵石山、白家堡子、一旦山、新開門山等である。昭和八年からは新に弓長嶺採礦所の設置を見、其富鑛量も多量に上る。

滿鐵の最初の製鐵事業の目標は將來年產百萬噸の鐵を製出するにあつた。而して最初の年產は銑鐵五萬で大正八年四月第一熔鑛爐に火を入れ、將に第二期計畫に入らんとする矢先、大戰終熄による財界混

鞍山都邑計劃

亂して計畫中止となつてゐた。

然るに時勢の推移と滿洲事變更に日支事變により、斯業の緊急擴張を必要とし、增資又增資、康德五年二億圓の公稱資本であり、滿鐵の持株增資新株九〇萬株を滿洲重工業會社に渡し、現在は重工業會社の子會社である。而して康德六年滿洲國特殊會社となつて居る。

鞍山の都邑計畫は昭和製鋼所を基本として之に關聯する重工業及輕工業を收容し、近代產業都市として遺憾なき樣計畫されたものである。卽ち其の調査立案に當つては、滿洲國自體が中心となつて、軍部製鋼所、滿鐵及諸議員等に依つて鞍山都邑計畫事業諮問委員會が組織され、愼重審議回を重ねる事五回康德五年半頃に至つて決定したものである。

先づ人口一人當面積を八十七平方米として、其の市街計畫區域を百二十三、二平方粁に、都邑計畫區域を四百八十五平方粁に取つたもので、鞍山驛を中心として、市街計畫區域は東方約三粁、西方約五粁南方約六粁、北方約十二粁にし、都邑計畫區域は、東方約九・七粁、西方一〇・五粁、南方一一・三粁、北方一四・九粁に涉つて居る。

市街計畫區域、卽ち將來市街地として利用せられる範圍內に如何に道路を配置し、如何に工場、住宅商店街等を配するか、要は交通、衞生、保安、防空、經濟等に缺くる所なき近代都市を建設し得らるるかは一つに懸つて其の用途地域制の適不適に在るを以つて、先づ風の方向より、重工業地、職工、社員の安全住宅、商業地の配置をよくし、專用部丘陵地帶は居住區域として日本人の住宅を主としてゐる。昭和製鋼所以南の地は其の現況より滿人商業地として居る。

事業總豫算は四千四百八十五萬五千圓を計上せられ、第一期計畫は、康德五年度より康德九年度で、

土地の買收、特殊工場用地、道路新設、排水路、橋梁、公園、街路樹等と次々に實施せられて居る。

鞍山市諸機關

鞍山市公署	警察廳 直轄(一) 派出所(二〇)	稅捐局、同分所	郵政局(四)
電報局	電話局	商工公會	國際運輸
協和會	電業支店	大興公司(二)	興銀支店
鞍山中學校	鞍山高等女學校	日本人小學校(三)	青年學校
昭和製鋼所青年學校	鞍山市立保健所	同市立婦人病院	鞍山(工科)國民學校

(會社)

株式會社昭和製鋼所(特殊會社)	鞍山市場株式會社	滿洲亞鉛鍍株式會社
鞍山鋼材株式會社	(特殊會社)滿洲住友金屬工業株式會社	日滿鋼管株式會社
滿洲久保田鑄鐵株式會社	株式會社滿洲鑄鋼所	滿蒙製氷株式會社 / 南滿機械製氷株式會社
株式會社鞍山印刷所	滿洲耐火工業株式會社	鞍山不動產信託株式會社 / 滿洲興拓株式會社
康德不動產株式會社	昭和建物株式會社	株式會社新隆公司
株式會社滿洲日日新聞社	株式會社盛京時報社	株式會社鞍山日日新聞社 / 鞍山劇場株式會社
坂本組(合資)	日本タイプライター株式會社	勞工協會出張所

21……奉天省資料

題名	書名	發行所	發行年月
鞍山市面積人口	新設市の面積人口一覽表	內務局	康、四、一二
鞍山(特輯)	警察協會雜誌(三六三)	南滿洲警察協會	昭、一二、二
昭和製鋼所二十周年を回顧して座談會	鐵魂(四の六)	昭和製鋼所社員會	昭、一三、六
鞍山百景(寸鐵)	同前(四の三)	同前	昭、一三、三

鐵都・鞍山市……………………滿洲國現勢　滿洲國通信社　康、五、七
鞍山……………………南滿洲鐵道旅行案內　滿鐵　昭、一〇、四
鞍山……………………滿洲主要都市要覽　滿鐵　昭、一二、四

遼陽市

概要

遼陽は康德四年十二月一日より市制を布かれ、舊滿鐵附屬地、城內を中心に、附近十六の村屯を合併して遼陽市を建設せられた。面積二三・四平方粁餘、人口九萬四千六百餘（康德六年六月末）を有する都市である。

遼陽は滿洲最古の都城の一つで、久しく滿洲に於ける政治の中心地であり且、朝鮮、支那本土に通ずる舊交通系統の中樞に衝つてゐた。

斯の如く遼陽は、各時代を通じて中樞を爲してゐた關係上、城內及其附近は史蹟に富み、舊都の面影を遺すものが多い。露治時代に至つても此地は南滿防備上の主要點として、諸般の設備を施したところであるし、日露役の激戰地として世人に廣く知られて居る。

有名な遼陽の白塔は廣祐寺の佛塔であるが、堂は亡びて塔を殘して居るのみである。廣祐寺は俗に白塔寺と呼ばれ、金代の初、世宗の母后によつて創建せられ、後大定初年世宗によつて增大せられたものゝ樣である。

城內

城內は舊附屬地の東に接し、太子河の西岸に立つて居る。元東北二城に分れてゐたが北城は破壞せられて居る。本城は明の洪武五年に改築したもので東西六滿里、南北四滿里、六ツの門を有して居り、商業殷盛である。太子河は本溪湖を經て遼陽に沿つて流れ、渾河、三叉河と會して遼河に入る。

舊滿鐵附屬地

日露戰爭當時、日本軍が遼陽城を占領すると共に、日本人千餘名は逸早く此處に來りて居住し、新市街を造り、戰後引續き日本人の來住する者が多くなつたが、當市は特產物の出廻りに惠まれず、活氣に乏しい。滿鐵工場は沙河口に移轉し、機關區は蘇家屯に移り、日本駐屯軍も移轉した爲、衰微の一途を辿つてゐたが事變後工業地として、セメント會社、棉花會社を始め諸會社設立せられ、弓張嶺の鐵鑛採掘事業も開始せられた事とて活氣を呈する見込みである。

遼陽市諸機關

遼陽市公署	遼陽縣公署	警察廳（直轄（一）派出所（三一））	稅捐局（三）
商工公會	專賣局	遼陽地方法院	遼陽地方檢察廳
區法院	區檢察廳	監獄	郵政局（一）
電報局	電話局	興農合作社	中銀支行
興銀支店	大興公司（六）	國際運輸	協和會
省立遼陽棉花試驗所	遼陽市立醫院	遼陽第一（農科）國民高等學校（省立）	
遼陽第二、第三（商科）國民高等學校（省立）		遼陽女子國民高等學校（省立）	襄平商業學校（市立）
滿人小學校	遼陽商業學校	日本人小學校（一）	青年學校

【會社】

滿洲紡績株式會社	遼陽紡麻股份有限公司	滿蒙棉花株式會社	太陽コム株式會社
滿洲セメント株式會社（工場鶏房）		遼陽窯業股份有限公司	遼陽電燈公司
遼陽不動產會社（合資）	勞工協會出張所	勞工協會遼陽縣出張所	

資料

題名	書名	發行所	發行年月
遼陽市面積人口	新設市の面積人口一覽表	內務局	康、四、一二
遼陽草分座談會	新天地(一五の八)	新天地社	昭、一〇、八
工場地としての遼陽	東洋貿易研究(十二の九)	大阪市役所	昭、八、九
遼陽名勝舊蹟案內	同表題	修養團遼陽支部	昭、九、一
遼陽	南滿鐵道沿線旅行案內	滿鐵	昭、一〇、四
新纖維工業都遼陽市	滿洲國現勢	滿洲國通信社	康、五、七
遼陽	滿洲主要都市要覽	滿鐵	昭、一二、四

四平街市

概要

康德四年十二月一日、新市制により、治外法權の撤廢と共に、新しい四平街市が生れ出でた。

連京線中間都市中人口に於て、奉天、鞍山に次ぎ平齊線の起點地として蒙古への關門を扼し、東は平梅線より次で鐵路は通化省に延長し、輯安より朝鮮鐵道との接續を見て日滿連絡の最短コースたる要衝を占めてゐる。實に滿洲國交通の衝點に立てる四平街は、四通八達其名の起因にそむかず、而も此交通路線は經濟上重大なる意義を有し、平齊線より押し寄せる農產物と、平梅線が搬出する無盡藏の鑛產物との集散が、四平街を中心として行はれる。又單にこれらの物資を中繼するに止らず市自身大いにこれを利用し咀嚼する能力を有してゐる。卽ちこれらの物資を工業化するに天の理地の利を得て、油化工業製粉、セメント、パルプ工業等多くの工業に適する好條件を具備してゐる點から、四平街の今後の發展は大いに期待されるところである。

發達の過程

露西亞が東淸鐵道を敷設した時は僅の農家が散在してゐたに過ぎないが、二里ばかり距てた處に、四

商工業都市四平街

平街といふ部落があつたので驛も四平街驛と呼ばれる樣になつた。現在の新京驛より五番目の驛として新設されたもので、五站と呼ばれてゐたのである。戰後日本が接收した頃までは何等特異性を有しなかつたが、歐洲大戰前後から滿洲特產の出廻多く、地理的に廣漠たる特產背後地を有してゐる當地は漸く特產取引の街として認められ四洮鐵路、(現在の平齊線)が出來てから特に、特產の出廻が多く、南滿第一の特產市街として今日の隆昌をみるに至つたのである。加ふるに、平梅線の開設は、更に特產集中を增加したるのみならず、豐富なる西安炭の搬出取引所としても繁榮するに至つた。從つて從來奧地に於て特產商を營んでゐた者も、四平街の地理的有利なる點より、當地に移轉し又出張所を開設するといふ狀態で、人口が增大して來たのである。而して當地は滿洲に稀に見る日滿人雜居の地として圓滿に發達して來たので日滿人が親しみ融和し經濟發展上でも福祉增進の爲めでも步調を合せて協力して居る點は全く特異性を有して居る。

南滿線が日本に授受されるにあたつて、四平街は忘れられない歷史的な處である。即ち明治三十八年ポーツマス條約後十月卅日四平街停車場に於て軍參謀福島安正少將は、露軍參謀オラノフスキー少將と會見し、長春以南の鐵道並に附屬土地財產の引渡手續順序を協定し、次で三十九年五月十一日同所に於て日本側委員長、中村愛三少將と、露國側委員、トゥイツチ少將との間にその完全な授受が行はれた處で日本人の滿洲發展上の歷史的な土地として忘れられない處である。

豐沃廣大なる南滿平野の眞只中に四通八達の交通要衝を占むる四平街は、其豐富なる農產資源を有するのみならず、未だ近くに混牧地純牧地をも控へて南滿第一の特產取引市場として遍く認められて居るところである。特產物の取扱ひが個人的に地方的に變遷多きものでありながら、四平街は何れの觀點よ

り考察しても、揺ぎない堅實な發展を見せて今日に至り、尙將來益々出廻數量の增加を示す事は、多分の餘裕を持つて發展しつゝある點より見て期待せられる。此背後地の問題は獨り特產物の出廻だけに止らずこれに追隨する農家の生活必需品の動きにも及ぶ特產出廻の增大は、農家經濟の發達をもたらし、從つて購買力を旺盛ならしめ、四平街より地方街村に供給する物資も增加して來る。

四平街は、從來の特產取引の形態たる糧棧は開原と共に最も發達し又、日人特產取引商も發展をみせてゐる。農家の繁榮と、特產出廻の增加は益々旺盛を示してゆくものと見られる。特產取引のみならず雜貨商、飮食店、其他の商店でも活潑なる景氣を見せて四平街の商店は益々繁榮に赴くであらう。

更に工業地としての四平街をみるに、概要に述べたる如く、交通の中心である事而も單なる鐵道十字路にあるといふだけでなく、其線の發達したる沿線及其背後地が、農產、鑛產に於て豐富なる地域である事、更に四平街が滿洲何れの方面からみても略中心に位してゐる點は、商業都市として發達せしめるのみならず、工業都市としても、此交通發達は大なる要素である。然し企業の條件が具備せられない限り四平街は單なる物の通過地として工業の發達は期待せられるであらうが、幸なるかな工業都市として發展すべき好條件を備へてゐる。卽ち

(1) 東方一帶に豐富なる炭田地帶を有し、西安炭礦は盛に採掘せられ、更に通化地方にも、有力なる炭田を有してゐる。

(2) 伊通山嶺を源とする無限の地下水を有し一日間の湧出量一萬噸といはれ工業用水として特別良質なものである。

(3) 原料をみれば、農產は各種豐富に得られ、天然曹達、石灰石等の礦產も近くにあり更に平齊線出

廻りの羊毛其他の畜產原料も得られる。

(4) 勞力も南滿の地で割にたやすく得られるのである。

其他、氣候、土地等の條件もよく、從來、酒造、製粉、油坊等の工業あり、西安炭を使用する油化工場はすでに操業開始し、セメント工場、キミテツクス製造工場等が起つて居る。將來最も適する工業としては、製油工業、天然曹達精製、甘草エキス製造、酒精工業、粉條子工業、羊毛工業、石鹼工業、塗料工業等が考へられるやうである。

四平街市諸機關(政治、司法、警察、交通、學校)

四平街市公署	警察廳(直轄(一)派出所(一九))	稅捐局	商工公會
四平街地方法院	四平街地方檢察廳	區法院	區檢察廳
郵政局(三)	電報局	電話局	專賣署
中銀支行	興銀支店	大興公司(四)	國際運輸
協和會(梨樹縣本部)	四平街高等女學校	四平街師道學校(省立)	
四平街女子國民高等學校(省立)		總局經營四洮醫院	日本人小學校
青年學校	滿人小學校	四平街市立醫院	同市立保健所

(會社)

四平街石油販賣會社	株式會社四平街三泰棧	株式會社四平街市場	大同電氣株式會社
四平街電燈株式會社	四平街土地建物株式會社	竹村吳服店(合資)	昭和產業公司(合資)
油化工業工場	大東商事株式會社	糧穀會社出張所	勞工協會出張所

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
新興工業都、四平街市	滿洲國現勢	滿洲國通信社	康、五、七
四平街市面積人口	新設市の面積人口	內務局	康、四、一二
四平街背後地事情	滿鐵調査月報（一三の一）	滿鐵	昭、八、一
四平街事情	齊克、四洮、洮昂鐵道沿線經濟事情	橫濱正金銀行	昭、七、一二
四平街案內	同表題	四平街地方事務所	昭、一〇、四
四平街附近の自然（野田光藏）	滿蒙（一四の九）	滿洲文化協會	昭、八、九
四平街	滿洲主要都市要覽	滿鐵	昭、一二、四

鐵嶺市

略史

前漢、後漢、三國及西晉の諸時代を通じ、幾多の變遷を經、名稱も渤海後代は銀冶、富洲、後銀洲等と呼ばれ、清朝に入つて、鐵嶺の名稱が用ゐられた樣である。東清鐵道が敷設される當時は一面の沼澤地であつたが露西亞は埋立工事をなし軍備、警察等を設備してゐた。戰後日本の手に歸してより日本人の來住する者が多くなり、滿鐵附屬地の建設によつて諸般の施設が益々完成して行つた。

康德四年十二月一日、附屬地行政權の移讓により、新に市制を布き、城內、附屬地を一括して鐵嶺市が誕生した。

市の概貌

遼河航行の全盛時代卽ち、日露戰役前後頃までは近くの馬蓬溝の良碼頭を有し、南滿に於ける唯一の集散市場として南方營口の繁榮と共に水路による商取引極めて廣く、遼河流域圏內の特產取引が極めて旺盛であつたが、鐵道開通後は、水運頓に衰へ、又東方地方の出廻り減となつた傾向であるが、尙西方法庫、康平の大背後地を控え、大豆、大麻子類の製油原料を首め、高粱、粟、米等の出廻り多く、殊に粟

は鐵嶺粟として知られ、精穀業は最も盛である。又棉糸布業は老舗を有して今尙盛な取引が行はれ、殊に滿洲事變以來、平齊線方面の需要に伴ひ、織機臺數も千臺以上に達し、好現象を呈してゐる。然し、南方奉天の異常な發展に押されてやゝ市況不振の感があるが、尙豐富なる物資、附近の鑛產等あり、又觀光都市として景勝の地を有して居る關係上、繁榮の素質を失はないであらう。

觀光地鐵嶺（龍首山）

驛より十町、鐵嶺城東門外にある。山頂までは坦々たる數町の道拓け、頂上に慈淸寺及九級の喇嘛塔、故川崎軍政官の記念碑等が建立せられ、其眺望頗る開濶、東は柴河の淸流潺々としてその麓を洗ひ、遙かに重疊たる縣境の連山を望み、西は鐵嶺全市を一眸の中に收めて廣漠たる滿洲平原に面し、遼河の長流は帶の如く蜿蜒として遠く西天に連り、白帆の緩かに去來する大陸的風光は全滿に其の比を見ざる絕景である。殊に昭和八年秋以來新に市街より山上に至る遊覽道路建設され、車馬の往來自由となり、更に山上に賣店其の他諸般の施設を見て風致一段と加はり、沿線より遊覽客も頓に增加し、山上は連日殷賑を呈してゐる。南滿隨一の景勝行樂の地である。

（慈淸寺）

唐代の開基であつて千餘年の歷史を有し初め秀峯寺と稱へられ、慈淸寺とは淸時代になつて呼ばれるやうになつたものである。

（白　塔）

山頂の白塔は、明の弘治二年、信士高環氏の建立にかゝる八面九級の喇嘛塔である。

（看花樓）

萬曆年間、此地に鎭守總兵の官より寧遠伯に補せられたる勇將李成梁及其子李如松一族の遺跡であつて東門外にある。李如松は朝鮮遠征の時、明の總指揮官として朝鮮に出動した武將である。

（圓通寺の白塔）

鐵嶺城内にある圓通寺は、往年奉天省一帶の地域に於ける道觀總本山であつて、始めは佛を本尊としたが同治七年以降、老子を祭る道教觀となつた。白塔は八面十三層、千九百年以前の創建にかゝり、本

天省第一位の古塔であると。

（日露戰跡）

奉天會戰に敗れたる露軍は、鐵嶺を最後の陣地として龍首、龍尾一帶の高地を利して設堡工事を完成し、東南撫順方面より來る日本軍を迎擊しやうとしたが、日本軍の攻擊に、忽ち敗走し、三十八年三月十六日皇軍の占領する所となつた。今日歷然と當時の戰跡を殘してゐる。

帽峯山は驛の東南約一里の處にあり、日露の役の際黑木軍の鐵嶺攻擊準備地點であつた。

鐵嶺市諸機關

鐵嶺市公署　鐵嶺縣公署　警察廳直轄(一)派出所(一六)　稅捐局(一)

商工公會　專賣局　鐵嶺地方法院　鐵嶺地方檢察廳

區法院　區檢察廳　監獄　興農合作社

郵政局　電報局　電話局　中銀支行

興銀支店　大興公司(三)　國際運輸　市立醫院

協和會　電業出張所　鐵嶺(農科)國民高等學校(省立)

鐵嶺女子國民高等學校(省立)　鐵嶺商業學校　滿人小學校　日本人小學校

青年學校

（銀行及會社）

株式會社日華銀行　鐵法長途汽車股份有限公司　秦隆合名會社(合名)

鐵嶺市立醫院　勞工協會出張所　勞工協會鐵嶺縣出張所

資料

題名	書名	發行所	發行年月
鐵嶺面積人口……新設市の面積人口一覽表		內務局	康、四、一二
鐵嶺案內……同	表題	鐵嶺商工會議所	昭、九、六

概要

本溪湖煤鐵公司

鐵　嶺　市……滿洲國現勢（康德五年版）　滿洲國通信社　康、五、七
（康德六年版）　康、六、八
鐵　嶺……簡易滿洲案內記　滿鐵　昭、一三、一一
鐵　嶺……滿洲主要都市要覽　滿鐵　昭、一二、四

本溪湖市

本溪湖といふ地名の名稱は、起源の詳細を極むる事は出來ないが、縣の西方に本溪湖があり、湖水は東に流れて太子河に入る。此湖名より來てゐるといつてゐる。清の乾隆年間に於て既に部落を形成してゐたやうである。

市街は四周を山で圍まれ本溪湖河（火連寨河）の、溪谷に開けた狹長な地に立つて居る。駱駝山、兜山柱山が東北の二面に聳立し、本溪湖河の太子河に合流するはるか東の方には平頂山がある。

本溪湖河の右岸は河東街と總稱され、大倉山の麓より石炭の礦區、そこに煤鐵公司の事業が營まれて居る。宿舍が並んで、上流には滿洲人街がつゞき缸窰業者等が住んでゐる。本溪湖の別名を窰街と稱し、古來より水甕製産地であつたからだといふ。

左岸は河西街と稱され背後の山には殆ど悉く石灰岩の露頭を見る。此河西街は商業地區である。

本溪湖は沙河大會戰の攻撃目標であつた。そして兜山はイワノフ中將の軍團によつて奪取を圖られ、我が守備軍苦戰頑守し、救援の島村旅團奮戰して前後五日の戰に彼我の死傷七千を算したのであつた。

當地方の石炭採掘は遠く乾隆年間より始められ、當地の水甕製造の燃料として使用し、又附近の鐵鑛を採り盛に製鐵を行つてゐた山である。咸豐、同治の頃は最も盛であつたが種々困難に遭遇して中止の

形になつてゐた。明治三十八年に、大倉組が炭山に着手し、四十三年に日清合辦本溪湖煤礦公司を成立し、當時の大洋銀二百萬圓を資本としたのである。四十四年煤鐵有限公司とし、滿洲國に入つて日滿合辦となり、一千萬圓の資本であつたが、滿洲重工業株式會社の成立後、種々の關係上、同會社の子會社となり、現在資本金一億圓、滿洲國準特殊會社である。

製鐵業を主とし、副產物工業として、骸炭、硫安、硫酸、コールタール、耐火煉瓦、耐火モルタル、鑛滓セメント、鑛滓煉瓦等を生產して居る。

廟兒溝鐵山よりする鑛石を主として用ひ、製鐵用の滿俺鑛は安奉沿線より買鑛し、石灰石及骸炭は此處にて採掘製造する。

本溪湖市諸機關

本溪縣公署	警察署	市公署	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	專賣局	營林署分署
中銀支行	興銀支店	大興公司(三)	國際運輸
協和會	本溪湖工業實習所(直轄)	本溪湖(工科)國民高等學校(省立)	
滿人小學校	日本人小學校(二)	青年學校	稅捐局

(會社)

株式會社本溪湖煤鐵公司(滿洲重工業開發株式會社の子會社)		本溪湖坑木株式會社
本溪湖洋灰株式會社	本溪湖石灰株式會社	本溪湖ドロマイト工業株式會社
勞工協會出張所	勞工協會本溪縣出張所	

資料題名	書名	發行所	發行年月
本溪湖事情	同表題	本溪湖地方事務所	昭、一一、四
本溪湖	簡易滿洲案內記	滿鐵	昭、一三、一一
本溪湖街	街の區域調定	民政部	康、四、三
煤礦の思ひ出(本溪湖)(曹鐘海)	南讀(四九)	大同學院	康、五、四

遼陽縣

概史

支那戰國時代に燕が遼東の地を收めて群治を置き、襄平と稱したのが此地の舊名であるが、遼陽の地名を以つて呼ばれたのは漢代に於ける遼陽縣の設置を以つて其の嚆矢とする。南北朝の頃には一時高句麗の領土となり、遼東城が築かれたと傳へられ、今城の北東に其遺跡がある。唐代に至つて遼州と改稱せられ、其後一時安東都護府が此地に移されてから遼東の首都となつたが、之が廢止せられてからは、遼代の東京として重視せられ、元代には初め東京、後に遼陽等處行中書省を置き、明代には遼東都指揮使司の所在地となり、何れも遼東に於ける政治の大中心地であつた。清朝に至つて奉天遷都前は東京と稱し、此地を本據としてゐたが、遷都後は一時奉天府の管下に屬し、康熙三年再び獨立して遼陽州が置かれ、民國二年遼陽縣と改稱された。東三省時代より奉天省に屬し現在奉天省管下にある。

地勢

遼陽縣は奉天省の西南に位し、東は本溪縣、東南は鳳城縣、岫巖縣、海城縣に、西は遼中縣、北は瀋陽縣に接し、長白山の支脈蜿蜒として南に延び、本縣の東南山多く、最も著しきものは千山である。其他諸峯約百餘枚擧に暇あらず。縣の西北は澤多く、太子河流域は最も長く、諸水此河に集る。其源は興京縣に出で本縣のほゞ中央を西流し、遼河の一支流を爲すものである。太子河流域は本縣農業の中心で

ある。

縣の物産

農産は高粱を第一とし、大豆、其他の豆類、粟、大麥の類、特用農産として棉花、煙草、麻類、馬鈴薯其他の野菜類が主なるものである。

森林は千山に、五十方滿里ばかりの林區がある外は見られないが、これとても、林業として伐採する程のものではない。現在苗圃を設け植樹奬勵中にて各種の苗が生育しつゝある。

畜産は家畜として養はるゝ程度で、家畜、家禽共、縣全帶としては現在所有數何れも萬を越えて居る。牛、馬、騾、驢、豚、羊であるが、羊は頭數に於てはるかに少い。

本縣の東南山岳地帶は、一鑛産豐富地帶を成し、現在開採してゐるものに、煙臺採炭所の堡等處炭坑昭和製鋼所開採の大孤山弓張嶺等の鐵鑛で、其工場規模の大なる宏事、實に滿洲製鐵業の王座である。其他城東、水泥公司はすでに設立せられて六年を經、現在の出品は頗る佳良、尚未開採のもの、金、雲母石灰石、金銀、銅、珪石、向雲石、螢石、石綿、鐵、苦土石、銅、硫化鐵、滑石等、現在奉天にて調査せられたるもの凡そ五十以上、本縣鑛業の概況である。水産は太子河。沙河等の河にて淡水魚の棲息は見るが、農民が、暇の時に漁獲して食用に供する位で、生計の爲めにするものはない。

都邑劉堡街

劉堡街は遼陽縣城の西南、縣城を距る四十五滿里、街は略長方形を爲し、街境には山無く僅に小河が中央を貫流して居る。

劉堡は清の天命初年に劉なるものゝ次子が此地に居り劉二堡と地名を改めたといふが現在は街制を布かれ劉堡街といふ。街からは鞍山に出るを最も便とし、自動車の便がある。又、遼陽へも自動車の便

がある。

此地は蔬菜栽培に適してゐるため將來、鞍山、遼陽を目標として蔬菜の栽培方面に發展すべきである。水質はやゝ鹹性をおびてゐる。日本內地人は現在わづか四、五人居住してゐるに過ぎない。

附屬諸機關

警察署　郵政局　農事交易場　家畜市場

男、女國民優級學校各一　國民學校七　佛教、道教、基督教、回教等の諸機關

千山

千山驛は滿鐵沿線であるが驛の東方に滿洲の名山千山がある。山は外觀の複雜なるに似ず割合に淺いが、山谿と寺觀との諧調が甚だよくとれて居る。

北嶺には奇峰五佛頂、南嶺には千山最高の千人臺が聳え、全山花崗岩の風化面白く且つ松柏峯に這ひ谿を埋め、春は梨花、秋は紅葉に一入の美を添へる。溪は四十八溪とし、五大禪寺と、二十五院がある。時々山火事を起す事があるが不思議と靈山の寺院は類燒をまぬかれる。

附近炭坑

煙台驛から東方約十二粁、撫順炭坑の所管に屬してゐる。同炭田は古く高麗人に依つて採掘されたとの事である。明治三十四年露國人が採掘してゐたが、日露戰役によつて日本軍に占領せられ、滿鐵の經營する處となつた。東煙台は明治三十七年十月から翌年三月まで我が滿洲軍總司令部を置き沙河戰及奉天戰を統帥した地で記念碑が建てられて居る。

附屬諸機關

郵政局　電話局　日本人小學校

其　他

管轄警察署所在地

黃堡　沙滸屯　太安平　亮甲山

税捐局分所所在地
郵政局所在地

七嶺子	大沙嶺	吉洞峪	佟二堡
劉二堡	大路煙台		
城昂堡村	隆昌洲村	劉二堡街	唐馬寨村
七嶺子村	大安平村	湯河沿	千山
沙河	大干溝子	向陽寺	張臺子
東京陵	羅大臺	沙滸屯	小屯子
新城	櫻桃園	判甲爐	大孤山子
上石橋子	摩雲山	吉洞峪	亮甲山
東新堡	上麻屯	孤家子屯村	浪子山
河欄溝	上達連河村	沙嶺	黃泥窪
大紙房	佟二堡村	沈且堡村	小煙台村
羅大台	營城子	大路煙台	上柳河子村
大窰	大東山堡村	李大人屯村	煙台
小北河	弓張嶺	首山	石家峪
懿路	黃堡	黃金屯	半拉山
三家子	大達連溝	十里河	大東山堡
小煙台	柳條寨	大黃金屯	古城子

河洪堡　常家窩堡　大駱駝背　穆家堡

電報局所在地　立山　其他張台子村、八掛溝、櫻桃園村等に電報を通ず。

電話局所在地　煙台炭坑　煙台

資料

地名	書名	發行所	發行年月
遼陽縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
遼陽縣産業概況	實業部月刊(三の二)	實業部	康、二、七
遼陽縣一般狀況	同　表題	縣公署	康、四、六
遼陽名勝古蹟案内	同　表題	修養團遼陽支部	昭、九、
遼陽縣概況(高作成)	金融合作社(四の八)	會融合作社	康、五、八
遼陽縣農村實態調査報告書	産業部月報(二の五)	産業部	康、五・五
劉堡街事情	同　表題	劉堡街公所	康、六、一〇
遼陽縣康德三年度農家經營經濟調査	康德三年農家經營經濟調査(第一分册)	産業部官房資料科	康、五、一二

遼中縣

槪史

唐虞夏周の時代には青幽二州に屬してゐたが、其後幾多の變遷を經て光緒三十二年に遼陽州の西部、新民府を合せて新に縣治となつた。遼河流域は巨流河(遼河)を中心に、遼東といひ、遼西といふ漠然たる呼稱があるが本縣の中心を遼河が流れて居るから遼中といふのであらう。民國時代より奉天省に屬し、滿洲建國後もずつと奉天省管下にある。

地勢

東部より南部にかけては遼陽縣に隣りし、北は新民、西は錦州省臺安縣に境して居る。地勢殆と低平標高一〇〇米を越ゆる所すらない。縣の稍中央より西部を北より南に遼河が貫流し、東境には渾河が奉

天方面より流れて南流して居る。これらは水運の便を與へる事はよいが、夏季の洪水には大いに惱まされる。

縣の物産

大豆、高粱、大麥、小麥、粟等が縣下の主なる農産で、棉花の栽培も在來種ながら大分作られて居る其他、落花生、馬鈴薯等。

家畜は、騾、豚、馬、驢等で牛、羊の數は少ない。林産、鑛産の見るべきものは勿論ない。

水産は遼河の淡水魚があり、鯽魚、黑魚、鯰魚等が漁獲せられる。

都邑遼中

遼河河畔を去る六滿里、奉天より一四〇滿里の地點にある。遼中縣公署の所在地で遼中縣下第一の都邑であるが家屋の構造、道路、其他何等文化的施設を見ずまだ邊邑の域を脱しない。本街は原名を阿付牛衣といひ、光緒三十四年設治せられ、康德四年十二月縣城街を遼中街と改稱し、今日に至つて居る。

奉天遼中間に民營バスの便があり、街より稍離れて遼河に出る事が出來るが、舟運の便は小舟の通行に過ぎない。貨物輸入系統も最近では陸路をとるに至つて居るが運賃多額を要する爲め、日本品日用雜貨は特に物價が高い。住民は殆ど農業に從事して居るが街の水質は不良である、未だ水道の設備は出來てゐない。

遼中街諸機關

遼中縣公署	街公所	警察署	稅捐局
區法院	區檢察廳	司法公署	郵政局
電報局	電話局	興農合作社	專賣局
中銀支行	大興公司	協和會	
遼中(農科)國民高等學校(省立)		遼中實業女學校(省立)	滿人小學校

資料

小北河諸機關
警察署所在地
稅捐局所在地
郵政局所在地

縣立醫院　勞工協會出張所　滿洲棉花株式會社作業所　教養工廠
農民修練所　苗圃　圖書館

遼中縣にある遼河の一埠頭で遼中より四五滿里、奉天より一九〇滿里、諸機關も備はる大部落であつて商取引も行はれてゐる。河岸には五、〇〇〇米に餘る堤防を築いて河の氾濫を防ぎ、當地を境として下流地方は民船の航行が比較的頻繁である。

農作物は大豆、高粱、棉花、小麥、稗等で、冬は主として陸路により、奉天、遼中、遼陽等と商取引を行ひ、夏は民船により營口と取引して輸送してゐるが、運賃の關係によつて、判然としてゐるわけではない。

警察署　郵政局　大興公司（小新民屯にもあり）

其他

朱家房　滿都戶　小新民屯
老達房村　小新民屯
茨楡坨　達都牛家　滿都戶村　老達房村
冷子堡　養士堡　于家房　大黃旗堡
楊子圍子　後馬虎營　小新民屯　陸灘圍
上臺子　黃花甸子　卡力馬　三臺子
蕭寨門　媽媽街

老達房

題名	書名	發行所	發行年月
遼中	省政彙覽(奉天省篇)	國務院情報處	康、四、二
遼中縣城	滿蒙都邑全誌	日刊支那事情社	大正一五、一〇
遼中	遼河	滿洲事情案內所	昭、一〇、七
老達房	同前	同前	同
遼中金融合作社管內經濟事情	金融合作社(五五)	金融合作社聯合會	康、六、一一
遼中縣康德三年度農家經營經濟調查(山本)	康德三年農家經營經濟調查(第一分册)	產業部官房資料科	康、五、一二
遼中街事情	同表題	遼中街公所	康、六、一〇

本溪縣

概史

淸朝光緒三十二年本溪湖に政治局を設け、遼陽縣の東部、鳳城縣の北部、新賓縣(現在の興京縣)の南部の各一部を割き本溪縣と稱し、奉天省直轄として總辦をして一般行政を執らしめた。本縣の歷史はこれより始まつて居る。民國三年馬賊の襲擊を受け、縣公署は勿論各主要機關は全燒の災厄に遭つた。滿洲建國後、大同元年三月、民國時代より引續き奉天省に屬し、今日に至つて居る。

地勢

東は興京縣及桓仁縣に、南は鳳城縣、西は遼陽縣、北は撫順縣に境して居る。

縣の西部を安奉線縱貫し、本溪湖の名は遍く知られて居るが、長白山脈の餘脈は沿線眼前に迫り、是等大小數百の山岳重疊し、沿線一步外は實に僻陬の地であつて僅かに太子河岸及山腹の傾斜を利用して田畑の耕作を爲して居る狀態である。

太子河の支流は縣內到る處を縫ひ、遼陽縣に向ひ遼河に通じてゐる。特に支流中の高麗營河、沙河、淸河の三河沿岸は水田が行はれ本溪縣に利する處が多い。

到る處山岳起伏し平地に乏しく、只小邑を中心とする附近に些少の平甸耕地を有するのみである。其他は山岳の斜面で急峻なる山嶺と雖耕作出來る迄叮寧に耕してゐるといふ狀態で、傾斜面に耕地層々相重つて山頂に及ぶといふ奇觀を呈し、他の廣大なる平原を有する滿洲各地とは凡そ異る現象である。而も豐年と雖自給するに足りない。

縣の物産

大豆、高粱、粟、水稻等であるが面積に比し生産が少ない。

畜産は牛、豚、羊を主とし驢、騾、馬等。

本縣内立木地五千陌、濶葉樹立木蓄積量四二五、〇〇〇立方米、安奉線に出されるものは坑木が多い。

本縣内の鑛産は極めて豐富であり、現在本溪湖製鐵所（本溪湖煤鐵公司）にて使用中の鐵鑛石炭を主とし調査によれば、金、鐵、石炭を始め、十四種の貴重なる鑛物資源を有して居り、將來開發を期待されて居る。

柞蠶業には好適の地で、從來飼養に從事する者が多い。一時柞蠶業が下火になつてゐたが、纖維資源の不足から斯業は有望である。

橋頭街

橋頭は細河の清流に沿ふ。滿洲稀に見る水鄕で、山奇しく水綠なる自然の美に加ふるに諸設備が盡されて土地全帶が一大遊園地となつて居る。春より秋にかけて最もよく、殊に夏季の避暑休養に奉天方面より來遊する者が多い。

橋頭は附近にある石河寨、賈家堡子、康家堡子、金家堡子等の村落と共に一括して白雲寨と總稱されて居る。橋頭と呼ばれたのは百年餘り前のことである。物産は木材、木炭、木粉（線香の材料）等の山貨、及苹果、苺、川魚、石細工（硯等）等である。

橋頭街諸機關

警察署　稅捐局　郵政局　電報局　街公所
電話局　日本人小學校　青年學校　大興公司

連山關

滿洲の輕井澤と呼ばれる地、分水嶺に近く、海拔千百尺、山巒に圍まれ細河の清流に沿ふて居る。釣魚、水遊びに適し、夏涼しく、小學兒童の山間聚落地に選定せられる。鬼つゝじ、福壽草、芍藥、梨等が多く、高山植物もある。

坑木、薪炭、木粉を產する。町は一筋町でポプラの壯大な並木が長くつゞいて美しい。連山關橋頭間には下馬塘、南攻等、細河に沿ふて川遊び、釣魚、キアンピング、植物採集に好適の地がある。

連山關諸機關

警察署　稅捐局分所　電報局　電話局
連山關地方觀象所　日本人小校　郵政局

田師付

本溪湖より分岐したる溪城線は石炭の產地牛心台、溫泉地溫泉寺等を經て礬土頁岩を產する小市等を經、更に東に伸びて田師付に至つて居る。田師付は石炭及礬土頁岩を出す。此線は東方堿廠に伸長する豫定で沿線各地の石炭、礬土頁岩、銅等の資源開發に最も貢獻するものである。

田師付諸機關

郵政局　日本人小學校

其他

警察署所在地

小市　賽馬集　堿廠　清河城

稅捐局所在地

歪頭山　堿廠　下馬塘

郵政局所在地

祁家堡村　下馬塘付　賽馬集村　南坎村
火連寨村　石橋子村　小市村　牛心臺村

電報局所在地

城廠村	清城子	小甸子	歪頭山
代家屯	望城崗子	紅臉溝	張其寨
達貝溝	草河口		
祁家堡村	下馬塘村	宮ノ原	火連寨村
石橋子村	南坟村(電話局もあり)		

資料

題名	書名	發行所	發行年月
本溪縣	滿洲國地方事情	大同學院	康、元、四
本溪湖煤田調査報告	同表題	滿鐵	不明
本溪縣全圖	同表題	縣公署	康、三、一
橋頭街	街の區域劃定	民政部	康、四、三
本溪縣區域變更	政府公報(一六三八)	國務院	康、六、九、二九

撫順縣

概史

明代に於ける撫順は遼東指揮司使の管轄下にあつて、女眞人に對する防備の要區として瀋陽の中樞をなした。康熙三年承德縣設置され、同二十九年防禦四人を撫順に駐屯せしめた。光緒二十八年興仁縣を增設して之を隸せしめ、同三十四年五月興仁縣を廢して撫順縣を新設した。宣統元年四月上奏によつて撫順縣を千金寨に移し、民國二年よりは東邊道に屬したが、滿洲國に於ては之を奉天省の管轄とした。

地勢

瀋陽縣の東方に位し縣内は群山環列し東に薩爾滸山、鐵驪山等峙立し南に東洲嶺、關門山、北に大荒頂の峻峯が起伏して居る。河川は渾河を中心に蘇子河、[illegible]河、東洲河、[illegible]河は何れも北流して渾

河に入り、大柳林河南流して之亦渾河に注ぎ西流して瀋陽縣に入る。

縣の物産

農産の主なるものは大豆、高粱、粟、水稻、玉蜀黍等産出多く、大豆、水稻は輸出し、麻實、荏等の特用農作物を出す。

礦産は撫順炭田各所の石炭産出は其質の良好なる又、世界有數の大露天掘なる點に於て、偏く知られて居る處であるが、其他、金、銀、珪石、鐵鑛等の發見もあり、各人或は會社によつて出願されて居る。

都邑營盤

奉吉線沿線、奉天より七八粁の東方にある。營盤とは明末清初の時、明軍遼東經略楊鎬が、清の太祖の軍を討伐するために、其本營を設置したところから起つたものである。附近に少量の石炭を産する。

驛の東南に、老城、碑樓子の舊蹟がある。

營盤諸機關

警察署　郵政局　電報局

元帥林

元帥林は舊名を高麗營子といひ、張作霖が此地を陵所と遺言して後、元帥林と改められた。張學良は遺言により民國十八年(昭和四年)工費百五十萬圓を以つて陵墓建設に着手してゐたが、大半完了した時、事變が起つた。陵は驛を距る南方一粁、水龍臥と稱せらるる小丘陵に設けられ、鐵龍山の懸崖を間近に望み渾河の清流を控えた景勝の地である。元帥林の驛は專ら此陵のために設けられたものであつた。

其他

警察署所在地

撫順城内　塔爾峪　高官寨　東社

馬郡鄲　閣老溝

郵政局所在地

前甸子　下章黨　元帥村　營盤

二伙洛　康大人山　海浪寨　松樹咀子

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
撫順(鐵路總局)	奉吉線案内	鐵路總局	康、元、六
撫順縣事情(大同學院)	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
撫順縣事情	滿鐵調査月報	滿鐵資料課	昭、八、一一
撫順縣統計彙刊	同表題	撫順縣公署	康、三、
撫順炭礦(岩崎重三郎)	石炭	內田老鶴圃	昭、一二、七
撫順縣統計彙刊(康德三年)	同表題	撫順縣公署	康、四、八
撫順炭礦	同表題	撫順炭礦	昭、一二、
撫順	簡易滿洲案内記	滿鐵	昭、一三、一一

瀋陽縣

概史

舜時代營州に屬し、下つて漢時代には挹婁縣に編入され初めて縣なる名稱を受けた。更に下つて渤海大氏が瀋州を設置してより瀋なる文字を用ゆるに至つたと。金朝になつて顯德軍を置き五縣を治めた。元になつて各五縣に鎭守司を置いて金の降民を治めしめ、尙瀋州に城を築き外敵に備へて居た。明の太祖の時代には瀋陽中衞と改め遼東都指揮使司をして治めしめた。清朝の初代今の奉天を盛京とし順治十四年奉天府を設け、更に康熙四年盛京の周圍を承德縣と改め(今日の瀋陽縣)以來此の地は畿內の主縣となつた。宣統三年奉天府に倂合せられ、民國二年府、廳、州を一律に縣と改められたる時、奉天府も亦必然奉天縣と改稱せられたが、同年省と同名なるを以て、瀋陽縣と改名した。瀋陽なる文字は昔瀋陽衞と稱せられた事と瀋水(渾河)の陽にあると言ふ因緣によつたものであると。

滿洲の天地を一變した滿洲事變は昭和六年九月十八日突如として當縣柳條湖附近に起つた爆音砲聲に火蓋を切つたのである。その影響深刻擴大し、警察官等は逃亡、一般民衆其歸趨に迷ひ、縣下鼎の沸くが如き混亂狀態となり、何れも安全地帶に避難する狀態であつた。舊東北軍が奉天を追ひ出されて後奉天市内は治安が維持せられたが、縣下は其手及ばず、久しく匪賊、僞勇軍隨所に暴威を振つてゐた。奉天城南十二三里の處に蟠居してゐた匪賊の頭目など昭和七年の十月に至るまで、恰も一大敵國を控へたる感を縣當局に與へて居た程である。のみならず縣警務局長始め幹部連が滿洲國轉覆陰謀を企てゝゐる等の事があり、事變をめぐる縣政は、先づ治安第一主義でなければ行はれなかつた。參事官、指導員の苦心慘膽漸く功報ひられ、其後、不良分子の一掃後輝かしい建國と共に縣政日に進み大都市奉天を控へて產業民政共に順調に進んで居る。奉天省管下中心の縣である。

地勢

本縣は省の中央に位し、東は本溪、撫順の兩縣に西は遼中、新民縣、南は遼陽、北は鐵嶺、法庫の二縣に境して居る。

境内東南部に圍山、麥子山、黃山等、東北部に尺柱山、興隆嶺等の連山があるが何れも二、三百米のものにて山脈と稱すべき程度のものではなく、丘陵の連續に過ぎない。渾河は遠く長白山に其源を發し東方撫順縣より本縣に入り、奉天市の南端に沿つて遼中縣に入る。渾河の支流更に細流あり何れも遼河支流と相待つて境内を灌して居る。

縣の物産

本縣は奉天省城を圍繞する坦々たる沃野であつて峻嶺はなく、渾河の本流及支流、遼河の分流等により土質肥沃最も農業に適して居る。現耕地は可耕地の九七%位で未耕地は非常に少ない。主要農產は高粱を第一とし、大豆、粟、大麥、小麥、玉蜀黍、其他種類生產共に豐富である。又棉花、葉煙草、各種

蔴類等の生産多く、大都市を控へたる關係上、果樹、蔬菜の栽培も一段と他縣にすぐれて居る。豐年の時など、輸出數量は多く村民の富大いに上る狀態である。

牧畜は農家の副業程度であるが全縣内に家畜數多く、豚が最多數であり、騾、牛、驢、馬等、近年羊の飼育も盛に行はれて居る。種畜場を設定し、馬、牛等種畜を購入して現在改良を計つてゐる。

全縣内に林地として見るべきものは全くない。只わづかに墓墳の續きに多少の森林を見る。松、楡、柳の類である。

縣の東南より東部にかけて丘陵性をなし豐富なる鑛區を有して居る。

水產は縣内河は多いが漁類の棲息少く、水產と稱すべきものはない。

開拓事業

農業開拓團ではないが、鐵道自警村のために、奉天に、奉天自警修練所が置かれて居る。

都邑

瀋陽縣の中心は奉天市であり、奉天市の中に縣としての諸機關が皆置かれてあつて奉天市の外、近來急激なる發展を見せてゐる蘇家屯街が南方にある。

蘇家屯街

安奉線の分岐點として一見何等特異性を有してゐない樣であるが、軍事上並に交通上、特に貨物輸送上に於て、特殊使命を有してゐる街である。

奉天の南方十五粁、康德四年十二月街村制度施行の際、指定街となり、近來奉天の發展に呼應して急激な伸展を見せてゐる街である。卽ち奉天鐵西區は工場數が激增してゐるが、近來資材入手困難な關係から、稍鎮つてゐる形で、これが打開策としての動きが、蘇家屯方面に現れたものと見られる。蘇家屯方面には企業上比較的容易なる工業が企業化せんとしてゐる。現在設立認可方申請中若しくは許可濟の諸會社は三十四、五會社に上つて居る。

蘇家屯街は急激なる發展に順應して、都邑計畫の修正に迫られ、街公所、瀋陽縣公署、奉天省公署に於て、將來に備へる爲め、康德七年より十五年計畫を以つて大都邑計畫を實施する事になり、第一期計畫は五ヶ年繼續事業となつてゐる。

蘇家屯街諸機關

警察署	郵政局	電報局	國際運輸
税捐局分所	電話局	日本人小學校	株式會社滿蒙牧場
街公所	青年學校	新城子に農科國民高等學校あり	

皇姑屯諸機關

專賣局分局	國際運輸	日本人小學校

其他

警察署所在地

祝家屯	柳匠屯	沙嶺堡	馬三家子
財落堡	蒲河		

税捐局分所所在地

新城子	深井子	陳相屯	姚千戸村
十里河	吳家屯	沙河	馬三家
新臺子			

郵政局及郵政局辦事處所在地

姚千戸屯	吳家屯	白塔堡	十里河
沙嶺堡	舊站	福陵街	文官屯村
渾河堡	新城子村	新臺子	沙河站
施官屯	柳匠屯	陳相公屯	英守屯
蒲河	大蔡臺子	虎石台	懿路

電報局所在地		
馬三家子	彰口站	
陳相屯村	虎石臺村	沙河村	渾河村
楡樹臺村	深井子屯	新城子村	新臺子

電話局所在地	
新城子	新臺子

學校所在地		
桃仙屯農業學校（省立）	沙嶺堡（農科）國民高等學校（省立）	滿人小學校

資料

題名	書名	發行所	發行年月
瀋陽縣政概況	同表題	縣公署	康、二、七
瀋陽縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	康、二、一
瀋陽縣公署財務局徴收概況表	同表題	縣公署	康、二、四
瀋陽縣分區圖	同表題	縣公署	康、三、
瀋陽縣一般狀況（一、二）	同表題	縣公署	康、四、七
蘇家屯街	街の區域劃定	民政部	康、四、三
蘇家屯街	奉天商工公會調査月報（三の二）	奉天商工公會	康、七、二
躍進の瀋陽縣概況（部外秘）	同表題	縣公署	康、六、四

鐵嶺縣

概史

秦の始皇帝が燕を滅した後、望平縣と稱へられ、後漢、三國、晋時代は玄菟郡に屬し、高句麗時代は之に征せられ、唐時代富州と改められ、遼代は銀州、後明代に及んで初めて鐵嶺縣と改め、遼東都司の下に置かれ、清の康熙三年今の鐵嶺縣が定められたのである。民國時代も同じく奉天省下にあつたがそれ以前露西亞が南滿線敷設にあたり、明治三十二年鐵嶺を建設し、西門外に一大市街を建設せんとした

のであるが日露戰爭により、我日本軍の手中に歸し、戰終つて後日清間の新條約に基いて初めて鐵嶺に商埠地を設け、ロシヤ人に代つて日本人が入り來つたのである。滿洲事變後、滿洲國の省政改革等があつたが、當縣は奉天省に屬し、今日に至つて居る。

地勢

本縣は東北及東は開原縣に、東の一部を淸原縣に接し、南部は撫順縣、西南は瀋陽及新民の兩縣に境し西北は法庫に隣りしてゐる。

縣の東半部は所謂山岳地帶に屬し、西半部は槪ね平原であつて、遼河は其中間を北より南に貫流し、柴河及汎河の二支流が之に注いでゐる。山地帶は山岳甚しく急峻でないが地形錯雜して、山間の平地には所々に耕地があり、最近、鐵嶺市附近及其東南方には水田の開發を見るに至つて居る。

縣の物產

昔は廣漠たる平野であつたが、今や大部分耕地となり、山嶽丘陵の頂上に至る迄、殆ど開拓し盡されて居る。農產の主なるものは大豆、高粱、粟、水陸稻、小麥等、其他各種の麻類、落花生、馬鈴薯等、又棉花の栽培も多少行はれてゐる。

牧畜は副業として營まれるものであるが甚だ盛で、耕作用、運搬用とし、農家には數頭の牛馬を飼育してゐる狀態である。馬、騾、豚を主として羊、驢、牛等、縣內にては畜產の改良增殖につとめ、滿鐵時代より例年改良豚に努めて來た。

縣の東南部は山地であるが禿山多く森林と見るべきものはない。縣內にては林業知識の普及、綠化運動等に努めて居る。

鑛產は埋藏豐富と見られてゐる。昔銀州といはれたのは銀が出たからであり鐵嶺も鐵を產出するからであるとの說もある位である。

鐵嶺附近の柴河は遼河に合流する大勾村附近、及び其上流地方の白廟子、革孤家子附近は良好な漁場である。鯉、鯽魚、鯰魚、扁花魚其他であるが漁獲高は少く、地場消費位のものである。

工業生産としては、精穀、織布、窯業、皮革工業、染坊、油坊等。

縣內諸機關

警察署所在地	熊官屯	大甸子	李千戶屯	新臺子
	夏家樓	阿吉堡		
郵政局所在地	大汎河村	鎭西堡村	夏家樓村	阿吉堡子村
	大甸子村	白旗寨	鷄冠山	當舖屯
	崔陣堡	三岔子	李千戶屯	横道河子
	百貫屯	遼海屯	下阮家窪子	范家屯
	腰堡	懿路	新臺子	山頭堡
	平頂堡	大青堆子	蔡牛堡子	鐵南莊
電報局所在地	亂石山	馬蜂溝	平頂堡	
	新臺子に進和商會(合資)あり			
大興公司所在地	阿吉堡	新臺子		

資料

署名	書名	發行所	發行年月
鐵嶺縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	大同三、二
鐵嶺縣	滿洲國地方事情(一)	大同學院	康、元、四
鐵嶺縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一

概史

地勢

開原縣

秦の統一事業成り開原は遼東軍に屬してゐたが、其後、高句麗國興り其版圖内に入つた。唐は高句麗を亡し、開原に黑水府を置いて治めしめ、唐代文化の遺跡を大塔に殘してゐる。遼、金の時代には咸平縣、咸州府といふ。元は咸平府をそのまゝ踏襲して治新を開原縣城に置き、後、開元路の治所を今の農安から開原に移した。これから咸平の地を開元と呼ぶ事となり、開元が對音の關係から開原となつたものと考へられる。

明時代は洪武二十一年三萬衛が置かれてゐた。清興るに及び、清の太祖は明が築いた開原の城廓を毀ち、改めて新しく築城した。これが即ち現在の縣城である。清朝が縣を開原に置たのは、康熙三年で奉天府に屬してゐた。民國時代を經、滿洲事變に遭遇するや、奉天に近く、九月十九日はすでに開原にも砲撃傳はり、縣長以下悉く逃亡した。よつて自治指導委員會を組織し、其後建國となり、諸般の政治も落付を見せ更に、康德元年登極の大典を迎へて民心愈々安定した。現在奉天省内。

本縣北は邊牆を以て伊通、昌圖に界し、南は山嶺を以て鐵嶺に、西は遼河によつて法庫を望み、東の方は東邊の連峰によつて淸原縣と堺してゐる。地勢は縣の東西を大約四分して東の四分の三は山岳地帶西の四分の一は平野と云ひ得るであらう。東方の山中に發して西流し遼河に注ぐ河川四河あり、寇河、淸河、沙河、柴河がこれである。東方一帶の道路はこの四河に沿つて延び、その文化圈は四河の峽谷毎に區分されて居る。西方は亮中河が遼河に流入する他、北方に若干の丘陵起伏あるのみにて概ね平坦である。

縣の物産

農産の大宗を爲すものは、大豆及高粱である。大豆以外の各種豆類、粟、稻、麥類等を産し、それらは何れも開原驛によつて、他縣よりの集中貨物と共に移出される。

家畜の種類は豚を以て第一とする。牛、馬、騾、驢、緬羊の飼育又盛に行はれて居る。

縣内には國營及民營の大規模森林がない。故に林業と稱すべきものなく、樹種は、自生の楊、柞、柳楡等多様であるが、民間の自由伐採にまかせ制限はない。縣立苗圃あり、植樹を奨勵してゐる。

縣の東半に鑛物多く、金、石灰、鉛等である。柴河の砂金は名を知られ、事變前には相當採取してゐた。事變により一時停止せられてゐたが、現在作業を續けてゐる。調査によれば、金、石灰石、鐵、鉛等の埋藏があるとの事である。

都邑開原街

開原街は舊滿鐵附屬地で俗に鐵開原といつて居る。此地はもと孫家臺と呼ぶ荒原中の一寒村であつたが、鐵道開通、開原驛の開設となつてより、從來の開原城内の繁榮を奪つて、返つて繁榮を極めるやうになつた。日滿人の來往年と共に多くなり、爾來特産取引の旺盛は之に伴ふ加工業をも誘致して市況盛となり、短時日の間に特産物の街が新興したのである。現在東山地方の中心地である。西豐まで通ずる開豐鐵路は本街の西家臺を基點とし、西豐より更に西安にも出でんとして居り、將來特産市場としての活況を見る事であらう。現在、年内から翌年三、四月までの出廻期には何千の荷馬車が集り、街路の交通を遮斷する程である。奉北交通株式會社の自動車は開原を中心として縣内によく發達し、東方には西豐縣城、李家臺方面、南方下肥地方面、西方通江口、昌圖方面に開通してゐる。

開原街諸機關

開原縣公署	警察署	稅捐局、同分所	郵政局
電報、電話局	街公所	商工公會	區法院
區檢察廳	興農合作社	專賣局	中銀支行(二)

興銀支店　大興公司　國際運輸　協和會

（學校）

開原(農科)國民高等學校(省立)　開原女子國民高等學校(省立)
滿人小學校　日本人小學校　青年學校

（會社）

開原市場株式會社　滿洲豆稈パルプ株式會社　亞細亞製粉株式會社　開原電氣株式會社
開原長途汽車股份有限公司　開原不動產株式會社　大通銀號(合資)
純慶茂公司(合資)　天利東油坊(合資)　勞工協會出張所

開原城街

開原城街は南の清河を距てゝ開原街まで十粁餘の地點にある。大同三年一月、時の參事官宮內虎雄氏が、街民の福利を謀り、開原城市民會を開き、自ら委員長となつて一切の市政を掌る事になつた。康德三年十一月暫行街村制により開原城廂街となり、康德五年一月、街村制により開原城街と改めた。本街は直接南滿線の開原驛に接して居るのではなく、自動車にて約三十分位を要し、又石家臺(開原街內)より開豐線に乘つて二十分位にして到達する。街は其繁榮を開原街に奪はれた形で、將來產業として有望視されるものもなく、現在の穀物取引其他の小商工業を營む外ない。

原城街諸機

警察署　街公所　區法院　區檢察廳
開原分監　稅捐分所　郵政局　電報局
電話局　交易場　開原城街商工分所　大興公司(三)
城內電燈分局　開原縣救療所

其他

警察署所在地

尙陽・堡　八棵樹　慶雲堡　蒿山堡
下肥地

郵政局所在地

蒿山堡村	下地村	尚陽村	貂皮村
八樹村	李家村	堡市堡	八寶屯
慶雲村	雙樓村	中固村	柴河堡
黄旗寨	威遠堡	馬市堡	石家臺
孫家臺	雙城子	汪哆羅束	耿王庄
新邊	貨郎屯	大高力屯	二社
西孤家子	後施家堡	蘇線堡	英城子
大白廟子	上肥地	馬家寨	下肥地
增家寨	葉山屯	古城堡	馬千臺
西龍灣	大寨	曾家寨	

電報局所在地

中固驛　金溝子村　石家臺(開原より配達の便)

大興公司所在地

八棵樹鎮

資料

題名	書名	發行所	發行年月
開原要覽	同表題	開原實業會	昭、一一、四
開原縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	大同三、二
開原縣政概況	同表題	縣公署	康、二、三
開原縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一
開原金融經濟(一二年八月)	海外經濟事情(二〇)	通商局	昭、一二、一〇
開原背後地特產物出廻統計(九月分)	通商局日報(二八一)	通商局	昭、一二、一二、四
開原縣一般狀況	同表題	開原縣公署	康、四、

開原街	街の區域劃定	民政部	康、四、三
開原城街事情	同　表題	開原街公所	康、六、一〇

新民縣

概史

漢代の烏丸の地で、西晉の頃は慕容氏に屬し、遼代には遼州始平軍の地となり、金代に至つて州を廢して遼濱縣と謂ひ、明代は所謂遼河套に屬した。淸の乾隆初年巨流河の巡檢を移駐して、當全境の地を承德廣寧の二縣に屬せしめた。嘉慶十三年二縣の管轄地を分割して新民廳となし、撫民同知を置いて奉天府の管轄とした。光緒二十八年新民府と改め其の管轄下に新設の鎭安縣(現在の黑山縣)及び彰武縣を置いたが本地域が餘りに廣濶に過ぎて統制に困難であつた爲め、光緒三十二年滿都戶、西佛牛祿、八角臺、冷子堡、達都牛祿、老達房、茨楡坨、沙嶺屯の一帶を劃して遼中縣を新設し、之を奉天府に隸せしめたが、其の後沙嶺屯は盤山廳に屬せしめた。同年新に法庫廳が設けられるに及び府境を劃分して小塔子を界となし、山上の舊塔以南鐵道線路を界として法庫廳の管區に歸し、更に鐵嶺、新民の舊界東西三臺子、大小桑林子、大雙臺子、大雙孟窩棚の六村竝に三面船より河口に至る線をも法庫廳に撥歸した。民國二年新民縣に改まり、遼瀋道に屬した。現在奉天省の管轄である。

地勢

本縣東は瀋陽縣、北は法庫、南は遼中縣に境し、西部は錦州省の彰武、黑山に接して居る。

縣內殆ど平坦、遼河は縣の東北部より入つて縱斷し南方遼中に入る。又、彰武地方より來る新開河は縣城新民を過ぎて遼河に入る。其他遼河の支流二、三南流し、夏季は水害が甚しい。民國四年大洪水を起し、全縣の三分の一が全く、不毛の地と化してしまつた事がありそれ以來一縣の經濟に大打擊を與へて居る程である。

縣の物產

一般農產としては高粱、豆類で殊に黑豆を出す。又大扁子の特產あり、縣の東部が肥沃地であるが他は荒廢地多く殊に巨流河の合する地帶は砂地帶であつて農耕地として不適當である。

家畜は、馬、騾、驢、豚等が多く、牛、羊は他に比して少ない。林產、鑛產の見るべきものなし。

遼河支流の中蒲河は無數の支流、小河が流入して水量豐富なるため淡水魚の鯽魚、黑魚、鯰魚等が漁獲せられ、漁業專門の者も居る。主として大民屯に移出する。

都邑新民街

新民縣公署所在地、奉天の西方六〇粁の地點にあつて奉山鐵路の主要驛である。清の乾隆年間に回教徒によつて開拓せられた街で特色を有してゐる。當時は新民縣と呼ばれてゐた。日清通商條約によつて商埠地として開設せられた。街は低地にあつて降雨時には浸水が甚しい。當地は農產物の集散地で商業は農產取引、雜貨等が多く、彰武、法庫、昌圖等と取引し、奉天より日本品の輸入が盛になつた。工業は、油坊、燒鍋、製粉、製布、木器具、鐵工等。

交通は鐵道の外、國營自動車が彰武に通じ、興隆長途汽車公司の民營自動車が、法庫に通じてゐるが新しい鐵道の建設もなく、滿洲建設景氣からは取殘された淋しさを呈し、人口は可成りに多いが房屋等近代的色彩があまりはいつてゐない。

新民街諸機關

新民縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	專賣局	中銀支行
大興公司(四)	國際運輸	新民(農科)國民高等學校(省立)	
新民實業女學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校	勞工協會出張所

大民屯

新民より巨流河を距て丶東南四十五滿里、此地方は新民縣の穀倉といはれる。勿論、縣下砂地帶多

洪水の慘害甚しく其中にあつて僅かに大民屯附近が農耕地に適してゐるといふに過ぎない。奉天の完全なる背後地であり、奉天へは一般作物の蔬菜類を馬車輸送し日用品を仕入れて來る。奉天へは毎日バスの運行もある。

附近に水田經營あり半島人の耕作による。

大民屯村諸機關

警察署　　税捐局分所　　郵政局　　大興公司

巨流河

巨流河は遼河の謂である。驛の東方柳樹茂る所に一條の濁流がある。即ち巨流河（遼河）であつて、遼東、遼西の據つて分るゝ所である。附近は泥濘ひどく洪水の時は何時も惱されてゐる。現在は大鐵橋によつて奉山線が通過してゐるが、鐵橋と雖、大洪水には屢々故障を起し、夏の雨期、奉山線不通が傳へらるゝのは大抵此附近である。唐の太宗が、高麗國討伐の時「泥淖二百餘里、土を敷き、橋を作つて卽ち渡るを得たり」と云はれてゐるのは此地の事である。清朝時代に屢々修築して漸く現今の樣になつたといふ事である。

其他

警察署所在地

平安堡　　白旗堡　　王三戸屯　　大柳屯
公主屯　　巨流河（水上）

税捐局分所所在地

興隆甸　　白旗堡

郵政局所在地

白旗堡　　巨流河　　興隆堡村　　興主屯村
蛇山子　　小塔子　　腰高臺子　　公主屯
柳河溝　　大黑山子　　大三家子

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
新民（日本外事協會）	滿洲帝國總覽	日本外事協會	昭、九、六
縣下都邑事情（山田久太郎）	滿蒙都邑全誌（上卷）	日刊支那事情社	大正一五、一〇
新民の工業狀態	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
新民縣一般事情と水產物生產並需給	關東州水產會報	關東州水產會	昭、九、七
新民縣事情	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、八、一〇
新民縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
新民	滿洲主要都市要覽	滿鐵	昭、一二、四

法庫縣

概史

法庫門は隋代の黑水、唐代に藍州の地であつたが其後幾多の變遷を經て、蒙古賓圖、博王兩王旗に屬し、更に清の康熙年間開原縣の管轄となり、光緒三十二年に至り、遂に新民、鐵嶺、康平三縣の各一部を割いて法庫廳を置いた。民國二年縣治を布き法庫縣と改稱せられたものである。現在奉天省に屬する。

地勢

本縣東は鐵嶺縣に、東北部は遼河を縣界として開原縣、昌圖縣に隣りし、西南は新民縣、西北は康平縣に接し、尙西南は興安南省及彰武縣と境してゐる。

地形殆ど平地であるが大體に於て縣の中央部即ち法庫門のある位置が稍高地となり四方に低くなつて居る。法庫の東方に、調兵山あり、西方孤家子附近に丘陵がある。河は遼河の本流が縣の西北部を南流し、他に二河あり、何れも遼河の支流で一つは中央を一つは西部を南流してゐる。

縣の物產

縣民の大部分は農民であつて主なる農產は、大豆、高粱、粟等。

都邑法庫街（法庫門）

畜產は各農家に於て相當盛に行はれ殊に羊の飼育數は省中第一位を占めて居る。牛、馬、騾、驢、豚等何れも相當數を有して居り蒙古人間に取引が行はれる。

林產、鑛產何れも皆無、水產は遼河の淡水魚が少々あるが、副業として少量漁獲するにすぎぬ。

明治三十八年日清條約によつて、通江口と共に開放せられた程其當時は遼河の航行も盛であつて該地も蒙古取引市場の第一を占めてゐる街であつた。然るに鄭家屯の開放せらるゝや蒙古貿易は鄭家屯に奪はれ、加ふるに遼河の水運は日露戰爭以來衰運の一途をたどつてゐる。更に鐵道の開通は該地が沿線でないために、他に貨物の集散を奪はれ漸次衰微の傾向となつてゐる。

市街は西北に鐵壁法庫の二山を負ひ、南に遼河支流の沙河を控へ邊門がある。柳條邊門十二中の一であつて、はじめ八戶門と名づけたが後法庫門と呼ぶに至つたと。

現在法庫縣城であり、諸機關も備はり、衰へたりと雖も昔の俤を留め商工業も盛である。現在では奉天より總局のバスも通じ尙蒙古境まで支線を出して北方康平迄通じて居り、北方は通江口、南方は新臺子方面にも通じ、其他民營バスが鐵嶺、彰武、新民、新臺子に通じバスの便は地方都邑としては最もよく開けてゐる。大豆、高粱、粟、豆粕、豆油、麻油、麻餅、麥粉、曹達等の取引が行はれ、營口、奉天、新民、鐵嶺等と取引してゐる。蒙古人の取引は、牛、馬、乳豆腐、皮類、酒等である。

法庫街諸機關

法庫縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	縣立衞生醫院	專賣局
中銀支行	大興公司（四）	電業營業所	街公所

三面船

法庫(農科)國民高等學校(省立)　法庫實業女學校(省立)　滿人小學校
益興當(合資)　勞工協會出張所

三面船は遼河埠頭の一であつて、夏季法庫門營口間の水陸運輸の中繼通路であるために、從來は船舶の出入並旅客共に多く、特産取引が盛であつたが遼河水運の衰微と共に、今は往時の隆盛を見る事が出來ない。

其他

警察署所在地

柏家溝　趙貝堡　依牛堡　丁家房甲
葉茂臺

郵政局所在地

大孤家村　丁家房村　登士堡村　三面船村
五臺子村　雙臺子村　秀水河村　韃子洞村
調兵山　葉茂臺　頭臺子　柏家溝
孤樹子　四家子　拉馬河子　依中堡子
團山子

資料

題名	書名	發行所	發行年月
法庫門	滿蒙都邑全誌	日刊支那事情社	大正十五、一〇
法庫門	省政彙覽(奉天省)	國務院弘報處	康、四、二
法庫門	遼河	滿洲事情案內所	昭、一〇、七
法庫縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
法庫縣下に於ける產業概況	海外經濟事情(三三の二四)	中屋三間印刷會社	昭、一三、一二

康平縣

槪史

蒙古博王旗の治下にあつたが、淸の嘉慶七年之を開放し、移住開墾を奬勵して以來、漸次發達を爲し光緒六年縣治を布くに當り、康平を縣城とした。民國時代より奉天省に屬し、現在奉天省管下にある。

地勢

本縣は奉天省の西北にあり、西部及北部は興安省に接し、東北は昌圖縣、南部及東南は法庫縣に接して居る。地勢殆ど平坦西北蒙古との境がわづかに高地になつてゐる。東北昌圖縣との縣境をなす遼河は南流して法庫縣に入り、西部蒙古との境に遼河の一支流が南流してゐる。縣城の西南方に陶代屯湖なるかなりの面積を有する湖がある。

縣の物産

農産物は、高粱、大豆、穀子、棉花、麻類等があるが産額は少ない方である。かつて棉花の栽培を奬勵して以來産額が增加してゐるが在來種のものであり、葉煙草も同樣である。

家畜は、馬、豚の産多く、牛、驢之に次ぎ騾、羊等も飼育される。

林業、鑛業何れも現在はない。

縣内の湖に産する鮒は産額は多くないが美味を以つて知られて居る。

都邑康平街

舊名を康家屯と稱し、現在縣城である。法庫門より鄭家屯に至る街道上、法庫門より六十滿里の北方にあり、東南北は低い丘陵を以つて繞らされ西南方に沼澤地がある。

市街は城壁なく家屋は矮小で見るべき建物もない田舍街であるが、縣公署を始め各種の機關が一通りは備つて居る。高粱、大豆、小麥、胡麻、棉花等の農産の集散あり、鮒は美味だといはれる。附近に砂地及砂丘多く、交通が不便な爲めに建設は、鄭家屯等よりはるかに古いが發達しない。地方的生産が振

はないから商工業等も不振の状態である。國營バスは奉天、法庫を通じ康平に來る。又通江口より法庫に、北方遼陽窩棚にも通じてゐる。

康平街諸機關

康平縣公署　警察署　税捐局分局　郵政局
電報局　大興公司　康平(農科)國民高等學校(省立)　滿人小學校
興農合作社　勞工協會出張所　街公所

哈拉沁屯

縣城の西南約七十滿里、蒙古旗界の南方二、三滿里の地點に位置し縣下に於ける對蒙貿易の第一線にある中繼市場であつて、當地商況は遙かに縣城を凌駕してゐたが匪賊の出沒甚しく現在衰微に傾いては居るが尚物資集散市場として縣下一であり、穀類、牛、馬、羊、皮類等の取引が行はれる。これらは法庫門、新民方面に出し、燒酒、麥粉は蒙古人に供給されて居る。

一　其　他

警察署所在地　四家子　小城子　哈拉沁屯　西關家屯

税捐局分所所在地　哈拉沁屯

郵政局所在地　哈拉沁屯　遼陽窩堡　鄭官屯　三臺子
陶代屯　方家屯　大莫力克　二牛鎭口

資料

圖 名 書 名	發行所	發行年月
康平縣行政報告書(上册、下册)……同 表 題	康平縣公署	康、二、六
康平……滿蒙都邑(全誌)	日刊支那事情社	大正十五、一〇
康平……省政彙覽(奉天省篇)	國務院弘報處	康、四、二

康家屯(康平)……蒙古地誌(下卷)　富山房　大正八、十二
康平縣經濟事情……金融合作社管内經濟事情　金融合作社聯合會　康、五、二
康平縣下に於ける産業概況……海外經濟事情(三の二四)　中屋三間印刷會社　昭、一三、二

海城縣

概史

周秦以降朝鮮に屬し、漢が朝鮮を滅して後、東漢三國を經幾多の變遷あつて、晋、隋、南北朝には高句麗に屬して居り、唐時代に高句麗を追て蓋州沙卑城を置き、後渤海國に屬して日本との修好が始まつた。遼は臨溟縣を置き、東京道に隷屬せしむ。金は改めて臨溟、析木二縣を置き、元時代は遼陽路、明は遼東海州衛を置き、清時代に至つて、海城縣が置かれた。民國又之に因り奉天省下にあつた。滿洲建國に際しても縣區域に變更はなかつたが、康德四年營口縣廢止せらるゝにあたり、舊營口縣領内遼河以東の地を海城縣に合併せられ、遼河以西の地を盤山縣に併合せらるゝ事になり、兩縣の面積擴大せられたのである。現在奉天省下にある。

地勢

縣の東より北は廣く遼陽縣界をなし、東南の一部は岫巖縣、南は蓋平縣、西は遼河を隔てゝ盤山縣に對し、西北の一隅は臺安縣に接して居る。

縣境東南の二部は群山環峙し、西北一帶は河流流域地帶であり、中部の黷土は沃野であつて農産豐富の區、南は營口、蓋平に通じ、北は遼陽瀋陽の地に達す。

縣の物産

中部沃地は農産物豐富、高粱を第一とし、玉蜀黍、大豆、水陸稻、大麥等であり、特用作として棉花麻子等あり、康德五年度よりはこれらの增産計畫を大いに樹て、更に葉煙草、柞蠶等を獎勵し、柞蠶試驗場をも設けて居る。

都邑海城街

縣內林區はわづかで樹種は油松を以て最多とし、楊柳等之に次ぐ、造林計畫をなし、栽種を限定し近年綠化運動をなし極力之が發展を期して居る。

家畜は豚を第一とし、屠宰場に送られるもの年に、一萬五千に近い。次に馬、牛、騾、驢で、緬羊、山羊等の數はまだよほど少ない。

鑛業、縣內にては滑石鑛、金鑛を最多とし、長石、硅石、苦土等全縣に渉り、其中已に開採中のものは金、滑石、長石、苦土、石灰石である。其他窰業、柞蠶業等がある。

海城は昔海に臨んでゐた地であるが、遼河の沖積作用によつて今日の如く海岸から遠く離れるに至つて居る。治外法權撤廢前は滿鐵附屬地が驛に續いてあり、城內は驛から東十九町にあつた。政治上附屬地行政權は撤廢せられ、これらを纒めて海城街となり指定街である。城內は海城河が南と西に流れて天然の濠をなし、城壁內に小丘厝石山をとり入れ高さ三丈の磚を以つて城壁を築いて居り四門を有して安全なる城壁をつくつて居る。

城內は古城の面影を傳ふるもの多く、人家古び旗人の家が幾らも殘つて屋敷町をつくつて居る。城內に廟を三十餘も有して居る。城壁外にも人家立並び、農村相手の商店及鍛冶屋などが多い。

取引として取扱はれるものは滑石、粟、玉蜀黍、大豆等である。粟は殊に良質のもの多く、海城粟の名を以つて知られ、朝鮮方面に多く出し、小麥、高粱、蕎麥等多く取扱はれる。

其他陶器製造窰で三大窯業會社があり、滑石製粉業亦盛で、中南支方面に出し、棉花工場、柞蠶絲工場等もあつて取引が行はれて居る。

交通上は南滿に於て相當重要地點で、鐵道は滿鐵線の通過のみであるが、自動車の便よく開け、東へ

析木城、岫巖、安東方面、西は牛莊、營口方面、北は滿鐵線に併行して湯崗子、鞍山、遼陽に、其他附近主要箇所に自動車の運行を見てゐる。

近年街の發展により住宅難に遭遇してゐる。街內は水道設備を有して水質良好、舊滿鐵附屬地外に切符給水所十六ヶ所を有し給水一ヶ所に一五〇戶內外である。

海城街諸機關

海城縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	專賣局	中銀支行
大興公司(六)	興銀支店	協和會	縣立醫院
電業營業所	街公所	海城(農科)國民高等學校(省立)	
海城女子國民高等學校(省立)	海城師道學校(省立)	海城商業學校(省立)	青年學校
日本人小學校	海城窯業股份有限公司	大新窯業股份有限公司	滿人小學校
遼東新記窯業股份有限公司		滿洲滑石株式會社	
海城利通汽車股份有限公司		咭進鑛業公司(合資)	
南滿鑛業株式會社(張家堡子にあり)		生活必需品會社配給所	勞工協會出張所

湯崗子

海城の東北滿鐵沿線で遼陽縣の近くに位して居る。もと山間の僻村に過ぎなかつたが、驛が出來てから發達し、又湯崗子溫泉が開かれてから有名になつた。溫泉は驛の東北四町、湯崗子溫泉株式會社の經營で、泉質無色透明、アルカリ性でラヂウムを含むと稱され、リウマチス、濕疹腺病、腺、婦人病、胃腸病等によろしく、設備完全其自然的環境と共に近來遊客次第に增加して居る。

牛莊街

牛莊は海城を去る四〇滿里、營口より八〇滿里の地點にあり、營口港の前身であり又滿洲最古の貿易港として、當時の商勢を掌握してゐた事はよく知る處である。其後營口港の開港により漸次繁榮を奪はれ衰運の一途を辿り、滿洲事變當初には橫暴なる匪賊の掠奪蹂躪に遭ひ、爲に外部との商取引は杜絕し、市況は日に不安となり、住民は疲弊の極に達した。現在治安恢復は成り、比較的活氣を帶びて居る。農產物は大豆、高粱の收穫が最も多く、大麥、小麥、胡麻、包米、粟等であるが、事變前の輸出高とは比較にならぬ程の激減である。一般商取引は從來の水運利用は漸次衰へ、南支の商品輸入は殆ど杜絕して水運に代るに陸運を以てし、營口に代るに大連、奉天となり直接、海城より陸運を以て日本品が輸入せられる。

農產に次ぐに燒酒がある。原料高粱の良質と水質良好とは昔から此地の燒酒の上に名高い。尙安平(アンペラ)河魚の產出が多い。

牛莊街諸機關

警察署　稅捐局　郵政局　大興公司(二)

營家堡街諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　大興公司

大石橋街

大石橋街は滿鐵本線より營口線の分岐點として知られてゐる。又、マグネサイト、滑石の產地として世界的に有名であり、近くの迷鎭山の娘々祭で廣く知られて居る。

マグネサイトは、埋藏量五十億噸といはれ、產地は八箇所にも及んでゐる。滑石の生產も多く、其他附近には棉花を產する。市街の背面になる蟠龍山は風致よく街の公園となつて居り、杏樹多く、春の頃は最も見事である。山腹には、日露役當時の忠魂合祀碑、及昭和二年に建てられたる忠魂碑があり。北端の山麓には露國墓地がある。

迷鎭山の娘々廟は驛の南方一里十八町、廟の寺名は海雲寺で、雲霄、避霄、瓊霄の三娘々を祀つてあり、此等の娘々様は、福壽、治眼、授兒の女神として廣く尊信を受け、毎年春の農閑期を期して行はれる娘々祭りには集り參ずるもの無慮數十萬、滿洲各地の娘々祭中最も盛大なるもので、幾多の催し物があり、商取引が行はれる。祭禮は數日に渉り滿洲人の最も樂しみとしてゐるものであつて滿鐵でも乘客誘致に種々の方法を講じてゐる。

大石橋街諸機關

警察署	街公所	稅捐局分所	中銀支行
郵政局	電報局	大興公司(一)	電話局
日本人小學校	青年學校	天恩苦土灰株式會社	日滿鑛產株式會社
大石橋電燈株式會社	中興產業公司(合資)	滿洲滑石會社(合資)	

其他

警察署所在地

八岔溝	上八里河	感王寨	鮑家堡
耿莊子	馬風屯	大高力	騰鰲堡

稅捐局分所所在地

他山	南臺

郵政局所在地

柳樹屯	大高坎村	田莊臺	河北
上夾河村	大感王寨村	小碼頭村	四臺子村
古城子村	莫七屯	大望臺村	耿莊子村
四方臺	虎莊屯	岳州村	析木城村
八岔溝村	南臺村	湯崗子村	千山

大屯村	高坨子村	大高力房村	小孤山
甘泉堡	新臺子	接官堡	驗軍堡
柳公屯	古樹子	藍旗口	滾子泡
坯廠	他山	土臺子	老古林子
分水	中所屯	柳河子	白石寨
石牌路	付司縣	上英阿	馬風屯
接文寨	涉鐵河	牌樓屯	板子屯
江家房	李家街		

電報局所在地

河北	南臺村	湯崗子村	千山
分水村			

電話局所在地

河北	南臺	湯崗子溫泉	千山
分水			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
海城縣公署要覽	同 表題	海城縣公署	康、四、一
海城要覽	同 表題	海城東語學舍	大正一二、九
海城縣概況(滿文)	民政部月刊	民政部	康、元、一一
海城縣に於ける農村行政組織と其運營現態	滿鐵調查月報(一七の三)	滿鐵	昭、一二、三
海城縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
海城	滿洲主要都市要覽	滿鐵	昭、一二、四

海城……南滿洲鐵道沿線旅行案內　滿鐵　昭、一〇、四
海城街事情……同　表題　街公所　康、六、一〇
海城……滿洲都城市沿革考　滿鐵　昭、一四、一二

蓋平縣

奉天省……70

概史

蓋平の地は隋の時代高句麗に屬し、蓋平城が置かれて居た。唐の時代に高句麗は滅されて此地は安東都護府に屬し、以後各時代を經て、明朝洪武五年に土城を修築し、淸の康熙三年奉天府に屬し、蓋平と改稱、乾隆四十三年城壁を改修し、宣統二年、一城、四鎭、兩鄕に分ち各々地方自治會を置く、民國三年道尹を置き、遼瀋道に屬してゐたが、同十二年に至り八旗辦公處を廢止して全部縣公署に移管した。滿洲建國後、大同二年九月縣政組暫行辦法公布實施せられ、縣公署の組織成り、現在奉天省下に屬して居る康德四年十二月營口縣の廢止に伴ひ西方に縣境が廣められた。

地勢

縣の東方部を千山山脈が走り、魏家大嶺、七盤嶺を爲し、岫巖縣に境し、西は渤海灣に、北は海城縣南は復縣に接して居る。

縣內河川多く、淸河、沙河、熊岳河其他三、四あり、又熊岳城の溫泉は最も名高く、海岸は漁獲多く海水浴場として知られ、到る處に名勝、古跡を有して居る。

縣內土地肥沃、氣候溫和で農耕に適し、又一般農民の素質、勤勞なる點等、優點を具備して他に比し顯著なる發達を遂げて居る。ことに西部地方は渤海に面し、地質肥沃農耕地に好適である。

縣の物産

主要農産は、高粱、粟、玉蜀黍、大豆等で特用作物として棉花、落花生、野菜、果實等である。

牧畜は專門的なものはないが農家の耕作勞役に用ひ、或は副業として、牛、馬、騾、驢、豚、羊等を

飼育するものが多い。殊に豚は一般農家の副業として、非常に盛で一年間、縣外へ輸出するものが、五六千頭に達してゐる。

縣內東部の山嶽地帶は、農耕に開拓した外、山陵は殆んど柞蠶の飼育が盛で、飼育區域になつて柞樹を植え、現在縣にて造林獎勵を爲して居る。

鑛産地區多く縣內四十餘ヶ所、重要なるものは建築用石材(花崗岩)、苦土(マグネサイト)等がある。近年に至り建築界の繁榮に伴ひ、鑛石の需要が增大してゐるため之等の採鑛が盛になつて來た。

本縣西部渤海に面する海岸線は延長百數十滿里に及び、古來より漁撈地として推賞されて居る。主なるものは黃花魚であつて、毎年初夏四月には漁撈期になつて居る。其他鮫、鰆、蝦、蛤等の漁獲が多い黃花魚の年產四百萬斤、其他の魚類は約百萬斤位で價格二十萬圓以上である。

又鹽田地面積五千餘畝を有し、自然力による原始的な方法で年產約八萬石乃至九萬石前後で、近年の鹽價暴騰と共に活況を呈して居る。

柞蠶業は本縣に於ける重要なる產業で、その盛衰は縣內の經濟金融を左右し、凡ての事業に大なる影響を與へるものである。事變前は一千萬元以上の收入をみてゐたが、事變後販路縮少せられ、現今の輸出先は日本の福井、岐阜方面のみで輸出額も激減してゐるので種々柞蠶對策が考へられて居る。滿洲柞蠶株式會社が康德六年七月設立せられ本社を新京に、奉天に工場を置かれ、柞蠶業界に曙光を投じてゐる。養蠶區域は東部地方の山嶽地帶で其面積は耕地の三倍以上である。

都邑　蓋平街

蓋平縣城、滿鐵沿線の都市である。四周山多く、中間が平原を成してゐる。街の南は蓋平河に臨み、從來鹽の產地として、舊蓋鹽の名は有名である。明の洪武五年に土城を築き淸時代は奉天府に屬し、民

國まで繼續し、康德四年滿鐵附屬地行政權移讓と共に街公所を設置し、舊城市及附近屯村の一部、舊滿鐵附屬地を併合して蓋平街となり、指定街である。

日本人が入り來つて以來本街は蔬菜、果實等の園藝に從事する者が多く、野菜の輸出は每年約五、〇〇〇瓲、果實類五〇〇瓲に及び、棉花、柞蠶等も主產物である。副業として養兎が盛な事は特色である。工業は時局柄原料不足で思はしくないが、將來發展の有望性に富んで居る。原料豐富で、果實、棉花、柞蠶等の加工業がよろしく、必要なる鹽が亦多い事は好條件である。

本街の附近は名所舊蹟に富んでゐる。

蓋平街諸機關

蓋平縣公署	街公所	警察署	稅捐局
商工公會	區法院	區檢察廳	郵政局
電報局	電話局	興農合作社	專賣局
中銀支行	興銀出張所	大興公司(三)	協和會
縣立醫院	蓋平(農科)國民高等學校(省立)		蓋平女子國民高等學校(省立)
滿人小學校	日本人小學校	勞工協會出張所	棉花會社收買所
柞蠶糸檢査所	圖書館	屠殺場	救療所
農產物交易市場			

熊岳城街

熊岳城は溫泉を以つて知られて居る。康德四年街となり指定街である。沿線の街には、國立農事試驗場があり、各種農產、養蠶、蔬菜果實等の試作が行はれ、又農業實習所がある。

熊岳城溫泉は、驛の東南三十町、湯崗子、五龍背と共に、溫泉として有名である。內湯と砂湯とあり

弱アルカリ性で湯治客遊客四時絶えず。

海岸は有名な漁業地で、グチ、鯒、鯛を産する。

熊岳城街諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局
電話局　國立熊岳城農事試驗場　熊岳城殖產株式會社　日本人小學校
滿人小學校　青年學校　街公所

太平山

營盖鹽として廣く知られてゐる附近鹽田よりの鹽は多く此驛から發送される。車窓西方の海岸一帶は製鹽地で時として鹽の白い堆積を見る。

其　他

警察署所在地

博落舖　蘆家屯　榜式堡　湯池
萬福庄　徧嶺溝

稅捐局分所所在地

蘆家屯　孳蘿舖
南二道河　歸州　黃旗堡　許家屯

郵政局所在地

蘆家屯村　萬福莊村　大高屯　太平山村
田家屯　博洛舖　湯池村　夏家屯
鷹家屯　紅塔寺　百塞子　蓋子窩
接官廳　黃土嶺　榜式堡　趕馬河
東牽馬嶺　團甸　羊草溝　賴家屯
大房身　永安屯　橋臺堡　山咀子

	方家屯	正白旗	八道河	硼石山	
	土門子	楊家店	北崴子	北瓦房店	
	雨霖堡	東二道河	歸州	西二臺子	
	沙崗	六道河	九寨	柳樹屯	

電報局所在地	許家屯	蘆家屯村	沙崗	太平山村
電話局所在地	許家屯	蘆家屯村		

資料

題名	書名	發行所	發行年月
蓋平縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、一
蓋平	省政彙覽(奉天省篇)	國務院弘報處	康、四、｜
實驗村建設記錄(和尙村)	大亞細亞(五の一三)	大亞細亞建設社	昭、一二、一二
蓋平街、熊岳城街	街の區域劃定	民政部	康、四、三
蓋平縣和尙村三道溝屯の實態調査	內務資料(二の五)	內務局	康、五、五
蓋平縣の農業	同表題	蓋平縣公署	康、二、｜
蓋平街事情	同表題	街公所	康、六、一一
奉天省蓋平縣第三區陳家屯の戶別實態調査	農村實態調査報告書第三分冊	產業部官房資料科	康、三、一二
蓋平縣略圖	同右	同右	康、三、一二
熊岳城	滿洲都城市沿革考	滿鐵	昭、一四、一二

復縣

概史

その昔高句麗に屬して居た時代、唐の太宗は大兵を起して遼東征伐を試みたが、高句麗の逆襲に遭ひ

半島南部までの攻略は不成功に終つた。

降つて明の太祖、洪武八年都衛を改めて都司とし、遼東に都司一を設けて遼東各地の實權を握らしめてゐた。當時、蒙古部落の一首領は奪取を謀つて攻め込んだが遼東の防備は堅く遂に蒙古人の侵略を許さなかつた。

清朝興るに及び、兵を復州に派し、駐防せしめ、康熙三十年、北京より巴爾虎旗一旗を派し、佐領一員を置く、日清戰爭當時日本軍の占領する所となり、後義和團の亂興り、本縣の民衆を煽動し、暴動を起した。日露の戰には又激戰地として知られて居る。瓦房店は交戰二時間で占領したが、得利寺山の戰は雨中交戰十時間を要して、完全に瓦房店一帶の地及鐵道は日本軍の手に歸した。

滿洲事變起るや民心極度に動搖したるも、その後治安回復し、復縣自治執政委員會なるものを組織し縣政の執行機關としたが、大同元年、縣官制により復縣公署と改稱した。縣公署はもと、復州城內にあつたが、民國十五年、縣の中央を占め交通も便なる瓦房店に移轉し、主なる官廳も之に伴つて移轉したのである。

地勢

本縣は奉天省の最南端にあつて、東部は碧流河を挾んで莊河縣に對し西は渤海に連り、南部は關東州と隣接し、北部は浮渡河及雪茂山の山嶺を堺として蓋平縣に望んで居る。

地勢は概ね、丘陵起伏して平野に乏しく特に東北部は雪茂山等の峻險なる山岳疊々し、物產少く僅かに作蠶を專業とする少數の人口を有してゐるに過ぎぬ。西部海岸線は砂石多く、耕作に適せず、稍肥沃な地方は、中央及南部の一地方である。河川に復州河、碧流河、大沙河、浮渡河等がある。

縣の物產

本縣は地勢一般に高地で、山岳、丘陵多く、土質又砂礫に富み、農耕地に適しない。耕地も少く、生

産農産物は縣の需要を充すに足らず他縣よりの移入を仰いで居る。復州河の貫流する縣中央部地方は、土地割に豐饒で水田に適し、逐次開墾されて、水田多く米の産額多く、其大半を移出し、松樹より搬出されて、松樹米と稱し、質に於て滿洲特等米である。其他高粱、粟、大豆、其他農産の種類は多いが産額は少ない。棉花、落花生の特用産あり。

家畜は牛を第一とし、騾、驢、豚、羊、馬等。農産少い本縣では家畜の奬勵を急務とし、豚の改良を第一とし、大同元年よりすでに着手し、成績良好である。其他馬、牛等の改良にも着手して居る。

林地は自然林、造林があるが、木材としての利用よりも柞樹を植えて柞蠶飼育を主としてゐる點、他縣と趣を異にして居る。

復縣管内には各種鑛物の埋藏多く、其主なるものは石炭、粘土及建築石材である。

五胡嘴より出る粘土は頗る良質、復州鑛業株式會社によつて採掘され、並粘土、硬質粘土、上層粘土等の種類があり並粘土は所謂復州耐火粘土と稱せられ、アルミナ四〇%、硅酸四〇%を主成分とし、熔鑛爐用耐火煉瓦の原料に使用されて居る。

更に特質粘土は最優良品であつてアルミナ七〇%以上、硅酸一〇%以下を含有してゐるもので、耐火度三七番(攝氏一八二五度)以上である。最高級耐火煉瓦原料であつて日本は勿論世界にも稀なる良品である。

其他五、六種の粘土ありそれ〴〵の用途に使用される。

本縣は渤海に臨む海岸線三百六十餘滿里を有するも漁業は今日まであまり振はない。原因は關東州營口方面より來る優秀船に壓倒されたことゝ遠淺であること、漁法の改善が出來てゐない事に基因する。

魚類は太刀魚、鮫魚、偏口魚、（鰈）鰕等である。

鹽田を有し產額も相當である。事變前は北支方面に輸出されてゐたが新國家成立以來、消費力增力し加ふるに專賣として政府に於て以前より約倍額の高價に購入せられ、更に日本に於て、鹽の需要多くなり、益々鹽業は盛になつてゐる。

柞蠶繭の好活氣時代は生產高も相當多かつたが、近年は、販路杜絕、糸價暴落不振の狀態にあるので奉天省下に於ては種々これが對策を考究せられて居る。最近、絹糸に、柞蠶糸混入等の事も考案せられて居るため將來之が需要も亦復活する事と考へらる。

（復州炭礦）

普蘭店の西方五〇粁の海岸にある。

二疊石炭紀に屬し、各部に亘つて狹在する炭層の中稼行に堪ゆるものは最上部の三層であつて、その合計層高一・五―七・五米である。之等稼行炭層は六箇所の區域に賦存してゐるが、その中最も主要なる區域は老君廟を中心とする部分である。

埋藏量一千萬噸以上の見込で、良質の無煙粉炭を產し、もと周文貴の經營であつたものを、昭和三年以來、張學良系の東北礦務總局が直營し、事變後一時滿鐵の假經營に移されたが、滿洲炭礦株式會社に編入せられ目下同會社の經營である。

都邑瓦房店街

復縣公署所在地、滿鐵本線に沿ひ、大連を距る事一〇五粁、古來該地方に於ける經濟的一中心地として多少名を知られてゐたが、露治時代となり、公主嶺、遼陽と共に南部線の三大驛の一として機關庫、兵營の設けられた所であつたが現在は滿鐵の主要驛となり、市街區を設定して土地の開發に意を用ひ、漸次今日の發展を見るに至つた。康德四年街となり指定街である。

商業は、地理、交通等の關係上發達著しく、大豆、高粱、小麥、玉蜀黍、柞蠶繭、豆油、豆粕等の輸移出あり、綿絲、綿布、毛織物、砂糖、煙草、綿製品の輸入がある。

復縣交通株式會社の自動車は縣內に交通網を有し、瓦房店より復州城、復東鎭に至る。其他、李店—復州灣間、蕭家爐—謝家屯間、復州城—娘々宮間、松樹—復東鎭間、申爐—朱家屯間、松樹—永寧澗間、娘々宮西崖—蛟子咀間に運轉し、本社は瓦房店にある。

瓦房店街諸機關

復縣公署	警察署	稅捐局、同分所(一)	郵政局
電報局	電話局	專賣局	瓦房店地方法院
瓦房店地方檢察廳	區法院	區檢察廳	監獄
稅關分關	興農合作社	大興公司	中銀支行
協和會	街公所	瓦房店(農科)國民高等學校(省立)	
瓦房店女子國民高等學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校	青年學校
滿洲製絲株式會社	瓦房店電燈株式會社	復縣交通株式會社	勞工協會出張所

復州街

民國二年復縣と改稱せられて縣公署の所在地であつたが、現在は瓦房店に公署を移した。

河流多く土地は概して砂礫地又は砂地である。市街は城壁を有し、西門は破壞せられて東南北の三門は現存してゐる。市の中央に城隍廟があつて廟より城門に向つて四條の大街を通じ、兩側は大小商店が並んで居る。清代の建造にかゝるといふ古塔がある。鐵道開通の爲、當地は交通不便となり、商業範圍も狹小となり、當地及附近部落に對する物資の小集散場たるに過ぎない。粟、玉蜀黍、陸稻、大豆等を出し、柞蠶繭、鹽等をも出す。

復州諸機關

警察署　税捐局分所　郵政局　專賣局

娘々宮

復州半島と、長興島との間に存在する一小島であつて、もと復州に移出入せらるゝ貨物の呑吐港として頗る繁盛であつたが、鐵道開通後全く疲弊し、戎克の來往大いに減じ、現今は殆ど忘れられて居る。

復州鑛業株式會社、復縣内五湖にあり。

松樹村諸機關

警察署　税捐局　郵政局　電報局

電話局

其他

警察署所在地

復東鎭　娘々宮　永寧潤　蓮花山

一拉塔　五湖咀（裴家屯）

税捐局分所所在地

復東鎭　孫家店　老爺廟　魏家溝

谷家溝　徐大房　呉家屯

郵政局所在地

娘々宮　長興島　復州灣　謝家屯

復東村　永寧潤　李官村　得利寺村

萬家嶺村　復塔鎭　田家　王家

沙泡子　石佛　三堂　長嶺子

炮臺子　松木島　蓮花山　二十里堡

後三十里堡屯　土城子

電報局所在地

得利寺村　萬家嶺村　熊家店

電話局所在地　得利寺　萬家嶺

税關分卡所在地　太平嶺　張家屯　李家屯　楡樹房　古老莊　修家屯　胡家屯　田家甸　呉家屯　宮家屯　嵐崗城　朱家屯

資料

題名	書名	發行所	發行年月
復縣事情	同表題	大同學院	康、二、五
瓦房店	滿鐵旅行案内	滿鐵	昭、一〇、四
瓦房店、松樹	滿洲主要都市要覽	滿鐵	昭、一二、四
瓦房店炭礦	日滿商事調查統計月報（一の六）	日滿商事	昭、一二、九

興京縣

概史

本縣下は漢の玄菟郡で、後高句麗の版圖に入り、次いで渤海、遼に屬し、金代には東京路に、元代には遼陽路に屬し、明代には建州衞が置かれた。清代には府下赫圖阿拉の地が清室の祖先四代の居地であつたため之を重視して順治五年興京と稱し、其の東四里に城を築いた。光緒三年興京廳を設けて撫民同知を置き、通化、懷仁、輯安、臨江の四縣を管轄せしめた。宣統元年府に昇格したが、民國元年府制を廢して興京縣となし東邊道に屬せしめた。一說には、天命元年都城となり、天聰八年興京と稱し乾隆二十八年興京理事通判（舊城）、光緒三年興京廳撫民同知（新賓堡）、宣統元年興京府、民國元年興京縣になつたと。

而して民國十八年新賓縣と改まり、滿洲國建國後は吉林省に屬し、大同二年再び興京縣となつて、奉天省に屬してゐる。

地勢

東は通化に隣接し、東南は桓仁、西南は本溪、西は撫順、北は清原縣に接して居る。全縣の形胡蝶形を成して居つて殆ど山岳地帶である。

淸原縣と本縣との境にある聶兒庫嶺を越え、更に馬連墩、太平、羊祭臺等の諸嶺を越えて始めて縣城興京に入る事が出來る程である。又興京の東方通化へは東昌臺を越えねばならないし、東北は五鳳樓を經て柳河にやうやく出る事が出來る。

縣の中央を貫流する蘇子河の流域が稍中心と見るべきである。

（民族）

本縣は淸朝發祥の地であり其昔淸の聖祖、怒兒哈赤明軍を擊破して起ちたる鄕地である爲め、今尙滿洲民族が殘つて居る。其數全縣民約三十萬の中、四、五萬といはれる。其他二、三萬の朝鮮民族を除けば他は漢民族で大部分を占めてゐる。風俗言語何れも漢民族の風であつて滿洲民族としての色彩は殆どない。

縣の物産

住民は殆ど農業に從事して居る。大豆が最も多く、高粱、玉蜀黍、水稻等、中、大豆、大米等は縣外移出が行はれ、興京より營盤もしくば撫順に搬出されて居る。家畜は、牛、馬の類で耕作用である。

山地は多いが多年の濫伐に往年の林地は殆んど木材なく、興京の需要材は奉天より移出する有樣である。現在僅に植林を奬勵し將來民生を豐にせんと努めて居る。

鑛產資源は豐富と見られる。金、銀、鐵、石炭、硫化鐵等。されど調査不十分なる事、交通不便なる

事等は採掘着手に多大の障害を與へて居る。

都邑興京街

興京縣公署所在地、新賓とも稱して居るが、これは滿洲民族語の興京（シンピン）より同音なる爲め轉じたものとの事である。交通不便な僻陬に位置して居るが、人口二萬を越えて居る。此地は清朝發祥の地として歷史的に知られた所であつて公署は初め老城に置かれて居たが、光緒四年現在の地に移されたのである。山近く迫り街の中央に蘇子河が東西に流れ、街は河を中心に河に沿ひ、其南北に發達してゐる。自然の要地で護るに最もよく、故に多年築城されなかつたが、民國一〇年土壁を繞らし、東西二門を設けて城の形を成すに至つたものである。市街は河を隔てゝ南北二街に分れ此地方の中心市場としての商業であるに過ぎない。興京はまだ鐵道が通じてゐないが、奉吉線の南雜木驛から、永陵、興京を經て通化に至る協榮公司の自動車が通じて東は通化に至る事が出來る。

街の產業は農業に適せず、農產は豐でないが、副業として家畜の飼養をなし、牛、馬、驢、豚、羊、鷄、鵝、鴨等が飼はれてゐる。水質はよく、殊に河の北部の方がよいやうで、井戸も五十一ケ所を有してゐる。

興京街諸機關

興京縣公署	警察署	稅捐局	專賣局
郵政局	電報、電話局	街公所	興農合作社
勞工協會出張所	中銀支行	大興公司	協和會
興京農業學校（省立）	興京實業女學校（省立）	滿人小學校	日本人小學校

永陵街

永陵街は興京縣城の西方二十五粁、奉吉線の南雜木驛を距る事六十三粁、地勢は北に蝙蝠山を控え、平坦にして廣濶高燥地で頗る爽快な地であり、都市としての地形を具へて居る。清の初め市場を設置し

てより近郊部落は此地に集中し、交易の中心地點となつた。滿洲建國後、國道改修成り交通便利、商賈輻輳して實に興京第一の重要市街である。

交通は汽車の便はないが、自動車路よく開通して東は興京より通化に、南は桓仁に、西南は本溪湖に北は淸原に、西は撫順に隨時通行する事が出來る。桓仁に至る九十五粁間には兩合公司、協榮公司の民營自動車の通行がある。

四隣は農村であつて農産の大豆、米、煙草、線麻等の各種農産物を生じ、何れも街内に集中し、これらの交易のための商人は街民の三分の一以上を占め、商業の繁盛は縣城に讓らない。畜類の飼養は街民固有の副業である。

永陵街諸機關

警察署　郵政局　其他

警察署所在地

旺淸門　平定山　葦子峪　鄭家堡子
木奇　灣甸子　湯圖伙洛

稅捐局分所所在地

陵街鎭

郵政局所在地

木奇村　上夾河村　東昌村　旺淸門
灣甸村　葦子峪村　馬圈子　古樓
火石咀子　金斗峪　平頂山

協榮公司(合資)興京縣内河南にあり

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
興京縣政況	民政部半月刊	民政部	康、元、三
興京縣事情（大同學院）	滿洲國地方事情（第一篇）	大同學院	康、元、四
興京	省政彙覽（奉天省）	情報處	康、四、二
興京街勢要覽	同表題	興京街公所	康、五、一
永陵街事情	同表題	永陵街公所	康、六、一〇
滿洲義軍花田大人の萬靈供養碑緣起（飯田信一）	同表題	興京街公所	康、六、七
日露戰爭に關する興京街の史蹟（飯田信一）	同表題	同右	康、六、七

清原縣

概史

本縣は民國十四年八月開原、海龍、柳河、興京及び鐵嶺五縣の各一部を割いて新に設けられた。初め清原縣と稱したが、山西省に同名の縣がある爲め民國十七年清原縣と改稱された。現在は奉天省に屬する。縣城所在地は原名を八家鎭と云ひ、もと開原縣に屬してゐた。縣城は城壁が無い。

地勢

本縣は撫順、興京、柳河、海龍、東豐、西豐、開原、鐵嶺の八縣に境し縣境は北に摩里紅大山、南に龍崗山脈等が起伏する水形三道を成し南に渾河、中部に柴河、北に淸河が在り、何れも西流して縣外に出で山岳河川の間には隨處に溝を成してゐる。

縣の物產

縣內山岳峽谷其大部を占め、溪谷に沿ひ、或は山腹の傾斜面を利用して田畑の耕作が行はれるのみで開墾しつくせるだけ開墾してゐるが、開墾地面積甚だ少く、農產は、高粱、玉蜀黍、粟、水稻等であり其他種類は特用作物に至るまで非常に多いが、收穫は何れも少ないために生活は相當窮迫を訴へて居る。

都邑清原街

家畜は牛、馬、騾、驢、豚の類で改良すべき點大いにあり。

森林は國有林、民有林の二種あつて、國有は二箇所面積二〇方里にすぎないが、民有は七箇所四八方里を有して居る。主要樹種は柞、楡、楊、椴等であるが從來のものは殆ど伐採し盡し、僅かに木炭を出すに過ぎない。

石灰が關虎山より出で、民國十八年開採を行つた。周圍五滿里二五〇畝の面積を有し、二十箇年採掘の埋藏量があると。又金鑛多く、開採せるもの二、三處あり、その一つは王家大泃であるが、他に發見せられたるもの約百に上ると傳へて居る。

小河があるが淺く、夏季稍魚類を産する外、水産の見るべきものはない。

清原、原名を八家鎭といひ、清原縣公署所在地、民國十七年に清原縣と改稱せられ、地方の政治、經濟の中心地となり、康德三年九月街村制を實施し清原街となつたのである。

縣域は四方山に圍まれ城壁無く、たゞ大きな部落を思はせる程度である。主要路は僅かに東西に通ずる奉吉線の一條のみであるが、現在都市計畫が進められて居る。街の水質は極めて良好清甘である。

農産物に期待する事は出來ないが、鑛産資源の豐富は將來其開發の如何によつて、發展性を期待される。

清原街諸機關

清原縣公署	街公所	警察署	稅捐局
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	中銀支行	興農合作社	大興公司
清原農業學校（省立）	滿人小學校	日本人小學校	滿洲礦業株式會社

南雜木

福民診療所　勞工協會出張所

南雜木驛は奉吉線の小驛であるが、興京方面に入る門戶で、協榮公司の自動車が永陵、興京方面に通じて居る。

其他

警察署所在地	南山城子　興隆臺　夏家堡子　蒼石 海陽村
税捐局分所所在地	草市　南雜木村　南口前　英額門（臨時分所）
郵政局所在地	南雜木村　南口前村　北三家村　英額門村 夏家堡子　南山城村　崔莊子村　土口子 上荒地　興隆臺村　大孤家子村　海陽村 永安屯　鬪虎屯　邱家窩堡　金家窩堡 南蒼石　南三家
電報局所在地	南雜木村　南口前村　英額門村

資料

題名	書名	發行所	發行年月
淸原（鐵路總局）	奉吉線案內	鐵路總局	康、元、六
淸原縣事情（大同學院）	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
淸原縣事情	滿鐵調査月報（一三の一一）	滿鐵	昭、八、一一
淸原縣一般狀況	同表題	縣公署	康、五、三
淸原縣概況（滿文）	民政部月刊	民政部	康、元、一二

清原縣施設概況………………	内務資料月刊(二の二)	内務局	康、五、二
清原縣一般狀況………………	同　表題	清原縣公署	康、三、一二
清原縣經濟事情………………	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
清原街事情…………………	同　表題	清原街公所	康、六、一〇

西豐縣

概史

本縣はもと掏鹿といふ。奉天、吉林省境にあつて清朝初期葉赫の管轄下にあつたが討伐平定されて獵場となつた。其間三百餘年、光緒初年始めて人跡を見るに至つた。

二十三年開墾殖民せられ、三十一年右堂(縣佐)を設け、縣治を助く、民國元年、縣衙門を縣公署と稱し、知縣を知事と稱す。建國前東三省時代より奉天省に屬し、康德元年十二月の省制改革の時も新制奉天省の區域内に入つた。

地勢

本縣東は西安、東豐の兩縣、西及西南は開原縣に南は清原縣、北は吉林省伊通縣に境して居る。全形一つの三角形を爲し、古は草木繁茂して恰も一大森林を成してゐたが、今開墾後三十年、山野連綿として五穀生産の要地となつて居る。縣内山嶺重疊、長白の支脈に屬す。此山林は北は清原、海龍兩縣の間を走る所謂分水嶺である。又西豐、東豐縣界に分水嶺あり大北溝河の發源地である。峯を越ゆれば白銀頂子、北すれば鳳凰砂子、更に王八頂子あり、而して老爺嶺に支脈を發して居る。縣内山脈、山頂多く數ふるに暇あらず。又縣内を横貫する水系三系あり、寇河、清河、遼河の水系がそれで、その支流又多く何れも三水系に屬す。湖沼は三、四を數ふ。

本縣内平地は十分の四に過ぎないが、土質はよく、土色黒黄折半、平原の地は腐植土で肥料を要せず

縣の物産

耕作に利益が多い。山地は毎年水に洗はれ、地殼は山下に押し流され、近年は既に沙石を暴はし耕作しても救ふ事が出來ない。

降雨に據る山地崩壞流下の爲め耕地埋れ民國時代よりも耕地面積減少を見てゐるが、縣内の農産は豐富、大豆、高粱を大宗とし、粟、玉蜀黍、水稻等何れも縣外移出を見せてゐる。又棉花、煙草、麻類、蘇子等を出し、山地には柞蠶の飼育を行ひ、柞繭は本縣の特産であり農民の重要副業である。

農家の需要として家畜が飼養せられるのみ、馬、騾、驢、牛、豚等。その中、羊、豚、鷄等は良種改良中で年産も漸次增加してゐる。

清朝開放以前は全縣殆ど森林禽獸圍場の地であつたが、移民入植以來の伐採、耕耘の爲め山肌を露すに至つて現在では每夏耕作地にすら土砂の流出をみるに至り、造林勵行、苗圃設立を爲して對策を講じてゐる。

現在採掘の石炭は、太平村四道溝、平嶺村、四頂溝、張家坟で大菅村興隆溝には石灰石を出して居る。其他、鐵の發見あり又、石炭の未開のもの等石灰石等がある、

其他僅の水産あるも、副業として捕獲するに過ぎぬ。

都邑西豐街

西豐縣城、開原の東北約六十粁に位し、俗に掏鹿と稱して居る。本市北方は山脈連亙し、南は涩河を隔てて沃野が開け、市街は東山地方屈指の都市として其商業的勢力範圍も廣く、山城鎭、朝陽鎭等と並び稱せられる。城內及城外とより成り、城外は約二十町の土墻を以て圍まれ其大半は破壞してゐるが、市内は商店多く頗る繁盛、電燈、電話の設備あり長距離通話も出來る。開原より開豐鐵路通じ、又バスの便は開原、西安、東豐にあり南方にも二線開けて居る。

本地方は奉天省下の天富源とも稱せられる所謂東山地方に當り、産物豐富な地として聞えて居り、大豆、高粱、葉煙草、麻、柞蠶及獸皮類等を出し、移入の主なるものは布疋、雜貨類で、開原、奉天、鐵嶺、大連、營口方面から移入する。

西豐街諸機關

西豐縣公署	警察署	商工公會	税捐局
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	專賣局	中銀支行	大興公司(四)
協和會	縣立醫院	國際運輸	興農合作社
街公所	西豐(農科)國民高等學校(省立)		西豐女子國民高等學校(省立)
滿人小學校	西豐電業株式會社	勞工協會出張所	日本人小學校

平崗

四平街より五九粁、西豐の北方三十三粁、平梅線沿線にあつて、伊通、四平街、西安に通ずる要衝に當り、物資集散の要位を占めてゐる。事變當時匪襲を受けて一時屏息したが、治安の恢復と共に舊に復し、現在商店百餘戸、商取引殷盛を極めてゐる。

其他

警察署所在地	平崗鎭	雙河鎭	老營廠	房木鎭
	郜家店			
税捐局分所所在地	郜家店			
郵政局所在地	平崗村	平房店	雙河鎭	大青陽
	頭營	神樹	松樹村	福壽村

二道崗　艾青溝　野鶏背　涼水泉子
房木鎭

資料

題名	書名	發行所	發行年月
西豐縣事情	同表題	滿洲國地方事情大系刊行會	康、三、一二
西豐縣	滿洲國地方事情	大同學院	康、元、四
西豐縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
西豐縣柞蠶業の概況	實業部月刊(三の一)	實業部	康、二、六
西豐縣一般狀況	同表題	西豐縣公署	康、三、一二
西豐縣康德三年度農家經營經濟調査	康德三年度農家經營經濟調査(第二分册)	産業部官房資料科	康、五、一二

昌圖縣

概史

縣城昌圖は楡樹城子、古楡城子、楡城子等の別名を有し、蒙古博王旗の地であつたが嘉慶七年借地養民の名のもとに漢人の移住を許可した。縣史は同十三年昌圖廳を設け、同治三年之を撫民同知と改めたが、光緒元年府治を奏請し同三年昌圖府と改められた。民國二年に至つて府制は廢せられて奉天省洮昌道の管轄に屬し昌圖縣となつた。滿洲建國後は奉天省に屬して今日に至る。

地勢

西邊康平、法庫、雙遼縣界の遼河南北に流れ其の支流は縣内を縱貫して一般に平野を形成する。

縣の物産

大豆、高粱、穀子類を主とする。尙當縣は其の西北興安省に近く從つて飼養家畜も比較的多い。其の他縣西部の傅家屯地方一帶は白楊材の產地として知られてゐる。

開拓事業

昌圖には靑年義勇隊の昌圖特別訓練所が置かれて居る。

都邑昌圖街

昌圖は元來、金家屯遠くは通江口を商勢範圍として各地よりの集積された物資は凡て昌圖驛を經由してゐた。又、遼河の航行盛であつた日露役前後迄は航運による物資の動きも殷盛であつたが、開原の發展により漸次其勢力を奪はれ、市況も退嬰するに至つた。滿洲事變後は伊通縣内に通ずる軍用道路が開通したのと、昌圖城内より金家屯に至る自動車の運行が行はるゝに至り、北方面よりの特産物等の出廻が旺盛になる事を豫想される。

昌圖街諸機關

昌圖縣公署	警察署	稅捐局	稅捐局昌圖驛分所
商工公會	專賣局	區法院	區檢察廳
監獄	郵政局	電報局	電話局
興農合作社	中銀支行	大興公司(三)	國際運輸
協和會	昌圖(農科)國民高等學校(省立)		昌圖實業女學校(省立)
滿人小學校	日本人小學校	昌圖電業股份有限公司	縣立醫院
勞工協會出張所	街公所		

八面城街

八面城は四平街より西方わづか二十八粁、平齊線沿線に於ける農産物の一大集散地である。市街は驛の西南に當り、清朝道光年間に建設せられたが、市街の南方に殘存する土城址は舊八面城で、遼、金、元代の韓洲の治所と考證せられて居る。宣統三年自治委員會が成立し、事變後、治安維持會をつくつた。康德四年一月正式に街公所成立し街制が布かれてゐる。

街を中心に鐵道の外道路よく發達し、自動車の便あり、交通は四通八達してゐる。

農産の集散地で街内商工業者四〇九に及び、雜貨、飲食店、呉服店、穀類販賣業等の商業、油房、燒

鍋等の工業が小規模乍ら行はれてゐる。

街に水道の設備はないが、井戸は割に多く、水質良好である。

八面城街諸機關

警察署　税捐局分所　郵政局　電報局
電話局　中銀支行　大興公司(二)　八面城農業學校(省立)
滿人小學校　街公所

通江口

俗に通江子又は同江口とも稱する。日露戰役後開放せられて頓に發達したのであるが、鄭家屯の開埠と共に衰へ、更に滿鐵開通後、背後地の昌圖、開原地方に物資は吸收せられ、水害を蒙る事多く漸次衰微した。遼河の航行は衰へてしまつたが、小舟位はわづかに見受ける。

鶯鷺樹諸機關

郵政局　國際運輸

雙廟子村諸機關

郵政局　電報局　電話局　税捐局分所
國際運輸

其他

警察署所在地

寶力鎭　雙廟子　傅家屯　金家屯

税捐局分所所在地

馬仲河臨時分所

郵政局所在地

馬仲河　通江村　亮中村　金家村
寶力村　大窪村　孤楡樹　滿井
鶯鷺樹　桓勾子　蛇牛哨　傅家屯
兩家子　二十家子　雙廟子　十八家子

泉溝（梨樹縣内にて昌圖縣内をも管轄す）

電報局所在地　泉頭　通江村　虻牛村　傅家村
　　　　　　　昌圖城内　馬仲村
電話局所在地　馬仲河　通江子　泉頭
大興公司所在地　通江口　大窪村　雙廟子　蒿[illegible]樹

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
昌圖縣の朝鮮人概況（外務省）	在滿朝鮮人概況	外務省	昭、八、一
昌圖附近の地質便概（野田光雄）	滿蒙	滿洲文化協會	昭、五、二
昌圖縣事情	同表題	滿洲國地方事情大系刊行會	康、三、二
昌圖	滿洲主要都市要覽	滿鐵	昭、一二、四
八面城街事情	同表題	八面城街公所	康、六、一〇
昌圖	同表題	滿鐵	昭、一三、一一

梨樹縣

概史

元の太祖は其一族を蒙古の各地方に封じた。梨樹縣は東部内蒙古の一部であつて、其科爾沁左翼中旗達爾漢親王の地である。清朝が明を亡した時、前後して歸參を申出た蒙古王公に對し、清はよく是を懷柔して、達爾漢親王の土地も存續せられて今日に及んで居たが、康德五年蒙地は滿洲國に奉上した。

農業地として土地の開拓を見たのは、清朝の嘉慶八年流民出境の解禁をみた時からで、山東の漢民進出し來り、蒙古民族、小數の滿洲族等は經濟的地磐を漢人に奪取せられて行つた。

清朝の道光元年初めて開荒、昌圖廳に隷したが、同年梨樹城に分防照磨を置き、其後、昌圖廳が府に昇格すると共に梨樹城の照磨を裁撤して奉化縣を設けた。更に民國三年に至つて梨樹縣と改められ、現在は奉天省に屬して居る。

滿洲事變に際し、縣長善處し、治安を計り日滿連絡提携成り、今日に至る。

地勢

全縣下を通じて概して坦々たる平地並に臺地をなし、山らしい山は見ない。船山の海拔二〇〇米を最高とす河川は東遼河を最大とし、西安縣に源を發し、伊通縣を經て、東方懷德縣境を北流、漸次西南流して、雙遼縣と堺す。古來屢々氾濫し水患あり、次で、昭蘇河及び、條子河があり三大水系を爲すが、後者二河は平常水量が乏しい。然し、其流域は土地肥沃、東遼河沿岸地方は荒蕪地或は砂丘地が多い。

縣の物産

主要產業は農であり全縣戸數の七三%以上を占めて居る。高粱、大豆、粟の三種を主とし、特に高粱は良質なる點に於て其名が高い。縣内の食糧、家畜飼料に充てゝ尚、生產に餘剩あり、四平街、郭家店方面より縣外へ移出せられて居る。

都邑梨樹街

四平街驛より西北約一七粁の地點にある。古く、偏臉城、梨樹城又は奉化とも稱へ、買賣街とも呼んで居る。清代には蒙古達賴罕旗に屬し、荒凉たる原野であつた。道光三年縣治を布き、奉化縣と稱へ、更に民國三年梨樹と改められ、舊政權時代は一切の行政は警察官の指揮を受けてゐた。建國後康德元年七月始めて街長を選出し、康德三年二月梨樹縣城街公所が出來て街長始め專門の街内政治を司る機關が整備し、康德四年梨樹街公所と改稱し、更に康德五年一月、新街村制を實施した。該地方の商業中心地として相當繁榮を保つたが、鐵道開通後、公主嶺、四平街等に繁榮を奪はれたが、然し尚特產、高粱、粟、大豆小麥等の取引、十七、八萬石に及び、製粉、豆粕、豆油等、盛に製出せられて居る。

商工業者は一八〇戸、中小商工業者で、燒鍋、糧棧等は稍大きいものがある。

梨樹街諸機關

梨樹縣公署	街公所	警察署	税捐局分所
商工公會	興農合作社	郵政局	大興公司(四)
梨樹(農科)國民高等學校(立省)	助産士學校(省立)	公立國民學校	協和會
電報局	電話局	縣立醫院	勸業模範場
救療所	大同電氣會社	屠宰場	奉北交通株式會社
青年訓練所	農民訓練所	勞工協會出張所	

郭家店街

滿鐵連京線の一驛で、海拔約一八二米、南部を昭蘇太河の上流が繞つてゐる。大同二年三月第三區聯村辦公處が成立し、康德三年一月辦公處は解散し、二月一日郭家店街公所を組織、四年十二月一日舊滿鐵附屬地と合併改めて街公所は車站街に移轉した。梨樹、伊通兩背後地よりの特産物並に、輸移入雜貨類の中繼地としての一小街であるが、市況は特産出廻の高に支配される。

附近に巴布扎公園があり、春季李花の名所として知られて居る。此公園は巴布扎布將軍引上に際し、寄附したる金を以て營まれた公園である。交通は滿鐵沿線といふのみならず、奉北交通株式會社の營業所があり、梨樹縣城、楡樹台、小城子等に乘合自動車の營業を爲し交通至便である。

郭家店街諸機關

街公所	警察署	税捐局分所	郵政局
電報局	電話局	中銀支行	國際運輸
商工公會分事務所	奉北交通株式會社營業所	滿電營業所	國民優級學校
國民學校	日本人小學校	宗教團體(四)	協和會分會

大豆稈株式會社

小城子街

小城子街は、梨樹縣の東北、郭家店街の北方にある小市街である。康德三年二月一日街の設置を見五區劃を有してゐる。

鐵道沿線ではないが、郭家店及び、八面城に乗合自動車の便があり、公主嶺、楡樹台、仁和村、仁里村、仁恕村、禮文村に自動車道路を有して交通は便である。街内は油坊、酒醸等が行はれ、將來も、附近農村の主要なる農産を原料として、廉價な材料と勞力を得られるため大資本を投ずれば、此種の事業は有望と見られる。街の水質良好、衞生に適してゐる。

小城子街諸機關

街公所　警察署　財務分局　管煙所
國民優級學校　國民學校　郵政局

三江口諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局
大興公司　其他

警察署所在地

楡樹臺　劉家館　孤家子

郵政局所在地

楡樹臺　海豐屯　十家堡　楊木林
四平街鎭　蔡家　喇嘛甸

電報局所在地

十家堡

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
梨樹縣事情（大同學院）	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
縣下の治外法權について（民政部）	第一回全國縣參事官會議錄	民政部	康、元、六
四平街背後地事情	滿鐵調査月報（一三の二）	滿鐵	昭、八、一
梨樹縣事情（上、下）	同表題	滿洲國地方事情大系刊行會	康、二、一三
梨樹縣圖	同表題	縣公署	康、三、
梨樹縣實業要覽	同表題	縣公署	康、三、一二
梨樹縣月報四年一月―縣一般狀況專號（上、下）	同表題	縣公署	康、四、二
梨樹縣統計彙覽（三年度）	同表題	同前	康、四、一〇
梨樹街街勢一覽	同表題	梨樹街公所	康、六、九
郭家店事情	同表題	郭家店街公所	康、六、一〇
小城子街事情	同表題	小城子街公所	康、六、一〇

雙遼縣

概史

雙山縣と遼源縣は、康德七年五月兩縣を合併して雙遼縣となつた。もとの雙山縣の地は蒙邊に處して居る。昔扶餘に屬し以來各民族興亡毎に其屬する處となつたが、淸時代は內蒙哲里木盟科爾沁左翼中旗の地であつた。光緖三十三年開放せられ、宣統元年始めて安墾局を設け招墾した爲め、農商民集り來り二年に雙山鎭を置き、民國二年縣が置かれ、十三年縣城を修築した。滿洲事變後、民心不安、匪賊の來襲を受けたるもよくこれを退け、大同元年より漸次縣政進み、康德七年五月遼源縣と合併、奉天省內である。

合併前の遼源縣の地は、科爾沁左翼旗和碩達罕親王旗下の地であつた。同治十年吏員を派して昌圖府

康平縣の管轄とし、光緒二十七年州治に改めて遼源州を置いた。宣統二年達爾罕親王は當地までの遼河の舟行を許した。其の後民國二年府制が廢され北路觀察使の許に遼源縣を設け、同三年北路道は洮昌道と改められ之に屬した。

東三省の時代、奉天省に入り、事變前に及んだのであつた。事變に際し、縣長は各機關首領及地方有士を集めて地方維持會を組織し、地方治安の維持を計り、大同元年十月、遼源縣公署と改名した。縣城は遼源又は鄭家屯と云ふ。康德五年王地は滿洲國に奉上し、康德七年五月雙山縣と合併し、縣名を雙遼縣と稱する事になつた。奉天省下である。

地勢

東北は大哈爾巴山を以つて懷德縣及び長嶺縣と界し、東南は東遼河を以つて、梨樹縣に對し、西は興安南省に接し、恰も嘴の如く吉林省の東邊につき出でゝ居る縣である。

本縣は北に高く南に低く山には大哈爾巴山、小哈爾巴山、開寶山等あり、廣漠たる草地のみにて矮小な灌木の茂みすら見出せず野は凡て原始の儘の姿で廣がつて居る。

河流は、若亘流河、小淸河、二道河等何れも遼河の支流である。遼河の二大支流、東遼河、西遼河は本縣に於て合流し南流す。西遼河は熱河省白岔山に源を發し、蒙古の地を流れて本縣内に流入し、西南三江口に至つて東遼河と會す。東遼河は奉天省西安縣の平頂山に源を發し、伊通、懷德縣等を經て、本縣に入り、三江口に至つて居る。東西遼河會流して南流する事千餘滿里、營口に至り遼東灣に流入する。

縣の物產

農產は本縣唯一の主要產物であるから、平坦なる土地はよく耕され、其產物の種類も多いが、就中、高粱、玉蜀黍、大豆、穀子等は主要なものである。又特用作物も現今漸增の情勢にあり、芝麻、稗子、

鄭家屯街（遼源）

鄭家[illegible]

棉花、煙草等である。野生の甘草採取が行はれて居る。

畜產は有望である。面積の割に人口稀薄牧畜に適してゐる。現今、馬を第一とし、豚、牛、騾等で羊は甚少ない。獸毛、獸皮等を出す。森林地帶の如きものなく到る處に小林あるのみで、樹齢も十數年に過ぎない。

鑛產は東西哈爾巴山に多量の亞鉛が埋藏して居る模樣であるが、未だ採取するに至らない。遼源の方は、天然曹達の採取が行れる事に於て名高い。

水產は從前東部の二水泡に漁類が甚多かつたが、康德二年の冬嚴寒であつた爲め池が堅く氷結し爲めに魚類は其まゝ凍死してしまつた。縣當局ではこれが復活を計つてゐる。

七、八十年前遼源が未だ開放せられなかつた當時は一蒙古人が旅店を開いてゐたに過ぎず、牛馬は主として法庫門に於て取引されてゐたが、この地が遼河の三叉點に位して交通の要衝を占めてゐた爲めに同治初年頃より漢人の移住者は逐次增加し遂に牛馬市場は此の地に移り、東蒙唯一の蒙古貿易市場として急激な發展を遂げるに至つた。民國七年(一九一八年)四洮線の開通は一層此の地に繁榮を齎したが、同十年通遼支線開通し更に同十二年四洮線全通してからは單なる中間驛となり、他方水田灌漑の爲め遼河の航運が價値を減殺されて此の地の發展は著しく阻害されることゝなつた。然し乍ら民國時代より開業せる商店に加へ、大同、康德に至つて開業したる商店急增し、大小の商舖三〇〇近くを有するが、資本五萬を越ゆるものなく何れも小資本である。

特產の取引も振はず、四平街に移りゆく狀態である。

雙遼縣公署　警察署　稅捐局　郵政局

電報局　電話局　區法院　區檢察廳
監獄　商工公會　興農合作社　專賣局
中銀支行　大興公司(二)　日本人小學校　國際運輸
遼源(農科)國民高等學校(省立)　遼源實業女學校(省立)　滿人小學校
鄭家屯電業株式會社　勞工協會出張所

都邑雙山

鄭家屯の東北二二餘哩の地點にある。光緒年間開放せられた地である。此地方は廣濶なる平原中に位し、過去の匪害と交通の變化により、其發達は遲々として進まず人口五千六百(康德六年六月末)奉天、山東よりの移住滿人が殆ど凡てゞある。

産物は高粱、大豆等であるが、農産物の集散する冬季は商況稍活氣を帶びるが打通、平齊線の開通により直接鐵道驛に出づるものが多く、此處を中心としての取引はあまり盛でない。唯此地方及背後地は廣大肥沃なる未墾地であるから農耕地としての發達は期待されるわけである。

雙山諸機關

警察署　税捐局分局　郵政局　興農合作社
中銀支行　雙山農業學校(省立)　滿人小學校　大興公司(二)

太平川

太平川はもと達爾罕旗に屬してゐたものであるが、宣統二年道路用即ち洮遼荒道の用地として開放せられたのであるが、其周圍は、未開放地として殘されてゐた關係上、東に遠く長嶺、西に瞻榆、北に開通等の開放地があるに不拘、太平川には一般に蒙古氣分が濃厚であつた。

舊市街、新市街に分れ、舊市街は鐵道開通前の宿場で新市街は經濟的に發展して街であつた。此程匪害に苦しめられたが、徐々に恢復しつゝある。

茂林村諸機關	警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局 國際運輸（保康にもあり） 其他
警察署所在地	天興廠　周家窩　太平川　高家廬屯 臥虎屯　安仁里
稅捐局分所所在地	衙門臺　太平川
郵政局所在地	臥虎屯村　玻璃山　三林　衙門臺 太平川村
電報局所在地	衙門臺村　太平川村　保康　茂林村
電話局所在地	太平川

資料

題名	書名	發行所	發行年月
雙山縣一般狀況	同表題	縣公署	康、四、
雙山縣縣政一覽表	同表題	縣公署	康、三、一二
雙山縣經濟事情	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
遼源縣事情（大同學院）	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
鄭家屯附近事情	農業上より見たる鄭家屯附近事情	滿鐵鄭家屯事務所	昭、八、一一
鄭家屯事情	滿蒙時報	哈爾濱商品陳列館	昭、九、九
[illegible]	滿鐵調査月報（一四の五）	滿鐵	昭、九、五
鄭家屯の天然曹達產出狀況	海外經濟事情	三省堂	昭、九、五、二七
鄭家屯の[illegible]狀況	海外經濟事情	三省堂	昭、九、七、二

鄭家屯經濟狀態……滿鐵調査月報（一三の八）　滿鐵　昭、八、八
鄭家屯（甲斐巳八郎）……協和（二〇八）　滿鐵社員會　昭、一三、一一
遼源縣一般狀況（三年度）……同　表題　遼源縣公署　康、四、一二
遼源縣統計彙編（三年度）……同　表題　同　前　康、四、六
遼源經濟事情……金融合作社管内經濟事情　金融合作社聯合會　康、五、一二
鄭家屯附三江口及康平……東部蒙古誌草稿中　―　明治四一、―

海龍縣

概史

此の地は東平（現地の東豐縣）西安、西豐等の諸縣と同じく清室の圍場卽ち御獵區であつたが、光緒四年獵區中の十六圍を人民に拂下げて此の地方に於ける最初の開墾地とし、同六年海龍廳を設けて撫民通判を置いた。光緒二十六年通判廳のほかに圍場總管衙門を設けて旗務を掌らしめ、この頃より同地は漸次發達した。同二十八年通判廳は昇格して海龍府となり、圍場管衙門は光緒三十四年廢止された。民國二年府制改つて縣となり、東邊道の管轄に屬した。現在は滿洲國の行政區劃上奉天省に屬する。

地勢

奉天省の東北隅に位し、東は輝南縣、南は柳河縣、西及西南は清原縣に、西北及北部は東豐縣に接し東北は吉林省磐石縣に隣りして居る。北部に庫勒、大鍋奎の二山脈を負ひ、西及び南に龍岡山脈を望み東に四方頂、老岡嶺等の連山が重疊する。蟠蜿磅礴として濛江一帶の大森林を擁し西は影壁山、雙龍山となり薩哈亮の連山に連り所謂東山地方の東半部を劃して掬鹿地方に對してゐる。當地方の丘陵山岳は一般に緩漫なる波狀をなし河川は沙河、柳河、哈螞河、蛟河等があつて之等の間を貫流し所謂海龍平野をなしてゐる。

縣の物產

海龍縣の開墾はすでに五十餘年を經過して居る。當時は土地肥沃農作物もよく成長したのであつたが、耕作すでに久しく收穫も減少の狀態である爲め、今後土壤の改良、施肥等の必要がある。

大豆、高粱、玉蜀黍を主とし、煙草を多く產す。縣內自然林と人造林があるが人造林は極めて少ない。楊柳、楡、樺等で、人造林の方には槐、糖槭、水曲柳、梧桐等がある。

家畜は馬、牛、騾、驢、羊、豚の類、縣城及山城鎭、朝陽鎭に屠宰場の設備がある。

開拓

本縣の黑山頭に鐵道自警村が一箇所あり、楊子河子に煙草開拓民の入植がある。

都邑海龍街

縣公署所在地、地方行政、教育の中心地である。縣城として或は舊都としての重要都市たるの面目を保持してゐる。市街は城內外より成り、城壁は高さ二丈土城であるが東西南北に關門がある。

商業地區は東門及南門附近であり、主要公共機關は城內にある。經濟都市である朝陽鎭と山城鎭の中間にあつて、市況は振はない。僅に附近產物の集散あるのみであるが、近來日人商人の入り來る者多く、日人商店一〇二戶、滿商八二五戶を有してゐる。

海龍街諸機關

海龍縣公署　警察署　稅捐局分所　商工公會
區法院　區檢察廳　監獄　郵政局
電報局　電話局　興農合作社　中銀支行
大興公司　國際運輸　協和會　衞公所
海龍(農科)國民高等學校(省立)　海龍實業女學校(省立)　滿人小學校
勞工協會出張所

山城鎭

山城鎭は海龍縣下第一の都市で人口も縣城の約二倍三萬一千餘を擁して居る。北山城子とも稱せられ

光緒七年開放せられて以來發達して來たのである。背後に大平原を控へ、柳河、通化方面への要路に當り、東邊道一帶の物資集散市場として經濟上重きを爲して居る。山城鎭を中心とする產業の主なるものは農產の大豆、高粱、玉蜀黍、小豆、水稻等で、これらの取引が盛であり、金融機關も備へて居る。街は驛を少しはなれて城内があり、中央に大道あり、商業殷盛を極めて居る。康德元年頃迄度々の匪襲を受けて居たが、よくこれを撃退し現在は安全である。

山城鎭街諸機關

警察署	稅捐局	郵政局	電話局
電報局	專賣局	中銀支行	大興公司(二)
興銀支店	國際運輸	電業營業所	山城鎭(農科)國民高等學校(省立)
滿人小學校	日本人小學校	生活必需品會社配給所	街公所

朝陽鎭街

山城鎭と共に奉吉線の主要都市である。資源豐富なる輝南、濛江、金川等の背後地を擁し、農產物、木材等の出廻り盛で市況活況を呈して居る。街は朝陽鎭の驛より稍はなれ、馬車を以つて連絡して居る。

當地は光緒四年海龍と同時に開放せられ、爾來次第に發展し來つた處で、幾度か匪禍、災害を被り之がため甚だしく發展を阻害せられて來たが、屈する事なく遂に現今の都市を形成するに至つたものである。朝陽鎭は前述の背後地を控えて居り、それらの咽喉をなす處で濛江、撫松方面へのバスの便あり東南方輝南、金川方面にも便がある。

朝陽鎭街諸機關

警察署	稅捐局分所	郵政局	電報局
電話局	營林署	專賣局	中銀支行

梅河街

大興公司(一二)　興銀出張所　國際運輸　電業營業所
日本人小學校　滿人小學校　街公所

梅河街は平梅線(四平街―梅河口)の開通後、急に發展したところである。更に通化に通ずる線完成してより其分岐點となり、一躍奉吉線の主要驛となつてゐる。然し、山城鎭、朝陽鎭を控えてゐるために、大小の商店は相當あるが、經濟的にはあまり發展を期待されない。驛から一粁足らずの處に城内があり、其間は日本人の商店、住宅が立ち並んでゐる。梅河口と稱する地で街制を布き梅河街とす。

梅河口の東方一粁五百位の處に蓮花泡があり、廣大なる自然池であつて蓮花繁茂し、唯一の遊園地である。

梅河街諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　電報局
國際運輸　電話局　日本人小學校　滿人小學校
大興公司　街公所

其他

警察署所在地　唐大營　杏嶺村　大荒溝

郵政局所在地　六八石　黑山頭　大平鎭

日本人委托小學校所在地　楊關河

資料

題名	書名	發行所	發行年月
海龍縣事情(大同學院)	滿洲國地方事情概說	滿洲國地方事情刊行會	康、元、四
海龍縣事情	滿鐵調査月報一三の一一	滿鐵	昭、八、一一

海龍地方に於ける葉煙草生產狀況……海外經濟事情　三省堂　昭、九、八、二〇
海　龍（鐵路總局）……奉吉線案內　鐵路總局　康、元、六
海龍縣志（上、下）……同　表　題　海龍縣公署　康、四、
梅河口（山田健二）……旅行滿洲（四の一二）　ビューロー　昭、一二、一二
海龍商業事情……同　表　題　海龍商工公會　康、七、二
海龍縣康德三年度農家經營經濟調查……康德三年度農家經營經濟調查（第二分册）　產業部資料科　康、五、一二
朝陽鎭街事情……同　表　題　朝陽鎭街公所　康、六、一〇

東 豐 縣

歷史

東豐縣はもと海龍府に屬し其の後東平縣となり、更に東豐縣となつたものである（縣城東豐はもと大肚川）。西豐、西安等と同じく清朝皇室の獵區であつたが、光緒二十二年奉天將軍の奏請に基いて掏鹿（西豐縣）大疙疸（西安縣）と共に始めて開墾せられ、同二十六年掏鹿に總管衙門が置かれた頃の東豐は一寒村に過ぎなかつた。光緒二十八年東平縣が設置せられ海龍府に屬せしめられたが、民國二年府制が廢止せられ東豐縣と改められた。現在は奉天省に屬する。

地勢

奉天省の殆ど東北隅にあたり、北は伊通縣、磐石縣と接し東は海龍縣、南西豐縣、淸原縣、西は西安縣に隣して居り、全縣恰も人間の胃袋の如く、北部は狹長、西南部に廣まつて居る。西北の西安縣境には薩哈亮嶺の峻峰聳へ古年嶺、金鳳嶺、新開嶺等が起伏する。南部に老爺嶺、官道嶺、四道崗の嶺峰錯綜して北方に及ぶ。主要河川は渾河の支流を成す沙河が海龍縣境を南に流れ、大柳河、梅河等の支流が東南に流れて沙河に合流して居る。

縣の物產

本縣は氣候好適、地味豐饒良質の大豆の名產地として知られ、玉蜀黍、高粱、粟の產出亦多い。大豆

良質たるため製油原料として地方的に消費せらるる外、主として原料のまゝ他に輸移出して居る、高粱、玉蜀黍、粟は住民の主食とし、他に小麥、水稻等も出して居る。特用作物として麻蕢、煙草、荏等を出し馬鈴薯の産亦多し。

牧畜を本業に營む者はないが、農業用として役畜を主とし牛、馬、騾、驢等であり豚の飼養は廣く行はれて居る。

一面山岳地帶で昔時は密林繁茂し、清朝時代には特に御獵地として封禁地であつたが、開放せられて後森林は伐採し盡され無立木の山地多く建築用材となる林産物なし。

鑛業は將來の調査に俟つべきである。現在南部地方に銀、雲母及び石炭の産出があると、雲母は有望な樣である。

開拓事業

本縣には集合開拓民が、東豐青林に一箇所入植して居る。青森縣出身者より成り、一八五名で集合開拓としては大きい方である。

都邑東豐街

東豐縣城にして一名大肚川と云ふ。東豐驛を有して居るが驛は縣城の東方四粁に在る。四方山に圍まれ、南山の麓に一水流があり、凹地で濕氣多く水質不良あまり健康地ではないが人口二萬を越える都市であり、地方政治、教育、交通、商業の中心地である。

縣城舊土城の建設は清の光緒三十三年に成る其後匪襲に備へるに薄く、民國十二年面積を擴張して新土城を造つたが土城で破損し易く、滿洲建國後紅槍會匪襲撃の際何の用も爲さなかつたので康德二年鐵條網を張つた。城門を入れば道路の兩側に連立する家屋は田舍風であるが、中央近き商店街は煉瓦造りで、處々に規模の整つた滿洲式店舖がある。市況甚だ散漫であるが、近時稍活況を呈してゐる。隣接諸

縣に西豐、西安、山城鎭、朝陽鎭等の大市場を控え其商權比較的狹小である。
集散貨物の主なるものは、豆、小豆、藍類、葉煙草、麻、柞蠶等である。油坊、燒鍋、製粉、豆素麵製造等の家内工業的なものを多少見る。

東豐街諸機關

東豐縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
郵政局	電報局	電話局	區法院
區檢察廳	興農合作社	中銀支行	大興公司
國際運輸	縣立醫院	東豐師道學校(省立)	街公所
東豐(農科)國民高等學校(省立)		東豐女子國民高等學校(省立)	
滿人小學校	勞工協會出張所		

大興鎭

縣城の西北三十五滿里、西安との交通の要點に在り鐵道沿線で驛の開設以來商況振ひ將來性がある。

猴石鎭

縣城の西四十五滿里、山水の景を擅にし、西豐との交通の要衝に當つて居る。北の山下に石が挺立してゐてその形、猿猴の樣であると。鐵道開通以前は東方各地の農產は其大部を此處に集散してゐたが、其の後形勢頓に衰へ、事變後紅槍會匪の根據地となつてゐた。紅槍會匪は擊滅せられ現在は安全である

其他

警察署所在地	大陽歲	四平街	猴石鎭
	黃泥河		
	沙河鎭		
稅捐局分所所在地	黃泥河		
郵政局所在地	猴石村	楊木林子	雙廟子
	太平鎭		

日本人委托小學校所在地

永興村	沙河鎮	大興鎮	四平街
大陽崴	二龍山村	影壁山	一面山
胡仙堂	大合		
東豐青林			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
政況	民政部半月刊	民政部	大同三、一、五
同前	同前	民政部	康、元、三、三一
東豐(鐵路總局)	奉吉線案內	鐵路總局	康、元、六
東豐縣事情(大同學院)	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
東豐縣事情	滿鐵調査月報(一三の一二)	滿鐵	昭、八、一二
東豐縣事情(大同學院)	同表題	大同學院	康、四、六

西安縣

概史

清室の御獵區に屬したが光緒二十二年奉天將軍の奏請によつて二十六年掬鹿と共に開放せられ、光緒二十八年西安縣と改めて海龍府に屬せしめ、同年老虎唄子より現在の地西安(舊名大疙瘩)に縣城を移した民國三年海龍府廢せられ、西安縣は奉天省遼瀋道の管轄となつた。現在奉天省の管轄に屬する。

地勢

東部及び東南は東豐縣、西及び西北部は西豐縣、北部は吉林省伊通縣に境し地勢は薩哈亮嶺が縣內を西南より東北に貫走し、縣境には山嶽地帶多く香山、烏龍山等南方に聳へ元寶山、雙頂山東部に走り北部に龍圖骨山が起伏して居る。大遼河は薩哈亮嶺に源を發し南方に大梨樹、新開河、東に拉法燈窄河、

北に頭道河。二道河の各支流を合して伊通縣に入る各河川山岳の間は溝を爲して居る。

縣の物産

縣東北一帶は山を以つて繞らされ、土地黃沙多く、中部遼河沿岸地は黑壤多く、東南、西南二部沙質卽ち第四紀の沙礫層である。

中部の豐饒地には農產多く、高粱、大豆を大宗とし、玉蜀黍、粟、其他農產の種類は多い。他に煙草線麻、青麻等の特用農作物あり、蔬菜類又豐富に生產される。

家畜頭數は騾、豚等が最も多く、馬、牛、驢等がある。專業とするものはないが、農耕用、運搬用として飼育されて居る。

縣內の森林は亂伐の結果現在のものは僅に數年生の雜木に過ぎず、木材として出すに至らず燃料を供給するに過ぎない。

礦產埋藏は頗る豐富、主として石炭である。炭坑のみにても十二箇所を有する。現在開採の主なるものは滿洲炭礦株式會社の西安炭坑である。

西安炭坑

炭坑は西安驛の北方にあり、侏羅白亞紀に屬し、炭層は四層から成り、粘結性又は不粘結性の瀝青炭を產する。中生代炭としては比較的水分少く、長焰の有煙炭で良質である。東部產のものは骸炭製造に適し埋藏量は二億五千萬瓲以上と信ぜられる。

事變以前は張學良管下の東北鑛務局の經營であつたが、事變後、一時滿鐵の經營となり、滿炭に統制されたものである。

滿炭が現在八坑有してゐる外、民有の小坑あり、小量の石炭を採掘して居る。

都邑西安街

西安縣公署の所在地、人口四萬一千餘を數へ、炭都として廣く世に知られ、地方都市としては相當大

きく、加ふるに比較的市街整然とし、感じのよい街である。當地は大疙瘩とも稱せられ一時大興鎭とも呼ばれた事がある。

炭礦を中心として目覺しき發展を遂げつゝあり更に農産物の豐富な背後地を有し其出廻り年々增加の傾向を示してゐる。主なる出廻品は大豆、高粱、玉蜀黍、小豆等。

油坊業、醸造業、織布業、精米業、家具木器、製造業等、相當盛に行はれてゐる。

西安街諸機關

西安縣公署	警察署	稅捐局	專賣局
郵政局	電報局	電話局	興農合作社
西安地方法院	西安地方檢察廳	區法院	區檢察廳
監獄	商工公會	中銀支行	興銀出張所
大興公司(二)	國際運輸	協和會	縣立醫院
電業支店	西安(工科)國民高等學校(省立)		西安女子國民學校(省立)
滿人小學校	日本人小學校	西安煤礦股份有限公司	西安銀號(合資)
東三洋行(合資)	私立青年學校	勞工協會出張所	街公所

其他

警察署所在地	遼河源	渭津	白泉	夾信子
稅捐局分所所在地	二道河子(大興公司あり)			
	老虎嶺	炮手堆子	平崗	
郵政局所在地	渭津村	靈神廟	大梨樹河子	炮手堆子

電報局所在地			
遼河源	夾信子	老虎咀子	二道河子
渭津村			

資　料

題　名	書　名	發行所	發行年月
西安(鐵路總局)	奉吉線案內	鐵路總局	康、元、六
西安縣事情(大同學院)	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
西安縣事情	滿鐵調查月報(一三の二)	滿鐵	昭、八、一二
西安縣一般狀況	同　表題	縣公署	康、四、三
統計彙刊(西安縣)	同　表題	縣公署	康、元、一二
西安	省政彙覽(奉天省)	國務院弘報處	康、四、二
西安	滿洲主要都市要覽	滿鐵	昭、一二、四
西安炭礦	日滿商事調查 統計月報(一の六)	日滿商事	昭、一二、九
統計上的西安縣	同　表題	西安縣公署	康、四、九
西安縣康德四年度縣政之回顧	內務資料月刊(二の四)(二の五)	內務局	康、五、四 五、五
西安縣康德五年度施政大綱及方針	內務資料(二の五)	內務局	康、五、五
西安街事情	同　表題	西安街公所	康、六、一〇
西安縣康德五年度行政計畫	內務資料(二の九)	內務局	康、五、九

錦州省

錦州省

錦州市

略史

錦州は其の起源を遠く舜夏時代に發し、遼東の遼陽と共に遼西の錦縣として知られた古邑である。漢時代は幽州の地に屬し、唐、宋の時代は契丹の治下にあつた。遼代は永樂縣の地にあり廣濟寺に殘されたる塔は遼代のものといひ傳へて居る。金時代も亦永樂縣內にあつた。元を經て明時代洪武二十六年遼東都司を置いた。滿時代は錦州府と稱し、一廳六縣を統轄してゐたが、民國三年府制廢止後錦縣と稱せらるゝに至つた。滿洲建國後康德元年十二月の省制により新設錦州省が設けられ此地は省制の中心となつた。從來此街は錦縣と呼ばれ又錦州とも兩樣に呼びならはされて來たのであるが、康德四年十二月新設市が全滿內に決定せられ此街は錦州市として市制を布かれるに至つた爲、錦州市と呼稱するやうになつた。

市の發展過程

此地は古くより遼西に於ける政治、經濟の中心地として頗る殷盛を極めたのであるが、咸豐八年（一八五八年）營口の開港に依つて先づ第一の打擊を受け、次で京奉線開通（一九〇七年）するに及んで、遼西地方の流貨系統に一大變化を來し、繁榮を營口に奪はれた狀態であつたが尙、內蒙古方面に對する輸出入の中繼地として、穀類、毛皮、棉花、甘草、綿絲布、雜貨の集散取引高、二千萬元を保持してゐた。滿洲事變に際し、錦州爆擊によつて張學良が最後と頼む錦州も皇軍の入城によつて治安恢復成り、滿洲國の成立後は錦州の發展愈々軌道に乘り、北滿の開發進展、熱河、內蒙古方面に對する鐵道網の完成に

伴ひ、從來、北京天津方面より行はれた北支貿易が、錦州經由に移動してゆき、又日本內地よりの製品が、支那製品に代つて錦州を經由するもの多くなるに至つた。錦州は又產業資源背後地を多く控へ、殊に阜新炭田、北票炭田を近くに有し、胡蘆島の築港は、近年中に完成せんとして居る。かゝる好條件を有する位置にある錦州は今後益々發展の一途を辿る過程に置かれて居る。

工業都市としての錦州

工業都市として錦州は其將來を約束されて居る狀態である。錦州自身、工業市として興るべき幾多の好條件を供へては居たのであるが周圍の情勢は錦州を起たしめるに至らなかつたといへやう。

現在當市の工業狀況

東棉紡織株式會社は資本金一千萬圓を以つて、五萬一千錘、自動織機臺七百六十臺、普通織機千六百臺を据へつけて紡績及繰棉、織物製造、棉花栽培、荷造工場等を經營し、從業員滿人三千人、日人二百人使用する豫定といはれて居る。

福壽織布株式會社は、資本金百五十萬圓、大巾布及び人織及人絹布の織布で年產三百十萬反餘の生產を見る事になつて居る。

其他工場決定せられたるものに、滿洲合成燃料株式會社は五十萬坪の工場敷地が決定せられて居り第一期計畫は六年末迄に完成の豫定であつた。

日滿製粉株式會社の錦州工場は、哈爾濱に於ける同社の工場を錦州に移轉する事に決定し、五年十一月殆ど工場建築成つたものである。敷地は五千坪。滿洲瓦斯株式會社支店は瓦斯工場を建設康德五年末までに完成。

錦州の工業條件

錦州は工業立地として幾多の好條件を備へて居る。卽ち

(1) 氣候溫和、冬季に於ても〇下二十度を下る事稀で夏季にても三〇度を超ゆる事は尠い。

今後の工業

(2) 交通、道路四通八達、鐵道、奉山線、錦古線、尙大虎山より、蒙古方面に入る便あり、葫蘆島を控えて水運の便あり。

(3) 土地、新都市計畫による工業地區は小凌河に面せる約五十八萬坪の廣大なる地域であり、拂下げ地價は坪二圓で有る。

(4) 動力、阜新炭田、北票炭田近く、豐富、安價に得らる。滿洲電業錦州支店は現在發電能力二、五〇〇キロワツトとす。

(5) 工業用水、水質良好、女兒河の如きは四季清水を湛へ、市附近何處の地下を掘つても多量の清水湧出し、工業地區は僅か五、六米掘つて良質の清水を豐富に得られる。

(6) 勞力、勞働者の大部分は山東方面の出稼勞働者であるが、從順にして體力强大、賃銀割安である

(7) 金融機關、中銀、興銀、商業、公順、中國の諸銀行。

(8) 原料資源、錦州を中心とし近縣及熱河方面の背後地に農産、畜産、鑛産の各種資源を有し、錦州はそれら出廻の中心市場である。

工業の性質により種々必要條件は異にするも錦州は以上の如き種々なる好條件を供へ工業立地としては適當なる土地である。

今後錦州に企業化を豫想し最も有望なものとしては棉花、酒精、羊毛、皮革、粉條子、曹達等の各工業が考へられる、其他パルプ工業、製材工業、製油工業等も適當ではあるが、滿洲全帶の工業現勢から見て、これは研究題目であらう。何故ならば他に此種の工事が多く起つて居るからである。

錦州市諸機關

錦州省公署　錦州市公署　錦縣公署　警察廳(派出所一六)

稅捐局
商工公會(省・市)
專賣署
錦州高等法院

錦州地方法院
錦州高等檢察廳
錦州地方檢察廳
區法院

區檢察廳
監獄
國立錦縣農事試驗場
郵政局(四)

電報局
電話局
興農合作社聯合會
興農合作社

中銀支行
興銀支店
大興公司(六)

國際運輸
糧穀會社出張所
縣立醫院
勞工協會支部

協和會省本部
電業支店
錦州師道學校(省立)

錦州第一(農科)國民高等學校(省立)
錦州第二(商科)國民高等學校(省立)

錦州女子國民高等學校(省立)
滿人小學校
錦州高等女學校

日本人小學校
青年學校
放送局開設豫定

(會社)

錦州石油販賣株式會社
株式會社錦州市場
東棉紡織株式會社
福壽織布株式會社

錦州製氷株式會社
西海汽船公司(合資)
木材土地建物會社(合名)
滿蒙貿易株式會社支店

三井物產株式會社支店
錦州鐵道局
生活必需品會社支店及倉庫
合成燃料工場

資料

題名	書名	發行所	發行年月
錦縣要覽(康德四年)	同 表題	錦縣公署	康、四、一
錦縣の工業條件	同 表題	錦縣鐵路局產業處	―
錦州市地域設定規準調查	同 表題	錦州市政施行籌備處	康、四、八
錦州經濟概況	東洋貿易(一六の一二)	大阪市役所	昭、一二、一二

概況

錦州に於ける毛皮工業	同前	同前	同
錦縣事情（鐵路總局）	奉山鐵路案內	鐵路總局	康、元、三
奉山線錦縣經濟事情	同表題	滿洲事情案內所	昭、八、八
錦州（北條太洋）	熱河	新光社	昭、八、九
企業地としての錦州	同表題	錦州商工公會	康、五、一二
經濟錦州の橫顏	同表題	商工公會	康、五、六
錦州の經濟事情と其將來性	錦州商工月報（一）	錦州商工會議所	昭、一一、一〇
最近の錦州經濟事情	大連商工月報（二三四）	大連商工會議所	昭、一〇、二
錦縣城關興圖	同表題	錦州市建設局	康、四、一
新市制下の錦州市	滿洲國現勢	滿洲國通信社	康、五、七

阜新市

康德七年一月阜新の躍進的發展により遂に市制を布く事になり、阜新市となつた。四周は平坦なる耕地を有し、其、東、南、北三方は二、三哩を隔てて丘阜を繞らして居る。四邊新開拓地に對する物資の供給地として最も好適なる位置を占めて居るので開設以來日淺きにも拘らず、相當の發展を遂げて居る。かくの如き發展は當管內の阜新炭田開發に其端を發するもので、滿洲炭礦株式會社の經營は日に月に進んで居る。これに加ふるに最近に至り國策的重要資源たる石油も、科學的調査の結果益々有望確實視され、最近に至り其埋藏は驚くべきものである事が確證せられ、滿洲國にとつては一大福音である。滿洲石油株式會社は、石油界のエキスパートを集めて奮々開發に乘り出す事になつて、滿州に都市計畫を樹て其の工事も進捗中である。滿洲炭礦株式會社は、康德四年阜新礦業所を開設し、孫家灣、新邱に、大露天掘礦を、高德、五龍、太平、平安に坑內礦を有し、日系從業員數千人、滿系從業員數萬人を有し

阜新炭坑

て居る。

斯の如く重要資源石炭、石油を抱藏せる阜新市は將來益々有望、且つ重要地點として東洋に於ける一大工業都市たるの期待をかけられて居る。

阜新城から自動車で三十分、阜新炭田に到着する。同炭田は北東から南西へかけ、八十粁に亘り、幅は八粁乃至二十粁の庖丁形をした廣大な地域である。其全部が炭層だといふわけではなく、その中に大體、新邱、孫家灣、太平、五龍等の炭層が散在するが、正確にボーリングした部分は、埋炭推定地域の十分の一に過ぎないといふ事である。

もと滿鐵で經營してゐたものを滿洲炭礦會社に五千萬圓の現物出資になつたもので、これは從來の新邱炭田であるが、今尚試錐をつゞけて居る。

滿炭では初め年產二百萬噸を目標に阜新一帶を拓かうとしたが、產業五ケ年計畫の超增產計畫によつて四千萬圓增資九千萬圓にしたのである。

阜新炭田開發の中心地である孫家灣露天掘は、康德四年十月終りから出炭し、今は東西二つの炭田になつて居るのを双方から掘り寄つて行つて兩三年の中に幅八十米、長さ一粁半の尨大な露天掘が出來上る計畫になつて居る。又太平炭田ではボーリングと併行して四つの採炭抗を開けて居け、五龍でも同樣の開發が進められて居る。新邱、孫家灣、太平、五龍を包含する阜新炭田開發の綜合機關として滿炭の阜新礦業所が縣城內に置かれて居る。阜新炭の持重つ要性は、日本及び滿洲の躍進的石炭需要に應ず爲るめである事は勿論であるが、又人造石油の原料として、石炭液化に重大役割を持つべきものであると見當をつけられてゐる。炭質が撫順炭と非常に近い炭質を有し、撫順炭はすでに液化工業に着手されて

居るところよりみて、阜新炭も亦此種工業に有望であると見られて居る。

市公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	中銀支行	國際運輸
協和會	專賣局	興銀支行	吐默特左旗公署

海州に股份有限公司阜新製作所あり　阜新(工科)國民高等學校(省立)　滿人小學校

日本人小學校	滿炭阜新青年校	礦工技術員養成所	滿炭阜新礦業所
炭採所(七)	滿洲石油株式會社	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所

題名	書名	發行所	發行年月
阜新街事情……(秘)	同　表題	阜新街公所	康、六、一〇
阜新礦業所概要……(秘)	同　表題	阜新礦業所	康、六、九

錦縣

漢代には徒河縣と稱して遼西郡に屬し、晉代には平州に隷して昌黎郡治の領となり、南北朝時代には永洛縣と改まつて遼東に屬し、遼代に及んで錦州と改め、其の治所を永樂縣と稱して、安昌縣及び嚴州を領した。金代には嚴州の治所であつた興城縣を興中府に隷せしめると共に嚴州は廢せられ、其の代りとして神水縣を領した。元代は大寧路に屬し、清の天命十年錦州を置き、康熙元年（一說には三年とあり）錦縣と改めて奉天府に屬せしめ、同時に廣寧を府に改めて、廣寧縣及び寧遠州を設けた。同四年新

に廣寧府を割いて設けられた錦州府の管轄となり宣統三年縣を府に併合したが民國二年また縣に改め、遼瀋道に屬せしめた。滿洲國獨立後は奉天省の管轄に屬したが、康德元年十二月一日新設の錦州省に編入された。

地勢

錦縣は東は盤山縣、西は錦西縣、北は北鎭、義縣に隣し、南及東南は渤海灣に臨んで居る。

縣の東北、西北兩方面は山岳重疊し、比較的地勢高く東南、西南部は海岸に沿ひ、地勢は概ね窪み其他の中部地帶は平原である。

山脈の大なるものは北鎭縣、義縣より起る醫巫閭山脈があつて縣の東北部を西方に走つて居る。其他山岳多く、紫金山、白雲山、馬鞍山を始め、數山を數ふ。尙南部に松山があり、各小山脈を爲し峻岳幡踞し一奇觀をなして居る。

河川は縣東部を貫流するものに大凌河、西部に小凌河あり、小凌河の支流に女兒河があつて共に渤海に注いで居る。大凌河は夏秋の候河水量多き時は河口より二百滿里帆船が通行する。

縣の物産

縣內に於て農耕地として地味肥沃な地方は、東北部である。高粱を第一とし、大豆、包米等、特用農作として棉花の栽培は近年益々盛になつて居る。果實、落花生、蔬菜等の產出亦多い。

畜產業はよく土地に適し、縣內產業中重要視されて居るものである。省內に於て義縣、吐默特各旗、本縣等は畜產業の中心を爲すものであつて、錦縣にては、牛、馬、騾、驢、豚、緬羊等である。而して之に伴ふ、羊毛、皮革等の生產多く取扱ひはすべて錦縣に於て爲され省中第一である。當縣に於ては殊に畜產改良に力を入れ、緬羊、豚、雞等の改良、家畜傳染病豫防等に指導の努力を拂つてゐる。

水產は、孫家灣、朱家口、王窩舖等に於て行はれて居る。主要魚類は鯰、鱠、銅羅魚、黃花魚、箭頭

魚、毛蝦等で、年産二十二萬斤位、その加工品として滷蝦、蝦油、乾蝦等があり、錦州菜は、蝦油で漬けて居る。これらの販路は今の處あまり廣くない。錦州市に新設せられつゝある滿洲合成燃料株式會社の工場からは康德七年の末には十萬瓩の揮發油が精製せられ、副産物、パラフイン紙、機械油等も生産さるゝ豫定である。又日清製粉工場は哈爾濱より移轉し、目下工場建築中、完成の曉は錦、熱は勿論、北支、大連方面にも販路を廣げる方針である。小麥は地場にて栽培を奬勵し、一年間に八百車の小麥を使用する豫定であるから之に伴ふ近郊の小麥栽培も増加するものと見られる。

開拓事業

錦州市の近く雙山子に日本の煙草開拓民が入植し、女兒河に、鐵道自警村が置かれて居る。

都邑西海口

高橋驛の南約二十滿里、錦縣管内天橋廠部落の西方にある海港である。古來錦州と支那本部との間の物資往來の關門として遼西經濟界に重要な地位を占めてゐたが、鐵道の開通と營口の開港繁榮に影響されて、何等設備を持たぬ不利と共に、近年は殆ど廢港同樣であつた。然るに滿洲事變後、錦州の急激な發展に刺戟されて、又一方、鐵道運賃の割高な點もあり再び此港を利用する者が多くなり、日本商人の間に、大連から發動機船を運航する者がある外は民船即ち戎克に限られて居る。現在は昔の儘に何等港灣の設備もなく。遠淺の海岸に干潮を利用して船側まで馬車を引込み荷役して居る。貿易は主として輸入で、麵粉、砂糖、石油等、輸出は包米、高粱等の農産で、大連、芝罘がその相手である。大同二年に山海關稅關分關が設けられて居る。

錦州市より天橋廠を經て此地に國營バスの運行がある附近には錦州八景の筆架山もあり、又鹽田多く豐かな海濱風景である。蒙古人間には此西海口の海水に浴する時は病氣に罹らないとの言ひ傳へがあり、年々初夏の候になると、何百里もある奥地の方から三々五々連れ立ち何萬といふ人が、海水に浴しに來

る。

西海口諸機關	税捐局分局	商工公會	税關分關	
石山站諸機關	警察署	税捐局分所	郵政局	大興公司(二)
	國際運輸			
天橋廠諸機關	郵政局	專賣局		
	其他			
警察署所在地	葛王碑	新莊子	杏山	
	石屯衛(大興公司もあり)			
郵政局所在地	天橋屯	女兒河	餘積屯	(大興公司もあり)
	雙陽甸	大凌河	松山	小業堡
	上齊臺	大齊屯	大許屯	葛王碑
	流水堡	溫滴樓	金廠堡	廟溝
	杏山	朴家屯	娘娘宮	蟻螞屯
	羊圈子	石山車站	關窩舖	右屯衛
委託日本人小學校所在地	雙山子			

資料

題名	書名	發行所	發行年月
錦縣事情及主要都市事情	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七

錦縣一般事情並水產物事情……關東州水產會報	關東州水產會	昭、九、七
錦縣的棉作(錢儀孫)……同　軌	鐵路總局	康元、九、一
錦縣事情(大同學院)……滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同、二、二
錦縣朝鮮人(外務省)……在滿朝鮮人概況	外務省	昭、八、―
錦縣內棉花被害統計(外務省)……海外經濟事情	外務省通商局	昭、九、八、二〇
錦縣學校教育一考察(錦縣公署考事部)……同　表題	縣公署	大同、二、一
錦縣實業統計(元年)……同　表題	同　前	康、二、六
錦州炭礦に關する內容調査……錦州商工月報　(二の三)	錦州日本商工會議所	昭、一二、三
民船港としての西海口……東洋貿易研究(一七の七)	大阪市役所	昭、一三、七
錦縣經濟事情……金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

錦西縣

概史

光緒三十二年錦西廳を置き、錦州府に屬したが、民國二年錦西縣と改められた。滿洲國建國後は奉天省に屬し、康德元年十二月一日よりは新設の錦州省の管轄となつた。此の地はもと錦州管內の一寒村に過ぎなかつたが清末移民開墾が許され、且つ暖地塘炭坑の開掘がはじめられるに至つて漸次發達を來たした。

地勢

東北部は義縣、錦縣に、東南は葫蘆島を控へて渤海灣に面し、西北は吐默特右旗、西南は興城縣に接して居る。

縣の西北縣境は群山起伏し、天然の要塞を形成し、綿延百滿里餘、縣の中部を東西に走つてゐる虹螺山脈中には九千餘尺の高峯虹螺山あり、女兒河南岸の山脈は皆之に屬し、女兒河北岸の山脈は西は柳條邊まで延び、東は錦縣境まで延びて、大小の起伏を爲して居る。

縣內の河川としては、小凌河、女兒河、五里河、七里河の諸川があり、小凌河は、源を熱河の明安喀喇山に發し東流して縣境に入る。女兒河は、熱河に源を發し、東流し、新台門より縣內に入り東流して錦縣に入つてゐる。

諸河川は山勢が峻嶮な爲め、雨量の多い夏季の候は氾濫甚しく往々沿岸一帶は之が爲めに荒廢に歸することがある。

縣の物產

縣民の主要產業は農業ではあるが、本縣は非常に山が多いので、耕地は割に少く東南部一帶の肥沃なる耕作地には高粱、大豆、包米、粟、其他の豆類等を產す。

畜產は山地多く氣候溫和で適してゐる。馬、騾、驢、牛、豚等で現在のところ耕作、駕車用である。

林業は山は多いが今のところあまり振はない。現在之が奬勵を爲し、植林を敢行中である。

鑛產は將來有望と見られて居る。石炭、銀鉛鑛、石綿、金等の礦石が發見されてゐるが、現在は滿洲鉛鑛株式會社の楊家杖子にて優良なる銀鉛鑛を開掘してゐる外未開である。

水產は渤海沿岸、壺蘆島附近に於て現在は禁漁區解禁となつた爲め有望である。魚類は黑鯛、鰆、烏賊、蟹、貝類等。而して鮮人移住し來り漁業に從事してゐるものあり、錦縣、奉天方面へ移出して、漁獲多く漁獵法によつては產額を數培にする事が出來るであらう。

又沿岸鹽田に富み、六ケ所の鹽田を有し、中、高橋附近が最も多い、滿洲國にとつては鹽は貴重なるものである關係上、專賣制度をとつて居る。海鹽の外岩鹽も多少產出する。

都邑錦西街（連山）

錦西縣公署所在地、奉山線に沿ひ、壺蘆島支線の分岐點である。もと一寒村に過ぎなかつたが、清末移民開墾が許され、且つ沙鍋屯、暖地塘炭坑の開掘、鐵道の開通等により漸次發達して來たのである。

平素は商業方面も閑散であるが、毎月三、六、九日の開市には四圍の部落より人馬群集し盛である。

其集散物は棉花、粟、小麥等、それに梨、桃、杏等の果實類、羊毛、豚毛、羊、牛、皮類等である。

交通は奉山線の主要驛たる外自動車よく開通し、錦州より壺蘆島間バスあり、西方には江家屯街を經て喀喇沁左旗方面に向ふものあり、又、鉛鑛山、楊家杖子にも通じて極めて便利である。

錦西街（連山）諸機關

錦西縣公署　街公所　警察署　稅捐局分局　商工公會
郵政局　電報局　電話局　興農合作社
中銀支行　大興公司　國際運輸　錦西兼理司法縣公署
錦西農業學校（省立）　滿人小學校　日本人小學校　勞工協會出張所

壺蘆島

壺蘆島は奉山線錦西より分岐する支線の最端驛であつて、渤海灣の一つの岬である。背後地の廣柔、水深、風向、氣温、其他の點に於て、非常に惠まれた好條件を備へて居る。

本港の築港は、舊軍閥時代に、滿洲の物資の輸出が、何れの方面をみても、日、露の手によらねばならぬ狀態であるのが不利であつた爲め、大連に、匹敵すべき港を開き之を補はんとしたものである。一九一〇年徐世昌東三省總督によつて企圖せられたのが初めである。

第一次、第二次、第三次と計畫を進められたのであるが、第三次の時は恰も東北政權が、滿鐵包圍大連拮抗の政策を強化しつゝあつた時代で、これが完成に大なる期待をかけられてゐたのであるが、偶々滿洲事變の勃發により本計畫も中止さるゝ事になり、請負つてゐた和蘭築港會社員も引上げる事になつた。

滿洲國建國後も壺蘆島築港は重要視され「滿洲國經濟建設要綱」にも明記宣言された。港灣經營をも委

託された鐵道總局に於ては此港が熱河鐵道の將來に重大影響を有する關係もあり、始めは其まゝ民船小型汽船の利用を許した。爲めに大連汽船は航路を開き國際運輸は出張所を設ける事になつた。

壺蘆島建設事務所の築港事業は補修工事が進められ、その爲めに投じられた金額は四十八萬五千圓である。更に二千萬圓の工費を投じ、康德四年解氷期より起工、康德五年八月三日燈台完成し、第一期工事が竣工した。これは埠頭の一部完成をみたのみで更に築港工事は康德八年まで繼續される豫定である。

第一期築港工事完成をみたる當港は康德五年九月十二日、石炭積出第一船たる一進丸が入港し、一千七百六十七噸の石炭積荷を完了、十四日大阪へ向け晴れの處女航海の途についた。更に十月頃より本格的石炭輸送に着手し壺蘆島の重要性がます／＼認められてゐる。

蘆壺島の背後地は錦州省熱河兩省に渉り、阜新炭田の石炭輸送を第一とし、各種農產、豆類、高粱棉實、棉花、その他の穀類等の輸出港として又、兩省地方及興安省地方の需要を充すべき、綿布、綿絲砂糖、メリケン粉、其他の食料品、雜貨、それに加ふるに建設途上の木材、鐵材、機械工具等の輸入港として、將來の活躍を期待されて居る。

壺蘆島諸機關

郵政局　電報局　稅關分關　國際運輸
日本人小學校　壺蘆島建設事務所

江家屯街（舊錦西）

縣の西部朝陽縣境にある。鐵道開通以前の重要地點であつたが、滿洲事變後、縣公署は連山に移轉した。此地は山巒起伏し、四圍天然の屛風を爲して居る。境內の河川は女兒河を最大とし、熱河省吐默特旗より東流し來つてゐる。其他の河川も地形の關係上夏季に於て氾濫が著しい。

本街は康德三年一月一日街制を布きて街となり同四年十二月一日、街村の合併が行はれて現在三十一

屯より成つてゐる。

街の產業は農業を主とし、自作農が最も多い事は堅實なる經濟狀態である。其他は自作兼小作、等である。商工業は盛といふ程ではないが、商戶三二戶、布疋業、雜貨業、茶食業等。梨、桃、杏等の果樹栽培も盛に行はれて居る。交通路はよく發達してゐたが、此頃、錦州市間及び、錦西、喀喇沁左旗方面にバスの開通を見便利になつてゐる。

江家屯街諸機關

街公所　警察署　郵政局　大興公司

高橋街

錦西縣境の東南隅縣城を距る三十滿里。地勢は極めて平坦、土質肥沃、東は錦州市に、西は壺蘆島に臨み地勢甚だ優良なる上、氣候溫和、風俗亦樸厚民智も高尙である。

街名を高橋といふが高橋には橋がなく、街の中心地帶に一つの土崗があつて、東西兩側が緩漫に傾斜し、往來するに恰も橋上を經過する如き感じがあるところから生れたものであらうか。康德五年一月一日の改制によつて現在の高橋街が確立せられて居る。

街の產業は農業が主であるが各種農作物の收獲は僅少で家畜は二千三百餘頭を有してゐる。商家一四〇餘戶、經營極めて小資本である、家內工業は大工廠僅に三、四、其他燒鍋、油房等が二、三戶ある。奉山線の一驛なるのみならず、大橋廠及西海口方面への要地である。

高橋街諸機關

街　公　所　警　察　署　郵　政　局　國　際　運　輸
大興公司(一)　專賣分局　滿電營業所　稅捐局分局
興農合作社高橋農産交易場

虹螺峴街

本街は全縣の中心虹螺山の東北縣境を距る東北六十滿里、境內に小虹螺山があつて街の西南部を橫

走してゐる。境内山多く天然の界限を爲してゐるが、惜しい事に禿山が多い。街内に女兒河及虹螺峴河等があり、氣候良好寒暑の差が甚しくない。康德四年十二月新街村制公布せられ街を形成した。

街民の産業は農業が主で純地主又は自作農が割に多く、一、〇〇〇戸を越えて居るが、小作農はわづか二四五戸に過ぎない。高粱、棉花、包米、大豆、粟等である。

家畜は緬羊、豚、驢、騾、山羊等民家に飼育し、白梨、秋桃、杏、棗等の果樹類も産出する。商戸七七戸、工業九五戸、糧棧、雜貨、布疋等の商店多く、工業は家内工業に過ぎないが製油、釀酒、毛皮加工等である。錦州市より當街を經て江家屯に至る國道には、國營バスの運行がある。

虹螺峴諸機關

街公所　警察署　郵政局　稅捐局分局

電話局　棉花作業所　大興公司

其他

郵政局所在地

暖池塘　陳家屯　大窯溝　瓦廟子

塔山　楊家杖子　沙鍋屯

日本人小學校所在地

楊家杖子

資料

題名	書名	發行所	發行年月
錦西縣及縣内主要都市概況	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
錦西縣下一般事情及水產物事情	關東州水產會報	關東州水產會	昭、九、七
錦西縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
錦西縣政概況	同表題	錦西縣公署	康、二、六

錦西縣事情……同　表題　滿洲國地方事情編纂會　康、元、一一
省政彙覽（錦州省篇）……同　表題　國務院情報處　康、四、七
楊家杖子鑛山學記……大陸科學院彙報（二の一）　大陸科學院　康、五、四
錦西縣の古蹟……同　表題　錦州鐵道局　昭、一三、六

興城縣

略史

遼代錦州の治所たる永樂縣治下にあつた嚴州の治所を興城縣と云つた。金代には皇統三年嚴州の名を廢して興城縣を興中に隷せしめ、元代に於ては大寧路に屬した。明代には廣寧前屯　中屯の二衞地であつたが、宣德三年二衞の地を割いて寧遠城を建てた。康熙三年寧遠州を置き、東塔山所を割いて錦縣に入れ、西前屯衞の地を併せて悉く州に入れ、後に廣寧府に屬せしめたが、同年廣寧府より錦州府屬となつた。光緒二十八年綏中縣が新設されたが州治は依然として存在し、寧遠縣となり同三年更に興城縣と改められた。滿洲國獨立後は初め奉天省に屬し、康德元年十二月よりは錦州省に入つた。

地勢

本縣は錦州の西部に位し、東北は錦西縣に、西南は綏中縣、西北は熱河省喀喇沁左旗に接して東南は渤海沿岸である。

縣内小山脈、小山巒、小河川に富み、山名四十六山を數へ河川又十三を算する。大體に西北縣境熱河との境が山高く海岸に低いのであるが、地形が復雜である。

河川の主なるものは烟台河であるが、これは西北境の山脈に發して、東南流するもので三、四の支流を合し海に入る、あまり大きい河ではない。又綏中縣境を流るゝ六股河も熱河に發源してゐるが長くは

ない。

縣の物產

土地瘠薄、農產は乏しい。大體山地帶に屬する部分が多い爲め、耕地面積が少ない事にもよる。加ふるに河川多く降雨あれば氾濫して直ちに水災を蒙る有樣である。高粱、包米が生產の大半を占めて居る。大豆、粟、包米等は多少の移出を見てゐる。殊に大豆は興城大豆と稱し他縣に比して優良である。棉花、線麻等の特用農產、及落花生の產がある。家畜は牛、驢、豚、犬等で、緬羊の飼育も相當數に上つてゐる。この中養豚は農家副業の大なるもので、農村經濟に及ぼす處大きくその改善が行はれ、其他の畜產に就ても何れも改良策が講ぜられてゐる。

林業は山地は多いが殖林を始めたのは、建國以後の事であり現在伐採するものはない。

鑛產の種類は多い樣である。金、銅銀、銀、石炭、滿俺、石灰石、硅石其他である。松樹卯の鉛、猪頭山の金、富兒溝の石炭は現在採掘中である。

鹽の產額は多い。年產平均二十八萬擔といふ、これによる農村收入は九萬元を越える。魚類の產額は三、四十萬斤、收入三、四萬圓である。

都邑興城街

興城縣城、奉山線沿線、又一に寧遠或は柳城とも稱せられ、清の康熙三年寧遠州と稱し、其後幾多の變遷を經て民國三年現名に改められたのである。市街は周圍五哩に亘る高さ約三丈の城壁を以て繞らされ、人口二萬餘を有する相當な都市である。

此地は東に海濱を擁し、北に首山窟隆山の關門を控へ、古來山海關の前衛として重要なる地位を占め縣城築造は遠く三百餘年前であつた。東は春和、南は延輝、西は永寧、北は威遠の四門と、中央の鼓樓は些かの崩れも見せず、尚昔の壯觀を其儘殘し、然かも三隅の櫓に備へられた巨砲は昔日の物々しさを

物語つてゐる。

街路整然として商業繁榮し、滿街に高く聳ゆる二箇の祖氏石坊は明の名將祖大壽の戰勲を銘り、輪奐の美正に遼西第一の稱がある。

興城は現在、溫泉と海水浴で知られて居る。溫泉は南四滿里溫泉寺にあり、最近鐵道局に於て施設其他の便を計り大々的に宣傳し、漸次世人の杖を引くものあつて將來を囑望されて居る。又溫泉より三滿里の海濱には釣魚臺があつて、海上八滿里を距てゝ菊花島が海上に浮び、附近一帶は海水浴場として實に風光明媚である。

商業又殷盛、其の集散物資は玉蜀黍、大豆、粟、其他の雜穀等五萬石を越えてゐるが鐵道開通以來、却つて商業範圍を狹くしたとの事である。油坊、燒鍋、織布等の在來工業がある。

奉山線の主要驛たると共に最近國營バスの運行を見て便利である。卽ち西方新台門へ、又梨樹溝へ開通して居る。

興城街諸機關

興城縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	興城兼理司法縣公署	省立興城農事試驗場
郵政局	電報局	電話局	興農合作社
中銀支行	街公所	國際運輸	興城(農科)國民高等學校(省立)
滿人小學校	勞工協會出張所	大興公司(一二)	

沙後所鎭

沙後所は縣城南方三十滿里の地點にあつて、興綏兩縣交通の要衝に當り、縣城に次ぐ明代の城壁及市街を有し、商業の殷盛な所である。當地附近には鹽田が最も多い。

城内の城隍廟東門の馬神廟及西門外の岳王廟は共に古代の遺物である。商工業者九十、海口に近く奉山鐵路驛に近いために、將來有望視されてゐる。

沙後所諸機關

警察署　稅捐局分所　郵政局　大興公司

新台門鎭

本鎭は清朝時代から設けてあつた、山海關外の柳條邊門等の如き邊門の一に當り、縣の最北部にあつて朝陽、建昌縣の六家子又は北部錦西縣に出入する道路を要扼して居る。警備上、商業上共に重要視さるゝ地點である。取引は雜貨及穀類を以て主としてゐる。

其他

警察署所在地　城廠　舊門

稅關分卡所在地　釣魚台　娘々頂

郵政局所在地　東新莊　白廟子　紅崖子　下減廠

舊門　梨樹溝門

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
興城（鐵路總局）	奉山線案內	鐵路總局	大同三、二
興城縣事情（大同學院）	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
興城縣及縣下主要都市事情（同前）	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
興城溫泉記（石原巖徹）	協和	鐵路總局	昭、九、三
興城縣下一般事情及水產物事情	關東州水產會報	關東州水產會	昭、九、七
興城だより（興城派遣員）	南滿警察協會誌	南滿警察協會	昭、八、一〇
興城縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

縣政概況（上下）（興城縣）	同表題	縣公署	康、四、三
興城縣之一斑（一、二、三）	內務資料月刊（一の五、一の六、二の一）	內務局	康、四、一一 康、四、一二 康、五、一
興城縣の古蹟	同表題	錦州鐵道局	昭、一三、七
興城縣統計彙誌（第三號）	同表題	縣公署	康、四、五

綏中縣

概史

康熙三年寧遠廣寧の兩地と共に巡檢を設け、翌四年之を改併して單に中後所巡檢一員を置いた。乾隆四年此處に州判一名を置いて寧遠州に屬せしめ、中後所巡檢を改めて中後所に駐せしめた。光緒二十八年奏請して翌二十九年綏中縣となし錦州府に屬せしめたが、民國二年州を廢して綏中縣と改められた滿洲國成立後は奉天省に屬し更に康德元年十二月一日より新省制によつて錦州省に入つた。

地勢

綏中縣は錦州省の最西南端中華民國との國境縣である。西及北は熱河省に、東及南は渤海に臨み、東北は六股河を隔てて興城縣と界してゐる。

熱河省境は山岳重疊し、海岸に近い鐵道沿線地方は概ね平坦で地味肥沃農耕に適して居る。

山脈の大なるものとしては義縣より起つてゐる醫巫閭山脈は本縣と、熱河省境を北より西方に走り、無數の山谷があつて交通至難である。縣內に三山及石佛寺がある。河川の主なるものは六股河、狗河、新開河其他で何れも源を熱河省に發する。

縣の物產

農產の主なるものは高粱、豆類、玉蜀黍、粟、黍子等で、棉花、落花生、馬鈴薯の產が多い。而して之等の農產はそれ〲二〇%より五〇%の移出を見てゐる。

家畜は多くない。豚、牛、羊等が主である。これらの皮類も產する。

主要樹種は濶葉樹が多く、楊、柳、楡の類であるが、本縣の造林は僅に十數年、尚未だ伐採するには至らぬ。金鑛石礦等あり。

水產は在來の方法ながら行はれ一萬二三千圓の漁獲があるが他に搬出はしてゐない。

都邑綏中街

綏中縣城で奉山線に沿ひ、山海關の北方六五粁の地點にあり、一に中後所とも稱せられてゐる。其の市街建設は遠く宋末であつて、城壁は周圍一哩半、城內には官公署其他旗人等の居住多く、商業區は城外南門外であつて、東西に通ずる大街は、延長約一哩半に渡り、店舖軒を並べ、繁盛なる中樞區をなし、其背後地である熱河省の喀喇沁三旗の地方より物資の集散並に其の移入地として有望である。其の集散地方物產の主なるものは木炭、梨、棉花、鹽等であつて、其他、玉蜀黍、粟、及雜穀等がある。

木炭は北方の山地より出で年額八萬斤といはれ、梨は城の西北方鄉鎭に於ける果樹の栽培頗る盛に、又喀喇沁地方產のものも搬出せられ、年產額五十萬斤を下らないといふ、綏中梨の名で北支方面に賣出されてゐる。

燒鍋、油坊等の工業があるが、新式工業ではない。

綏中街諸機關

綏中縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	綏中縣司法公署	郵政局
電報局	電話局	興農合作社	專賣局
中銀支行	街公所	國際運輸	協和會
電業營業所	綏中（農科）國民高等學校（省立）		

綏中女子國民高等學校　　滿人小學校　　日本人小學校
生活必需品會社配給所　　勞工協會出張所　　大興公司(一二)

前衛城

城は元朝時代に建てられたものであるが、現在城墻は多く存せず僅に北面に殘つてゐる。

城內街道十字形を成し、東西大道、南北大道あり、商戸百十餘に及ぶ。前衛驛を距る八滿里其間道路無く交通頗る不便である。本地は緑豆を除いては特產なく商業は振はない。

前衛諸機關

警察署　　稅捐局分所　　商工公會　　郵政局
電報局　　大興公司

前所諸機關

稅捐局分所　　郵政局　　電報局

山海關

奉天より四二三粁四、北京前門に四二八粁八七、山海關は昔も今も滿蒙より中國に入る最大の關門である。山海關を越ゆれば行手は坦々たる關內の平野北京への長途も一氣に馬を驅る事が出來る。中原に覇を唱へんとする民族は常に此所を最後の決戰地としたのである。

山海關は一名臨楡、又楡關とも呼ぶ。河北省と奉天省の國境に位して居る。有名なる萬里の長城は海濱より起つて市街の東北を過ぎ、險阻なる斷崖と山嶺とを攀ぢて遠く續いて居る。古來長城の西方を關內又は關裡と呼び、其東北方を關外又は塞外と呼んだ。關內より關外に通ずる東門には、有名な天下第一關の大扁額が揭げられ、この程修理完全になつて居る。此第一關に上つてみれば關內、關外一望の中にある。此長城一幅を距てて關外は滿洲領であり、關內は河北省になつてゐる。山海關市街の主要部は關內にある。市街は城壁に圍まれ、東、西、南、北に各大門あり、南關には日本人の居住者多く、停車場もここにあつて、驛から南門に通ずる南關大街は山海關に於て最も繁華な街である。商工業方面から

見れば、山海關は生産都市ではなく、單に國境の要衝をなす、消費都市に過ぎないから、市況は左程殷盛ではない。關内は民國領であるが關内の方に、日、滿、支三國の各主要機關が置かれて居り、驛に税關がある。

山海關附近は萬里の長城を始め、角山寺、玄陽洞、二郎廟、五泉寺等、觀光の箇所多く又海岸にも容易に遊び得て昔を偲び、今を思ふ多くの題材を持つてゐるところである。

山海關諸機關

税關　郵政局　電報局　中銀支行
國際運輸　電話局
其他

警察署所在地

南平坡　山海關國境(東羅城)

税捐局分所所在地

羅城

税關分卡所在地

九門口

郵政局所在地

高嶺站　荒地　明水塘門　葛家屯
寬邦　萬家屯　南平坡　大王廟
東羅城　南綏中

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
綏中縣及縣下主要都市概況	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
綏中縣下一般事情及水產物事情	關東州水產會報	關東州水產會	昭、九、七
綏中縣事情	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、八、一〇

綏中縣古蹟（菊池貞二）……東三省古蹟遺聞	不明	大正一四、八
綏中縣經濟事情……金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
綏中縣一般狀況（續編）……同	表遼縣公署	康、三、一二

義　縣

概史

天命初年義州を置き、康熙十五年義州巡檢司を設け廣寧縣に屬せしめた。同六十一年義州通判となり錦州府に屬した。雍正十年義州同知となり、同十一年義州と改められて錦州府に屬し、民國三年義縣と改まる。滿洲國に於ては初め奉天省に屬し、康德元年十二月一日よりは新設の錦州省に編入された。

地勢

東北は北鎭縣に南は錦縣、西南錦西縣に境し北及西北は吐默特三旗に接して居る。

東部には南北に走る峻嶮なる醫巫閭山脈があり、西部は山岳地帶である。熱河の奥地から發して居る大凌河は縣の中心部を南流し、兩域に肥沃な平野が之に沿ひ、大小の支流を合せ、滿洲に於ける有數の河川である。本縣は東西の山岳地帶に峽まれ中央平野の縣で平地並に山岳丘陵半々位になつて居る。

縣の物産

縣民の九四％は農民であるが、耕地は全縣面積の約四分の一、可耕地は丘陵地と雖殆ど耕作されて居る。農産の主なるものは、高粱、粟、大豆、包米、棉花等、殊に棉花は品質産額に於て知られて居る。農産額は縣内消費に餘り縣外へも移出して居る。棉花に就ては國家が、棉花政策を確立し本縣に數名の棉花技術員を派遣して居る。縣内にては棉花耕作組合を組織し、技術員の指導下に棉花改良増産を行つて居る。

山岳地は多いが林業の見る可きものはない。

山岳地を含む本縣は牧畜も相當舊來より行はれ、牛、馬、騾、驢は農家耕作及輓車として、羊豚は農

家の副業として飼育されて居るが專業にはして居ない。

鑛産　水産の見る可きものなし。

都邑義州街

義縣城で錦州の北約三十哩、大凌河の左岸に位する邑鎭である。本城は非常に古い城下で、唐代から知られてゐる。

各時代によつて其名を異にし、淸時代に義州、民國に至つて義縣と改められ現在街制を布かれて義州街といふ。。城壁を築かれたのは明の宣德年間で、周圍九滿里餘、高さ三丈、城門は東、西、南、北にあり東は照春、南は永淸、西は慶豐、北は安泰と稱し、中央に鼓樓がある。東街に遼代の遺物で滿洲最古の木造建築物である奉國寺がある。西南隅に遼代建立の白塔があり、尙ほ城內東南隅に魁星樓及文廟がある。西方二十滿里の萬佛寺には魏の大和年間の古碑がある。これは契丹文化の中心地と見做さるゝ所以である。商業相當見るべきものがあり、商賈五百、集散物資の主なるものは、高粱、其他の雜穀、棉花、葉煙草、五色石、毛皮類等。工業としては、油坊、燒鍋等がある。

義州街諸機關

義縣公署	警察署	稅捐局	義州商工公會
區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	專賣局	中銀支行
大興公司(三)	國際運輸	街公所	義州(農科)國民高等學校(省立)
義州女子國民高等學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校	勞工協會出張所

清河門街

縣の北境に漢民族が建設した市場である。古くより熱河及內蒙古の取引地として、又軍事上の要地として知られて居た。之より北進するにつれ、蒙古族の部落を見る。附近は物産に富み、淸河門は其集散

地で商業取引盛に行はれて居る。從來自衛團の組織強固で匪害を被る事少く、新義線開通と共に益々發展して居る。

康德五年一月一日新街制により清河門街と稱するに至つた。

主要産業は農業で、高粱、粟、大豆、棉花等であつて、羊、騾、豚、牛、馬等である。

清河門諸機關

警察署	税捐局分所	郵政局	電報局
電話局	街公所	商工公會分所	大興公司

硝戸營鎮

縣内第三の市邑、縣城より東北七十滿里、清門鎮と共に、縣北物産の集散地である。附近は棉花の主産地として之が取引盛である。又東部の山岳地帯は梨の名産地で多く此所に集まる。又葡萄酒様の藥酒、紅毛酒の産地として有名である。

湯玉麟は附近の部落に生れ、此町に育つたのである。

其　他

警察署所在地　景家堡　大楡樹堡　沈家臺

税捐局分所所在地　硝戸營鎮　七里河　班吉塔

郵政局所在地　硝戸營子　宋家屯　劉龍溝　拉曹子
班吉塔　婆蘿門　劉龍臺　劉溫屯
七里河子　石佛堡　石家堡　九關臺門
大定堡　沈家臺

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
義縣及縣內主要都市概況	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
義縣一般事情及水產物事情	關東州水產會報	關東州水產會	昭、九、七
縣下古蹟（菊池貞二）	東三省古蹟遺聞續編	不明	昭、二、八
義州の奉國寺（八木奘三郎）	續滿洲舊蹟志	滿鐵	昭、四、二
義縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情刊行會	康、三、四
省政彙覽（錦州省篇）	同表題	國務院弘報處	康、四、七
淸河門（甲斐巳八郎）	協和（二〇八）	滿鐵社員會	昭、一三、一
新義線沿線經濟事情（義縣）	東洋貿易研究（一六の一〇）	大阪市役所	昭、一二、一〇
義縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
淸河門街事情	同表題	同街公所	康、六、一〇

北鎮縣

概史

康熙二年廣寧府を設け康寧縣を管轄せしめたが、同四年府を廢して廣寧縣とし、錦州府に屬せしめた。民國三年北鎮縣と改まり、遼瀋道に屬した。滿洲國成立後は奉天省の管轄であつたが、行政區劃の改革のため、康德元年十二月一日より新設の錦州省に屬することゝなつた。

地勢

東は黑山、盤山に接し、南は錦縣、西は醫巫閭山を界として義縣、錦縣に接し、北は吐默特左旗に接して居る。全面積の十分の三は醫巫閭山脈に占められ殆ど砂地を爲して居る。從つて少量ではあるが、河水は常に澄み切つて居るが、大河川はない。他縣が飲料水に苦しめられて居るのに反し、本縣の井水は有害菌を含んでゐない。

縣の物産

縣城の西北は、棉花、果樹、落花生に適し、東南方は高粱、大豆、麥、野菜に適してゐる。東方南方

都邑北鎭街

は高粱、大豆に適し、西方は粟、黍、梨、杏、桃其他の果實に適し、梨は有名である。農産生産の最大なるものは、高粱で、大豆、穀子、包米が之に次いで居る。

家畜には牛、馬、騾、驢最も多く、羊、豚が之に次で居る。牛乳、羊乳の利益が多い。

林、鑛、水産等見るべきものなく、工業も在來の方法にて燒鍋、製粉がある。

此地は古の幽州冀州の政治的中心地であつた。

清代に入つて滿洲旗人の駐防地であり今尙ほ其後裔が多數居住して居る。城の周圍は十二滿里、明代に建造したものである。昔から、北京、熱河、奉天間の大道に位してゐた處で附近に名勝舊蹟多く、城西五滿里に、北鎭廟がある。これは北方の鎭守とせられ、清朝諸帝巡幸の跡であつて廟宇がある。其他雙塔寺、東西庫、石牌坊等があり城西十二滿里の醫巫閭山は滿洲第一の名山である。此名山を控へた古都北鎭はやがて遊覽の客も殖える事であらう。

市街は古建築多く、商業は相當繁盛を示し、外國人商店の代理店も見える。集散物資の移出の主なるものは大豆、高粱、粟、玉蜀黍、棉花、葡萄、梨の類である。果樹の栽培は頗る盛で、梨は最も多く、醫巫閭山脈の麓は春季梨花に埋められる。

燒鍋、油坊等舊式ながら行はれ、生産額も多い。

北鎭、阜新市間に國營バスの便あり、又黑山、溝幇子には民營のバスがあつて、鐵道沿線ではないが先づ便利になつてゐる。

北鎭街諸機關

北鎭縣公署　　警察署　　稅捐局、同分所　　商工公會

郵政局　　電報局　　電話局　　興農合作社

中銀支行　街公所　區法院　區檢察廳

北鎮(農科(國民高等學校(省立)　北鎮實業女學校(省立)　滿人小學校

勞工協會出張所　大興公司(一)

溝帮子街

縣城を距る五十滿里、京奉線營口支線の分岐點で同鐵道開通以來の發達である。驛には機關庫及び修理工場等あつて一見主要驛たる事が判然としてゐる。市街は周圍約一哩半、人口六千を越え、錦州、大虎山と共に交通の要路に當り、附近物資の集散多く、且つ北鎮及熱河省への仕向け雜貨の此地を經由するものも多く、從つて其商業範圍は比較的廣く、商業に活氣がある。集散物貨の主なるものは大豆、高粱、小米、包米、粟等約八萬石に近く、梨、葡萄、野菜、棉花、等の出廻殊に多く、燒酒、豆油、豆粕毛皮等も出廻る。

溝帮子街諸機關

警察署　專賣局　郵政局　電報局

電話局　商工公會　中銀支行　國際運輸

日本人小學校　長城麵粉股份有限公司　大興公司

其他

警察署所在地　篙蓬台

税捐局分所所在地　閭陽驛　青堆子

郵政局所在地　閭陽驛　趙家屯　青堆子車站　正安堡

中安堡　常興店　大市堡

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
北鎮縣事情(大同學院)……	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
同(同)……	滿洲國地方事情(二)	同	康、元、一二
北鎮縣及縣內主要都市概況……	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
縣內都邑事情(山田久太郎)……	滿蒙都邑全誌(上)	日刊支那事情社	大正一五、一〇
北鎮縣事情……	同表題	滿洲國地方事情編纂會	康、元、一一

盤山縣

概史

光緒三十一年放荒、盤山廳を溝帮子に設け後雙臺子に治を移して錦州府に屬せしめた。民國二年盤山縣と改る。滿洲國となつてからは奉天省の管轄に屬したが、康德元年十二月一日行政區劃改革のため新設の錦州省に編入され、康德四年七月の改制により舊營口縣の一部を入れて縣の面積を擴大した。

地勢

錦州省東方に位し、東は臺安及遼河を距てゝ海城縣に接し、西は錦縣、南は渤海、北は北鎮、黑山と境す。

縣內山なく、一面の平坦地であつて河川の直流するものなく、遼河の支流本縣を縱斷し、縣城を流れ減河(雙臺子河)を始め、黑坨子河、杜河、臺河、新河、柳河其他大小十餘の河川曲折極りなく西南流して渤海に注いで居る。

海岸一帶は葦草をなして全縣、樹木少し。

縣の物産

全縣內農地として肥沃な處殆どなく、耕作面積の割には農産收穫高が少ない。中央を東西に通ずる鐵道の以北は、肥沃ではないが高粱が出來る。その他、稗、粟の様なもので、南側は鹽分に富み、葦草地帶である。縣內に河川が多く平坦であるから、將來水田には見込みがあるが現在は開拓されてゐない。

家畜は、豚、驢が多く、馬、牛も有してゐるが匪害を被つて、家畜は掠奪せられその數半減してゐる。

水產は鹽を第一とする。三つの鹽田を有し、其產額は本縣の生命である。又、渤海沿岸の漁業、河川漁業に惠まれ、鯉、鯔、小海老、(毛蝦)蟹等の產出が多く、營口方面より各地に賣出されて居る。

都邑盤山街

盤山縣城。もと錦州の一部に屬して荒撫に委せられてゐたが、清の同治二年開放されて以來人口が增加して來た。集散物資の主なるものは、高粱、大豆、大麥、小麥、稗、粟、米、及棉花、洋麻で殊に棉花は將來滿洲に於て重要產業となるべき紡績事業と共に益々增加するであらう。

商店數も割に多いが、布疋、化粧業、雜貨屋、藥屋等が多く、油坊、鞋舖等の家內工業をも見る。

本街は康德三年三月、盤山縣城街公所が出來、同五年一月街制確立、盤山街となり、同年九月街村廢合があつて現今の街域を爲して居る。

本街は河北線の通過するところであつて、自動車は定期のものがない。

盤山街諸機關

盤山縣公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	街公所	
盤山兼理司法縣公署	稅關分卡	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	專賣局	中銀支行
大興公司(一二)	協和會	盤山農業學校(省立)	滿人小學校
勞工協會出張所			

田庄臺街

康熙帝の頃、漢人田と莊の二姓あつて此地を開拓したるにより田莊臺と呼ばれたといふ。曾ては遼河河岸の商業都市として滿洲物產の吸出に牛莊と共に豪華を讚へられた古邑であるが、幾多遼河の缺陷は

漸次其繁榮を奪ふに至り、衰微の一途を辿りつゝある現狀である。然れども今尙人口に膾炙せられ商家も多く、遼河々岸に於ては牛莊に次ぐ都市たるの地歩を保つて居る。商業戶數五六〇戶、工業は家內工業ではあるがよく行はれて居る。物品販賣、飮食店等、又、工業中、靴下製造工場六を有し、副業安平製造は男女一千人以上のものが從事してゐるが、年產五萬四千餘である。營口より六十五滿里、遼河の右岸にある。田莊臺にて特記すべき物產は安平(アンペラ)と鹽である。

當所はもと營口縣內であつたが、營口縣の廢止に伴ひ、康德五年十二月一日盤山縣の管轄內に編入されたものである。

交通狀態は、河北線、田莊臺驛により鐵路の便があり、冬季はトラックの便がある。夏季は營口間に戎克の往來頻りであり尙、營口間に客船汽船の往復がある。

田莊臺官諸機關

街公所　警察署　郵政局　商工公會
大興公司(二)　專賣局　稅捐分所　財務出張所

營口河北諸機關

郵政局　國際運輸

其　他

警察署所在地

沙嶺鎭　胡家鎭　高陞鎭

稅捐局分所所在地

胡家窩堡

郵政局所在地

胡家鎭　高平　沙嶺　大窪車站
榮興村　高陞鎭　高山子　青堆子車站
羊圈子　二界溝　哈吧臺

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
盤山縣(大同學院)	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同二、一一
同(同前)	滿洲國地方事情(概說篇)	同前	康、元、四
盤山縣概況	奉山鐵路案內	鐵路總局	康、元、三
盤山縣及同縣內主要都市概況	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
盤山縣誌(全)	同表題	盤山縣公署	康、元、一
盤山縣に於ける鮮農水田經營の一例	產業部月報(二の二)	產業部	康、五、一
豐葦原水底國通信(盤山縣)	金融合作社(四の二)	金融合作社	康、五、一
盤山縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、二
盤山街事情	同表題	街公所	康、六、一〇
田莊臺街	同表題	街公所	康、六、一〇

臺安縣

概史

遼中縣より三十六方滿里、鎭安縣(現在の黑山縣)より六十方滿里を割いて民國三年設治局を置き、その後臺安縣と改めて遼瀋道の管轄に屬せしめた。滿洲國大同元年より奉天省に屬し、康德元年十二月新設の錦州省に入る。

地勢

遼中、黑山、盤山の諸縣に圍まれた面積極めて小さい縣である。遼河系の本支流縣內を縱貫して平野を形成し、山と謂ふ程のものがない。但し遼河流域の平野は絕えず洪水に遭ひ、又其の平野と雖もアルカり性の土地か砂地か或は又濕地と云つたもので耕地は極めて僅少である。

縣の物產

縣內の土壤は多く砂質、土地瘠せて耕作に適する部分が少ない。從つて作物の生育惡く、わづかに高

梁、稗のみは生育する。現在含有アルカリ性鹽類土壌の土地は、全部荒廢地であつて野草のみ生ひ茂つてゐる。

家畜は主として馬、騾、驢、牛、豚等、事變以前の三分の一位に減少してゐる。

柳河、渾河、遼河より鯉、鯽、鮑、船釘魚(カマツカ)、蟹等の水産を出してゐるが數量は少ない。

都邑臺安街

營口の北方四十餘哩、臺安縣城である。一二八角と稱し、商業は營口、盤山等に押されて盛でない。又此一帶の地方は遼河其他の沖積層より成り、平坦廣潤、肥沃なる耕地であるが一面水害を蒙る事多く農産物も平均産額比較的少ない。

臺安諸機關

臺安縣公署　警察署　稅捐局分局　商工公會
郵政局　興農合作社　中銀支行　街公所
臺安農業學校(省立)　滿人小學校　勞工協會出張所　大興公司

其他

警察署所在地

桑林子　黃沙坨

郵政局所在地

桑林子　西佛牛家　新開河　富家莊
大黃沙臺　前拉拉河子　小高力房

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
臺安縣事情(大同學院)	滿洲國地方事情(概說編)	大同學院	康、元、四
臺安縣及縣內主要都市狀況	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七

黑山縣

概史

光緒二十八年廣寧縣を分割して翌二十九年鎭安縣となり、新民府に屬したが、民國三年に至り黑山縣と改められた。又一說には、本縣の縣治は光緒二十七年の設置に係るといふ。滿洲國獨立後は奉天省に屬したが、康德元年十二月一日より新設の錦州省に編入された。

地勢

省の東北部に位し、東は奉天省新民縣と省境を爲し、西は北鎭に接し、南は臺安、西南は盤山、北は彰武及阜新に境し、一部丘陵ある他山岳少く、饒陽河、羊湯河、柳河等縣內を流れ、耕地は相當に多い。

縣の物產

主なるものは棉花で、普通農作は大豆、高粱、粟、玉蜀黍、稗等。林業は現在ない。將來三萬六千天地が造林可能と推定されて居る。

礦產としては八道壕炭礦があつて、埋藏量二千萬噸、附近の炭田を合すれば六千萬噸と謂はれる。

開拓事業

開拓民としては入植してゐないが高山子に鐵道自警村がある。

都邑黑山街

黑山縣城。舊名を鎭安と稱し、當所は渤海國の時、朝鮮によつて開拓せられた所と傳へられて居る。大虎山の西北約六哩大鄭線に沿つてゐる。康德五年街村制の改正により黑山街として街公所が成立した。

市街は小黑山と稱する丘陵上に建設せられ、商業はさして盛と稱する程ではないが其の產業物資は高粱、大豆、粟、小麥等の外、雜穀、梨、葡萄其他の果實、棉花、羊毛、豚毛、皮類等種類頗る多く、棉花は年々增加。現在七十萬斤內外。燒酒、九十萬斤、豆油、十萬斤、豆粕等、殘餘の分は營口方面に賣出してゐる。

交通は大鄭線に沿ひ、十粁にして大虎山に出づ。西南方北鎭へ民營バスの開通を見てゐる。

黒山街諸機關

黒山縣公署	街公所	警察署	税捐局
商工公會	黒山地方法院	黒山地方檢察廳	區法院
區檢察廳	郵政局	電報局	電話局
興農合作社	中銀支行	大興公司(一二)	縣立醫院
國際運輸	協和會	黒山(農科)國民高等學校(省立)	
勞工協會出張所	黒山實業女學校(省立)		
滿人小學校			

大虎山

黒山縣城南方、奉山線に接し、大鄭線の起點として交通の要衝に當つてゐる。

街の後方に大虎が臥した様な形の山があるから大虎山といふと。

此地方は奉山線沿線棉花の生産地で、滿洲棉花會社は大虎山線棉工場を設け、康德元年二月操業開始機械二十台を備附けて居る。

大虎山諸機關

警察署	税捐局	郵政局	電報局
國際運輸	電話局	日本人小學校	

新立屯街諸機關

警察署	税捐局分所	商工公會	專賣局
郵政局	電報局	電話局	中銀支行
大興公司(一二)	國際運輸	街公所	

其他

警察署所在地	無梁殿
税捐局分所所在地	八家壕　姜家屯　半拉門
郵政局所在地	高山子　唐家窩堡　勵家窩棚　無樑店 姜家屯（大興公司もあり）　胡家窩堡　八道壕 芳山鎭　朝北營子　小三家子　半拉門 繞陽河　秦家屯　拉々屯　白土廠門 大黒山

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
黒山縣概況（鐵路總局）	奉山鐵路案內	鐵路總局	康、元、三
黒山縣概說（大同學院）	滿洲國地方事情（概說篇）	大同學院	康、元、四
黒山縣及縣內主要都市概況（鐵路總局）	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
黒山縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、三

彰武縣

概史

遼代懿川の地で上京道に屬し、金初は咸平路に屬したが、泰和の末北京路に屬し順安、靈山の二縣を領した。元初には懿州路に昇格して遼陽行中書省に直隷したが、其後降されて東京路に屬し、其の所領たる豪州及び、同呂、靈山二縣を省いて順安縣に入れ、間もなく順安縣も省いた。明代には永樂八年邊外の地となり、同時に懿州の名も廢せられた。その後蒙古科爾沁左翼前旗賓圖郡王の所領となつたが、

順治の初め牧地として清帝に獻じた。光緒二十八年縣治設立の奏請をして翌二十九年裁可、哈爾套街縣丞と共に新民府の管轄に屬した。民國二年二月地方官制改革によつて奉天西路觀察使(錦縣)の管轄となり、同年七月遼瀋道尹(同年二月までは南路觀察使と稱したるもの)の管轄となる。其の後滿洲國獨立して奉天省の管轄となり、更に康德元年行政區劃の改革によつて同年十二月一日より新設の錦州省に屬することとなつた。

地勢

本縣は奉天省に接觸し、東南は法庫縣、南は吐默特左旗、西北及北部は興安南省に接して居る。

縣内概ね平坦、山脈は殆どないが、僅に西北部稍々丘陵性の高地である。毎年季節風により、西方蒙古地方から砂土が移轉される爲め、砂土地多く瘠せて居るが、東南部は土地肥沃である。

河川は縣内西北部より縣城を挾んで東南に貫流する河がある。上流を地河と言ひ、下流を新開河と言ひ新民及黒山の二縣に流入して居る。流域地方は夏季の洪水に毎年相當被害を被る。又西南縣境を流るる繞陽河の流域は水利合作社の水田計畫地である。

縣の物産

農業上毎年一地方は水害を蒙る處があるが、むしろ他地方に於て、旱魃、暴風雨の害及飛砂の害絶えず東南部一帶は沃土比較的多く、人口稠密で縣産業の中心地である。農産は、高粱、粟、包米、棉花、蕎麥等を主とし、大豆の産額は割に少ない。

林業の見るべきものはないが楊樹、柳の立木植樹奬勵中である。

畜産業は本來盛であつたが、漸次農耕地と化し、現在は副業とする程度であるが 他縣に比し、多くの頭數を有してゐる。羊、牛、馬、騾、驢、豚、山羊等、又家禽の飼育も多い。緬羊合作社、産業組合等により、畜産の改良、増産を計つて居る。

開拓事業

當縣の馮家に、青年義勇隊自警訓練所がある。

都邑彰武街

彰武縣城、大鄭線沿線の一都市である。本城は光緒二十八年に設置せられ横道子と稱せられ、新民府の管轄下にあつたが、民國年間に洮昌道に屬せしめられ、同二年に土城一座四門を建設した。大同元年度に縣城を改修し、高さを一丈二尺とし砲台八個を築造し、各砲台に警察派出所四箇所を置いた。市街は整然たる方一粁半の土壁に圍まれ、人口一萬以上を算するも市況はあまり活潑ではない。集散さるゝ物産は蕎麥を最多とし、玉蜀黍、黎、棉花、及豆粕、豆油、燒酒、麥粉等である。大鄭線沿線であり、新民間に國營バス。法庫及哈爾套街に民營バスの便利がある。

彰武街諸機關

彰武縣公署	警察署	税捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	彰武兼理司法縣公署	專賣局
郵政局	電報局	電話局	興農合作社
中銀支行	街公所	國際運輸	勞工協會出張所
彰武農業學校(省立)	滿人小學校	日本人小學校	大興公司(一二)

其他

警察署所在地	馮家窩堡	哈爾套街		
税捐局分所所在地	哈爾套街	郭家店	大廟	
郵政局所在地	哈爾套街	郭家店	大廟	馮家窩堡
	賞屯			
電報局所在地	哈爾套街			
電話局所在地	哈爾套街			

資料

書名（筆者）	書名	發行所	發行年月
彰武縣事情（鐵路總局）	奉山線案内	鐵路總局	大同 三、三
彰武縣事情（大同學院）	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同 二、一一
彰武縣及縣内主要都市狀況	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
彰武縣都邑事情（山田久太郎）	滿蒙都邑全誌（上卷）	日刊支那事情社	大正一五、一〇
彰武縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、四
彰武縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

吐默特右旗（もとの朝陽縣）

概史

此の地は元來吐默特旗の所領である。その後清代乾隆三年設置の塔子溝廳の東境地となり、同三十九年三座塔廳を置いた。四十三年改めて朝陽縣となり光緒二十九年府に昇格したが、民國二年地方官制革ると共に再び朝陽縣と改められ、同三年熱河道の管轄となつたが、滿洲國建國後は初め熱河省に屬し康德元年十二月よりは新設の錦州省に編入された。康德七年一月より縣名を廢して、吐默特右旗とし、北方を吐默特中旗として、新に旗が設けられた。

地勢

東部及南部は吐默特左旗、義縣、錦西縣に、西部は喀喇沁左旗、喀喇沁右旗、敖漢旗に境し、北部は興安西省奈曼旗に接してゐる。

西南喀喇沁左旗境、及び東南錦西縣境は一圓の山脈で、鳳凰山、麒麟山、大青山、柏山、雲家山、羊山等最も著しい。河川は大凌河、小凌河、大凌河は喀喇沁旗に源を發して當旗に入り、朝陽の東門外を流れて錦西縣に入る。小凌河は、源流三を有し、當旗に流入して旗の南部を流れてゐる。

旗の物産

農産は高粱、小麥、玉蜀黍、棉花が主である、棉花の產出多く、三十萬斤以上の縣外移出をなし、菜

豆、黑豆、黃豆等も千石乃至二千石の移出をみて居る。

畜産叉甚だ多い。本縣內は牧野に富み、よく適してゐる爲、從前より牧畜盛で、牛、馬、騾、驢、羊豚等馬の三萬頭以上が最低で、羊、豚の各七萬九千頭以上を最大とする。

鑛産叉豐富、石炭、金を第一とす。石炭、金はすでに採掘してゐるもの十數ヶ所未開採のものも多い。其他石綿鑛も發見されて居る。

本旗は熱河省管下にて阿片の栽培區域であつた。阿片の栽培はすでに久しく、産額亦非常に多い。然し康德二年よりは錦州省に編入された爲めに、阿片に代ふるに、棉花、果實等を以つてこれに代へる事として居る。

都邑朝陽街

吐默特右旗公署所在地で旗の略中央にある。錦州より西北の地にある古き時代よりの都市である。俗に三座塔と呼ばれ、叉古くは龍城等とも呼ばれてゐた。蓋し、其の初め匈奴の所在地であつたが其後幾多の變遷を經て遼金に至り茲に其全勢時代を形成したと傳へられ、今尙ほ其の遺物として市中に二基の高塔がある。三塔の中一塔は跡を留めてゐないが、古都を語る表徵の如く遠望せられる。建平方面に入る門戸であり、現在滿、漢、蒙各種族居住し、商業に從事する者は漢人が多い。商業は蒙古貿易を主とするも、錦州、營口其他近接地方との關係深く、是等市場と管內各地との取次商業も盛である。

尙ほ同地を集散地とする物資は、翁牛特旗、喀喇沁旗方面に産する高粱、粟、蕎麥、豆等の雜穀を主とし、之に次ぐものは、毛皮類であるが、毛皮は直接天津との取引が多い。移入の主なるものは綢緞、絲類、綿布、石油等で、其經路は錦州を經て來るものである。

朝陽街諸機關

吐默特右旗公署　警察署　稅捐局　商工公會

區法院	區檢察廳	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	中銀支行	街公所
國際運輸	協和會	勞工協會出張所	電業營業所
專賣局	朝陽(農科)國民高等學校(省立)		滿人小學校
日本人小學校	大興公司		

其他

警察署所在地	西天營子	大廟	太平房子	木頭子
	二十家子	巴圖營子	西官營子	長泉
稅捐局分所所在地	太平房子	金嶺寺	羊山鎮	
電報局所在地	金嶺寺			
郵政局所在地	大屯村	羊山村	黑牛營子	西大營子
	大營子	趙都把	太平房	木頭城子
	波羅赤	二十家子	西宮營子	朝陽寺
	六家子			

資料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
朝陽縣事情(鐵路總局)	奉山線案內	鐵路總局	大同三、二
朝陽縣概況と水產物事情	關東州水產會報	關東州水產會	昭、九、七
陽朝(日本外事協會)	滿洲帝國總攬	三省堂	昭、九、六
朝陽概況	電々會社業務資料	滿洲電々會社	昭、九、五

朝陽（北條太洋）……	熱河	新光社	昭、八、九
朝陽縣及縣内主要都市概況（同前）……	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
三座塔事情（柏原孝久、濱田純一）……	蒙古地誌下卷	富山房	大正八、一二
朝陽概況（仲摩照久）……	世界知識増刊 熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、五
錦州省朝陽縣概況……	同表題	朝陽縣公署	康、三、五
省政彙覽（錦州省篇）……	同表題	國務院弘報處	康、四、七
朝陽金融經濟（十二年八月）……	海外經濟事情（二〇）	通商局	昭、一二、一〇
朝陽縣誌（全）……	同表題	朝陽縣公署	康、三、一二
朝陽縣經濟事情……	金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

吐默特中旗（新設）

概史

康徳七年一月一日より從來朝陽縣と稱せられた地區を二分し、北部、北票を中心とする方面を吐默特中旗として新に設けられる事になつたのである。

都邑北票街

奉山線より分岐する北票線の終點であり、炭坑地として有名である。

北票炭坑は、民國十年官商合辦北票煤礦公司が開辦せらるゝ迄は只土法により、開採してゐたに過ぎず全くの荒地であつた。北票煤礦公司は大同二年政府に接收し管理せられたが、同年十月官民合辦組織に改められた。石炭採掘の外附隨事業として、煉瓦工場、骸炭工場、發電所、病院等をもつてゐる。

北票街諸機關

吐默特中旗公署　警察署　稅捐局分局　商工公會
郵政局　電話局　電報局　興農合作社
中銀支行　國際運輸　日本人小學校　生活必需品會社配給所
勞工協會出張所　大興公司

警察署所在地　十八畬　板達營子　六家子

郵政局所在地　金嶺寺　黒城子

吐默特左旗（もとの阜新縣）

概史

本旗は東土默特左翼、察哈爾貝勒府、唐古特喀爾貝勒府の地で、光緒二十七年はじめて縣治を施行せられた。縣城は始め西土默特貝子府の西北四十粁、鄂爾杜板山の南麓即ち鄂爾杜板の地に定められたが其の位置が餘りに西北に偏し且つ山岳地帯であるため、交通不便人煙稀薄等の點は政治上に種々障害を與へたので、宣統三年八月之を水泉の東六百米の地に移して城壁を築いた。當時朝陽府に屬したが民國三年獨立した。此の地は阜新炭坑を以て有名である。康德元年十一月までは熱河省に屬してゐた。錦州省新設と共に同省内に入り阜新縣となつたが、康德七年一月より阜新の街は市制を布かれ縣名は廢して吐默特左旗となつた。

地勢

山脈は、東に大青山、西に蓮花山、南に尖山、北に黒山への諸連峯があり、河川は大凌河系の上流たる西河、饒陽川の上流たる八通河等が旗内及び旗境を南流する。旗内一帶は砂地で、只東南方は地味稍良好である。

旗の物産

高粱、粟、大豆、棉花、葡萄、其他、葱、白菜等の蔬菜類が農産物として生産する。而して旗内消費の外何れも多少共旗外移出をしてゐる。

牧畜は、漢人、蒙人何れも相當の家畜を飼育して副業としてゐるが、特に沙漠地帶地方は農耕に適しない爲めに家畜本位となり生活は全く牧畜に依存して居る狀態である。馬、牛、驢、豚、羊、鷄等である。

礦産は、金、石炭をはじめ、石灰石、白粘土等種々な礦物が多いが、現在、阜新炭田の採掘をもつて第一とし大々的な増産計畫と、非常な勢で出産量を見てゐる。又最近石油が發見されてゐる。

其　他

警察署所在地	官營子　荘家店　鷲歡池　老河土　水泉子
郵政局所在地	泡子站　新邱　鷲鵲池　東吐默特旗　海州　哈拉戸稍　十家子
電報局所在地	泡子站
税捐局所在地	泡子站
日本人小學校所在地	海州　新邱

資　料

題名(筆者)	書名	發行所	發行年月
阜新(北條太洋)	熱河	新光社	昭、八、九
阜新炭田を觀る	同　表題	滿洲日々新聞社	康、四、一
阜新縣に於ける蒙旗及東吐默特旗調査錄	同　表題	熱河省公署	大同二、一二
阜新炭田を視る	滿洲鑛業協會報(二ノ七)	滿洲鑛業協會	康、三、二
炭都阜新の經濟視察記	錦州商工月報(二の九)	錦州商工會議所	昭、一二、九
生産テンポを早めつゝある炭都阜新	滿洲經濟情報(三の四)	日滿實業協會	昭、一三、四
新義線沿線經濟事情(阜新縣)	東洋貿易研究(一六の一〇)	大阪市役所	昭、一二、一〇
阜新縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
阜新街事情	同　表題	阜新街公所	康、六、一〇

熱河省

熱河省

承徳縣

概史

承徳の地は周秦時代に於ては東胡の地であつたが、漢の時代に匈奴の地となつた。其後時代を追つて名稱を異にし所屬を異にして來たのであるが、清の時代に至つて初めて官署が建設された。初には先づ副都統を始め、道府廳州縣引續き設置改制せられ、雍正二年の初め熱河都統署が建設された。承徳府署建設の地據は棒子峪の東山麓にあつて、同地は元熱河理事同知廳治の舊地であつて、雍正十一年に於て承徳州と改制し、乾隆四十三年熱河廳といひ更に承徳府と改制した。民國二年府を縣と改稱し、直隷省屬にしてゐたが、同時に熱河特別行政區として中央政府に直屬してゐた。

民國十五年湯玉麟が就任して以來、横徴暴歛飽く所を知らず、怨嗟の聲は省内に滿ち、民衆は忍苦以外の途はなかつた樣な時、滿洲事變勃發し、湯玉麟の態度は、初め滿洲國政府に傾いてゐたが、後遽かに豹變して反日旗を揭げた。ここに熱河討伐軍起され、大同二年三月四日川原挺身隊の入城により、六日、熱河行政指導公署成立し、七日縣公署成立五月一日現省公署設置せられ、ここに承徳は省行政の中心地となつた。

地勢

承徳縣は熱河省の西南に位し、西は隆化、灤平の二縣、東は青龍縣、及び喀喇沁中旗に接し、南は興隆縣に境して居る。

陰山々系の支脈河北平原への突出部に當つて居る爲め、重疊たる山岳地帶に屬し、極めて平地に惠ま

れない。察哈爾に源を發する灤河は、圍場、豐寧、隆化、灤平の諸縣より本縣に入つて武列川、柴河、牛河、柳川の諸流を併せて灤北の平原に出て居る。是等諸川の沿岸に沿ふて狹長なる平野を擁するけれども、毎年水害を蒙り流失するものが多い。

縣の物産

平地少く農産の見るべきものがない。高粱、黃豆、甘藷等を主とする。從來、罌粟の栽培による阿片の買却によつて生活の資を見出してゐた狀態である。畜産も少ない。鑛産資源は豐富で從來金鑛の採掘せられたもの或は中途にて休止したるもの等を始め有望鑛區に富む、又石炭の採掘せられるものがある。

都邑承德街

承德は熱河行政の中心地であると共に、淸朝の盛時を偲ぶ文化を止めた都市である。四面山を廻らし、中央を流るるは熱河、昔の武列水で、淸朝康熙帝が、蒙古民族懷柔策として遠謀のもとに創立せられたる避暑山莊、喇嘛廟は八大廟に及び、其他の寺廟も多い。淸帝以前は喀喇沁系の蒙古人が占居して、滿洲人に隷屬してゐたが、大淸帝國創建するに至つて、康熙帝の塞外巡察によつて隙地の墾耕を諭し、農民を招致した結果、僅か數十年にして熱河附近の荒蕪草地は忽ち熟地となり、行宮以外に諸種の商舖は軒を列ね、熱河(承德)は塞外第一の繁華街を現出した。

淸の康熙帝の時代に、此地に行在所を設け康熙四十二年宮殿を肇建し、後紫禁城の制に造營して行宮を避暑山莊と命名された。乾隆帝は更にこれに美を加へられ山莊の内外規模が大いに整つた。又寺廟の建築も避暑山莊を中心として其外輪山に、天然と人工の調和を巧に按配して、極めて美術的にしかも雄大なる寺廟が八ケ寺、更に三ケ寺が營まれて居る。民國に至つて顧らみれずにゐたが、滿洲國建國後政府はこれが維持修繕に努力せられて居る。

承德は又熱河南部に於ける經濟の中心都市である。滿洲國建國前は北支との取引が盛であつたが、建

國後錦州より承德に來る錦承線が昭和八年より十一年三月までに順次開通して以來、錦州を經て日本物貨の輸入が盛んになつて來た。

輸移入の主なるものは、綿布及び綿製品、鹽、砂糖、麥粉、石油、煙草、雜貨等で輸移出の主なるものは綿布及綿製品、棉花、鹽、小豆、洋麵等である。仕向地は各縣に及ぶが、隆化、圍場、豐寧、灤平等が多額をしめ、多倫方面にも輸出を見る。

工業は、製油業、釀造業、電氣業、煉瓦製造等の工場がわかづに有るが、市内の需要を充すに過ぎず生産の街ではない。

承德の商家は、雜貨商、吳服商、糧棧、旅館、油磨業、肉屋等をはじめ各種の商店があるが、資本金壹萬以上の者は極少數に過ぎず殆ど五百圓、千圓位の資本で行はれて居る。

承德街諸機關

熱河省公署	承德縣公署	警察廳(派出所一〇)	稅捐局
商工公會(省、縣)	承德地方法院	承德地方檢察廳	區法院
區檢察廳	監獄	專賣署	郵政局
電報局	電話局	興農合作社聯合會	縣興農合作社
中銀支行	興銀出張所	大興公司(二)	營林署
國際運輸	承德國立醫院	承德放送局	協和會省本部
承業興業監督署	電業出張所	糧穀會社出張所	承德師道學校(省立)
承德(商科)國民高等學校(省立)		承德女子國民高等學校(省立)	
滿人小學校	日本人小學校	青年學校	生活必需品會社支店

勞工協會支部　承德縣倒流水に熱河鑛業株式會社あり

其他

警察署所在地	鞍匠村　下板城　三溝　頭溝
税捐局分所所在地	下板城
郵政局所在地	六溝　上板城　下板城　頭溝　三溝

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
承德（北條太洋）	熱河	新光社	昭、八、九
承德縣及承德概況	奉山鐵路及背後地經濟事情	鐵路總局	昭、九、七
承德の通信施設概要	電々會社業務資料	滿洲電々會社	昭、九、八
承德多倫諾爾間道路調査書（齋藤新一）	同表題	國道建設局	康、元、六
承德輸出入統計（康元、三）（外務省）	海外經濟事情	外務省通商局	昭、九、七、九
承德（日本外事協會）	滿洲帝國總攬	三省堂	昭、九、六
承德離宮（避暑山莊）內風致の松樹枯損狀況と之が對策	塔影	滿洲國立高等農業學校	康、三、一二
承德縣に於ける一般情勢	朝陽灤平間に於ける地方一般情勢調査報告	步兵第四旅團	昭、八、三
承德事情	關東軍弘報資料	關東軍	昭、八、三、二三
承德概況（伊學照久）	世界知識增刊熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、五
承德經濟事情	同表題	縣公署	康、二、九
承德縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
承德縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
承德在留邦人職業別戶口統計表	同表題	縣公署	昭、一〇、五

灤平縣

概史

舊名を喀喇河屯と稱し、周及秦朝時代には東胡の屬地であつたが、其後匈奴（蒙古族）の侵入を蒙り漢時代に到る。其後幾多の政變併合の歷史を經て大興州及洪城路等の稱呼がある。河北省の管下に置かれてゐたが清朝康熙の年に每年秋後に清帝は圍場へ狩獵を爲し此所に行宮一箇所を設けられた（此の喀喇河屯は即ち通ずる大道である）乾隆七年の時に喀喇河屯廳を設置し、四十三年に於て縣治を改組せられ灤河の名に基き灤平縣と稱す。熱河省に編入されて居る。

地勢

熱河省西南部の地域を占め、東は承德、興隆兩縣に接し、西及南は萬里の長城を以つて河北省と對し北は隆化、豐寧に隣して居り、中華民國との國境地帶で國防上重要なる位置にある。

縣内山脈、山巒到る處にあり。灤河が縣の東端部を南流し、縣城灤平も灤河に臨んで居る。其他中央及西部に南流して河北に入る白河の上流支流が二條ある。山岳地帶が多いために原野地は極めて少ない。山地多く耕地少く農業としてもあまり振はないが縣民の多くは農業に從事して居る。高粱、粟、大豆等を主として產出するが縣內需要以外の餘裕は少ない。阿片を以つて主要物產とし、農家經濟は主として之を以つて維持して居る。玉蜀黍、野菜等も少額ながら產出して居る。

縣の物產

畜產として毛皮を產し、又加工せる毛絨等、天津方面に賣出される。

都邑灤平

灤平は灤河の右岸承德の西二十八滿里にある。蒙古名を喀喇河屯といふ(黑城の意)康熙帝が意を塞外に注がれ、此地が、陸路往來の衝に當る爲、此所に行宮を建てられたのである。又水運としても灤河を經て、渤海に達する便利があるからである。其後日を逐ふて商家も多くなり、繁榮を見るに至つたが、度々の水害の爲め田畑家屋が流失し、又程遠からぬ承德に離宮が建てられるに至つて漸次繁榮は承德に移つてしまつた。康德六年灤平縣公署は西南方の鞍匠屯村に移轉された。

灤平諸機關

警察署	稅捐局	郵政局	電報局
電話局	興農合作社	灤平工業學校(省立)	滿人小學校
勞工協會出張所			

古北口諸機關

電報局	稅捐局分局	稅關分關	電話局

鞍匠屯

灤平縣公署はもと灤平に置かれてゐたが、縣全體として見る時にあまりに東に偏して居る。康德六年縣公署は灤平より此地に移轉せられ現在縣政の中心である。當地は承古線沿線の一村に過ぎない小さい邑である。

鞍匠屯諸機關

灤平縣公署	郵政局	警察署	稅捐局分所

其他

警察署所在地	古北口	湯河口	四海治
郵政局所在地	張百灣	南灤平	太閣鎭
稅關分卡所在地	司家營子		

資料　沿革　地勢　縣の物産

題名	書名	發行所	發行年月
灤平縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
灤平縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
灤平縣一般情勢	朝陽灤平間に於ける地方一般情勢調査報告	歩兵第四旅團	昭、八、三
灤平概況	熱河事情	滿洲文化協會	昭、八、三
灤平概況(北條太洋)	熱河	新光社	昭、八、九
灤平縣地圖	同表題	縣公署	康、三、七

豐寧縣

もと察哈爾八旗の殘部を四旗として、熱河都統の管轄に委したものである。乾隆元年初めて四旗理事通判を設け、同四十三年豐寧縣に改め、承德府に隷したが、民國三年府が廢されて、熱河道に屬した。現今は熱河省內である。

豐寧は滿洲國の西南部熱河の西端に位し、西北方には察哈爾を控へて居る。

大灘方面即ち西北方の沙漠平原を除く外全縣山岳地帶であつて、五百米より二千米位のもの重疊し、山脚に河が流れて若干の河川の浸蝕作用による砂礫地又は平原を見るのみである。

山地は數箇所に森林地帶を見るのみで、殆ど禿山多く、雨期の降雨にあへば忽ち大洪水となる。

地勢山岳地帶であつて、河川が山谷を縫ひ、河川の兩側に僅かの平原を殘すのみで、土質が非常に惡く氣候も農作には適してゐない。只大灘方面に肥沃な土地を有するのみである。從つて農產の種類も少く農民の知識も乏しく近年は戰禍相續き天災頻發して一箇年の收穫も消費量にも足りない位である。林業は現在のところ禿山ばかりで振はないが、果樹栽培は有望と見られて居る。牧畜は元來發達してゐた

所であつて主として牛、馬、羊を飼つて居る。鑛產は砂金、石炭、煤石、寶石等有望で、現在多少採掘して居る。工業の大規模なるものなく、燒鍋、陶工、織毛等小規模なものが縣城、大閣鎭、大灘等に於て行はれて居る。

都邑豐寧

縣城である。四方山に圍まれ其間を流れる川の土砂に依り構成された四百平方滿里の盆地の上にある。淸朝時代は此地を土城子と稱してゐたが乾隆四年始めて豐寧縣と改稱せられ、縣城となつた。熱河より多倫に通ずる街道の要衝に當り、商業地であり、以前は中國方面とも相當貿易が盛であつたが、事變後杜絕し、工業の主要原料不足となり、金融困難である。市街に城壁がない。

豐寧諸機關

豐寧縣公署	警察署	稅捐局	郵政局
電報局	興農合作社	協和會	滿人小學校
勞工協會出張所	豐寧農業學校(省立)		

大閣鎭

縣城を距る西方約百四十滿里、黑達營子、大灘、上黃旗、外溝門子方面への政治交通上極めて重要なる地點であつて事變前までは縣城を凌ぐ大都市であつた。附近の平野は豐寧よりも廣く、土地叉肥沃であるが事變前湯玉麟等に荒されてしまつた。從來は察哈爾省、中國方面との取引の中心地であつて、商工業共盛であつたが、現今は窮迫狀況を呈してゐる。

大閣鎭諸機關

警察署	稅捐局分所	郵政局	稅關分卡

大灘

縣の西北方に位し、察哈爾省方面に對する國防上重要地點である。地勢は廣漠たる大沙漠であつて以前は牧場も開かれてゐた。土地肥沃で自然に生ずる油麥等も相當の產額を有して居る。該地は蒙古方面との關係深く、氣象も他所と異り外蒙に類似してゐる。

黑達營子　縣の西南方に位し、察哈爾省方面との商取引の中心地であり、國防上重要地である。附近の帶狀の盆地は土地は肥沃であるが、宋哲元の横行によつて極度に荒廢して居る。此邊は察哈爾方面より出稼人の新開地であつて、大同二年十二月、熱河討伐の際滿洲國の成立して居る事及日本軍を始めて知つたやうな有樣である。

其他

警察署所在地	窄嶺	上黄旗	東卯	喜峰砦
	大灘	森吉圖		
郵政局所在地	窄嶺鎭	楊木柵	東卯鎭	喜望砦
	上黄旗鎭	大灘鎭	小廠村	

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
豐寧（北條太洋）	熱河	新光社	昭、八、九
同（滿洲文化協會）	熱河事情	滿洲文化協會	昭、八、三
豐寧事情（仲摩照久）	世界知識増刊 熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、五
豐寧縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
豐寧縣事情	同表題	滿洲國地方事情編纂會	康、元、一一
豐寧縣	滿洲國地方事情（二）	大同學院	康、元、一二
豐寧縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	滿洲事情案內所	昭、一〇、二
豐寧縣事情	滿鐵調査月報（一五の一）	滿鐵	昭、一〇、一
豐寧縣公署半年刊（康四上半期）	同表題	豐寧縣公署	康、四、一

隆化縣

概史

清の宣統元年に府州縣の境域廣大に過ぎ、人民漸く多くなつた爲、縣の增設を計り二年豐寧縣の一部承德縣の一部を割いて隆化縣とし、唐三營の圍場總管衙門を以て縣署となした。民國三年熱河道の管轄となり、同五年唐三營より隆化(黃姑屯)に移した。隆化境內は正藍(黃姑屯)正白(郭家屯)の二部落の外、張三營附近は翁牛特部落遊牧の地である。清の康熙帝の時に朝廷狩獵の地として此土地を献じ、帝又每年狩獵に來り避暑山莊は建築せられ、狩獵の都度諸部落民雲集し、商人來りて交易を爲し、更に墾地移民が入り來つて土地の繁榮となつた。民國五年羅縣長の治績大いに見るべきものがあつたが、其後は名縣長も出でず、加へて民國の革命騷ぎに民心も惡化し、文教はすたれ、思想は混亂し、更に此間二回に渡る奉直戰の巷となり、匪賊出沒し、綱紀すたれ、官吏は一時の利に走り、社會混亂裡に縣政の進步更になくして熱河事變に至つたものである。滿洲國政府成立後、大同二年十一月川本參事官代理及小川警務指導官の入縣を見るや從來の各般に涉る弊政刷新に寢食を忘れての努力により、同年十二月より着々と刷新進涉して居る。

地勢

隆化縣は承德縣、灤平縣、圍場縣、豐寧縣に取圍まれ、縣內を灤河が貫流し、驛馬途川、伊孫河と合して灤河と共に灤平縣へ流れ行き、縣の東部に鶯嵩川が南流して承德へ流れ行く。鶯嵩川と伊孫河の間には平頂山、獅子山、新開嶺、興隆嶺が介在して灤平へ走り、伊孫河と驛馬途川の間には磨石梁及哈馬梁山系が走つて、煤窰山で終り、驛馬途川と灤河との間には拉馬梁、馬棚子梁山脈高く聳えて灤平縣へと續き、豐寧縣との縣境は急峻なる蘇木梁、七道梁、元寶山の山脈が峯を連ねて居る。全縣面積の百分

の八十迄山脈で、百分の一五が耕地、百分の五が河川といふ程の地で即ち南興安嶺と、陰山山脈との中間の急峻なる山岳地帯を占めて居る。

縣の物産

農業は主生業で粟、高粱、阿片、豆類、玉蜀黍、水稻等を栽培してゐるが耕地面積少く、地形の關係上、局部的氣候の激變多く改善上種々の考慮を要する。畜産は農耕使用上必要なるもの丶飼育である。山は多いが禿山多く增殖等の知識も持ち合せてゐない。鑛産は金、鐵、鉛等の埋藏あり現に經營せるものもあり又石炭は、採掘して承德に移出して居る。

商業は多倫瀘の輸入と隆化の生産品との貿易が計られ工業方面も縣當局の努力により電燈業、家内工業等の起業を見るに至つて居る。

都邑隆化

隆化は清朝時代、朝庭狩獵場とせられた處であつたから、縣城附近の地は元、巴林王に降嫁された康熙帝の長姑淑惠公主の化粧料地として下賜せられたものであつて、此故に博洛河屯の地名は俗に黃姑屯と呼びならされるに至つた。博洛河屯は蒙古語の音であつて紫城の意であると。現在の縣公署の建物は康熙四十二年に建築せられた行宮の跡である。境内に樹木が多い。民國八年に王府から、人を派して此領地を拂下げたといふ事である。承德へ百二十滿里。

隆化諸機關

隆化縣公署　警察署　稅捐局　郵政局
電報局　興農合作社　大興公司　電話局
滿人小學校
其他

警察署所在地

張三營　章吉營　白虎溝　郭家屯

税捐局分所所在地	張三營子
郵政局所在	張三營、唐三營、郭家屯

資料

題名	書名	發行所	發行年月
隆化縣下都邑事情(山田久太郎)	滿蒙都邑全誌(下卷)	日刊支那事情社	大正一五、一〇
隆化概況(仲摩照久)	世界知識增刊 熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、五
隆化縣事情	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、九、一一
隆化縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
隆化縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、六
隆化縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二

概史

青龍縣

青龍縣はもと中華河北省内の臨楡、撫寧、遷安三縣の管轄地であつたが、縣内山嶺重疊し、又關外の地である爲めに官の管理及ばず、政教普及せず匪害連年續き更に加ふるに地は瘠せ人民窮乏し知識開けず年々荒廢してゆくばかりであつた。民國十九年匪害益々熾になつた爲めに、此年の冬何旅長が匪患を肅清し、河北省政府に建議し、省會議の議決の結果、前記三縣の内の六區を割いて都山設治局と爲した。これは境内に都山といふ最高の山の名から名づけられたのである。王朝鳳といふ人が設治員となつて雙山鎭に居つて衙署を創立し各區の名稱を改定し、政治上の改善を計つた。後設治員は設治局長と改稱せられたが、二十二年の事變に舊縣官員は皆關内に逃げ、長城以北各區は完全に熱河省の管轄に歸したのである。縣内に青龍河が貫流して居る爲めに都山設治局を改めて青龍縣とした。初代縣長は張爾舟

氏で、大同二年六月雙山鎭に於て就職の典禮を擧げたのであるが、匪襲を受け、大障子鎭にのがれた。此地は地勢適し且つ市街も整つて居る爲め大障子鎭にあつて縣署設立の許可を受けた。現今青龍と稱してゐる縣公署の所在地である。以後次第に匪患を退け、政治行進し現今は都山時代の六區に更に三區を加へ九區完全に當縣の所管と成り、大同二年十月より匪害肅清せられ各區大小の機關次第に設立せられ一般縣政逐次向上を示して居る。

地勢

當縣は熱河省の東南部、省城を距る事四百滿里、南は長城を以つて華北と界し、四週の數縣に隣して居る。縣城は縣內の略中央に位して居る。

縣內に於て最高の山は都山である。縣城の西北方四十餘滿里最高一〇七米位であつて山深く林茂り其延長は縣境を爲して居る。南は長城に止り北は喀喇心左旗に西は灤河によつて承德に境し東は青龍河がある。縣內山地が多くて平野が少ない。一たび夏季雨續けば洪水となり到る處河溝を爲す。青龍河は源を淩源に發し本縣內を貫流して遂に灤河に流入して居る。

縣の物產

農を營む者が大多數を占めて商工を營む者が少い。前述の如く地勢の關係と交通不便、匪害多き爲め產業振はず、農村經濟甚だ困難を極めて居る爲め、商店は破產し大工廠の如きものも見られない。只山林多く生活の資に充てられる。山地に黃芩、柴胡、遠志、芍藥、桔梗等の各種藥材が豐富であるが、これを研究採取する人がない。農產は高粱、豆類等の外、棉、麻等を栽培してゐるが年收僅かである。農村の副業として蜜蜂の養殖が行はれ、年產九百斤以上の蜂蜜を出し、又婦女子の仕事として養蠶もやつて居る。鑛產としては縣內に金質鑛地が十餘個所あり二、三公司の手により又村民によつて採金して居たが、國有に歸してより採金は禁止されて居る。調査も出來てゐない。

都邑青龍

以前大障子と稱した地であるが初代縣長が匪襲をのがれて雙山鎭より縣公署を移して大同二年六月縣公署の所在地となつて以來、青龍と改稱した。康德五年春鐵道總局では凌源より長城に至るバスの開通を開始した爲め、交通不便であつた此地も大いに外地との交通に貢献せらるゝに至つた。

青龍諸機關

青龍縣公署	大障子警察署	郵政局	電報局
興農合作社	税捐局分局	協和會	勞工協會出張所
青龍農業學校(省立)			

雙山鎭

青龍縣が河北省内に置かれてゐた時代都山設治局の所在地で、事變以前までは該地方の中心であつた都市である。

其他

警察署所在地	界嶺口	雙山子	湯道河	喜峰口
	龍王廟	寬城	冷口	
税捐局分所所在地	寬城鎭	乾溝子鎭	冷口街	
郵政局所在地	喜峰口	雙鎭	湯道河	木頭橙
	乾溝鎭			
	龍王廟	寬城	大吉口	
税關分關所在地	喜峰口			
税關分卡所在地	冷口	潘家口	界嶺子	義院口

資料

題名	書名	發行所	發行年月
青龍縣政概況	同　表　題	縣公署	康、二、六
青龍縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
青龍縣概況	民政部月刊	民政部	康、元、一二
青龍縣地圖	同　表　題	縣公署	康、三、
青龍縣一般狀況	同　表　題	縣公署	康、三、一二
青龍縣特殊事情概況	金融合作社(四の八)	金融合作社	康、五、八
青龍縣公報(四年十二月分)	同　表　題	縣公署	康、四、一二
青龍縣政務月報表	同　表　題	同　前	康、五、一

圍場縣

概史

本縣は光緒二年の設治に係り、初め圍場の南八十滿里の二道溝に置かれたが、光緒十二年現在の位置に移された。當時縣域は徳成裕といふ燒鍋と其他數戶を數へるのみであつたが、光緒二十年以後戶口增加し、市街を形成するに至つた。同二十五年に粮甫府と改められ、民國二年更に圍場縣と改稱せられた。現在は熱河省に屬して居る。此地は清室の狩獵場即ち木蘭圍場獵地に屬し、光緒二十六年圍場森林の採伐開始と共に土地拂下げを行つたのである。

地勢

熱河省西部の地域を占め、北は興安西省、東及南は翁牛特右旗及び、寧城、隆化、豐寧各縣に接し、西部は察哈爾省の多倫に堺してゐる。全滿洲よりみて西境、殆ど蒙古の「ゴビ」沙漠に隣接するといはれる。縣內殆ど山岳地帶をなし、灤河の上流及老哈河の上流地帶であつて、幾多の溪谷をつくつて灤河の各支流は南方に、老哈河の各支流は東北方に流れて旗隣に入る。縣內は清朝の皇室の狩獵場であつた

爲、樹木を保護し、漢人の入國を禁じたが、清朝衰へるにあたり、立木は濫伐せられ、洪水の源泉となつてゐる。

縣の物産

農業は主要産業であつて縣民殆ど大部分これにて生活を立て耕地數も可成り多い。主要農産は阿片を第一とし、粟、大豆、蕎麥、小麥、玉蜀黍等である。

漢人の入國前は、狩獵、農牧の地であつた本縣は、牧畜は現在も重要産業である。牧草良好なる上、到る處に小川があり、乾けば砂漠の樣な狀態であるが夏季は優良なる牧草が豐富な爲めに、縣內到る處羊、山羊、牛、馬、豚の放牧が行はれ、殊に西部、北部が盛である。又これらの皮革類も産する。

清朝圍獵の地として一帶の密林をなしてゐた當縣內ではあつたが、大濫伐の後の植林を爲さず、殆ど切り盡した觀がある。しかし他の縣に比較すれば現在尙多少の木材を生産してゐる點だけは勝つて居る。主として松楊化樹より成る森林が多く、切り出した木材は筏をもつて縣內の需要を充し、又多少承德に送つて居る。

鑛産は調査が行はれてゐないが、二ケ所に産金の歷史があり、惡質乍ら、多少の石炭を出してゐる。又毛皮の加工、燒鍋、黃酒製造等、小規模乍ら縣內方々で行はれてゐる。

都邑圍場街

圍場縣公署所在地。光緒二年二道河子に粮捕廳を設け、同十二年現在の圍場に移し、後開墾局を設けて招民開墾してより住民が增加し、民國元年圍場縣となつた。當時の土壁は今漸く三門を存するのみである。土産物の集散地であるが商業權は極く狹い。年額三十萬斤の藍を産する。行政上では圍場と改稱せられてゐるが土民は今なほ粮捕と呼んで居る。

木蘭圍場

清の聖祖が秋季塞外に巡幸される際、卷狩の典を擧ぐる爲、現在の圍場に、周圍凡そ一千三百餘支里

の木柵を設け、柳樹を植えて邊牆とし、場內一千人の八旗官兵によつて管轄され、耕牧、樹木の伐採、禽獸の捕獲を嚴禁して靈囿を開いたのが木蘭圍場である。圍場內に棲息する禽獸の、わけて仲秋を過ぎて牝鹿が牝鹿を慕ふ頃の拂曉、鹿首を戴いた獵者は木の哨子に呦々の音をこめて、鹿群を集めて捕獲するのであつて、之を木蘭秋獮といはれた。此狩獵の行事は士氣の作興と、古風の存續を計つたものであるが、其時には蒙古內藩の王公、新附の酋長等を招待して盛典を擧げ、諸侯と意志の疏通を計り、蒙古を綏撫する目的に利用されたものであるといふ事である。

圍場街諸機關

圍場署公署　警察署　稅捐局　商工公會
興農合作社　專賣局　中銀支行　大興公司
國際運輸　協和會　郵政局　電報局
電話局　圍場(農科)國民高等學校(省立)　滿人小學校

其他

警察署所在地　朝陽灣子　新撥　御道口

稅捐局分所所在地　半截塔　新發鎮　克勒溝

郵政局所在地　克勒溝　銀窩溝　太平地　半截塔
側立土城子　棋盤山　新撥　朝陽灣
山灣子　四道川　三道川　頭道川

電報局所在地　克勒溝(電話局もあり)

資料

題名	書名	發行所	發行年月
圍場縣經濟概況	地方經濟調査報告書	鐵路總局	昭和一一、一
圍場縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
圍場縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
圍場の開墾沿革	蒙古地誌(中)	富山房	大正八、一二
圍場事情(仲摩照久)	世界知識增刊 熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、四
錐子山事情	同前	同前	同
圍場縣事情	滿鐵調査月報	滿鐵	昭、九、一一
圍場縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

興隆縣

概史

滿洲建國當時本縣は未だ滿洲國に編入されず民國河北省に屬してゐた。本縣に縣治を布かれたのも事變の前年民國十九年八月の事であつた。熱河討伐以後大同二年四月滿洲國版圖に編入せられ、島村少佐の努力指導により、承德縣管內に屬し、大同二年九月興隆には興隆辦事處が置かれて居た。康德四年七月地方行政の改革あつて承德縣より獨立し、興隆縣となつた。

地勢

興隆は至る處山岳重疊し平野に惠まれてゐない。北に霧靈山、南に六里坪の熱河第一の高峰がある。國有森林は樹木よく茂り其名も有名である。其他承德縣境には板谷嶺、柳河嶺があり其他大半を山脈によつて形成して居り平野は其溪谷間に見るのみである。

河川は柳河が最も大きい。此河は霧靈山及び六里坪を水源地とし東北方に流れて灤河に注いで居る。之に次で横河、潵河が東南部にある。此兩河は國境を出でて河北を流れ灤河に注いで居る。是等河川は

背奇峯連立せる山間に溝溪を作り山谷は高峻なる山頂光鋭奇峯を爲せる中を縫ひ漸次其流域に僅の平野を形成して居るに過ぎない。

縣の物産

縣内普通農作は高粱、粟、包米、豆類、雜穀類で特用農作物としては葉煙草、麻類、阿片等である。畜産は牛、馬、騾、驢、豚、山羊、緬羊等盛に飼育せられ、皮革、毛類等の生産も見られ北支方面に販賣して居る。

此地は地勢山岳地帶多く雨量が比較的多い爲め、樹木が繁茂し、清朝時代に於ては封禁地として一般人の出入を禁じてゐたが、清朝の衰微の爲、民間に賣渡され後濫伐せられて後には霧靈山及六里坪邊其他の僻地の殘存を見るのみである。

商業は振はないが、興隆及び鷹手營子に於て若干の商業を見る。大部分小資本であつて主として漢人の一手に把握せられ、河北資本の系統であつて、北京、天津方面との商取引を爲して居る。承德との取引も近時行はれてゐるが、地理的に不便である。林業が盛であつた時代は商取引も盛であつたが近時は衰へて居る。

鑛業資源豐富なる事熱河第一と見られて居るが、未だ正確なる調査がない。金、石炭、水晶、天然瓦斯等、現在は、金、石炭の採掘が行はれて居るが全體的に調査せられず寶庫を埋藏して居るに過ぎない狀態で、投資と事業着手の手が伸べられる事を待ち望んで居る。

水産の見るべきもの現在はない、森林業盛であつた時代は河川水量豐富で魚族も多かつたが森林濫伐の後河水減少しわづかの魚族が漁獲されて居る。

都邑興隆

興隆は山間に介在し面積狹小且つ開闢以來、歷史甚だ短かいために商工業其他も未だ發達の域に達し

てゐない。更に兵火に罹り商民大いに困り市勢が振はない。興隆縣は建國後は承德縣に屬してゐたが、康德四年興隆縣が獨立縣となつた爲め現在興隆は縣城である。

興隆諸機關

興隆縣公署	警察署	税捐局分局	郵政局
電報局	興農合作社	税關分卡	滿人小學校
勞工協會出張所			
其他			

警察署所在地　鷹手營子　半壁山　倒流水

税關分卡所在地　馬道溝

郵政局所在地　鷹手營鎭

資料

題名	書名	發行所	發行年月
興隆縣一般状況	同表題	縣公署	康、四、二

本縣はもと承德縣の一部であつて、康德四年始めて縣制を布かれたのであるから、資料は承德縣の中に含まれる事が多い。

喀喇沁左旗（もとの建昌縣）

概史

喀喇沁左旗は蒙旗の地である。乾隆以來漢人の當地方に移り住むものが多くなつて以來、塔子溝廳を置いて漢人に對する屬人的行政を行つてゐたが、乾隆四十三年廳を廢して縣となし建昌縣といつてゐた。

當時の建昌縣は現在の喀喇沁左右兩旗の地域であつた。其後、凌南、凌源の二縣に分れ建國後に二縣となつてゐたが康德四年七月地方行政區劃の變遷に伴ひ、二縣は再び合併して建昌縣となし建昌(凌源)に縣公署をおいて縣行政を行つてゐた。康德七年一月一日より縣名を廢して旗名をとり喀喇沁左旗となつてゐる。

地勢

一帶に山岳地帶であつて北方は大凌河小凌河の各支流地帶(上流)であり、南方には青龍川、六股河、黑狗河あり、これらの河の源を爲して居る幾多の細支流が網の目の如く、此等の沿岸には夫々狹長なる平野を擁してゐるが、南西部は高山多く土地峻嶮、青龍縣と自然の障壁を形成してゐる。

旗の物産

旗内は滿蒙民共に農耕に從事し、牧畜を副業として居る。主要生産物は、粟、高粱、豆類、棉、煙草麥類、蕎麥、野菜類等を産し、南部では、高粱、粟の旗外移出をさへ見てゐる。

又南部凌南の方面には梨の産出多く、これが栽培を生業とする者も多く、仲秋の候、和尚房子附近で取引が盛に行はれ一旦綏中に集中して、北京、天津方面にも綏中梨の名を以つて輸出されてゐる。阿片の栽培は熱河他縣と同樣、一定の指定面積を以つて許されて居る。

　牧畜は副業として行はれ專業とする者は少ない。牛、驢、騾、馬、山羊、豚等である。林業は振はず、北方凌源には石炭多く、南方には金鑛、硫黄鑛等あるが調査十分ならず且つ現在の採掘は極めて幼稚である。

都邑凌源街

凌源はもと建昌と稱し、俗名を塔子溝と呼ばれる。市街は低地にあつて、宛然溝中にゐるやうである。西方一〇粁の地に半壞の古塔がある故に塔子溝の名があるといはれて居る。凌源なる名稱は大凌河の水源である事から來たといふ事である。

市街は城壁をめぐらし、殆ど四角形をなし、東西南北に通ずる二條の大道を設けて居る。雜穀、燒酒毛皮、布、砂糖等の取引あり、錦州、承德間の要衝を占めたる貿易盛な街である。

凌源街諸機關

喀喇沁左旗公署	警察署	稅捐局	商工公會
區法院	區檢察廳	承審處	郵政局
電報局	電話局	興農合作社	專賣局
中銀支行	大興公司	國際運輸	協和會
電業營業所	凌源(農科)國民高等學校(省立)		滿人小學校
日本人小學校	生活必需品會社配給所	勞工協會出張所	街公所

凌南

大凌河の上流左岸に位し、東に大黑山、南に小黑山聳え四圍山を以て圍まれ所謂凌南盆地の中心にある。附近一帶は大凌河の沖積地をなして居る。此地に漢人が始めて來住したのは清朝の康熙帝時代と云はれ、當時は小數の蒙人が放牧して居た。凌南の土名を蟒牛營子と謂はれるのは此わけである。漢人の來住と共に蒙人は他に移住し現在純然たる漢人都市となつてしまつた。每月一、六の日に市開け其取引は盛である。

雜貨類は凌源から仕入れて來るが、主として日本品である。穀物商は當地農產集散の外凌源方面から高粱、小米を購入し更に綏中縣に移出する者が多い。主として馬車輸送を行つて居る。

凌南諸機關

郵政局	電報局	稅捐局分局	凌南煤礦公司(合資)

公營子

凌南の北方大凌河の右岸に位して居る。貝子山麓に開けた所であつて附近に美林があり風光明眉、凌南を距る三十滿里である。街の南半を八家子といふ。此地は清朝の順治五年喀喇沁部の首領蘇布策の弟

師校が凌南封冊を命ぜられ、公營子に廟を開いたのに始まり今日に至つて居る。八家子の方が商業地帶であつて附近一帶の農産物の集散盛であり、凌南に次ぐ商業地である。

要路溝

往時は凌源縣、青龍縣、凌南縣の往來者は此地を必ず通過し、要路溝の名を生じた程であるが、後盤嶺地方の道路完備するに及んで此地を通過する者漸次數を減じて衰へて行つた。

其他

警察署所在地	山咀子	葉王廟	明爾碰	大城子
	建昌	和尚房子		
稅捐局分所所在地	三十家子鎭	大城子	山咀子鎭	葉王廟
郵政局所在地	水溝	黑山科	三道河子	哈喇洞
	城廠	葫蘆素大屯	和尚房子	玲瓏塔
	二道灣子	藥王廟	公營子	山咀子
	四官營子	大城子	十二得子	茶棚
	明爾碰	三十家子	要路溝	大興公司
	建昌村	山灣子		

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月
凌源縣に於ける一般情勢	朝陽凌平間に於ける地方一般情勢報告	步兵第四旅團	昭、八、三
凌源	峯山線案內	鐵路總局	大同三、三
凌源だより（佐藤新吉）	南滿洲警察協會誌	南滿警察協會	昭、八、一一

凌源概況(仲摩照久)……	世界知識 熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、五
凌源縣……	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
凌源縣……	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
凌源縣十五里堡調查報告……	鄉村社會調查報告書(記述編)	統計處	康、三、六
凌源縣全圖……	同　表題	縣公署	康、三、一
建昌縣經濟事情……	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二
凌南縣及縣下主要都邑狀況……	奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	昭、九、七
凌南縣概況(國澤建一郎)……	民政部月刊	民政部	康、二、三
凌南縣……	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四

喀喇沁中旗(もとの寧城縣)

概史

當地は後漢の時代、鮮卑に屬してゐたが、唐の末、五湖十六國の時代に至つて晉王李克用が初めて大寧城に都を奠めて殷盛を極めてゐた。遼、金時代に都を林西に遷されて後も中京として衰へなかつた。明の太祖興るに及んで、二男を此地に封じて大寧城に都せしめたが、後燒却され繁榮の夢を破られてしまつた。清朝に至り、山東の農民移住し來り八溝廳を設置して漢族の屬人的統治を行はしめ、民國二年平泉縣の一地方として管轄せしめた。民國二十年大寧設治局を小城子(寧城)に設置し平泉縣より分離せしめた。康德元年の民政部訓令では平泉縣と寧城縣であつたが、康德四年七月、二縣は合併せられて寧城縣となつた。更に康德七年一月一日より縣名を除き、喀喇沁中旗となつた。

地勢

本旗は熱河省のほゞ中心に位し、他省と境を接する事はない。一般に山岳地帯であつて、老哈河は其源を旗の西北に發し、沿岸に沃野を構成し、村落又此等の平地に發達してゐる。昆都川以東は低い臺地

をなし、喀喇沁右旗に至る廣大なる平地を爲して居る。地勢一般に高く北は南部の平泉地方に比して氣候が大陸的なる事に於て著しい。

旗の物産

農産は見るべきものなく、粟、蕎麥、高粱等數量も少く他に移出せず。畜産は、熱河に於ける湯玉麟の暴政により多くを失つて數に於て減少してゐる。

鑛産資源は、金、鐵等の礦區が見出されてゐるやうであるが採掘の運びに至らず。

旗農民の財政は只、阿片の栽培によつて保たれてゐる狀態である。

都邑寧城

寧城は舊小城子と稱す。喀喇沁中旗王府の所在地である大城子に對していふのである。喀喇沁中旗の創立せられたのは清朝の康熙帝四四年であるから殆ど此れと同時代に開かれたのである。民國二十年、寧城縣と平泉縣が分離した折、此地に大寧設治局が置かれ同年十二月寧城設治局と改稱、大同二年十月寧城縣公署が置かれ康德七年一月一日縣名を廢して旗を單位とし、喀喇沁中旗となり同旗公署が置かれてゐる。縣の略中央に位し、赤峰へ一二〇滿里、平泉へ二四〇滿里、兩者交通の中央點であると同時に北支滿蒙を連ぬる重要道路である爲め、北支より入熱入滿するものは平泉地方より此道路によつて居る。民國十三年以前は比較的商業繁榮し、約三十の商號があつたが、奉直戰の影響を受け、軍閥の重課甚しく、休業する者多く、僅か五、六家を殘してゐた。最近次第に復興の兆がある。毎月一・四・七の各日には開市がある。

城諸機關

喀喇沁中旗公署　警察署　郵政局　電報局
興農合作社　寧城縣承審處　協和會　八里罕村に區法院
區檢察廳あり　勞工協會出張所

平泉街

此地は八溝と稱し、瀑河の上支流なる峽谷にある。東西狹く、南北二十餘滿里にわたる細長い市街で土貨の集散が多く、一時喜峰口を越えての第一市場であつたが、赤峰の發展におされて漸次衰頽し、殊に有名な毡毯の製造及び燒酒釀造の如きも昔日の盛況を見ないやうになつた。然し承德に通ずる鐵路開通後、再び盛況に向つて居る。

市街は北に猴山、南に象山、紅山、老姥冷嶺等を負ひ、東に獅子山、鳳凰山、東南に瑞璨山等があつて、夏季の山色よろしいが、樹木に乏しく昔の形勝を害してしまつてゐる。

此地は、承德、凌源、朝陽に通ずる河北からの要衝であつたため(喜峰口より入る)早くから漢人の移住する者が多く、先住蒙古人の生活に侵入して行つたものである。

平泉街諸機關

警察署	稅捐局分局	郵政局	電報局
電話局	商工公會	中銀支行	大興公司(一二)
國際運輸	電業營業所	專賣局	日本人小學校

八里罕

老哈河に臨んで居る。もとは一小部落に過ぎない地であつたが、罌粟の栽培に適して居る爲めに、民國十三年以後次第に發達して來た。阿片の取引盛なるに從ひ、商家の數も增加し、事變の際の匪賊の難も漸次回復し本縣最大の商業地となつて居る。商號三〇を有し、毎月三・八の各日開市がある。

三十家子(二龍驛)

北境近くにあつて老哈河に接して居る。昔時は一小部落であつたが、比較的平野がないために農產經濟の影響を受けて漸次發達して來たのである。葉峰線二龍驛に當つて居る。

西橋

昆都留河の北岸にある。一集團部落であつたが、民國に至り、第五區警察署を設けられた。大商號二小商十數家、毎月、二・四・七・九の各日開市があつて繁榮する。

公爺府　清朝康熙帝時代に源を發して居る樣である。縣城と喀喇沁中旗間を結ぶ自動車路線上の交通の中繼地である。當縣第四區に於ける最大の商埠地である。大家多く各商店の資本は比較的充實し、西北一帶の農民は一切物品を此市に求めて居る。毎月二・七各日に開市があつて殊に繁榮する。

其他

警察署所在地	二道營	天義	大城子	八里罕
稅捐分所所在地	天義	八里罕		
郵政局所在地	東瓦房	三座店	八里罕	大名城
	黃土梁子	甸子	杜家窩堡	和碩金營子
	那拉不流	天義	大城子	楡樹林子

資料

題名(筆者)	書・名	發行所	發行年月
寧城(北條太洋)	熱河	新光社	昭、八、九
蒙旗事情(民政部)	第一回全國縣參事官會議議事錄	民政部	康、元、六
寧城縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
寧城縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵道總局	昭、一〇、二
平泉金融合作社管內經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

概史

喀喇沁右旗(もとの建平縣)

光緒二十八年の奏請によつて置縣する事となり、當時四家子にあつた平泉縣の分治を廢して、光緒三

十一年始めて新邱に縣を設けたのである。光緒三十四年より民國三年府制が廢せられるまでは、朝陽府に屬してゐた。康德元年の省制により現在熱河省に屬し、建平縣と稱してゐたが、康德七年一月より縣名を廢し喀喇沁右旗と稱してゐる。

地勢

南部に山岳が多く、吐默特右旗、喀喇沁左旗の境をなし、西は喀喇沁中旗、翁牛特右旗に境し、東北はすべて、敖漢旗に接して居る。

南部は殊に山岳が多く、平野は老哈河の流域であるが上流地方は山地が多く、葉峰線の通過する地帯も一帯に、山地が多い。山はすべて禿山でわづかに滿洲建國後植樹したかと思はれる樹木がまばらに生えてゐる部分もある。北部は概ね砂地で地味瘦薄である。かゝる有樣で一旦降雨あれば、急峻なる山岳地帯から一齊に雨水合流して老哈河に迫り水量にはかに增し洪水となる。

縣の物産

農產の主なるものは粟、高粱、黍子、蕎麥等、牛、豚、緬羊、山羊等の飼育が盛である。金鑛出願せられたるもの八、金銀鑛二、其他石灰岩、石炭等あり、商業はあまり振はない。建平の雜貨商、地方の鹽業にやゝ資本が投ぜられて居る。工業の見るべきものもない。

都邑建平村

旗の中央稍南部に位し、赤峰、朝陽間の要路、海拔四百八十米である。東北部に老哈河の支流である崩河が北流し、四周丘陵を以つて圍まれて居る。光緒三十三年住民によつて縣城が工築せられたのである。

大同二年、朝陽、赤峰間の國道建設成り、總局バス直營せられ遠く林西に及び、又建平を中心に旗內及び隣接旗に道路網構成され交通の中心を爲して居る。

縣公署設置と共に、漸次繁榮してゐたが奉直戰の爲め著しく衰微してゐた。建國後頓に發達し、奉天

錦州、朝陽方面より、布絲類、加工食料品、日用雜貨等を移入し、穀類、羊毛皮等を移出し、商業活況を呈して居る。

建平諸機關

喀喇沁右旗公署	警察署	税捐局	興農合作社
郵政局	區法院	承審處	電報局
電話局	協和會	崇正(農科)國民高等學校(省立)	
滿人小學校	鐵道總局自動車營業所	崇正學院(旗立)	民衆教育館
寺廟(三)	勞工協會出張所		

葉柏樹

旗の南端に位し、朝陽、凌源間の要路に當り、南部に牛河東流し、附近は土地豐沃、樹木繁茂し、東南部は山岳に圍まれて居る。葉柏樹の村は旣に乾隆の頃に起源して居る。今より百餘年前に、此の淋しい村に山西の商人が來て燒鍋を經營し、傍ら質屋業を開いて以來、次第に人の往來する樣になり、當時から每月五日市が開かれ、民國の當初には十二、三の商家が開かれ、半農、半商の平和な村となつて居た。然し奉直戰の兵禍は此平和村を全く破壞し、人口わづかに百人しか殘つて居ない程になつた。滿洲建國當時の熱河聖戰は此町に異狀の活氣をもたらし、現在三十餘の商店開かれ、赤峰、承德に至る鐵道の交叉點となり、熱河に於ける交通の要衝を爲して居る。最近都市計畫の實施を見やうといふ程に發展した。商取引も盛に、其商業勢力範圍も次第に擴張されて居る。日用品の移入、羊毛皮、穀類、杏、梨、沙棗、鷄卵等の移出を爲して居るが、其取引先は移出入共、朝陽、北票、營口方面である。每月二・五・八の日に市場が開かれ、近鄕から參集するもの三千人の多きに及ぶと。

葉柏樹諸機關

警察署	税捐局分所	郵政局	電報局

電話局	專賣局	國際運輸	阿片專賣公署
小學校	日本人小學校		

黑水

縣の西部、建平の西方九十滿里、朝陽、赤峰間の要路に當り、西方近く、老哈河北流し此を縣境として翁牛特右旗に入る。

乾隆時代に寧城縣人が、喀喇沁王府の許可を得て此の地を耕地とし小作人をして耕地せしめたのが此地の起源である。此地に黑水の湧き出づる處があるので其名を生じたといふ。

乾隆の終りに山西の商人が來て燒鍋兼金融業を營んだのが始めであつたが、光緒二十五年頃は著しく盛となつて居たが兵匪に會つて衰微し、建國後康德に入つて隆盛となり、現在三十餘の商店を數へて居る毎月一・四・七の日に開市、近郷の參集するもの五千を數へる。附近には部落が少い。

其他

警察署所在地	黑水	公爺府	旺業甸	七家村
	喀喇沁右旗			
稅捐局分所所在地	黑水	硃碌科	公爺府	
郵政局所在地	楡樹林	硃碌科	房身	魁德素
	錫伯河子	旺業甸	公爺府	二十家子
	馬廠	二龍	美林溝	黑水
	古山	張家窩堡	大哈拉道口	乃林
	西橋	上燒鍋	樓子店	上瓦房

資料　概史

按擔溝

題　　名	書名・發行所		發行年月
建平縣調査概要…………同　表　題	縣公署警務局		康、二、四
建　平　縣……………熱河省縣旗事情	民　政　部		康、二、四
建　平　縣……………滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局		昭、一〇、二
建平縣康德四年度産業五ヶ年計畫實施計畫……同　表　題	縣　公　署		康、四、三
康德五年度建平縣財務局施政計畫……南　嶺(四九)	大同學院		康、五、四
建平縣實業各項統計表(四年十二月末)………同　表　題	縣　公　署		康、四、一二

翁牛特右旗（もとの赤峰縣）

支那北魏時代は、庫莫奚地であり、隋、唐時代は契丹の地であつた。遼、金、の時代に至る迄は、西剌木倫、及老哈河の沿岸を中心として赤峰附近には東部内蒙古各地と同樣、東胡、匈奴、突厥、契丹、女眞及東胡の別種族たる鮮卑烏桓人其他の遊牧蒙古種族居住し、就中契丹文化の遺跡を今尚止めて居る元の時代は蒙古民族の支配下にあつたが、明の天元二十年元の順帝を塞外に追つて以來明の屬領となつたのであるが、後棄てゝ顧みない樣になつて以來は、蒙古人の支配する所となつた。清朝の太祖統一するに及び、東四盟、西二盟の會盟を分つて理藩院をして之を統治せしめたのであつたが、赤峰は右東四盟の中昭烏達盟翁牛特部に屬して居つた。順治元年遼東開墾招民令を出し、漢人の蒙古開墾を奬勵した爲、漢人の熱河に移住する者多く、蒙古王公旗民の土地を侵剝して農耕に從事したるにより牧地は荒廢に歸した。雍正元年改めて滿洲八旗を分駐せしめ、漢人の叛亂に備ふると共に、北方スラブ人の南下に

備へしめたのであつたが、雍正元年より二年の山東地方の大飢饉は漢人の熱河流入となり禁止したるも遂に其進入を阻止する事は出來なかつた。乾隆三十九年八溝廳の北を割して烏蘭哈達廳を設け、理事通判を置き、翁牛特左、右兩旗及巴林旗を管轄せしめ、同四十三年烏蘭哈達（蒙古語にて烏蘭は赤、哈達は峰）の字義により赤峰縣と改め、通判を縣知事に任じ承德廳に屬せしめた。之が赤峰の名の起つた所以である。

乾隆末期に於ては旗內漢人移民二萬二千を越え、蒙古人は漢人の壓迫を受け漸次北方興安省內へ追はれ、樹木は伐採せられて牧地は農耕地と化して行つたのである。

民國となつて以來、北方蒙匪、軍閥等に苦しめられ、十一年の奉直戰には縣城は兵火に罹り、湯玉麟軍閥の强制徵收により、民衆は困憊の極に達したのである。滿洲事變後、熱河討伐隊起さるるや昭和八年三月二日、茂木部隊入城以來熱河各地平定せられ、滿洲國に編入せらるるに及び、縣公署、日本領事館、（大正六年二月開設）軍隊機關等協力し、治安維持會を組織して以來治安平穩に歸し、人民も漸次歸還して市民安居樂業の惠を受ける樣になつた。（日本領事館は現在廢止）

康德二年十二月葉峰線本營業開始せられて以來は物資移動活潑になり、經濟狀況一變し、北は興安西省、西は察哈爾方面をひかへ、多分の將來性を有して居り、赤峰は熱河に於てむしろ承德よりも經濟の中心であると云はれて居る。

地勢

一般に山地多く西は圍場縣に接して山岳重疊し、英金川（老哈河の支流）の支流が五、六東に並び流れて沿岸に夾長なる平野を擁して居る。南は山岳を以て喀喇沁旗に接し、昆布川南方より北流し來り英金川に合流するあたり、此處に赤峰の平野が開けて居り、其中心に赤峰が位して居る。

東は山脈を以つて建平の野に境し、東北には樹桐を中心とする廣野があつて、疎林地帶を爲して居る。

旗の物産

翁牛特右旗の物産は農畜産を以つて主とするが特に、阿片、甘草等の特産がある。

普通農作物は、粟、高粱、小麥、大豆、雜穀を主とし、農家の副業として採取される甘草は、喀喇沁右旗と共に全滿一位を占め、全部野生のものを採取するのであるが、甘草エキス分に最も富んで居る點に於て優秀である。年額百五十萬斤を越え、滿蒙興業株式會社、赤峰工場に於て盛に甘草エキスを作製し、大連より日本に輸出して居る。

阿片は農産の第一位を占めて居る。他種農作物より收益多く、且つ土地が最も其栽培に適して居る爲め又、從來財源捻出策として奬勵し來つたものであるからである。滿洲國政府は保健國策遂行上之が禁止を企圖して居るのであるが、遽に阿片に代る可き以上收益的な農産を與ふる事も出來ず、これが急なる禁止は熱河全體に渉つて農業上の大恐慌を來す故に、現在では栽培面積を指定して居るが、北部熱河に於ては南部よりも作付良好であつて、熱河省全體に於て實際作付は七、五〇〇頃に及んで居る。

熱河省中當旗は最も優秀なる阿片の産地であつて特等品又は一等品のみである。

滿洲國政府は國策として阿片吸飲を漸次禁止し、將來は阿片吸飲を斷滅せんとして居るのであるが急激なる禁止は現在實行し難く、北滿の方は阿片栽培を禁止して熱河集中策を取り政府の專賣として之を取扱つて居る。

藥草又赤峰附近に、野生するもの多種であるが、之を採取する者なく放任の狀態である。

畜産は赤峰附近に産出せらるるものは僅少であるが、赤峰が物資の集散市場である爲めに、東北方の部分のものが張家口、鄭家屯方面に出廻る外の附近各縣旗内のものは赤峰に集荷せられ、更に錦州方面

へ移出せられるのが普通となつてゐるから、集散の量は多量である。

生畜としては、牛、羊、驢、豚、馬等を主とし、緬羊皮、山羊皮、猾子皮、羔子皮、緬羊毛、山羊毛猪毛等の產出がある。

本縣は又鑛產に就き有望視されて居るが未だ專問調查行はれず、分布狀況不明である。旣に發見せられたるものに、炭鑛二十五、金鑛十五、硝石一、銀鑛四、硫黃一、硅石一、オイルセール一がある。現に採掘中のものは炭鑛十、金鑛一であつて、石炭が最も豐富である。元來蒙地に於ける鑛業は地表の大部分が黃土や砂礫に被はれ鑛脈の露出するものなく、且つ蒙古人は鑛業に對する觀念を有せず、地表の堀開に對し、深い迷信を持つて居る爲めに優良鑛山が發見されない狀態にある。

林業は振はず。樹木は悉く伐採され禿山多く公署に於ては植樹の奬勵、森林保護に努力してゐる。十五箇年後には禿山は綠化する豫定である。

都邑赤峰街

赤峰は北緯四十二度、赤峰平野の中心にある。東北は開魯に北は烏丹城を經て林西、大板上に西は圍場、多倫方面に南は承德、葉柏樹方面に通じ交通の中心を爲し、熱河省內に於て經濟の中心は承德をしのいで赤峰である。

市街の東北にある赤峰山より其名起り、水流淸き英金河に臨んで居る。

市城は城壁を有してゐないが東西南北に城門あり市街の中央を縱貫せる西横街が殷盛區であつてその中央に、日本軍熱河入城記念碑が建てられて居る。旗公署、街公所、商工公會等も此街にある。

市中の住民は滿人(漢)、蒙人、日人、鮮人それに少數の白人も居り、種々な人種の集中して居る街である。赤峰は從來も商業の中心地であつたが葉峰線の開通後は俄然活氣を增し、農畜產の集中、移出雜

貨の輸移入行はれ、殊に滿人商人の商況は活潑となつて來てゐる。商業を營む滿人店舗は一千二百餘を算し、資本金一萬以上のもの二十以上である。赤峰の特產物取扱商は毛皮、農產等を殆ど未加工の儘移出入し、特產商以外の販賣業者は一般加工製品を、奉天、大連、營口、錦州方面より仕入れ市中及び其附近に販賣する外、林西、經棚、圍場等の背後地へ移出して居る。而して各商店共概して牢固たる地盤を有し互に相侵さず、夫々相當の取引を爲して居る。赤峰商人の經濟的底力は相當に強いものを有して居る。

工業は滿電の赤峰支店の電業、滿蒙興業株式會社赤峰支店の甘草エキス製造は其主なるものである。製油、燒鍋(燒酒)、製粉、絨氈、皮革加工等、家內工業の域を脫しないが、四十四、五工場を數へて居る。

赤峰街諸機關

金融機關として、中銀及興銀支店、金融合作社、農事合作社あり、尙質店、糧棧等がある。

翁牛特右旗公署	警察署	稅捐局	專賣局
商工公會	赤峰地方法院	地方檢察廳	區法院
區檢察廳	郵政局	電報局	電話局
興農合作社	中銀支行	興銀出張所	大興公司
國際運輸	協和會	電業營業所	街公所
赤峰(農科)國民高等學校(省立)		滿人小學校	日本人小學校
滿蒙興業株式會社	赤峰長途汽車公司(合名)	世和公司(合名)	生活必需品會社配給所
勞工協會出張所			

其他

警察署所在地	老府	大廟	官地	建昌營	
郵政局所在地	猴頭溝	大廟	初頭朗	建昌營	六分地

資料

題名（筆者）	書名	發行所	發行年月日
赤峰事情（北條太洋）	熱河	新光社	昭、八、九
赤峰（日本外事協會）	滿洲帝國總覽	三省堂	昭、九、六
赤峰事情（仲摩照久）	世界知識增刊 熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、五
赤峰縣	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
躍進赤峰の全貌	金融合作社（二の八）	金融合作社聯合會	康、三、八
赤峰縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
赤峰に於ける所謂牙店牙紀なるものに對する一考察（小原一）	國稅（二の二）	財政部	康、三、一
赤峰地方特産物産出及取扱狀況（昭和十年度）	海外經濟事情（一の二〇）	外務省通商局	昭、一一、一〇
赤峰に於ける燃料需給狀況	外務省通商局日報（一〇一）	外務省通商局	昭、一一、五、五
赤峰事情	同表題	赤峰日本領事館	昭、一二、二
赤峰より東翁牛特王府へ	旅行滿洲（五の二）	ビューロー	昭、一三、二
赤峰邦人經營各種業者	諸外國の貿易關係業者其他	通商局	昭、一三、六
赤峰縣全圖	同表題	縣公署	康、四、一
赤峰保略圖	同表題	同前	康、五、八
赤峰縣日滿各機關團體一覽表	同表題	同前	康、五、八
産業關係資料	同表題	同前	康、五、七
赤峰縣經濟事情	金融合作社管內經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、一二

翁牛特左旗（もとの烏丹縣）

歴史

明時代當旗は元室宗家察哈爾に隷屬して居たが、遜杜稜の代に、察哈爾林丹汗の虐政に堪えず、天總六年部屬を率ひて右旗始祚棟岱青（伯父）と共に淸の太宗に投降した。淸朝は崇德元年勅を以て所部を三十八佐領に編成し、遜杜稜を扎薩克に任命した。且つ多羅杜稜郡王爵を授け世襲罔替の恩典を與へた、後、當旗の扎薩克は過失により貝勒爵に降爵せしめられたが、民國樹立に就て功があつた爲、民國三年再び郡王爵に改められた。

建國後興安西省内であつたが後、翁牛特右旗と共に赤峰縣に編入せられ、康德四年七月更に別れて烏丹縣を構成してゐたのであるが、康德七年一月より縣名を廢し、翁牛特左旗となつた。

地勢

本旗は北部及び西北は當根爾嘎回を以つて、興安西省、克什克騰及び林西縣、巴林右翼旗等に境し、南部は、翁牛特右旗及び敖漢旗に接して居る。

烏丹城の附近を流れる陳士坡河は、本旗の西蔓甸子を水源地と爲し、烏丹城南東を流れて東し西爾木倫（遼河上流）に流入す。

旗の物産

農畜を以つて主業としてゐるが、小麥、粟、大豆、高粱等が主なるものである。産出高は全般に極めて少なく、畜産の方が主となつてゐる。生畜は、羊、牛、豚が主で、それに伴ふ綿羊皮、山羊皮皮、山羊仔皮、綿羊毛、山羊毛等、何れも主として赤峰に出廻る。

都邑烏丹城

烏丹城は元代魯王の封地で全寧路の首府である。赤峰の北方百二十粁、光緒二十四年、赤峰州の分州として州判を置かれ、民國二年之を改めて警察事務所とし、最近に至つたものである。蒙古名を波羅河

屯(ハラホートン)と稱する。波羅は青黑または紫色であるため烏丹の名はこれより出でたといつて居る。

光緒二十年前後には商家僅かに十四五軒であつたといはれて居るが、赤峰の發達に伴ひ最北に於ける蒙古貿易の市場として繁昌して居る。家畜の市場、出撥子(牛商隊)の根據地、甘草の集散地として一市場を成して居る。又絨氈の製造が盛で其品質良好な事に於て知られて居る。貨物集散の主なるものは、羊毛羊皮、牛皮、馬皮、獺子皮、狐狸皮、牛、馬、羊、甘草、葉煙草、其他、雜貨、布類等で、赤峰、林西間の要路であり、相當の繁榮を見せて居る。

烏丹城諸機關

翁牛特左旗公署	警察署	稅捐局分局	郵政局
電報局	興農合作社	國際運輸	電話局

其他

聯歡	廣德公	王府	海蘇廟

警察署所在地

新廟　査干套海

資料

題名	書名	發行所	發行年月
烏丹城事情	蒙古地誌(中卷)	富山房	大正八、一二
烏丹城事情	世界知識増刊 熱河討伐及熱河事情	世界知識社	昭、八、五
翁牛特部	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
翁牛特部調査報告書	同 表題	熱河省公署	康、元、一二
翁牛特左翼旗行政區劃に關する呈請の件	同 表題	旗公署	同
東翁牛特旗事情	同 表題	興安總署調査科	康、元、一一
東翁牛特旗事情	滿鐵調査月報(一四の九)	滿鐵	昭、九、九

沿革

地勢

敖漢旗（もとの新惠縣）

康德四年七月新縣を設置し新惠縣と稱してゐたが、康德七年一月より縣名を廢し旗名をとつて敖漢旗と稱する事になつた。敖漢旗は主として蒙古民族の居住する地帶であつて、敖漢三旗の地である。契漢部は光緒末年まで一部一旗であつたが、宣統元年以降、敖漢左右兩旗及南旗の三旗に分れて居た。元朝時代には魯王の分地であつたが明朝に至り始めて純然たる元朝子孫の領土となり、宗家察哈爾より統治者として一族を派遣した。岱靑杜稜の時代に所部を契漢と稱し、其長子次子何れも察哈爾に隷屬してゐたが、淸朝に至り、虐待を避けて淸朝に降し、次子の卓里克圖の方は契漢部の舊牧地を與へられてゐた。後長子も此所に來り寄寓し、順治五年征明の功に依り、多羅郡王爵を授けられ、世襲の天恩に浴し、閒散郡王として續いてゐた。宣統元年契漢右旗を分樹した。契漢南旗の旗長は左旗より分れ分家と同時に世襲を授けられたのであるがそれは乾隆十一年コムボの時代であつた。以上三旗を契漢部としてゐたのであつたが、滿洲建國以來建平縣に併合せられてゐたが、漢族の大部を占める建平南部と北部契漢の地は事情を異にする點が多く、康德四年分離して、新惠縣とせられたのであつたが、七年再び敖漢旗と稱する事になつた。

南は卓索圖盟に圍繞され、西北は翁牛特左旗に東は奈曼旗に接し、東南は吐默特中旗に西南は喀喇沁右旗に接してゐる。南部に陰山支脈連亙し、南方淩河と北方老哈河本流に對する分水嶺をなし、老哈河は南より北に、本旗の西部を縱貫し沿岸は肥沃なる平原を爲して居る。東方奈曼との接壤地帶及び北西方翁牛特左旗の接壤地帶の大部は砂丘地帶を爲して居る。

旗の物産

老哈河以南の雜居地帶の住民、及び蒙古人の生業は、凡て農耕を生業とし、高粱、粟、迷子、蕎麥、豆類等を產出するが、僅に自分等の食用とするに過ぎず、老哈河以北及沙漠地帶に住む住民は、農牧或は純牧に依つて生計して居る。

これらの住民は春季出でて、圓形耕種を爲し蒔放しとして秋收穫物を運送して歸來する者が多い。この種地を漫撒地と稱して居る。

生畜數も相當に有してゐたが民國成立以來、官兵、匪賊等の計畫的掠奪に遭ひ十分の一位に減少し僅少である。

都邑菜園子（新惠）

敖漢旗公署所在地乾隆時代、漢蒙雜居して、野菜の栽培盛に行はれた事に因んで名が生れた。光緒年間燒鍋が始められて以來商賣が始まり、民國七年から十三年迄は大いに繁榮してゐたが奉直戰に會つて衰微した。滿洲建國以來頓に活氣を呈し、雨期を除く他建平より自動車を通じてゐる。商品取引は北票朝陽であつて布類、加工食糧品、日用品等を移入し、羊毛皮を主として移出する。

菜園子諸機關

敖漢旗公署　警察署　税捐局分所　郵政局
承審處　興農合作社
其他

警察署所在地

四家子　貝子府　小河沿　下窪

税捐局分所所在地

下窪街　小河沿街　金廠溝梁鎭

郵政局所在地

哈拉道口　四家子鎭　三官營子　貝子府
金廠溝梁　下窪鎭　小河沿　四德堂

資料

題名	書名	發行所	發行年月
放漢三旗	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
放漢部(三旗)調査報告	同　表題	熱河省公署	康、元、四
熱河省に於ける蒙旗問題(成田尭)	中衛	滿洲中央銀行	康、二、一一
熱河省蒙旗の概要(及川三男)	民政部調査月報(二の一)	民政部	康、四、一

興安四省

興安西省內各旗縣

概史

興安西、南、東、北省

興安西省

興安西省は昭烏達盟中の敖漢部及翁牛特左右兩旗を除いた地域である。興安西省の前身とも見るべき昭烏達盟各旗は、何れも成吉思汗の子弟を祖先とし、封建扎薩克王國を形成してゐたが、元、明、清の三朝、消長幾變轉を經て、民國に入つたのであるが、清朝末期より活潑となつた漢民族移民は蒙古人の生活に脅威を與へ、遂に蒙古人は奥地に敗退せざるを得なくなつた。漢人が入つて以來土地は侵略せられ、行政的には此等の漢人に對する行政の必要となつて、縣治の設置を見るに至つたのである。始めは人に對する行政であつたが後遂には土地に對する行政となり、扎薩克の封建勢力は漸次蠶食せられ衰退の一路を辿る運命になつて行つた。即ち光緒三十四年開魯、林西兩縣の設置を見たのが始めてゞ、經棚、綏東、赤峰、林東、魯北の縣治、又は設治局が相次で設けられ、從來の封建勢力地域は、一面に縣行政に依つて侵蝕せられつゝあつた時、滿洲事變が起つたわけである。

滿洲建國になつてから、對蒙行政は、實質上根本的變革が加へられ、大同二年熱河肅正成るに及んで興安西分省が設置せられ、次で康德元年十二月省制改革と同時に、區劃に幾分の變更を見て興安西省と成つた。而して一方建國後漸次蒙旗確立の方針に則り、蒙古包稀薄なる開魯、林西兩縣を除く外總て縣治を廢止して旗制を施行した。康德四年、南部の翁牛特左翼旗の分を裂き烏丹縣として熱河省に編入された。

扎魯特旗　阿魯科爾沁旗　巴林右翼旗　巴林左翼旗

克什克騰旗　林西縣　奈曼旗　開魯縣

各縣旗別面積人口（康德五年末）

縣旗名	面積（平方粁）	人口
扎魯特旗	一二、八〇四、九六六	二一、六一三人
阿魯科爾沁旗	一四、七〇八、二七五	六六、六五四人
巴林左翼旗	八、六九九、四〇六	四七、二五八人
巴林右翼旗	五、二〇一、七〇七	四二、八八三人
克什克騰旗	一七、五六八、二一七	九二、六一三人
奈曼旗	一〇、四五一、〇七〇	一四二、一七三人
林西縣	三、一四三、九四三	七七、七一三人
開魯縣	二、一六六、五七九	九〇、八八三人
合計	七四、七四四、一六三	五八一、七九〇人

地勢

省の東部及東北部は興安南省に境し、南部は殆ど熱河省を以て隣接し、わづかに奈曼旗の一部が錦州省に接觸してゐるのみ、西及西北の境界は蒙疆察哈爾と長い國境線を畫いて居る。

興安嶺は西省の西北部及西部方面迄延長し、標高千五百米より二千米に達する山岳重疊として連り、漸次東北部に向つて平原が開けて居る。即ち克什克騰旗林西縣は殆ど山岳地帶をなし、巴林左右兩翼旗又殆ど山地帶が多く扎魯特旗、奈曼旗の方が平原になつてゐる。然しその平原地帶は沙漠地帶が多く、開魯及其北方は稍耕地を有して居るが、西喇木倫の南方平原地帶は殆ど沙漠地帶、草原地帶をなして居る。西遼河卽ち、西喇木倫は省の西端に源を發して省の南部を横斷し、更に其支流老哈河は熱河より來つて、開魯の西南方にて合流し、通遼方面に至り、後東遼河と合して遼河を爲す。新開河は西喇木倫の上流方面にて同河より分流し、北方を殆ど平行に東流して再び西喇木倫に合流して遼河を形成して居る。

省內產業

ウルジムロン河、ブクン河、白音他拉河は何れも內陸河であつて、或は小湖に流入し或は其流れ行く處を知らずといふ狀態である。

西境索哈爾との間に達里諾爾と稱する大湖があり其他省內無數の大小湖がある。

省內の產業は牧畜を第一とし農業之に次ぐ。元來牧畜は蒙古人の生業であつて、現今漢人の爲めに其牧場を狹められては居るが、西省の北部は尙純牧地帶であつて廣漠たる草原を天惠の牧野とし、家畜を伴侶として悠々生計を營んで居る蒙古人が居住してゐる。又一般農業に從事してゐる者も蒙古人で家畜を飼養しないものは殆どない。

頭數を最も多く有して居る地方は、巴林右翼旗、阿爾科爾沁旗、克什克騰旗で興安省中駱駝の飼養は北省と西省が主である。

次に農業は、西喇木倫流域以北平原各地へ耕地散在し、蒙漢人が農業に從事して居る。作物の主たるものは粟、蕎麥、瓜子兒、高粱、大豆等であつて、林西克什克騰旗地方に於ては麥(燕麥)小麥等も栽培され、罌粟は開魯、林西、魯北、天山、林東、經棚の各地方至る處に於て栽培されて居る。

林業、西省は、北省東省の如く密林地と稱すべきものなく、粗林地及散生地が他に比し極少面積有してゐる。山地は多いが森林と見らるべきものが少ない。

鑛業、鑛產資源に就ては調査が十分でない。只扎賚特右翼旗に炭坑があり、巴林左翼旗に鐵鑛がある模樣である。

達里諾爾は周圍約六十粁、古來漁獲の豐富な事で有名である。例年五、六月に至れば各地より雲集する漁業者が、湖澤の周圍に天幕をはり、漁獵に從事する。魚種は主として鯿魚及鵜子魚であつて、乾魚

都邑開魯

として多倫諸爾、經棚、林西方面の市場に販出されるが漁獲高は判然しない。又達拉干諸爾に於ても漁業が營まれて居る。

往時奉天より東部內蒙古に通商する爲めには、通遼と小庫倫が漢人の根據地で、行商人たる出撥子は此等の地を通じて交易し、蒙古物產も亦此等の地を通じて搬出せられたが、漢人の侵入と蒙古人居住圏の後退とは根據地の前進に迫られ遂に通遼から開魯に進出した。光緒三十四年縣治を興された當時すでに三千人の人口を有してゐたといふ。開魯とは魯即ち蠻土を開發する意味であると。

大同二年四月興安西分省公署が置かれ、康德元年末西省と改められて省公署は大板上に移される事になつたが、大板上に、公署建築物其他の準備成るまで、當地に於て省公署の事務を執る事になり、現在も開魯にて執行してゐる(康德七年現在)。

南西刺木倫、北新開河の氾濫による堆積土によつて出來たる大平原によつて周圍を形成し、一木の目を遮るものもない。すぐ近くに砂丘が連つて居る。

縣城は高さ約二丈の土壁に圍まれた、九平方滿里の方形狀をなして居る。度々蒙古軍のために燒打、蹂躪の憂き目を見たが、民國十四年現築城を完成した。城內の家屋は近代式なものはなく泥家、又は泥屋根の家であるが、街は殷盛を極め、東、西大街は殊に繁榮し、糧棧大雜貨商舖莊等が盛である。

當地は通遼方面より興安西省方面に入る門戶であり又、四平街、朝陽、奉天方面への出口である。通遼林東方面にバスの交通あり、城內に、燒鍋、油坊、製粉、製革、鞣革、土器製造、煉瓦製造、絨氈、等の家內工業があり、商業は最も盛で、住民の八割四分は商業關係のものである事から、開魯の生命は商業である事が明かである。商取引は四平街奉天方面、西省一帶に及んでゐる。

卽ち蒙地の原料物資と、南滿の製品交換商業で、農產、畜產品を出し、織物、身廻品、茶、煙草、砂糖、燐寸、石油等の生活必需品を移入し移出するのである。

開魯諸機關

興安西省公署	開魯縣公署	警察署	稅捐局
商工公會	開魯地方法院	興農合作社聯合會	興農合作社(縣)
開魯地方檢察廳	區法院	區檢察廳	專賣局
郵政局	電報局	電話局	中銀支行
大興公司	國際運輸	糧穀會社出張所	協和會西省本部
開魯地方觀象所	開魯(農科)國民高等學校(省立)(第一、第二、二校)		滿人小學校
日本人小學校	縣立醫院	生活必需品會社支店	

大板上

大板上はチヤガムリン河の北岸にある。一小平地に位置し、住民は元來は蒙古人であるが、家屋はすべて支那式であり、喇嘛僧以外は農業及牧畜を業として居る。雜貨商の如きはすべてが漢人で蒙古人は商業には殆ど從事しない。

產物は農產品、甘草、家畜、毛皮類等である。平生はさほどの街でもないが開市の時は非常な繁榮を見せる。

大板上喇嘛廟會

大板上に、東西の二大喇嘛廟がある。何れも白堊丹壁の堂塔伽藍であつて、建築實に偉觀を呈する。而して兩廟に七百内外の喇嘛僧が居る。

本廟會は北方廿珠爾廟會と並稱されて來たもので、淸朝康熙帝御誕生の奉祝式典として起つたもので每年陰曆六月八日より十五日に至る八日間各旗寺廟の活佛及喇嘛僧數千名參集し、讀經及跳鬼を擧行し

以て其奉祝式典とする。旗民の老若男女は永久に誕生式典を禮拜奉祝せんが爲、遠く數百里の地より騎馬或は大車にて馳參じ、毎年盛大に擧行する樣になつた。

大板上定期市

此廟會の時には、國內蒙古はもとより遠く錫巴郭爾、察哈爾、烏蘭察布地方蒙古人及錦熱兩省及多倫張家口より遠くは北支漢人商人等來集する者延人員十數萬に及び、二ケ月間に涉る一大定期市を展開し其取引總額二十數萬圓に達するのである。而して、滿洲建國後は日本商品の紹介宣傳に多大の貢獻を爲し、日本商品も此定期市に進出するに至つて居る。

廟會と宣撫工作

民衆多數參集する機會を逸せず、巴林右翼旗公署を中心とし、興安局、弘報處、省公署協和會、滿鐵電々等各機關と連絡をとり日滿不可分關係を會衆に認識せしめ、滿洲建國の意義を徹底せしめ、更に他面最近に於ける對內外蒙古政策の見地より一層之が利用を重視し宣傳、宣撫工作に努力を拂つてゐる。その爲めに喇嘛跳舞、角力、賽馬、家畜市、商品市、家畜品評會、學童作品展覽會、活動寫眞、施藥施療等、盛大に開始し、廟會及、定期市の盛大を期して居る。

大板上諸機關

巴林左翼旗公署　稅捐局分所　警察署　專賣局
國際運輸　郵政局　興農合作社　大板上畜產學校(省立)
滿人小學校

林西

林西縣城である。東は開魯より南は赤峯より入る道がある。又北々西興安嶺を越ゆれば坦々たる草原眼を遮るものなく、察哈爾省に至る。察哈爾一帶に對する交易の門戶として北より南西に三つの都會がある。林西、多倫、張家口がそれであるが、多倫は、軍隊のために荒廢の憂目にあつた。

蒙古地帶の眞中にあつて林西には殆ど一人の蒙古人も居ないし縣內の蒙古人も一%にも滿たないとい

ふ事は不思議の感がする位であるが、全く林西縣及縣城は蒙古地帶にある漢人の縣である。行政上に於ても旗をなさず縣とせられて居る。察哈爾に對する滿洲國の唯一の咽喉、位置よろしきに反し、林西の貿易上の位置は上らず、張家口に殆ど奪はれてゐる理由は、數の觀念に乏しい蒙古人に對し、漢人のあまりに狡猾な、利己主義商賣に起因する。又、漢人は資本を大きく動かして、蒙古人の毛皮、皮革類を遠く滿洲内に輸入する方法を採らず、商業範圍が極めて狹小であつた事も原因して居る樣である。

林西諸機關	林西縣公署	警察署	稅捐局	專賣局
	郵政局	電報局	電話局	商工公會
	興農合作社	中銀支行	國際運輸	日本人小學校
林東諸機關	巴林左翼旗公署	警察署	稅捐局分局	專賣局
	郵政局	國際運輸	商工公會	興農合作社
經棚諸機關	克什克騰旗公署	警察署	稅捐局	專賣署
	郵政・局	電報局	電話局	
	國際運輸(大王廟にもあり)		商工公會	興農合作社
旗公署所在地	魯北(扎魯特旗)	崑都(阿魯科爾沁旗)	林東(巴林左翼旗)	大板上(巴林右翼旗)
	經棚(克什克騰旗)	奈曼王府(奈曼旗)		
警察署所在地	魯北	梅林廟	巨里墨	崑都
	查卜幹廟	林東	白塔子	大板上
	白音布統	林西(中部)	[illegible](北部)	小塔子(南部)

	經棚	胡盧諸爾	土城子	開魯
	金家店	陶官堡	扎藍營子	富通鎮
	双四台	奈曼王府(商工公會あり)	衙門營子	八仙筒
	大段			
税捐局分所所在地	査卜汗廟	土城子	八仙筒	土城子
郵政局所在地	大沁塔拉	道德營子	魯北	
	白音布統	五十家子	査布杆廟	崑都八仙洞
興農合作社所在地	開魯	林西	林東	大板上
	崑都	經棚	魯北	奈曼王府

資料

題名	書名	發行所	發行年月
興安西省各旗概況	蒙古時報(一一)	蒙政部	康、三、四
興安西省の貿易	善隣協會調査月報(四三)	善隣協會	昭、一〇、一二
巴林右翼旗全境地域圖	同表題	旗公署	康、三、—
大板上街市圖	同表題	巴林右翼旗公署	康、二、—
扎魯特旗産業開發計畫	同表題	旗公署	康、二、—
奈・曼・旗事情	同表題	興安總署	康、元、一一
奈曼旗事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、三、五
奈曼旗	熱河省縣旗事情	民政部	康、二、四
開魯縣經濟事情	同表題	滿洲中央銀行調査課	康、二、一二
開魯縣要覽	同表題	縣公署	康、元、六

概

史

開魯縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二
開魯に於ける商工資本（緒方篤太郎）	中衛（六）	滿洲中央銀行	康、二、九
開魯縣地圖	同表題	縣公署	康、三、一
林西縣一般狀況調査	同表題	林西縣公署	康、二、九
林西縣事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、二、一二
林西の展望	民政部月刊（二の五）	民政部	康、二、五
林西	熱河事情	滿洲文化協會	昭、八、三
林西縣經濟情況	察哈爾事情及各盟報告書	東亞產業協會	康、元、四
林西縣の農村情態	大亞細亞（三の二）	大亞細亞建設社	昭、一〇、二
林西縣義倉調計表	同表題	林西縣公署	康、三、九
林西縣城圖	同表題	同前	康、一、一〇
林西縣地圖	同表題	同前	康、二、一二
開魯縣現況	內務資料月刊（二の二）	內務局	康、五、二
林西の現狀	蒙古高原橫斷記	東亞考古學會	昭、一二、一〇
白塔子、林東	蒙古高原橫斷記	東亞考古學會	昭、一二、一〇
林西地方經濟概況	海外經濟事情（一三の九）	通商局	昭、一三、五
阿魯科爾沁旗行政概要	內務資料月刊（二の四）	內務局	康、五、四
大板上行記	觀光東亞	ビューロー	昭、一三、九
蒙古大板上に旅して	電々（四年九月）	電々會社	康、五、九

興安南省

興安南省の主體である科爾沁部六旗及扎賚特部一旗は建國前哲里木盟下にあつたものである。清朝が興つた時科爾沁部が先づ清に歸屬し、扎賚特部も亦歸屬して後、旗制を立て、扎薩克をおき旗長とし旗には一定の牧地を與へた。數旗乃至十數旗を合して會盟の處を定め、各旗を監督せしめたが南省は哲

里木盟下にあつた。事變當時の盟長は前蒙政部大臣、卽ち郭爾羅斯前旗齊親王であつた。滿洲事變が起つた時、蒙古人は一齊に舊軍閥の蹄鐵下より起ち上り、蹶起して蒙古の自治を宣布し、蒙古獨立の氣勢を上げた。昭和七年二月鄭家屯に會して、滿洲建國に合作する意志を明にし、建國宣言と共に、蒙旗地帶に特別行政施行を要望し、中央にては興安總署が創設せられたわけである。南分省にては當時鄭家屯に省公署を置いて居た。康德元年十二月省制改革の際、通遼縣及庫倫旗の編入を見、現在八旗一縣となつた同時に興安南省となり、康德二年九月一日に王爺廟に省公署を移轉し、現在に至つて居る。

地勢

境域、南省は滿洲國の略西部に位し、東は龍江省及奉天省に接し、西は興安西省及國境線を以て錫林果爾盟烏珠穆沁に連つて居る。南は錦州省に接し、北は興安東省及龍江省と境して居る。

地勢、本省の西北部は興安嶺の支脈縱横に起伏して山嶽地帶乃至高原地帶を形成し、漸次東南に向つて低下し、所謂一望千里の大平原地帶を出現して居る。大小の河川は本省を概ね東西に灌漑して居る。卽ち南部に、新開河、中南部に淸河、　河、西遼河、中北部に、歸流河、洮兒河最北部に、截爾河がある。

西北部丘陵地の谷間にある河成平原は地味肥沃であるが、秋期に霜害を蒙る事が屢々である。其他は砂地濕地が多いが、概して農耕に適してゐる。

南省内各旗縣名

科爾沁右翼前旗　科爾沁左翼前旗　科爾沁右翼中旗　科爾沁左翼中旗

科爾沁右翼後旗　科爾沁左翼後旗　庫倫旗　扎賚特旗

通遼縣　計、八旗一縣

省内の産業

各旗縣別面積人口（康德五年末）

旗縣名	面積（平方粁）	人口
科爾沁右翼前旗	一五、一九二、五三八	六五、〇四〇人
庫倫旗	二、二四九、七四一	五六、九四九人
科爾沁左翼前旗	二、八八二、五七九	一〇五、六三一人
科爾沁左翼後旗	七、七七一、〇二六	一〇六、一一二人
科爾沁左翼中旗	一九、五四三、〇七八	二〇三、六二〇人
科爾沁右翼中旗	一四、四七九、〇六二	六六、四六〇人
科爾沁右翼後旗	五、八六七、四六三	八、五八二人
札賚特旗	七、五四八、八七〇	六一、八二六人
通遼縣	三、四六七、一五八	一九四、八五六人
合計	七九、〇二一、五一五	八六九、〇七六人

農業、農耕に適した土地は多いが元來蒙古人は遊牧を事とする爲め、漢民族が移住して以來、漸く農地開墾が行はれたのである。農耕を習得したる一部蒙古人は半農半牧を營み、他のものは純牧地を求めて移住した。かゝる沿革により、本省内通遼縣及南部四旗には農耕多く行はれてゐるが、庫倫旗方面は土地痩薄砂漠地帶多く農耕に適しない。

北部四旗は山脈多く、土質砂礫を含んで、肥沃でないから、牧畜が行はれ、農民は半ばに充たぬ。南部は八割までが農民である。

主要農產物は高粱、粟、大豆、玉蜀黍で外に、蕎麥、大麻子、瓜子兒等の特用作がある。農耕法は原始的であり、産出の農産のみにては生活費に充て得ぬ事がある。

廣濶たる平原地帶は牧草少なからず、漢民族移住以前には唯一の生業であり、普通一戸に、牛、馬、緬

羊等合計百五、六十頭位所有してゐたものであるが、牧地は農地とせられ面積縮少し、蒙古人も亦農業に從事するに至つて、牧畜は次第に衰頽の一途をたどつてゐる。政府は興安各省蒙旗地帶を唯一の牧地とし畜產助長、牧地保護策を講じつゝある。

牛、豚が數に於て最も多く、馬、驢、綿羊、山羊、騾、駱駝等が飼育されて居る。家畜出廻の中心地は通遼と王爺廟であるが、通遼は從來よりの中心地で唯一の地であつたが、康德に入つてから、王爺廟に家畜市場を設け、屠畜場を設けてより最近これが一中心を爲すに至つたものである。蒙古人はこれらの家畜により種々の乳製品をつくつて居るが自家用で他に出す程ではない。

本省內は多年の濫伐と、山火により現在は何れも禿山となつて居り、蒙民は植樹の趣旨必要を十分に解するに至らず各旗によつて現在殖樹奬勵を行つて居る。洮兒河、歸流河の上流地域に、白楊、柞樹、楡樹等の疎林が殘存して居るにすぎない。

鑛業、鑛產埋藏有望と見られて居るが調査が出來てゐない。葛根廟附近及二龍索口附近に石炭が少し產出して居る。砂金、鐵鑛、赤褐鐵等ある模樣であるが詳細判明しない。

現境域內にては水產の見るべきものは殆どない。

都邑王爺廟街

白溫線沿線にあり、洮兒河と歸流河との合流點上流三角地域三粁に當り白城子より八二粁六。

清朝初め乾隆十一年時の旗長の弟が、清朝に貢を献上して科爾沁部を領有した。光緒十七年烏泰郡主が始めて洮兒河、夾心河の地を開墾せしめ、漢民族の入植となつたが、民國十二年までに屢々土地を開放した。民國二年に內蒙獨立運動を起して失敗し、王爺廟を砲擊せられ、大庫倫に逃れたが後許されて歸つた。民國十八年白城子に興安區屯墾公署を置き王爺廟は第一墾殖局の計畫により、蒙地開放の正當

手續もなく開放せられて街基の實施と、兵舍の建築が行はれたのであつた。滿洲事變の時その軍隊は逃亡したので、科爾沁右翼旗として旗公署を置き更に康德二年、鄭家屯より省公署を移轉し、南省の政治中心都市とした。白溫線の開通と共に蒙古地帶への入口として益々發達に向つて居る。

滿蒙農民は稀薄で農業に從事する者少く、生產物はわづかである。牧畜に從事し放牧を行つて居る。只半島人が水田二十萬地を借り受け、勸業公司の資金によつて水田開發をなし有望視されて居る。二十滿里乃至五十滿里の地方より農產の出廻りは小米、大豆、稻子、蕎麥、玉蜀黍等で其他杏仁、防風、其他の藥草等多く、羊皮、鹽等の出廻も見られる。

王爺廟なる名稱の發する王爺廟は約二百餘年前の建築にかゝるものであつたが、民國元年吳俊軍に燒却せられ、現在其一部を殘して居る。

王爺廟街諸機關

興安南省公署	科爾沁右翼前旗公署	警察署	稅捐局
高法院	高檢察廳	・郵政局	電報局
電話局	專賣局	興農合作社聯合會	興農合作社(旗)
中銀支行	師道訓練所	國際運輸	省立王爺廟農事試驗場
興安實業女學校	興安學院	日本人小學校	生活必需品會社支店

通遼街

通遼は一つに白音太來と稱し、達爾罕旗に屬して、もと、奉天省の管轄であつたが、滿洲國成立後の省改正と共に興安南省に含まれたのである。鄭家屯の西一一四粁、大虎山の北二五三粁、大鄭線の主要驛で周圍は一畔千里の平野となり、西遼河は其北方五滿里を流れ、南に其支流小清河を控えてゐる。元來放牧地であつたが、民國元年已に放荒局を設置して一般に開放せられ、七年通遼縣治が布かれた。

東蒙第一の肥沃の土地と稱せられ、農產豐かな開魯、林東、林西の諸縣に聯絡し、嶺南屯より、遠く陰山地方の蒙古各旗に交通し、市街は民國元年の建設に係り大小兩街基に分れて居る。現在指定街である。

民國十一年鄭家屯より鐵道開通するに及び急激なる發展を促進し、屢々水害に見舞はれ時々市況衰微するが、民國十七年三月打通線が開通して以來移民の誘致となり、海に距離の短縮を齎し、交通機關の完備と奥地の開發に伴ひ、特產市場として、又對蒙貿易の根據地として經濟的發展を囑望せられつゝある。鐵道開通後はむしろ鄭家屯の繁榮を奪つて居る形である。

高粱、大豆、其他豆類等の特產取引が行はれ其他に甘草の集散地として知られて居る。通遼に集るものは、開魯、通遼兩縣のもので、自然生育のものである。

通遼諸機關

通遼縣公署	警察署	稅捐局	專賣局
商工公會	通遼地方法院	通遼地方檢察廳	區法院
區檢察廳	郵政局	電報局	電話局
興農合作社	中銀支行	興銀出張所	大興公司(二)
國際運輸	通遼(農科)國民高等學校(省立)		通遼實業女學校(省立)
滿人小學校	日本人小學校	生活必需品會社配給所	

旗公署所在地

巴彥哈喇(扎賚特旗)　察爾森(科爾沁右翼後旗)　王爺廟(科爾沁右翼前旗)
代欽塔拉(科爾沁右翼中旗)巴彥塔拉(科爾沁左翼中旗)吉爾嘎朗圖塔拉(科爾沁左翼後旗)
後新秋(科爾沁左翼前旗)　庫倫(庫倫旗)

警察署所在地

巴彥哈喇　崗子屯　仁和屯　四品鎮

八拉各歹　勿不林加拉嘎　崗子套海　王爺廟
察爾森　哲愛里　代欽塔拉　高力板
吐列毛吐　巴彥塔拉　加嗎吐　他拉營子
衙門站　卓哩克圖　合伯吐　花胡碩
莊頭屯　吉爾嘎朗塔拉　公司五家子　布敦哈拉根
甘旗卡　章古台　東滿斗營子　通遼
胡家園子　餘糧堡　錢家店　梟力不皂
庫倫　火石嶺　白子屯　後新秋

郵政局所在地

王爺廟　通遼　大林（大興公司もあり）
八仙筒　庫倫旗　錢家店　高力板
葛根廟　甘旗卡　伊胡塔　晉德爾
索倫　綾哲秋　章古臺　百子屯
臥牛石　哈叭嘎　太平川　衙門臺
茂林

委託日本人小學校

一撮樹

電報局所在地

王爺廟　通遼　大林　庫倫旗
錢家店

電話局所在地

大林　庫倫旗　錢家店　王爺廟

學校所在地

通遼

東科中旗巴彥塔拉農業學校(省立)　西科中旗農業學校(旗立)　東科前旗農業學校(旗立)

興農合作社所在地

王爺廟　通遼　巴彥哈喇　察爾森

代欽塔拉　巴彥塔拉　吉爾嘎朗國塔拉　後新秋

庫倫

資料

題名	書名	發行所	發行年月
興安南省概覽	同表題	興安南省公署	康、二、—
懷遠鎭	四、齊、哈間鐵路案內	鐵路總局	康、元、四
科爾沁右翼前旗通志(柏原、濱田)	蒙古地誌(下)	富山房	大正八、一二
扎薩克國旗開墾沿革(同前)	同(中)	同前	同、
科爾沁右翼前旗	滿鐵調査月報(一三の八)	滿鐵	昭、八、八
王爺廟の經濟狀態	同前(一四の八)	同前	昭、九、八
王爺廟經濟概況	同前(一五の一〇)	同前	昭、一〇、一〇
錫埒圖庫倫旗事情	同表題	興安總署	康、元、一一
科爾沁左翼中旗第一區二貝子府屯	鄉村社會調査報告書記述編	統計處	康、三、六
科爾沁左翼中旗全圖	同表題	旗公署	康、三、—
扎賚特旗事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、四、二
通遼縣	滿洲國各縣視察報告	大同學院	大同、二、一一
通遼の現狀(衣目精一)	同表題	通遼貿易館	昭、一〇、一
通遼、錢家店、伊胡塔、甘旗卡商業狀況調査報告書	同表題	蒙政部勸業司	康、元、一〇
通遼縣	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵路總局	昭、一〇、二

通遼縣及縣内主要都市事情……奉山鐵路沿線及背後地經濟事情	鐵路總局	康、元、七
通遼縣下水産物需給と縣内主要都市事情……關東州水産會報	關東州水産會	昭、九、九
開魯・通遼……蒙古高原橫斷記	東亞考古學會	昭、一二、一〇
通遼縣經濟事情……金融合作社管内經濟事情	金融合作社聯合會	康、五、二

興安東省

清朝の初葉當地方に居住してゐた民族は、極少數の舊滿洲族、新滿洲族、伊徹族に車雅喇、瓜勒察、鄂倫春、畢拉爾族等であつた。當時又達爾斡族が、清朝に歸附して、嫩江附近に土着し、後盛京地方(今の奉天地方)より漢軍旗人等入境し來つて復雜なる民族關係となつた。

清朝駐防八旗、ネルチンスク條約後璦琿に黑龍江城を築き、將軍を常駐すると共に、當省地方には打牲部即ち、布特哈副都統なる駐防八旗が設けられ、達爾斡旗、索倫族、鄂倫春族より編成して居た。

布特哈九旗は康熙二十八年に、現莫力達瓦旗、布西北方約一里の宜臥奇に、總管公署を設けてこゝに總管を常駐せしめてゐた。後副都統制度とし、今の納河に移した。之等八旗兵の常住する地方は東は納河縣訥謨爾河上流德都より、西は大興安嶺背梁、北は墨爾根、東南西は富裕縣大登子科屯より上流の嫩江兩岸、同屯下流に於ては嫩江以西より索倫に至る地域であつた。その頃の索倫族、達爾斡族は清朝宗室の藩屏として重きを爲してゐたものであつた。然るに清朝末葉に及ぶに從つて開放せられたる漢民族の開墾と共に漢民族は之に代つて優勢になつて來たのである。

民國四年嫩江右岸、西布特哈白旗尼爾基に、衙基を建てゝ布西と改稱し、設治、放荒招墾の事務を開始し、同十四年始めて布西縣は創設せられた。其轄境は東嫩江によりて訥河縣と接し、西は阿倫河左岸

に至つて雅魯縣と境し、南は綽爾哈屯を迺つて龍江、甘南縣と界をなし北は甘河右岸に至つて嫩江縣に隣りして居た。當時、現在の甘南縣城は西布特哈に屬してゐた。

大同元年四月五日、興安分省公署官制公布され、興安四分省が出來た。興安東分省も其一つである。康德元年十二月一日、全國省制大改革行はれたる際に、興安各分省は興安各省となり、興安東省と改められたのである。而して中央行政機構は各分省の時代は、興安總署といひ、各省になつて蒙政部と改められ更に康德四年七月一日蒙政部は廢止せられて興安各省の中央機關は興安局に於て行はる丶事となつた

東省內各旗名

布特哈旗　阿榮旗　莫力達瓦旗　巴彥旗
喜扎嘎爾旗　以上五旗

旗別面積及人口（康德五年末）

旗名	面積（平方粁）	人口
布特哈旗	一九、五〇三	四八、八七五人
喜扎嘎爾旗	一二、〇八五	一二、五二五人
阿榮旗	一二、五五三	二三、七九八人
莫力達瓦旗	一五、九四三	二〇、三九一人
巴彥旗	四六、六六四	九、五八七人
合計	一〇六、七五一	一一五、一七六人

地勢

境域、本省は西北大興安嶺背梁を境として、興安北省と境し、西南の一部わづかに、外蒙の喀爾喀部に接し、東南は嫩江を挾んで、龍江省嫩江縣、訥河縣、富裕縣と相臨み、成吉思汗邊堡に依りて、興安南省扎特旗、科爾沁右翼後旗と接し、北は小興安嶺山頂を以て、黑河省漠河縣、呼瑪縣と堺してゐる。

大興安嶺を屋根として。略之を直角に派出して居る有名無名の山脈は、嫩江右岸に迫つて斷層面を露

省內產業狀況

し出或は成吉思汗邊堡附近に至つて起伏狀を呈し、全省境內山岳連亙して、その中間大小無數の河川は十數條の河川となり、河水は河谷一面に汎濫浸水する。最大の河は甘河で、大小興安嶺に源を發し、巴彥旗を貫き東南流して嫩江縣城にて嫩江に合流してゐる。河幅大水量多く流筏の便あり水源地方に原始林を控えてゐる。次に努敏河は大興安嶺に發し、甘河と同じく東南流して嫩江に合してゐる。源流地に原始林を有し、下流地方には豐沃なる三角洲を形成してゐる。

其他主なる三、四の河あり何れも同方向に流れるものが多いが、筏を流す程の便はない。

地質は灰色腐植土質で農耕に極めて適してゐるが、山地帶多く且つ表土淺く、利用されてゐる部分が面積に比して小である。

農業、本省は概ね山嶺地帶で、從來農產業の見るべきものが少ないが、建國以來の農國本位に添ふべく農民移民の積極的招致をなし、農業資源の開發着々と進捗してゐる。作付面積に於ても、康德元年度の二六、四七一晌が四年度には、五〇二〇六晌に增加し、未耕地二、四五一、〇〇〇晌を殘して居る狀態で今後の開發を期して居る。

農作物は玉蜀黍、大豆を第一とし、黍子、粟、小麥等で、高粱は極めて少ない。其他、煙草、線麻、蘇子、馬鈴薯等の特用農產がある。

其他甘草旗內至る處に產出し、農家經濟上重要なる位置を占めて居る。地楡、靑蒿、薄荷、益母草、遠志、蒼朮、白札、車前子等の種類である。

畜產業、從來農地であり、家畜は相當多數に飼養せられてゐたにちがひないが、年々頭數減じ、海拉爾方面より多少の移入を見てゐる位である。

牛、馬、豚を多とし、緬羊、驢、騾等も居るが數がよほど少い。他の興安各省と異り、畜産の生産地にあらずしてかへつて消費地の立場にある。然し、今後の畜産奬勵により大いに其數を增加するに足る條件を備へて居る。

狩獵、大興安嶺を有し山に住む狩獵家鄂倫春民族が居つて、狩獵をしてゐるが數の觀念に乏しく、實數を知る事は出來ないが灰鼠、黃鼠、兎、麅子、狐、狸、貂、猪、狼、鹿其他が市場に出廻つて居る。

林業、本省は滿洲國中最も有望なる森林地帶で、喜扎嘎爾旗南興安嶺より綽爾河に至る流域、莫力達瓦旗諸敏河流域より巴彥旗一帶に至る地帶を其主なるものとして期待されるところである。森林總面積六七〇萬陌、畜積量一、一六八、〇〇〇萬石と稱せられて居る。

樹種は滿洲ミヅラ、モノゴリナラ、ドロノキ、シラカンバ等であつて、又テウセンマツ、ダフリカ唐松等の針葉樹等も多く針葉樹は建築用材とし、ナラ類、シラカンバ等は薪材とする。國有林であつて現在では林野局の管理の下にあり、其森林收入康德四年度に二七六、九〇〇圓餘である。又、出材狀況は四年度に於て二三四、〇〇〇立方米、年々增産の傾向である。

鑛業、金、石炭の埋藏多いが、十分なる調査が進んでゐない。發見せられたるものは全省に涉り、金七、石炭四、螢石一、碾鑛石鑛一、陶土一、その中、金鑛三箇所採金會社によつて採掘せられて居り、扎蘭屯の石鑛は小量採掘して居る。

水産、嫩江流域に於て、鯉、鯽等の淡水魚を産し、年産八萬五千斤といはれ蒙古人が多く漁業に從事してゐる。

省内商工業は現在のところ不振の狀態である。

扎蘭屯

齊々哈爾の西北、濱洲線に沿ふ。附近に大興安嶺の支脈があり、清流雅魯河は西側を南流してゐる。地形的に惠まれ冬は概して暖く、新京と大差なく、最寒期に於ても零下三十度を越ゆる事は稀である。夏は極めて涼しく平均十八度位である。樹木に富み新綠の蔭、雅魚河の清流共に極樂境の感がある。風は概して少く雅魯河凍結は十一月下旬であり、避暑地、避寒地として絶好の地である。

當地は四百五十年前までは蒙古索倫族の一小部落に過ぎなかつたが、その後ずつと降つて、日露戰前鐵道開通となり西部線の繁榮策として、避暑地避寒地として諸種の設備を爲したために、次第に繁榮に赴いたのである。

現在は興安東公署の所在地であり、濱州線の主要なる都市である。附近の農産は少ないが、木材、薪及木炭の集散地である。

扎蘭屯諸機關

興安東省公署	布特哈旗公署	警察署	税捐局
商工公會	郵政局	電報局	電話局
中銀支行	營林署	扎蘭屯地方法院	扎蘭屯地方檢察廳
區法院	區檢察廳	協和會東省本部	扎蘭屯地方觀象所
糧穀會社出張所	扎蘭屯師道學校(省立)	扎蘭屯(農科)國民高等學校(省立)	
滿人小學校	日本人小學校	興農合作社聯合會	興農合作社(布特哈旗)
生活必需品會社支店			

布西諸機關

莫力達瓦旗公署	警察署	協和會	營林署分署
電報局	電話局	布西農業學校(省立)	滿人小學校

哈拉蘇

小部落で住民の大部分は薪運搬及販賣を生業として居る。薪用の樹種は主として松、樺、樫、柞等で雅魯河下流地方より馬車叉は牛車にて運搬する。

博克圖諸機關

警察署　稅捐局分局　郵政局　電報局
電話局　商工公會　國際運輸　營林署分署
日本人小學校　青年學校

索倫諸機關

喜扎嘎爾旗公署　警察署　郵政局　電報局
稅捐局　國際運輸　電話局　日本人小學校

旗公署所在地

和禮屯（巴彥旗）　布西（莫力達瓦旗）　紅花梁子（阿榮旗）　扎蘭屯（布特哈旗）
索倫（喜扎嘎爾旗）

警察署所在地

布西　扎蘭屯　博克圖　索倫
蘑茹氣　李屯　哈拉蘇　布西
雅魯　蒙古基　巴里木　成吉思汗

郵政局所在地

紅花梁子　李屯　哈拉蘇　布西
白狼

電報局所在地

額爾和　南興安（璦璦屯）　紅花梁子　布西
博克圖　索倫

電話局所在地

額爾和　紅花梁子　布西　博克圖
索倫

興農合作社所在地	和禮屯	布西	紅花樑子

資料

題名	書名	發行所	發行年月
西布特哈	黑龍江省（下）	滿鐵調査課	昭、二、一〇
布特哈旗に於ける蒙民共同開墾事務報告（佐藤晴夫）	滿洲行政（三の六）	滿洲行政學會	昭、一一、六
扎蘭屯の避暑山莊（香月尙）	旅行滿洲（三の七）	旅行滿洲社	昭、一一、七
扎蘭屯最近情況	同　表題	協和會呼倫貝爾地方事務局	康、二、一
扎蘭屯市街要圖	同　表題	布特哈旗公署	康、三、一二
喜禮嘎爾旗事情	同　表題	興安總署調査科	康、元、一〇
喜禮嘎爾旗一般狀況	滿鐵調査月報（一四の一〇）	滿鐵	昭、九、一〇
索倫概況	滿洲國有鐵道沿線及背後地各縣概況	鐵道總局	昭、一〇、二
索倫	四、齊哈間鐵路案內	鐵路總局	康、元、四
莫力達瓦旗產業調査報告（池尻登）	蒙古時報（三）	蒙政部	康、三、九
巴彥旗金礦地區概況	同　表題	巴彥旗公署	康、三、七
興安東省概觀	同　表題	興安東省公署	康、五、七
興安東省（佐藤定勝）	世界地理風俗大系（滿洲帝國篇）	新光社	昭、一二、一二
雪の興安省（白濕沿線記）	滿洲木材通信（一三〇）	滿洲木材通信	昭、一三、二

興安北省

概史

雍正の末期に、呼倫貝爾地方に移住し來つた新舊巴爾虎民族の最高統治機關として、海拉爾に呼倫貝爾副都統公署が設けられ、黑龍江將軍の隸下に屬してゐた。其後副都統なる官名は、副都統衙總管、副都統責任兵備道參領と數次改稱せられたが、民國元年副都統なる名稱復活し建國に及んだのである。由來

興安北省各旗名

呼倫貝爾地方の蒙古人は遊牧、狩獵を以て生業となす關係上、滿漢人とは自ら特殊なる行政を施行して來た。卽ち屬人的行政であつて、蒙古民族統治機關として副都統と相並び、滿漢人統治の爲には別に道尹を置き、旗制と相並び縣別施行せられて居た。現興安北省内の各旗名は大同元年、二年とそれぞれ區域及旗名を異にしてゐたが、康德元年十二月省制改革により更に康德二年十二月北滿特別區廢止せられて海拉爾及滿洲里は直接省公署の管下に置かれる事となつた。現在旗名左の如くである。

索倫旗　東新巴爾虎旗　西新巴爾虎旗　陳巴爾虎旗
額爾克納左翼旗　額爾克納右翼旗

各旗面積人口表（康德五年末）

旗名	面積(平方粁)	人口
索倫旗	三二、九一六	一四、九〇七人
新巴爾虎左翼旗	二七、三九五	一二、七九八人
新巴爾虎右翼旗	三〇、三七五	九、七九六人
陳巴爾虎旗	二〇、四六九	七、〇九四人
額爾克納左翼旗	二五、三八二	九、三八六人
額爾克納右翼旗	二三、八七五	四、〇八四人
滿洲里	—	六、三四七人
海拉爾市	—	二二、五一九人
合計	一六〇、三九五	八六、九三一人

地勢

東は大興安嶺山脈により興安東省及黑河省と境し、西北は額爾克納河を隔てゝ蘇聯と相對す。南は哈爾哈河及貝爾湖を以て外蒙に接壤し、西は自然的境界物なく全く陸續きに深く外蒙に突入してゐ。る境界線の約三分の二は蘇聯並に外蒙との國境線を成して居る。

北部の山嶽地帶東部の森林地帶を除けば殆ど大平原と謂ふ事が出來る。到る處牧草繁茂し、天與の放牧地帶である。

主なる河川は額爾克納河、哈爾哈河、海拉爾河、根河であつて、其他無數の小支流は、興安嶺に源を發し、額爾克納河、海拉爾河等に合流して居る。西部平原地帶に、呼倫湖、貝爾湖の二大湖水があつて烏爾順河が兩湖を連繫して居る。

省内の産業

（畜産）

畜産は本省産業の第一であつて省内到る處放牧に適し、蒙古人は悠々家畜と太陽と共に原始的生活を續けて居る。牛、羊、馬、駱駝、緬羊、等の飼育が非常に盛に行はれる。

畜産改良に努力し政府は海拉爾に種馬場を伊利克特に緬羊改良場を置き、馬、羊の改良增殖を圖つてゐる。近來蒙古人間にも、家畜改良增殖の必要を漸次自覺しつゝある爲、省内の畜産は省としても滿洲國家としても重要なる産業として見られる。

（農業）

管内三河地方に於ける白系露人の農業は、牧畜が主ではあるが成績見るべきものがある。小麥、燕麥等が主なる生産で、尚未耕地二十五萬陌を殘して居り、索倫旗、東新巴爾虎、陳巴の三旗に於ては旗營農場を設け蒙古人に對する農業の指導奬勵に力めて居る。

（林業）

大興安嶺山脈及伊敏河流域には、千古斧を入れない廣尨無限の大森林があり、之が推定面積五八七萬陌立木蓄積量推定六億四千五百七十萬立方米と見られて居る。樹種は主にダフリカカラマツ、及シラカンバであつて其他シベリヤアカマツ、ヤナギ類、テウセンヤマナラシ、ハンノキ類がある。

從來大興安嶺材は輸出市場と遠隔であつた爲め、生産材は殆ど大部分北滿鐵道用として消化されてゐたに過ぎないが、將來交通機關の完成と輸送運賃等の暖和により生産材の輸出も相當に期待されるであ

らう。殊にパルプ資源を大興安の森林に仰がんとする計畫もあり、將來林業は有望である。

海拉爾、伊利克特、哈倫阿爾山、三河の四箇所に營林署があつて、森林の保護、取締、植林の獎勵等に努めて居る。

（鑛業）

砂金、吉拉林以北の額爾克納支流に埋藏せられて居る砂金の採取は古くから行はれて居る。

石炭、扎賚諾爾に滿洲炭礦株式會社の經營に係る炭坑がある。熱量粘着力共に不良で、炭質が粗惡である。從つて、他の北滿の炭坑と對抗する事は出來ないであらうが、埋藏量の豐富なる事と、鐵道沿線である點に於て、將來西部北滿の工業發展に伴ひ有望と見られる。

（漁業）

呼倫湖、貝爾湖、烏爾順河等には魚族頗る豐富で、海拉爾、滿洲里兩市の需要を滿すのみならず、國內各地に供給して居る。魚類は鯉、鮒、を主とし鯰、白魚、狗魚、蝦等十種以上ある。其他鹽湖より鹽を、又曹達の產出も頗る豐富である。

都邑海拉爾市

位置、滿洲里の東南一八七粁、海拉爾河の支流伊敏河の左岸に位し、四圍傾斜の緩慢なる高地を以て繞されたる盆形的平野中にあつて大高原呼倫貝爾の中心地である。

沿革、海拉爾は金時代から戰爭の中心を爲し、呼倫城蒙古人（アンバン・ホト）の居住してゐた處である。市街の北方に往時の塞堡及城基の跡がある。

淸の統一により興安嶺附近の諸部落は悉く之に歸屬したから、最初族長をして此地方を統治せしめたが乾隆八年副都統を當地に置き之を管轄せしめ、光緒三三年巡撫を置き翌年呼倫道を設けた。

民國四年より九年まで、露國の援助の下に呼倫貝爾は自治を宣言してゐたが、之を取消し、呼倫道と改め道尹を置いてゐた。

海拉爾は呼倫貝爾と稱し、土人は現在でも一般に此名を用ひ、海拉爾は別名である。鐵道開通前迄は北蒙古の一部落にすぎなかつたが、鐵道開通後開け、日露戰爭後日支北京條約によつて、開市場となり蒙古貿易の樞要地となつた。

滿洲建國と同時に外國人の居住及貿易をも許し、西北部の大都市となり物資の集散地として今日に及んで居る。

建國後蘇炳文の事件あり在海拉爾日本人は窮地に陷つた。然し當時は日本人は少數であつた。

住民、人種が種々雜多である。滿人の多くは山東及山西人の漢族が多い。露人の中にも多くの人種を有し又一般に蒙古人と稱してゐる中にも、五、六種もある。その中達胡爾族は海拉爾建設當時齊々哈爾より移住して來たものである。

其他日本內地人、半島人等、人種が錯雜してゐる。

市街狀況、市街は蒙古色濃厚で新舊二部に分れて居る。新市街の北部は鐵道從業員の住宅地であり、南部は商業地區である。舊市街は海拉爾城內及城外で、新市街より約十町の地點にある。最も殷盛を極むる所は城內及東門外で、街路の兩側に商賈櫛比し、市況一般に活氣がある。然し新舊市街を問はず道路の修理なく塵埃を滿してゐる。商店街には、日、滿、露及蒙古の看板が目立ち特に、蒙古古文字が物珍らしい。一步郊外に出れば蒙古包及放牧地も見られ、乘馬にて自由に走驅する蒙古人及駱駝隊をも目擊せられ、蒙古色豐かな雄大なる景色に接する事が出來る。

商工業、農產の取引は少く、牛、馬、羊等の家畜類、毛皮の取引多く、鹽、曹達、乾草、及魚類(鯉、鮒)等の商業が行はれる。畜產及皮類は、甘珠爾廟方面及西南方より來集し、鹽はチオルブト湖より產

出する。
　當市は從來市に準ずるものとして、海拉爾鄉又は單に海拉爾と呼ばれてゐたが康德七年五月より市となり、海拉爾市となつたのである。

海拉爾市（南屯を含む）諸機關

興安北省公署	索倫旗公署（南屯）	警察廳	稅捐局
郵政局	電報局	電話局	商工公會
專賣局	海拉爾地方法院	海拉爾地方檢察廳	區法院
區檢察廳	中銀支行	興銀出張所	國際運輸
協和會北省本部	營林署（伊列克圖に分署あり）		電業出張所
糧穀會社出張所	市立醫院	北省官醫院	放送局
海拉爾第一及第三（農科）國民高等學校（省立）		海拉爾第二（商科）國民高等學校（省立）	
滿人小學校	日本人小學校	青年學校	
生活必需品會社支店及倉庫			

滿洲里街

　滿洲里は一名臚濱といひ、創設以來僅々三十年餘の歷史を有するに過ぎないが、其の間國旗が四國に亘つて取替へられた程、複雜多岐な行路を辿つて來たのである。
　商工業都市として發展したのは一八九九年より一九〇三年に至る東支鐵道建設期、及一九〇四年―一九一四年に至る移民期以後の事で、それ以前は蒙古名フルジイン、プラークと稱し、僅かに二、三包を有する遊牧地であつて、附近一帶はクラジヤと呼稱して居つたのである。露西亞の東漸は本市を重要なる據點とするに至り、日露戰爭時は兵站地として榮えたのであつた。後蘇支紛爭、蘇炳文事變の兵燹に市勢

衰退し、滿洲國建國により民心の定定を得たのであるが經濟的には振はない現狀である。

當市は北緯四九度三五分、滿洲國最西北端國境都市で、標高六百米、夏冬の二季で、最寒は零下五十度を突破し、極暑の候は最高四十度前後である。位置の關係上日出、日沒に相違著しく、十二月には午前七時半に日の出、午後四時日沒、夏季六月末には午前二時日の出、午後十時半日沒である。六月初旬西比利亞特有の强風が襲來する。水質よく風光雄大明媚。

當市は民族多種で、日本人、滿洲人、無國籍白系露人、蘇聯人、タタール人、ユダヤ人、其他、アルメニヤ人、ギリシヤ人、ポーランド人、グルジヤ人、オセチヤ人、リトワニヤ人等がある。これらの小民族は、東支鐵道敷設後商業移民として來たもので一時は相當數を有してゐたが。現在は極少數に過ぎない。

產業は農業方面では、蔬菜の栽培を主とし、又その加工等も行はれてゐる。水產は滿人、白系露人によつて行はれて居る。近くの烏拉松河、達來湖より、鯉魚、鯽魚、狗魚、小白魚其他を產する。畜產は附近は牧野地帶であるが、市としては振はない。

商業は、日滿、白露人によつて營まれ、全戶數二六一戶、雜貨酒類、飲食店、妓館、漁業商、理髮所等が數に於て多い。日用生活必需品は專ら移入に仰いで居る。

市街、市街地は鐵道線路の北側に後貝加爾鐵道の用地を取り、南側に鐵道從事員の社宅街を定められて居る。市街は線路の北側にあつて、規則正しく露西亞式に出來て居る。滿人露人の居住が多く一般の風習が露西亞式である。

日本領事館　郵政局　電話局　電報局

商工公會　稅捐局　稅關分關　中銀支行
區法院　區檢察廳　國際運輸　協和會
蘇聯邦領事館　日本人小學校　滿洲里電業股份有限公司　市立醫院

ハロンアルシヤン

ハロンアルシヤンは北省新巴爾虎左翼旗にある。索岳爾濟山東北支脈の西側の麓、標高五〇〇〇呎の高原に墳出する溫泉である。

溫泉の直ぐ西は五百乃至、一千米の幅を有する草原で東西に狹く、南北に長く展き、放牧地になつて居り、原の中程をロシンゴールと稱する細流が淸らかに流れ淸泉流末も亦此中に入つて居る。

火山地帶とも思はれない此地に、靈泉の墳出を見た事に就ては種々な傳說が傳へられて居る。

或は蒙古の王樣が獵に出て鹿を追ひ、鹿が溫泉に足を浸して傷を治したのを見て發見したといひ、又蒙古王ではなくて乾隆帝だともいひ、或は海拉爾に西藏の喇嘛僧が來て、南方の溫泉に浸れば病治すと敎へたともいひ、又一千年も前に北京に居られた或王樣が病厚い時老喇嘛僧が此溫泉に浸られる事をおすゝめした爲、王がわざ〳〵北京、張家口と經て到着せられ、十四日にして御病氣回復遊されたといふ話もある。

蒙古人は遠い旅を重ねて來るものも少なからず、先づ廟に參拜して然る後にきく浴槽を選んでもらつてはいるのであるが、浴槽といつても石で圍んだ野天風呂であつて、水着を着たり、繻袢用のものを着てそのまゝはいるのである。露西亞人、漢人達も入浴に來るのである。日本人は特別に湯小屋をつくつて普通の入浴の樣にしてゐる。溫泉の中には蛇が居るが、昔からの言ひ傳へを守つてこれを殺す事や、害を加へる事は決してしない。

温泉は百病に効くと傳へられ何病の者でも集ひ來るのであるが、蒙古人は胃病に侵されてゐる者が多いとの事である。

現今では、汽車の便がある様になつたし、鐵道總局では遊客を誘致して居るから、世上に多く知られる様になつて來た。しかし、蒙古人の慣習と信仰とを傷つけないために出來るだけもとのまゝの姿を殘しておく様に、官憲も努めて居る次第である。

甘珠爾廟

甘珠爾廟は新巴爾虎左翼旗の管内に屬し、海拉爾の西南一八〇粁の地點にある。海拉爾から通ずる一條の蜒々たる車馬道路は一望千里の燥原に坦々として展け砂質上の堅硬なる往還である。海拉爾から牛車で約四日間、騎馬で二日間、自動車で約六時間を要するものである。廟は丘陵に圍まれたる低濕地であつて盆地を形成し、磽瘠な砂質土より成り、牧草には不良な地帶である。

廟の沿革、甘珠爾廟は前清乾隆帝四十九年(西紀一七八四年)に國費を以て創設されたものであつて勅令に依り烏爾順河岸山上の蒙古包の内にあつて尊崇せられた。「ガンジュールファ」を現在の廟内に移し、皇帝より佛陀の教義を述べた聖典「甘珠爾」經百八卷を賜はつたのである。其中百七卷は西藏語で書かれ、他の一卷は蒙古語、西藏語、滿洲語及支那語を以て著され、之等の聖書は主廟の聖殿に保存せられ、更に聖旨によつて作られた「壽寧寺」の扁額を廟門に掲げ爾來本尊の經名をとつて甘珠爾廟と俗稱されるやうになつたのである。斯の如く勅令を以つて偉大なる廟を建立された事は清朝の對蒙古人政策の一方法であつたが、由來本廟は東西新巴爾虎兩旗の喇嘛廟の總本山であつて常住喇嘛僧二百名、廟會に際しては一千名の僧侶が集まる。

甘珠爾廟定期市

甘珠爾廟定期市の沿革は明かでない。市は廟の西北約六粁の地點にあつて毎年陰暦八月一日乃至五日

三河地方

に開催され、孤狀を形成して之を中心に放射狀をなし各旗から來集した蒙古人は部落別に集團を作り燥原は雜閙活況を呈するやうになる。定期市の元祖は滿人商人で、喇嘛廟に參集する僧侶及蒙古人を顧客に日用品を交易したのであるが、後露西亞人も入り來り遠く庫倫、多倫、張家口等よりも來り、日用雜貨と毛皮、畜類等と物々交換をしたもので漢人、露人は、取引高數百萬元をあげた時代もあつた。現今では交通發達に物資の供給便利となり市は次第に衰頽に向つて居る。

興安嶺以西一帶の地は所謂呼倫貝爾、又は巴爾虎といはれ、北部の方に何れもアルグン河に注ぐところの三つの河がある。卽ち哈烏爾河得爾布爾河、根河がそれであつて、此地方を三河と稱して居る。其流域地方には殆ど純粹にロシヤ人より成る二十箇に近い部落が散在して居る。滿洲國內ではあるが、殆ど其人種がロシヤ人のみである關係上、生活樣式等も滿洲人とは大分異る點がある。三河地方といつても、海拉爾から北方の一四〇粁位の處から、廣い意味の地域では約一五、〇〇〇平方粁位を意味し、露人の外に定住の滿人其他の遊牧狩獵を事とする種々な民族が住んでゐるが、狹い意味の三河といつてゐる露人部落は十八箇ばかりの村落を有してゐるのである。

これらの住民は一九一八年乃至一九二〇年卽ちロシヤ革命が起つた前後に、後貝加爾コサックを主體とする農民及少數のツングース、ブリヤート等が集團的移住を行つたものと、其後越境逃亡して來たものとから成り、最初は間もなく歸國するつもりで假小舍を造つてゐたが、本國の情勢から歸國が出來なくなり、永住するに至つたのである。一時は人口八千にも及んでゐたが、露支紛爭、蘇炳文の亂などに經濟的打擊を受け、人口も其當時よりは減少して居るが、建國後はゲ、ペ、ウの迫害等もなくなり、平和な村をつくつて居る。

家は丸木を組み合せた日本の支倉式に出來てゐて、内部はロシヤ人の生活様式そのまゝに、窓のあけ方、煖房の備付、保溫の方法などなか〳〵よく出來て、上手に狹いところを利用してゐる。

生業は自給的な牧畜を主とした農業を營み畜産品はバターを主とし、農産品は自家用に主として消費される位である。三河地方は到る處傾斜緩漫な丘陵地は夏季良好な牧草に蔽はれ丘の頂上までも、牛、羊或は馬の放牧地として又は草刈地として利用せられ牧畜には最も適して居る處である。家畜は牛、馬、羊を主とし、豚及家禽の數は僅少である。牛は牛乳及乳製品即ちバター、チーズの製造に充てられる。馬は荷馬車に使用せられ、羊、豚等が食用に供せられるが、平常の食物は鷄卵、乳産品、魚等を使ふのである。

農産は小麥、燕麥、ライ麥、大麥、蕎麥等で、農法は大農式耕法を用ひ機械化した農業である。バター工場、製粉工場等があり、煉瓦、皮革、木工、土器、鍛冶などの小規模な工作所もある。

林産は部落より十里位のところから森林があり、木材切出しをして建築用材にあて、水産も根河に大變豐富に産して居る。從來は三河地方に入る日本內地人は珍らしかつたが、建國後政治的關係の人々等が少し入りこみ、又奈勒穆圖から東南十八里(日本里)ばかりの地點に、三河共同農村が日本人の手によつて開かれた。これは鏡泊學園に居た數名の人々が、此方面に開拓地を見出し、康德二年九月に入り來つて寒氣と困苦を征服して畑地を開拓したもので、現在では滿拓の補助もあり、根底も出來、二十四名の人が入植して居る。後百戸位の村落を創設する豫定の由である。交通は奈勒穆圖の南方上庫力より此農村まで九里の開國道が通じて居り、四、五時間の行程で自動車の運行が出來、海拉爾との距離は短縮せられて居る。

三河に入る交通は從前非常に不便であつたが、海拉爾より奈勒穆圖に總局のバスの開通をみてより、日本內地人も建物、農牧經營、醫學、衞生、生活樣式等各方面の角度より視察する爲入り來る者も殖え、又、三河のロシヤ人も王道樂土の國都見學又は日本視察等に出かけてゆく者もあり。近年三河地方が大分世に紹介される樣になつた。

滿洲國と外蒙古は興安北省に於て國境を接觸して居る爲、國境問題に關し微妙な日ソ關係を背景として絕えず紛爭を引起して居る。ハルハ廟事件も其一つである。

ハルハ廟事件

康德二年(昭和十年)一月八日、外蒙古側は、ボイル湖東邊の地域を占有する爲、外蒙古兵十數名が、滿洲國領內に侵入した事に其の端を發し、翌九月にはハルハ、チヤリリーズ、ウルシュンの三河に夾まれた三角地帶を占領した。よつて興安北省警備軍は同月十四日、同方面警備の一部隊を甘珠爾廟方面に派遣、次いで廿四日、關東軍はハルハ廟附近偵察の爲、本多少佐以下十一名を派遣した所、外蒙兵は俄然攻擊に轉じ茲に交戰となり日滿軍に死傷者を出すに至つた。此事件に使者として立つた瀨尾中尉及び兵一名戰死下士官一名重傷したのであつた。日滿軍は一月三十日夜、ハルハ廟に向け一齊に進擊を開始し三十一日これを占領、滿洲國領域內の外蒙兵を悉く掃蕩してしまつた。

其の後外蒙より、ハルハ廟一帶の地域が、古來外蒙に所屬する事を主張し度々の滿洲里會議を行つたが何等の協定も見ず、未解決のまゝ現在に至つて居る。

ハルハ河以東のハルハ廟附近が滿洲國領內である事は、外蒙以外の幾多の文獻、地圖等によつて明かなところである。

ノモンハン事件

此事件も、國境に就て引起された事件で、未だ事件も生々しく人の知る處であるから詳記は省略する

が、ハルハ廟事件後と雖、外蒙ソ聯の頻々たる滿洲國領域不法侵犯は、我日滿當局の平和解決、隱忍自重の態度が益々彼を增長せしめるに及び、此處に實力を以てする越境ソ蒙軍の擊攘、國境確保の企圖を强め遂に康德六年(昭和十四年)五月十一日ノモンハン西方約十五粁附近に於いてハルハ河を中心に勃發するに至つた。

五月十一日外蒙軍約七八〇は重輕機、其他の兵器を有して、ノモンハン西南方約十五粁附近に於てハルハ河を渡河し、不法越境し、滿洲國監視哨を攻擊し來つたので、該方面の警備に任じてゐた滿軍は、同日午後二時頃之に反擊を加へ、多大の損害を與へてハルハ河南地區に擊壞した。此事件より引續き、五ケ月に涉り、ノモンハン、バルシヤガル高地、ノロ高地、ハルハ河、ホステン河、阿穆古朗、甘珠爾廟附近一帶、貝爾湖、烏爾順河地方の空中及陸上に於て戰鬪は繼續せられ、日滿兩軍は客路一致、外蒙軍を國境外に擊退し、殊に空軍の戰果は世界戰史に目醒しきものを殘したのであつた。

九月に入り戰況逐次平靜に歸し、爾後外交々涉に入り、遂に十六日停戰する事に意見の一致を見、東鄕、モロトフ會談の結果成立せる停戰協定により、軍事行動は停止せられるに至つた。十六日午後四時半、ノロ高地に於ける彼我の軍使會見により豫備折衝の幕は開かれ、十八日午後四時第一回の正式會談を開き、十九日午後四時五分ハルハ河畔彼我陣地中間の草原に於て行はれた。日本側は藤本少將閣下の交涉委員及び蘇聯側はポタホプ少將以下のソ聯軍代表參列、降りしきる霙まじりの豪雨の中に於て前後三時間に亙る協議を行つた。午後七時に至り歷史的陣中交涉は成立を遂げ、玆に停戰協定實施に關する現地兩軍の措置は決定開始される事になつた。同時に日ソ兩軍現地停戰委員により取極内容が發表せられた。これにより戰鬪行爲は停止せられ施設、增兵等を行はず、死體及俘虜の交換に關する事等もそれ

ぞれ一段落をとげ、かくてソ蒙軍の不法越境に發端し前後五ケ月に亘つて紛爭を續けたノモンハン事件は此協定により一先づ解決を見たわけである。

吉勒穆圖諸機關	額爾克納右翼旗公署　警察署　營林署分署
奈勒木圖諸機關	額爾克納左翼公署　郵政局　協和會　營林署
	奈勒穆圖地方觀象所
旗公署所在地	吉勒穆圖(額爾克納右翼旗)　奈勒木圖(額爾克納左翼旗)　巴彥庫仁(陳巴爾虎旗)　南屯(ハイラル)(索倫旗)　阿爾坦敖拉(新巴爾虎右翼旗)　阿爾古朗(新巴爾虎左翼旗)
警察署所在地	吉勒穆圖　西口子　古納村　奈勒木圖(奈拉穆圖)　上庫力　吉拉林　巴彥庫仁　完工　ナイヂンブラーク　國境移動警察　南屯　牙克石　滿洲里　阿爾坦敖拉　西扎來諸爾　ウルシユン　阿穆古朗　哈倫阿爾山　嵯崗
稅捐局分所所在地	牙克石
郵政局所在地	免渡河　扎來訥爾　牙克石　甘珠爾廟　三河　奇乾　吉拉林　赫爾洪德

	峰崗	宣力克都	興安嶺	哈倫阿爾山
	南屯	扎拉木特	巴彦庫仁	完工阿穆克朗
	車站	上庫力		
電報局所在地	伊列克得	兎渡河	扎來訥爾	牙克石
	哈倫阿爾山			
電話局所在地	兎渡河	扎賚諾爾		
興農合作社所在地	海拉爾(聯合會及ビ旗)	巴彦庫仁	阿爾坦敖拉	阿爾古朗
	奈勒木圖	吉勒穆圖		
日本人小學校所在地	扎賚訥爾			
委託日本人小學校所在地	兎渡河			

資料

題名	書名	發行所	發行年月日
興安北省旗務署暫行規程	政府公報	國務院	康、三、三、一二
興安北分省の住民	善隣協會調査月報	善隣協會	昭、一〇、九
興安北省概況	同表題	蒙政部	康、三、
興安北省の貿易・蒙古貿易變遷記	善隣調査月報(四三)	善隣協會	昭、一〇、一二
大興安嶺山脈踏斷記(山島貫雄)	滿蒙(一六の三)	滿洲文化協會	昭、一〇、二
經濟より觀たる海拉爾	同表題	哈爾濱商品陳列館	昭、九、一二
海拉爾畜產物貿易状況(森島守人)	海外經濟事情(一〇、二)	三省堂	昭、一〇、六
海拉爾地方と電氣事業	滿洲電氣協會々報(三七)	滿洲電氣協會	昭、一一、七
海拉爾三河間バス開通試乘記(杉山正三郎)	滿洲國通信	滿洲國通信社	昭、一一、四

滿洲里市勢概要	民政部調査月報(一の10)	民政部	康、三、一〇
甘珠爾廟の概況	滿鐵調査月報(一五の10)	滿鐵	昭、一〇、一〇
甘珠爾廟定期市場に就て	稅關(一の二)	財政部	康、二、三
蒙古の溫泉境哈倫阿爾山	同表題	鐵路總局	康、三、一
額爾克納左翼旗調査報告	同表題	旗公署	康、二、七
額爾克納左翼旗三河地方事情(山形五男)	同表題	滿洲中央銀行	康、二、五
三河地方經濟事情	北滿研究(二の一二)	哈爾濱事務所	昭、九、一二
額爾克納左翼旗三河地方事情	滿鐵調査月報(一四の五)	滿鐵	昭、九、五
興安北省三河地方經濟概觀	滿鐵調査月報(一五の三)	滿鐵	昭、一〇、三
三河地方に於ける主畜農業經營法の概觀	同表題	蒙政部勸業司	康、三、五
三河地方概觀	滿鐵調査月報(一五の三)	滿鐵	昭、一〇、三
三河地方及海拉爾河沿岸地方產業調査報告書	同表題	興安總署	康、元、五
最近の三河地方	滿洲國通信	滿洲國通信社	昭、一〇、一一
呼倫貝爾三河地方の畜產(吉永權次)	農業の滿洲(六の一)	滿洲農事協會	昭、九、一
三河白系露人素描(松井金次)	滿蒙(二〇二)	滿洲文化協會	昭、一二、二
三河地方の露人生活樣式	滿蒙(一五の一〇)	同前	昭、九、一〇
バルガ草原の概觀	生物學的特徵及經濟的意義より觀たるバルガ草原の野生動物	滿鐵調査部	昭、一三、四
海拉爾市政之沿革與現狀概況	內務資料月刊(一の二)	內務局	康、四、八
牧畜を主とした呼倫貝爾地方產業概觀	吉林商工月報(五〇)	吉林商工會議所	昭、一二、一〇
興安省三河地域の地質鑛物に就て	最近滿洲鑛業事情集錄	滿洲鑛業協會	康、四、六
庫倫旗產業事情	內務資料(一の六)	內務局	康、四、一二
索倫旗及東新巴旗に於ける產業概況	同表題	興安局	康、四、六
牙克石點描	蒙古踏査報告集	哈爾濱學院	昭、一三、六
阿爾泰及巴爾虎問題	露國の極東外交機密文書第一卷	不明	昭、一〇、一

（附　錄）

1　國內主要都邑現住人口表（康德六年六月末現在）

2　關東州

3　滿洲國全圖

國內主要都邑現住人口表

（康德六年六月末現在治安部調）

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	内地人 戸數	内地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
新京特別市	五三、三六七	二九五、二二七	二三、七一二	八八、二七〇	二、二一三	一一、四〇五	三〇六	九五三	七九、五九八	三九五、八五五
吉林省										
吉林市	二三、五七三	一一八、二九一	三、三一五	一一、三〇三	八七二	四、〇三六	三七	一八	二七、七九七	一三三、七四八
烏拉	一、二六八	七、七三二	一	四	六	三三	—	—	一、二七五	七、七六九
缸窰	八五一	五、三四六	一	二	—	—	—	—	八五二	五、三四八
樺皮廠	九三三	五、一八五	一	二	一〇	三〇	—	—	九四四	五、二一七
岔路河	一、三九八	八、二三九	六	一三	二二	九三	—	—	一、四二六	八、三四五
蛟河街	三、一四〇	一四、九三三	一三一	四三四	二八九	一、六三五	四	二六	三、五六四	一七、〇二八
新站街	一、六四四	七、八八五	一六二	五一五	二三七	一、二九三	五	一二	二、〇四八	九、七〇
敦化街	五、七一四	二八、七九七	六三一	二、八五二	六九七	三、二一六	一	八	七、〇四三	三四、八七三
樺甸街	四、一〇六	二九、四七四	一五七	四〇七	二二一	一、一七一	—	—	四、四八四	三一、〇五二

磐石街	四、〇四二	一九、七〇三	一六三	四八四	六〇六	二、六〇三	—	—	四、八一一	二二、七九〇
烟筒山街	一、六一四	九、四四六	一八	三四	三四二	一、五二九	—	—	一、九七四	一一、〇〇九
伊通街	二、七九三	一四、九二六	四九	一三一	二七	一〇一	—	—	二、八六九	一五、一五八
雙陽街	一、一九四	七、三三三	二四	五一	七	三四	—	—	一、二二五	七、四一八
九臺街	二、二八九	一七、〇二七	三三	一三八	七五	四二〇	—	—	二、三九六	一七、五八五
大屯	八九四	六、一六一	二八	一一九	—	—	—	—	九二二	六、二八〇
公主嶺街	五、八二八	三〇、〇〇九	一、三三〇	五、〇一九	二〇七	一、〇四六	二	六	七、三六七	三六、〇八〇
范家屯街	二、六七六	一四、九三三	一二七	四五七	六	二四	—	—	二、八〇九	一五、四一四
懷德街	二、一一七	一二、〇三九	四	六	—	—	一	二	二、一二二	一二、〇四七
長嶺街	一、八七〇	九、八三一	二六	四一	—	—	—	—	一、八九六	九、八七二
乾安街	一、三一二	七、〇九六	二六	五五	—	—	—	—	一、三三八	七、一五一
扶餘街	一〇、〇四一	五二、一四〇	七三	一五二	二〇	九七	六	三	一〇、一四〇	五二、四二二
長春嶺	三、〇八四	一六、五七七	—	—	—	—	—	—	三、〇八四	一六、五七七
王家站	一、九五八	一〇、六六七	二	六	九	四七	一	一	一、九七〇	一〇、七二一
三岔河街	三、五三〇	一九、四六六	七〇	一二八	一〇	六三	三	七	三、六一三	一九、六六四
農安街	四、二七七	二三、七二四	六九	一五六	一四	五三	—	—	四、三六〇	二三、九三三
靠山屯	一、一八八	七、五七一	一	一	—	—	—	—	一、一八九	七、五七二
伏龍泉街	一、二六七	八、三九〇	二	五	—	—	一	一	一、二七〇	八、三九六

德惠街	二、八二五	一八、七三九	一七八	五一三	二〇	七九	三	三八	三、〇二五	一九、三六八
楡樹街	二、〇八九	一二、八一七	四九	一一三	一九	七五	—	—	二、一五七	一三、〇一三
五棵樹	一、三四四	八、二三九	一	一	—	—	—	—	一、三四五	八、二三〇
舒蘭街	七〇一	三、四二〇	二四	四二	二一	七九	—	—	七四六	三、五四一
前郭旗	一、二八一	六、三六三	一八七	二五六	一六	六五	—	—	一、四八四	六、六八四

龍江省

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
齊々哈爾市	一八、三二二	八六、六六〇	二、七四六	一〇、四二〇	一一五	五三一	八三	二八九	二一、二六六	九七、九〇〇
昂々溪街	二、九〇四	一六、九三四	二〇四	五八〇	四	一七	五五	一四六	三、一六七	一七、六七七
富拉爾基	一、二三八	六、五四八	三四	一〇五	—	—	二二	四八	一、二九四	六、七〇一
朱家坎	一、一一三	五、六二三	六九	一一九	九四	三〇七	二	四	一、二七八	六、〇五三
李三店	一、四〇一	八、五二二	—	—	二四	九一	—	—	一、四二五	八、六一二
景星	六六〇	三、二六〇	一三	二四	一	二	—	一	六七三	三、二八四
甘南	九一七	四、八六七	九	二〇	—	—	一	二	九二七	四、八八九
富裕	五一六	二、八〇一	一九	二五	—	—	—	—	五三五	二、八二六
訥河街	二、八八六	一三、四三九	七九	一八五	二〇	九七	一二	五三	二、九九七	一三、七七四

拉哈街	二、二三六	一〇、八八〇	七	八	—	—	一	一〇	二、二四四	一〇、八九八
林甸街	二、三四三	一〇、二四三	二七	四八	二	七	一	一	二、三七三	一〇、二九九
泰康	八四四	四、〇七七	二二	五二	—	—	一七	四	八八三	四、一七三
泰來街	三、五七五	一七、一〇七	五三	九〇	三	一四	一	一	三、六五一	一七、三一二
塔子城鎭	一、三〇二	七、八三三	—	—	二	一三	—	—	一、三〇四	七、八四六
鎭東	八九九	四、七一五	六	三六	四	一八	—	—	九〇九	四、七六九
大賚街	五、〇二五	二七、〇九八	六四	一四七	二	二	六	六	五、〇九七	二七、二五三
安廣(龍泉)街	一、一六九	六、一五二	二六	四二	一	一	—	—	一、一九六	六、一九五
白城子街	三、七四三	一七、七九〇	六四三	一、六八五	五三	二八九	五	一〇	四、四四〇	一九、七七四
洮南街	八、三八四	四三、〇六二	二九六	八四三	九一	三九一	二	一二	八、七七三	四四、三〇八
開通街	二、五〇八	一三、一六四	三七	九一	二	八	—	—	二、五四七	一三、二六三
瞻榆街	九九八	五、四三九	一五	三一	一	四	—	—	一、〇一四	五、四七四
醴泉街	一、三七二	七、七七一	二〇	三六	一	三	三	三	一、三九六	七、八一三
巴彥查于	一八二	八八二	一〇	二四	二	二	—	—	一九四	九〇八
貝子府屯	二八八	一、五九一	六	一三	—	—	—	—	二九四	一、六〇四

北安省

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
北安街	三,〇一八	一六,四一五	五三六	一,五三七	五四	二〇二	五	三	三,六〇三	一八,一七六
通北	三九一	二,一九八	二三	五三	二	五	一	一	四一七	二,二五六
綏稜街	一,〇三一	五,四六〇	一九	三八	五	一六	—	—	一,〇五五	五,五一四
興農街	一,一六〇	六,六二七	九	二一	二四	一二四	—	—	一,一九三	六,七七二
鐵驪街	八七八	四,四七二	八七	三五八	六五	一六一	—	三	一,〇三〇	四,九九四
慶城街	二,一一七	一二,五四一	九四	一八四	九一	四四八	—	—	二,三〇二	一三,一七三
綏化街	六,九七一	三六,五七六	四九九	一,二六七	一二三	三六一	一二	二八	七,六〇五	三八,二三二
望奎街	四,〇五九	二二,四〇三	四〇	六八	八	三一	一	一	四,一〇八	二二,五〇三
海倫街	八,五二三	四五,八九一	二四七	五八一	六九	二四六	一九	四七	八,八五八	四六,八六五
倫河鎭	九〇五	五,二一五	一	一	一七	五四	—	—	九二三	五,二七〇
海北街	三,八六〇	一四,二八〇	五	三三	二五	六六	一	二	三,八九一	一四,三八〇
明水街	一,八五二	九,四八四	四三	七五	一	三	—	—	一,八九六	九,五六二
拜泉街	五,六二四	二七,九八〇	三七	一三六	一九	六二	六	八	五,六八六	二八,一八六
三道鎭街	一,八一六	一〇,六二一	一	二	八四	四二五	—	—	一,九〇一	一一,〇四八

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
依安	八七四	四、四四九	一九	三〇	—	—	—	—	八九三	四、四七九
克山街	四、七六一	三三、三一五	一五九	四二六	七	二六	二	三	四、九二九	三三、七六〇
泰安街	三、四六九	一七、八七〇	一五	七四	九一	五二七	—	—	三、五七五	一八、四七一
克東街	二、一五〇	一一、九一五	一三	三六	三	八	—	—	二、一七六	一一、九五九
德都	二、四九四	一五、八三八	一一	二五	一	四	一	一	二、五〇七	一五、八六八
嫩江街	四、一〇七	三一、三四八	三六二	八八七	一八	一四九	四五	二一九	四、五三二	三三、六〇三

黑河省

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
黑河	二、九七八	一四、九九一	六一三	一、九七〇	六一	二〇八	一〇	四五	三、六六二	一七、二一四
孫吳	一、〇一五	三、六六〇	二八五	一、三二四	二〇	一二九	一七	三一	一、三三七	五、〇四四
漢河	二九八	一、〇八二	二〇	四九	—	四	四	四八	三二二	一、一八三
鷗浦	一一三	四五四	一四	三三	—	—	一	二〇	一二八	五〇七
呼瑪	一二七	五〇五	六	二六	一	二	一	二二	一三五	五五四
奇克	三一一	一、五四六	二四	五六	二	八	—	三四	三三四	一、六四四
遜河	二四六	一、〇四一	二二	五五	—	—	—	七	二六八	一、一〇三
烏雲	二一七	一、一五〇	一三	四〇	二五	九七	一	八	二五六	一、二九五

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
佛山	二九四	一,四四六	三〇	五四	二四	一〇二	—	一九	三四八	一,六二一

三江省

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
佳木斯市	一三,八一五	七四,一二九	二,七八五	五,八三一	五二〇	二,三三八	六〇	一四三	一七,一八〇	八二,四四一
悅來街	二,六七三	一五,五〇四	六	一二	二	九	—	—	二,六八一	一五,五二五
太平鎮(樺)	八六二	二,七四四	三	三	三	一五	—	—	八六八	五,九一二
千振街	三,三七八	一七,一七五	四四一	一,三一八	一六一	五六二	—	—	三,九八〇	一九,〇五五
富錦街	一〇,二八二	五四,七五七	二四〇	五九三	三九	一五〇	一四	二八	一〇,五七五	五五,五二八
集賢街	二,七八六	一四,八〇四	六	八	一	五	—	—	二,七九三	一四,八一七
勃利街	六,六九四	三九,〇九九	一八九	七一九	三六五	一,三一一	一	四	七,二四九	四一,一三三
依蘭街	六,五九三	三三,八三八	一三三	五三八	一〇一	三九三	四	七	六,八三一	三四,七七六
太平鎮(依)	一,六一四	一一,三二五	三	七	七	四六	—	—	一,六二四	一一,三七八
雙河鎮	一,〇三三	六,五三二	二	六	二〇	四四	—	—	一,〇五五	六,五八二
興隆鎮	九五七	五,六九九	五	四一	四〇	一五一	—	—	一,〇〇二	五,八九一
方正街	二,一六七	一三,四三八	二七	六五	二四	一三〇	一	一	二,二一九	一三,六三四
通河街	三,九七二	一七,一九一	七三	一八七	七三	三六五	三	七	四,一二一	一七,七五〇

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
湯原街	一,五四五	九,四二〇	八〇	二一〇	六五	二三〇	一	二	一,六九一	九,八六三
鶴立街	二,〇七四	一一,七六四	四七	一二〇	六〇	二六三	—	—	二,一八一	一二,一四七
興山街	二,一二五	一八,〇六七	五八四	一,〇〇四	七	二〇	四	三	二,七二〇	一九,一〇三
蓮江口	一,五八六	八,四八四	一〇	七〇	九	二六	—	—	一,六〇五	八,五八〇
蘿北	六三九	三,六五九	二八	七一	九	三七	—	—	六七六	三,七六七
綏濱街	一,三二二	六,五五一	二七	七一	三	一〇	三	四	一,三五五	六,六三六
同江街	一,一七九	六,五二六	六〇	一一六	五	一六	二	五	一,二四六	六,六六三
撫遠	一四三	八〇〇	二六	四七	六	四九	二	八	一七七	九〇四
東安省										
東安街	一,一二〇	五,六四四	五一六	一,〇七八	六四	二八一	六五	七六	一,七六五	七,〇七九
密山街	一,二八三	六,九三五	一一五	二九八	五四	一八五	—	三	一,四五二	七,四二一
平陽鎭	一,四〇六	七,七四三	二六	七六	一〇五	四八五	一	三	一,五三八	八,三〇七
滴道驛	一,一六四	六,三五七	二三六	五四五	一八〇	九三三	—	—	一,五八〇	七,八三五
林口街	二,四四三	一〇,二〇九	二三三	九四六	一九五	七九三	一	二	二,八七二	一一,九五〇
寶淸街	三,八九六	二六,九三一	八八	二六七	三二	一〇〇	四	三	四,〇二〇	二七,三〇一

饒河街	一,四八四	四,九七二	三〇	一三〇	七一	二八六	一	二八	一,五八六	五,四一六
虎林街	四三二	三,五六五	一〇二	五五二	三七	一五一	—	—	五七一	四,二六九

牡丹江省

都邑名	満人 戸數	満人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
牡丹江市	一五,五二二	六九,二五六	三,八六二	一五,一〇三	五,〇二二	一七,四四一	一八二	三九〇	二四,五八八	一〇二,一九〇
寧安街	五,二四五	二四,一五〇	一三二	五二七	二三八	一,一〇七	三	六	五,六一八	二五,七九〇
海林	一,〇一九	五,三二五	三二	九四	四三八	二,五一七	九	二四	一,四九八	七,九六〇
東京城街	五二六	三,二九〇	四四	九二	六四三	三,〇九五	—	—	一,二一三	六,四七七
穆棱街	一,一一三	五,六八〇	二七七	七六四	一五六	六〇〇	三一	五八一	一,五七七	七,六二五
八面通	九九九	五,六六七	七七	一一九	一六五	一,〇〇〇	三	五	一,二四四	六,七九一
梨樹鎮街	一,二三〇	六,五六九	九四	二二一	一三八	六一四	—	—	一,四八二	七,三九四
綏陽街	八四九	三,三三〇	六七	二八五	八五	四五二	四	一三	一,〇〇五	四,〇七九
綏芬河街	一,四一六	五,三一七	五七五	一,五八七	八六	四四七	二〇六	五一一	二,二八三	七,八六二
小城子	二八一	一,八九一	九四	四九五	二六	二七	—	—	四〇一	二,四六四
三岔口(東寧街)	一,四〇〇	七,三二四	二二七	七八七	一〇三	五六五	二	七	一,七三二	八,四八三

濱江省

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
哈爾濱市	八〇、六三八	四〇六、三五六	八、三三八	三〇、一三七	一、〇八三	四、九六三	一二、二四〇	三五、七四一	一〇二、一八九	四七七、一九七
呼蘭街	九、一七六	四九、九二五	一〇九	一九九	二九	九四	六	八	九、三二〇	五〇、二二六
樂安鎭	一、九八二	一〇、〇六〇	一	八	—	—	—	—	一、九八三	一〇、〇六八
賓州街	四、五五一	二五、六〇四	五〇	九二	三七	一六八	—	—	四、六三八	二五、八六四
新甸街	一、六四八	八、六五三	—	一	九	四四	—	—	一、六五七	八、六九八
阿城街	六、一九三	三一、七五三	三一	三五四	六四	三八六	八五	二八六	六、四六三	三二、七七八
五常街	二、〇六〇	一三、二四二	一四九	二九三	一九	八四	一	二	二、二二九	一三、六二一
山河街	一、六八一	八、八二七	三八	六八	一三一	六四九	—	—	一、八五〇	九、五四四
小山鎭	一、三五三	七、三五七	一	五	七九	三九二	—	—	一、四三三	七、七五四
正亞街	二、〇七七	一〇、七九九	三	八	一	一	—	—	二、〇八一	一〇、八〇八
青岡街	二、四五三	一三、九一四	五二	一一九	一〇	四三	二	三	二、五一七	一四、〇七九
東興街	一、六三八	九、五六四	二六	五二	一一〇	五九九	—	—	一、七七四	一〇、二一五
巴彥街	五、五二四	三三、二三六	五五	一五五	九	三八	一	三	五、五八九	三三、四三二
興隆街	八五一	五、四六八	三	四	—	—	—	—	八五四	五、四七二

西集街	一、一五八	七、一六〇	二	四	—	—	—	—	一、一六〇	七、一六四
木蘭街	三、二五一	一六、四七四	三九	七八	六八	二九一	一	四	三、三五九	一六、八四七
延壽街	三、五四二	一八、三五一	四七	七九	九九	四二三	四	六	三、六九二	一八、八五九
珠河街	二、九〇四	一五、三二八	六一	一五三	一〇〇	四二〇	五	一四	三、〇七〇	一五、八〇五
一面坡街	四、五八〇	二三、三六三	二七七	六五〇	一八五	五九四	一三四	三二三	五、一七六	二四、九三〇
雙城街	九、九二九	五七、三三四	九三	二八八	三九	一八〇	一三	二六	一〇、〇七四	五七、七二八
拉林街	九六二	六、一一六	一一	一五	一	三	—	—	九七四	六、一八四
肇州街	一、五三八	八、八六九	—	—	—	—	三	四	一、五四一	八、八七三
豐樂街	一、六二七	八、七三九	二	六	一	三	一	三	一、六三一	八、七五一
大同街	一、四四六	八、一七七	二	二	—	—	—	—	一、四四八	八、一七九
滿溝街	三、七六〇	一九、二五六	九七	一五五	七	二六	二四	六七	三、八八八	一九、五〇四
昌五街	二、一四九	一四、〇六五	三	五	—	—	一	一	二、一五三	一四、〇七一
蘭西街	二、六八四	一五、三三六	三九	七八	二	五	—	—	二、七二五	一五、四一九
榆林鎮	八九一	五、一七三	—	—	—	—	—	—	八九一	五、一七三
安達街	五、〇六六	二四、二三四	一六八	四五四	一三	四二	一五六	三四一	五、四〇三	二五、〇七一
帽兒山	一、三八二	六、二七七	六六	九八	八四	四七七	一三	三一	一、四五五	六、八八三
葦河街	二、一五九	九、八七五	八二	三三二	二	五	二八八	四六八	二、五八一	一〇、六八〇
石頭河	一、一二一	五、一八五	二六	六一	五六〇	二、七三六	一九一	四七三	一、八九八	八、四五五

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
牙不力	一、二五五	五、八九四	二九	七四	一七	七六	一九九	六五六	一、五〇〇	六、七〇〇
亮河	二、三六一	一〇、七八七	五九	六五	—	—	一八八	四〇〇	二、六〇八	一一、二五二
肇源街	一、一四六	六、三三九	三五	五二	一	一	一	一	一、一八三	六、三九三
四站	九一三	五、一三〇	—	—	一	三	—	—	九一四	五、一三三
茂興	一、三二五	七、一〇二	—	—	—	—	—	—	一、三二五	七、一〇二
間島省										
延吉街	二、八四三	一五、五九〇	七二四	二、八三四	二、二〇〇	一〇、二五二	一二	四七	五、七七九	二八、七二三
龍井街	一、六〇三	六、八五六	三七二	一、五三五	五、九一九	二二、一七二	一六	二四	七、九一〇	三〇、五八七
圖們街	七一四	三、〇〇二	一、〇一三	四、四四七	三、六八三	二二、五五八	六	一九	五、四一六	二四、五七九
頭道溝	八二一	四、九四七	二二	六九	二、二四九	一二、六三〇	一	一	三、〇九三	一七、六四七
明月溝	七三〇	三、二三〇	五〇	一四一	一、四六〇	八、五九七	一	二	二、二四一	一一、九七〇
大肚川	七三八	四、四二四	一九七	五五九	一、七九九	九、一一六	—	—	二、七三四	一四、〇九九
百草溝	五八三	二、九〇八	九	二八	六六五	三、六六二	—	—	一、二五七	六、五九八
三岔口	六四七	四、二七一	一三六	四五九	六八八	三、二五六	—	—	一、四七一	七、九八六
琿春街	一、五七〇	八、五三一	三三二	一、四九六	一、五一九	七、〇二三	一五	三七	三、四三六	一七、〇八七

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
大拉子	九八	四九九	二二	五七	二六三	一、三一五	一	一	三八四	一、八七三
三道溝	二九八	一、三一八	一〇九	二三〇	一、二九八	七、五一〇	—	—	一、七〇五	九、〇四八
安圖	一、三五六	七、三六四	三一	六四	二三	五八四	—	—	一、四一〇	八、〇一二

通化省

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
通化街	七、四八九	四四、七〇六	六一二	二、〇〇四	五五四	二、八四二	九	二五	八、六六四	四九、五七七
柳河街	一、三一〇	七、五一五	二八	五九	九三	四九四	—	—	一、四三一	八、〇六八
三源街	八四五	五、二〇七	七	三二	一八四	七三〇	—	—	一、〇三六	五、九六九
孤山街	一、六四八	九、八五三	五	九	七四	四二〇	—	—	一、七二七	一〇、二八二
樹子哨街(金川)	二、二八三	一二、四二三	二八	七四	九一	三九三	—	—	二、四〇二	一二、八九〇
輝南街	二、一六六	一〇、九七四	二七	九〇	七八	四七〇	—	—	二、二七一	一一、五三四
撫民屯	一、一三七	六、〇三三	五	九	二六	一四七	—	—	一、一六八	六、一八九
濛江街	一、一一七	五、六八四	二九	六九	二三	一四二	—	—	一、一六九	五、八九五
撫松街	五、四七五	二八、二三三	四一	八二	一二四	五八一	—	—	五、六四〇	二八、八九六
長白街	九二六	四、四二五	三二	一一八	五〇一	三、一一八	—	—	一、四五九	七、六六一
臨江街	四、一八九	二二、五〇八	一〇三	三四八	一三六	六二九	一	一	四、四二九	二三、二八六

八道江街	二,四八〇	一三,三八八	一三	一五一	七八	四四四	—	—	二,五七一	一三,九八三
輯安街	一,二八四	八,九九七	六三	二〇八	二一九	一,二一四	—	—	一,五六六	一〇,四一九
外岔溝	六四三	三,九七七	六	一四	一九四	一,一一七	—	—	八四三	五,一〇八

安東省

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
安東市	三四,三二八	一七九,六三一	四,一五八	一七,七九〇	三,四七二	一七,五〇六	一〇	三五	四一,八六八	二一四,九七二
大東溝街	一,三七七	六,九三七	四	九	一六	七七	—	—	一,三九七	七,〇二三
莊河街	一,六二九	九,五七〇	一〇〇	二三七	二五	八〇	—	—	一,七五四	九,八七七
青堆子街	一,三一九	八,四八三	九	二二	七	四〇	一	一	一,三三六	八,五四五
孤山街	二,八四八	一八,六四五	二四	六一	二六	一三七	四	一〇	二,九〇二	一三,八四三
岫巖街	二,一〇一	一三,四〇二	五〇	一〇八	五	一九	二	七	二,一五八	一三,五三六
鳳城街	三,六七六	二一,八五三	二一五	八二八	二五五	一,四六五	二	八	四,一四八	二四,一五四
寛甸街	一,三六三	七,九〇六	七九	三二八	八四	三五一	一	二	一,五二七	八,四八七
桓仁街	三,二〇二	二〇,五九七	四八	一一六	一三八	七三二	—	—	三,三八八	二一,四四五
沙尖子	九八一	六,三三九	二	六	二五	一八八	—	—	一,〇〇八	六,五三三
二戸來	九〇七	六,一〇〇	一	二	六六	四〇五	—	—	九七四	六,五〇七

奉天省

都邑名	満人 戸數	満人 人口	内地人 戸數	内地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
奉天市	一三〇,四〇三	七〇六,七〇九	三五,八六八	一〇七,二六六	三,九五九	一九,六三一	三七三	一,〇九七	一六〇,六〇三	八三四,七〇三
撫順市	三六,七二九	一九四,一三七	六,五〇六	三一,三五二	一,四二九	六,三一四	九	四四	四四,六七〇	二三一,八四七
遼陽市	一四,七三九	八八,八九五	一,三四六	五,三九四	五九	三三九	九	二〇	一六,一五三	九四,六四八
鞍山市	一八,四〇一	一二〇,三三一	八,一〇一	三四,九〇二	一九二	一,〇七九	一一	三九	二六,七〇五	一五六,三五一
營口市	二七,六五八	一五八,三一〇	一,五三六	六,〇九〇	二四八	一,三三九	一二	六二	二九,四五四	一六五,七九一
四平街市	一〇,一六一	五三,〇二四	二,五九一	七,八三一	一七九	九六〇	一一	六六	一二,九四二	六一,八八一
鐵嶺市	九,〇二二	四八,六六七	九二〇	三,六〇三	二六六	一,三五八	二	六	一〇,二一〇	五一,六三四
本溪湖市	一〇,一七九	七一,三三五	一,二七八	五,六六四	一四〇	七六八	一	八	一一,五九八	七七,七六五
蘇家屯街	一,三一八	六,四〇〇	一,〇七八	三,八九一	一五	七〇	―	―	二,四一一	一〇,三六一
撫順城	二,三六〇	一二,七一八	二八	五六	三一二	一,六七八	一	六	二,七〇一	一四,四五八
橋頭街	一,四三四	九,三七二	二三六	一,二六六	六	三二	一	一	一,六七七	一〇,六七一
劉營街	二,二九八	一五,五三四	―	―	一	五	―	―	二,二九九	一五,五三九
遼中街	一,二九七	六,七五二	五二	八九	二	四	―	―	一,三五一	六,八四五
海城街	五,七八五	三六,二二八	三二九	一,二四八	三七	一一六	二	二	六,一五三	三七,五九四

大石橋街	二,〇八〇	一三,四二七	一,〇四一	三,八七三	三五	一八三	—	—	三,一五六	一七,四八三
牛莊街	三,三五六	一九,〇九六	八	二一	—	—	一	一	三,三六五	一九,一一八
騰鼇堡街	一,五七七	九,五三九	四	七	—	—	一	一	一,五八二	九,五三七
蓋平街	五,一八二	三三,二八八	一四五	六二一	六	二九	一	一	五,三三四	三三,九二九
熊岳城街	一,七〇六	九,一六三	一九二	六四一	三	一一	—	—	一,九〇一	九,八一四
瓦房店街	三,六三六	一八,五三六	九九六	二,八七四	五	四五	—	—	四,六三七	二一,四五五
復州街	二,〇一七	一一,八六九	二	五	—	—	—	—	二,〇一九	一一,八七四
新民街	六,二七三	三三,一一七	一〇四	二六三	一八	七七	二	七	六,三九七	三三,四六四
法庫街	三,七八四	一九,二〇六	四三	八一	三	七	一〇	一三	三,八四〇	一九,三〇六
康平街	一,一四八	五,九六六	一七	四九	三	九	一	二	一,一六九	六,〇二六
鄭家屯街	九,一〇六	四九,二九七	二五四	一,〇一三	一三二	五二〇	一	七	九,四九三	五〇,八三七
雙山	九六一	五,五七七	三三	六〇	五	二二	—	—	九九九	五,六五九
梨樹街	二,八六四	一五,三一三	一二	四七	四	一三	一	二	二,八八一	一五,三七四
楡樹臺街	九四一	五,三〇四	一	一	—	—	—	—	九四二	五,三〇五
郭家店街	二,〇七三	一一,六九八	六三	一七七	八	四六	—	—	二,一四三	一一,九二一
昌圖城街	三,五九七	一八,三五八	三三	九四	一	七	一	二	三,六三一	一八,四六一
八面城街	三,〇六六	一七,五一四	二〇	四三	一	一	一	八	三,〇八八	一七,五六六
開原街	五,九三二	三〇,九六五	五一八	二,三一七	四二九	三,一九一	一	二	六,八八〇	三五,四七五

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	内地人 戸數	内地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
開原城街	三、六一四	二〇、五二〇	七	一八	二七	二〇七	—	—	三、六五八	二〇、七四五
西豐街	五、四三八	三〇、六七七	八一	二六一	七七	三九八	二	二	五、五九八	三一、三三八
西安街	七、八八四	四〇、〇六五	二五三	九七三	七八	三〇七	一	一	八、二一七	四一、三四七
東豐街	三、五七二	二四、六三五	三五	七三	二	七	一	五	三、六二九	二〇、七九〇
海龍街	三、一七七	一七、一一八	三七	一三三	一一三	五五八	一	三	三、三三七	一七、八〇二
朝陽鎮街	三、七七〇	一九、五七二	九四	二五七	一一五	六六六	一	一	四、九八〇	二〇、四九六
山城鎮街	五、三五三	二九、二九一	一〇八	三二一	三七八	一、九三九	三	三	五、八四二	三一、五四四
清原街	一、九三二	一一、九四六	七三	一九一	一〇三	五〇一	一	二	二、〇九八	一二、六四〇
興京街	二、五〇四	一四、九〇八	四五	一一五	三七五	二、一一三	一	一	二、九二五	一七、一三七
永陵街	八四八	五、一六七	八	二〇	八七	五三三	—	—	九四三	五、七二〇

錦州省

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	内地人 戸數	内地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
錦州市	一九、〇六九	九八、七八〇	二、五四五	一一、二〇三	一〇六	六一七	一〇	二七	二一、七三〇	一一〇、六二六
阜新街	一三、三二八	九一、三五九	一、七三九	六、七七一	二九	一一五	三	五	一四、九八九	九八、二五〇
石山站街	一、〇八一	五、九九五	一	六	—	—	—	—	一、〇八三	六、〇〇一
北鎭街	五、九五一	二九、二〇三	四〇	九八	一	六	一	二	五、九九三	二九、三〇九

溝帮子街	一、七一二	八、三七八	一三	一九	九	三八	—	—	一、七三四	八、六一五
黑山街	三、〇五一	一七、〇八五	二五	六四	三	一三	一	一	三、〇八〇	一七、一六三
新立屯街	二、九九八	一六、一三三	二〇	三七	四	一九	—	—	三、〇二二	一六、一七九
臺安街	五〇六	二、七九〇	三三	四一	一	二	—	—	五三〇	二、八三三
盤山街	一、五六三	八、四九八	一五	六六	—	—	—	—	一、五七八	八、五六四
田莊臺街	三、六九九	二、八一〇	一〇	二四	五四	二七〇	—	—	三、七六三	三、一〇四
綏中街	三、五六九	一九、二九七	一〇七	二六六	六	二九	—	—	三、六八二	一九、五九二
前衛街	一、二三八	五、九六四	—	—	—	—	—	—	一、二三八	五、九六四
興城街	三、二七二	一八、〇五五	四九	九二	一	六	—	—	三、三二二	一八、一五三
錦西街	一、四四二	八、三一〇	一〇四	三二四	五	一四	一	一	一、五五二	八、四四九
高橋街	一、一八四	六、八二八	三	二	—	—	—	—	一、一八七	六、八三九
虹螺峴街	一、四九九	九、〇九一	—	—	—	—	—	—	一、四九九	九、〇九一
江家屯街	一、〇二六	五、六七四	一	七	—	—	—	—	一、〇二七	五、六八一
義州街	五、八三四	三〇、〇五三	八五	一九五	三	四	一	一	五、九二三	三〇、二五三
清河門街	一、一〇七	五、七〇四	一一	一七	一	二	—	—	一、一一九	五、七二三
朝陽街	三、九二八	一九、一四八	一五一	三九〇	一三	七四	九	一三	四、一〇〇	一九、六二五
北票街	三、〇八九	一七、八五八	六八三	一、五九六	九一	二九三	—	—	三、八六三	一九、七四七
王府(吐、左)	五八九	三、四二四	五	二	二	八	—	—	五九六	三、四五三

彰武街	二、〇一二	九、八九五	一七三	二九三	八	二七	—	—	二、一九三	一〇、二一五
哈爾套街村	一、〇六二	五、二九二	—	—	一	四	—	—	一、〇六三	五、二九六

熱河省

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	内地人 戸數	内地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
承德街	七、八三二	四〇、四九二	一、一八五	四、〇〇六	一一〇	四二三	五	六	九、一三二	四四、九二六
興隆街	一、〇七九	五、一三一	二六	七一	一	八	一	二	一、一〇七	五、二一二
灤平	九九七	四、九八四	六〇	一二七	五	一三	一	三	一、〇六三	五、一二七
豐寧	一、六八三	七、七三一	三八	七五	六	一五	二	三	一、七二九	七、八二四
大閣鎮	一、三八九	五、六六六	八	一五	—	一	—	—	一、三九七	五、六八二
隆化	一、四二二	六、八三五	二三	五四	—	—	二	五	一、四四七	六、八九四
圍場街	一、六五二	六、七九二	六四	一四〇	一	一	—	—	一、七一七	六、九三三
赤峰街	八、二二五	四二、五〇二	三七三	一、三五一	一六	六六	五	二	八、六〇九	四三、八三〇
烏丹	二、二九〇	九、三九五	三六	六八	—	—	—	—	二、三二六	九、四六三
新惠	三五七	一、七二三	四五	六七	一	一	—	—	四〇三	一、七九〇
建平	四七二	二、三八五	三六	七八	一	二	—	—	五〇九	二、四六五
喀喇沁(喀、右)	二〇五	九五五	二〇	四二	—	—	—	—	二二五	九九七

都邑名	滿人 戸數	滿人 人口	內地人 戸數	內地人 人口	半島人 戸數	半島人 人口	外國人 戸數	外國人 人口	合計 戸數	合計 人口
寧城	一、三六六	五、九二五	二六	三五	一	三	—	—	一、三九三	五、九六三
平泉街	五、三三八	二七、二二三	七九	二二六	二	二六	七	二	五、四三五	二七、四七六
大城子	六〇七	二、五三〇	七	九	—	—	—	—	六一四	二、五三九
建昌	五五二	二、九六〇	五〇	一〇五	二	六	—	—	六〇四	三、〇七一
凌源街	三、〇四〇	一三、八三五	五〇	一八〇	一二	三八	二	七	三、一〇四	一四、〇六〇
公營子	七一三	三、六六二	八	一八	一	二	—	—	七二二	三、六八二
青龍	三〇一	一、五一〇	三五	九〇	六	一九	—	—	三四二	一、六一九
興安西省										
大板上	四四九	一、七四五	一四	三〇	二	六	—	—	四六五	一、七八一
林東	一、四九六	六、一七〇	一二	三六	七	三〇	—	—	一、五一五	六、二三六
崑都	八八	三八八	一五	二五	—	—	—	—	一〇三	四一三
魯北	一九四	九〇七	一一	三〇	—	—	—	—	二〇五	九三七
王府（奈曼旗）	二九四	一、四〇六	二一	三八	一	一	—	—	三一六	一、四四五
經棚	一、三〇九	五、七三九	三四	五〇	—	—	—	—	一、三四三	五、七八九
魯	四、二八二	三三、八九六	一〇二	三五五	二〇	九四	二	四	四、四二七	三三、三四九
林西	二、〇六九	九、八〇五	一〇六	二〇六	一一	二八	一	四	二、一八七	一〇、〇五三

興安南省

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
王爺廟	二,四一九	一〇,七五七	二八一	七〇三	二七	一六〇	一	—	二,七三七	一一,六二〇
庫倫	一,一二七	五,七二八	二一	三六	一	一	—	—	一,一四九	五,七六五
後新秋	二六五	一,四七一	二一	二九	二	五	—	—	二八八	一,五〇五
吉爾嘎朗街	四七七	二,五四八	二六	四八	四	一三	—	—	五〇七	二,六〇九
巴彦塔拉	四三九	二,四四三	二一	九〇	二	九	—	—	四六二	二,五四二
代欽塔拉	三八	一三三	一三	二〇	二	五	—	—	五三	一五八
索倫	一一五	六五〇	一九	二五	一	一	—	—	一三五	六七六
音德爾屯	一二四	六四九	一八	二七	四	一一	—	—	一四六	六八七
通遼街	八,二三一	四九,七六七	一九四	一,二八六	一〇一	六八	三	九	八,五二九	五一,一三〇
大林	一,〇七〇	六,二〇〇	三	三	二	九	—	—	一,〇七五	六,二一二

興安東省

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
扎蘭屯	二,三二八	九,〇六六	二四一	六三〇	一六	二五	六八	三九七	二,六五三	一〇,一八三
博克圖	一,〇九九	四,五五二	二六二	九二六	二六	一六三	二八六	五六五	一,六七三	六,二〇六

都邑名	滿人 戶數	滿人 人口	內地人 戶數	內地人 人口	半島人 戶數	半島人 人口	外國人 戶數	外國人 人口	合計 戶數	合計 人口
索倫	五二六	二、六四五	四四	一九二	四	九	一	二	五七五	二、八四八
紅花梁子	一二四	五三八	一二	二二	一	一	—	—	一三七	五六一
布西	六〇三	四、〇六〇	一七	二六	—	—	一	四	六二一	四、〇九〇
額爾和	四七	二三〇	一六	二八	—	—	—	—	六三	二五八
興安北省										
海拉爾市	三、七六〇	一九、三一〇	一、〇二五	三、八四〇	二八	二〇五	九二八	二、八八七	五、七五一	二六、二四二
滿洲里街	九七八	四、一二九	二八〇	七七九	八	二六	五八四	一、五九三	一、八五〇	六、五二七
南屯	八八	五九七	九	一四	—	—	—	—	九七	六一一
阿爾坦	一五〇	一七五	一九	二〇	—	—	二	三	一七一	一九八
阿穆古朗	一八	九五	一一	一六	二	三	—	—	三一	一一四
巴彥庫仁	二九	一三九	一二	二四	—	—	一	一	四二	一六四
奈如穆圖	八三	五四〇	四九	七八	—	—	一五九	八七九	二九一	一、四九七
吉如穆圖	九四	二九九	九	二三	—	—	三三	三一〇	一三六	六三二
關東州內（昭和十四年六月末）										
大連市		三七六、八〇九		一六四、三六五		四、三三六		一、六二九		五四七、一三九
旅順市		二〇、三六一		一二、八六〇		一四三		一五		三三、三七九

關東州

沿革

關東州

大連市

今日の大連を見る段階として建設の過去を顧る事は必然な事である。大連の地はもと、土俗に青泥窪(チンニーク)と稱へられた一寒漁村で、我が足利時代に八幡船に襲はれたらしい遺跡がある外、何等の史實がない。後、李鴻章が柳樹屯に要塞並に棧橋を築いた事がある。日清戰役後、遼東半島は三國干渉、遼東還附等、日本人の肝に銘じて忘れられない地となつたが、極東に對する露西亞の野望は、不凍良港を得ん爲めに、露骨にも現在の大連旅順一帶を支那より租借し、此處に築港及市街の建設計畫に着手した、其當時、大連の地域は東西青泥窪、及黑咀子の三部落を合しても總戸數僅に四十戸に過ぎないものであつた。露西亞は二千萬留の豫算を以つて築港及市街建設を行ひ、大連を自由貿易港として、滿洲に於ける軍事、交通、經濟を掌握せんとし、ダルニーと名づけて苦心經營する事十年、遂に明治三十七八年の戰役となつたのである。ポーツマス條約後日清協定により、關東州の租借を日本が繼承し、三十九年九月一日より關東都督府が開かれて、大連の都市建設は堅實性を加へ、滿蒙大陸の關門として一大發展の途に上つたのである。

大連の發達は、日本の大陸經濟の關門として施設經營せられた點もあるが、一方滿鐵の大連中心主義の營業政策が最も重要なる契機であつた。卽ち滿鐵貨物運賃の改正により、營口、安東に集つてゐた輸出物を大連に集中し、更に大連を中心として輸入を仰ぐ事にたつた。これは大連を政治的、經濟的に確

滿洲の大玄關大連港

立し、日本と日本人が海外に於ける唯一の繁榮なる海港都市を建設するに至つたのである。

新興滿洲國の建設は又、大連の繁榮と不可分の關係を生じ、政治上からみても、駐滿全權大使の下に關東局と關東州廳とに依つて統治せられ、滿洲國との關係は頗る緊密である。又經濟的に見るも、日滿經濟ブロツクの結成に最も重要なる立場を有するのは大連市であつて、大連の持つ商工業的根據は非常に重大なるものである。滿洲國の健全なる建國と其經濟的發展とは、大連市をして躍進的に發達せしめたると共に、將來滿洲各都市の隆々たる新興に伴はれて、日滿人が大連市をしてあらゆる方面から發展せしむる事は大いに期待せらるゝ處である。

大連は極東の自由港たると同時に大陸の關門として歐亞連絡の要衝であり、又滿洲の大玄關である。露西亞の築港計畫を踏襲して、更に滿鐵によつて大築港が完成せられてより四ヶ所の大埠頭を有し、港灣設備之に伴ふ陸上設備完備を極め、甘井子にも埠頭及諸種な設備がある。更に大連港をして一大呑吐港とすべく昭和十三年八月には八〇〇萬噸乃至一千二百萬噸を收容すべき案が出で同年九月には尙九〇〇萬噸乃至一千三百萬噸の計畫が樹立し、三ケ年計畫として其爲めに要する資金は約一億と計上されて居る。埋立地百五萬坪一千萬圓を要する見込みであり、その上陸上にも六十二萬坪の土地が用意せられ合計百七十萬坪の工業地を建設せらるゝ事になり昭和十四年一月發表せられて居る。此大築港工事完成の曉は、大連に向つて押し寄せ來る輸出入品、及乘降客の緩和を計る事を得べく滿洲の大玄關たるに止らず、北支方面及蒙疆方面への關門として十分なる機能を發揮する事になるであらう。

滿洲國貿易上より大連港の貿易を見るに、滿洲國康德五年(昭和十三年)中の貿易總額二十億二十萬圓餘の中、大連にて貿易せられたる額は十四億四千四百六十萬圓餘、卽ち全額の七割二分二厘を占めてゐ

る。前年康德四年度に於ては七割三分四厘に當つてゐた。かくの如く滿洲國貿易上大連港は絶對の優位にあり、滿洲建國後大連港の貿易額は年々增加をみせ、昭和七年の六億九千萬圓より十三年は十四億四千萬圓餘の巨額に上つてゐる。

滿洲國の貿易は大連港を第一として年々七割餘を占め次が安東一割餘で第二位、其他は僅である。

大連港昭和十四年中に於ける輸入額は十二億五千九百萬圓餘、輸出は六億〇百二十九萬圓餘であり、六億五千七百萬圓餘の輸入超過であつた。建國後の貿易額增大の原因をみるに、

一、滿鐵、關東局、滿洲國諸官廳、軍部關係への納品たる鐵道材料、機械、車輛類、電機器具及材料、兵器廠用品等は大連港經由が便利である事

二、主要輸入品たる麥粉、砂糖、煙草、麻袋等は市場、販路及取引機關等の關係より大連經由が有利である事

三、輸入雜貨品に對する最大需要者は、大連及滿鐵沿線都市に居住する日本人及都會生活の感化を受けた滿洲人である事

四、現在の日本品對滿輸出は其七八割迄が大阪、神戸よりの積出品である事

五、自由港制度有る爲め、再輸出及輸入品手持に便利である事

六、埠頭は東洋一と稱せらるゝ程、施設壯大で荷繰に便利である事

以上は主として滿洲國と大連との立場から見たのであるが、貿易港としての大連は、滿洲國のみに依存してゐるものではない、日本、滿洲、支那の丁度中間に位し、仲繼貿易港として特殊な機能を持つてゐる。而も自由貿易港制度によつて他に見られない完全なる仲繼が出來るのである。從つて再輸出貿易

工業市大連

は大連港貿易の重要なる一部門を爲すもので、昭和十三年には二億五千萬圓餘の巨額に上つて居る。今後相當の額に上るべく、北支方面の情勢によつて更に此種貿易の發展が期待される。

大連は現在の商業港としてのみならず、將來工業港としての發展も目指して居り、工場地を建設し埠頭との關係を便ならしめ、工業的過程としての運搬費用の合理的節約を目的として、生産合理化を計らんとして居るものである。

大連は奉天と共に滿洲に於ける大生産都市である。大連は海陸交通の便を有し、原料の蒐集並に製品の販銷に就ても他の比較出來ぬ優位を占めて居るので、市場生産を目的とする大工場は大連に設置される。各種の工業會社工場設置せられてゐる中、金屬工業、食料品工業、機械器具工業、化學工業、窯業、印刷及製本業、製材及木製品工業、紡織工業等が多くの會社工場を有し、(會社名は別項にあり)其他瓦斯及電氣工業、雜工業等種類も多い。工場投資額の大なるものは化學工業で、瓦斯電氣工業、機械器具工業が次位である。生産額の最も多いのも化學工業で、總生産額の約半に達せんとし、そのうち油坊製品は化學工業品の七割半以上を占め、大連工業界の王座を占めてゐる。滿洲化學工業株式會社による硫安工業、滿洲石油會社の石油精製等は、投資も大きく又生産額も多い。次は機械器具工業で、滿洲建國以來國鐵の新線建設による延長により、車輛、線路用品等の需要夥しく鐵道工場、大連機械製作所、大連船渠鐵工會社等に於て之が製作に從事してゐる。又紡織工業も綿絲紡織及製麻業が盛で、最近では上海よりの輸入品を絶對をさへて滿洲人向織布が大連で生産搬出さるゝ事になり、生産高は著增してゐる。窯業、食料品工業等一般需要增加に刺戟せられ夫々活況を呈するに至つて居る。更に貿易の項に述べたる如く、港としての擴張と共に工業用地として大連灣香爐礁東端から甘井子滿化側埋立地の東端を結ぶ約

百〇五萬坪の海面を埋め立て、陸地六十二萬坪とを合して百七十萬坪を工業地帯とし、水深約五米の運河を縱橫に構設し、一萬噸級の船舶橫付の設備を施し、大規模の工業地區造成を行ふ事に決定した模樣であるから、工業都市大連の將來期して待つべきものがあらう。

大連市諸機關

關東州廳　大連市役所　大連稅務署　遞信局
關東專賣局

政治其他機關

海務局　權度所　大連水道事務所　水產試驗場
鹽業試驗場　大連商工會議所　大連工業會
日滿支實業協會關東州支部　滿洲技術協會　滿洲土木建築協會
大亞工業研究會　滿洲發明協會大連支部　滿洲電氣協會關東州支部　滿洲工藝協會
關東州能率協會　愛國商店聯盟

取引所

株式會社大連株式商品取引所

清算

大連取引所信託株式會社　大連證券信託株式會社　大連五品代行株式會社　大連商品取引信託

無盡

蓬萊無盡株式會社　第一無盡株式會社　日華證券信託株式會社　遼東信託株式會社
滿洲不動貯金株式會社

商事

株式會社大信洋行　株式會社進和商會　森永製品滿洲販賣　株式會社福昌公司
株式會社山田商店　滿洲輸入株式會社　株式會社東裕公司　福井商工株式會社
日滿商事株式會社　株式會社西川商店　株式會社三共藥品販賣所　株式會社三星洋行

商事

株式會社永順洋行　株式會社浪華洋行　滿洲金物株式會社　株式會社宅の店

株式會社滿洲モータース
株式會社福盛號
滿洲水產販賣株式會社
株式會社遼東モータース商會
株式會社ヤマト商會
三共販賣株式會社
株式會社濱崎商店
株式會社田村商會本店
株式會社新潟商會
株式會社東洋時計商會
亞細亞貿易株式會社
資生堂大連販賣株式會社
高知特產株式會社
日本洋紙株式會社
株式會社天裕貿易公司
株式會社泰和公司
株式會社杉元商店
株式會社樫村洋行
株式會社正和洋行
テキサスオイル販賣株式會社
株式會社榮大公司
株式會社德泰公司
株式會社三友商會
株式會社隆大洋行
株式會社太平洋行
原田冷凍機株式會社
大連丸油株式會社
株式會社日滿盛進商行
株式會社水上洋行
永泰商事株式會社
株式會社鳥羽洋行
原田商事株式會社
株式會社大連太陽公司
協和電氣株式會社
大連クラブ特定品販賣株式會社
滿洲糧穀會社支店

紡織及染色工業

滿洲製麻株式會社
滿洲福紡株式會社
株式會社大同棉廠
滿洲野蠶製絲株式會社

化學工業

日清製油株式會社大連工場
株式會社三泰油房
大連油脂工業株式會社
日本製蠟株式會社
滿洲大豆工業株式會社
南滿洲物產株式會社
大和染料株式會社
滿洲ペイント株式會社
滿蒙興業株式會社
關東州興業株式會社及工場(周水屯)
大連製藥株式會社
滿洲製藥株式會社
滿蒙殖產株式會社
滿洲化學工業株式會社
大連畜產興業株式會社
松浦製紙株式會社

機械器具工業

株式會社大連機械製作所
株式會社鳥羽鐵工所
義昌無線電氣株式會社
株式會社大連鐵工所
滿洲農具製造株式會社
大連船渠鐵工株式會社

製材及木製品工業	大連工業株式會社	秋田商會木材株式會社	大連製材株式會社	株式會社大連新宮木行
	満洲木材工業株式會社	株式會社成三洋行	株式會社大連中熊商店	
食料品工業	大連製氷株式會社	大連醬油株式會社	大連精糧株式會社	昭和工業株式會社
	満洲精穀株式會社			
印刷及製本	東亞印刷株式會社	株式會社日清印刷所	大連圖書印刷株式會社	東亞製袋株式會社
其他之工業	大連燐寸株式會社	満洲塗裝株式會社	東洋クロードネオン電氣株式會社	
	東洋煙草株式會社			
窯業	大陸窯業株式會社	大連窯業株式會社	東亞煉瓦株式會社	昌光硝子株式會社工場
	南満洲硝子株式會社	満洲製陶株式會社	關東州小野田セメント製造株式會社	
	南満ドロマイト工業株式會社(南關嶺屯)		株式會社大同マイト工業所	
電氣、瓦斯	南満洲瓦斯株式會社			
交通、運輸	南満洲鐵道株式會社	株式會社金福鐵路公司	大連都市交通株式會社	大連自動車株式會社
	ツバメ自動車株式會社	満洲内燃機株式會社	株式會社大連綿業公司	
海運	大連汽船株式會社	大正海運株式會社	満洲海運株式會社	大正汽船株式會社
	大華汽船株式會社	日出汽船株式會社	北支那汽船株式會社	龍王汽船株式會社
	松浦汽船株式會社	株式會社日東洋行	中川汽船株式會社	春和汽船株式會社
	大連海運株式會社	東和汽船株式會社	龍海汽船株式會社	康和海運株式會社
	關東船舶株式會社			

運輸	國際運輸株式會社　大連運輸株式會社　大連通關株式會社　關東運輸株式會社
倉庫、土地、建物	南滿洲倉庫建物株式會社　周水土地建物株式會社　星ケ浦土地建物株式會社 大連郊外土地建物株式會社　株式會社鴻業公司 株式會社扇芳ビルデイング　滿洲起業株式會社　株式會社白川保善社 大連土地建物株式會社　大連貨物自動車車庫株式會社　今津不動産株式會社
拓殖興業	滿洲棉花株式會社　大連農事株式會社　大連牛乳株式會社　日滿漁業株式會社 滿拓公社大連出張所
請負、勞力供給	株式會社高岡組　日滿興業株式會社　株式會社多田工務所　福昌華工株式會社 株式會社日佛對滿事業公司
新聞業	株式會社マンチュリヤ・デリーニュース　株式會社泰東日報社
旅館、娛樂	株式會社遼東ホテル　株式會社中央ビルホテル　株式會社帝國館　中央興業株式會社 株式會社ニュータイガー舞踏場
投資會社	北支電力興業株式會社
雜業	株式會社大連車夫合宿所　株式會社大連馬車收容所　株式會社大連連鎖街　東方觀光株式會社
合資會社	富來洋行　富士合資會社　三吉商會　日滿共益會社 遼東産業會社　大連洋行　德華公司　近江洋行 大連モーターセールス商會　辰馬商會　東洋染料製造會社 豐田洋行　大華電氣冶金公司　戶田商會　新隆鐵工所

富林公司　宮下木廠　丸辰醬油會社　撫順工業會社
滿洲ドロマイト礦業所　金龍鑛業公司　東方鑛務公司　山下汽船會社
黑煙汽船會社　大連石原合資會社　日滿自動車企業會社　大連倉庫
遼東倉庫建物會社　浪華洋行　丸保商會　泰信公司
中央ビル會社　南滿牧場　滿洲電氣土木會社　川見組
竹中組　大同組　常盤組　星野組
福廣公司　太平公司　共進組　鈴木組
三田組　蔦井組　久保田組　池內市川工務所
泰盛工業所　草場組　大連電業公司　大東公司
大鳳工程公司　第一工業公司　大同俱樂部　大連製藥公司

合名會社

丸尾合名會社　大日本火山灰會社　宏治商會　德和公司
相生合名會社　中川商會　丸山洋行　正美堂
大谷商店　小泉商店　大連鑄造所　滿洲活版製造會社
池田商店　德海屋　東亞製席工業公司　丸盛公司
丸伸運送店　沙河口建物會社　高橋商店　入江洋行
原組　八代合名會社　辻組

新設會社

東亞生果株式會社　帝國蓄音器販賣株式會社　協同商事株式會社　協和商事株式會社
日華航運株式會社　榮城土地建物株式會社

在大連支店

銀行

株式會社金城銀行支店
株式會社交通銀行支店
中國銀行支店
東萊銀行支店
香港上海銀行支店
紐育ナショナルシチー銀行支店
ルース・アジアトスキー・バンク支店
ゼチャータードバング・オブ・インデイア・オーストラリヤ・アンド・チャイナー支店
株式會社インスト・アシアテイツクカムパニー支店
インペリヤル・ケミカルインダストリーズ・チャイナリミテツド支店
キーストン・タバココンパニーリミテツド支店
シンガー・ソーイングメシーンカムパニー支店
スタンダードバキューム・オイルコムパニー支店
ゼテキサス・コムパニー(チャイナー)リミツテヅド支店
チャイナー・インポート・エンド・エキスポートランバーコンパニーリミテツド支店
トウエンテイスセンチユリー・フオツクス・フアーイースト・インコーポレーテツド支店
阿波國共同汽船株式會社支店
大阪商船株式會社支店
嶋谷汽船株式會社支店
山下汽船株式會社支店
日本生命保險株式會社支店
東洋拓殖株式會社支店
株式會社明治屋支店
ライジングサン石油株式會社支店
株式會社柳韓洋行支店
沖電氣株式會社支店
小野田セメント製造株式會社支店
株式會社大正製藥所支店
古河電氣工業株式會社支店
豐年製油株式會社支店
株式會社松田清商店支店
理研光學工業株式會社支店
東洋棉花株式會社支店
日本タイプライター株式會社支店
日本賣藥株式會社支店

沿革

在大連外國機關

日本ボリドール販賣株式會社支店
株式會社支店
日本棉花株式會社支店
日商株式會社支店

伴野貿易株式會社支店
株式會社三越支店
三菱商事株式會社支店
株式會社明治商店支店

大倉商事株式會社支店
株式會社ガデリウス商會支店
株式會社北澤商店支店

株式會社小西商店支店
弘南商事株式會社支店
三機工業株式會社支店
大同商事株式會社支店

大同貿易株式會社支店
株式會社高田商會支店
株式會社竹馬商店支店
横濱正金銀行支店

朝鮮銀行支店
株式會社臺灣銀行
淺野物産株式會社支店

株式會社アンドリウス商會支店
株式會社乾卯商店支店

株式會社エートーセン支店
株式會社エクマン商會支店

德國領事館
蘇聯邦領事館
蘇聯邦通商代表部支部
英國領事館

美國(アメリカ)領事館
法國(フランス)領事館
荷國(オランダ)領事館

愛沙尼亞國(エストニヤ)領事館
諾威國領事館
瑞典國領事館

芬國(フヰンランド)領事館

旅順市

旅順はもと獅子口と稱へられ、唐代日本の使節なども往復の途次に立寄つてゐた處であるが、明朝時代に至つて南方移民の渡來する者多く、船舶の寄港頻繁を極め、水陸行路の順路に當つたので、旅順の名を稱ふるに至つたと言ふ、水師營は清の太宗が山東を攻略する際、船艦を泊艤せしめた處、康熙帝の朝には更に營を設けて海陸の防備を嚴にした。旅順を軍港としたのは光緒五年である。日清日露の兩役

が起り二回とも戰亂の巷と化し、三十八年一月一日遂に旅順は陷落し、始め我日本は軍政署を設けたが三十九年關東都督府を設け後、關東州内のみの行政を掌り、關東廳制となり昭和十二年六月大連の新廳舍に移轉する事になつた。

市街概況

市街は中央を龍河によつて二分せられ、東を舊市街、西を新市街と呼ぶ。舊市街は大體に於て旅順の商業區で賑つてはゐるが大體旅順は大連に隣接してゐる關係上、商工業の顯著なる發達は望み得ない新市街は工科大學を始め、博物館、官衙、學校、住宅地である。

戰蹟の旅順

日露戰役に於ける旅順の壯烈なる戰況、日本同胞の碧血と死屍に蔽はれた旅順の山河、東亞平和の礎となられた幾多勇士の英靈眠る處、三十幾星霜を經たる今日、尚新なる感謝を以つて戰蹟を訪ふ遊子ひきもきらず。左に主なる戰蹟をあげてみれば、

白玉山納骨祠と表忠塔

白玉山は、旅順の新舊兩市街の間に挾まり、もとは半永久的の防禦工事を施した鞏固なる砲臺を有する孤立峰であつた。高さ百二十六米四圍に山を繞らしてゐる旅順の要害に對して、これは恰も圓心の位置にある關係上、其眺望は市街はもとより海陸兩方面の陣地を詳にし得る絕好の展望臺となつてゐる。頂上は瓢形をなし、北の膨らみには南面して日露役に日本の陸海の犧牲となられた忠勇二萬二百餘の遺骨を納めた納骨祠が建ち、南方の膨らみには、圓錐形六十六米に及ぶ表忠塔がある。此表忠塔は、乃木東郷兩將軍の發起により建設されたもので、規模の宏大と設計の偉觀に於て、日本建築界屈指の營造物であると言はれて居る。塔上の展望臺に臨めば、港の内外市街を眼下に俯瞰し、北面すれば幾多の戰蹟を指示眺望される。

戰利記念品陳列館

當館には二千五百餘點の陳列品、戰則戰後の砲臺模型、阪禦物の構造解說其他を陳列してある。

東鷄冠山北堡壘及望台

當堡壘は、數ある旅順背面の防禦堡壘中、歴史的に著明であり、且つ典型的のものである。堡壘は南堡壘東鷄冠山堡壘、第二堡壘、及北堡壘の四箇所に岐れ、就中著明なるは、北堡壘である。北堡壘の背後に高く天空を突いて聳える標高百八十四米の峻險な山が砲臺である。日本軍は第一回總攻擊以後幾度かの苦戰を續け、第三回總攻擊に於ては第一突擊隊が不幸にも爆破の餘波のため生き埋めになつた程肉迫又肉迫の攻擊をつづけ、遂に最後の勝利を占むるを得た淚ぐましい勇敢無比の慘劇の數々、櫻井忠溫中尉の有名なる肉彈の記事は背後の望臺攻擊の壯烈なる戰況實記で、幾度も幾度も淚なくしては讀めない文であり、此堡壘の一劃に立つて此文を通して當時を追想する時、誰か地下に眠る英靈に對して感淚と感謝を捧げ得ぬものがあらうか。

其他二龍山堡壘、松樹山堡壘等、旅順舊市街東方背面の重要戰蹟である。松樹山補備堡壘は白襷隊の決死攻擊で有名である。

爾靈山（二〇三高地）

新市街をぬけて北方に進めば遠く山頂の記念碑を望みつゝ山麓に達する。二〇三高地は、旅順攻擊中最大の犧牲を拂つて肉彈以つて占領した處である。第七師團が、三十七年十一月二十七日から九日間に亘る連日連夜の强襲に漸く占領し得たので、日本軍の本高地攻擊に失つた士卒の數は七千五百、實に旅順攻擊戰役中最も苦闘した戰地である。乃木中尉も亦此戰闘に名譽の戰死を遂げられたのである。

水師營

旅順開城に際して乃木大將とステツセル中將との會見の地として有名な處である。

露國忠魂碑

市外小案子山東麓にあつて、日本政府が明治四十一年六月竣功したもの、露國一萬四千六百三十一の靈英が眠つてゐるのである。除幕式には乃木大將勅命を奉じ露國皇帝も同樣はる〳〵、名代を派遣せられたのである。白玉山に日本の勇士を弔ふと同樣、露國盡國の士を慰める最もよき處である。

旅順諸機關

旅順市役所	高等法院	博物館	圖書館
旅順工科大學	中學校	高等女學校	公學校(二)
小學校(三)	青年學校	高等公學校	旅順醫院
旅順無盡株式會社	滿洲輸入株式會社	滿洲蠶絲株式會社	
秋田商會木材株式會社支店		旅順製氷株式會社	滿洲開發株式會社
同和鹽業株式會社	旅順振興協會	旅順運送會社	朝鮮銀行支店

都邑金州

金州は大連より鐵路三二、五粁一時間にして到着する。附近に名所、戰蹟多く旅順と共に一日の行樂地である。驛の西南方程近くに、日露の戰で有名な南山があり、記念碑及露人の墓地等がある。乃木中尉戰死の遺跡も近くにある。城内は驛より稍離れた處にあり、天齊廟(地獄寺)永慶寺(極樂寺)等有名である。金州より一里餘の處には大和尚山朝陽寺、響水觀、三崎山(日清役に勇名を轟せし三烈士の碑)等がある。金州附近は農產物として苹果が有名であり、紡績亦盛に行はれ、石綿、耐火煉瓦等を產する。金州より金福鐵道を出し城子疃に至つて居る。

内外綿花株式會社支店、大連都市交通株式會社出張所、電信電話局、無線電信局などがある。

普蘭店

普蘭店は關東州々境の都市で貿易港でもある。苹果、落花生等の農產があり、附近には製鹽業が盛である。又、耐火煉瓦及磁器の製造が盛である。

貔子窩

貔子窩は清の雍正初年に開いた港で、往時は沿岸唯一の戎克貿易港で、莊河、復縣地方と山東及び安東、朝鮮との取引が盛に行はれた處である。現在も地方的港市として重要性を保つてゐる。街內には清眞寺(回教)財神廟等がある。貔子窩から夾心寺を經て城子疃に至る間、鹽田が續いてゐて、二千四百四

十町歩にも渉る廣さを持つてゐる。

城子疃

城子疃は關東州東境をなす碧流河の右岸に立つてゐる。地方物資の集散市場として近年發展した市街である。驛南一里餘の三島子貝塚は漢代の遺蹟で、古銅錢、彩色土器等が發掘されてゐる。

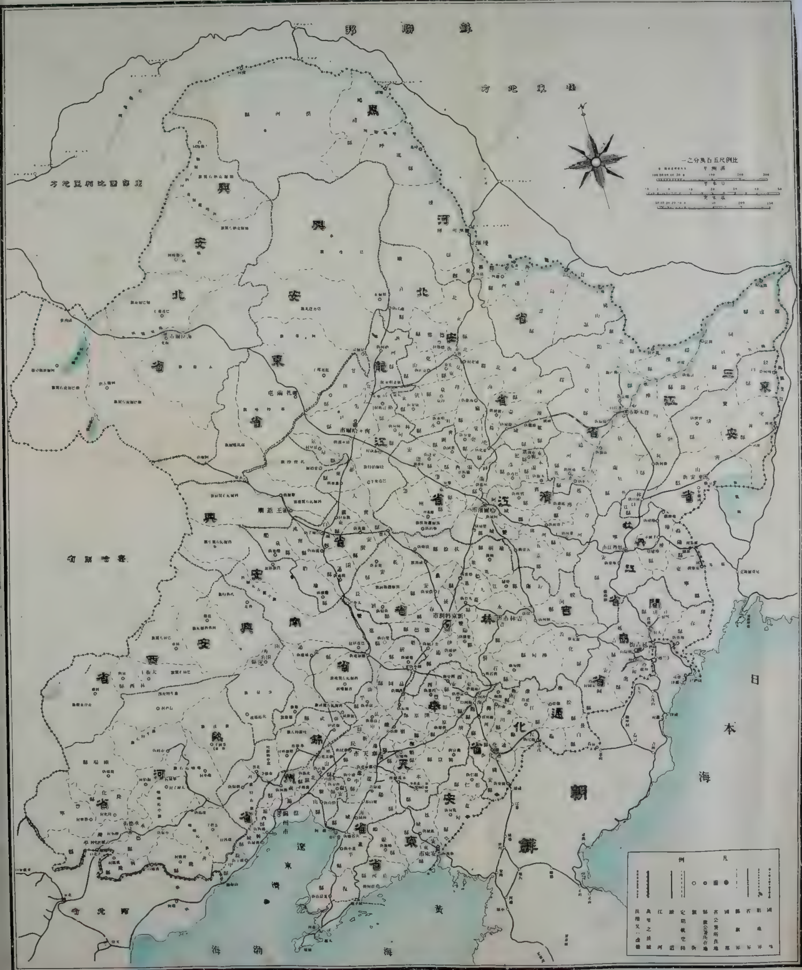
資料

題名	書名	發行所	發行年月日
關東州事情（上、下）	同表題	關東廳臨時土地調査部	大正二、一
大連市史	同表題	大連市役所	昭、一一、九
大連市事情	同表題	滿洲帝國地方事情大系刊行會	康、四、三
大連	同表題	大連市役所	昭、一〇、七
大連地名考（田口稔）	滿蒙（一六の五）	滿洲文化協會	昭、一〇、五
大連市及其町名の由來（佐々木靜吾）	滿蒙（一六の七）	同前	昭、一〇、七
大連市に於ける營業分布に關する調査	同表題	大連商工會議所	昭、一〇、七
經濟都市大連	同表題	大連商工會議所	昭、一二、九
産業の大連	同表題	大連市役所	昭、一二、四
大連	同表題	大連觀光協會	昭、一一、四
關東州發展秘史	同表題	關東局文書課	昭、一二、九
關東州の畜産統計	第八次畜産提要	農林省畜産局	昭、一二、三
その頃の關東州（中村麗喜）	滿蒙（一八の一〇）	滿洲文化協會	昭、一二、一〇
露國の關東州占領略史（ペ・ロソツフ）	滿蒙（一八の九）	同前	昭、一二、九
關東州計畫令の概觀	東亞商工經濟（二の四）	大連商工會議所	昭、一三、四
大連上水道水源論	滿洲の技術（一五の三）	滿洲技術協會	昭、一三、七
旅順戰跡圖（佐久間亮）	同表題	月刊滿洲社	昭、一二、三
旅順	同表題	滿鐵・鐵道總局	昭、一三、六
旅順戰跡觀覽案内	旅順情報（三一二）	奉天ビューロー	昭、一三、三

旅順市鮮魚配給事情（一）……關東州水產會報（二の五）　關東州水產會　昭、一二、九
金州を語る（田耕之助）……海（三九）　大阪商船會社　昭、九、四
金　州（山城香甫）……觀光東亞（四月號）　奉天ビューロー　昭、一三、四

（終り）

滿洲帝國地圖



滿洲事情案內所沿革

○昭和八年一月十八日……關東軍ノ特殊指令竝ニ左記各機關ノ後援ニヨリ新京記念館內ニテ滿洲經濟事情案內所ノ名稱ノ下ニ滿洲經濟事情ノ調査紹介事務開始

1. 滿洲國政府　2. 駐滿日本大使館
3. 南滿洲鐵道株式會社

○昭和九年一月二日……多數利用者ノ要求ニ應ズル爲メ更ニ左記機關ノ後援ヲ加ヘテ事業範圍ヲ擴張、同時ニ名稱ヲ滿洲事情案內所ト改稱

1. 關東廳　2. 駐滿海軍部司令部

○昭和九年三月二十四日……滿洲視察斡旋委員會成立ニヨリ視察團體斡旋事務開始

○昭和九年八月二十五日……業務ノ擴張、利用者ノ增加ニ應ズル爲メ「新京中央通六番地」ノ現位置ニ移轉

○昭和十一年八月一日……勅令ニヨリ設立サレタル株式會社滿洲弘報協會ニ合同シ其ノ直營事業トナル

○昭和十三年一月一日……滿洲弘報協會ヨリ分離獨立シ滿洲帝國政府特設機關トナル

○昭和十四年十二月二十八日……滿洲國政府全額出資ノ準特殊會社トナル

康德七年十一月八日印刷
康德七年十一月十日發行

滿洲國地方誌
頒價金五圓
送料一四錢

編輯人　新京中央通り六番地　谷光世
發行人　新京中央通り六番地　河村清
印刷人　新京中央通り四四番地　和木本久
印刷所　新京中央通り四四番地　滿洲新聞社印刷所

發行所　新京中央通り六番地　株式會社 滿洲事情案內所

發賣元　新京特別市西七馬路十四號　滿洲書籍配給株式會社
東京市本鄉區本鄉五丁目十二番地　滿洲書籍配給株式會社 東京營業所